

---

# 流星のロックマン スペースメモリーズ

Neil^Dylandy

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン スペースメモリーズ

### 【Nコード】

N1844Q

### 【作者名】

Neil^Dylandy

### 【あらすじ】

メテオGの事件を無事解決し、平穏の日々が続いていた。

だが地球は4回目の滅亡危機と待遇する。

少年の目に映る世界は何があるのか。少女の目に映る世界は何が見えるのか。

それぞれの出来事と思いが交差する時、星河スバルと世界崩壊へのカウントダウンの物語が始まる！！※色々と修正中。修正の影響により話かみ合わない部分もあります。

## Star 00 未来へと託す遺産

今から200年前。現代の科学と技術は大きく劣るがその2世紀以上の前の世界には200年前なりの発展した技術があった。それはインターネットと呼ばれる通信空間と最大の特徴、ネットナビというのだ。ネットナビというのは人型の風貌をして人格プログラムをインストールされた自律起動行動型プログラムである。もちろん喜怒哀楽の部分もある。そしてその世界には光熱斗という世界を6度も救った少年がいた。

この技術と科学が発展した事により多大な進歩を遂げたネット社会だったがこの光あるところ、必ず闇はある。このネットナビという技術の開発の結晶がある人の過ちにより悪しき方向へと進んで行ってしまった。WWWと呼ばれるネットワークを破壊目的とした自立組織。ゴスペル、これはバグと呼ばれる一種の変異したデータでそれが集合体となった存在、ゴスペル。ある少年はゴスペルを使い世界を破壊しようとした。そして宇宙からの謎の来訪者、デューオ。そして新たな組織、ネビュラという沢山の組織がたった一つの過ちにより、自分の人生と世界を狂わせてしまった。

だがこの世界破壊から守ったのがロックマンと呼ばれる青いネットナビとその相棒、光熱斗と呼ばれる200年後の世界でも語り継がれる世界の英雄。

その少年とネットナビはずっと前を見て、後ろを振り向かず、生きる希望という意志を抱いて戦ってきた。その少年達は最後の戦い、かつてインターネットの悪魔の暴君、電脳獣グレイガと電脳獣ファルザーとの戦いだった。彼らはその時、守りたいという意志で戦った。獣化という自分の体を変貌させる能力を使ってどうにか倒した。ビーストファクト

そしてそれからの平穏の日々。少年達も大人になる。

光熱斗が成人となり、憧れだった父、光裕一郎と同じ科学者になることが出来た。そしてロックマン・jrというロックマンの子孫的ネットナビを作り、大人となった光熱斗の息子、光来斗に託した。それだけでは父と子は不安要素がいっぱいだった。今後の世界に何が起こるかが分からない。だから彼らは未来にへと託す二つのプログラムを託した。

それはWWのドリームウイルス時に使用した光裕一郎がロックマンを限りなく強化し、熱斗の今はこの世を去りし兄弟、光彩斗のデータをロックマンにつき込んだ究極のプログラム。それがサイト・bat。

そしてもう一つ。ゴスペル事件時にロックマンの戦闘能力を強化しようとしたアジーナエリアに封印されしアジーナの遺産、それがチェンジ・bat。チェンジ・batはロックマンのスタイルをチェンジし攻撃型、防御型に特化できる能力を手に入れた。

その二つのデータを親子は未来にへと託すために封印した。そして200年たった世界にはシューティング・スター・ロックマンという新たな英雄が世界に降臨した。その未来へと託したプログラムの思いと、新たな流星の物語が、今、動き出す。

## Star 01 桜咲き桜散る今日

かつて200年前、このニホンには6度もの世界を救った英雄がいた。それは光熱斗と呼ばれる少年と、ロックマンEXEという200年前に存在したネットナビと呼ばれる人格プログラム。この二人が無数の事件を解決した世界の英雄としてあがめられており、今、この世界でも光熱斗とロックマンEXEは伝説として見られている。

そして200年が経過した世界。技術と科学が発展した世界でも新たな英雄が誕生した。それがシューティング・スター・ロックマンと呼ばれる英雄。そしてまた新たなロックマンの世界が幕を上げる。

この地球には3度の危機を救ったヒーローがいる。一度目はFM星人の侵略危機。世界に青い英雄が疾風の如く誕生した。二度目。ムー大陸の支配危機。英雄が世界をまたも救い、人々の心に大きく刻まれる。そして三度目、メテオGの衝突危機。今や世界の有名となった英雄は身を捨てて背水の陣のつもりで戦った。そして引き裂かれた現実が少年の前で引き起こった。そしてメテオGを打破し、もはや世界では知らない人はいないという存在までになった。これまでに英雄は幾多の奇跡という素晴らしいことをしてくれた。だがそれでも世界は平和にはならなかった。再び地球に変化が訪れる。英雄は世界にはいけないのか。その審判が下される物語が始まるうとしている。そう、四度目は英雄の存在が世界によって覆される――。――。

時代は220X年

その少年の名は星河スバル。

まさかまた、地球の命運がかかっていると誰も知らなかった。静かにその地球をかけた運命の歯車が静かに回り始める。

くコダマタウンく

「スバルく起きなさい！もう起きなさいってば！」

一児の母がベットで寝ている少年を揺さる。一児の母、星川あかねは地球を三度も救った英雄を起こす。

「……母さん、おはよう」

この少年こそ、地球を三度も救った英雄、ツンツン頭が特徴的な少年、星河スバル。この少年は昨年まで人のかかわりというのを拒絶し、心を閉ざしていたがある来訪者との出会いで彼の人生が変わった。

「おはよう、スバルいつまで寝てるの、時間は大丈夫なの！？」

スバルは半分寝ぼけてる頭で時計を見たら、一瞬で目が覚めてしまった。直後、自分のベットから跳ね上がるように飛び出る。

時計は8時をさしていた。スバルが通っている学校、コダマ小学

校は8時半までに登校しなくてはならないのだ。

「うわー！遅刻だー！！」

スバルは叫び声と共にパジャマ姿で走ってリビングに向かう。それを見ていたあかねは苦笑い。

『進級早々これかよ……』

ウォーロックが言った。FM星育ちのAM星人。ウォーロック。この男こそ、星河スバルを変革させた男だ。出会った当初、スバルに何回も叱咤したことがある。特殊能力は人と電波変換させることができる。

スバルは急いでリビングに向かった。

「そういえば、スバルがいつまでたっても起きないから、ルナちゃん達、先に行ったよ」

スバルはそれを聞いて震えていた。

「早く食べちゃいなさい」

「はい、いただきます」

朝食を終え、歯磨き、洗顔、着替えをした後、バックの中に最低必需品をつつこんで急いで学校へ向かった

「ねえ、ウォーロック」

『なんだスバル？』

「電…」『断る』

ウォーロックはスバルの声を掻き消した。

『自分の足で学校に行きな』

「ロック、酷いよ……」

学校へと息を切らして走っていったスバルはギリギリ間に合った。



## Trail 01 桜並木の学校

桜咲く春のうらかな風が舞うこの季節。街道の木々が綺麗に色付き、地面の草は綺麗に緑色に鮮やかに色づいて、新たな生活の幕があがる。ここに新たな新入生を迎え入れ、そして上級生が卒業し、新たな一步を踏む出す。この学校、コダマ小学校はまた新たな歴史が刻まれる。そしてこの学校に在学する少年、星河スバルは最上級生に進級し、学校にしょっぱなから遅刻ギリギリで登校していたのだ。その少年が廊下でドタドタと音を上げながら新たな教室の場所へと走って向かう。

「はあ、はあ、間に合った」

一人の少年、星河スバルが息を切らしてコダマ小学校の自分の教室へと向かっていった。

「おはよう、スバル君」

「おはよう、ツカサ君」

スバルが息を切らしてくるのを見ていたのかツカサがちょうどよく朝の挨拶をしてきた。

「スーパール君？」

殺気全開、奇妙なオーラを放っているクラスの委員長、白金ルナが話しかけてきた。この少女は後ろに伸ばした金髪のツインテールが最大の特徴だ。そして外見に似合わず、その体で何故、そんなに大きい声がだせるのか気になってくる。

「今日の放課後、屋上に絶対来なさいよ!!」

スバルはルナの殺気に気圧されて綺麗に立って返事をした。

「は、はい！」

「皆、席につけ」

直後、スバル達の担任、育田先生が教室の戸をあけて入ってきた。

「これからHRを始める前に転入生を紹介する」

「誰かな？」

クラスの皆が声をあげる。「誰だろうね？」とかなどの声が交錯する。

『この周波数は！』

「どうしたのロック？」

『ハープだ、あいつがかなり近くにいる』

「じゃあまさか…」

そのまさかだった。ウォーロックにとっての最も起きてほしくない現実が起きてしまう。

「入ってきてくれ」

育田先生の声と共に一人の小さい少女が小さい足音と共にクラスに入ってきた。この少女は日本を代表してもよい国民的アイドルだ。背中には愛用のギター、そして相棒のFM星人、ハープもいた。

「このクラスに転入することになった、響ミソラです」

驚きと歓喜の声が上がった。だが転校生はもう一人。

「ジャックだ、よろしく」

小さい身長と、特徴的なのはその服装だ。この地域では珍しかった。この少年はかつてスバルと戦った相手。現在はクインティアと共に改心していた。

「では二人の席は…」

育田先生がそう喋り、言葉が止まる。おそらく、響ミソラの座る席を探しているのだろう。その直後。

「僕の席の隣にー!!!」

スバル、ツカサ以外の男子は声をあげた。

「私、スバル君の隣を希望します」

直後、スバルとツカサ以外の男子生徒に裏切られたような教室に言葉が走った。

「そうか、いいか星河？」

クラスの男子から断れという殺気が感じられた。

「あ……いいですよ」

（やったー!!）

ミソラは内心で喜んでいた。その言葉を聞いた男子生徒たちは目を光らせて睨みつける虎のように眼光鋭く見てくる。

「ジャックは、ツカサの隣でいいか？」

「俺はすわれたらどこでもいいぜ」

ミソラはスバルの隣に来た。そして正式に自分の席と決まった椅子に腰を下ろす。

「これからよろしくミソラちゃん」

「こちらこそよろしくスバル君」

大切な初めての「ブラザーバンド」というので結ばれた二人が挨拶をした。

「では、授業を始めるぞ」

「急に来るから驚いたよ」

「驚かせようと思ったんだもん♪」

そしてコダマ小学校に新たな仲間が加わり放課後の時間がこようと  
していた。

## Trail | 02 平和の象徴と災厄の前兆

「スバル君、どこに行くの？」

荷物を纏めて、せっせと教室をでようとするスバルが気になったミソラはスバルを引き止めた。

「ちょっと屋上に」

スバルはルナに怒られるというのは伏せておいた。もしかしたら最悪の場合のケースに陥るといふことも考えて。

「私もついてっていいかな？」

「うーん、いいけど」

そして屋上。

（何故、ミソラちゃんもいるのかしら？ まあいいか）

ルナが小さな思いを抱く。だがスバルを見た瞬間、その思いは一瞬で塵と化し消えて行った。

「スバル君！何故、私が怒っているか分かるよね？」

「僕が寝坊してしまったからです」

スバルが潔く言った。

「そうよ、よく分かってるじゃない」

ルナは腰に手を当てて大きくしながら言った。

「もう二度と寝坊しないこと!!」

「スバル君を待つ身にもなってよ」

「……すいませんでした」

スバルはどうしてもルナには勝てない。だがあっさりと許してくれた優しさに感謝していたスバル。

「さあ帰りましょう」

「帰り道」

「災難だったねスバル君」

左右からツカサとミソラが話しかけてきた。話しかけてきた二人にスバルは応答した。

「ウォーロック、これからも頼むよ、1.5倍の強さで」

『それなんだよ？自分で起きればいいじゃねえかよ』

「それができたら苦労しないよ……」

『ま、要するにウォーロックは目覚ましウィザードね』

ウォーロックとスバルのどうでもいい話を聞いていたのかハープがウォーロックを茶化す。

『誰が目覚ましウィザードだ!!』

『似合ってるぜその名前』

ウォーロックがハープの言った「目覚ましウィザード」という言葉に激怒し、今度はジェミニがロックを茶化す。

『ジェミニ！今すぐ勝負だ!!この場で完膚無きまでに叩き潰してやるよ!!』

ウォーロックが大声でかかってこいよという雰囲気醸し出す。

『断る』

ツカサのウィザード、ジェミニは即答した。



『俺、完全に振り回されてる…』

ウォーロックは悶絶し静かになった。

校門をでて、それぞれの自宅の帰り道へと分かれていった。

今、一緒に歩いているのは、スバル、ミソラ、ツカサである。

そして。

「バイバイ、スバル君、ミソラちゃん」

「また明日、ツカサ君」

「じゃあね、ツカサ君」

「ミソラちゃんの家ってどこなの」

「ええと、それはね」

受け入れにくい真実が伝えられてしまう。

## Trail 03 家族の抱擁

そしてスバルの家へ向かう途中、スバルが聞いた。

「ミソラちゃんの家はベイサイドシティでしょ？」

「違うよ、私ねコダマタウンに引っ越してきたんだ」

「へえどこなの？」

「それはねスバル君の家だよ」

ウォーロックもミソラの話聞いていたのか、思考回路が少しの間ストップした。

「『もう一回』」

ウォーロックとスバルの声が綺麗に重なった。

「だからスバル君の家だよ」

そして、スバル&amp;mp;ウォーロックは思考が完全に止まった。そして二人は直後、言葉が綺麗に重なる。

そして二人して、  
「『ええええええ！！』」と叫んだ。

「な、な、な、なんで？」

スバルはかなり動揺していた。自分でも変だと思ってくらいに。

「聞いてないの？」

「全くの初耳」

『嫌だああ！俺の人生真っ暗だあ！』

『あら、それは何故かしら？』

『げっ、ハープ！』

「謝れば許してあげる」

『すいませんでした……』

「フツ、スバル君はルナちゃんに、ロック君はハープに頭があが

らないみたいね、立場がそっくり」

（それって僕とウォーロックが同類ってこと？）

（まあいいか）

スバルは家の玄関を開けて、「ただいま」と言った。それに続いていくミソラの姿がやはりあった。

スバルはあかねに質問したいことがあった。

「母さん、なんでミソラちゃんが僕の家同居するって言うてくれなかったの？」

「だって、そっちの方が面白いじゃない」

スバルは黙った。あかねは顔に悪戯笑みを浮かべていた。

「ミソラちゃんもそこに立ってないで入ってきなさい」

「はい、おじゃましま…」

「違うでしょ、ミソラちゃんはもう、うちの家族の一員なんだから…」

「ただいま……」

「そうよ、ミソラちゃん」

「うっ、うっ……」

ミソラは突然泣き出し、目から涙がでて、頬を伝い床に落ち、綺麗に弾けた。

「ど、どうしたのミソラちゃん」

「スバル君の…お母…さんを見て…いた…ら、天国に…いるママ…を思い…だ…して」

あかねはミソラに近づき優しく抱きつき、ミソラに優しくこう言った。

「ミソラちゃんが過去に苦しい思いをしたことは分かるわ。

けどね、ミソラちゃんにはもう家族がいるの。大吾さんがいて私がいて、そしてスバルがいる」

（俺は…!!…?）

ウォーロックが心の中で叫んだ。自分が忘れられているということに。

「これからは私達の事を親とっていいのよ。あまえないことがあったら、あまえていいし、だからもう悲しむのはやめなさい。天国の母さんが悲しむよ」

「そうだよミソラちゃん。あまえたかったら僕達、三人にいつてよ。同じ家族なんだからさ」

（だから俺は！？）

「う…ん」

ミソラは目を赤くして頷いた。

## Trail 04 決意を抱く少女

こうして、ミソラは新しい家族の一員となった。新たな家族の一員となったミソラは新しい家族ができてうれしく目を赤くして泣いていた。それに母親の優しい抱擁。一瞬で心が安心したミソラ。これが家族の暖かさだと思うミソラであった。

スバルとミソラはリビングを通り、スバルの部屋の戸をくぐって部屋に入った。

「久々スバル君の部屋に来たな」

「確か……前来たのがアンドロメダを倒すまえだったよね？」

「そうだよ」

かつて最初、地球が宇宙人の侵略危機に遭遇したとき、ミソラはスバルの家においとましましたことがある。

「わあ宇宙の本が沢山！スバル君って本当に宇宙のことが好きなのね」

ミソラがスバルの部屋にある本棚にある宇宙の科学の本に目を通す。そして天真爛漫なミソラは子供のような反応をしていた。

「まあ……ね」

スバルは女の子にこんなことを言われた事が無かったので少し顔を赤くしていた。と同時に後ろ頭をかく。

『スバル、俺用事を思い出したから出かけるな』

ウォーロックが自らスバルのハンターVGからウィザードオンしてスバルの部屋から出て行った。

「分かった」

スバルはそう言ってウォーロックを見送った。

『ミソラ、あたしも用事があるから少しいなくなるね』

ハープも用事と言い、姿を消していった。だが二人はこの茎を読み取って用事といったのだ。ここからスバルとミソラ。この二人に更なるきっかけと遭遇する。

「分かったわ」

ミソラもスバルと同じようにハープの出ていく姿を見送った。

『しかし予想外ね、アンタがあんたの状況を理解するなんて』

星河家に屋根ではそれぞれのハンターVGから自らウィザードオンしてでてきた二人の姿があった。

『ハープ、馬鹿にしてるのか？』



『いや』

などと二人は軽い談笑していた。二人を見守りながら。

その頃・・・。

「ねえ、スバル君」

「何？ミソラちゃん」

ミソラは顔を赤くしながら小さい声でもじもじしながら言った。  
目をそらして次に自分でも恥ずかしい言葉を言う。

「好きな・・・人い・・・る？」

スバルは顔を急に赤くした。まさか突然、響ミソラがスバルの前  
でこんなことを言ってくるとは思っていなかったからだ。

「い、いるよ」

スバルは声を小さくしながら下を向いてそういった。

「だ、誰？ルナちゃん？」

ミソラがスバルに接近しながらそう言った。もはや彼らの距離は  
5?ぐらいであった。ミソラが気になりながら固唾と共に飲み、ス  
バルが次に発する言葉に緊張が走る。

「ち、ち、違うよ」

スバルの言葉をこの耳でしっかり聞いてミソラは決意したようだ。自分の思いを告げることが。もしかしたら嫌われるかもしれない。それでもかまわなかった。

「スバル：君、私はあなたのことが好きです。つ、付き合って…くれませんか？」

ミソラはそれと言った瞬間、顔を真っ赤にして横を向いてそらしてしまった。ミソラはスバルの言葉に期待しながら視線をそらし続ける。

「ぼ、僕もミソラちゃんの事が好き…です。こんな僕でよければ喜…んで…」

一瞬の沈黙が部屋に走る。直後、ミソラはスバルに抱き着いてきた。彼女の優しい香りがする。スバルはもういろんな意味で限界が来ていた。

「ありがとう、スバル君」

こうして、二人は伝えたい思いを伝えたのであった。

## Trail | 05 少女の眼に映ったものは

「スバルく、ミソラちゃんく、ご飯よ」

一階から二人の母親、あかねの声が聞こえてきた。それを聞いた二人は皆で食卓をするリビングへと向かう。

「はーい」

「行こ、ミソラちゃん」

返事と共にミソラとスバルは部屋からでていこうとする。スバルはミソラに声をかけて先陣をきる。

「うん」

短い会話と共に二人はリビングに向かった。テーブルには生姜焼きとサラダ、一般的な家庭の料理が並べられていた。

「ただいま」

星河家の稼ぎ頭、父親の星河大吾が自宅へと帰ってきた。

大吾の声を聴いた三人はリビングに向かう。

「お帰りなさい、大吾さん」

「お帰り、父さん」

「お帰りなさい、スバル君のお父さん」

三者三様の挨拶の声を送った。

「ミソラ、スバル君のお父さんじゃないでしょ。あなたはもう家族の一員なのだから」

「そうだぞ、ミソラ」

あかねと大吾がミソラに優しく言う。

「……お帰りなさい、お父さん」

「そうだ、これからは本当の親と想ってくれていいからな」

「……ありがとう、お父さん、お母さん」

家族の優しさ、暖かさ。少しずつだが自分の新たな時間を築いていけると思っていたミソラであった。

「さてご飯よ、食べましょ」

「「はーい」」

そういつて家族全員はリビングに向かった。リビングには料理のいい香りが漂っており、空腹な腹に食欲がそそられる。

「「「いただきまゝす」「」」」

家族全員の食事の挨拶の声が部屋にこだました。

「ミソラ、遠慮なく食べなさい」

「はゝい」

そういつて、ミソラは生姜焼きの肉を食べた。

「おいしいよ、スバ・・・じゃなくてお母さん！」

ミソラは若干間違えながらもちゃんとお母さんといえた。

「そう？よかった」

「あかねの料理は本当に美味しいな！」

大吾が絶賛していた。スバルも屈託のない笑顔でそう言う。

「大吾さんったら・・・」

あかねが顔を少し赤くしていた。と共に自分の作った料理を箸でつまみ自分の口へと運ぶ。

「あれ、母さんてれてるの〜?」

スバルがアカネを茶化しながら言った。

「スバルったら、からかわないでちょうだい!!」

息子に茶化されたあかねは顔を赤くしながらそういった。直後、みんなが笑う。

ミソラはこのほのぼのとした家族の環境を感じ取り一つの思いが浮上する。

(…やっぱり、家族がいると楽しいな。私を受け入れてくれてありがと、みんな…)

その後も楽しく談笑しながら、4人の食事の時間は過ぎていった。

「」「」「ごちそうさま」「」

家族の食事があつという間に終わった。各自、自分の使った茶碗や皿、箸の片付けをした。

「ねえ、ミソラちゃん?」

「何? スバル君」

「結構食べたけど、きつくないの?」

「うん。平気だよ」

ミソラはご飯を二杯食べて、生姜焼きもスバルより多く食べていた。その自分の倍を食った上にその小さい体のどこに消えているのかが気になったスバル。

（やっぱり、ミソラちゃんのお腹はブラックホールなのか？）

とスバルは小さな心境を抱きつつ、二人は階段を上ってスバルの部屋に向かった。

『なあスバル？』

「何？ウォーロック」

スバルはハンターV Gで待機しているウォーロックに話し返した。

『腹ごしらえにトレーニングに行かないか？』

ウォーロックがそう提案した。おそらく暇なのか、ムシヤクシヤしているのかもしれない。

「いいよ」

スバルがあっさりと受託し、電波変換の構えを取る。

「電波……」

スバルがそう叫んだ瞬間、一人の少女がさせないとスバルに向かって勢いよく飛びつく。

「そうはさせないわ！」

といってミソラはスバルの両手をふさいだ。

「ハープ、ロック君を頼むよ」

『分かったわ、ミソラ』

『うお！ハープ、なんだ！』？

『いいから来なさい！』

そういつて、ハープはウォーロックを連行した。恋に燃える女の  
思いは凄かった。さらにそれに速攻でアシストするミソラの相棒。

「なんで電波変換させてくれないの？ミソラちゃん」

「だって一人になったら寂しいもん」

ミソラはそういう。

「父さん、母さんがいるじゃないか」

「スバル君じゃなきゃだめなの」

その言葉を聞いてスバルは赤くなった。

「な、なんで？」



「そ、それはスバル君が好きだからスバル君の側にいたいのよ」

ミソラも顔を赤くしながら言った。好きという言葉がいうと恥ずかしく感じる。これが恋なんだなとミソラは恋にたいする心境を抱く。

一方、スバルの部屋付近である者が盗み聞きをしていた。

「あかね〜何してるんだ〜？」

大吾があかねの行動に気になり問う。

部屋の前で、あかねは二人の会話を聞いていた。

「フフツ、あの二人はそういう関係だったのね」

にやけながら階段を下りソファに座った。

「一体、何してたんだ？」

大吾は興味津々な顔でといてきた。

「二人の話を聞いていたのよ」

「何話していたんだ？」

「どうやらミソラちゃんがスバルの事が好き、側にいたいので…って聞こえてきたわ」

「へえ…そろそろお年頃なのかな？」

「そうかもね」

そう二人は子供の二人の關係に温かい目で見守りつつ二人は話していた。

スバルの部屋では。

「だから一人にさせないで…」

ミソラは涙目で言った。もちろんこれは演技である。スバルはいくら演技だと思ってもミソラには敵わなかった。天使のような笑顔でこちらを見つめられたら一糸どころか何もできずに受託してしまうだろう。

「わ、分かった」

8分後

「スバル、風呂が沸いたから入りなさい」

「分かったよ」

スバルは着替えの服をとり、風呂場に向かおうとした。そしたら、ミソラがスバルの服の裾を掴んできた。

「私も一緒に入りたいな…」

視線をそらしながらミソラは顔を赤くしてそういう。だがスバルは男として、プライドを捨てるわけにはいかなかった。

「そ、それはダメだよミソラちゃん」

ミソラからの予想外の言葉によりスバルは周章狼狽している。

「あまえたいときは存分にあまえなよって言ったのはスバル君じゃない」

こんなところで自分の言った言葉が裏目に出ると思っていなかったスバル。

「確かにそれはそうだけど…」

「でもダメだよ…」

「…分かった…じゃあ今晚一緒に…寝よ」

それでもただでは済ませないミソラ。あの手、この手でスバルに近づきたかった。

「わ、分かった」

（僕が言ったことだから仕方ないか…でもミソラちゃんとお風呂は本当に危ない！！これだけは絶対に避けなくては…）

心に誓うスバルであった。

## Trail | 06 肉体疲労精神的疲労は一人の来訪者のせい

「じゃあ、風呂に行って来るよ」

そういつて、スバルは部屋をでて風呂場に向かった。ミソラからの介抱によりやく解放される。スバルが部屋を出た直後、ウォーロックとハープは戻ってきて姿を現した。ウォーロックはぐったりとされていて恐らく様子からしてみても沢山言われたらしい。

「ねえ、ハープ？」

『何？ミソラ』

「私、スバル君の彼女としてうまくやっていけるかな？」

『大丈夫よ、ミソラならスバル君とうまくやっていけるはずよ』

ハープは不安になっているミソラに励ましの言葉を贈る。

「うん。ありがと、ハープ」

ミソラは相棒からの優しい言葉に安心できた。その後も二人は話していた。

何十分が経過した頃、スバルが風呂から上がり、バスタオルで体についている水分を吸収させて、着替えをして、ドライヤーで髪を乾かしていた。

「スバル君がお風呂から上がったみたい。隠れて驚かしてやろつと

♪  
」

ミソラはスバルがドライヤーで髪を乾かしている音に気付き、素早く部屋の片隅に隠れた。

スバルが充分に髪が乾いた後、風呂場からあがった気持ちいい空気を浴びながら、階段を上がり、自分の部屋に向かった。

戸をあける音と主に、部屋の戸をくぐり部屋の中に入ったが、そこにミソラの姿は漠然と無かった。

「どこに行ったの？ミソラちゃん」

だが虚しくもその言葉はスバルの部屋に小さく響いただけ。部屋の隅には虫の息と化している生きる屍と化しているウォーロックの姿がひとつ。そんなウォーロックの様子は気にせず、スバルはさらに前進する。

部屋の片隅にいたミソラはスバルに気付かれることが無かった。

（よし！）

完全にスバルの死角の位置にいたミソラは気付かれてないという確信と共に足音を忍ばせてそつとスバルに近づいた。そして不敵な笑いと共にスバルを驚かす。

「わっ！！」

「うひゃっ!!」

ミソラが後ろから無警戒のスバルを驚かしたため、スバルはびっくりして飛び上がってしまった。

「な、な、なんでこんなことをするのミソラちゃん？」

「暇だったからよ♪」

（気まぐれだな）

とスバルは言葉に出さず思っていた。

「じゃあ、私お風呂に入ってくるね♪」

『スバルも大変だな』

いつのまにか復活しているウォーロックの姿があった。

「まったくだよ、ウォーロック。でもミソラちゃんだって悪気があるってやったわけじゃないし…」

『ま、俺には関係ないことだから頑張ることだな』

「ウォーロック…フォローぐらいしてくれたっていいじゃないか…」

『お前ら二人のいい関係になんで俺が手を出さなきゃならないんだ？』

「うつ……」

ウォーロックの冷静な言葉にスバルは返答ができなかった。

『だいたいにしてお前がミソラと付き合うという道を選んだんだろ？ だったら、お前がそれなりの対応を自分で見つけだせよ。俺はこれからなるべく手出しをしないからな』

（なるべく!?!）

（ということはある程度？ はフォローしてくれるのかな？）

スバルは心の中で思っていた。そして長時間が経過した後、首の周りにタオルをつけてそれを使って拭いているミソラの姿が見えてきた。

「はぁ〜スッキリした♪」

「ミソラちゃん、お風呂長いよ………」

「女の子は長いものよ♪」

「そういえばミソラちゃん、歌手活動はどうするの？」

スバルは気になっていたことを話した。

「今のところ、まだ未定かな。まずコダマ小学校の生活とここの生活に馴れてから決めようと思うよ」

「そうなの？ ミソラちゃんの自由だからじっくり考えて決めなよ」

「ありがと、スバル君」

優しい彼氏の対応にミソラは笑顔で返答した。

「布団とってくるね」

「え、一緒に寝るんじゃないの？」

「い、一応とってくるだけだよ」

「分かったわ」

（どうにかして言い訳を考えなきゃ!!）

スバルは部屋をでて布団をとりに行った。

「母さ〜ん」

「何？スバル」

「ミソラちゃんの布団を準備したいんだけど」

「そうなの？分かったわ」

（ミソラちゃんと一緒に寝ないのかな？）

あかねはそう思いながら、布団をとりに行った。

「布団とってきたわよ」



「ありがと、母さん」

そういつて、スバルはあかねから布団を受け取り、部屋に運んだ。若干布団は重かった。しかも前がよく見えなかった。階段を上るとき、一段、一段、気を付けて上った。

部屋に入ったらミソラが今か今かと待ち望んでいたかのような顔でスバルに待望の言葉を喋ってきた

「スバル君、一緒に寝よ♪」

まっすぐな言葉と瞳がスバルに叩き付けられた。だがスバルは男として負ける訳にはいかなかった。

「せっかくミソラちゃんの布団を持ってきたんだからこっちで寝たら？」

「ええ〜嫌だよ！一緒に寝ないの？それとも私のことが嫌なの？」

ミソラは涙目でスバルに訴えた。

これはもちろん演技だ。そうだとわかっていても大人気歌手にはかないそうにない。

「い、いや嫌いじゃないよ」

「だったらいいじゃん♪」

「う、わ、分かったよ…」

『スバル……戦略負けだな。おとなしく従うしかないみたいだな』

「ウォーロック、他人事だと思って…」

仕方なく、スバルはミソラと自分のベッドに向かった。

二人は一緒に布団の中に入った。

突然、ミソラはスバルに抱き着いてきた。突然抱き着いてきたため、スバルは顔を赤くした。しかもミソラは風呂上がりの為、シャンプーのいい香りがスバルの鼻の嗅覚を感じ取って心臓が早鐘を打つようになる。

「スバル君、温かいよ」

「ミ、ミソラちゃんいきなり抱き着いてこないでよ……」

「ZZZ……」

「まさかもう寝たの!?!」

ミソラは一足先に夢の世界に行っていた。

『フフツ、スバル君といるとよっぽど安心できるのね。あんなに早く寝るミソラは見たことないわ』

ハープがミソラの様子を見て笑顔で言った。

スバルは寝る直前にミソラから脱出しようと思ったが、脱出できなかった。

「ミ、ミソラちゃん？力強くない？」

「仕方ない…このまま寝るか…」

こうして、長い一日が終わるのであった。

## Trail | 07 唐突な出来事は思考停止に繋がる

朝が来て、陽が少しずつ上っていた。朝の優しい光が地を明るく照らしていく。空は快晴だ。

窓から差し込む朝の光を浴びて、今日は清々しい朝だなと思うミソラ。

隣にはミソラの恋人、スバルがまだ寝ていた。

「うーん。今、何時かな？」

時計の針は朝7時28分を差していた。

「とりあえず、スバル君を起こそうっと。」

「スバル君、起きて！朝だよ！」

ミソラはスバルを起こすために容赦なく揺する。

「う、うーん・・・」

半ば睡眠の欲求に負けながらもスバルは起きた。起きた直後、髪がボサボサになっていた。

「…ミソラちゃん、お…はよう」

スバルは一応起きた。それでも意識はまだ混濁しているだろう。

（スバル君、多分朝に弱いわね…）

ミソラはそんな心境を抱きつつ、スバルを朝食を食べさせるために先導する。

「さっ、朝ごはんだよ。食べに行こっ」

「分かった」

そういつて二人はリビングに向かった。

「「おはよう、スバル、ミソラ」」

父さん、母さんからの挨拶がきた。それに対応する挨拶を二人は返す。

「おはよう、父さん、母さん」

「おはよう、お父さん、お母さん」

テーブルには、ご飯、味噌汁、焼き魚、などの一般的な朝食が並べられていた。

二人はそれぞれ自分の席に座り、「「いただきます」」と挨拶をして、朝食を食べた。

ミソラはいつも通りに食べている。

だがスバルはまだ寝ぼけているのか、まだ食べてなかった。

あかねはいいことを思いついたように、スバルに言った。

「ねえ、スバル？」

「……何？……母さん？」

スバルはいまだ完全ではないが寝ぼけてる。あかねからの返答におよそ十秒かった。

「スバルはミソラと付き合っているんでしょ？」

母からの衝撃的な言葉によりスバルは一瞬で目が覚めた。

「目が覚めた？スバル？」

「そりゃ、覚めるよ！！」

『オフクロ、朝っぱらからやらかしてくれるな』

ウォーロックは腹を抱えて笑っていた。

「どうやらその反応だと、本当にミソラと付き合ってるみたいね」

スバルは顔を赤くする。

「スバルと付き合ってるの？ミソラ？」

もしかしたら間違いかもしれないという意識をもちつつ確認の為、

今度はミソラに聞いてくる。

「え？・・・スバル君と・・・付き合ってるよ」

ミソラは少し顔を赤くしながら言った。

「聞いた？父さん。これでスバルの未来も安泰だね♪」

「そうだな」

「スバル、せっかくこんな可愛くて歌手でさらに同年代の子が彼女なんて滅多にないぞ。ちゃんとミソラちゃんを守ってやれよ」

「そ、そんな可愛いだなんて」

ミソラはますます顔を赤くした。

「分かったよ、父さん。僕がしっかりミソラちゃんを守るよ」

「よし、それでこそ俺の息子だ！」

家族の会話が終わり二人は学校に行く準備をした。

着替えをして、歯磨き、洗顔をした。その後、学校に持っていく勉強道具と最低必需品をバックの中に丁寧に詰め込んでいく。

ミソラは髪の設定をしていた。

ピンポーン

リビングにインターホンのチャイムが鳴り響く。これはいつもの当然の事、ルナ達が来た。

「さっ、ミソラちゃん行こっか」

二人はバックを片手に玄関を通り、靴を履いて外に出た。

外に出てくる、二人の様子を見て、ルナ、ゴンタ、キザマロは硬直していた。

「な、な、なんでミソラちゃんがスバル君の家からでてるの？」

驚かれるのは無理はない。あの国民的アイドル、響ミソラが星河家からでてるなど一体、誰が分かるのだろうか。硬直して当然の事。

「私、スバル君のお父さん、お母さんに頼んで、住ませてもらうことになったんだ♪」

「」「え、えゝ！！！」

三人は思わず叫んでしまう。

「三人とも…朝から近所迷惑だよ…」

そういつてルナ達は静かになる。

「どうだった？スバル君の家族と過ごして？」



ルナが聞いてくる。

「楽しくて、とっても安心できるよ」

「そうなの。よかったわねミソラちゃん。……でスバル君！」

「は、はいっ!？」

急に声がかかったのでびっくりしたスバルだった。朝から何もしてないのに怒鳴られるとは不幸だと思ったスバル。

（もしかして付き合ってるのがばれた!?!?）

全身に緊張が走る。

「同じ家族なんだからしっかり守ってやりなさいね!?!」

「は、はい!?!」

（よ、よかった）

安堵したスバル。

「さあ、学校に行きましょう」

歩きながらスバルは一人で考え事をしていた。

（僕とミソラちゃんが付き合ってるって言ったら、委員長どういう

反応するかな…？確実に怒るな…

スバルは心のどこかで思っていた。



## Trail | 08 謎の戦士

「……我々の……準備はととのった。今こそ……を……させる時だ！……！さあまずは最初のミッション、計画の妨害になるであろうロクマンを始末してくるのだ！！」

「はっ！」

低い声が交錯していた。

こうして地球の運命をかけた戦いが再び始まろうとしていた。

そんなことを知らないコダマ小学校に在学中のスバル達は呑気に話してたりしていた。

「スバル君、ミソラちゃん、おはよう」

ツカサが朝の挨拶と共に話しかけてくる。

「ツカサ君、おはよう」

「ツカサ君、おはよう」

二人はツカサに挨拶を返した。その後、二人は自分の席に座った。椅子を引きながらミソラはスバルに気になったことを話す。

「スバル君、今日テストとかあったっけ？」

「今日はないよ。普通の授業をやるだけだよ」

「さっすがスバル君♪尊敬する」

そういつて、ミソラはスバルの右腕に抱き着いてきた。

「ち、ちよつとミソラちゃん……」

スバルはミソラが場を考えない行動をしてどう対応すればいいか分からなかった。

（非常にクラスの男子からの視線が痛い……。い、委員長から視線はもっと痛い……）

クラスメイトから殺意ある視線がスバルへと浴びせられる。心がかなり痛かったスバル。委員長からはドス黒いオーラがでていた。

「ス、バ、ル君？あなたはミソラちゃんとういう関係なのかしら？」

笑顔とは裏腹に怒りがこめられていた。間違いなくこれはやばいとスバルの脳の危険信号がうるさく鳴り響く。

「い、いや、こ、これは」

スバルはルナの圧力に一步たじろい、言葉を何回も嚙んでしまう。これじゃますます不自然だという汗がだらだら流れてくる。

『く、く』

ウォーロックはスバルの必死さに必死に笑いをこらえていた。

（ウォーロック、他人事だと思って！）

スバルは委員長の気迫に圧倒されていた。

「恋人関係だよ♪それがどうしたの？」

ミソラがそう喋った。

一瞬、クラスに沈黙が走る。

そして、ジャック、ツカサを除くクラスの全員が「え、え〜〜！  
！〜！」と叫んだ。

「ミソラちゃん、大胆Coming Outだー！！」

スバルがツツコミながらこの先、生きていけるか不安になっていた。

ツカサ、ジャックは「やっぱり、そういう関係だったか」と発言する。もうすでに彼らは納得の表情。

「な、なんでミソラちゃんがスバル（君）を彼氏として選んだのか分からないな」

クラスの男子達がそういう。やはりミソラの相手は自分がふさわしいという意識をもってしまっている。

「地球を救ったヒーローが彼氏なんてミソラちゃん羨ましいな。二人共お似合いだよ」

クラスの女子達はそう言った。世界を三度も救った英雄と大人気歌手の恋人。すごい関係だった。

そんな声しか聞こえなかった。

スバルはミソラちゃんからの爆弾発言により意識がとんでいた。

『ミソラ、ハープ、スバルの意識がとんでるぜ』

ウォーロックがミソラ達に言う。

「もう、スバル君ったら」

スバルの肩を揺らし、意識を叩き起こす。

「はっ、ミソラ…ちゃん」

「ほら、HR始まるから正面に向こ」

「わ、分かった」

朝のHRが終わり、ゴンタ、キザマロが来た。

キザマロがおそるおそる聞きたいことを言う。

「ス、スバル君、ミソラちゃんと本気で付き合ってるんですか？」

「そ、そうだよ」

「スバル君と付き合ってるよ」

二人はキザマロに返しの言葉を送る。

「チクショー羨ましいなあ」

ゴンタが悔しみの発言する。仮にも彼もミソラのファンの一人だ。

「でも地球のヒーローと大人気歌手が恋人同士なんて凄すぎますね」

キザマロが敬意の言葉を付けてそういう。

「メディアがスバル君とミソラちゃんの間係をしたらどうなるか、怖いですね…」

「僕、もう町歩けないよ…」

スバルが怯えながら言う。おそらくスピカモールを歩いていた瞬間、ファンに八つ裂きにされるかもしれないだろう。

「あれを見ましたらもつと怯えますよ」

指さす先には怒りのオーラに満ち溢れたルナであった。



「ヤバい、もう少しで爆発しそうだよ…」

『手をださないこったな』

キンコンカンコンとチャイムが校内中に鳴った。

「おっと、席につかなきゃ」

「そうですね」

二人は自分達の席に戻った。

「授業を始めるぞ」教科書の16Pを開け」

皆は授業をうけた。

何分かした直後、突然空が暗くなる。空は曇っているわけでもないのにおかしくなっていた。その様子を感じ取ったクラスに動揺が走る。

『ん!?!この周波数は!?!』

「どうしたのロック？」

『ミソラ、私もこの謎の周波数を感じとれるわ』

「本当!?!ハープ」

『大きな何かがこちらに近づいてきやがる!!』

「なんだって!?!」

直後、突然の閃光が教室を一瞬だけ白く染め上げた。

「な、なんだ!?!」

『グラウンドに何かいやがる。スバル、電波変換だ!』

『ミソラも電波変換よ!』

「「分かった」」

「「先生、行ってきます」」

「氣をつけろよ」

「「はい」」

「スバル君、僕たちも行くよ」

ツカサ、ジャック、ゴンタも同行してくれた。皆の加勢も加わり五人。ある程度は安心できると思ったスバル。

「「「「電波変換!?!」」」」」

五人はは光の発生場所、グラウンドに向かった。

グラウンドの真ん中に一人たたずんでいた。剣を片手にもっていた。

「お前は一体誰なんだ!？」

ロックマンが謎の電波体に質問する。

その電波体は身体が黒く、背中に取り付けてある装備から謎の粒子を放出し、腰にはいかにも軽くふっただけできれそうな刀を二つ所持していた。

さらに速さを特化させるために身体にある無駄なものを切り捨てた身体をしていた。

『コイツ、できる!!!!』

『スバル、気をつけろ。コイツは格が違うぞ!』

「分かった!」

「皆、気をつけて!!!」

「「分かった!!!」」

「お前がロックマンか？」

相手は小さな低い声と共に冷たい冷酷な目でスバル達を見てきた。

「そうだ！お前の名は！？」

「俺の名はディスト・レジェッタ。あるお方からミッションを受け、お前を潰しにきた」

「あのお方とは誰だ！？答えろ！」

ジェミニが聞く。

「お前ら雑魚共に用はない、おとなしくしてろ！！」

ディストの姿は一瞬にして消えた。

気付いたらスバル以外の5人は倒れていた。

「安心しろ。殺してはいない。ただのみねうちだ」

「いつの間に！？」

目がついていかなかった。恐らく自分より圧倒的に強いと悟ったスバル。距離をとって構えた。

「後はお前を始末するだけだ」

冷たい瞳でディストはロックマンを睨みつけた。

「よ、よくも僕の大切な友達を傷つけて、僕はお前を許さない!!」

『行くぞ、スバル!! 奴を倒すぞ!!』

「うん!!」

スバルは右手を強く握る。

「ノイズチェンジ! ウルフノイズ!」

「バトルカード、ソードファイターX!! さらにソードファイターX!!」

ソード強化の近接特化型のウルフノイズになったロックマンは両手をソードファイターXに変え、ディストに向き合った。

また戦いが幕を切っておとされたのであった。

## Trail 09 思念は動きとなりて

「行くよ、ウォーロック!!」

『おう!』

スバルは最も頼れる相棒、ウォーロックに檄の言葉をいい、喝を入れて目の前の敵に集中する。小さな深呼吸と共に、ロックマンはウォーロックアタックで光の速さで素早くディストの懐に潜りこんだ。そして両手に所持しているソードファイターで斬りこもうとする。

右手のソードファイターXを振りかぶる。振りかぶった瞬間、ソードファイターが天を仰ぎ、光を反射し、うなりを上げてディストへと勢いよく振り下ろされる。申し分のないスピード。戦闘感覚は錆びてないと思うスバル。

だがディストも反応が早く冷静に対処して、スバルのソードファイターを右手の剣で容易く止めていた。直後、剣と剣がぶつかりあい、空気が揺れて、音が乱反射し、火花が拡散した。

「俺の懐に潜るとは貴様、中々やるな!!」

二人は鏖ぜり合いになっていた。剣と剣がギチギチという奇妙な音を放ちながら二人は力を込めている。

直後、瞬時に二人は距離をとる。冷静に対処し落ち着いて一息仰ぐ。

そして、再びロックマンはウォーロックアタックで急接近する。距離がどんどん埋まっていく。だが相手もそれに対して冷静に対処しようとする。

「俺に同じ手が通用すると思うなああ！！！」

デイストは先読みして、スバルの動き、スピード、剣を使うタイミングを予測して、自分の右手にもっている得物でスバルを斬りつけようとした。

「うおおおおお！！！」

デイストの剣が空気を切り裂き、うなりを上げる。完璧に捉えたつもりだったが、だが正面にロックマンの姿は無かった。目の前には無人の空間が広がっていた。

「でああああ！！！」

直後、一筋の光と共にスバルは後ろに回り込んでいた。スバルは正面から斬るのではなく背後に一瞬で周りこみ斬りかかった。完全にフェイントに食いついたデイスト。確実に一撃を与えようとしていた。

「うおおおおお！！！」

叫び声と共にスバルのソードファイターXが標的に対して斬りつける。

後ろから、肩に、腰に、腕に、背中に、綺麗な剣先を描きながら体重移動を上手く使い、次々と斬りつけた。そしてフィニッシュ。

華麗で完璧な一撃をディストに叩きこんだ。

『よし。決まったぜ!!』

「・・・その程度か。が、今の戦い方は中々の上出来だぞ」

ソードファイターフィニッシュ時の技で煙が蔓延していた。だがその中には傷がついているが何もなかったかのように佇んでいるディストの姿があった。

「本当の剣の使い方を俺が教えてやる！」

叫び声と共にディストが一瞬で姿が消えた。姿が見えなくなったことによりスバルはあわてた。

「い、一体何処に？」

気付いたら後ろにいた。剣が見えない速度で動かしていてスバルには何をしているか理解できなかった。

直後、身体に激痛が走る。

「ぐっ、あああああ!!!」

悲鳴をあげるほどの激痛だったのだろう。かなり苦しそうだ。全身には出血までは至らないが、深い傷がちらほらあった。



「ぐっ…」

ロックマンは地面に膝をつく。と共に、ソードファイターを杖代わりにして再び立ち上がろうとする。

『おい。スバル、大丈夫か？』

「う、うん」

だが今の斬撃によりロックマンは全身に痛手を負ってしまった。傷が負えば、体に負担がかかる。となれば満足に動けなくなっていく。だがここで諦めてしまえば自分はまたあの時の自分に戻ってしまうかも知れない。それだけは御免だとスバルは立ち上がる。損傷がひどいのが足。

かなりのダメージを喰らった。足は移動するための動力部分だ。足がなければ何もできない。足の負担が大きいのはスバルにとって痛手だった。

だがスバルはそれでも諦めない。彼の瞳には希望の光が消え失せてなかった。ただ守るという思いと絆と仲間と、そして「今」を維持するために英雄は何度でも立ち上がる。相手が強大な存在であろうと己の弱さに屈せずにした。

「僕はあきらめない！僕はあの日誓ったんだ！誰も悲しませないと！！皆を守ると！！」

「うおおおおお！！」

「奴のパワーが上がっている…一体これはなんだ…？」

デイストは剣を前に出して構える。

「行くぞ！デイスト・レジェッタ！！」

ウォーロックアタックのスピードが早くなっていたことに反応で  
きなかったデイストは不意を突かれて全部喰らってしまった。

守りたいという気持ちが彼を強くしているかも知れなかった。そ  
の頃、コダマ小学校で倒れているミソラたちが目覚めた。

「……うつ……大丈夫？ハープ？」

電波変換状態のミソラが気絶から覚醒する。

『ええ…なんとかね』

と直後に大きな轟音がする。その音に驚きとともにかられたミソラ  
は音がした方向を向く。だがハープ・ノートは目覚めたばかりなの  
で視界が少しぼやけていた。目を優しくこすって無理矢理、焦点を  
しっかりあわせたその先に驚きの光景が飛び込んできた。

それは、身体全身が傷だらけで、肩で息をしていたスバルの姿が  
ミソラの目に明確に映っていた。

それを見たミソラは声がなかった。口を両手で押さえて黙  
り込む。

「………」

スバルは苦痛と疲労により、満足に立つことができなかった。立ち上がりても安定感はなくふらついている。それでも彼の瞳には光という希望は消えていない。

「そろそろとどめをさしてやる！」

デイストは高速に剣を振り、風の鎌鼬を作った。それが勢いよくスバルに襲いかかる。

スバルは回避しようと思ったが体がいう事を聞かなく回避できなかった。

「スバル君ーーーー！！！」

デイストの作った鎌鼬が見事にスバルに直撃する。ミソラが叫んだ直後に轟音と共に大きな爆発が起きた。

## Trail | 10 瀕死の中での決着

テイストが作った真空の鎌鼬がスバルに直撃し、轟音と共に爆発が起きた。

だがスバルは全身傷まみれで口から血を出しながらも、瀕死になりながらもなんとか生きていた。

それは何故かというと、スバルに鎌鼬が直撃する瞬間、スバルは閃きでアンダーシャツのアビリティをセットしていた。

「ロ、ロックマン!!」

心配したハープ・ノートが背中にギターを背負って大きな足音と共に近づいてくる。

だが、いきなり左右から風の鎌鼬が通り抜けた。風の鎌鼬が通り抜けた直後、地面が深くえぐられていた。威力の大きさが物語られている。それを見たミソラは一步たじろい固唾を飲む。

「俺とコイツの戦いに手を出すな。さっきは警告だ。また、手をだしたら次はあてるぞ」

そういつて、テイストはミソラに剣を向ける。

「くっ・・・私には見ていることしかできないの!？」

ミソラは己の弱さに悔しむ。自分はまたここで見ているだけなのか。またスバル一人に任せきってしまうのかに。

「ち、ちくしょう、悔しいぜ・・・」

ツカサ達が同時に起きた。直後、ここでツカサが冷静な一言を言う。

「僕らには次元が違い過ぎる。助けにいつでも足手まといが増えるだけ・・・」

「だったら俺達は指をくわえて見ていろということかよ!？」

ジャックが大きな声で反論した。

「い、いや・・・そうじゃない・・・」

スバルがどうにか立ち上がりながら、震える足を根性で叱咤して喋った。

「僕は大切な人を、皆を・・・守りたいんだ・・・誰も傷ついてほしくないんだ!!」

「だからって、あなたが傷ついていたら意味がないでしょ!？」

スバルはそう言ったがミソラはスバルに思いを込めて大声で喋る。

「確かにそうだね・・・僕がいなくなったら沢山の人が悲しんでしまうな・・・」

「僕は生きる!!こんなとこでくたばるのはまだ早いんだ!!」

スバルは決意と共に自分に叱咤する。

『そうだぜ！スバル！俺はお前にとことんつきあうぜ！』

相棒のウォーロックもスバルを励ます。ここまでしてもらい、自分が戦闘に対する守るといふ意欲がわいた。

「ありがと、ウォーロック！」

「スバル君！地球を救ったヒーローの底力、見せてやりなさいよ！」

ミソラがスバルに声援を送る。

「フッ、だが既に瀕死の状態の貴様に何ができる！？」

ディストは小さな吹き出しと共に余裕の表情で喋る。

「こういうことだ！」

「バトルカード！ムラマサブレード！！」

スバルが使用したムラマサブレードとは自分の体力の減少した分、威力が上がっていくカードだ。いわば諸刃の剣。傷ついた状態で斬りつければ相当のダメージが与えられる。だがその分近づけば反撃を喰らうことが多いため危険であった。

今のスバルの状態からしてのムラマサブレードにはかなりの威力があるだろう。おそらく、相手を倒すことも可能に近いはずだ。

「フッ、貴様にしてはいいカードを選んだな。だが、そのムラマサブレードを、お前は俺を斬れるかな!!?」

「それは分からない…けど僕はお前を倒す!倒すんだ!だから僕はこんなところで立ち止まる訳にはいかないんだ!」

「バトルカード!ウォリアーフラッド!!」

ウォリアーフラッドはスーパーアーマーなど戦闘能力が上がるかわりに、体力が削られる危険なカードだ。だが瀕死に近いロックマンに体力など関係ないのだろう。

「いくぞ!これが僕たちのラストアタックだ!!」

わずかな時間でウォロックアタックで光と共にデイストに急接近した。勢いを剣に乗せるようにムラマサブレードを振る。ムラマサブレードがうなりを上げて振り下ろされる。

デイストは瀕死のスバルのスピードに驚いて、反応が一瞬遅れた。デイストは両手にある刀を抜刀させて、正面から襲いかかってくるムラマサブレードを防いだ。

直後、剣と諸刃の剣がぶつかりあい、轟音と共に空気が揺れた。さらにデイストの右手の剣に亀裂が走り、音をたてて砕けた。

「なっ!?!俺の刀が!?!」

デイストは驚きと共に後退した。

「くっ、これほどは…俺の剣を砕いた代償は大きいぞ!!」

スバルは勢いに乗り再び、ムラマサブレードで襲いかかってくる。

だがデイストはそれを間一髪、回避する。

『おい、スバル!』

「なんなのロック？」

「あいつの背中についている装備を破壊してみる賭けに出てみないか？」

奴の背中には黒い粒子がでていた。

（つまりあれを壊せば、倒せるかも!?!）

などスバルはその小さな思いを抱く。だが自分の状況に迷っている暇はなかった。

「もうそれしかないんだ。その賭け、のったよ!ロック!」

『おう!!』

「はあっ!」

「うおおお!!」

二人の声が戦場で交差し、お互いが高速移動する。



「でああああ！！！」

「うおおおおお！！！」

叫ぶ語絵とともにお互いの剣と剣がぶつかる。

「もらったあ！！！」

次の行動を既に開始していたディスト。勢いよく斬りつけたが、そこにロックマンの姿は無かった。

「馬鹿な！確実に手応えはあったはずだ！！！」

「バトルカード、ヘンゲノジュツ」

後ろに回りこんだロックマンはムラマサブレードを高くあげディストの背中についている、装備を破壊した。破壊された直後、破片が宙を舞う。

「うっ、ぐあああああ！！！」

ディストが苦しみと共に叫ぶ。背中ブースターみたいなのは音をたてて砕けた。

「奴が苦しんだ？やはりあの装備と関係があったのか？」

「ぐっ、…一時撤退する！」

そういつて、ディストは苦し紛れの一言と言い姿を消した。

「そうみたい……だね……ぐふっ!!……」

スバルはたくさんの血を吐いて、地面を血で赤く染めて、電波変換が解かれ、その場に倒れた。

『どうしたスバル!? しっかりしろスバル!』

「スバル君! 大丈夫!? スバル君!」

近寄ってきたウォーロックとミソラが必死に声をかける。

「うっ……力が入らない……ミソラちゃんがすぐ近くに……  
……どんだん……意識が遠くなっていく……」

スバルは意識を失った。全身には傷が沢山とある。それを見たミソラは両目に涙を浮かべた。

ミソラ達はすぐに育田先生を呼んだ。育田先生が来て、スバルの容態を見た。

「いかん。完全に意識を失っている。このままでは命が危ない!」

その後、スバルは病院に緊急搬送され、治療を施された。治療の結果、どうやら命に別状は無かったようだ。

スバルが目覚めるのは一体いつのだろうか。それは先の話である。

**T r a i l | 1 1 ミソラの決意（前書き）**

## Trail | 11 ミソラの決意

スバルが敵と戦ってはや二日目が経過した。

スバルは病院の病室のベッドの上で寝息を立てて寝ていた。彼が目覚めるのは一体いつなのだろうか。

彼が病院に搬送された時、体には無数の傷があり意識まで失った。医者たちの迅速な対応によりスバルは幸い命に別状は無かった。

病室で、大吾達が寝息をたてて寝ているスバルを見守っている。ミソラは一人で頑張っていたスバルの勇姿を思い浮かべていた。一人で必死に頑張る少年。そしてただみているだけの自分。己の無力さに殺したくなってきたミソラだった。

「スバル君……早く目覚めてよ。私が弱いせいで、スバル君がこんな目にあって……」

「スバルはきっとミソラ達を守ろうとしたのよ」

「それは分かってる」

ミソラはあかねに冷静な返答をした。

「大丈夫だ、ミソラ。何たって、俺の息子であり世界を救ったヒーローなんだからな！」

「うん……」

大吾に励まされたが返事には力がない。

『そうだな大吾！コイツはもっとたくましくなってくるぜ』

ウォーロックも珍しく気を遣いミソラを励ます形で言う。

「ああ、そうだな」

「……けど、私もっと強くなりたい。そしてスバル君と一緒に戦えるようになりたい！」

ミソラはスバルに対する思いを前にして大吾達に訴えた。一人の少女が一人の少年にかける健気な思い。

「あなたがスバルを守りたいという気持ちは分かるわ。ミソラにとってスバルは大切な人だものね…」

「うん……」

「ならスバルの背中をおせるように頑張るなさい！」

母の言葉に少しは心が落ち着いたミソラ。

「頑張るよ、お母さん……。待っててね、スバル君……。私、スバル君の役に立てるように努力するから…」

ミソラの目には若干涙が浮かんでいた。けどミソラはそれを右手で拭い。小さな一言と共にそう言って、ミソラは固い決意をしたのであった。

そして時はさかのぼり二日前となる。彼が戦闘で倒れているというのがあかね、そして仕事中の大吾の耳へと届く。

スバルが意識を失い、病室に搬送されその一時間後となる。学校から連絡を受けたあかねと大吾は急いで、病院へと向かっていた。

傷だらけに、意識を失っている病院の集中治療室のベットの上にいるスバルを見てあかねは言葉を失った。

「スバル!!」

あかねは人工呼吸器と点滴をされていたスバルに窓越しに近づいた。スバルは現在寝ていて、傷を癒していた。

「よく頑張ったわね。今は傷を癒しなさい」

「スバル、こんなになるまでよく頑張ったな」

寝ているスバルに、二人は窓越しで優しく話しかけた。

「あかね、俺はこれからWAXAに行って、この事を報告して来る」

そう言って、大吾はWAXAに向かった。

「スバル君のお母さん、僕達が何も出来ないせいでスバル君をこんな目に合わせてしまいました…」

ツカサが申し訳ないように言う。自分の無力さに右手で思い切り握り、血が出るくらいに強く握る。

「いいのよ。あの子はきつと、皆を守りたいから必死に戦ったのよ。あなたたちが自分を責める必要はないわ」

あかねは皆に優しく話しかける。母親の為、スバルの事は一番知っているあかね。

「さ、もう帰りなさい。スバルは私が見ているから」

ミソラを除くツカサ達は帰るべき場所へ帰った。仲間の事を頭にとどめておきながら。

その頃WAXAでは再び驚きの歯車と緊張が走る。

「なんだって！スバルが！？」

暁は大吾からの報告により驚いた。と共に右手にもっていたうまい棒を地面へと落としてしまう。ちなみに暁はスバル達がメテオサイバーから帰還した三日後に発見され、病院で治療をうけていた。現在は完治し、過去のような病気も消えていた。

「また近々、戦いが起こるのか…？」

「その可能性は限りなく高いだろう」

「奴らの目的は一体…」

「まだ謎だ…俺は対策本部をたてた方がいいと思う」

「俺も同感だ。あいつらがいつ動くか分からないからな」

二人は短い会話と共に固唾を飲み、対策本部を設置するという暁と大吾の意見が一致する。

「ということはスバルやミソラ達を収集するか？」

「お願いします。あなたから頼んでくれませんか？」

「分かった」

こうして、大吾はWAXAを出て家に大事を取って帰ることにした。大吾は家に帰る前に病院に寄り、花を片手に持ってスバルの病室に入った。病室独特のにおい。大吾はそれが嫌いじゃなかった。先にミソラ達は帰ったようだ。

荷物を椅子に置き、空になっている花瓶に一束の花を添えて蛇口から出る水を花瓶の中へと注ぐ。その後、暇そうに待機していたウォーロックに話しかけた。

「ウォーロック、また近々戦いが起こるらしい」

『そうなのか？腕が鳴るぜ！』

そういつて、ウォーロックが一人で盛り上がりはじめる。

「ウォーロック、俺から頼みがある」



『なんだ大吾？お前から頼みとは一体なんなんだ？』

「スバルは結構無茶するからな。もしもの時はお前がスバルを止めてくれないか？」

『別にいいが：一体何故だ？』

「今回の敵は非常に危険すぎる。もしかしたらスバルにも命の危険があるかも知れない」

『ああ、分かった。しかし、お前と二人で話すのは宇宙ステーション以来だな』

「確かにお前と話すのは久しぶりだ」

二人は宇宙ステーションで出会ったファーストコンタクトの記憶がまだ鮮明に覚えさっていた。

「しかし、スバルも顔つきが男らしくなってきたな」

『そうか？俺にはそうも感じないが。変わったといえば性格ぐらいか：。俺とスバルが出会った時は凄く後ろ向きな性格だったな』

「それは俺がいなくなったからだろ」

『確かにそうかもな。俺とあいつの出会いが無ければ、今のスバルはいないだろうな』

「これからもスバルの事を頼む」

『分かったぜ、大吾』

「俺はそろそろ帰るよ。スバルに何かあったら連絡してくれ」

『ああ、分かった』

大吾は病室を後にし、自宅へと向かった。

「ただいま」

大吾は夜の九時頃に帰ってきた。

「お帰りなさい、大吾さん」

「お帰りなさい、お父さん」

二人が大吾にお帰りの挨拶を交わす。

「「「・・・」」」

三人は沈黙した。思っていることは同じだろう。本当はもう一人、大吾の帰りを待っている人がいる。だが、彼は今そこにいない。彼がいないだけでこんなに寂しいと思った三人だった。その沈黙を破ったのがあかねだった。

「大吾さん。仕事、お疲れ様」

あかねは大吾の持っている荷物を預かり、部屋へ持って行った。

「あかね、ミソラ、聞いてくれ」

リビングで大吾による重大な報告を話す。

「近々、また戦いが起こるらしい」

『ポロロン……やはり戦いは起きるのかしら？』

「それは確実だろう」

「大吾さん、相手の目的は一体？」

「それは分からない……。まず相手に対する不確定要素が多すぎる。ミソラ、スバルが目覚めたら、ツカサ君達を呼んで、WAXAへ来てほしいんだ」

「分かったよ、お父さん。また戦いが起こるんだね……。スバル君にだけまた任せちゃうことになっちゃうのかな……」

「そんなことはもうさせない。アイツだけ一人で無茶な事に合わせる訳にはいかない。皆で危険に立ち向かうんだ」

「うん。そうだね、お父さん」

「スバルの事をお願いします。大吾さん」

こうして長い一日が終わり、長い長い戦いが始まろうとしていた。

## Trail | 12 混濁する思い

スバルが入院してから早くも三日が経過。ミソラはいつも通りに起きて、学校へ行く準備をした。だが彼女の顔にはいつものような天真爛漫な彼女が作り出す明るい笑顔が見えない。やはりスバルの事が気になっていた。

朝食をしている間、あかねが朝早くから支度していた。

「私、スバルを見に行ってきます」

「ああ、分かったよあかね」

「分かった、お母さん」

夫婦の短い会話がリビングで続いた後、あかねはいち早くスバルの入院している病院へ向かう支度をしていた。

ミソラは食事終了の後、着替え、洗顔、歯磨き、髪の設定をした後に自宅に来訪者が来る。

ピンポーンと星河家のインターホンがリビングに鳴り響く。いつもの友達だとミソラはそう解釈して荷物を持ち学校へ向かう。

「お父さん、行ってきます……」

「「行っってらっしゃい」」

玄関を出ていくミソラの顔を見た二人はミソラの顔に明るさが感じられないとそう感じ取った。やはりスバルの事を気にしているんだろうと思った。

「ミソラ・・・スバルがいないから落ち込んでいるわ・・・」

「今は仕方ないさ・・・スバルが早く目覚めるよう祈るしかないさ・・・」

ミソラが玄関を出てその姿を見たミソラの大切な仲間たちが朝の挨拶をする。

「「おはよう、ミソラちゃん」」

「・・・おはよう、皆・・・」

ツカサ、ゴンタは黙ったままだった。そしてミソラの挨拶にも力を感じられない。まるでふぬけているように感じ取れる。やはり、自分達が何も出来なかったことに悔やんでいるのだろう。

「さっ、学校に行くわよ」

「「「うん」」」」

四人はルナの後になんかについていった。そしてコダマ小学校の校門を抜け、玄関を通り、自分達の教室へと向かった。登校中、沈黙の時間が続いた。

「あなた達！」

ルナが大きな声でツカサ、ミソラ、ジャック、ゴンタを呼んだ。

「スバル君が入院してるからってクヨクヨしないの！！スバル君が見たら悲しむでしょ！！」

「それは分かってる。けど私達はただ見ていることしか出来なかった。スバル君がただ傷ついていて、敵と命をかけて必死に戦っているのを……」

「僕たちには次元が違いすぎるんだ……」

ツカサとミソラが悲しげに言う。己の無力さに悔しくなる。一人だけが入院するほど、生命の危機に合うほどの危険に晒されているのに自分は無傷で今、ここに立っている時点で自分が非常に嫌だった四人。

「敵わないと分かっているけど、助けるのが本当の友達でしょ！？」

「うん……」

「それは分かっている」

ツカサとミソラは力なき返事をする。

「だから後ろ向きにならない！！」

「スバル君が戻ってきたら、笑顔でお帰りなさいって言ってやりましょうよ！」

「ありがとう、ルナちゃん。おかげで気が楽になったよ」

ミソラ達がルナに感謝の言葉をつたえる。だが実際の所は彼女に余計な心配をさせないように作り笑顔を作っただけだ。そしてチャイムの音と共に再びスバルのいない学校が始まった。授業が終わり、明日から週末だ。

学校終了の放課後の時間にミソラ達はスバルのお見舞いに向かった。そして、病院についてスバルの寝ている病室に辿り着いた途端、ミソラ達は寝息を立てて意識のないスバルに言いたいことを告げた。

「スバル君、まだ目覚めないのかな・・・君がいないと私は一人で悲しい・・・」

ミソラが悲しげに言う。うつすらだが彼女の両目には一筋の涙がでていた。

「スバル君、君がいない学校なんて寂しいよ」

ツカサが思いを伝える。右手がギュッと音がするぐらいに握りしめる。

「スバル、俺はなんも出来なかった。そのせいでお前をこんな目に合わせてしまった。すまない」

ゴンタが深々と謝る。

「「スバル君！早く元気になって戻ってきて（ください）ね！」」



ルナとキザマロが励ましの言葉を贈る。そして、スバルのお見舞いが終わり、皆はそれぞれの帰る家へ帰って行った。

「ただいま・・・」

「お帰り、ミソラ。もう！いつまでも暗くならない！スバルに笑われちゃうでしょ！」

「うん、そうだね」

ミソラがあかねに返答する。やはり自分を自分でおいつめていたミソラ。それを見て悟ったあかねはある話を持ちかける。

「そうだ！この際、スバルがいないから、スバルの面白い過去話聞きたい？」

「聞いてみたい！」

そういつて、二人はリビングに向かいあかねはスバルの面白い話を聞いたのであった。

「あはは、やらかしてくれるねスバル君は」

『へえ、スバル君がそんなことをするなんて以外だわ』

ミソラから笑みがこぼれていた。ハープの顔には悪戯笑みも浮かんでいた。

「フフツ、立ち直った？ミソラ」

あかねは笑顔でミソラに返した。

「すっかりだよ。もう一回スバル君のお見舞いに行ってきます」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

「はい」

あかねは元気に飛び出していくミソラの背中を見て微笑した。

『ポロロン・・・ミソラ楽しそうね』

「まああのスバル君があんなことするなんて驚いたよ」

そしてミソラは信頼している人のもとへ急いでいく。そして病院の病室へと入ったミソラは人工呼吸器につけられて寝ているスバルに話しかける。

「ねえ、スバル君……。あなたが入院してから三日がたったよ。早くスバル君の意識が戻ってほしいな……。私、色んな人に励ましてもらったけど、や……。っぱりスバ……。ル君がいな……。きや、寂しいよ……。せっかく……。伝えた……。い思……。いを伝えた……。のに……」

寝たきりのスバルの左手を掴んで泣いた。ミソラはスバルを目覚めさせてほしいという願望で話した。

一方、スバルは別の世界でさ迷っていた。真っ白で何もなく果てまでありそうな地平線しか無かった。

《うう・・・ここは一体・・・どこなんだ？確か僕は、デイストを倒した後、血を吐いた所までは記憶がある・・・。どうやら僕は意識を失ったみたいだね・・・。どうやって、戻ろう・・・》

そう考えた直後、自分の耳に聞き覚えの声が入ってくる。

《・・・ルく・・・・・・バル君！・・・スバル君！！》

どこからか自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。スバルはこの聞き覚えの声のある主を自分の記憶の引き出しから厳選し一つの声を割り出す。

《この声はミソラちゃん！！》

声のした方へ手を伸ばして走っていく。

《スバル君！！》

《ミソラちゃん！！》

スバルはミソラの声がする方へ手を伸ばす。

《僕は早く戻って、ミソラちゃんを安心させてやるんだ。待っててミソラちゃん。今すぐ行くから・・・》

ミソラは泣きながら掴んでいた手が一瞬動いたことにまさかとスバルの顔に視線に向ける。その様子を見てミソラは目を丸くする。

「うつ・・・ミソラちゃん・・・？それにウォーロック？」

最も信頼している人、スバルがようやく覚醒し、ベットから三日ぶりに目覚める。

「ス、スバル君！！」

『スバル！！』

ミソラはスバルに泣き顔で抱き着いてくる。スバルの胸に飛び込んできて両目から大粒の涙を流してスバルに泣きじゃくる。スバルは呼吸器を外した。そして泣いているミソラの頭を優しくなでて安心させてあげるようにする。

「ごめんね。心配かけちゃって」

スバルは抱き着いてきたミソラの頭を再び優しく撫でてやった。

「スバル君。・・・お帰り・・・なさい」

「ただいま、ミソラちゃん。君が必死に僕を導いてくれたことに感謝してるよ」

「どういたしましてスバル君」

そういつて、ミソラはスバルの頬にキスをしてあげた。スバルは

顔をかなり赤くした。無論、ミソラもだ。

『スバル〜いいのか〜』

（（（空気読めないな〜）））

ウォーロック以外の三人が思った。勿論、ある人からの渾身の一撃をウォーロックにかまされて彼が呼吸困難の生命の危機に陥ったのは言うまでもない。

ミソラがスバルに謝る。

「あの時はごめんね。助けることが出来なくて……………」

「いいんだよ、別にもう過ぎたことなんだから。気にしなくてもいいよ。次頑張ればいいじゃない」

その言葉を聞いたミソラは本当に安心する。

（本当にスバル君が戻ってきたんだ！！これでまた4人で食事ができる！！）

「私、お母さんに連絡してくるね」

そういつて部屋をでてミソラは笑顔をいっぱいに広げてあかねに連絡をした。





## Trail | 13 母の直感

ミソラが病室をでた後、ウォーロックはスバルにいいたいことを言  
った。

『スバル、体は大丈夫か？』

「体の節々とか痛む程度かな」

『スバル、お前に言っておきたいことがある』

「なんなの？」

『まずはまた近々、戦いが起こるかも知れない』

「僕もそう感じてるよ」

『そしてもう一つ、ディストの野郎と戦った時、ノイズ率が95%  
までしか上がらなかったことだ』

「一体、何故？」



スバルはソードファイターXやムラサブレードとか使い、周囲のノイズ率が300%をいってもいいくらいだった。

『それは俺にも分からない』

『今はゆっくり休め。傷を癒して戦いに備えるんだな』

「分かった、でもウォーロックが心配してくれるなんて以外だね」

『べ、別にいいじゃねえかよ』

ウォーロックは視線をそらす。

『そういえばお前が寝てる時、ミソラがお前の役に立ちたいと言ってたぜ』

「そうだったんだ。やっぱり何も出来なかった事を気にしてるのかな・・・」

『そうかもな・・・。しっかり気遣ってやれよ、スバル』

「うん、分かった」

そしてウォーロックはウィザードオフした。

直後、ミソラが病室に入ってきた。

「お母さんが今から来るって。スバル君が回復したから、安心してたよ」

「そうだったのか。また僕、沢山の人を悲しませちゃったな」

スバルは自分を責める。

「自分を責める必要はないよ、スバル君」

「うん、ありがとう」

30分後――

「スバル、体は大丈夫!？」

あかねは息を少しきらして病室に入ってきた。

「うん。でも体の節々は痛いけどね」

「よかった…。スバルが目覚めなかったら、どうしようかと思って…本当によかった…」

あかねは安堵する。

「お母さん、先生によると明後日には退院できるみたいだよ」

ミソラはあかねに医師からの報告をした。

「明後日は、スバルの退院祝いに沢山料理を作らなきゃね！」

「私も手伝うよ、お母さん！」

「じゃあ、そろそろ帰るね。スバル、ゆっくり休んでね」

二人は病室をでて言った。

帰り道――

「ねえ、ミソラ？」

「何？お母さん」

「ミソラはスバルが目覚めた時、嬉しくなって抱き着いたでしょ」

「う、うん」

ミソラは顔を赤らめて返答した。

（なんかまだありそうね…これで攻めてみるかな）

あかねは直感を働かせる。

「ミソラはスバルに抱き着いた時、頬とかにキスしたりした？」

「・・・うん。あの時は嬉しくなりすぎて・・・」

ミソラはますます顔が赤くなる。

（スバル君のお母さんの直感、凄っ！！！！）

ハープは関心していた。

「スバルは幸せ者ね。」「スバルの事をよろしくミソラ」

「うん」

こうして、二人は歩きながら帰って行った。

一方――

「すいません。ロックマンの抹殺に失敗しました」

ディストが報告する。

「ふむ。ではロックマンの戦闘力を教えてくれ」

幹部らしき人物がディストに質問する。

ロックマンの戦闘力は、我々と同じくらいです。だがロックマンは絆の力で我等を凌駕するくらい強くなります」

「絆の力ですか……」

「後、私がつけていたノイズドライブを弱点だと判断して、破壊してきました」

「なるほど、奴は観察眼もあるのか……」

「情報収集、感謝する。別に我らにはいくらでも時間はある。少しずつ計画を実行していくぞ」

「はっ!!」

そして、夜8時―

一人の人物がスバルの病室に入ってきた。

「スバル、体は大丈夫か？」

『よう、大吾』

「あ……父さん。体は大丈夫だよ。明後日には退院予定だし」

「そうか……。お前がない事でミソラが悲しんでたぞ。早く退院して安心させてやれ」

「うん。分かった」

「俺はそろそろ帰る。お休み、スバル」

「お休みなさい、父さん」

大吾はスバルの病室をでて行った。

「さて、寝るか。お休み、ウォーロック」

『ああ』

そう言って二人は寝た。





## Trail | 14 安心

スバル無事意識を取り戻し大事をとってまた就寝した。一方、スバルの家では歓喜の声が上がっている。

「とりあえず、スバル君が目覚めてよかった」

「そうね」

ミソラとあかねがリビングで話している。ちなみに大吾はまだ帰宅中だ。ミソラはジュースを飲んでる時にあかねが面白い事を考えたような笑みを浮かべて大胆不敵な一言をいう。

「ね、ミソラはスバルといつキスするの？」

「ー！ー！」

ジュースを飲んでる最中だったので、むせてしまった。連続して続く咳が苦しかった。何回も続く咳。

「ごめん。ジュース飲んでる最中だったわね」

「うっ・・・なんでそんな質問するの？」

「いや、頬にキスしたなら今度は唇でもいいかなってね」

「……」

ミソラは顔を赤くする。そしてどれだけ二人の関係の情報を持っているのが怖くなっていたミソラだった。

（なんでこんな大胆な事を言うの！お母さんは！）

（その様子だと、まだまだ先かな？）

「もう！この話はナシ！私、お風呂入ってくるね！」

ミソラはそう言って、あかねからの悪戯笑みを含んだ質問から逃れた。着替えや下着を持って風呂場へと向かうミソラ。そして風呂に入って湯舟に浸かっているミソラが思った。あかねから言われたキスという言葉が曲のリピート再生のように絶え間なくミソラの頭に響いていた。

「もしかしたら、1番の敵ってお母さんかな？」

『少なくとも、それに近いわね』

突然、ハープがウィザードオンして壁をすり抜けて入ってきた。

「わっ！ハープか、ビックリさせないでよ」

『ごめんね、ミソラ』

『スバル君のお母さんはあなたたちにとって、最強の敵かもね』

「全くだよ。あの人は無敵だよ…」

二人の短い会話を終えたその後、ハープはウィザードオフし、湯舟から上がったミソラは体と頭を洗って、再び湯舟に浸かった。お風呂からあがり、バスタオルで体を拭き、着替えをして、ドライヤーで髪を乾かした。

「はぁ〜スッキリした♪」

そういつてミソラは鼻歌交じりにスバルの部屋へ向かう。

「そういえば宿題をやらなきゃ・・・」

そういつて、ミソラは右手にシャーペンを持って学校の先生から出された提出課題に手を付けて机に向かう。

「えっと、算数だよね・・・」

ミソラは宿題を解きはじめた。三十分が経過した後、ミソラは無事宿題を終えた。

「終わった〜」

ミソラは腕を伸ばす。自分にお疲れ様という檄を渡す。

『お疲れ様。ミソラ』

「うん。さて明日の準備をして寝ようかな」

そう言ってミソラは宿題と筆記道具を入れた。

「・・・よし、準備完了」

ミソラはスバルのベッドに向かって電気を消した布団の中に入った。

「お休み、ハープ」

『お休み、ミソラ』

こうして一日が終わった。

そして翌日。朝日がスバルの部屋を照らし、その朝の陽光でミソラは目覚める。今日もいい空だと思うミソラ。

「ふぁーあ、おはよう、ハープ」

『おはよう、ミソラ』

着替えてリビングに行こうとした。また彼・・・スバルが寝ていると勘違いしてしまった。

「私ったら、また同じことを…」

『それほど、スバル君の事を思っているのね』

「えへへ、地球を救ったヒーロー、スバル君が私の恋人なんて凄いいことじゃない」

『それもそうだね』

着替えが終わり、ミソラは階段を伝って一階に来た。一階の台所から調理していたいい匂いが階段まで伝ってきた。

「おはよう、ミソラ」

あかねがミソラに向かって挨拶してきた。大吾の姿は無かった。どうやら仕事で早く出勤したらしい。

ミソラは朝食を食べ始めた。そして朝食を食べ終わり、歯磨き、洗顔、髪の毛のセットをした。その後、星河家のリビングにインターホンが鳴り響く。その音を聞いてインターホンを押した人がミソラには既に分かっていた。

「行ってきましたーす！」

ミソラは声高らかに家を出て行った。

「行ってらっしゃい」

ミソラは靴を履いて玄関をでた。

「おはよう、皆！」

ミソラは笑顔で挨拶した。だが皆の顔は固かった。

「皆、スバル君の意識が戻ったから安心して」

「」「」「本当！？」「」

皆の声が綺麗に揃う。

「だから今日の帰りにお見舞いに行こう」

「分かったわ、放課後集合ね」

そう短い会話を終えて五人は学校へと歩いていった。

学校に着き、いつもの授業をうけてそして放課後の時間があつという間に来る。

「スバル君のお見舞いに行くわよ」

ルナが五人を制した。他の皆はルナの言葉に頷いては病院へと向かって歩いた。その一方、病院ではスバルが物凄く暇そうにしていた。

「はあ、ただベッドの上にいるってすごい暇だな……」

スバルは溜息交じりに言う。病室の窓を見て、外の風景を見て、外の優しい風を浴びたいと感じているスバル。

『仕方ないさ、今は我慢しろ』

「そうだね……」

そういつてスバルは窓の外を再び見つめる。

「ス〜バ〜ル〜君〜!」

何者かが、声を上げて部屋に入ってきた。無論、ミソラだ。ミソラはスバルの病室に入ってスバルの点滴をされてない左腕に抱き着いた。次々に人が入ってくる。もちろんある一人の人は殺気という殺意を持ったオーラを辺りに放出し、周りにいる一部を除くものに恐怖感を抱かせる。

「僕達の前で遠慮なしですね。スバル君、ミソラちゃん」

キザマロが言う。だがその言葉の裏にはちょっとした羨ましさがあった。

「お似合いだからいいんじゃない？」

ツカサが言う。実際の所、スバルと同じクラスの人たちはお似合いだといってくれている。

「「それもそうだね」」

ゴンタとキザマロの意見が一致する。隣ではルナがドス黒いオーラを放出しつづけていた。彼女にしか理解できない全身に纏わりつく負のオーラ。スバルは恐怖感と絶望感を持ってしまう。

「「「うわっ!!」」」

隣でさらに異常な殺気を感じたツカサ達は少し後ずさりした。そして気を取り戻してスバルに体調の事について聞いてみようとする。

「スバル君、体は大丈夫?」

スバルに普通の質問してくるがルナの負のオーラは消えない。

「う、うん。平気だよ。明日には退院予定だから」

「そう、よかったわね」

「私、家庭の用事があるから先に帰るわ」

そういつてルナはスバルの病室をでた。その後、大きな何かが叩き付けられる音が聞こえたという。そしてルナが病室から消えたことにより、ミソラを除く他の四人はとりあえず一息つく。相変わらずミソラは平然としたまま、スバルの腕に抱き着いていた。

「なんでミソラちゃんとスバル君のことになるとあんなに怒るんでしょうかね?」

「さあ?」



『女ってよく分かんねえなあ』

『全くだぜ』

ウォーロックの意見にジェミニが同意する。そして一致したと同時に大きなため息をつく。

「では、僕達はそろそろ帰りますね。また明日、スバル君」

キザマロ達がスバルに向かって別れの挨拶する。

「うん、バイバイ」

皆は病室をでて行った。まだ病室に残っているのは、ミソラだけだ。

「ねえ、ミソラちゃん。いつになったら解放してくれるの？」

ミソラはずっと左腕に抱き着いたままだった。

「え〜、別にいいじゃん♪付き合っているんだから」

「それはそうだけど・・・うわっ！」

ミソラは突然、スバルの左腕ではなく体に抱き着いてきた。

「ミ、ミ、ミソラちゃん!？」

スバルは顔を赤くする。と共に心臓が早鐘を打って血の血流を早くする。スバルはミソラの羞恥心のない行動に心がとても乱れていた。

「スバル君といると心が落ち着くの……。だから、このままにさせて……」

「ミソラちゃん……」

ミソラはスバルの体に頭を優しく寄せた。スバルは少しずつだがミソラのあまえん坊な行動に身をゆだねていく。ミソラの大胆不敵な行動にスバルは自我破壊直前でミソラは含み笑いをしていた。

「スバル君……の心臓の鼓動が聞こえる。大きいよ。私の事が本当に好きなんだね」

そんなことを言われたスバルはますます心臓の鼓動が早くなった。

「アハハッ、鼓動が早くなったよスバル君♪」

（うっ……。なんだか今日のミソラちゃんは一味違う!!）

次々と行動していくミソラにスバルは対策が思い付かなかった。

（スバル君……。完全にミソラの手の上で遊ばされてるわ……）

（スバル……。頑張れ）

ウォーロックとハープが手の上で遊ばれているスバルの姿を見て

残念そうに思った。

「じゃあ、私そろそろ帰るね」

「バイバイ、ミソラちゃん」

「また明日、スバル君」

さんざんスバルを自分の手駒のように扱って楽しかったミソラ。こうして、一日が終わった。明日はスバルが退院する日。ミソラは嬉しくて、自宅に向かって走って帰って行った。

## Trail 15 謎が謎を呼ぶ

その頃WAXAではある会議が行われていた。会議室にはショーケースの中に不思議な雰囲気が漂う謎の物体があった。それを取りかこむようにしてみるWAXA一同。

「一体この破片はなんですか？ヨイリー博士」

破片とはロックマンがデリストと戦って、背中の装備を破壊した時に飛び散った破片だ。暁達はその破片を回収していたのだ。そして解析結果が近日出たためこうして会議をしていた。そして大吾と暁が質問してくる。

「これは周囲のノイズを吸収して、自分の力にするアビリティね」

WAXAの技術開発担当者、ヨイリー博士がそういった。

「エースPGMと似た感じですね」

暁がそう言う。

「そうよ。だがエースPGMはノイズ耐性を上げる装備。この装備はノイズを力とするアビリティ」

「なるほど」

「さらに、ノイズを500%吸収すると、装備主に何かが起きるらしいわ」

「それは一体？」

暁と大吾の声が重なる。そしてヨイリー博士の次の言葉に二人は固唾を飲んで喉を小さく鳴らして興味津々にしていた。

「まだ分からないわ。解析していったらよく分かるかも」

「そうですか、ありがとうございます」

そう簡単に答えが出るわけないかという顔をしていた二人。

「では、俺はそろそろ帰るな」

「また明日な、大吾」

「さようなら、大吾さん」

ヨイリー博士と暁が大吾に挨拶をした。

「帰りに病院にでも寄っていくかな」

大吾は小さな独り言を言いながら息子が入院している病院へと向かった。その頃病院では一人の入院している少年が窓から見える下の風景をみながらそういった。

「はあ、暇だなあ・・・」

スバルがため息を漏らす。これで何回目だろうか、と思ったスバル。溜息をすれば幸せが逃げてしまうといわれてしまうが、自分がこんな状態だったらもはや関係ないと思っていたスバル。

『またそれかよ……』

ウォーロックが呆れたように呟く。

「だって、一日中ベッドの上にいるんだよ。何も出来ないって凄く暇じゃないか」

『確かにそうだが……』

「じゃあ、ウォーロックは僕みたいな入院してる立場になってみ？ 凄く暇だから」

ウォーロックはスバルと同じ病室のベットの上でずっと寝ている自分の姿を想像した。

『俺には、到底無理だな……』

「誰だってそうだよ……」

その時、ドアを横にスライドする音がする。誰かが部屋に入ってきたようだ。それは大吾だった。大吾は椅子に座り、スバルに話しかけた。

「スバル、身体の調子はどうだ？」

「順調に回復してるよ。先生の話だと、明日の昼には退院できると」

「そうか。・スバル、お前が退院して何日か落ち着いたら、ツカサ君達を連れてWAXAに来てくれ」

「う、うん。分かったよ。でもなんで？」

「WAXAで謎の組織に抵抗する、対策本部を設置したんだ。そこでお前らはメンバーとして選ばれたんだ」

スバルはその言葉を聞いてやはり戦いが始まるのかという顔をして生唾を飲み込む。

「分かった。じゃあ後でツカサ君達を連れてくるね」

「ああ、頼む。じゃあ俺はそろそろ帰るな。じゃあなスバル」

「バイバイ、父さん」

大吾は病室をでて行った。

「また戦いが起こるのか……。ウォーロック、頑張ろうか」

『ああ、そうだな』

二人は窓の風景を見ながらそういった。時計は9時をさしていた。

「お休み、ウォーロック」

『ああ』

スバルは病室の部屋の電気を消して、ウォーロックはウィザード

オフして二人は寝たのであった。

一方、スバル家ではこんな物語が。

「一人だと暇だな」

リビングにいるミソラが呟いた。

『明日、スバル君が退院するんだからいいじゃない』

「それもそうだけどさ、本当に暇だよ。話し相手がないし」

「あら、私がいるじゃない」

あかねがミソラにそう言った。

（でたわ、ミソラの最大の敵！！）

ハープはつつこんでいた。そうミソラの最大の敵、それがあかね。鋭い観察力とキレのある一言で確実に追い詰めていくいわばハンターだ。ミソラの前に颯爽登場したあかねを見たミソラは即、逃げた。

「・・・私、お風呂に入ってくるね」

「そうなの、分かったわ」

（逃げられたわね、警戒してるわミソラ）

（危ない、なんとか逃げたわ）



ミソラとあかねはそれぞれ思っていた。

「ふう〜なんとか逃れたわ」

現在、ミソラは入浴中だ。そばには相棒の姿も見える。

『危なかったわね』

「そうだね」

ミソラは間一髪、最大の強敵から回避したことにより冷や汗をたくさんかいていた。そしてミソラが風呂から上がって来て、着替えやドライヤーで髪を乾かしてスバルの部屋に入った。

「さて、宿題やるかな」

ミソラはシャープペンシルを右手に机に向かった。うんうんと呻ってどうにか宿題を終えることが出来た。

「宿題終わった〜。さて明日の準備をするかな」

ミソラは道具を入れ替えた。

「お休み、ハープ」

『お休み、ミソラ』

二人は寝たのであった。明日はスバルが退院する日。ミソラは明日が楽しみで仕方なかった。

## Trail | 16 退院

前の日と同じように、夜が明けて東から太陽が少しずつ上ってきていた。凶も彼らのいつも通りの一日が始まる。スバルの部屋に窓越しに一筋の朝の光が差し込んだ。

「・・・ふぁ・・・♡おはようハープ」

『おはよう、ミソラ』

二人は朝の挨拶を交わす。ミソラは彼が退院することにより活性化していた。

「今日はスバル君が退院する日だね」

ミソラはこの日を待ち望んでいた言い方をする。

『フフッ、そうだね』

「なんで笑うの、ハープ？」

『だってあなたの言い方が凄くこの日を待ち望んでいた言い方よ』

「え!？」

ミソラは相棒からの予想外の一言により、思わずミソラは女の子らしく顔を両手で隠し、顔を赤らめる。

『あなたも結構、表にでるのね』

「もう！朝からかわないでよ、ハープ！」

『はい』

ミソラは着替えをしてリビングに向かった。

「おはよう、お母さん、お父さん」

「「おはよう、ミソラ」」

自分が朝の挨拶をしたら二人が挨拶を返してきた。これが星河家のいつもの朝だ。朝食はパンだった。ミソラはそれを食べて、学校へ行く支度をした。支度終了した後、いつもの仲間が自宅に向かってくる。

ミソラが準備を終えてそろそろかという確信した瞬間に星河家のリビングにインターホンが鳴り響く。

「行ってきました！」

「「行ってらっしゃい」」

ミソラは軽快に玄関を出た。

「あのミソラの笑顔。よっぽど嬉しいのね、スバルが退院するのが」

「そうみたいだな」

大吾とあかねは軽快に家を出ていくミソラを笑顔で見守っていた。

「おはよう、皆！」

自宅の玄関を抜けて、皆と合流したミソラは笑顔で挨拶する。

「」「おはよう、ミソラちゃん」「」

いつもの仲間が挨拶を返す。

「今日はスバル君が退院する日だね！」

ミソラはこの日を待ち望んでいたかのような言い方をする。彼女にとって彼は自分の将来を変えてさらに自分を変革させてくれた大切な人。彼が返ってくるという喜びはひとしおだろう。

「うん。そうね！」

ルナが明るい雰囲気で返す。

「スバル君に会うのが、なんか楽しみだな」

ツカサがそう言った。

「俺も楽しみだぜ」

ゴンタがツカサの思っていることを同じように言った。全員がスバルに合うのが久々のように感じ取られている。

「さ、ここで話していたら、遅れちゃうわ。学校へ行きましょう」

そういつて五人は学校へ歩いていった。コダマ小学校に五人は着き、皆と話していた。

「よし皆、席につけ。HRを始めるぞ」

皆は席に着いた。

「吉報だ。明日には星河が来れるらしいぞ」

「「そうなの!？」」

クラスに歓喜の声が上がる。ミソラはもちろん笑顔でいた。彼女の顔にいつもの天真爛漫な彼女の顔が帰って来ていた。

「ミソラちゃん、良かったね」

近くの女子達が話しかけてくる。

「う、うん」

どうやら、その女子達はスバルとミソラを恋人と目視しているようだ。そしてHRが終わり、授業が開始された。

「皆、教科書の20Pを開け」

そして、いつも通りの授業が開始された。ミソラはスバルに会いたいという思いに胸を膨らませていた。

一方、病院ではスバルはまだ眠りの世界に彷徨っていた。

「Z z . . . .」

小さな寝息を立てながら眠っている。時計は昼十時を指すころだ。

『まだ寝ていやがる . . . 。朝早く起きないからって、好き勝手してるな』

『まあいいか、ほうつといてやるか』

誰かが部屋に入ってきて、スバルの横に来た。

「スバル！起きなさい！」

突然の母親の声。そして直後に大きな声を張り上げたためウォーロックは不覚にも驚いてしまう。

「Z z . . . .」

だが目覚める雰囲気はない。我が息子ながら中々手ごわいと思っただあかね。

『オフクロ . . . .こいつはまだ起きる雰囲気ないぜ』

「なの？　まったくスバル起きなさい！」

こうして、少々強引だがスバルを起こした。

「う、うゝん？　か、母さん？」

「起きなさいよ。スバル、今日の昼頃に退院するの忘れてないよね」

「う、うん」

「だったら、早く荷物の片付けとかしなさい。母さんも手伝うから」

「はい」

スバルは朝食を食べて、歯磨き、洗顔して部屋の片付けをあかねと共にした。

「今日、帰ったら家族皆でスバルの退院祝いするからね」

あかねがスバルに伝えた。

「な、なんで？」

「スバルとミソラのためよ」

「……」

（母さん、絶対僕達を足蹴にしてるよ…）

（スバルも大変だな）

スバルは少々テンションが下がっていた。あかねは夜にふたりをどう料理しようかという悪質な考えをしていた。

そして二時間後が経過する。時計は正午近くになっていた。

「部屋の片付けも終わったし、後は退院手続きをするだけかな」

あかねはホールに向かい、手続きを受けに行った。

『スバル、お前も大変だな』

「ウォーロック、君もね」

お互いはため息をついた。それはスバルはミソラを考えない行動をして自分に飛び火がくること。ウォーロックは何もしていないのに死に至る攻撃を喰らってしまう事。そんなことを考えていたら退院手続きを終えたあかねが部屋に入ってきた。

「さあ、そろそろ行くわよ」

「うん」

スバルは病室を出て、治療してもらった先生に挨拶を言って病院を後にした。そして歩いて何十分が経過し、ようやく自分の拠点に辿り着いた。

「なんか久しぶりの自宅だな」

『俺もそう感じるぜ』

「ただいま」

スバルとあかねが玄関を通り、スバルは久々の自宅に入っているいつもの部屋の雰囲気、そしてこの空気。ようやく帰ってこれたんだという実感がわいてくる。



「さて久しぶりの部屋にでもいくかな」

スバルは自分の部屋に向かった。

「変わってないな」

『当たり前だろ。自分の部屋だから』

部屋の隅っこに置いてある布団に使われた形跡は無かった。これを見てスバルは一つの心境を抱く。

「ミソラちゃん・・僕のベッドで寝たみたいだね」

スバルはミソラに寂しい思いをさせてしまったなと思っていた。

一方、コダマ小学校では放課後の時間帯が来ていた。帰りのHRが終わり、放課後が来た。

「私、先に帰るね。バイバイ」

ミソラがルナ達に伝えた。

「「バイバイ、ミソラちゃん。また明日」」

何人かから、挨拶が返ってきた。ミソラは急ぎ足で玄関に向かい、校門を出た。

「ハープ？電波変換いいかな？」

『ええ、いいわよ』

「トランスコード004 ハープノート!」

電波変換したハープノートがウェーブロードに乗って、星河家と移動し始めた。

「待っててよ、私のスバル君!」

(私ってつけたよ、ミソラ・・・)

私物扱いしているミソラにハープが啞然していた。そんな扱いされているスバルの背中に寒気が走った。

「・・・うっ!」

スバルは寒気がした。

『どうしたスバル?』

「一瞬、背筋がゾクっとして」

『なんだそりゃ』

ウォーロックは呆れていた。

「ただいま!」

明るい声がした。その声はミソラだった。まさか背筋がゾツとしたのは彼女が原因かとスバルは心の中でそう思っている。

「スバル君くっ!!」

ミソラはスバルに一直線に向かって来た。

「う、うわ、ミソラちゃん!？」

ソファに座っていたスバルに抱き着いた。勢いよく抱き着かれたためもつれこむようにソファの上でスナルはミソラの下敷きになる。自分の体の上ののしかかっているミソラの顔をかなり至近距離で見たスバルは顔を赤くした。

「お帰りなさいくスバル君♪」

(よかったわねミソラ)

あかねは暖かい目で見守っていた。

「うん。ただいまミソラちゃん」

「学校とかどう？」

「いつも通りだよ。スバル君がいないことでクラスの雰囲気は暗かったけどね」

その後も二人はスバルがいない学校のことを話していた。無論、ミソラに下敷きにされながら。

「……があっただよ」

「ふうん」

「……ねえ、ミソラちゃん。そろそろ離れてくれないかな？ 苦しいよ……」

顔を赤くしながら言った。自分の体の上にミソラがのしかかっているからだ。

「えー、まだいいじゃん♪私に寂しい思いをさせたからもう少し抱き着かせて♪」

「わ、分かった」

スバルはミソラに勝てなかった。

（スバル、普通にストレート負けか……）

ウォーロックは思っていた。

「ミソラ、料理作るの手伝ってくれないかな？」

あかねがミソラに頼んできた。

「いいよ」

「スバル君は部屋にいてね♪」

「分かったよ」

そういつてスバルは部屋に向かって、晩御飯まで待機していた。そして時間が経過し晩御飯の時間帯が来る。

「スバル君、ごはんだよ」

「はい」

スバルはリビングに向かった。

「うわっ、なんだこの量は!？」

テーブルにはたくさん料理が並べられていた。そしてタイミン  
グよく大吾も帰ってきた。

「大吾さん、お帰りなさい。ご飯ですから、手洗って席についてね」

「ああ、分かった」

皆が席に着いた。

「「「スバル（君）、退院おめでとう」」」

三人が話しかけてきた。

「ありがとう、皆!!!」

「「「いただきます」」」

こうして、家族四人の食事が再び始まった。

## Trail | 17 それぞれの想い

スバルが退院して一日が過ぎた。退院したその日、家族全員は大盛り上がりした。そして再び彼らのいつもの日々が始まる。東から日が上り、辺りを明るくしていく。スバルの部屋に窓越しに光が差し込んだ。その朝日を浴びた少女は覚醒の時を迎えた。

「・・・ふあゝあ」

少女が朝の光で目覚めた。それはミソラだ。ミソラは布団から出て右手で目を擦りながら時計を見る。

「うゝん、7時18分か・・・」

「とりあえず、スバル君を起こそうっと」

ミソラは一緒にベッドに寝たスバルを起こそうとした。何故、二人がまた一緒に寝たか読者の想像にお任せします。

「スバル君！朝だよ、起きなよ」

ミソラはスバルを起こす。だが目覚める雰囲気はない。彼はまだ完全に眠りの世界に潜り込んでいた。

「ZZ・・・」

『ミソラ、おはよう。スバル君、起きないね』

「ハープ、おはよう。スバル君起きないな・・・どうしよう・・・」

ミソラは困っていた。

「そうだ！」

ミソラは閃いたようだ。そして怪しい笑みを顔いっぱいに広げた。そしてスバルの鼻をつまんで、右の頬にキスをした。

「~~~~~!!」

スバルは驚いて目覚めた。

「なんで朝から、頬にキス!？」

スバルは顔を赤くして、質問した。自分の心臓がかなりの早鐘を打っている。もう朝から何が何だか理解できなかった。

「だって起きないんだもん」

「そうだったんだ・・・」

スバルは納得した。でもそれだけで大胆な行動にでるかと思っていたスバル。

「さ、朝ご飯食べにいこ♪」

ミソラは上機嫌で言った。スバルは若干萎えている。

『スバル、朝から大変だな』

ウォーロックがスバルの耳元で言う。

「うん……。けどミソラちゃんだって悪気があってやった訳じゃないし……」

『まあ、俺には関係ないから頑張るこったな』

「……そうだね」

ウォーロックはウィザードオフした。ウィザードオフして自分のハンターV.Gに戻るウォーロックを見てスバルは自分の不幸さに溜息をつく。そして二人は一階に降りてあかねと大吾に朝の挨拶をした。

「「おはよう、スバル、ミソラ」」

時間差で挨拶してきた。

「おはよう、母さん、父さん」

「おはよう、お母さん、お父さん」

スバルとミソラは挨拶を返した。二人が椅子に座り、朝の朝食の挨拶をする。

「「いただきます」」

箸を片手に朝食を食べはじめた。

「俺はそろそろ仕事に行ってくるな」



「行ってらっしゃい、大吾さん」

「気をつけて、父さん」

「行ってらっしゃい、お父さん」

夫婦の短い会話を見て、そして三人が家を出てWAXAに出勤に行く大吾に言葉を送った。

「あなたたち、早く食べなさい。ルナちゃん達が来るわよ」

「はーい」

二人は朝食を食べ終えて、歯磨き、洗顔、着替え、髪をとかした。そして昨日のうちにもってくる道具を詰め込んだ荷物を持ってきた。そしてインターホンがリビングに鳴り響く。何も言わずとも誰なのかが一瞬で理解してしまった。

「さっ、スバル君行こう」

ミソラがスバルを制した。

「分かったよ」

「行ってらっしゃい、スバル、ミソラ」

「行ってきまーす」

二人は玄関を出て、ルナ達に朝の挨拶をした。

「おはよう、そしてただいま皆!!」

「「「お帰り、スバル（君）！」」「」」

ルナ達がスバルに挨拶をした。

「スバル君、体は大丈夫？」

ルナがスバルの身体の調子について尋ねた。

「うん。この通り、すっかり良くなったよ」

「よかった。さ、学校に行きましょうか」

こうして6人は学校に歩いて行った。朝の楽しい会話をしていたらあっという間にコダマ小学校の教室に辿り着いた。いつもの教室なのに緊張が走るスバル。そしてスバルは友達と共に教室の中へと入る。

「あっ、スバル君だ」

「スバル、お帰り」

クラスの男子と女子がスバルに話しかけてきた。

「よう、スバル。身体は大丈夫か」

ジャックがスバルに話しかけてきた。

「大丈夫だよ。ジャックが僕の心配をするなんて、何かあったの？」

「そ、それは同じ仲間だからだろ」

ジャックは視線をそらしながらスバルに言った。それを見ていたウォーロックは一つの心境を抱く。

（こいつもわかりやすい奴だな）

ウォーロックがそう思っていた。

一方ミソラ側ではクラスの女子による茶化しの話で盛り上がっていた。

「ミソラちゃん、よかったね。愛しの彼氏が帰ってきて」

女子がミソラを少し茶化しながら言った。

「う、うん。よかったよスバル君が元気になって戻ってきて」

ミソラが顔を赤くしながら言った。純粹にそう思っていた。本当に戻ってきてよかったと実感しているミソラ。

「ミソラちゃん、顔が赤くなったよ。本当に好きなんだね」

「二人はとおもお似合いだもんね」

「結婚したいとか思ったりする？」

クラスのほとんどの女子が集まってるなかで一人の女子が凄い発言した。そして女子の周囲に沈黙の静寂が走る。

「け、結婚！？・・・考えたことないなあ」

ミソラがかなり顔を真っ赤にして言った。そして彼女の頭の中でかなり愉快な妄想が始まってしまう。彼女がどんどん顔を真っ赤にさせていく。何を妄想しているのかが気になった女子一同。

そして結婚すると聞かれて驚くのは当たり前だろう。まだ11〜12歳であり、結婚ということを考える年頃ではないからだ。

「分からない・・・」

「そりゃそうだよね」

再びスバル側では回りにクラスのほとんどの男子が集まっていた。

「スバル、お前がいない間、ミソラちゃんが暗かったぞ」

「そうなんだ・・・ミソラちゃんに心配させちゃったな」

「けどお前が戻ってきてミソラちゃんに笑顔が戻ってきたぜ」

そういつて、スバル達はミソラを見る。彼女の屈託のない笑顔。彼女の顔にいつもの明るさが戻っていた。

「お前がミソラちゃんを守ってやらなきゃダメだぜ」

「まったく、スバルが羨ましいぜ。大人気アイドルと付き合えるなんて」

「付き合っていることを日本の国民に知られたどうなるか…」

「間違いなく、大騒動ですね」

キザマロが言う。だがこれがばれたら日本で戦争が起きてしまうかもしれないというこちら側でもスバルが愉快な空想を広げていたスバル。

「でも似合ってるぜ、大人気アイドルと地球を救ったヒーローが恋人なんて」

「そ、そう？」

スバルが言った。

「結婚する気とかある？」

こっちでも爆弾発言した男子がいた。

「えっ！！・・・考えたことないや・・・」

スバルが顔を赤くしながら言った。

「そりゃそうだよな」

（僕とミソラちゃんが結婚・・・未来はどうなるか分からないから

いいや)

スバルはこの考えからすぐに断ち切った。そしてキーンコーンカーンと校内中にチャイムが鳴り響く。

「皆、席に着け」

先生が片手に出席表を持って教室に入ってきた。

「星河が戻ってきて、全員揃ったな。よし朝のHR始めるぞ」

こうして、いつも通りの学校生活が始まった。

## Trail 18 自分に対する後悔

スバルが退院して、何日かが過ぎた。そして今日は土曜日。学校は休日でそれぞれが楽しい日を過ごしているが一部の人はそんな休日に骨休めをしている暇はなかった。電波変換できるスバル、ミソラ、ゴンタ、ツカサ、ジャックはWAXAに向かっていた。

「一体、なんのためにWAXAに向かうんだ？」

ジャックがスバルに質問した。

「多分、謎の組織に対抗する遊撃隊を再結成するためじゃない？」

「なるほど。どおりで今ここにいる奴らは全員が電波変換できるわけだ」

ジャックは周りのメンバーを納得した。共通点は全員が電波変換できること。

「久々にWAXAに来るぜ」

「僕は初めてかな」

ゴンタとツカサが言った。ゴン太は懐かしい目で大きいWAXAを見つめていてツカサは子供の様に天真爛漫な目でWAXAを見ていた。

「WAXAの設備は凄いよ。ツカサ君」

「へーそうなんだ。楽しみだな」

一人だけ男達の会話に入れなかった少女がいた。そんな状況にミソラは深い溜息をつく。

（はぁ・・・会話に入れないわ・・・）

（いいじゃない。たまにはスバル君達だけで楽しく話をさせてあげたら？）

（それもそうだね。スバル君と話す機会なんてたくさんあるし）

ミソラは暖かい目でスバル達の会話を見ていた。いつの間にか彼の周りには友達がたくさんできている。昔の彼と比べたら大違いだなとミソラはそう思っていた。

「そういえば、スバルの親父さんはWAXAで仕事しているんだよね？」

ジャックが質問してきた。

「うん。そうだよ」

「スバルの父さん、どんな雰囲気だろな」

「僕もそれが気になるな。顔と挨拶してるところしか見たことないし」

「僕はとても尊敬できるよ。家族を何よりも思っている人」



スバルにとって大吾は尊敬できるには足りなすぎるとても誇りになるまさに自分の目標にしている男だった。優しさがあ、時には厳しく、何よりも家族の事を思っているいい大人だ。

「へえ、そうか。お前とどれくらい違うのか楽しみだぜ」

「ひ、酷いよ・・・」

スバルとジャックとツカサは話していた。だがスバルの脳裏にある大切な人の悲しい過去が頭をすぎる。それはミソラだ。ミソラには両親がいない。何年前にミソラの大切な人は帰らぬ人となってしまった。スバルは隣にいるミソラの方を向く。視界に入ったミソラの姿はほんの少し暗かった。スバルと目が合ったミソラは口を開いた。

「大丈夫だよ、スバル君。私はいつまでも過去を思いだして悲しんではダメ。今は未来を向かなきゃ」

「ごめんねミソラちゃん」

「いいの。スバル君との出会いがなければ今の私はいない。暗く閉ざしていた心に光をさしてくれたのは、あなたなのスバル君。本当の両親ではないけど、今の私には大切なお父さん、お母さんがいる。だから気にしないでスバル君」

ミソラは作り笑いを広げていた。

「うん」

「もう私には大切な家族がいる。皆のおかげで家族の暖かさをまた

感じることができたの。これからも少しずつ大切な時間を取り戻していきたいんだ」

「分かった、困ったこととかあったら遠慮なく言ってね。同じ家族だから」

「ありがと、スバル君」

ミソラは笑顔でスバルに返した。けど、ミソラの明るき表情の裏には暗い表情もスバルには目に見えていた。それを見たスバルは自分に対して怒りと憎しみがでていた。こんなに自分を憎んだことがなかった。自分の父が無事生還して、祝福が訪れた。けど彼女の親は戻って来てないのだ。いや戻ってこれない。その後、スバルはミソラの手を優しく握って、安心させてあげた。

（スバルくん……ごめんね。気遣わせちゃって）

ミソラはスバルからの優しい気遣いに心が落ち着いていた。

「やっと着いた」

スバルは体を伸ばした。

「へえ、これがWAXAか」

ツカサが魅了されていた。見たことのない設備が次々と自分の目の中に飛び込んでくる。さて中に入ろうか。そして五人は中に入って行った。

「よう、お前ら久しぶりだな」

その声の先には片手にうまい棒を持って、食べていた男がいた。  
WAXAの入口で佇んでいるあの男が帰ってきていた。

「「「あ、暁さん!？」」」

スバル、ミソラ、ゴンタが暁の姿を見て思わず目を丸くし、さらに驚きの声を出す。

「な、なんで？」

三人はずっと目を丸くしていた。

「メテオG事件の後、どうにか帰ってこれたんだ。お前の声が聞こえてな。ここで死ぬわけには早いだろってね。ったくお前の言葉は魔法か？お前の励ましの言葉を聞いたら不思議と体が立ち上がったな。そしてどうにか戻ってこれたとなるんだ・・・」

「そうなんですか。よかった暁さんが戻ってきて」

スバルが安堵の声を出す。

「何たって俺はヒーローだからな」

暁は誇らしげに言った。直後、WAXAの入口に究極の沈黙が走る。対応の仕方に困る。五人は目配せをしながらそれぞれの意見を

持つ。

（（この人、自分でヒーローって言った……………））

ジャックとツカサはそう思っていた。

「とりあえずこっちに来てくれ」

五人は暁の後をついて行った。会議をする部屋に入った。部屋の中には机と椅子、そしてプロジェクターを使用するであろう機械もあった。

「さて、お前らが呼ばれたわけが分かるよな」

「はい。もう一度、遊撃隊の再結成ですよな」

「ああ、そうだ。今、謎の組織が動いてきている。現在の所、目立った動きは確認されてない」

「暁さん、奴らの目的は一体…」

ミソラが聞いてきた。

「それは分からない。なんにしろ、この地球が関わっていることは  
確実だろうな」

『それでも、全部倒すだけだぜ!!』

ウォーロックが腕を振り回しながら言った。そして暁の相棒がウォーロックの前へと突然現れこんな言葉を言う。

『相変わらず荒っぽいですねウォーロック』

『こ、この声は!?!』

声の主がウィザードオンしてきた。

『久しぶりですねウォーロック』

『ア、アシッド、生きていたのか!』

『私はあれぐらいでくたばりませんからね』

『そ、そうか』

(こいつは苦手だからこれ以上はやめとくか)

ウォーロックはおとなしく引き下がった。口喧嘩ではどうしても勝てない。天才的な頭脳と知略できつと口喧嘩したらきつと完膚無きまでに叩きのめされるだろう。

『俺が言いたいのは、それだけだ』

『俺が?』

『まだあるんですか? 暁さん』

スバルとミソラが質問した。

『察しがいいな二人共。さすが付き合っているお前らだぜ』

「「えっ!?!」」

二人の声が綺麗に重なる。そして何故、つきあってるのかがばれたことまで思考が止まる。

「お前らの親父さんから聞いたぜ」

（父さん、なんてことを・・・）

（お父さん、なんで・・・）

スバルとミソラは硬直する。なんでこの親は口が軽いんだという心境を抱く。

「お幸せにな」

スバルとミソラが同時に顔を赤くした。そして視線をそらし始める二人。

「関係ない話はそこまでにしようぜ、暁」

部屋に大吾とヨイリー博士が入ってきた。スバルとミソラは椅子から立ち上がり、大吾に近づく。

「父さん、なんでミソラちゃんと付き合っているというのをしゃべったの!?!」

「お父さん、なんでスバル君と付き合っていることをしゃべったの!?!」

（（（言葉が揃ってる……）））

四人が思っていた。二人が同じ言葉で大吾に聞いた。

「いや、暁に喋ったらどういう反応するかな〜って」

「だからって暁さんに喋る必要ないでしょ！なんでしかも暁さんの！？」

スバルが喋った言葉に暁は精神的なダメージを負っていた。そして地面に膝を突き、大好きなうまい棒を床に落としてしまう。

（言ってくれるなスバル……。覚えてろよ……）

（（あれがスバル（君）の父さん……スバル（君）と雰囲気がつた〜違う……）

ジャックとツカサがそう思っていた。「さ、雑談はそこまで、もう一つの本題に入るわよ」

ヨイリー博士が、場の空気を仕切った。

「さて、私があなた達に伝えたいことは、この装備のことよ」

ディスプレイに表示された装備を6人は見た。そして六人は同じ疑問を持つ。これはなんなのかという音に。

「これは……僕が戦った時に、相手の背中についていた装備だ……」

スバルがそう喋った。

「そうよ。スバルちゃんがこれを破壊してくれたおかげで、私達はその破片をかき集め、こうして7割復元させたのよ」

「俺はコイツの性能をまだ聞かされてない。解析結果を教えてくださいませんか?」

暁が聞いた。この新装備。謎で謎で知りたくて仕方がなかった暁。

「・・・これはノイズドライヴと呼ばれる装備ね」

「一体、それはどんな機能がついているのでしょうか?」

ミソラが質問した。そして周囲に沈黙が走る。

「これは……周囲のノイズを吸収して、自分のスピードを強化する装備よ。まだ完全解析してないからまだ隠された能力があるかも知れないわよ」

「なるほど…他には?」

暁がまだあるんだろという表情をしながら質問してきた。さすが勘が鋭いという顔をするヨイリー博士。

「鋭いわね、シドウちゃん。ええ、そうよまだ隠された能力がある」

「「それは・・・?」」



スバル、ミソラ、ゴンタが聞いてくる。そしてヨイリー博士の次の言葉に全員が固唾を飲んで喉を鳴らす。ちなみにジャックとツカサは黙って聞いていた。

「周囲のノイズを約500%吸収することにより一時的に発動できる、高濃度ノイズ粒子全面解放システムね」

「「「「な、長い・・・」」」」」

ジャックを除く5人が喋った。

「別名：ノイズオーバードライブね。この機能は吸収したノイズを全面解放することによって、一時的にスペックの約3倍を得られるシステムね」

「「「「さ、三倍!？」」」」」

五人が驚きの声をあげた。自分の戦闘能力が飛躍的に上昇する。こんなうまい話があったといいのかと思う一同。

「だがこれを使った後、大きな反動で能力が一時的にかなり下がるの」

そう、爆発的な力を手に入れば大概、大きなハンデがあるといっても過言ではない。

「まさに諸刃の剣って所ですね」

「ええ、そうよ。使い方によっては有利になったり不利になったり

するわ」

「なるほど……」

「スバルちゃん、あなたのエースPGMを少しの間、貸してくれないかしら？」

「いいですけど、なんですか？」

「バックアップをとるためとノイズドライブと並行させるためよ」

「わかりました」

スバルは自分の愛用してきたエースPGMをヨイリー博士に渡した。

「ノイズドライブが完成したらスバル君…あなたにこのアビリティを托すわ。」

「わかりました、精一杯頑張ります」

「あの、ヨイリー博士」

ミソラはヨイリー博士の近くに来了。

「うん？どうしたんだいミソラちゃん？」

「私にもエースPGMを渡して貰えませんか？」

「いいけど、なんでかしら？」

「スバル君の役に立ちたいんです！」

ミソラは必死に伝えた。自分の思いを。たとえ駄目と言われても引き下がりがたくなかった。あの日の決意、自分は足手まといになりたくないから強くなりたいと誓った。そしてだから今ここで自分専用のエースPGMを作ってほしかったのだ。

「彼氏を守りたいからでしょ？」

ヨイリー博士はミソラにしか聞こえない声で言った。

「・・・はい・・・もしかしたらスバル君は一人だけで無理をしてしまうかもしれないから・・・私がスバル君の役に立って、少しでもスバル君を楽しませてあげたいんです」

「その思い：よく分かったわ。いいわ。あなた専用のノイズ耐性エースPGMを作ってあげるわ」

「ありがとうございます！」

ミソラはヨイリー博士に深々とお辞儀をした。そしてヨイリー博士の優しさに深く感謝するミソラ。

「遊撃隊は再結成したし、何かあれば連絡する。それまで、トレーニングとかしてるといい。それでは、解散！」

「さて、帰ろう皆！」

「待て、スバル」

その声は暁だった。

「少しの間、お前がどれだけ腕をあげたか勝負しないか」

「いいですが、身体は大丈夫ですか？」

「それなら、すっかり完治したさ。おかげで今は長時間の電波変換さえ出来る。ほらお前のエースPGMだ。バトルが終わったら返せよ」

「はい、ではいきましょうか。手加減はしませんよ！」

スバルは暁からエースPGMを受け取った。

「じゃあ、俺は先に外で待ってるぜ」

そう言って暁は先に外へでた。

「「「頑張れ、スバル（君）！！」」」

皆から声援を貰う。

「さて、息子の戦う所、初めて見るな」

大吾は楽しみにしていた。

「よし、暁さんに強くなったって見せつけるぞ！」

スバルは外へ走って行った。ヒーロー対ヒーロー？の対決が再び始まろうとしていた。

## Trail | 19 英雄VS盟友

スバル達がWAXAの外にでてきた。WAXA前の大きな広場に二人は移動してある一定の距離をとる。WAXAの前には二人を歓迎するように風が小さく吹く。

「さて準備はいいか？スバル」

「いつでもいいですよ！暁さん！」

「頑張って、スバル君！」

スバルはミソラから声援を貰う。そして小さな静寂の沈黙が走る。直後、一つの冷たい風が二人の頬に当たり集中させていく。そして二人が同時に右手を上げる。

「トランスコード003 シューティングスター・ロックマン！」

「トランスコード001 アシッドエース！」

二人は同時に電波変換した。お互いが白い光に包まれてそれぞれが電波変換した姿へと変わる。

「「ウェーブバトル！ライド・オン！！」」

「行くよ、ウォーロック！」

『おうよ！』

スバルは自分の最も信頼できる相棒に檄の言葉を送る。そしてそ

の相棒ウォーロックはスバルの檄からに大きな声で返す。それが戦闘開始時のスバルとウォーロックのやり取りだった。相棒に声を返すことで集中できる。スバルは最初の声かけが一番好きだった。

「バトルカード！ブレイクサーベル！」

スバルはバトルカード、ブレイクサーベルという剣の周りに螺旋状に取り巻いている鋼鉄の剣を召喚した。そしてそれを地面と水平面上にする。

「ロックオンソード！」

暁はロックオンソードを右手に召喚して構える。

「「はあああ！！！」」

お互いの声が交錯し、二人が一気に近づき距離がどんどん埋められる。そして剣の範囲内に入ったとき、二人は同時に剣を振り上げる。そしてお互いの剣がぶつかり、辺りに火花を散らす。と同時に空気が揺れてあたりの小石も震える。

「くっ！」

スバルは距離をとる。ブレイクサーベルのほうが威力は戦ったはずなのに自分の腕が痺れていた。暁のロックオンソードのほうが威力が勝ったのだろう。それを見たスバルは固唾を飲んで小さく喉を鳴らす。

「ロックバスター！」

まずは様子見にとスバルの腕から放たれた弾はアシッドに向かっていく。だがこれをアシッドは軽く避けた。続けてロックバスターを撃つが当たらない。

「そんな小手先の技は俺には通用しないぞ!! 今度はこっちからいかせてもらう!」

「バトルカード! パライズステージ!」

ロックマンの周囲がパライズパネルになった。このパネルはこのパネル上で攻撃を受けたものに全身に麻痺を与える追加効果を持っている。

「一体、何をするつもりだ!?!」

スバルは大きな叫び声と共にパライズパネルに氣をとられてしまふ。

「一瞬の隙が戦況を変える……。喰らえオメガレーザー!!」

極太の熱を持ったレーザーが空気を切り裂いてスバルに向かってくる。パライズパネルに氣をとられていたため、反応が遅れた。

「しまっ……。ぐあああ!!」

スバルは反応は遅れて、すぐに体をひねってオメガレーザーの射程範囲から必死に逃れようとしたがオメガレーザーを喰らってしまった。

「くうう……」



さらに追加効果によりスバルの全身が麻痺している。脳が司令してもいう事が効かなかった。

「ロックオンソード！」

暁は距離を埋めてロックオンソードを勢いよく振り上げて剣がうなりをあげながらスバルを斬りつけた。そして斬りつけられたことによりスバルは大きく吹っ飛ばされる。

「・・・やってくれるじゃないですか・・・暁さん・・・」

「どうした？地球を救ったヒーローはもつとできるだろ」

「ええ、そう簡単に僕は諦めませんよ！！ロックバスター！」

二発の弾丸がアシッドに向かうがアシッドは難なく避ける。

「やっぱり当たらないか・・・。だったら！」

「バトルカード！ダブルストーン！」

スバルとアシッドの回りに岩石が複数出現した。自分より大きな岩が出現したため相手の位置がわかりにくくなるがこれは自分にとっても好都合だし、相手にとってもだ。

「なるほど、隠れながら攻撃しようってか？」

「違うね！バトルカード！エアスプレッドX！」

スバルは暁の回りにある岩石に向かって撃った。弾が誘爆し拡散して、アシッドに命中した。

「ぐっ・・・考えたようだな。だが！」

暁は移動し、誘爆の範囲から逃れた。

（それでいいんだよ暁さん！！）

スバルが思っていた。表情には小さな笑みが広がっている。スバルは自分の考えていた作戦に暁はまんまにハマってしまった。暁が移動を停止した。暁の回りには岩石が3つある。

（今だ！）

（こいつの考えてること…まさか！！）

暁はまさかと思い、回りにある岩を見た。直後、自分の頭の危険信号が鳴り響きそしてとっさに回避行動をしようと体をひねって回避する。だが時既に遅し、スバルはもう行動を開始していた。

「バトルカード！ボムライザー！」

「あああああ！！！」

暁の回りの岩が大爆発を起こし、爆発に巻き込まれた。もくもくと煙をたてる。

「どうですか！暁さん！」

スバルが構えながら暁に言葉を送る。突然、煙の中からアシッドが出てきてロックマンに向けて剣を振りかぶった。どうやらムラマサブレードを使用したらしい。剣の形を見てスバルは一瞬で悟った。

「くっ、バトルカード！バリア！」

ガキイン！と大きな音が鳴り響いた。

「確かに今の攻撃パターンは上出来だ！」

「暁さんこそ！」

スバルは両手を前に出し、バリアで耐える。暁はムラマサブレードでスバルのバリアを壊そうとする。

だが攻めている暁の方が状況としては有利だ。危ないと判断したスバルはとたさにバリアを解いて、後退した。

「バトルカード！ディバイドライン！さらにサンダーオブアース！」

何もない床から電気の球団が出てきて、アシッドを追尾しはじめる。

「そんなもの！」

暁はブラスターで打ち消した。さらに暁はソードに変換してロックマンに接近する。

「もらった！」

だがスバルも暁の動きに早く対応する。

「バトルカード！ヘンゲノジュツ！」

スバルは変わり身で後ろに回りこんだ。

「でああああ！」

スバルが大きな叫び声を上げながら剣が尋常じゃない空気を切り裂く音をたてて斬りかかる。

「それを読んでいた！！！」

暁はスバルの行動を読んでいたのか、難なく回避しロックオンソードでスバルを斬りつけたそしてスバルは大きく吹っ飛ばされて岩に叩き付けられスバルはむせてしまう。

「ぐっ・・・」

「まだまだあ！！！」

「バトルカード！ダンシングブレード！」

「であああ！」

暁の左側からブーメランみたいなのが襲いかかるが暁は回避する。

「まだまだあ！」

外れたブーメランが戻ってきて、暁に襲いかかった。予想外だったため完全に喰らった。

「・・・中々やるじゃないか・・・」

暁が喋った。まだまだやれるぞという気持ちで暁はスバルを見ていた。だがその二人の戦闘を見ていたヨイリー博士は二人を突然制した。

「はい。そこまでね」

ヨイリー博士が突然喋った。そして二人の動きが止まる。

「これ以上はダメ。怪我したらどうするの」

「「分かった」」

二人は電波変換を解いた。そしてスバルはヨイリー博士にエースPGMを返却した。その後、スバルの相棒は戦い足りないと一人で暴れていた。そんな暴れているウォーロックを叩き付ける鬼と化したハープ。

「楽しかったぜ、スバル」

「こちらこそ、暁さん」

二人は挨拶をして、そして皆はコダマタウンへ帰って行った。帰り道ではスバル、ミソラ、大吾が自宅へ向かって歩いていた。西には地面へと沈んでいく夕日の姿が見える。

「ねえ、スバル君。明日デートしない？」

ミソラが少し恥ずかしげに言う。視線をそらしてもじもじしながら。

「い、いいけど」

スバルが顔を赤くしながら言った。ミソラの突拍子な言葉にスバルは心臓が早鐘を打つ。

「やった！スバル君、大好きー！」

ミソラはスバルに抱きついてきた。スバルは顔を真っ赤にする。ミソラには彼の前では羞恥心というのがないため抱き着くのにも恥ずかしさはなかった。

「楽しんでこいよ二人共」

大吾が言葉を贈る。明日はスバルとミソラが3度目のデートをする日。ミソラは明日が楽しみで仕方がなかった。

## Trail 20 非常に残念な一日

あくる日の日曜日。二人はいつも通りの朝を向かえた。東から太陽が昇り、空を明るくしていく。

「スバル君、おはよう！」

ミソラが元気よく挨拶した。

「う、うーん？ミソラちゃん、今、何時なの？」

スバルは起きたばかりなので視界がぼやけている。

「六時だよ」

「そう。ZZ……」

スバルは再び、眠りの世界へ誘いこまれていく。もうどうでもいいやという気持ちを抱きながら。

「スバル君！寝な〜い！」

ミソラはスバルの布団を奪いとった。

「ZZZZ……」

それでも寝ている。スバルの睡眠という欲求は誰にも負けないだろう。

「しぶといわね…」

『スバル君、中々やるわね…』

二人が関心していた。そして対策方法を考え始める。

「だったら！」

ミソラは手鏡を持ってきて、朝の光をスバルに向けて反射させた。

「う…」

眩しくて眠りの世界から追放されかけている。とどめに目覚まし時計のベルをスバルの耳元で鳴らした。そしてスバルは不快な気持ちで目覚めた。

「なんて起こしかた・・・」

「スバル君、今日は何の日か知ってるの？」

「え？」

「私とデートする日でしょ！」

「あ……忘れてた」

「もう、スバル君ったら」

（でもそこがスバル君らしいかな）



「さ、早く準備して」

短い会話の後にミソラが急かすようにスバルに言った。

「早くない？まだ6時だよ」

「いーじゃん、別に」

「わ、分かった」

スバルと着替えなどを既に終わっているミソラはリビングに向かった。彼女は早く行きたいお言う気持ちでいっぱいだった。天真爛漫な彼女にとっては気持ちが抑えられないのだろう。

「スバル、ミソラ、おはよう」

「おはよう、母さん」

「おはよう、お母さん」

大吾の姿はない。どうやらかなり早く出勤したようだ。

「二人共、朝早いわね」

「そりゃ、今日スバル君とデートするんだから♪」

ミソラが嬉しそうに言い、スバルの左腕に抱き着いてきた。

「ミ、ミソラちゃん。くっつかないでよ」

スバルは顔を赤くしながら言う。その様子を見ていたあかねは一つの心境を抱く。

（スバルのあの顔、面白いわね）

「二人共、楽しんでらっしゃい。スバル、ミソラをしっかり守ってやるのよ」

「はい」

スバルはそう言って席に着き、朝食を食べはじめた。二人が朝食を終え、歯磨き、洗顔、着替え（スバル）を済ませた後、自宅で待機していた。

「スバル君、スピカモールに行こうよ」

「うん。ミソラちゃんの行きたいところにしなよ」

「ありがと。私、昨日行く場所を決めていたんだ」

さすが恋に燃える年頃の女の子。前日に完璧なスケジュールを決定していた。

「あ、時間だ」

「行こうか、ミソラちゃん」

「うん！」

二人は玄関に向かった。

「二人共、気をつけて行ってらっしゃい」

「行ってきま〜す」

二人はウェーブライナーに乗り、スピカモールに向かった。もちろんミソラは国民的アイドルの為、ばれないように変装をしている。そして、二十分ぐらい経過した後、ようやくスピカモールに到着した。

「着いた〜」

ミソラが体を伸ばす。なぜだかスバルはぐったりしていた。何故、そうなったかはミソラがスバルの抱き着いてきたからだ。そんなスバルはずっと深い溜息をついていた。精神的疲れが限界まで達していた。

「さ、今日は思う存分楽しもうかスバル君」

変装しているミソラがスバルの左腕に抱き着いてきた。

「う、うん」

（なんで、人がいる所で抱き着くの？）

スバルは疑問に思っていた。

『ちょっと、ウォーロック？』

『なんだ？ハープ』

突然ハープが話しかけてきた。

『ちょっとあなたに用事があるわ。いますぐ来なさい！』

『は？なんで？』

『いいから来なさい！！』

ハープは無理矢理スバルのハンターVGに不法侵入しウォーロックを連行する。

『うわっ！助けてくれスバル！く、苦しい・・・』

だが必死の助けの声は何の意味もなかった。ウォーロックはハープに連行され姿を消した。

「・・・行こうか、ミソラちゃん」

「・・・うん」

電波体二人のやり取りを見ていて、何故だか不思議な気持ちになつていた二人だった。

「ねえ・・・スバル君、まずはショッピングに行かない？」

「いいけど・・・」

（まさかこのパターンは！）

（荷物持ちをやらされる可能性が約八割！！）

そう思いながら洋服売り場に二人は向かった。着いたら、ミソラはスバルの左腕から離れ、自分の視界に入ったかわいい服を手にとってみる。

「これもいいなあ。あ、これもかわいい」

ミソラは気にいった服を手にとっていた。

（ミソラちゃん、かわいいな…）

笑顔を出しながら服選びするミソラをスバルは見つめていた。

「スバル君！この服どう？私に似合うかな？」

そういつてミソラは服を自分と合わせてみる。

「うん。とても似合ってるよ」

「ホント！スバル君ありがとう！」

その後もスバルはミソラのショッピングに付き合わされた。そして当然荷物持ちとなる当たり前のパターンになっていた。スバルはかなりなえていた。精神的状況も限界直前。

（やっぱりこうなるのね・・・）

スバルが落ち込んでいた。両手には買った服が入った紙袋が計4

つ。そしてショッピングによる疲労、荷物持ちの疲労、さらに荷物持ちをされた精神面の疲労がスバルにのしかかっていた。そしてハインターV Gが11時を知らせた。スバルはこの後、人生で再びあの苦痛？を味わうことになることをスバルはまだ知らなかった。

## Trail | 21 生死をかける食べ物

運命の時間が刻一刻と近づく。スバルはあんなことが起こることを予測はしていなかった。

「はぁ・・・疲れた・・・」

スバルがベンチに座り、一息つく。精神的疲れが自分の体に見えないものとなって大きく圧し掛かる。一方のミソラは元気だ。スバルを振り回して元気に目を爛漫と輝かせてデートする彼女には疲れなどないのだろう。

（なんで疲れないの？・・・）

スバルは不思議に思っていた。彼女に体力に限界点なんてあるのだろうか。そう考えていたらミソラが笑顔でベンチに座っているスバルに話しかけてきた。

「ねえ、スバル君、なんか食べない？」

「うん、いいよ」

「あっちに美味しいデザート屋があるから食べに行こうよ」

「いいよ」

ミソラはスバルを引っ張って、お店に向かった。スバルはミソラが自分の右腕を引く強さと痛みに堪えながらミソラに仕方なくついていく。もう逃げたいという気持ちしかなかった。だが彼女の前で

悪質な醜態をするわけにはいかなかった。

「ここだよ。雑誌で見ても、評判がいいってよ」

「ふーん。そうなんだ」

二人は甘い香りただようお店の中に入り、席をとり注文しようとした。

「スバル君、何にする？ 私はパフェにするけど。ここのパフェおいしいって評判だよ」

（ここにパフェが売ってんの！？）

スバルはある痛い思い出が込み上げてきた。それはロツポンドーヒルズでミソラと食べた大盛りのパフェである。スバルはあのパフェを食べて、非常にきつい思いをした。もう自分の胃が爆発するという限界点まで達した忌わしい過去とトラウマがスバルの全身をよぎり鳥肌を走らせる。一緒に食べたミソラは平然としていたのだが。

「スバル君もそれにするよね？」

「え……」

スバルは迷ったあげく、何回も躊躇する、だがこの天使のような可愛い笑顔を見てしまつては断ることは不可能だった。そして仕方なく受託する。

「う、うん……」



「よし決まり！」

そういつて店員を呼んでミソラは注文した。

（仕方ない…こうなったら覚悟を決めてやる！！！！）

「お待たせいたしました。当店自慢の大盛りパフェです」

「なんだこの量……！！！」

スバルは叫んでしまった。量はロップンドーヒルズで食べたパフェよりも、ある程度増えたものだった。全体的に多くフルーツや生クリームで盛り合わせた満点のパフェだった。スバルはそれを見て呆然と立ち尽くす。

「わーおいしそー」

ミソラは目を輝かせていた。そして右手にスプーンを持ってパフェのフルーツをとって自分の口へと誘導する。

「いただきまーす」

ミソラは上機嫌でいう。スバルは黙秘しながら、スプーンをとり、パフェを食べようとした。

（この量はまずい！！）

スバルの頭の中の危険信号が鳴り響く。だがスバルはパフェの一部をスプーンでとり、口に運んだ。

「お、おいしい…けどこの量はまずいな……」

ミソラは次々と食べていく。あの大きなパフェがあんな小さな体の少女のどこに消えていくのか。彼女の奇妙な怪奇現象が非常に気になった。そして三十分経過したあと。

「ど、ど、どうにか食べきった……」

スバルは胃の限界が来ていた。

「ごちそうさまでした♪」

ミソラは満足した表情で言った。ミソラは自分のパフェを完食＋スバルのパフェを3割ぐらいもらっていた。

「ミ、ミソラちゃん・・・あんなに食べたのに平気なの?」

「全然、余裕だよ♪」

（ミソラちゃんのお腹はブラックホールなのか!?!）

スバルは疑問に思っていた。彼女の奇妙な怪奇現象。それは食べたものが本当に胃に入っているのか、ということに。その後も二人は楽しくデートした。そして帰り道、ウェーブライナーの中では疲れきったミソラがスバルに寄り添うようにして寝ていた。

「なんだかったいって疲れてたんだね、ミソラちゃん」

スバルはミソラの寝顔を見ながら喋った。

「次はコダマタウン。次はコダマタウン」

停車の放送がかかる。スバルはミソラを起こそうとするが目覚める雰囲気はない。

「ウォーロック、ハープ、荷物持ってくれるの手伝ってくれないかな？」

『断……いいぜ』

ウォーロックはハープの異常な殺気を感じ取った。そして仕方なくスバルの要求を呑んでしまう。

『私も手伝ってあげる』

三人はウェーブライナーを下車した。

「さっ、帰ろうか」

スバルはミソラをおんぶして帰って行った。電波体二人は荷物持ち。家まではおよそ300mで帰ってる途中、ミソラは寝言でこんなことを呟いた。

「ス…バル君、大好…きだ…よ」

「その言葉を聞いたスバルはミソラに感謝した」

「本当に好きなんだ。守っていかなきゃ…」

スバルは決意をした。スバル達が家に着いた。無論、二人は大吾達にかわられたことをいうまでもはない。こうして三回目のデートは最後に茶化されて終わった。

## Trail 22 突然の来訪者

スバルとミソラがデートして一日がたった。そして今日からまた学校が始まる。そして何もなく、学校の一日が終わりいつものメンバーで帰っていた。空から一本の光がスバル達の前に向かってくる。

『なんだ？この周波数は！？』

ウォーロックが異常に気づく。

「まさか、謎の組織が襲いにきたのか！？」

スバル達が警戒心を高める。そして、光の中から現れたのは前と戦った敵ではなく違う敵だった。

「誰だお前は！？」

「……私の名は、ユウ・ラ・バース」

「上からの命令によりあなたを倒しに来たわ」

彼女は右手に杖を持ち、体は白に近く、いかにも魔法使いという雰囲気があった。スバルたちは構えて電波変換の準備をする。

『行くぞ、スバル！電波変換だ！』

『ミソラ！あたし達も行くわよ！』

「「うん！」」

「トランスコード003 シューティングスター・ロックマン！」

「トランスコード004 ハープ・ノート！」

「トランスコード005 オックス・ファイア！」

「トランスコード006 ジェミニ・スパーク！」

「トランスコード007 ジャック・コーヴァス！」

6人は電波変換した後、展開した。何故なら個々に展開していたほうがあまり被害が少なくて済むからだ。

「フッ、何人でもかかって来なさい。皆相手してやるわ」

バースが余裕そうな表情で言う。その余裕そうな表情と雰囲気がつかさどジャックに執着心を抱かせる。

「だったら、その自信を見せてみろ！ペインヘルフレイム！」

「ジェミニサンダー！！」

ジャックの放った紅蓮の炎とジェミニの高压電気技がバースに向かう。

「マジック・フィールド、展開」

バースの回りにオーラみたいなのが出現した。そしてバースの周

りで大きな爆発と共に砂煙があがる。

「「どうだ!!」」

ジャックとジェミニが渾身の最強技が命中したことにより声を出す。そして砂煙が無くなり、バスは何事もなかったように、たたずんでいた。それを見たスバル達は思わず目を丸くする。あの実力ある大きな一撃を放った二人。あれをまともに喰らったのに怪我どころかかすり傷ひとつさえない。

「な、なんだと!」

「どうやらあの自信は本当みたいだね」

スバルが発した言葉に5人は納得する。そして神経をギリギリまでにとがらせて目の前の敵に集中する。

「今は戦うしかないよ。もう少しで暁さんが来る」

「分かった!」

どうやらスバルは暁に援護を要請し、アシッドの情報解析力を使って、奴を撃退しようと考えているのだ。このままでは拉致がないかと思っただけである。

「ロックバスター!!」

「ショックノート!!」

二人が放った小手先の技。だが二人の攻撃も無効化されてしまう。

「だったら、近接攻撃だ！オックスタックル！」

オックスがバースに向かってタックルしようとする。だがバースは難なくかわした。

「そんな短調な攻撃じゃ、私を捕らえられないわよ。今度は私の番ね…はああ！」

バースは唱えはじめる。そして小さな異常がここにほとばしり、さらに周囲のノイズ率が上昇し、周りの空間が歪み始める。ウェーブロードを見れば乱れていたりした。

「デストラクション・ブリザード！」

凍てつく氷のブリザードがオックスに襲いかかる。凍てついブリザードはオックスをあつという間に包み込んだ。

「ぐあああああ！！！」

ブリザードがオックスに命中した。しかも相性は○。かなりのダメージを負いオックスは、地面に膝をつく。その倒れているオックスをみてバースは静かに近づいていく。

「とどめよ……」

バースはオックスにとどめをさそうとする。

「バトルカード！マッドバルカン3！」



ロックマンがバースに向かって撃つ。だがマジックフィールドにより防がれてしまう。

「くっ、まるでブライの電波障壁みたいだ。奴を倒せるのか……」

全体の士気が下がってきていた。だがその空気を破ったのはハープだった。このままでは拉致が明かないと思い、自分が先導して攻撃し、仲間を鼓舞させようとする。

「皆、諦めないで！諦めたらそこで終わりよ！必ず攻略法があるはずよ！私達は諦めるのはまだ早い、やれることをやりつくしてないわよ！」

ミソラが皆を励ました。それを聞いた他の面子は目の色が変わり、目の前の敵に集中する。

「うん。そうだよミソラちゃん。諦めるのはまだ早いよ」

「だがあなたが私を倒せる可能性は低いわよ」

「それでも諦めるわけにはいかない！」

「バトルカード！ウォーロックブースト！」

ウォーロックブーストはウォーロックアタックした時、その間だけ無敵になる非常に使い勝手のいいカードだ。

「バトルカード！トルネードダンス！」

風でオーラを吹き飛ばそうという策なのだろう。だがオーラは消

滅することがなかった。自分に取り巻くオーラとは違い、バースが纏っている防御は絶対に放れないようだ。

「まだだ！」

スバル達は決して諦めない。諦めたという表情は誰一人もしなかった。一方、ウェーブロードでスバル達の戦いを見ている暁は現在、アシッドに情報解析していた。

「アシッド、解析率は？」

「現在、75%です」

「早くしてくれ、スバル達の援護に回りたいんだ」

「分かりました」

二人の短い会話と共に暁はウェーブロード上からスバル達を心配な目で見守っている。

「バトルカード！ダブルストーン！さらにボムライザー！」

だがまったくの無効化だった。ますます辺りはノイズ率が上昇した影響で乱れていく。だがロックたちはノイズ耐性のプログラムをセットしてあるため平気だった。

「デストラクションブリザード！」

バースが凍てつくブリザードで攻撃してきた。ロックマンは間一髪、それを避ける。

「…解析終了…。シドウ…攻略法を見つけました」

「了解！よし、行くぞ！ヒーローは遅れてくるもんだぜ！」

暁はウェーブロードから降りて、戦いに参戦した。その大きな叫び声が暁に視線の集中が集まり始める。

「暁さん、どこにいたんですか？遅いですよ」

スバルが笑いながら言う。けど、その顔には安心感が浮かんでいる。ようやくきてくれたかという感謝をスバルはそう抱いていた。

「ヒーローは遅れてくるもんだろ」

（（また自分でヒーローって言った…））

ジェミニとジャックは呆れていた。

「さくて、やるか」

「何人、来ようが私には敵わないわよ」

「それはどうかな！！上には上がいる。そのことを君に教えてやるよ！！」

アシッド・エース対ユウ・ラ・バースの戦いが始まろうとしていた。



「さうて行くか」

暁は準備運動に足をほぐす。そのありきたりな余裕な態度がバースに怒りの精神を抱かせていた。非常になめられていると思ってるバース。

「その余裕がいつまでもつか楽しみだわ」

その声の裏には潰すという怒りの声が込められていた。

「お前もその余裕がいつまで続くかな？」

「言わせてくれるわね！ブレードビット！」

バースは5つの短剣を召喚し、アシッドに向けて飛ばした。しかも5つの短剣は意思があるみたいに動く。上下左右に動いてバースの指示通りに動く。5つの短剣は展開し、アシッドを取り囲んだ。だがアシッドは顔の表情をまったく変えない。余裕がある証拠だ。それを見ていたスバル達は固唾を飲んで暁を見守る。

「バトルカード！スーパーバリア！」

『……解析完了…。ブレードビットの回避を予測しました』

「分かった」

暁が頷いた。さすがは上位ランクに属する暁の最も信頼している

相棒、それがアシッド。我ながら感嘆していた。

「ブラスター！」

暁の弾丸の攻撃が一つの短剣を撃ち落とした。一つの剣が襲いかかる。だがバリアにより、弾かれてしまう。その近づいた短剣を破壊しようとロックオンソードで斬りかかった。だがビット3機からビームが発射され、バリアに直撃した。後、防げる回数は1回。

「チッ！！だったら！」

アシッドはブラスターで囲まれている位置から脱出した。そして己の最大の技をぶち込むために気を集中する。

「まとめて吹っ飛ばしてやる！！オメガレーザー！」

レーザーが3つのビットを撃ち落とし、そのままバースに向かう。だがフィールドに弾き返されてしまう。

（次の攻撃がチャンスだ！！）

暁は神経を最大に尖らせ、集中する。

「ブレードビットを全部撃墜するなんて中々やるわね」

バースが感心していた。彼女も暁が余裕をもっていたように挑発的な態度をとる。

「行くわよ！はぁあ」

バースは集中し、次の技を使おうとした。

「今だ!!」

暁が強く地面を蹴り、ロックオンソードでバースに渾身の一撃を叩きこもうとした。急接近したことによりバースは驚いてしまう。ロックオンソードがうなりを上げてバースに振り下ろされる。

「なっ!?!」

相手の咄嗟の行動に反応が遅れて、ロックオンソードをまともに九もらった暁は大きく吹っ飛ばされる。バースは完全な痛手を負った。

「くっ……マジックフィールドの弱点を見抜くとは……」

「一体、何故ですか!?!」

スバルが質問してくる。

「あいつは攻撃する時、フィールドが一時的に消えるみたいだ。その隙を狙って俺は攻撃したただけだ」

「そんな弱点が……暁さんすごいです!」

スバルは暁を褒めた。

「ま、何たって俺はヒーローだからな」

暁は偉そうに言う。

（（またこの人、自分でヒーローって言った……））

ジャックとジェミニが思っていた。

「さ、そろそろ決着をつけるか。今の俺の攻撃で、貴様はマジックフィールドを張れないはずだからな」

「くっ……そうよ。マジックフィールドは確かに強いけど、代償に凄く消耗するわ」

「そろそろ行くぜ。早く楽にさせてやるよ……」

暁が少々怖い台詞で言った。

「その台詞、そっくり返してやるわよ……」



お互いが集中する。

「デスメテオ!!」

先に動いたのはバースであった。

空から無数の隕石が暁に降り注ぐ。

「消してやるわ!!」

「その程度か……」

後ろに暁が立っていた。

「バトルカード、ヘンゲノジュツ」

「とどめだ! だりゃああああ!」

暁は振り向き様に剣を振った。

体重と振り向いた時の勢いを殺さずに、全てを剣に乗せた。

そして、剣がバースをとらえ深く斬りつけた。

「ああああ！」

痛みと共に悲鳴をあげ、その場に倒れこむ。

暁はバースにゆっくり近づいていく。

そして剣をバースに向けた。

「お前らの幹部達の目的はなんだ？」

「…………それは世界を……………変えることよ……………」

「なんだと…………？ 一体、何故だ？」

「私は幼いころ大切な人を戦争で失ってしまった……。そして私はこう思った……。何故、同じ人間なのに、自分達だけこんな目に合

わなければならぬのか……。人は平等でなければならぬはずなのに……」

バースの顔から涙がこぼれる。

「だから私はあの時に決断した。世界を変えるために……。そして人が平等で過ごせるために……世界を変えてやろうって……。争いを生む者を倒そうって……。あなたは争いを起こす危険な存在と組織は意識している……」

「お前の気持ちは非常にわかる……。だが争いは争いを生むだけだぞ……」

ジャックが突然、口を開く。

「俺も過去にお前と似た考えをしていた。世界をリメイクさせようとしたが、だがそれでは俺達と同じように大切な人を失ってしまう人、辛い思いをする人が増えてしまう。そう気づかせてくれたのがスバルなんだ……」

「そうなの……。私もそれに早く気づけたらな……ただ世界を変えることにしか目がなかった。」

「最後に聞かせて……。あなた達はなんのために戦っているの？」

「大切な人を守るため……。皆の笑顔を守るためだよ……」

「そうなの……。ありがとう……。大切な事を教えてくれて……」

バースは光に包まれ姿を消した。

彼女はこの世から去ってしまったのか、それとも、どこかに行ってしまったのか、暁は悪い事をしたという不快感に襲われていた。

それぞれが電波変換を解いた。

「皆、ご苦労だった。各自休んでくれ」

そう言って、皆は帰るべき場所へ帰って行った。

スバル、ミソラ、ジャックはこう思っていた。

（世界には、僕（俺）（私）と同じ辛い過去をもつ人が無数にいる。奴らのとっている行動は正しいのか……。）

三人は心の迷いが出来ていた。



## Trail | 24 二人の最悪の朝

バスを倒して一夜が明けた。スバル、ミソラはそれぞれの布団からでてくる。時計は7時25分をさしていた。余裕の時間があるためにスバルに遅刻という危険信号がなかった。

「ミソラちゃん、おはよう」

「……………」

「ミソラちゃん？」

はっ、とミソラは我に帰る。そしてすぐにスバルに心配させないように作り笑いを作ろうとした。

「あっ…ごめん。おはよう」

ミソラが笑顔で帰す。だがその笑顔には曇りがあった。スバルは速攻、その顔を見破る。さすがミソラの彼氏。

「ミソラちゃん、もしかして昨日のバスっていう人の思いについて考えてるの？」

スバルが質問してくる。ミソラは見事に当てられた。それを見ていたハープはスバルの読心術のレベルの高さに感心する。

「う、うん。でもなんで分かったの？」

「ミソラちゃんの表情に曇りがあるからだよ」

「えっ!？」

ミソラは思わず声をあげ表情を隠す。

(スバル君、こういうところは鋭い!!)

ハープは関心していた。そう、彼女の異変と読心術に。女の事の関係は全くのゼロに等しいのになぜかここだけは鋭かった。そろそろ女の扱いになれてきたかという意識を持つハープ。

「私ね、昨日の彼女の言ったことについて考えてたんだ。世界には私やスバル君、ジャック君のような大切な人を失う辛く、悲しい過去を背負っている人がたくさんいることを…」

「だから私も決めたんだ。大切な人を失ってしまったことにより、暗くなっている人が世界には無数にいる。だから私はどんな些細なことでもいい、少しでもたくさんの人が前向きになれるきっかけを作ってあげたいんだ。」

ミソラは思いを伝えた。それを聞いたスバルは自分と似た過去の境遇を持つ自分に例えたように自分の思ったことを素直に話す。

「ミソラちゃん、僕も君の力になれるならどんな些細なことでも手伝うよ」

「ありがとう、スバル君」

ミソラはスバルに抱き着いてきた。スバルはミソラの抱擁により顔を一気に紅潮させる。ミソラの優しいほのかな香り、もうスバル



は限界寸前だった。

「ミ、ミソラちゃん……朝から抱き着いてこないでよ…」

スバルが顔を真っ赤にしながら言った。

「いいじゃん、別に。恋人同士なんだからさ♪それにあの一言を聞いてスバル君らしいなって思ったよ」

ミソラが軽くスバルを口説く。

「そ、そう？」

スバルがミソラへの抵抗を軟化していた。

（抵抗してる雰囲気が弱くなってる！スバル君、そろそろ私の手に落ちそうだわ！）

ミソラは色んな意味で怖い事を考えていた。裏にはドス黒いオーラと欲望のオーラが発散されていて、辺りにいるものの心を怯えさせた。

（ミソラ……オーラが怖い…）

ハープが啞然としていた。ウォーロックは今だ爆睡。

「ミソラちゃん……ありがとう」

そしてスバルは完全？にミソラの手に落ち、抵抗を緩めミソラに抱き着いた。遂に自分を捨てたスバル。ミソラに抱き着き、そして

触った優しくてやわらかいミソラの腕が気持ちよかった。もういろんな意味で精神崩壊状態のスバル。

（やった！！これでスバル君は私の物よ！！）

（裏の顔がでてるミソラが色んな意味で怖い！！！！）

ハープは後ずさりしていた。その直後、ドアが開く音がする。二人十一体は音がした方に向く。

ドアを開けた人はあかねであった。そしてその空間には一瞬の沈黙が走る。

「二人共々そろそろ起きなさいって……。……。朝から大胆ね二人共♪」

あかねがにやけた。スバルは我に帰り、ミソラから離れた。そして一気に顔を紅潮させる。

「今更、離れたって意味ないわよ。いいところ見ちゃった♪」

「か、母さん……。このことは誰にも言わないで……。…」

「えっ別にいいじゃん。恋人同士なんだからさ」

ミソラが喋りながら再び抱き着いてきた。スバルは驚愕してミソラの羞恥心のなさに後ずさりする。

「なんで！？？」

スバルが大声で質問する。

「根拠はないよ♪」

「じゃあルナちゃんに話そうかしら。スバルが朝寝坊した日に♪」

「そ、そ、それだけは勘弁して」

「ま、話すのは私の気分次第とスバルが朝寝坊した日ね」

「うっ……」

スバルは完全に弱みを握られた。これで寝坊は出来ないという含み笑いをもったあかね。そしてミソラはスバルの左腕に密着状態。スバルは精神破壊状態だった。

「さて朝ご飯にしましょ。二人共、一階にきなさいね」

「は〜い」

ミソラは返事するがスバルは沈黙中。

「もう！スバル君ったら」

ミソラはスバルの腕を少々強引だが引っ張り、一階に連れてきた。

「「「いただきま〜す」」」」

「ねえ、大吾さん聞いて。スバルとミソラがね……」

「母さんやめてよ……」

「なんで？家族だから別にいいじゃない」

「父さんに話すと絶対、暁さんの耳に入ってしまうからだよ……」

（（なんで暁<sup>さん</sup>なんだ？）））

三人が疑問に思った。そして自分の思ったことをスバルに話そうとする父親、星河大吾。

「じゃあ聞くぞ、何故、暁の耳に入っていけないんだ？」

「そ、それは…暁さんは僕たちの関係をからかうからだよ…」

『ま、スバルがあんなにギクシャクしてるからな』

ウォーロックが突然喋った。そしてここに一瞬の沈黙が走る。

『アンタってホント、KYだわ！！喋れないように封じてやる！フリーズナックル！！』

ハープのフリーズナックルがウォーロックに襲いかかる。

『やめろハープ！』

『うるさい！このKY星人が！』

『俺はAM星人だ！』

ハープの言葉にウォーロックが半ばツツコんでいた。

『頭を冷やしなさい!!』

『あああああ……』

ハープの右ストレートがウォーロックに襲いかかり、ウォーロックは凍結した。

『さっ、邪魔者は凍結したし、話の続きをどうぞ』

ハープが笑顔で返す。多重人格者的存在のハープ。

(ハープ、怖いわ…)

ミソラが咄然としていた。何故、ハープがフリーズナックルを使えたかは神のみぞ知る所である。

「いいじゃないか。付き合っていることは恥ずかしいことじゃあないぞ」

「そうよね、大吾さ〜ん」

あかねは大吾に突然くっついてきた。

「ちよっ…あかね!皆が見ているんだぞ!」

「別にいいじゃない。皆、同じ家族なんだから♪私の事が嫌っていうなら、あの時の事、スバル達に暴露しちゃおうかな〜」

「うっ…ストップ！それは言うな！」

「だったら、このままにさせて♪」

「わ、分かった……」

大吾はあかねに負けてしまった。

（母さん……人の弱み、沢山持つてるな……）

スバルがそう思っていた。

「十年たった今でもあついね〜二人共♪」

ミソラが茶化す。

「私達は結ばれてるんだもんね〜。ねっ、大吾さん♪」

大吾はあえて表にはださなかったが、朝からかなり消耗していた。

「私達も結ばれてるもんね〜♪ねっ、スバル君」

ミソラも便乗して、スバルに抱き着いてきた。

「ミ、ミソラちゃん……、右手が塞がれて食べれない……」

「あっ……ごめんね……」

ミソラは離れる。スバルは咄嗟の対応をして回避した。大吾もそれと同じ行動をとり回避した。だがそれは通用しなかった。何故な

ら二度も同じ手は通用しない。恋に燃える乙女は強い。

（（最悪の朝だ……））

大吾とスバルはそう思っていた。その反面、あかねとミソラは上機嫌だった。そして朝食、準備を終え、それぞれが行く場所へ行ったのであった。

## Trail | 25 不幸かつ周りが残念な少年の繋がり

家族がそれぞれの向かうべき場所へ行った。スバル達はいつものメンバーで学校に行き、大吾は仕事に出勤しに行った。コダマ小学校にいつものメンバーは到達する。ミソラがスバルの左腕に抱き着きながら教室に入ってきた。

「あつ、スバル達だ。おはよう」

「ミソラちゃんだ、おはよう」

クラスメイトが挨拶してきた。最初、ミソラが転入してきたことにより、一緒に登校して痛い視線を受けていたスバルだったが、その痛すぎる視線がいつの間にか消えていた。そんな痛い視線が来なくなったことを察知したスバルはようやく消えたかと安堵する。

（あれ？クラスの男子からの痛い視線がない？）

スバルが疑問に思っていた。どうやらクラスの男子達はスバルとミソラがお似合いのカップルと認めたのだろう。

「スバル、朝からいい感じだな」

と逆に男子達に茶化された。それを聞いたスバルはさらに大きなため息をつく。こんなに自分が不幸なことが訪れていいのかというこの先の生きる未来が心配になってくる。

「朝からからかうのやめてよ……」



スバルが恥ずかしげに言う。

「ありがとう、皆♪」

ミソラは嬉しそうに言った。そして飛び跳ねながらスバルの左腕に無邪気になって抱き着く。その様子を男子たちは見てかわいさにくっつきしていった。

「だって……私達は結ばれてるもんね……」

ミソラが爆弾発言をした。そして、クラスに一瞬の沈黙が走る。そして、その沈黙を破ったのがクラスの男子だった。その男の口から大きな発言が飛び出す。

「スバル、そこまでいったかく罪な男だな」

クラスの大半が頷いた。それを共感するクラスの思いは凄く思ううハープ。

（（ミソラちゃん……結構、軽々と喋るな……））

ゴンタ、キザマロ、ツカサがそう思っていた。無論、この話を聞いてあの少女は怒り、憎しみ、嫉妬？のオーラを半径70cmぐらゐに放出していた。そして、クラス全員がルナの負のオーラに後ずさりした。

「スバル君……!!」

「は、はひい……!!」

スバルはルナの異常で尋常じゃなく危なすぎる圧倒的な恐怖により、返事がおかしくなった。そして額から奇妙な汗をたくさん垂らして顔を青くしていく。

「あなた……いい度胸してるじゃない……。今すぐロックマン様になりなさい！」

「な、なんでですか？」

何故か、敬語を使っているスバルである。もはや自分の中がおかしくなっていると悟ったスバル。

「私はロックマン様に用があるの！」

何故かルナは顔を赤くしながら言う。そしてそれを聞いたクラスメイトはツンだなと思う。だがそれを口走ったらこちらにまで火が飛ぶと悟り、あえて喋らなかつた。

『お前……。まさか嫉妬しているのか？』

ウォーロックが聞いてきた。

「嫉妬してないわよ!!」

何故か顔を赤くし、大声で反抗する。

（わかりやす……）

ウォーロックがそう思いながら笑いをこらえていた。そしてその様子を見たクラスメイトはツンデレではないんだなと失礼な考えを

持つ。

「とりあえず、ロックマン様になりなさい！ロックマン様は私の彼氏になってほしいの！！」

「なんでえええ！！」

スバルが絶叫する。本人の言った通りスバルは不幸だと思うクラスメイト。心の中では頑張れスバルと応援するそれぞれの心境。

「ダメ！！ロックマンも私の物よ！！」

ミソラがスバル（ロックマン）を譲らないと反抗する。何故か私物化扱いに疑問を抱くスバル。僕ってそんな扱いですか？主人公なのにこんなんでもいいですかと思ったスバル。

「あなたはスバル君がいるからいいじゃない！とにかくロックマン様は私の物よ！！」

「いゝや、私の物よ！！」

お互いが思いをぶつけ、火花を散らす。そして、膠着状態に入っていた。

（なんで『私の物』になってるの！？女の子ってよく分からない…  
…）

スバルが唾然とする。そう私物化扱いに。まるで自分の僕として扱われているようだった。とても複雑な気持ちになるスバル。

(自分だけの物扱いされてるスバル君って……………)

ツカサが笑いをこらえながらそう思っていた。そして言い争いになっているミソラとルナの間についてこっそり脱出してきたスバルはキザマロ達のほうに退避する。

「スバル君、大変ですね」

キザマロがスバルの隣に来て言った。

「まったくだよ……」

「大変だな…スバル…。俺には関係ないから高みの見物といかせてもらう」

「ジャック……ひどい……」

「「頑張れ、スバル(君)」」

クラスメイトからも別の意味での励ましの言葉を貰っていた。一方、ミソラとルナ側では今だ戦闘中。一步も男を譲れない戦いがここにはあった。

「もしかしてルナちゃん、私とスバル君が付き合っている事に嫉妬してる?」

「そういう訳じゃないわよ!」

「ふーん。じゃあなんで私達の話題になると、殺気だてて私達を見てるの?」

ミソラが余裕そうな表情で言ってきた。その上勝ち誇った表情で。

「そ、それは……」

ルナの発する次の言葉が見つからなかった。そしてミソラは勝ちを完全に確信する。だが次の瞬間に最悪なことが。キンコーンカーンコーンとチャイムが鳴り響き、先生が教室に入ってきた。

「皆、席に着け」

（助かった）

安堵するルナ。

（なんてタイミングの悪い……）

悔しそうなミソラ。学校でも色んな意味で疲れたスバルであった。朝のHRが終わってもルナとミソラの争いは終わることは無かった。途中、スバルはミソラとルナに引っ張られ、両肩が痛い思いをしたスバルであった。こうして、スバルの4月最大最悪の朝は過ぎていった。

## Trail 26 大吾の悩み

平和で不幸と幸せが交錯する笑顔と不運がある一方、WAXA—大吾側ではこんな事が。

「はぁ……………」

大吾が仕事場でため息をつく。その様子を見た暁がいつもと違う大吾が気になった。

「どうしたんですか？ ため息をつくなんてあなたらしくないですよ」

暁が話しかけてきた。

「暁か……、今日、ちょっとした色々訳ありで……」

「もしかして、スバルとミソラの交際についてですか？」

暁がその話であることを期待するように言った。

「まあ……………それも一理あるんだが……、今回はな……………」

含み笑いをしている暁を見て大吾は一瞬で悟った。

「今回は……？」

暁が首を傾げる。

「聞かせてくれませんかね。その話の内容を聞いてみたい」

「一体……何故……？」

「どんな話か聞いてみたいだけですよ」

「仕方ないな……、うちの妻……あかねがミソラみたいに突然、俺にあまえだしたんだ……」

「へー、そうなんですか。十年たった今でもアツいんですね」

暁が大吾を茶化す。それを聞いた大吾は背中にもるでコンクリートでも乗せられたような重みがのしかかった。

「その言葉は聞きたくなかった……」

「あなたが宇宙で行方不明になり、あかねさんが寂しかったから、そんな行動をとっているのではないんじゃないんですか？」

暁はどうやら真正銘の悩み事であるらしく真剣に付き合いはじめた。

「確かにそうだな……。あいつらには寂しい思いをさせてしまった……」

「家族で旅行とか行って、思い出とか作ってきたらどうですか？」

暁がそう提案する。それを聞いた大吾はそれがいいかもなとい自分の計画をたてはじめる。

「なるほど……、確かにスバル達と旅行に行ったのはスバルが5歳の時……だったな」

「スバル達も戦ってばかりだし、たまにはあなたも骨休めをしてはどうですか？」

「すまない。その言葉にあまえさせてもらおうよ」

大吾はスバル達を驚かせようと、5月のGWの旅行の計画をひっそりとたてようとしていた。

そしてWAXA研究室では一つの何かが出来上がっていた。その研究室にいる研究者が声を上げた。

「やっと出来たわ」

一人の老いた老人の声がでてきた。それはヨイリー博士であった。顔には疲労の色と汗が浮かび上がる。

「完成したのはいいけど…まだ不安定だわ。ノイズオーバードライブシステムは使えなさそうね…」

ヨイリー博士が唸る。そしてどうしても完璧な復旧品にならずに唸るヨイリー博士。

「何が悪いのかしら……。とにかく圧縮させて、後でスバルちゃんにこのアビリティを渡さなければ…」

「後はミソラちゃん専用、エースPGMね。ベースはこれにして、このプログラムを……」

ヨイリー博士は再び仕事に取り掛かった。そこに二人の人が研究室に入ってきた。ヨイリー博士は疲労の汗を出しながらも来訪者にしっかりと笑顔で返す。



「ヨイリー博士、ノイズドライブは完成したんですか？」

質問の声を上げて入ってきたのは暁と大吾だった。

「ええ、完成したけど、まだ不安定よ。ノイズオーバードライブシステムを使用はできない。強制的に発動しようとする、エラーが発生して、ノイズドライブの機能が停止するわ」

「そうですか……。俺の分も作ってくれますかね……」

暁が質問した。それを聞いたヨイリー博士は案の定、納得していた表情だった。

「ええ、いいわよ。どうせシドウちゃんの事だから、作ってほしいと言うと思ったわ」

ヨイリー博士は分かっていたように話す。高齢者の読心術は凄いと関心した大吾と暁。

「そういえば、あなたたち二人っていつも一緒に行動してるよね」

「「……………」」

「それほど、仲が良いってことね」

（……………？）

二人は疑問に思っていた。

「ま、とりあえず、よろしくお願いしますヨイリー博士。何日ぐらいで完成しますかね？」

「少なくとも十日ぐらいかしら」

それを聞いた暁は急かすように。

「七日でお願いします」

と言った。ヨイリー博士はそれでも表情の色を変えずに頷いた。

「無理言うわね。いいわ、その七日間で作ってあげる」

「すいません、無理させて」

「いいわよ。そのかわり、しっかり皆を守ってあげてね」

「はい」

暁はそう言って大吾と共に部屋を出た。そして、二人は仕事に取り掛かった。そして時は流れ8時間後となる。

「では、先に帰らせてもらいます」

「またな大吾」

「さようなら、大吾さん」

「じゃあな暁、ヨイリー博士」

大吾は挨拶をして仕事を早めに切り上げた。そして、星川家でスバルと大吾はあの二人にあまえられて、大変だったのであつた。スバルと大吾、二人は大きなため息をついて、女の扱いって分からないと思つていた。

## Trail | 27 家族の悪戯

時はゴールデンウィークという休日が5日ぐらい続く究極の連休に突入する前日。星河一家はリビングのテーブルに集まり、大吾からの重大発表？を聞こうとした。それを聞こうとして固唾を飲む三人。

「母さん、父さんは一体何の目的でここに呼んだの？」

「それは大吾さんが全て知ってることよ。まあ楽しみにしてなさい」

「お母さん……その言い方だと、知ってるでしょ？」

ミソラが感覚を尖らせて聞いてくる。それを聞いたあかねは目を丸くした。

「あら、分かっちゃった。さすがスバルと違って鋭いわね」

「母さん……酷い……」

「だって、ホントのことでしょ。スバルは鈍いもの」

『まったくだぜ、オフクロ』

二人がスバルの鈍さに意気投合する。だがハープはウォーロックも鈍いくせにという心境を抱いていた。

「酷いや……」

スバルが落ち込んだ。それを見たミソラとあかねはスバルのもろさに苦笑いして大吾は場の空気を正そうと話を戻そうとする。

「そろそろいいか？」

「「「いいよ」」」

「明日からのGW、沖縄のソーティスシティに旅行することにした」

「「沖縄!？」」

スバルとミソラの声がかさなる。それを聞いた二人はまるで子供……というより子供なのだが、二人は目を輝かせた。

「どこに行くかは、私達で計画してるわよ。無論、海で泳げるわよ。よかったわねスバル」

「なんで、突然僕にふるの!？」

スバルはあかねの言ってることが理解できてなかった。ミソラは理解していたのか顔を赤くした。今、沖縄は技術により、この季節でも泳げるようになってる。それがソーティスシティ。一人は理解できずに三人は即座に理解。やはり鈍いと実感する家族一同。

「ま、その日になってみれば全てが分かることさ、スバル」

大吾が涼しい顔で親指をたてながらスバルに言った。

「ビックリして気絶しちゃだめよ」

「だから一体、何の事!？」

スバルは今だ理解していない。本当に鈍くてミソラは天誅を下す。

「スバル君の鈍感!!」

顔を赤くしているミソラは怒って、スバルを叩いた。そして、部屋へ一人で入っていった。

『スバル、どんだけ鈍いんだよ〜』

ウォーロックは笑いながらいった。

「教えてくれたっていいじゃん! だいたいにしてなんでミソラちゃんに僕を叩くの?」

『お前、ホント鈍感だな〜』

「君にだけには言われたくないね、そのセリフ」

スバルは抵抗した。涼しい顔で言い、そしてそれを捨て台詞のようにその場をさろうとする。

『ぐっ……』

「さらさら教える気はないけどね。自分で答えを見つけなさい。後、鈍感さを直したら?」

あかねがさらっと酷いことをいいながら去り際のスバルに言った。

「皆して酷い……」

「「『だって事実じゃん』」」

三人の声が重なる。そしてスバルはついに撃沈し、床に悶絶する。

「とりあえず、スバルはミソラの機嫌を直したらどうなんだ？ お前が鈍いせいでミソラの機嫌が損ねたぞ」

大吾がスバルにそう言った。だがどうやって自分の鈍感さを治せと思った。というより自分は鈍いのかという意識を抱いた。

「…うん、分かった…」

スバルは足取り重く部屋に向かう。その時のスバルの思考回路は復讐心に満ち溢れていた。

（絶対、見返してやる！特にウォーロックに！）

（部屋に行ったら、ミソラちゃんになんか言われそうだなあ…。一緒に寝よとか、抱き着いていい？とか言われそうだな…。機嫌損ねたの僕のせいだし…。覚悟を決めるしかないか…）

覚悟を決めたスバルは自分の部屋の戸を開け、部屋に入った。視界に入ったのは、椅子に座ってそっぽを向いているミソラ。

（これは完璧に機嫌損ねちゃったな…）

「ミソラちゃん？……」

「……………」

返事が返ってこない。スバルは静かに歩いて、ミソラに近寄る。だがミソラは反応する気配はなかった。これはいつものめんどくさいパターンだと悟る。

（仕方ない……ミソラちゃんの機嫌を直すためだ…）

「ごめんね、ミソラちゃん」

「別にそんなに怒っている訳じゃないよ…」

ミソラが突然、口を開いた。

「じゃあ、許してくれるの？」

ミソラはその言葉を聞いた瞬間、あるスイッチが入った。

「どうしよくな、今晚、一緒に寝てくれたら許してあげる♪」

「えっ……………」

（まずい！！ミソラちゃんにあるスイッチが入ってしまった！！）

スバルの頭の中の危険信号が鳴り響く。そして一歩ずつ後ずさりしてしまう。

「いやとは言わせないよ…。この私の機嫌を損ねた代償は大きいわよ」



「……………分かった…」

スバルは渋々、受け入れた。全て、自分が巻いた種だと後悔していた。そして明日の準備をして就寝際にはいつもの最悪な一日の終わり際がある。

「スバル君、一緒に寝よ♪」

「う、うん…」

二人はスバルの布団に入った。当然ミソラがスバルの右腕に抱き着いてきた。それを見たスバルはもう完全に萎えていた。早く死にたいというおかしな意識を抱き始めた。

「ミソラちゃん…くっつかないでよ…暑苦しいよ…」

「いいじゃん、私の機嫌を損ねた代わりとしてね」

ミソラはそれを前提にして言い返した。スバルはその事を言われて、抵抗できなくなった。スバルは仕方なく寝た。ミソラは満足して寝た。明日から家族旅行。一体、どんな事があるのだろうか。一人は笑い、一人は吹っ飛ばされ、一人は楽しむという出来事があるそれぞれの思いが交錯する家族旅行になるはずに違いはない。

## Trail | 28 観光と理解できない二体

時は午前11時空に浮かぶ太陽が地を照らしていた。今、星河一家はソーティスシティに来ている。一家は海の近くにある旅館にチェックインして、スバルと大吾、ミソラとあかねの二人、二人に分かれて旅館の部屋に入っていた。部屋は熱い湿った部屋だった。

「うっ暑いな……」

ミソラが唸る。現在気温は26度。いつもと違う場所なので、スバル達の地方とこちらの地方では気温差がある。スバル達の地方では気温は20度前後だろう。

「仕方ないわよ。冷房つけるわね」

部屋にいるあかねがエアコンの冷房のスイッチを押した。エアコンが起動し、辺りに心地好い冷たい風が部屋を冷却していく。

「はぁ〜涼しい♪」

ミソラは生き返ったように言った。その様子を見たあかねは思わず笑ってしまう。旅行に来た気分がでてきた。

「この暑さでへばってたら旅行楽しめないわよ。もっと暑くなるんだから」

「まだ気温上がるの!？」

「そりゃあね。午後から出かけるから準備しておきなさいよ」

「はい」

一方スバル達側ではミソラたちと同じように暑さにへばっていたスバルの姿があった。

「暑い……」

こちらでも暑さに負け、へばっていた少年がいた。それを見た大吾は父親として一言いう。

「この程度の暑さに負けてどうするんだ。それでも地球を救ったヒーローか？」

「ヒーローは暁さんだけでいいよ……」

「は？…」

大吾はスバルの予想外の返答により疑問を浮かべた。どうやらスバルは暑さで少しおかしくなってるらしい。その様子を見た大吾は鈍いだけではなく、脆いと新たな息子の一面を知った。

『案外、脆いんだな………』

ウォーロックが呟いた。それを聞いた大吾も納得の表情。

「とりあえず、午後は沖縄の観光スポット、首里城に行くからな」

「この暑さの中行くの……？」

「そうだ。何のために沖縄に家族旅行しにきたと思っている？」

「思い出作りでしょ？」

「ああ、そうだ。特にミソラのためにな。彼女は血の繋がった家族がない。そのために彼女に家族との最高の思い出を作ってあげたいんだ」

「……分かったよ、父さん……」

「よし、準備出来たか？行くぞ」

スバルと大吾は荷物を置いて必要最低限の荷物を持って部屋を出た。と同時にミソラ達も部屋からでてきた。そして四人は旅館をでて目的地に向かった。そして1時間後が経過する。

「着いたぞ、ここから歩いていくからな」

家族は揺られるバスの中から出て、太陽が地上へと容赦なく照りつける灼熱の世界へと出た。冷房の効いたバスから出た瞬間、熱い風が自分の頬にあたって汗を放出させようとする。

「さすがに暑いわね……」

あかねが呟いた。サンサンと照り付ける太陽がスバル達を容赦なく襲う。

「ま、そこは我慢しろ。観光を楽しむんだな」

「「「はーい」」」

一家は首里城公園に入場した。中に入って、一家はパンフレットを受けとって奥へと進んでいった。

「マテリアライズしたほうがよくない？」

ミソラがあかねに質問してきた。あかねは母親としてこう発言する。

「いいの。せっかく貰ったんだから使いましょ」

あかねがミソラの疑問を回答した。

「それもそうだね」

ミソラが納得した。

「これが首里城か、どれどれ？」

ミソラは受け取ったパンフレットを見た。中にはその観光場所の事が詳しく書かれていて自分の興味を誘ってくる。

「へえ、世界遺産に登録されてるんだ」

「歴史を感じるね」

『俺はそう思わんが』

「あっそ」

『流すな!!』

「……………」

『無視かよ……』

などとスバルとウォロックの短い会話がまるで滝のように素早く流れて速攻で終わった。スバルが世界遺産という魅力に釘付けになっている為、ウォロックの言葉を流したのだろう。その様子を悟ったウォロックは呆れてしまった。

「琉球王国の栄華を物語る真紅の世界遺産とされているんですって」

「そうなのか、すごいな」

大吾も歴史の凄さを感じていた。ウォロックからしては何がなんなのかさっぱりわからず理解できずにいる。

「琉球王国の政治・外交・文化の中心として栄華を誇っていたみたいです」

『まったく分からん……』

ウォロックは地球の歴史にはまったくふれてないため、？がたくさんでていた。その後も一家は世界遺産を楽しんだ。無論、歴史にまったく無頓着のウォロック&amp;ハープは理解ができなかった。そして首里城を楽しみ、旅館に戻り再びチェックインしてそれぞれの部屋に入った。スバルと大吾側では旅館の部屋に入っ一息仰いだ。そしてようやく腰を畳の上においた。

「あゝ疲れた〜」

「はは、確かにそうだな」

「この暑い中なのに、人が多いし」

「ま、世界遺産だからな」

「僕、疲れたから先に温泉に浸ってるね」

「分かった。俺も後から向かうな」

スバルは荷物の中から、着替えを持ち出し、温泉に向かった。ミソラとあかね側ではスバル達と同じように疲れが出てきて腰を下ろしていた。

「はあ、ライブより疲れる」

ミソラが唸った。その様子を見たあかねは苦笑い。

「あらあらミソラったら」

あかねが苦笑いを続ける。

「クタクタだよ。晩御飯まで時間があるよね？」

「ええ、あるわよ」

「私、その間に温泉に行ってくるね」

「分かったわ、私も後から行くわ」

ミソラが着替えと浴衣を持っていつて温泉に向かった。そして、家族全員が温泉に入り、温泉からあがってそして現在一家は大広間に向かっていた。大広間についた一家はスリッパを脱いで、畳の上を歩き、適当な位置のテーブルに向かった。

「部屋が和風だね」

大広間の壁には掛け軸や壺など、いかにも和風という雰囲気をもたせていた。

「畳の上を歩いたなんていつ以来かしら」

あかねが言った。星河一家は座布団に座り、料理がくるのを待っていた。

「一体、どんな料理が来るんだろうねスバル君」

期待に胸を膨らませるミソラ。それを見た家族は笑顔を広げる。

「うーん、ここの旅館は海沿いだから、海の幸を使った海鮮料理だと思うな」

「さすがスバル君だね。当たってるよ。あれを見て」

仕事の人が料理品を持ってきた。

「お待たせしました。今朝とれた海鮮料理です。ではごゆるりと」

「わーどれも新鮮でおいしそう」



ミソラは子供のように目を輝かせる。大吾は刺身を箸で摘んだ。醤油につけ、口にほうばる。

「美味い!!」

その言葉を聞いて、スバルも刺身を箸で取り、口に運んだ。

「美味しい!!」

二人は絶賛する。そして、あまりの新鮮さ、美味しさによりあつという間にたいらげてしまった。そして、片付けをして大広間から自分達の部屋に向かう途中、ミソラが話しかけてきた。相変わらずに空の食べっぷりは凄いと関心するスバル。

「美味しかったねあの海鮮料理」

「うん。あんなに美味しいの食べたことなかったからね」

「少し早いけどお休み、母さん、ミソラちゃん」

スバルは就寝の挨拶をして別れた。といっても部屋は隣なのだが。こうして家族の一日が何事も終わった。

## Trail | 29 意気投合

今日も何事もなく東から太陽が昇り、辺りを明るくしていった。そして時が経過し、太陽が空へと昇って行くと共に人は目覚め、新たな一日が始まる。

「うーん……」

誰かが目覚める。その声はミソラだ。頭をぼさぼさにして布団から出る。

「…今、何時かな……」

若干寝ぼけつつ、ミソラは部屋にある時計を手にとった。

「6時20分か……。とりあえず起きよっと」

そういつてミソラは布団から出た。それでもまだ寝たいという欲求はある。部屋の窓、そして庄子越しに光が差し込んでいた。ミソラはそれに視線が行き、ふと気が付いた。

「そういえば、あそこから海が見えたっけ」

ミソラはまず庄子を開けて、部屋を移動し、次に窓を開けた。窓を開けた先にはエメラルドグリーンの綺麗な海が見えた。そして朝の涼しい潮風と東からは太陽が照りつけて海の水面が綺麗に照りつける。

ザザーン。

ザザザーン。

波の音が微かに聞こえる。その音を聞いたミソラは自然の凄さに魅了される。

「綺麗だわ……」

ミソラは魅了されていた。海独特の潮風がミソラの髪を動かす。潮風の吹く音。それを浴びながらミソラはある思いを考える。それは彼と敵への思いだった。

（謎の組織がスバル君に敵対心を持っている……。今度の敵は格が違うと思うんだよね……。私はスバル君の恋人として、守ってあげるかな？…いつも守られてばかりだから、私はスバル君の役にたきたいんだよね…）

ミソラは一人で考えこんだ。そこにミソラの相棒がやってきた。相棒はミソラのいつもとは違う様子を見て悩み事があると思った。

『あらミソラ、そこにいたの。何か考え事でも？』

「あ、ハープ。うん、ちょっと考え事をね」

『一体、何の考え事？』

「それは………」

短い会話と共にミソラはハープにその事を説明した。それを聞いたハープは相棒としての言葉を言う。

『なるほどね。だったらミソラ！修行に行きましょう！』

「え？」

『だって起床時間はまだ先でしょ。だったら、この間に新しい技と  
か考えようよ』

「……分かった！」

『じゃあ、行くわよ！』

「トランスコード004 ハープ・ノート！」

相棒の提案に賛成したミソラは電波変換をした。光に包まれたミ  
ソラは、大切な人を守るため、そして新しい技を作りだすため修行  
しに行った。思いが彼女を変革させていく。

そして、1時間が経過する。二人が部屋に戻って、電波変換を解い  
た。

「ふう〜新しい技編み出すのって案外難しいよ」

ミソラが椅子に座って一息仰いだ。その様子を見てハープはお疲  
れさんという表情を送る。

『そりゃあね、まず技のベースを決めなくちゃ』

「何がいいかな……」

『だったらこれは？……』

「いいねその技!!」

「よし、地道に練習していこう」

『それが1番の近道だもんね』

こうしてミソラとハープの女同士による朝が終わった。他の三人が起床し、朝食を済ませ海に海水浴に行く準備をしていた。

「泳ぐなんて、5年生以来かな」

スバルは素晴らしいながら海に持っていく道具を準備していた。前に泳いだのは修学旅行でだ。あの時は委員長たちとかいて楽しかった。今回はミソラとだけだとスバルの脳裏に走って、スバルは嫌な汗を流し始めた。

「俺なんて何年ぶりかな、海で泳ぐの」

「そうか、父さんは電波体になってたからしばらく泳いでいないんだっけ」

「ああ、それよりスバル頑張れよ!!」

大吾は自分の右手を握ってそう言った。

「へ?」

スバルの頭には?が浮かんだ。それを見たあかねと大吾はやっぱり鈍感になってしまう。

（何を言ってるんだ？）

「ま、理解してないならいい。とりあえず行くぞ」

「分かった」

廊下に出て、ミソラ達と合流した二人は海に向かった。

ザザーン。ザザーン。

綺麗な海の波の音が聞こえる。海パン姿のスバルは準備体操をしていた。

「スバル君♪」

横からもっとも大切にしている少女の声がした。その彼女の姿を見てスバルは顔を一気に紅潮させて心臓がどきどきと大きな鼓動を上げる。

「ミ、ミソラちゃん！？」

スバルはミソラの水着姿に見て後ずさりをした。さらに紅潮させて一歩後ずさりしよう。

「どうしたのスバル君？」

「い、い、いやなんでもないよ」

ガチガチになっているスバル。スバルはミソラの水着姿を見るこ  
とができなかった。そして自分が何回も囁んでいる様子を見て自分

はなんて動揺しているんだと馬鹿みたいに思う自分の姿あった。

（ヤバイ！！可愛すぎて破壊力がありすぎる！！）

（あのスバルの顔、面白いわね）。あんだけ忠告したのに）

『あのスバルの顔、ウケ狙ってるのか？』

「ガチガチになりすぎだな」

あかねは心の中でそう思い、ウォーロックと大吾は言葉を発した。スバルはいつステップアップするんだろうという呆れ顔でいた。

（もしかして、似合わなかったかな……）

ミソラがふと思う。自分が厳選した水着。それは自分が最も愛する人に見てもらいたくて選んだもの。それが本人に気に入ってもらえてないと悟り、少し萎縮してしまう。

「ねえ、スバル君。似合う…かな？」

ミソラにそう言われたスバルは少しずつミソラを見た。ミソラ自身も帰ってくる言葉が怖かった。

「似合ってるよ…」

そういったもののスバルはミソラを少ししか見れなかった。雪の上にいる女性は3倍美しく、可愛く見えるという。スバルはその雪の上ではなく、海の近くでの場合になっている。それを聞いたミソラは一気に明るくなりスバルに近づいた。

「よかった♪さあスバル君、泳ぎに行こ」

ミソラはそう言ってスバルの右腕を引っ張り、海に近付いた。もうスバルはミソラにおとなしく従うしかなかった。抵抗したら何されるか分からなかったからだ。

「ウォーロック、泳ぎの勝負しないか？」

『おっ、いいぜ。じゃあ俺達も行くぞ』

ウォーロックと大吾も海に向かった。

『あの二人、中々息があうわね』

「そうね」

あかねとハープはビーチパラソルの下で4人を見守っていた。

「スバル君、綺麗な珊瑚礁だね」

「うん」

スバルとミソラは綺麗な透き通った海の中に潜水し、綺麗なサンゴ礁を見て魅了されている。

「ウォーロック、最初は自由に泳いでいいぞ」

『ああ』



ウォーロックと大吾は水泳競争などと対抗意識を持っていた。

「スバル、合図を頼む」

「分かった」

「よい…」

二人はスバルの合図に構える。一気に集中力と足に力を溜める。

「ドン！」

スバルの掛け声と共にウォーロックと大吾は泳ぎだした。

「頑張れー二人共ー！！」

スバルとミソラの声援を受けながら二人は負けないという対抗意識を燃やしつつ泳いでいく。だが二人の競争はほぼ互角だった。

「地球人の力、なめるなよー！」

突然、大吾は素晴らしいウォーロックを少しずつ越した。

『やるな！だったらこっちも！』

ウォーロックが大吾との距離をつめた。

「ぐっ！」

そのまま、並行に並んでいるウォーロックと大吾はゴールした。そして呼吸を整えていく大吾。

「互角か……」

『ああ、そうだな……』

大吾は息が少しあがっていた。

「ははっ、これぐらいで息があがるなんて、そろそろ年かな」

『だったらもっと鍛練しろよ』

「確かにそうだな」

「二人共、凄く早いよ」

ミソラが高評価する。

「ありがと、ミソラ」

大吾が言葉を返す。そしてミソラはスバルに提案を出す。

「スバル君、少し沖に行ってみようよ」

「う、うん」

「気をつけるんだぞー、潮の流れとか急に変わるからな」

父親として一言いう。いざとなったらウォーロックをいかせればいいかと思ったのだが一応釘を打たせておいた大吾。

「「分かったー」」

「綺麗な海だね。珊瑚礁が綺麗…」

「本当に綺麗だね」

「よし、はあぁ」

ミソラは空気を吸い込んで、潜水した。スバルはその様子を見て漠然としている。

「え、潜水するの？ まあいいや、とりあえず潜ろう」

スバルもその場の空気を読んで、空気を吸い込んで潜水した。ゴーグルをつけている二人は海の世界を堪能した。海なのに、かなり先まで見える。かなり透明度が高い証拠だ。

「水中にいるのにまるで重力のない地上の世界みたい」

二人は水中にいるのにまるで重力のない無重力空間にいるような感覚に襲われた。空から照りつける太陽の光が海に差し込み明るくさせる。

「凄いね、沖縄の海って」

そして浮上し海から顔をだしたミソラとスバルがそう思った。海水が綺麗なため海の下まで光が差し込んでくるため、そう思わせているのだろう。その後も二人は楽しんだ。充分に堪能した二人であった。

「そろそろ、戻ろうか」

「そうだね」

二人は浜に向かい、泳ぎだした。そしてあの光景が再び目に入る。

「うおりゃー!!」

『負けるかー!!』

「まだやってるよあの二人…」

スバルが苦笑いする。

「負けず嫌いなんだよ」

「まあ……分かる気がする」

「スバル君、ビーチバーレやらない？」

「うん、いいよ。父さんとウォーロックはやる？」

「『ああ、いいぜ』」

二人の声が重なる。そしてその様子を見ていたあかねとハープもスバル達によってくる。

「『だったら、私達もやらせてもらおうわ』」

あかねとハープが来た。そして家族全員がようやくこの場所に全員集合する。

「三対三に分かれるか」

そういつて4人と2体は分かれた。ウォーロック、スバル、あかねという三人に分かれてもう片方は、大吾、ミソラ、ハープというチームになってビーチバレーが始まった。砂が舞い、人が拾い、面白いプレーが続出した。

そしてウォーロックと大吾はあの対決がまだ終わっていないのか、ビーチバレーの時も火花を散らしていた。

「ははは………」

スバルが苦笑いする。対抗意識が激しすぎると思うてしまう。

「あの二人は負けず嫌いね」

あかねもそう思っていた。こうして、家族だけのビーチバレーが始まった。皆が家族と家族の連携プレーや個人の珍プレーが飛び交った。6人の表情には笑いが絶えなかった。そして、海水浴が終わり、私服に着替えたミソラとスバルは海に沈む夕日を見ていた。

「スバル君、今日は見せてくれるね」

「何のこと？」

スバルはなんのことか分からずにミソラに一言尋ねる。

「珍プレーだよ」

「あ……………」

スバルの脳裏に自分のやったプレーが頭の中で走る。

「あんなシーンであのプレーはないでしょ」

「う、うん………」

「でも楽しかったね」

「そうだね………」

「ねえ、スバル君、私の事が本当に好き？」

「何いつてるの？僕はミソラちゃんの事が好きだよ」

「そう、よかった。その言葉聞けて安心したよ」

「なんで？」

「気にしない、気にしない♪」

「？」

「って、ミソラちゃん！？」

短い会話の先に突然ミソラがスバルの右腕に抱き着いた。その様子を見たスバルは一気に顔を紅潮させる、だが海に沈む夕日のせいでスバルが顔を赤くさせたのは非常にわかりにくかった。

「いいじゃん、別に。私の事が好きなんだから嫌がる必要はないでしょ」

「それはそうだけどさ…」

「二人共々いい雰囲気のところ悪いがもう行くぞ」

「はっい」

こうして家族旅行二日目が終わった。

## Trail | 30 少女の特訓

涼しい波風と波打ち際の波が浜に打ち付ける音が静かに聞こえてくる早朝。ここに一人の思いを抱く少女があるところに来て電波変換し、ハープ・ノートという電波体になろうとしていた。

「いくよ、ハープ」

『分かったわ』

二人は小さい声で言った。

「トランスコード004 ハープ・ノート！」

一人の少女は光に包まれ、そして飛んで行った。彼女が向かった先は海の上のウェーブロードだった。

そこなら存分に暴れても周囲に被害はないだろう。

「さあ特訓よ！ハープ！」

『了解！！』

二人は強くなるための修行と新しい技を編み出すための特訓を開始した。少女はハープ・ノートとなり、自分の新たな技を編み出すための秘密の特訓を考えていたのだ。そしてここに彼女の思いがウェーブロード上で叩き付けられる。

そして1時間経過。再び、少女が部屋に戻ってきた。額には汗と体には少しだが小さな疲労が残っていた。



「はあ、新しい技が完成するまで程遠いよ」

ミソラが唸った。それは当たり前だ。一から新しい技のベースを考えてそこから自分のイメージを広げて味付けしていく。それがハーブ・ノート、ミソラにとっては至難の業だったのだ。

『そう簡単に新しい技は完成しないわよ。少しずつ作っていこ』

「そうだね。地道が1番だね」

そして海から少しずつ日が昇り、辺りをさらに明るくしていった。そして旅行あつという間には最終日。星河一家は午前中にチェックアウトする準備をして、水族館に向かった。そして水族館の中では一家が大吾とあかね、スバルとミソラに分かれて館内を行動した。

館内のスバル、ミソラ側では、彼女、ミソラによる小悪魔の策略と英雄、スバルの抵抗による内戦が始まろうとしていた。

二人が館内を歩いている。コツコツと水族館の道を歩く音が響いて天井に届き、地面に跳ね返ってくる音が聞こえてくる。

「スバル君、綺麗だね」

「うん。沢山の魚が泳いでいるね」

二人はトンネルの回りに泳いでいる魚達に魅了されていた。そんなミソラはさりげなくスバルの右腕に抱き着く。スバルはだが抵抗はしなかった、ここで抵抗したらミソラの思うつぼのためであり、精神的に苦痛だったがここは男として我慢した。

「うわー綺麗……。こんなに綺麗な魚達を見て嬉しいわ」

ミソラは感無量していた。それを聞いたスバルも納得の表情。

「僕もそう思うよ。やはり生き物は凄いね」

この後も二人は周りが窓になっているトンネルを歩き、その回りに泳いでいる魚達を見ていた。トンネルの奥に進んだ二人はクマノミやイソギンチャクなどの可愛い魚を見た。無論、ミソラがその魚に反応されたのは言うまでもない。そしてスバルが振り回されたというのは当然の事だったりする。

「どうやら、この先は行き止まりみたいだね」

「そうだね」

「戻ろうか」

「……うん」

ミソラは何かを思いつめた顔で頷く。スバルが歩きだした瞬間、ミソラが静かにスバルの服の裾を掴む。水槽の窓越しに差し込む優しい電気の光。水面の奇妙な動き水面へと差し込んでくる電気の光が水面上で乱反射し、水槽の前にいるスバルとミソラに水中にいるような雰囲気醸し出す。

「どうしたんだいミソラちゃん？」

「ねえ、スバル君……」

トンネルの窓越しに差し込んでくる水面で屈折している電気の光で辺りは不思議な雰囲気が漂う。そんな雰囲気の中でミソラは顔を紅潮させていた。まるでここが静かな空間になった。そんな感覚に囚われたスバル。

「スバル君……私の事が本当に好きなの？」

「な、何言ってるの！？僕は100回その事を聞かれても100回好きと答えるよ！！」

「だったらさ、同じ両思い、恋人同士……そして大切な人として私はお互いがお互いの事をもっと知りたいんだ……」

「……………」

スバルは沈黙する。ミソラはその間、ますます顔を紅潮させていた。

「スバル君は自分ではきずいていないかも知れないけど、あなたは心のどこかで私の事が嫌と思っていると思うんだ……」

「そんなことはないよ！僕はただ純粋にミソラちゃんの事が好き……なんだ」

「……うん。私はスバル君にもっと振り向いてもらえるように頑張りたいんだ……。スバル君……改めてもう一度言わせてもらっていいかな……」

「言いたい事があるなら言っていよ」

「スバル君……」

「はい……」

一瞬の沈黙が水族館の中に駆け抜ける。そして一人の少女が一人の少年に対する淡い恋の気持ちをぶつけるために彼にもう一度話した。

「私はスバル君の事が好き……。付き合ってください」

「…僕もです。ミソラちゃん……。こんな僕でよかったら喜んで!!」

そして、再びお互いの友情を確認し合った二人。気が付けば二人のブラザーバンドで結ばれたキズナリヨクは少しだが増加していた。

「スバル君、ありがとう」

ミソラはスバルに、スバルはミソラに抱き着いた。光がスバル達を祝福するように降り注ぐ。お互いがお互いの事をもっと知るために、二人の絆はますます深まるのであった。その二人の行動を大吾とあかねとハープ、ウオーロックは遠距離から見ていた。不敵な笑みを顔いっぱい広げて。

「ふーん。ミソラ、中々やるわね。振り向かせるためにお互いがお互いの事をよく知ろうなんて」

「ミソラは恋愛に関しては前進してるな」

『その反面、スバルは全くの前進しない所か後退してるかもな…』

そして4人はスバルもミソラの恋愛を見守っていたのであった。水族館も見終わり、近くのお土産屋で名産品を購入した後、星河一家は飛行機で沖縄を飛び立った。航空機内では再び一人の少女が一人の初年に対するだっこが始まろうとしていた。ちなみに窓側がミソラで、通路側がスバルとなっていた。後ろの座席にはあかねと大吾が座っている。

「さようなら…沖縄」

ミソラが沖縄、ソーティスシティに別れを告げた。

「楽しかったね、スバル君」

「うん。この三日間で沢山の思い出が作れたよ」

「私もだよ」

ミソラが万年の笑みで返す。

「家族と旅行した思い出なんてなかったからさ、今回の旅行で楽しい思い出が作れたよ」

「よかったね、ミソラちゃん」

「うん」

その後、ミソラは旅の疲れが出たのかスバルに寄り添うように眠ってしまった。

「疲れたんだミソラちゃん……」

スバルも寝てしまった。お互いがお互いに寄り添うように寝ていた。スバルは右手を、ミソラは左手でお互いが手を握っていたのだ。こうして家族旅行が幕を閉じ、スバル達は帰るべき場所へ帰ったのであった。

スバル達が沖縄で家族旅行を楽しんでいる間、世界である事件が起きていた。それはゴールデンウィークという休日に突入した二日目の日に時は遡る。場所はWAXA指令室だった。部屋には警報が鳴り響いていた。そしてその警報を聞いてあわただしく声が響き、さらに慌ただしく動く社員たち。別にWAXA自体が襲われているわけではなかった。そう、襲われている場所は世界。何故、世界の国が襲われているのかというと、過去にスバル達が接触した謎の来訪者たちが原因だったようだ。

指令室では慌ただしく艦長の声が駆け巡る。指示を出しているだけだが額には汗が浮かんでいる。

「指令官！アイルランドに謎の組織が乱入しアイルランド紛争を止めるために戦争兵器を破壊し、人を無差別に殺しています！」

「なんだと！？奴らは世界を変えろという報告を受けていたが、これではただの虐殺ではないか！」

情報を入手した諜報員がそれを司令官に報告し、それを聞いた指令官が大声で言う。それを聞いた一同は緊張を走らせる。

「一体、何故このような行為を？」

暁が奴らの行動に疑問を持つ。何故、こんなことを。そして何故世界を攻撃したのか。指令室のディスプレイにはアイルランドの都

市が破壊された無残で非情の都市と変貌させていた。道路には死体とか軍の兵士の死体などあった。どうやらここでデモが起きていた時間帯に奴らが来たのだろう。

「いくら世界を変える、紛争を無くすと言ったってこれでは同じではないか……」

「争いは争いを生み、争いをする事で沢山の血が流れ、また人が死に、その終わらない連鎖が続くということを理解してないのか？」

暁がそう言った。確かにそうだ。人を殺せば、その人を殺されて残された親族や知り合いは恨みを持ち、復讐しようとする一種の復讐精神がある。何故、その虐殺連鎖が分らないのかと暁はそう感じていた。

「出撃してその無差別破壊を止めたい所だが国はアイルランド…。スカイウェーブを使ったとしても着くのに1時間ぐらいかかるだろう…」

暁が唸る。そしてここにはあの人たちがいないということでも不安要素も沢山だ。

「しかも、スバルちゃんやミソラちゃんは家族旅行で不在だし…」

ヨイリー博士はここでただ人が死んでいくのを見ているしかないのかと不覚に思いながらそう言った。一部の人は血が飛び散り、道路にはじけ飛び、人の肉塊が散乱しているのを見て視線を逸らしたり、思わずあまりのひどさに嘔吐しそうな人もいた。

「こんなにも無力とは……」



暁が悔しがる。己の無力さ、そしてただ人が死んでいくのを自分や我々はただ、ただここで見ているしかないのか。こうしている間にも人はどんどん死んでいく。何にもできない。声をかけて開けることもできない。非常に自分が悔しかったWAXA一同。

「仕方ないわよ……。奴らは次の紛争が続いている地域に無差別破壊をしてくるはず……」

「そこを狙えば、虐殺を防げるのでは？」

「その可能性は高いだろう……」

「だがどうやって次の襲来する国をどうやって当てるんだ？」

「まだ世界には無数に紛争が起きている」

「そこが問題ね……」

それぞれが短い会話で自分の頭で考えた得策や案を発表し、今後の事に対応する策を練っていた三人。

直後、突然ディスプレイが暗くなる。不意に見たWAXA一同。異常はないかと一部の社員が調べてみたが異常はなかった。

「一体、なんだ？」

皆が騒ぐ。画面が暗くなった後、画面にSound Onlyという文字が浮かび上がり、一人の低い声が聞こえてきた。そしてさらに動揺が指令室に走って緊張を全員にもっと走らせる。もちろん暁も緊張していた。WAXAのセキュリティシステムは国の最高レベル

ルに達していた。それをいとも簡単に破られ、そして知指令室のディスプレイをハックし、あちら側からこちら側へと通信させるなんて一体、どんな技術をもった人なんだと暁はそう思っていた。

「なんだこれは!？」

「外部からのハッキングです。どうやら一部の施設にしかハッキングされてないでしょう。それにハックの時間はわずか三分。疾風のほとくのハッキングですね。私の予測では国の最高レベルを超える技術を持っていますね」

「……我々はリフェイム・ウィングス」

ディスプレイから聞こえてきた声はかなり低く小さく響いていた。アシッドの予測では室内でハックし、こちらに話かけてきてるだろうと悟っていた。

「リフェイム・ウィングスだど？これは宣戦布告か。好き勝手やらせてくれるな」

暁がそう言った。それに頷くWAXA一同。

「我々は世界を変える者として立ち上げられた電波武装組織。我々の目的はただ一つ。世界を争いのない世界にすること。この世界から紛争を無くすことです」

「偉そうにいいやがって、お前らの行為だって、戦争してるような物じゃないか！関係ない人まで巻き込んで！」

「私達はどういわれようとも任務を忠実に実行します。もし、私達に攻撃をしかけるのであるならば、その国全体を戦争を引き起こす存在として戦争がなくなるまで破壊を行います」

「これだったら俺達が奴らに挑んだら、この国に沢山の人の命が奪われてしまうか」

「くっ、どうすればいいんだ？」

「私達はとりあえず、考えるわ」

「今後の策を考えます」

「お願いします。ヨイリー博士」

「クッ、リフェイム・ウィングス……………」

「覚えてろよ。貴様らに大きな返しが来るということを……………」

ヨイリー博士、そして艦長が、暁が短い会話で慌ただしく今後の対策について最優先に考え始めた。いつ自分たちの国が狙われるかわからないからだ。遂に奴らは本気になった。世界は少しずつ変わり始めていく。そう破壊と死を引き換えに地球には変革というのが訪れる。

こうしてスバル達が知らない間に世界は動き始めていた。そう、世界が変わるカウントダウンが始まった。世界はどちらに傾くのか。死か、生か。それはスバル達の手によってゆだねられる。時間が刻一刻と進む。こうしてリフェイム・ウィングスの活動が始まったのであった。

## Trail | 32 新技開発特訓!

星河一家が旅行に行ってる間、ミソラは新技と強くなるための特訓をしていた。彼女、電波変換しているミソラが向かった先は海の上にあるウェーブロード。彼女はそこで特訓をしている。空気の衝撃波やミソラの声が小さく波の音と共に聞こえてくる。何故、彼女はここにいいのか、それは時は少し遡る。それは早朝、ミソラとハープが朝話していた時だ。

「うーん……新技と言ってもまったく浮かばない…」

『そういえば、私達の技ってほとんど単体用と一点集中技だよね』

そう、彼女の技はほとんど一点集中技がほとんどだ。マシンガンストリングは相手を捕えて集中攻撃。ショックノートは単体に向けて放つ小手先の技。範囲が広い技といったらパルスソングぐらいだろう。

だったら彼女はひらめいた。どんな状況でも打開できる大きな必殺級の技を開発しよう。

『だったら団体用の広範囲技を作ろうよ』

「そうね、それを作ったらバトルに対応しやすくなるかもね」

「でも、どういう技にしようかな…」

和室でミソラとハープが必死にうなる。一つしかない頭の中でイメージを広げて自分の作りたい理想の技のイメージを愉快に広げる。そしてハープがひとつの答えを見つけ出した。そして相棒にそれを

話す。

『この技は?』

「ハープ、発案早っ!!」

ミソラはハープの閃きの速さに目を丸くして声を大きく上げてしまった。その様子を見たハープは思わず苦笑い。ミソラは顔を紅潮させて口を抑えていた。

『まあまあ、細かい事は気にしない』

「で、一体どんな技なの?」

気を取り直してミソラとハープは話に向き合う。彼女が考えた新技とはいったい何なのか。それが今、明かされる。

『ギターの弦を使う技よ』

「それってマシンガンストリングじゃあ?……」

ミソラの頭で思いついたことはそれぐらいだった。ギターの弦を使う、応用性の広い技とは何なのだろうか。ますます疑問が多くなったミソラ。

『まあ、確かに似ているわね。だが違うわ。この技は――』

ミソラがハープの次の言葉に固唾を飲む。そして小さく喉を鳴らして心臓に早鐘を打たせていた。

『ギターの弦を空に発射して、目的へと隕石のように落ちてくる、その名もストリングメテオ』

「ストリング…メテオ……………」

ハープが言った新技の発案にミソラはそれをかみしめるように言った。これがいずれ作る自分の新技。期待にムベガいっぱいだった。早く作ろうという思いが込み上げてきた。ハープが発案した技は簡単といえば、ギターの弦が隕石のように空から降り注ぐ技だ。それを聞いたミソラはますますやる気が大きくなっていく。

『早速、実戦よ！イメージはまずマシンガンストリングに似た感じで、空に発射して！』

「分かったわ！！」

ミソラとハープは和室から大きく飛び出して電波変換し、海上のウェーブロードへと向かっていった。そして海上のウェーブロードに辿り着いたハープ・ノートは、ハープの指示に従いながらはギターを斜め65度ぐらい傾ける。

「いけえ！！」

ハープ・ノートは自分の頭の中で自分が新技を作りたいという思いと完成技のイメージを広げながら弦を空へと発射する。ギターの弦が空へと発射される。発射され、そして消えた。それが繰り返し続いた。

『次はその発射した弦を、目的へと落ちるようにコントロールして』

「了解！！いけえ！！」

再び、空へと弦が発射された。空に向かった弦は綺麗な曲線を描き、目的へと落ちる直前で消滅した。

「うーん、失敗か……」

『でも上出来よ！後は力加減を上手く使うだけよ！』

「うん、そうだね！」

『とりあえず、完成したら応用に走るわよ！！』

「うん！！」

ハープ・ノートとハープの短い会話を終えた瞬間、休憩もなしに再び弦が発射された。恐らくここで休憩したらイメージが消えてしまうからだろう。どうしてもハープ・ノートはここで感覚を掴みたかったのだろう。そんなうまくいかない時間が続いた。

「はぁ、はぁ」

ハープ・ノートが息をあげていた。

『とりあえず、今日はここまでね。明日、また練習しましょう』

「う、うん」

ハープ・ノートはこうして、ミソラとハープの特訓が終わり、明日へと続くのであった。そして再び、太陽が昇ってくる。海の上のウェーブロードで弦と彼女の声が響く。

「ストリングメテオ!!」

発射された弦が空に向かい、そして拡散するように弦が一本一本に分かれ、隕石のように降り注ぐ。特訓二日目だというのになんかいい調子だ。でも本人からしては不満足らしい。よっぽど彼に負けたくないのだろう。その信念が彼女を動かしていた。

「うゝん」

『どうしたのミソラ?』

「なんか物足りないんだよね。こう…もっと流星群のように降り注ぐようにできたらなって…」

『確かに広範囲といっても、降り注ぐ弦が少ないわね。もっと弦が降り注げば圧倒できる技になるはず…』

「弦を増やせばいい…。はっ!!」

彼女の頭に稲妻のように閃きが走る。そして弾かれたように立ち上がる。

「物は試し!!早速、実戦よ!!」

『り、了解!!』



ハーブ・ノートが再びギターの弦を空に発射させた。いつもと変わらない技の手順にハーブはたじろいている。

『ミ、ミソラ！これじゃあ、前と同じじゃない！』

「いいから見てて」

ハーブはミソラの言葉に従った。弦が空へと向かう。だが弦は地面へと向かわない。弦が一点に集まり、そして小さな爆発と共に分裂した弦があらゆる所に隕石のように降り注ぐ。

「出来た！！」

『す、凄いわ……。完成ね、ミソラ！！』

ハーブは目を丸くして言葉を失いかけてきた。まるで空から降り注ぐ無数の隕石。これなら囲まれても対応はできるだろうと思ったハーブ。

「い、いや今のは多分、偶然」

ミソラは正直に白状する。それを聞いたハーブは目を疑った。

『え？』

ハーブが疑問に思う。

「今は気持ちが高ぶってたから出来たんだと思うんだ」

『なるほど……。だったら完全にマスター出来るように実戦あるのみ』

よ！完成まで後一步！頑張らしよう！』

「うん！！ストリングメテオ！！」

海に彼女の声と波の音が鳴り響く。完成まで後一步。彼女は変わろうとしていた。そう、大切な人を守るため。彼女には彼女なりの守るべき戦いがある。こうしてミソラとハープの新技特訓が終わったのであった。

## Trail | 33 突然の通告

「な、なんだってえ〜!!」

一人の男性の叫び声がWAXAに鳴り響く。その大きな素っ頓狂の声を至近距離で聞いた若き青年は耳を抑えながらその男に向かって言いたいことを言う。

「まったく、少しは声を抑えろよ……」

耳を抑えた若き青年、暁はその叫んだ男性、大吾に向けて言った。その後、大吾はここは仕事場だと、背中に奇妙な汗を流してしまう。

「あっ……悪い。俺達がいけない間にそんなことがあったなんて全く知らなかったんだ……」

「まあ、とにかく色々ありすぎてこの様だ。今は次の襲来予想国とリフェイム・ウィングスのデータ処理に追われてる」

WAXAニホン支部の人たちはいつもと違って数倍忙しそうだった。相手がどこかは知らないが、相当な回数 of 通信をとっていたり、書類を書いていたりして忙しそうだった。

「なんか、悪いな……。こんな時に家族旅行なんかにいったりして……」

「気にすんな、過ぎたことは仕方ない。今は前を見る。とりあえず、お前も次の紛争が起きている国々に襲来する予測を手伝ってくれ」

「了解した」

大吾と暁は仕事に取り掛かった。仕事をしている人たちの輪に入って自分も今後の対応や作戦に参加する。指令室の中央テーブルの上に乗っている資料やテキストデータプログラムを見て色々と考えて自分たちの作戦を提案する。

「まず、紛争が現在起きている国は確定だな」

「ああ」

「次からが問題だ。その紛争が起きている国を上げたのがいいが、後はどの国に奴らが介入してくるかだな」

その直後、WAXAニホン支部に異常が発生する。

ビー、ビー、ビー！

警報がWAXA施設を鳴らす。いつもとは聞かない警報の音にWAXAニホン支部全体に一気に緊張が走る。そして担当の方に迅速に異常を聞いた暁。大概是予想していた。

「一体、何なんだ!？」

たくさんの人がメインルームに集まってきた。

「どうやらリフェイム・ウィングスが再び破壊介入をした模様です。介入した国はアフガニスタンです!!」

その女性は慌ただしく言った。その報告を聞いた一同は固唾を飲んで、遂に來たかという気持ちを抱いた。

「くっ、早い……。こんなにも早く、次の紛争地域に介入するとは……」

暁が悔しがる。そう思っているのはここにいるWAXAのメンバー全員だろう。完全に不意をつかれた。こうも早く動くとは。こちらはまだ作戦を練っている手順までなのに。

「武力介入している部分をモニターに出します!!」

そしてモニターに驚きの光景が写っていた。それは無差別に破壊された戦争兵器。さらに辺りには人の死体がたくさんあり、地面は人の血により赤く染まっていた。その死体は血まみれでわかりにくかったが、体型、服装的に戦争に巻き込まれていた民間人の姿もあった。辺りには散らばった片腕と肉塊。無残な光景が広がっている。

「酷い……………」

その光景に目を背ける者、あるいは手で顔を覆っていた人もいた。そして、破壊された兵器がもくもくと煙を上げている中に謎の人が立っていた。ディスプレイに映し出さ絵れた一つの人影をズームしてみたが煙でよく分からない。

「あれは、一体?……」

その直後、謎の人は光に包まれ、飛んでいった。大吾は口を突然開く。

「奴らは、本当の平和というものを分かっているのか?ただ、戦争を抑えればいいっていう物ではないはず」

「ただ戦争で平和を勝ち取っても何も残らない。残るのは悲しみと恨みだけなんだ」

「ああ、だから奴らにそれを理解させる必要がある」

「そのためにはまず虐殺を抑えなくてはな」

「そうだが……」

暁は少々、困った表情になる。

「暁、何故ためらう?何か困ることでもあるのか?」

「ああ、確かに奴らと戦うのに少々問題がある」

「その問題はなんなんだ?……」

「俺達が奴らと戦ったら、母国が戦争を引き起こす存在として、介入するみたいなんだ」

「い、いやそんなことをしなくても日本は多分襲撃される可能性があるかも知れない。スバルが危険な存在と見なしているからだ」

「スバルが何故危険な存在となっているんだ？」

大吾は考え込む。もしかしたら彼が世界にいてはいけない存在なのかもしれない、という意識をもっていた大吾。何故なら、彼の周りだけに事件に関係したことが起きているからだ。

「その理由は分からないな。とにかく、彼に何かが起こるかも知れない。1番みじかでアイツをよく知っているのはお前ら家族だ」

「……………」

「彼に何かがあった時は、お前らでアイツを安心させてやれ。アイツはまだ不安定な部分が多いからな」

暁がそう言った。大吾は父親として、しっかりと親は親としての責任をするという必要があるなと思っていた。

「了解した。ミソラとあかねにもそういつとくよ」

「守るぞ、世界を……。これが俺達の戦いだ……………」

「ああ……………」

二人は拳を交わした。こうして、世界が変わろうとしていた。そのままの世界になるのか、それともリフェイム・ウィングスが争いで解決した、平和な世界になるのか。戦いが始まる・時の歯車が少しずつ動き、世界が傾いていく。戦いの先にあるのは、滅びか生存か。こうして、守るべき戦いが始まるのであった。

何日かたち、スバル達はWAXA内部の会議室にいた。そう、再び遊撃隊が結成される。新たなメンバーを加えて作戦会議中だった。そして一人の男、暁が作戦内容を話す。それを興味津々に聞く全員。さすがに地球の命運がかけられている為、皆集中していた。

「とりあえず二日間、俺を含むお前らは何人かに分かれて、奴らの介入から防衛してもらう」

「メンバーはまず、スバル、ミソラ、ゴンタの三人だ」

それを聞いた三人は目配せして頑張ろうという合図をそれぞれに贈った。

「次は、俺、ツカサ、ジャックの三人に分かれる」

「やったー！！スバル君と一緒にだ！」

その後、ミソラが抱き着いてくる。スバルは困ったように自分の思ったことを言う。スバルはふと思った。何故、女性は場の空気を考えないのか。男からじゃ分らないことだらけであった。

「少しぐらい緊張感持とうよ……」



スバルは呆れ気味とため息をつきながら言った。その様子を悟ったミソラはさすがにここははしゃぐ雰囲気ではないな、とミソラは取り乱してしまったなとすぐにスバルから離れた。

「それもそうだね」

「で、一体どこに行くんですか？」

ツカサはさらに場の空気を正すように言った。

「場所はカザフスタン、チュニジアだ」

「そこは紛争地域ですよね？」

スバルが問う。それを聞いた暁は小さな笑みを漏らす。相手は小生学生なのにここまで話の進みがいいとは思っていなかった。暁から見ても優等生はスバルとツカサしかいないとおもっていたりする。

「ああ、そうだ。スバル達はカザフスタンを、俺達はチュニジアに行く」

「わかりました」

「各自、準備を整えておけ」

「分かりました」

暁が念には念を入れて注意を広げた。そして一同が返事をする。そこから二日の日々が流れる。各自、それぞれはそれなりの下準備をして再び、WAXAの部屋に来ていた。

「お前ら、準備は出来たか？」

「」「出来ました」「」

4人は返事をし、ジャックは頷いただけだった。そして暁は出発の前に遊撃隊のメンバーはほとんど総学生だ。だからここはあえて年長者として言いたいことを言った。それは生命に抱えあることだったからだ。暁は遊撃隊のリーダーとしてスバル達の命を背負っていることになる。

「よし、いいかお前ら」

「なんですか？」

スバルは質問をした。

「各自、無理はするな。これから行く場所は戦場だ。死ぬなよ。全員無事に帰ってくるんだ」

いつもとは違う雰囲気の際に、5人は気が引き締まる。そして出発前の注意が終わった後、遊撃隊全員はWAXAニホン支部を出て、外で電波変換してスカイウェーブに向かい、それぞれの場所へと向かう。

「よし！スカイウェーブへ各自向かうぞ！！」

6人は電波変換をし、スカイウェーブへと入っていった。何時間が経過した後、先にカザフスタンのスカイウェーブに着いた。

「では行ってきます」

スバル達は別れ際に言葉を贈った。絶対に生きて帰ってくることを。

「気をつけろよ」

「分かりました」

こうして三人はスカイウェーブから地上へ向かった。分かれた残り三人は、チュニジアに向かった。地上に向かったカザフスタンのスカイウェーブから地上のウェーブロードへと向かった三人。視界に写ったのは、全く発達していない街。高層ビルや、デパートなどの建物がない。レンガで組み立てられた建造物しかない。それを見たスバル達はそれぞれの心境を抱き、おもわず口に出してしまう。

「…同じ、地球なのにここまで環境が違いなんて」

ミソラが思いをもらす。相変わらずスバルは緊張の糸を切らさずに周りを警戒し、堅苦しくなっている。その様子を見たミソラはスバルを柔らかくしてあげようと彼女は彼女なりの対応をしてスバルの緊張をもみほぐしてあげた。

「とりあえず、見て回ろう。危ないから電波変換は解かないで、ウェーブロード経由で探索してみよう」

「「了解!!」」

ここでは経験豊富、戦闘の先達者であるロックマンが指揮官となつて、ミソラとゴンタを纏める。そして、三人は移動して行った。しばらく移動したら、三人を再び、驚かす光景が飛び込んでくる。

それはよく歴史の教科書で見た写真の光景だった。

「なんだ、これは!？」

ゴンタが驚きの声を出す。それは今だ、戦争をしていた場所に来たのだった。銃弾が、ミサイルが飛び交っていた。その銃弾が戦士に当たり、血を辺りに噴出し、銃を乱射したりしていた。それを見たミソラは血を噴出して倒れていく兵士や頭が飛んで、その根元から血が滝のように出ている戦士を見て、思わず顔をそらしてしまった。

「同じ、人間なのに何故争うの？」

「分からない……。彼らにも守りたいのがあるから戦っているはず」

「けど、争いはよくないよ!!」

ハープ・ノートが訴えた。ロックマンも当たり前に、そしてオックス・ファイアも当たり前の同意見を抱く。これは誰にとって当然の事。戦争は起こしてはならない。

『そうだ、争いはよくないことだ…』

「な、なんだ!!?」

三人は周りを見回すが、何もない。その直後、自動破壊兵器ウィルス（オートビット）が戦争兵器、軍人へと降り注ぐ。見たことはないウィルスだったがウォーロックはそれを見て知っていたようだ。ウォーロックはこれを大量虐殺兵器だと言って、ロックマンは固唾を飲んでしまった。そしてこれを降らせたのは誰かと辺りを見回す。

「上か!？」

ゴンタの声と共に3人は上を見る。それを見た瞬間、3人は思わず目を丸くした。そしてオートビットが自分たちの目の前にいたこと。それを見たロックマンは素早く指示した。

「至急、暁さんに連絡を！」

「り、了解！」

ミソラは暁に連絡をとりはじめた。姿が見えない敵から、降り注いだ自動破壊兵器により次々と人、兵器が破壊、虐殺されていく。こんなひどい行いは許せないという感情が強くなっていく。

「酷い……。どこだ出てこい!!」

「フッ、いいだろう……」

「初めましてだな、ロックマン……いや星河スバル……」

「お前は一体誰だ？」

「エクステンド・ブレイド……君を倒す選ばれし者だよ……」

見るからに風貌は幾多の危機を乗り越えた戦士という風格を出していた。腰には剣。顔には無数の傷。体は鎧のアーマーをつけていた。電波変換しているとはいえまるで武士二しか見えなかった。

「クッ……」

「スバル君、10分後に暁さん達が来るわ!!」

「了解!!」

スバルが応答した後、まだ11歳には厳しい現実がミソラの視界に入ってくる。

「な、なんなのこれは?……」

それは自動破壊兵器により殺されていく人、兵器の姿であった。自動破壊兵器から逃げ惑う兵士。その攻撃を喰らい、血を噴出し倒れていく兵士。その姿が沢山見受けられ気が付いたらあつという間にそこは真紅の血で染まった荒れ地と化していた。

「彼らは争いをしている。私が神に代わり、彼らに争いを起こした罰を与えているんだ」

「や…て……」

ハープ・ノートが震えながら言った。エクステンド・ブレイドはハープ・ノートの言葉がよく聞こえずもう一回尋ねた。

「なんだって?」

「やめてって言ってるのよ!」

「彼らは悪い事をした。報いを受けて当然の事だ!!」

「うるさい!!」



ミソラは膝を着く。範囲が大きくて威力が高い分、その大きい分の体力の消費は激しかった。

「中々、やるじゃないか」

「次はあなたを倒す番よ……エクステンド・ブレイド!!」

「いい瞳をしているな。一つ聞こう。君は何のために戦っている!？」

「大切な人を、世界を守るためよ!!」

「その決意、そしてその真剣な眼差し……。君はその決意を守り通すんだな」

「え?…」

ミソラは何故か疑問に思う。

「雑談は終わりだ。君達を倒す……、バースの仇、とらせてもらうぞ!!」

「うおおお!!」

エクステンド・ブレイドは両手から刀を取り出し、ブースターで高速移動した。両手の剣がうなりを上げてこちら側に向かってくる。彼の殺気と覇気は凄かった。ロックマンでさえ一瞬、あの気に飲まれてしまった。だがすぐに気を取り直して目の前に敵と戦うロックマン達。



「バトルカード バリア!!」

いち早く、反応したロックマンがエクステンド・ブレイドからの攻撃をガードする。バリアと鋭い太刀の形見の二対の剣がぶつかり合い、辺りに火花を散らして空気を大きく揺らす。

「二人共、今だよ!!」

「分かった!!」

「おう!!」

後ろで待機していたハープ・ノートとオックス・ファイアが左右に展開してそれぞれが持つ小手先の技で確実にダメージを与えようとした二人。だがエクステンド・ブレイドはそれを見切っていたかのような動きで対応する。

「あまい!!」

エクステンド・ブレイドは、剣を左右に投げた。完全に不意な攻撃だったため、もろに反応が遅れたハープ・ノートとオックス・ファイア。ハープ・ノートは間一髪、回避する。オックス・ファイアはガードする。それを見たエクステンド・ブレイドは笑みを思わず漏らしていた。

「コンビネーションはいいようだな。だが私の戦いに着いて行けるかな!!」

「うおおおお!!」

戦士の叫び声と刀の剣を切り裂く轟音が戦場に大きく響き、ロッ

クマンに向かってくる。再び、ロックマンはバリアでガードする。それを見た謎の男は単純明快なパターンに笑みを広げた。そして次の動く自分の姿を頭の中で作る。

「二度はくわんぞ!!」

エクステンド・ブレイドは距離をとり、剣を投げた。

「そんなもの!!」

スバルはバリアで受け止めたがバリアに刺さった。

「好機!!」

エクステンド・ブレイドはビームを突き刺さった剣へと発射した。剣にビームが命中し、爆発を起こす。そしてバリアの中にいたロックマンは剣がバリアの内部に貫通してた剣が爆発したことによって逃げ場のない爆風を浴びせられた。

「ぐっ!!」

ロックマンは煙の中からでてくる。両手にはエドギリブレードを構えてジャンプして煙の外にいるエクステンド・ブレイドを探したが見当たらなかった。直後、横からエクステンド・ブレイドがでてくる。そして神速の速さでロックマンに斬りかかろうとする。

「切り捨て…御免!!」

エクステンド・ブレイドが剣を振大きく振りかぶる。ロックマンの頭は危険信号が鳴り響いていた。剣がうなりを上げて大きく空気を

切り裂く轟音をあげながら自分に向かってくる。あまりの威圧感にロックマンの体がこわばってしまい動けなくなってしまった。自分に向かって剣が振ってくる。思わずロックマンは両手を前に出してかばった。だがロックマンはしばらくたっても剣で斬られた感覚がしないため目を恐る恐る開けた。そこに映った視界は二人の間にハープ・ノートが割り込んできてギターで防いでいるミソラの姿があった。

「ミソラちゃん!!」

「距離をとって! スバル君!」

「邪魔を…するな!!」

エクステンド・ブレイドはミソラを横蹴りして吹っ飛ばした。あまりの威力だったためハープ・ノートがボールのように転がりながら大きく吹っ飛ばされた。そして壁に激突しむせていたハープ・ノートの姿があった。

「ミソラちゃん!!」

「大丈夫よ…。こんな一撃」

「スバル君、いいから距離をとって!!」

「え…：…うん!」

「いけええ! ストリングメテオ!!」

ロックマンとハープ・ノートは短い会話をしてすぐに二人との距離感覚を置く。そして距離が付いたハープ・ノートはギターを垂直

にして空に弦を発射させた。弦が綺麗に真上へと向かう。そして小さな爆発と共に隕石が降り注ぐ。ハープ・ノートは神経を集中させ、エクステンド・ブレイドへと降り注ぐようにコントロールさせた。小さな隕石が敵へと無数に降り注ぐ。当たるのもあれば当たらないものもあった。敵は回避しながら、隕石をビームで撃ち落とす。余裕の表情が見られた。

「バトルカード、ブレイクサーベル……。だりゃああああ!!」

「予想通りだ!!」

ロックマンは回避行動中の敵の移動予測して動いた。だがエクステンド・ブレイドはロックマンの行動を読んでいたのかビームで攻撃した。

「バトルカード、ダブルストーン!!」

だがオックス・ファイアがビームとロックマンの間に向けてバトルカードを使用した。ビームはダブルストーンにより防御された。そしてその綺麗な防御援護にロックマンは小さな笑みをもらしながらダブルストーンの横を擦り剥けるように動き、ブレイクサーベルを片手に構えて一気に接近した。

「はああああ!!」

「ぐっ!!!!」

ロックマンのブレイクサーベルはエクステンド・ブレイドに当たったが軽く腕を斬っただけだった。

「まだよ、マシンガンストリング!!」

「ぐっ……だがあまい!!」

「自動小型攻撃兵器アサルトビット!!」

エクステンド・ブレードの使用した自動兵器のアサルトビットにより弦は切り裂かれた。

「行け!!」

16機近くある、ビットが3人に襲い掛かる。不規則な動き、これでは遠距離ぶきであてるのが至難の業だった。まずなにより動きがよめない。動きのパターンがあるわけではない。高速移動する小型のアサルトビットに三人は対処ができなかった。

「ロックバスター!!」

ロックマンはたくさんのエネルギー弾を撃つが、目標が小さく、当たらない。最終的に三人は固まっていた。ロックマンはロックバスターを、ハープ・ノートとオックス・ファイアはマッドバルカン3で何機か撃ち落としていた。それでもマッドバルカンは30発ぐらい打つてようやく2機というところだ。

「小さすぎて、当たらない!!」

「あきらめちゃだめ!!」

「分かってるぜ!!」

その直後、後ろからアサルトビットがゴンタに襲いかかる。後ろからの不意な攻撃によりオックス・ファイアは完全な一撃を喰らってしまう。

「ぐあああああ!!」

「ゴンタ!!」

その様子を見たロックマンとハープ・ノートはオックスを守りながらアサルトビットを撃墜し続けた。

だが負傷人を背負っているとそれが気になり、射撃に集中できなかった。そしてその緩慢な集中力がさらに被害者を出す。

「きゃあ!!」

「ミソラちゃん!!」

ミソラもエクステンド・ブレイドのアサルトビットにより傷ついてしまった。

「二人は僕が守る!! バトルカード、オーラさらにホーリーパネル!そしてダブルストーン! ボムライザー!!」

ロックマンの大きな爆発により残りの6機を全て撃墜した。

「アサルトビットを全て撃墜するとは…だが二人を守りながら、戦えるか!!?」

エクステンド・ブレイドは剣を右手に持ち、こちらに接近してくる。ロックマンは敵の気迫により体が強張る。まずそれで数メートル無駄にした。そして、傷ついている二人をどうするか。さらに数メートル無駄にした。迷ったあげく、スバルは傷ついている二人を少々強引だが吹き飛ばした。

「「スバル（君）！！」」

「自分の身より味方の身を優先するとは！！」

エクステンド・ブレイドの両腕の筋肉の力によって放たれる剣がスバルに襲い掛かる。かなりの威力が乗った剣。だがロックマンにはロックマンなりの考えがあった。

「今だ！！」

スバルは両手で剣を止めた。その様子をみたエクステンド・ブレイドは思わず大きくたじろぐ。

「シラハドリだと！？」

「ウォーロック！！」

『おおさ！！』

ウォーロックは剣をかみ砕いた。それを見たハープ・ノートやオックス・ファイアは漠然と見ていた。そうウォーロックの歯の強さに。

「まだまだ！！」

エクステンド・ブレイドが剣を投げてきた。だがスバルはあっさりかわす。エクステンド・ブレイドのは剣をビームで破壊し、ロックマンに爆発と煙が襲う。

「ゲホ、ゲホ、見えない…」

「ツインバスターライフル、チャージ完了。敵の熱源を発見。照射

開始!!」

煙の外で力を込めていたエクステンド・ブレイドが極太のレーザーがロックマンに放った。そしてロックマン委突然襲いかかる。ロックマンはいち早く察知しては回避しようとしたが反応が遅く、体の半分がビームを脆に浴びた。

「ぐっ…ああああ!!」

「よくも!!」

ミソラが立ち上がる。

「パルスソング!!」

「そんな小手先の技!!」

エクステンド・ブレイドは難無く回避する。顔にも容易そうに回避しているんだよという思いが顔に出ていたエクステンド・ブレイド。

「オックススタックル!!」

回避した直後にゴンタはエクステンド・ブレイドの一瞬の隙を狙った。だが、それも難無く回避する。

「そろそろ、決着をつけてやるか……。ノイズドライブ…オーバードライブシステム作動…」

オーバードライブシステムを作動した敵は体が青く光り始めた。彼らが使える謎多きシステム。これは現在ヨイリー博士たちがスキ



ヤンして検査中だが全くの進展なしだという。

「行くぞ!!」

エクステンド・ブレイドが再び剣を取り出し、かなり早い速度で移動した。

「なっ!?!、早すぎる!!」

三人は驚いていた。三人はそれぞれの技で落とそうとするが、早すぎてあたらない。残像がたくさん見える。敵がオックス・ファイアを斬る。

「ゴンタ!!」

「きゃあ!!」

「ミソラちゃん!?!」

ハープ・ノートも斬られた。早すぎて目に捕らえられない。

「とどめだ!!」

エクステンド・ブレイドがスバルに近づく。だが、空から敵に向かって攻撃が降り注ぐ。

「なっ……」

「スバル、大丈夫か!?!」

「皆!!」

「援軍か…。オーバードライブには限界時間がある。それに6対1

…。部が悪いな…。最後に奴らに置き土産でも渡してやるか…」

ロックマン達にとっては待望に待望を重ねた援軍。なんてタイミングいいんだとロックマンは頭の中でそう感じていた。そう思った直後、エクステンド・ブレイドは高いウェーブロードへと移動した。そして力を溜めている様子がかがわれる。

「何をするつもりだ!!」

「こういうつもりだ!」

「ツインバスターライフル、チャージ完了。オーバードライブシステムとの併用完了…。」

「構えろ、皆!! 大きいのが来るぞ!!」

「ツインバスターライフル…完全解放、照射開始!!」

地を揺るがす奇妙な音と共にエクステンド・ブレイドの銃から日からの発光していく。そしてエクステンド・ブレイドの銃からかなりの極太のレーザーが襲い掛かる。だが遊撃隊全員はそれに対抗するためそれぞれの持つ大技を発動する。

「オメガレーザー!!」

「ペインヘルフレーム!!」

「ジェミニサンダー!!」

「ファイアブレス!!」

「ショックノート!!」

「ノイズチェンジ、リブラノイズ…。メテオライトバレッジ!!」

6人がそれぞれの技で跳ね返そうとする。だが少しずつ相手の攻

撃によって押し返されている。人数差が圧倒的なのにこの相手の強さ。ロックマン達はこの強さにもわず目を丸くしそうになった。

「ぐっ、諦めるかよ!!」

6人はそう思っているはず。少しずつ6人の攻撃が、押し返しかけている。思いが威力を上下させていた。

「ノイズオーバードライブの限界時間が来たが…」

エクステンド・ブレイドは姿を消した。

「消えた…」

「オーバードライブの限界時間が来たから、撤退したみたいだね」  
「守れたんだね…」

ハープ・ノートは緊張の糸が切れて、腰が抜ける。

「おいおい、これから日本に戻るんだぞ、へばってどうする」

「少しぐらい休ませてよ、暁さん」

「だめだ。すぐに帰って報告しなくては」

「了解…」

全員は渋々、納得した。こうして、6人は日本へ帰って行った。

「ふう〜」

一人の少女が気を抜いて、ウェーブロードの上に座る。先程までエクステンド・ブレイドという謎の来訪者からの戦いにより戦っていたロックマン達。相手の渾身の特技を全員でようやく止めて相手の姿が見えなくなったところである。ハープ・ノートはエクステンド・ブレイドが消えたことにより緊張の糸を切らしていた。そして一息仰ぐ。それを見たロックマンが苦笑い。

「おいしい、今から報告に行くんだぞ。休んでどうするんだ」

「……分かりました」

白い体をした電波体が最大の特徴、そして遊撃隊のリーダー、アシッド・エースが母国に早く帰って報告しようとするため、腰を下ろして休んでいるハープ・ノートに叱咤した。それを聞いたハープ・ノートは溜息交じりに渋々、自分の体を上げる。その同時刻、宇宙の星に手を伸ばせば届きそうな区間コスモウェーブではあの奈落の底に落ちた不滅の紳士が不敵な笑みを広げてロックマン達を見ていた。

「ソフソフソフ、油断してる今が好機！貸してもらおうぞ！貴様の過去を！」

黒いマントを身に纏い、一人の電波体はスバル達を狙いに急降下していった。そう、その男の名はハイドといい、電波変換するとファントム・ブラックという名前になる。今まで、ファントム。ブラ

ツクはロックマンになんども己を払拭される過去を味わってきた。そしてまたここで己の新たな力を付けて再びロックマンたちの前に姿を現そうとした。

「さ、行くぞ」

暁が皆を制した次の瞬間、一瞬の殺気がウエーブロード上に突き抜けた。だがそれは何かは分からなかった。

「うっ！……」

最後列にいたハープ・ノートは突然うめき声をだす。その奇妙な声を聴いたハープ・ノートはロックマンの声が聞こえたため後ろを向いた。そこに映った光景は。

「どうしたの？ スバーー」

ミソラはスバルの後ろにいる電波体を見て言葉が止まった。彼女の目に映ったのは絶対に忘れられない相手、ファントム・ブラックだった。ハープ・ノートはファントム・ブラックを見て一気に警戒心を高めた。

「あなたはファントム・ブラック！！スバル君に何をしているの！」  
「貴様、何のつもりだ！」

アシッド・エースとハープ・ノートが質問し、全員が戦闘態勢にはいる。それを聞いたファントム・ブラックは余裕の表情を広げていた。それを見たアシッド・エースは小さく舌打ちをする。ハープ・ノートは彼氏が力なくぐったりしているのを見て心配している。

「なあに、少し彼の戦いの記憶をデータベースにコピーするだけさ」

現在、ファントム・ブラックはスバルの頭に手をあてて、何かをしている様子だった。ロックマンは気を失っているように見える。

「スバルから離れろ!!! ロックオンソード!!!」

アシッド・エースはファントム・ブラックに向かって自分の得物、ロックオンソードで切り掛かろうとした。ロックオンソードをウェーブロードと水平面上にして剣を真横に広げ、声を大きく上げて一気に接近しロックオンソードがうなりを上げてファントム・ブラックに向けて振り下ろされる。だがファントム・ブラックは余裕の表情で対応する。

「私の邪魔をするな!!!」

ファントム・ブラックは片手に持っているステッキで、暁のロックオンソードを軽々と止めた。

「ロックオンソードを軽々と…。だが貴様は両手が塞がれた。いけ、皆!!!」

「「おう!!!」」

ツカサとジャックが左右に展開した。そしてそれぞれが持つ最大の大技を発動する。

「ペインヘルフレイム!!!」

「ジェミニサンダー!!!」

「その程度の攻撃!!」

ファントム・ブラックはマントで二人の攻撃を流した。アシッド・エースは二人の渾身の特技をまきこまれないようにギリギリまでひきつけて回避するつもりだったが、あれを回避されたらさすがに痛かった。

「そろそろいいか…」

ファントム・ブラックから解放されたロックマンは意識を失っているのか倒れかける。それを見たハープ・ノートが倒れかけるロックマンに近寄って体を支えた。力無くロックマンはハープ・ノートに寄り添った。ハープ・ノートはロックマンの呼吸があるのを確認してひとまず安心する。

「シフフフフ…。これで計画は実行される」

「計画とはなんだ!?!」

「それは教えられない。最後に言わせてもらおう。私はファントム・ブラックではない…。ファントム・ブラックφだ!!」

そういい、ファントム・ブラックは姿を消したのであった。そしてウェーブロード上に小さな謎の沈黙が走る。

（（（ただファイがittedただけじゃん……）））

ロックマンを除く5人が同じ感想を持っていた。そんな同じ意見を持っていた5人が漠然と佇んでいたらロックマンが遂に目覚めの

兆しが訪れた。

「ん……？」

スバルが目覚めた。それを見た他のメンバーは心配してロックマンを見た。

「「スバル（君）！！」」

「ん…、あれ？僕はさっきまで何を？…」

「スバル、さっきお前はファントム・ブラックに襲撃されたんだ」

「え！？そうなんですか！？けど体に障害はありませんよ」

「そりゃあな。お前は攻撃されたのではなく、お前の戦いの記憶をコピーしたらしいんだ」

『ったくあいつ、本当にしつこいな。まゝた台本通りとかなんとかグダグダ言うんだろうな』

ウォーロックが飽きたようにそういった。

「ははは、言ってるね。ノイズチェンジした時も台本通りとか言うてきたし」

『何度来たって返り討ちにしてやるよ』

長くて一言が短い会話を終えた直後、ウォーロックはウィザードオンし、ビーストスイングの練習をした。それを見たロックマンは相棒が頼れる存在に見えた。

「さ、報告に帰るぞ。奴らが何の目的でスバルの記憶をもらったかは分からない。注意しておけよ」



「「「「はい」」」」

全員が返答をした。

「後、スバル、お前はWAXAに來い」

「何故ですか？」

「お前の身体に異常があるかも知れない」

「え？どこもおかしいところはありませんよ」

「それは、自分で気付いていないだけだ。お前はファントム・ブラックに記憶をコピーされたんだ。その影響で、自分では気付いてないかも知れないが、記憶障害や脳に異常があるかも知れない。だからWAXAで精密検査を受けてもらう」

それを聞いたロックマンは精密検査は人生初の体験の為、何故か大きく緊張してしまった。

「は、はい。分かりました」

「私もついて行っていいですか？」

ハープ・ノートがアシッド・エースに頼んだ。だがアシッド・エースはここは個々のことよりハープ・ノート達の家族の事についていった。

「いや、お前は早く家に帰って二人を安心させてやれ」

「わ、分かりました……」

ミソラは少し落ち込みながら言った。それでもアシッド・エースはよかったつもりだった。家族のいない彼にとってはハープ・ノートのやるべきことを優先的にさせるためにそういったのだ。そう、

家族を心配させたくないために。

（もう、なんでなの！？）

ハープ・ノートは一人で怒っている。それは当たり前だろう。所詮11歳の頭では理解できないだろう。家族より、最も愛している人の事しか頭がないミソラにとっては。

『暁さんの言ってることは正しいと思うわよ』

「ハープまで！？」

「うゝゝ了解……」

ミソラは半分納得のいかな表情でそう言った。相棒のハープはどうやら暁の言った事が理解できていたようだ。こうして6人は空に行き、スカイウェーブ経由で帰るべき場所へ帰って行った。そしてWAXAに到着し、スバルは精密検査を受けていた。ピコーン、ピコーンと機械の音が鳴る。

「精密検査の結果、血圧、脈拍と共に異常はありません。脳にも異常はありませんし、記憶障害や脳細胞に傷もないです」

「そうか、分かった」

暁は医師からの報告を受け、検査を受けていたスバルは部屋からでてきた。そして精密検査を終えたスバルがこちらに來た暁に自分の体について聞いてみた。

「暁さん、僕の体に何か？」

「異常は無しだ……。帰っていいぞ」

「はい。ありがとうございます」

「帰り道、気をつけるんだぞ」

「はい」

そういつてスバルはWAXAを出て、自分の帰るべき場所へ向かったのであった。そしてコダマタウン星河家では。

「ただいま」

スバルは家の戸を開け、玄関で靴を脱ぎリビングに向かおうとした瞬間、一人の少女がスバル煮へと思いきり飛んでくる。

「スバル君……!!」

ミソラは愛しの彼氏が帰ってきて光の速さでスバルの元へ向かった。

「う、うわ!ち、ちょっとミソラちゃん!!」

ミソラは突然抱き着いてくる。ミソラの女の子の香りがしてスバルは心臓が大きく鼓動を打っていた。もう気絶しそうになりそうで自分の意識をつなぎとめるのに精一杯だった。

「スバル君、何にもなかったの?」

「う……。ん。異常無しだよ」

「よかった……」

ミソラが安堵して緊張の糸を切らす。

「とりあえず、ソファに座らせてよ。疲れたから」

「あ、ごめんね。私はスバル君の隣に座るね」

スバルとスバルの右腕に抱き着いているミソラはソファに座り、番組を適当に見始めた。

「いい雰囲気になってきたじゃない。あの二人」

それを温かい目で見守る両親。

『少しずつ進展してるかもね』

あかねとハープは静かに見守っていた。二人の恋は少しずつ進展しかけている。恋は時計の針のように最初は離れていても、いずれは針が近付き、そして針が、あの人への思いが重なる。そんな二人は、一体どんな関係になるのか。お互いがお互いの背中を預け、世界を守っていきえるのか。そんな二人に物事は突然訪れる。その恋はもっと深くなるかも知れない、もしくは引き裂かれるかもしれない。それが音を立てず、静かに時がたち、運命が二人をどう左右するのか。避けられない壁が近付いて来ていた。

## Trail | 36 心に灯す一つの不安

リフェイム・ウイングの破壊行動を守ったスバル達。あれから一夜が過ぎていつもの通りニホンは平和な朝を迎えていた。そしてここ、コダマタウンでは彼ら達が起床し、学校へ向かう行動を開始したのであった。星河家の二階にあるスバルの部屋ではいつも通り波乱万丈の朝を迎える。

「う、うゝん……」

誰かがスバルのベッドから目覚める。その声の主は体に布団を巻きつけながら起き上がり、ベットの近くにある電波時計を手にとった。その声の主は無論、ミソラである。ミソラがこの家に移住するようになってから二人で一緒に寝る。これが日常茶飯的になっていた。

「何時かな?……」

ミソラは半ば二度寝の睡魔に襲われながらも近くにある時計を手にとった。そして時計の長針が7時を指していることに頭がはつきりと理解する。

「7時か……。とりあえず起きよう」

「ハープ、おはよう」

『ミソラ、おはよう』

二人は朝の挨拶を交わした。

「とりあえずスバル君を起こさなきゃ」

『今日はどんな手で起こすの?』

ハープはミソラのハンターVGから独自のウィザードオンしてミソラのそばに姿を現して含み笑いを持った言い方でミソラに話しかけた。

「なんで突然そんな質問するの!?!」

それを聞いたミソラは顔の表情を崩しながら言った。それを見たハープは思わず苦笑いしてしまう。おそらくミソラ本人も何の手でスバルを起こさせようかと考えていたらしい。

『私は純粋にミソラの行動とスバル君の反応を楽しみたいだけよ』

「高見の見物ってやつ?」

『まあ、それだね。とりあえずどんな手で起こす?』

「露出のある服でスバル君を悩殺してみようかな〜」

ミソラにしては大胆すぎる発案だ。それを聞いたハープは思わず吹き出した。両手を口に抑えて女性らしいしぐさをする。

『ブッ!!……それじゃ、スバル君が驚いて気絶しちゃうわよ。スバル君はあまり女の子に免疫がないから』

「そう? 私にしてはいいと思うけど。やっぱり普通に起こした方がいいかしらね」

『それがいいよ』

こうして、ミソラはスバルを普通に起こし、一家の朝の団欒は普通に過ぎていった。もちろん今日の朝もスバルの朝の弱さと寝癖の悪さは筋金入りだった。いつも通りの一日がまた始まる。

そしていくばくかの時間が経過し場所はコダマタウンのスバル達が通学に使用する通学路となる。今日も当たり前前にいつものメンバーで登校している。

「スバル君、皆、大丈夫だった？」

ルナが心配そうに問い掛けてくる。顔には心配そうな雰囲気はつきりと表に出ている。

「うん、大丈夫だよ」

スバルが返事を返して、その他のメンバーも返事を返す。それを聞いたルナだったがやっぱり心配性なのか不安要素があったのかは分からないが体調の事についても聞いてきた。

「怪我とかしてないよね？」

「大丈夫だって！委員長は心配性だな」

スバルはルナの心配性さに気遣って笑顔で対応する。

「あなたが戦いで怪我とかしたらと思ってとても不安だったんだから…」

いつもとは違う雰囲気のルナ。彼女はスバル達の事を本当に心配しているんだろう。それを悟った電波変換できるメンバー全員。

「とりあえず、無事だったらすぐに連絡して」

「わかったよ…」

なんか違う雰囲気のルナに調子に狂うスバル。それをハンターV Gから見ていたウォーロックも不思議そうに見ていた。

『なんか、いつもと雰囲気が違うな』

ウォーロックはルナに聞こえないように小さな声でスバルに話した。

「かなり心配してたみたいだね」

『ああ見えて、心配性なんだな』

「それほど、僕達のことを心配してたんだよ」

『でも、普段あんなに威張ってるのに、あんな感じだったら俺的には怖いな……』

ウォーロックが困ったように言う。

「僕も委員長が常にあんな感じだったら、確に対応しにくいかも……」

『ま、電波体である俺には全くの関係のないことだ。アイツを心配させないように頑張るこったな』



「確かにそうだね。電波体である君には特に関係ないしね」

そういつて、二人はルナに聞こえないように小さな声で話続けた。そして通学が終わりコダマ小学校の自分たちの教室となる。スバル達いつものメンバーが教室に入ってくる。

「スバル、大丈夫か？」

スバルのクラスメイトが話かけてくる。さすがに仲間としての心配の意識はあったようだ。クラスメイトが心配してくれることを知ったスバルはなんだか安心した。

「うん。特といった大きな怪我はしてないよ」

「そうか。お前は俺たちの大切な友達だからな。お前が戦いに出てる時、大怪我とかしてたらどうしようってな・・・」

「心配してくれてありがと。けど僕はそんなにやわじゃないから」

「でも現にお前は一回、怪我して入院してるだろ」

「うっ・・・それはそうだけどさ」

「でもこれだけは言わせてくれ。絶対に死ぬなよ」

「うん。それだけは絶対に守る」

スバルに話しかけてきたクラスメイトの顔は本気の実情だった。

「いいか、約束だぞ。もしお前が死んでしまったら一番悲しむのは、お前達の家族。そしてミソラちゃんだからな」

「うん。僕はもう誰も悲しませない。絶対に生き抜いてみせるよ」

そういつて、長い会話と共にスバルは友達と約束を交わした。一方、ミソラ側ではスバルと同様に同じことが話されていた。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

クラスメイトの女子達が話しかけてきた。それを聞いたミソラはクラスメイトに笑顔で対応する。

「うん。大丈夫だよ。怪我もしてないし」

そう言つてミソラは腕を振つて、自分がけがしてないことを自己主張する。

「よかった。絶対に死なないでよ。もしあなたが死んだら皆が悲しんでしまうし、一番悲しむのは、スバル君なんだからね」

「うん・・・」

ミソラはふと、あることを考える。

（いつ死ぬかは分からない・・・。そうー戦いはいつだって死と隣り合わせ・・・。たった一つの行動で生死を決める。スバル君だっていつ手の届かない所に行ってしまうかもしれない・・・。私が弱く、足を引っ張ってしまつてスバル君に迷惑をかけてしまうかもしれない。）

ミソラは右手を強く握った。ギュツと拳を握る音が小さく、そして短く鳴る。

（だから決意したんだ。皆を、そしてスバル君を守ると・・・）

誰かが死ねば、皆が悲しんでしまう。そう、別れは必然なのだから。時はまってくれない。二人の前に小学生には厳しい現実が叩きつけられるかもしれない。見えない物が少しずつ近づいてくる。あるきっかけにより変わるかもしれない。スバルとミソラに変化が訪れようとしていた。

## Trail | 37 常識のない人は潰される

学校の仲間と守る決意をしてからはや一週間。スバル達は遊撃隊はWAXAに来ていた。一同がそろい、どうやら作戦会議を行うようだ。会議室に入り、緊張感が漂う会議室。スバル達は緊張しながらも会議室にある椅子のせもたれを掴んで手前に引き、そして座った。

「よし全員揃ったな。これより作戦会議を始める」

暁がそういつて会議が始まった。早くも30分が経過する。ひたすら小学生には分からない話が聞かされる。この所、学ぶとか聞くより、実戦で動く派の人が多いだろう。だから一部の人はこの話が苦痛だった。

「……があつた場合はこう対応して……こうなったらこう動くんだ……」

『なあスバル？』

「どうしたんだい？ウォーロック？」

現在会議中の為、ウォーロックがハンターVGから周りのメンバーに聞こえないように小さな声で話した。

『物すつごく暇だ………』

『俺のその意見に同意だ。俺達電波体にはそんなに関係ないしな』

ウォーロックの発言を聞いていたのか、オックスもウォーロックの意見に同意してくる。その地獄耳に感心するスバル。自分たちの耳にしか聞こえていないと思ったのに意外と耳は鋭いんだなと失礼な考えを抱くスバル。

「我慢だよ、二人とも。ここは我慢だ。戦いで思いっきり暴れればいいじゃん」

『お前の口からそんな言葉が出てくるとは予想外だな』  
「たまにはこんな発言も悪くないさ」

スバルらしくない発言をする。それを見たウォーロックはスバルの不自然な様子に疑問を抱いた。この所、話をきっぱり終わらせようと適当に言っただけなのだが。

『でもまだ30分弱しかたっていないのに我慢できないなんて、落ち着きがないわね』

ハープが突然割り込んでくる。恐らく3人の話を聞いていたのだろう。ハープも地獄耳なんだとスバルがまたもや失礼な考えを抱いた。

『うるせえ!!俺とスバルの話に首突っ込んでくるな!!』

『アンタ、会議中にうるさいわよ……。今は会議中。時と場をわきまえなさい』

『うつ………』

ハープの正しい言葉に一撃でウォーロックは静かになった。ウォーロックの適切な対応処置にスバルはハープの方法に思わず感心し

てしまう。うんうんと頷きながら。

「……でこういう対応をして……」

「もし日本に襲撃してきた場合にはどう対応すればいいですか？」

会議に集中して参加しているツカサが問いかけてくる。

「その時は非常用絶対防衛線を設置する。その間に時間稼ぎをするんだ。実はまたWAXAで秘密兵器を開発している」

「その秘密兵器とは？」

ツカサが目を輝かせて聞いてきた。恐らくWAXAの事について大きく興味があるのだろう。暁はまるで息子を見守る父親の目をしてこの若いのになんにでも興味を抱くツカサを見ていた。

「WAXAでまた独自に開発したサテライトキャンセラーだ」

「その機能は？」

機能が気になり、一同が固唾を飲んで喉を小さく鳴らして見守る。

「広範囲・・最大で日本全土に障害電波を放ち、その電波を浴びた電波変換している人はシンクロ率関係無しに強制的に解除してしまう兵器だ」

「それって僕たちにも影響があるのでは？」

「無論、そこは対策済みだ。お前らは障害電波を浴びても全くの影響無しだ」

「それが突破された場合は？」

「ウィザードを召喚し、少しでも時間を稼ぐ。その時間稼ぎをしてもらっている間に俺を含むお前らにWAXA・いや日本全土を防御してもらおう」

「「日本全土！！！！！！」」

スバル、ミソラ、ゴンタが驚きの声を出す。

ジャックはそれを聞いても表情を変えない。

だから各地方に展開してもらう。

そして襲撃があった場合にお前らはそこに向かってもらい、防衛・もしくは撃退してもらう」

「サテライトキャンセラーはノイズキャンセラーとは違いあまり連発できない。連発できるとしたせいぜい2発……。奴らの事だろう、多分、サテライトキャンセラーの障害電波の周波数をブロックしてくるかもしれない」

「あの・・・疑問に思っているんですが、そのサテライトキャンセラーは一体どんな仕組みが？」

「いいわ、特別に教えてあげる」

ヨイリー博士が突然、口を開いた。

「サテライトキャンセラーはノイズキャンセラーのアナザー版・・。サテライトの障害電波の仕組みはまずペガサス・レオ・ドラゴンのサテライトサーバーにアクセスする。そして、3つのそれぞれ少し違った周波数をWAXAと共有させる。その共有させた3つの電波とこちら側で独自に作った周波数を合成さらに書き換えさせて放てる仕組みよ」

「切り札ってところですね」

「ええ、そうよ。多分これを無力化してしまう可能性は私の推測だと45・38%。チャンスは一回だけ。もし失敗したら間違いないWAXAにきて破壊を試みようとするかもしれない」

「そうなった場合にも防衛行動に入るんですよね？」

「ああその通りだ。WAXAは日本にとって必要不可欠だ」

「・・・」

「・・・」

その後の会議が続いていた。



一方、日本の下、インドネシアでは――

「シフフフフ！！滅びるがいい！！下等な人間どもめ！！」

「うわああ！！！！」

逃げ惑う市民の声。

一体、インドネシアで何が起きているのか。

そこには、黒いマントをつけた一人の男がただづんでいた。

日本―WAXAでは――

「これで、対策会議を・・・」

ビーー！ビーー！

施設内に警報が鳴り響く。

「衛星からの超望遠カメラが敵を発見しました！！」

「場所はN21―W157、インドネシアです!!」

「インドネシアだと？あそこは平和で戦争は終結しているはず。あそこは2189年にインドネシア紛争終結宣言をしたはず。なのに、攻撃をされているだど？」

「衛星からの超望遠鏡カメラから送られてきたデータを解析完了しました。この形状からすると、ファントム・ブラックです」

「またあいつか、一体、何の目的でやってるんだか・・・」

暁が困ったようにいう。

「現地にいったみればわかりますよ。とりあえず出撃の準備をしましょう」

「了解!!」

こうしてWAXA遊撃隊はインドネシアと向かったのであった。

アシッド・エースが率いるWAXA遊撃隊達がWAXAから出撃して10分。時は1秒たりとも待ってくれない。ファントム・ブラックが引き起こしている行動は誰も止められはしなかった。ファントム・ブラックがいるインドネシアではこんな最悪なことが起きていた。

「消えろ！！ひれ伏せ！！愚かな人間どもめ！！」

そういつてファントム・ブラックは、手に持っている自分の得物、ステッキを地面に叩きつけ衝撃波をあらゆる場所へと襲った。衝撃波があらゆる方向へと地面を深くえぐりながら突き進んでいく。民家に激突して家が崩壊し、市民にあたって血を流して倒れていく。ファントム・ブラックの悪の行いで罪のない人間の遺体と肉塊が道路に散らばっていた。

「ンフフフフ・・・そろそろお膳立てもいい頃だな。私の宿敵、ロクマンが時期ここに来るはずだ。待っている・・・今日ここで貴様の首をとってやる！！ンフフフフフ・・・」

そういつてファントム・ブラックは奇妙な笑みを広げて叫んでいたのであった。その頃、スカイウェーブ太平洋上空では――――。

「あの暁さん、聞きたいことがあるんですが」

スカイウェーブをWAXA遊撃隊が移動中の所、スバルが電波変換しロクマンという姿になっている状態でアシッド・エースに話しかけた。それを聞いたアシッド・エースは視線をそらさずにただ

前だけを向いてロックマンの質問に答えようとする。

「ん？どうしたスバル？」

「さっき、WAXAで暁さんが言っていましたよね？2189年だったかにインドネシアで戦争が終結したと」

「ああ、確かにそうだった。俺の言ったことは事実だ。あの国は過去に忌まわしい記憶が人々の心に刻まれている。だから二度とそういう戦争行為をしないように核兵器は所持していないし、銃などを必要上最低限しか所持していない」

「じゃあ、ファントム・ブラックはインドネシアで……」

ロックマンはそのことを冷静になって考える。ロックマンの頭の中で冷静に、そして簡単に解明した結果、ファントム・ブラックは何かの『意図』があってやっているのではないか？という答えに辿り着いたロックマン。

「ああ、そうだ。多分、なぶり殺しにすることが奴の目的だろう。WAXAでインドネシアの中枢部とアクセスしてみたんだが電波体に対応できる兵器もないそうだ」

「だったらおかしくありませんか？インドネシアは戦争をしない国。戦争をしないのに襲撃されるなんて……」

「現地に行って奴に聞いてみれば全てが分かる。とりあえず急ぐぞ」「了解……！」「」

アシッド・エースからそれを聞いたWAXA遊撃隊はスカイウェ

ーブの移動中お所を少し飛ばしていったのであった。5本の光が束となり、綺麗な線をお描きながら目標の場所へと音速の速さで突き進んでいく。そして彼らはようやくたどり着く。目標の場所、インドネシアに。

「ついた・・・」

「はっ！！」

ロックマンがひとつの溜息を出した瞬間、ロックマンとハープ・ノートと、オックス・ファイアとジェミニ・スパークは息を飲む。そこに広がっていた世界はあまりにも無慈悲な風景。血や肉で赤く染まり、そして煙を立てる火も上がっていた。煙がもくもくとかなり高い上空までとあがっていく。戦争と争いの証拠が現れている。

「これは・・・ひどい・・・」

遊撃隊に視界に写ったのは無残に散ってしまっている都市と血まみれになっている市民の姿だった。それがようやく理解した一同はおもわず口を手をあててこの気持ち悪さで体の中から込み上げてくる物質を抑えようと口を片手で抑えた。

「一体、どうしてこんなことを・・・」

「それは貴様達をおびき出すための策だよ」

突如、建物の上にたたずんでいるファントム・ブラックが言った。その声でロックマン達が声のする方へ向く。ファントム・ブラックの姿が映った5人はそれを見て思わず目を丸くした。彼がまた現れた。もうしつこいと思っているのは数名ぐらい入るだろう。少なくともウォーロックは確実だ。彼はファントム・ブラックの事を非常に嫌っている。

「何が目的でここに現れた!! 答えろ!!」

ロックマンが再びファントム・ブラックが出現したことにより大きく警戒心を高める。もしかしたら自分は記憶にないが、遊撃隊のメンバーが言っていたように何かをされるかもしれない。そんな事をロックマン達は意識していた。

「それは・・・まずロックマン・・・星河スバルを殺し、そして我が意志でこの世界を破滅させる」

ファントム・ブラックは素直にロックマンの質問に答えてくれた。世界を破滅させる。それを聞いたロックマンやアシッド・エースは何故、それを実行しようとする、彼の行動に理解できない心境を抱く。

「お前はリフェイムの手先ではないのか!？」

まず最大に気になること、ロックマンが大声でそれを質問した。

「そんな自立組織には入っていない。己の意志で行動しているだけだ」

ファントム・ブラックが右手に持つ自分の得物、ステッキを軽く振り回しながらそう言った。

「じゃあもう一つ聞く。なぜスバルの記憶をコピーしたんだ？」

「おっと・・・それは黙秘だ。そろそろ茶番は終わりにしよう。今日ここで貴様の命を頂くぞ!! 星河スバル!!」

突然、ファントム・ブラックが距離をつめる。突然、接近してきたため遊撃隊は少し反応が遅れる。

ファントム・ブラックの狙いはもちろんロックマン。ロックマンに一直線に向かってくる。それを見たロックマンは若干、反応は遅れてしまったが、ウォーロックの一言により少しだけ早く反応が出来た。また相棒に借りが出来たと思うロックマン、星河スバル。

『来るぞ!! スバル!!』

「わかってる!! バトルカード!! バリア!!」

バトルカードにより発生させた効力をもったカードはロックマンに青いバリアが包んだ。その直後にロックマンとファントム・ブラックの距離を完全に埋め、ステッキの攻撃範囲内にいるファントム・ブラックがステッキを大きく振りかぶる。

ガアン!!!!

バリアが攻撃を防ぎ、ステッキがはじかれてファントム・ブラックに隙ができた。戦闘経験が豊富な暁が僅かな隙についてロックオンソードで攻撃しようとする。

「であああああああああ!!」

暁が勢いよくふりかぶり、その勢いを剣に乗せファントムに切りかかろうとした。だがその行動が来ると予測していたファントムが素早く体重移動して暁のロックオンソードをステッキでとめる。

ガギン!!!!

とファントム・ブラックのステッキとアシッド・エースのロックオンソードがぶつかり、あたりに火花を散らす。同時に轟音によってあたりの空気も激しく揺れる。そして鏢迫り合いになる。ステッキとロックオンソードがギチギチと奇妙な音を立て始める。そして周りで構えていたツカサがエレキソードで斬りかかろうと接近する。

「もらったあああ!!」

声を上げ電気がまとった剣でジェミニ・スパークが躊躇なく斬りかかろうとする。仲間のナイスフォローにアシッド・エースは小さな笑みを漏らし次の攻撃にどう展開しようかと頭の中で短くイメージを広げる。そううまくいったと思ったのだが、ファントム・ブラックにはもう一つの手がある。

「あまい!!」

ファントムはぎりぎりまで引き寄せた瞬間に目に見えない速さで移動してジェミニ・スパークの後ろに向かった。ジェミニ・スパークの目の動体視力がファントム・ブラックの動きについていけなかった。神速の速さで完全にジェミニ・スパークの背後をとった。

「な・・・一体どこに?」

「ジェミニ・スパーク! 後ろだ!!」

アシッド・エースはジェミニ・スパークの後ろにファントム・ブラックがいることにいち早く気づいていた。それを察知したアシッド・エースはジェミニ・スパークに声をかけたが一步遅かった。

「このおっ!!」



ジェミニ・スパークが振り向き様に電気の纏ったエレキソードを振る。空気を切り裂く音と、電撃が纏っている音がファントム・ブラックに襲い掛かるがあっさりとかわされる。

「おっと」

ファントム・ブラックは余裕にかわす。

「ではそろそろこちらの番だ。ファントムクロー!!」

ファントム・ブラックの胴からはなたれた鋭い爪の腕がかなりの速さで手がジェミニ・スパークに襲い掛かる。勢いよくジェミニ・スパークに襲い掛かってきたため反応が遅れてしまった。

「ぐああああああ!!」

よほど早かったのだろう。反応どころが一步も動けないままファントム・ブラックのファントムクローの手の中に捕まってしまった。そしてファントムクローがジェミニ・スパークを握りつぶす。ファントムクローがジェミニ・スパークに圧力をかけて潰そうとする。

「うっ!ぐああああああ!!」

全身をつき向ける激痛と共にジェミニ・スパークは悲鳴を上げた。ファントムクローに拘束されているジェミニ・スパークの体から何かが砕けていく奇妙な何かが擦れる音と、悲鳴が戦場に無情にも轟いた。

「己の無力さに悔いるがいい。そして電波変換できるようになって

しまった事に後悔するんだな」

「や、やめろ……」

ジェミニ・スパークが苦し紛れにいった。彼の表情には生気が感じられなかった。両腕は力なく垂れ下がし、あがこうとしても強大な力により抵抗できなかった。そして自分の体に残っているわずかな力を振り絞って声をどうにか出した。それでも小さく、力弱い無慈悲な声だった。

「……………わかったよ……………ンな訳ねーだろ！」

ファントム・ブラックが拘束しているファントムクローがジェミニ・スパークを拘束している力が若干緩み、ジェミニ・スパークは力がフツと抜けてしまう。だがファントム・ブラックは力を抜いたわけじゃなかった。彼らの要望に受け入れたのではなかった。要望の反逆と共にファントムクローがますます強くジェミニ・スパークをさらに強く握りつぶす。

「ンフフフフ。楽には殺さない。苦しめ！！もがけ！！貴様のその激痛と悲鳴を私に伝えろ！！最後はなんだ？好きな人か？それとも思い出が走馬灯の用に駆け巡っているのか？」

「皆……………」

ジェミニ・スパークは意識を失いかけていた。それを見て、震えているロックマンがいた。決して、怯えているのではないのだろう。きつと怒りで震えているのだ。拳には大きな力が入っている。電波変換している為、手の色は青くなっている分らないが、きつと彼が拳に極度の力で紫色に手が変色しているだろう。これは彼が仲間に対する愛の感情の表れだ。

「やめろ————!!」

ロックマンはファントム・ブラックに対しての怒りの感情を抑えきれず、怒りの感情に身をゆだねてしまった。ロックマンは禁じられた技に手を出す。ノイズドライブのオーバードライブを強制作動させた。

だが覚悟はあった。これ以上、仲間を失いたくない。大切な場所を失いたくない。その感情だけが彼を動かした。

『ピピ! ノイズドライブ、オーバードライブシステム作動——。ビー、ビー、オーバードライブ異常アリ。警告! 警告! 異常アリ……』

『おいスバル、これはまずいんじゃないか?』

「これをやらなかったらジェミニ・スパークは死んでしまう。やらないよりはマシだ!!」

『分かった……お前の好きなようにやるんだ!』

「ノイズチェンジ!! ジェミニノイズ!! タッグ機能、エドギリブレードX!!!!」

ロックマンは禁じられたオーバードライブを使う。僕は構わない。ツカサ君を救えばそれで十分だ。

そんな理念を抱いたロックマンはノイズチェンジで攻撃ソード特化されたジェミニノイズに切り替えた。そして使えば使うほど強くなるまるで身を傷つけて強くなる秘剣ムラマサブレードとは全く違う剣だった。日本刀のような太刀筋をした剣がロックマンの手によっ

て大きくファントム・ブラックに向かって振り下ろされる。

「でああああああああああ！！」

ロックマンは勢いよくファントムクローの腕に斬りかかる。そして勢いのついた剣は綺麗に斬れた。

そして手から解放されたジェミニ・スパークは地面に倒れこむが、それをロックマンが回収して安全圏へと非難する。そして安全圏へと非難させたジェミニ・スパークを見て息をしているのを確認しファントムへと向かった。そして黒いマントを付け、ステッキを持った男、ファントム・ブラックを見た瞬間、こいつだけはもう絶対に許さないとロックマンは堪忍袋の尾が切れた。

「ファントム・ブラック……………僕は君を許さない！！でああああああああああ！！」

ロックマンは怒りの信念に燃えていた。ファントム・ブラックの禍禍しいオーラに屈しない気合でロックマンはエドギリブレードXを片手に果敢にファントム・ブラックに向かう。ロックマンはオーバードライブを使っているため、3倍近い速さだった。彼自身がまるで風のようになり緩急ある動きでファントム・ブラックを翻弄する。そしてロックマンはファントム・ブラックの背後をとってエドギリブレードで思い切り切り斬りかかる。反応が遅れたファントムは、ステッキを前に出し剣を防いだ。剣がぶつかる音と、空気を揺れる音がする。

「まだだ！！僕には、右手がある！！」

ロックマンはあいている右手で攻撃動作に展開する。エドギリブ

レードを召喚しそれを使って防御の態勢になっているファントム・ブラックに突きを繰り出した。だがギリギリで反応したファントム・ブラックはかわそうとした。

「遅い!!」

ロックマンはさらに後ろに回り込んでエドギリブレードを天に掲げるようにして斬りかかる。だが、それを読んでいたのか、ファントム・ブラックはマントを回転させて周囲にいるものを刻んだ。空気も切り刻まれて空気の真空波、鎌鼬もまき散らされていた。

「君のバトルスタイルなんて手に取るようにわかる。TKタワーの初対決以来君とは何回も戦っているからな。さてそろそろ決着をつけようではないか……………」

ファントム・ブラックはマントで吹き飛ばされ鎌鼬の洗礼を浴びたロックマンを思い切り膝蹴りで吹っ飛ばした。ロックマンの叫び声と共に勢いよく吹っ飛ばされる。だが叫び声よりロックマンが膝蹴りをされた方の音が大きかった。大きくまるでボールのように吹き飛ばされたロックマンは血を口から吐き出しながら辺りを自分の血で赤く染めていった。だがロックマンは立ち上がった。

「大丈夫？ スバル君？」

心配したハープ・ノートが近づいてくる。大切な人が近づいてくることを察知したロックマンは全身に痛みは残っていたがすこし我慢して仲間に余計な心配を与えないように気遣いをし、自分はこんなことを言った。

「大丈夫。これぐらいどうってことないよ」

「二人ともくるぞ!!」

ロックマンはハープ・ノートにそう言った。その一声を掛け合っているのを見た一瞬だけ見たアシッド・エースは二人の空気を換えようと声を出した。そしてファントム・ブラックが接近してきた。その様子を見た一同は各自、構える。その直後、不幸なことがロックマンに降り注ぐ。

『ビー!、ビー!、ノイズドライブシステム\*オーバードライブシステムエラー発生!! エラー発生!! ノイズドライブシステム緊急停止します』

「なんだって!?!」

ヨイリー博士抜粋のプログラムが停止したことによりロックマンはそちら側に気がとられてしまう。地小さな破損音が聞こえ、そして機能が完全停止した。それを見たアシッド・エースは思わず、

「戦闘中に何を言っている!! その行動が命取りだぞ!!」

怒鳴るようにいった。その様子を漠然と至近距離で見ていたファントム・ブラックはこの好機を見逃さず急接近していく。

「ンフフフフ……。隙あり!!」

ファントム・ブラックが距離を埋めながらステッキを振り上げた。そして距離がちょうどいいところに達した所でファントム・ブラックはロックマンを狙いに定めて大きく振りかぶる。

「そうはさせない!!」

だが一人の少女、ハープ・ノートが叫びギターの弦を飛ばした。ギターの弦が向かった先は、ステッキを持っている右腕。弦が右腕に絡み付き動きを封じた。

「今です!!」

ハープ・ノートがファントム・ブラックの動きを拘束したことにより大きな隙が生れた。その様子を見たアシッド・エース達は次の攻撃に展開する。

「メテオレーザー!!」

「オックスファイア!!」

「ペインヘルフレイム!!」

ロックマン、ハープ・ノートを除く、三人の間接技がファントム・ブラックに向かって炸裂する。だがそんな光を放つ大技を見てもファントム・ブラックは涼しい余裕の表情だった。

「ンフフフ・・・そんな攻撃!」

ファントム・ブラックは自ら回転してマントとステッキをうまく使い跳ね返した。そしてそのアシッド・エース達が自ら放った技が跳ね返り大きな傷を負った。そして煙と共に大きく吹っ飛ばされた。跳ね返された一撃が不意を呼んでしまった為、すこしでもダメージ軽減することが出来なかった。

「とどめだ!我が最大の技!!ダークネスクロー!!」

ファントム・ブラックがステッキを捨て、右手を空に向けた。右手の上の空間が次々に割れて、異次元空間みたいな空間が現れた。そこから大きな黒い爪の尖った右腕がでてきた。尖った爪が陽光を反射する。かなり切れ味がいいと見える。それを見た一同はファントム・ブラックの究極の大技に固唾を飲んでしまった。恐怖で足が動かなかった。

「シフフフ・・・切り刻んでやる！！はあああああ！！」

ファントム・ブラックは奇妙な笑い声をあげながら召喚されたダークネスクローの右手を振り下ろし、ダークネスクローが三人に襲いかかる。だが三人はファントム・ブラックのダークネスクローの攻撃の洗礼をどうにか間一髪回避する。ダークネスクローは易々と地面を軽くえぐった。それを見た遊撃隊は固唾を飲む。こんなものを喰らったら間違いなく生命を剥奪されるだろうと悟った一同。

「少々、手元が狂ったか・・・。次は外さない！！でああああ！！」

今度は縦から振るのではなく横から振った。そうした場合範囲が広いのだろう。尖った爪が完全に回避しきれない三人を捕らえかける。必死に避けようとする三人だが、怪我を負っているため身体が言う事を聞かなかった。それだけではない。圧倒的な圧力と、恐怖もあった。

「はっ！！」

再び、ハープ・ノートがファントム・ブラックの右腕に向けて、弦を発射した。弦が右腕に拘束し、動きを封じる。だがファントム・ブラックは覇気で消し飛ばす。そして執拗な高速攻撃に頭にきたフ



ファントム・ブラックはターゲットをハープ・ノートへと変える。

「さっきから私の邪魔をしているな！この生意気な小娘が！！」

そう声を放ったファントム・ブラックはダークネスクローでまずハープ・ノートは後の優先として三人を捕らえた。そしてファントム・ブラックの大きな大人の叫び声がアシッド・エース達に鋭い爪が襲いかかり、三人を確実に捕らえた。大きく吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられる三人。

「「「ぐあああああああ！！！！！！」」」

三人が身体を突き抜ける激痛に悲鳴を上げ、電波変換が強制的に解除される。

「次は貴様の番だ、小娘……。己のした事に後悔するがいい」

ファントム・ブラックの気迫と恐怖で身体が強張っているハープ・ノートは動く事ができなかった。一步、一步、また一步とゆっくりとそして確実に距離が縮んでいく。自分が恐怖に陥っていると分かっている体を動かそうと命令してもいう事を聞かない自分の体。

「ミソラちゃん！！」

ロックマンが動き出すが距離がある。そしてファントム・ブラックとハープ・ノートの距離が1mぐらいになった。ハープ・ノートはある記憶が頭で流れていた。それは楽しかったあの思い出。

（ああ、私はここで死ぬ……。んだ。スバル君と付き合ってからまだ一ヶ月弱しかたっていないのに、私はここで朽ち果ててしまうのか

な?・・)

ハープ・ノートはこの状況なのに、恐ろしい程、自分の状態と判断が明確だった。自分の体が冷たくなっていくような感覚がした。そしてファントム・ブラックが放つダークネススローからステッキでの攻撃に切り替えたファントム・ブラックはステッキで突きをした。だが攻撃をする瞬間、一筋の影がハープ・ノートとファントム・ブラックの間に割って入る。それはロックマンだった。そしてロックマン速攻ではシールドを展開した。そしてステッキとシールドがぶつかり合う。

「味方を助けるために自分の命をかけるか!!」

「僕は大切な人を守りたいだけだ!!」

「スバル君……………」

ハープ・ノートはただロックマンの大きな背中を見ているだけだった。倒す意思と守る意思がぶつかり合う。シールドとステッキ、有利の方はファントム・ブラックだ。両手で防いでいるロックマンに対して、ファントムは片手が空いている。さらにステッキは突きをしているため一点を集中して攻撃する。

それに対して、シールドは全体を防ぐため一点に関してはそんなに強度が高くないはずだ。シールドが少しずつステッキに押し負け始める。

(まずい、このままではやられる……。だがミソラちゃんは命にかえても守る!!)

必死でステッキからの攻撃をガードするがついに破られた。

「うわああああ!!」

ロックマンはシールドが破壊されて大きく吹っ飛ばされた。

「さて、邪魔者は消えた。まず貴様を潰し次にじっくりとロックマンを仕留めてやる」

「ミ、ミソラちゃん!!!」

ロックマンが叫んだ。ハープ・ノートは恐怖により動けない。ロックマンは神に祈った。けど何も変わらない。刻一刻と神が作った極悪非道のストーリーが進んでいくだけ。だがロックマンはその作られたストーリーを壊そうとした。

「い、い、いやああああ!!!」

ハープ・ノートは恐怖により頭を手で隠した。そして無防備でファントム・ブラックの前にいるハープ・ノートがいる。大きく振り上げられたステッキがハープ・ノートに向かって近づく。空気を切り裂く轟音を立てながら。

「ミソラちゃん!!!」

その時、ロックマンは自分の行動に後悔はしなかっただろう。自分の言った事に後悔はしていないのだから。神が作ったストーリーをロックマンは壊した。それがこの道だった。

ズバシュ!!!

何かが何者かの体貫通した。赤い液体が重力に吸い込まれて地面に落ち、そして弾けた。ハープ・ノートはそうっと目を開けた。自分の体がなんともないということに。そして顔を前にした瞬間、そ

の目に写ったのは、ロックマンの身体の横腹にステッキが貫通している姿だった。貫通している部分からは大量の血が出血している。皆はその姿を見て、大きく目を開く。

「ミソラちゃん……大丈夫だね……よかった……」

ロックマンはそう言い、その場に倒れ込んだ。倒れこんだ衝撃で血がさらに吹き出していく。鮮血真紅の血が大地を赤く、黒く染めていく。

「スバル君!!」

ハープ・ノートは心配して、倒れている血を滝のように流しているロックマンに思わず駆け寄る。

「ン、ンフフフ!! 我が宿敵ロックマンを倒したぞ!! ハハハハハハハ!!」

ファントム・ブラックは天に向かって笑う。暁達は仲間が目の前でやられたのを見て黙っていられなかった。そして無理矢理電波変換をした。呼吸は荒い状況。一発喰らえば立てなくなるだろうという状況だった。

「そんな死に体に近い身体で何ができる？」

「黙れ!! 貴様だけは絶対に許さない!!」

そしてロックマンを見ているハープ・ノートは必死の思いでロックマンの名前を叫んでいた。顔には一杯の涙を浮かばせて、目を真っ赤にさせていた。必死に大きな声でロックマンを呼ぶ。だが彼

に反応はない。

『ミソラ！！スバル君達の周波数が消えていくわ・・・。おそらく彼はもう・・・』

そう、彼は大量に出血をしていた。さらに貫通していたため、各器官がつぶされている可能性だってある。

「ンフフフフ、ロックマンは完全に瀕死の状態のようだな。このままでも死ぬ可能性は十分に高い。ならばあの小娘にさらなる絶望を与えてやろう」

「何をゴチャゴチャ言っている！！お前の相手はこの俺だ！！」

アシッド・エースは完全に怒っていた。怒りに任せてしまい、あまりにも無謀すぎる攻撃をする。ロックオンソードを召喚し、勢いよく正面から接近した。

「ロックオンソード！！」

「フ、そんな攻撃……………」

剣とステッキがぶつかりあう。アシッド・エースは反動で後ろに押されてしまう。

「ンフフフフ、ロックマンよ消えるがいい……………」

ファントム・ブラックが奇妙な手の動きをしたのち、突如、ロックマンの下に黒い空間が広がり吸い込まれていった。

「あれは俺達が吸い込まれたことのある穴だ……………」

オックス・ファイアがそういった。神が作ったストーリーを打破し、新たに作られたストーリーがこの最悪の結末と化していく。それが――――

「スバルに何をした!!」

ジャック・コーヴァスが怒り狂ったようにいった。

「なあに、この世界のどこかに飛ばしただけさ。彼はもうじき死ぬだろう。だから私が一人で死んでしまう恐怖を与えたのだよ」

「お前はどこまで卑劣なんだ!!」

「人間誰だってそうだろう!! 動物の命を奪い、その上自然を伐採し地球を死の星へと変革させている。私もお前も卑劣な人間なのだよ!!」

「ス・・・バ・・・ル君・・・」

大切な人が突然目の前から消えてしまった。その時、ハープ・ノートの中で何かが起きた。それは記憶だ。その記憶はスバルとの思いで。初めてコダマタウンで出会ったスバルとのファーストコンタクト。人生に光を指してくれた事。ブラザーバンドを結んでくれたこと。ラ・ムー事件で迷っていた私に進むべき道を指してくれたこと。そして伝えたい思いを告げた事。その他にも彼との思いがある。これからも彼とのいい思い出を作っていきたかった。だがその彼、スバルはここにはいない。あるいはこの地球にもう存在しないかもしれない。

(う、う、うわあああああ!!!!!!!!)

ミソラは空に向かって絶叫した。そして地面に膝をつき、ミソラ

は動かなくなった。精神的に負荷をかけてしまったことによる症状だ。それを見たアシッド・エースはハープ・ノートを見る。

「これは!!?」

アシッド・エースが思わずハープ・ノートがの状態を見て驚いた。

『シドウ、響ミソラの精神状態が崩壊しかけてます。おそらくスバルの影響なのは』

「そんなことわかってる!! 至急ミソラとツカサを回収!! この地より撤退する!! WAXA本部、サテライトキャンセラーをインドネシアを目標に照射してくれ」

とアシッド・エースが通信使、WAXA本部と連絡が伝わる。

「了解!! サテライトキャンセラー照射!!」

そして空から特殊周波数が降り注ぐ。ファントム・ブラックは強制的に電波変換が解除された。

「一体、なんだこれは!!?」

「今だ!!」

遊撃隊はスカイウェーブに向かい、撤退したのであった。スバルは生きているのか、ミソラ達に今後どんな影響をもたらすのか、暁は不安でいっぱいだった。

下を見ると綺麗な海が広がり、上には地球を明るく照らす太陽と青く染まった果てしない空、そしてそれを白で彩る雲。場所は太平洋スカイウェーブ上空。ここでWAXA遊撃隊はいた。現在スカイウェーブで遊撃隊は一時休憩していた。さきほどの戦いでロックマンは生命の危機に晒されており、さらに世界のどこかに飛ばされてしまった。その上、ハープ・ノートは精神に負荷がかかり意識が混濁。ジェミニ・スパークは全身を圧迫され、負傷している。現戦力となるのはアシッド・エース、ジャック・コーヴァス、オックス・ファイアの三人だ。負傷者を二人を抱えて移動するとなると移動速度も格段に下がる。

「くそおおお!!!!!!」

怒り狂った声が無情に長く高く、怒りと憎しみと悲しさが含まれた声がスカイウェーブ上空に鳴り響く。その怒り狂った声を上げたのはジャック・コーヴァスであった。仲間が傷つけられ、自分は何もできずにただ漠然と震える足をどうにもできずにただ見ていた。仲間が消えていく様を――。

「ちくしょう・・・、無力な自分が憎い・・・。くそおおお!!!!!!」

友を失ってしまった悔しさで自我を抑え切れなくなっている。スカイウェーブのウェーブロードに拳を叩き付けている。そばにいたデンパクンがウェーブロードのメンテナンスをさせないでくれという表情で見ている。



「まあ、少しは落ち着け……………」

アシッド・エースは周囲を警戒しながら怒り狂っているジャック・コーヴアスにそう言った。

「なんで、アンタは気楽に言えるんだよ！！仲間がこんなにボロボロにされて、悔しくないのかよ！！」

「……………」

アシッド・エースは長く黙ったままだった。その様子を見て思わずジャック・コーヴアスはアシッド・エースの胸ぐらをつかんで叩こうかというところにまで達していた。

「その上、スバルは致命的な怪我を負っていて、下手したらもうこの世に存在してないのかも知れないんだぞ！！」

「……………」

再び、アシッド・エースは長く何かを見つめるような冷たい眼で口を閉じたままだった。沈黙の時間が長くスカイウェーブ上空で続く。

「俺はスバルが血を流して倒れていく姿を見て、スバルを負傷させたアイツが許せない。アンタはどう思ってるんだ！！」

「……………感情的になってしまっってはだめだ。少しは冷静になれ」

「なっ！？……………アンタは……………」

アシッド・エースからの事B名を聞いてジャック・コーヴアスはついに怒った。拳に力を込めて思い切り殴りかかろうとし、同時に

次の言葉を言おうとした瞬間。

「俺だって悔しいさ！！！仲間をあんな目にあわされて、その上、スバルに致命的な傷・いやあるいは既に死亡しているかも知れない……」

「……………」

ジャック・コーヴァスはアシッド・エースの右手を見た。彼の手には凄いほど強い握る力が入っていた事を。手の色が紫になるまで変色していた。よほど彼も悔しかったのだろう。それはここにいる人全員当たり前。オックス・ファイアも、ジェミニ・スパークも、ハープ・ノートも悔しかった。

「仲間を怪我させたアイツが許せない……。そういう気持ちは俺もお前もゴンタだってそうだ。だからといって、感情的になってしまつてはダメだ。敵討ちとか恨みとかで相手にぶつけてはいけない。冷静に動いて安全に対応する事が必要だ。敵討ちだからと言って、死んでしまったら何の意味もないだろう、ジャック……。だから落ち着け。今は冷静になれ……」

「チツ……」

ジャック・コーヴァスはどうも納得できない感じだった。どうしても一矢加えなくては収まらないらしい。よほど彼のことを大切に思っているのだろう。

「急ぐぞ。ジェミニ・スパークとハープ・ノートの容態が心配だからな」

そしてWAXA遊撃隊はそれぞれ思いを馳せて日本へ向かった

のであった。そして彼らは辿り着く、ニホ

というなの自分たちの母国に。そしてニホン場所はWAXA医療室。ツカサは身体に負傷。ミソラは精神状態の不安定になり、二人はメデイカルチェックを受けていた。ピコーン、ピコーンと機械の音が医療室に小さく鳴り響く。人工呼吸器を取り付けられている二人。心配して見ている、暁達。そして医師がミソラ達の検査を終えた後、状態を報告した。

「ツカサ君は肋骨の1本がもってかれています。少しの間、療養が必要です」

「そうか……、ミソラの容態は………」

「彼女は今、精神状態が混濁、不安定なので暫く安静にさせて起きましょう。後は彼女が目覚めた時、現実に向き合えるか……ですね。貴方から聞いた話によると、あの時、負荷をかけすぎたんでしょう」

それを聞いた暁は予想外の解答だったのか気難しい顔をする。これじゃWAXA遊撃隊は壊滅状態に等しいじゃないかと思う暁。

「そこんところは俺もうすうす感じていた」

「問題はここからなんです。彼女は精神状態がかなり不安定。現在、スバル君は行方不明。その事が原因で目覚めた時に再び自分に負荷をかけてしまう可能性がある。再び負荷をかけてしまった原因で最悪のケースに陥る可能性がある……」

「もしその最悪のケースになってしまった場合………?」

その最悪のケースが気になり暁は尋ねた。その答えが、

「……あまりしたくことでは無いんですが、彼女の記憶を消す……いや上書きするという所です」

「つまり、スバルとの記憶を消すという事ですか？」

スバルとミソラの出会った過去から現在の記憶をすべて消すということだ。再び、彼女はスタートラインにたって新たな人生を迎えるということになる。

「そうです。今、ミソラ君の里親はスバル君の両親でしたよね？」

「ああ、そうだが」

「記憶を操作してスバル君とは出会ってない関係にして星河一家に何年か前に引き取られたという記憶を上書きするという得策がありますが・・・？」

暁は考え込む。そんなことをしていいのか。それをして喜ぶ人はいろのかと考え込む暁。

『そんなことは絶対にダメ！！！！』

ハープが突如、話に乱入してくる。どうやら壁のむこうで聞いたのだろう壁をすり抜けて入ってきた。

『そんな事をして誰が喜ぶの？ 悲しむ人が増えるだけじゃない！！』

WAXAの医師は考え込む。それを当たり前だ。記憶を消されて自分が全くなんなのかという不可解な感覚に襲われて再び人生のスタートラインに立つ。これじゃ不幸なことに襲われると思った医師。

「分かりました。だが彼女に生命の危機に触れた時、その時は何をするか分かりませんのでそこを理解しててください」

『ええ、分かってるわ。ミソラとまだいたいもの』

そして、星河スバルが行方不明になった事により、WAXAでは衛星からでの見つける作業に入っていた。

スバルが行方不明になった事を知ったあかねは飛ぶようにWAXAに來たのであった。そしてWAXA―――。

「大吾さん!!」

あかねは大吾を見つけると一直線に向かってそして泣きはじめた。それを見た大吾は目の前でなく母親を優しく自分の手であかねの頭にあてて安心させるようにした。

「大吾さん。スバルは、スバルは大丈夫なの？」

「すまない、俺にも分からないんだ。どこにいるかさえも………」  
「そんな……」

それを聞いたあかねはますます不安になってしまう。

「だが確信は一つある。ゴンタ君、スバルとのブラザーバンドはまだあるな？」

「あ、はい。あります」

ゴンタらしくない口調を使っていた。ここにルナがいたらきつと彼女は背中にもむしずが走って何か一言言っているかもしれない。

「まだ結ばれている事はまだスバルは生きているかも知れない」  
「その可能性はあるな」

暁は司令官のその意見に納得する。

「後は、スバルの生命力がどれだけ持つのかだな」

「今は、決定的な情報が少なすぎる。スバルが今、どこにいるのか、何をしているのか、生きているのかさえ、全て明確ではない」

「今は各国と連携してスバルの搜索だ」

暁がそういい、その後、あかねに近寄った。そして頭を深々と下げた。

「すまない、あかねさん、大吾。俺が力不足のせいで二人をこんな目に合わせてしまって……」

「お前のせいじゃないさ。自分を責める必要はない。アイツはアイツなりに戦っていたはずさ」

「だから今は待とう。ミソラの復帰とスバルの帰りを」

「ああ、そうだな」

こうして、スバルを空から探しながら、帰りを待つのであった。彼らがいつ目覚め、いつ帰ってくるのか、若い二人にたたき付けられた試練のようだった。

## Trail 40 私に戦う!

曉達が戻ってきてはや一週間。季節は夏を向かえようとしていた。ミソラとツカサ、彼らはまだ目覚めていなかった。この一週間、スバルの捜索をしていたのだったが何の進展もなかったのだ。スバルが所持しているハンターVG。スバルの所持しているハンターVGが発する電波を特定して探してみたが、場所を特定することは出来なかった。生存、場所すら不明。彼は今どこで何をしているのかすら分からなかったのだった。そしてさらに三日経過してはや10日が経過した早朝。WAXAのメディカルルームの医療ベットで寝ていたミソラが目覚めた。

「う……………ん？ここは一体？」

一週間半ぶりに目覚めたため視界が少しぼやけている。そこに映った風景は何かの天井。気付いたら私はいつのまにか寝ていたんだと、ふらつく体を起き上がらせるミソラ。

「私は一体、何故ここに？・・・」

そう、ミソラは負荷をかけすぎてあの時の事をよく覚えていないのだ。

スバルがミソラの目の前で大怪我をした所までは覚えている。だがそこから自分が何をしていたのかは覚えていない。

何故、自分がその記憶を覚えていなかったのか、自分の記憶の断片を自分の頭でまとめて、一つの答えにたどりついた。

そう、スバルは一体、何をしているのか――。

「スバル君は!？」

ミソラは慌てて、医療ベットから降りて、スリッパを履いてメデイカルルームのドアに向かった。

ドアの前に立つが扉は開かない。

どうやらセキュリティロックがかかっているようだ。

「なんでこんな時にっ!・・・」

扉を叩くが何の変化もない。

ただ自分の手が痛くなっただけだった。

「そうだ!!」

ミソラは自分のベットの横のテーブルの上に置いてあるハンターVGを取った。

だがハンターVGにハープの姿は無かった。

「ハープ? いないの?」



「・・・通信も遮断されてる。一体なんで？何の目的で？」

そうして、完全に手立てがなくなった。

結局、諦めたミソラは時間が立つのを待っていたのであった。

そして午前11時。

二人の男が部屋に入ってきた。

「よう、目覚めたか」

一人は暁だった。

「ミソラ、身体は大丈夫か？」

もう一人は大吾だった。

「お父さん・・・それに暁さん・・・」

（何故「それに」がつく！？俺に不満があるのか！！？）

暁は自分一人でツツコんでいた。

「一体、何があったの？」

「お前は戦い先で怪我をして意識を失った。その後は俺達とWAX Aで連携をとってどうにか生きて帰ってきたんだ」

「スバル君は？」

「・・・」

「・・・」

その質問をされて暁と大吾は黙って目配せをした。

どうやら「あの事」を言う決断をしたようだ。

あの日、スバルに何があったのか何故、スバルがいないのかを。

「ミソラ、落ち着いて聞いてくれ」

「な、なんなの突然？」

空気が変わった事により慌てるミソラ。

「実は・・・」

ミソラは暁の次の言葉に固唾を飲んで待った。

「スバルがお前を庇ってスバルが大怪我をしたまでは覚えているな」

「はい。そこからなんかゴチャゴチャしていてよく覚えていないです」

「その後、スバルはファントム・ブラックに神隠し？だったかという道具を使わされ、かなりの大怪我を抱えたまま、どこかに飛ばされてしまったんだ」

「でもスバル君は生きていますよね・・・？」

「悪いが生存も分からないし、場所も詳しく分かっていない。今は行方不明だ。スバルから連絡とかが来れば対応できるんだが・・・。もしかしたらスバルはもう・・・」

「え？・・・それはないですよね？スバル君が死んだかも知れないって・・・？」

「残念な事だがその確率が高いかも知れない。だがあいつは俺の見込んだヒーローだからな。俺みたいに地獄の底からはい上がってくるかも知れない。もう奇跡を祈るしかないんだ・・・」

暁はなるべくミソラに負担がないように話したのだった。

「そんな・・・そんなことって・・・」

ミソラは落ち込んでしまう。

（私だ・・・私に責任があるんだ・・・）

ミソラは自分のせいだと責任を感じてしまう。

するとその様子を見ていた大吾が、

「何もお前が責任を感じる必要はないさ。あいつはお前を守りたいから命をかけて守ったんだろ？命を守ってもらったんだから、お前はスバルの想いをも背負って精一杯、スバルの分まで生きてくれればいいさ・・・。それにな親子だからかな、あいつは死んでないって感じるんだ」

「・・・でも・・・」

「一番あいつの事を知っているお前が一番信用しなくてどうするんだ」

「・・・」

「お前はまだスバルと一緒に楽しみたいんだろ？」

「うん・・・」

「だったら信じろ。何年でもあいつの帰りを待ってやろう。信じなければ、悪い方向へと進むことだってある。皆、お前と同じでスバルの帰りを待つんだ。」

「そうだね」

「今は落ち着くんだ。こんな話をさせてすまなかった。心の整理をしておいておけよ。じゃあ俺達は仕事があるから」

そういつて、二人は医療室から出ていった。

「・・・・・・」

「私がスバル君と同じ境遇を持ち、あの時の出会いがあった事で今の私がいる。だからこそ同じ境遇を持ったスバル君とは息が合うし、付き合いたいと思った。一番、彼のことを知っている私が信頼しなくてどうする。私が一番信頼しなくちゃならないんだ」

「スバル君、私は待つよ。貴方の帰りがいつになるか分からないけど、私は貴方の帰りを何日でも何年でも待ちます。そう、貴方の事が好き、だから」

ミソラは両手を優しく合わせてそういつた。

## Trail | 41 偶然と必然

「うぐっ…………ガハッ!!」

一人の少年が真っ赤な鮮血を流しながら血反吐を吐きながら呼吸を激しくしていた。それは電波変換を解除したスバルだ。彼は黒い穴に葬りこまれた後、力を振り絞って脱出したが、もはや限界に近い状態だった。現在地は分からない。自分がどこにいるかすら分からない。見えるのは何にもない野原だけだった。上には太陽、地面は草原。それだけだ。

『ス…………バ…………ル…………大丈夫か…………?』

「いや、大丈夫じゃない…………よ」

『俺もだ…………』

スバルとウォーロックは己の力がでてこなかった。と同時にどんどん大きくなっていく寒気。

「少し休もうか……………」

『あ、ああ。そうだ…な』

こうして短い先の会話の後、二人は意識を失った。スバルは鮮血を流したまま気を失ったのであった。

一つの柔らかな風が野原の草を波ただせる。突如、その野原に二人の人影が現れた。だんだん足音が大きくなって、そして止まる。

「……………」

「……………」

一体、この二人はなんなのか、スバルはどうなっているのか、時は1週間後へと進む。

「……………」

スバルの意識が覚醒した。視界がぼやけていたためしっかりと合わせようと目を擦ろうとした瞬間、神経が悲鳴を上げて激痛がスバルの身体を突き抜ける。まるで全身に高圧の電流を浴びせられたような感覚がしたスバル。そして思わず全身を抑える。そしてまた痛みが走る。

「い、痛たた……………なんなの？」

痛みで一気に視界が元に戻り、自分の状態が分かった。視線の先は見たことない天井。その部屋独特の新鮮な空気調和された空気。そして自分の身体全体に包帯が巻かれ、右腕には輸血と栄養剤の点滴、人工呼吸器がつけられていた。機械の音が小さくなる。

「何故、一体ここに？それに何故、僕は助かっているんだ？」

自分が助かった訳が分からない。あの時は「死」を覚悟していた。なのに自分が生きている。誰かが助けてくれたのだろうか。気になっ  
て仕方がなかった。

「はっ……、ウォーロック？」

スバルは自分のハンターVGがないか辺りを探ってみた。あったのはハンターVGではなくハンターVGがメンテナンスになった時に使う代理の（サブ）ハンターVGだった。

「ウォーロック、いる？」

『……………う、うん……………ってお前生きていたのか！？』

ウォーロックはスバルと自分が生きていることに目を丸くして驚いている。

「なぜかね。何があったのかまったく分からないんだ」

『俺もだ。なんで生きているんだ？』

そういつてウォーロックは自分の頬をつねってみる。つねったら確実に痛みが頬を走った。

「一体、誰が助けてくれたんだろう？」

スバルとウォーロックがその最大の疑問を持つ。その直後、こちらに近づいてくる足音が聞こえてくる。そしてその一言と共に偶然が重なり、奇跡を起こす。

「それは俺達だよ」

突如、一人の若い男の声がして部屋に入ってきた。その声にした方向にスバルとウォーロックは無意識に顔と意識がそちらへと走る。そこには全くの見たことのない少年がただづんでいた。

「やっとお目覚めですね」

さらにもう一人の女の人が入ってきた。スバルは二人の容姿を見た。身長はスバルより大きい。歳は10代半ばだろう。



「えっと……貴方達は？……」

「おっと、これは自己紹介がまだでしたね。私はリサ・ラスト・ミレイン。リサと呼んでください」

リサという少女は自己紹介の挨拶をして礼をした。見た目は綺麗な瞳にそして癖のない艶やかな長い黒髪。そして顔にはミソラに匹敵するぐらいの笑顔がでていた。初対面なのにこの違和感のない雰囲気。只者ではないとスバルはそう悟った。

「俺はレイ・バルト・アルデント。レイと呼んでくれ」

彼は自信にみちあふれた顔つきをしていた。そして綺麗な金髪。見るからに俺に任せとけ的な、先陣を斬っていくさわやか少年風だった。

「えっと僕は……」

スバルは二人の自己紹介が終わった後、自分も自分が星河スバルっていう事を自己紹介しなくてはと一瞬焦ってしまった。

「世界を三度も救った青い流星、シューティング・スター・ロックマン……星河スバルだろ？」

レイが躊躇なく、そして彼が星河スバルだって確信があるような表情でそう言った。スバルは全くの初対面の人に自分の名前がそう知られているなんて思わず目を丸めてしまった。

「どうして僕の名を？」

「失礼ですが貴方のハンターV.Gを覗かせてもらいました。貴方の

個人情報や出身国など」

リサが若干引き気味でそう言った。さすがに全くの知らない人をここまで運び込む人はいないだろう。

「そうですか……。あのレイさん達が倒れている僕を助けて下さったんですね？」

「ああ、そうだけ。お前の怪我の様子を見た時はビビったけどな」

「あとここは？」

「ここはヨーロッパ、フランスです」

「そうか僕はフランスまで飛ばされたのか……」

「聞きたいんですが貴方は戦っていたんですね？」

「あ、はい。そうですが……一体それがどうしたんですか？」

スバルはそれが気になり、一応初対面でもあるため、学校で習った正しい言葉遣いというのを参考にして言葉を綺麗に言った。

「それ、全部ハッターだぜ」

レイが涼しい顔で言った。初対面なのに思い切りため口。とスバルは心の中で失礼なことを思っていた。そして突然の言葉にスバルは驚きを隠せなかった。それはそうだろう。戦ってきた相手が全てハッターの行動だからだ。驚くのは無理はないだろう。あんま巧妙なやり方。それがすべてハッターだと誰が思うだろう。

「一体、なんですか？」

『それは私が説明しましょう』

突如、謎の電波体が疾風の如くリサの隣に出現した。その姿を現した電波体は白い容姿に翼があった。見るからに天使という雰囲気醸し出している。

『私はウィンス。木星型電波星人よ』

彼女の声は綺麗で透き通るような声だった。それを聞いたスバルの相棒は何故か固まっていた。そして、

『木星型電波星人！？』

とウォーロックは素っ頓狂な声を広げてしまった。それに何故か無意識で便乗してしまい、スバルは驚いてしまう。

「知ってるの、ウォーロック？」

『ああ、滅多に姿を現さないから幻もしくは噂とされていた電波体だ。まさか本当にいるとはな』

そしてもう一人も疾風の如く、その場の空気を塗り替えるように颯爽登場した

。レイの隣から電波体が現れた。その電波体は黒に近くて、死に神みたいな雰囲気を出していた。右手には彼の得物であろうか。鎌が鋭さを醸し出しながら彼は手に持っていた。

『俺の名はヘルだ。以後よろしく』

見た目とは合わない言葉遣いだった。その見た目とは合わない漢字にスバルは若干気が狂う。

「まさかこの電波体も？」

『いや、違う。奴から発する周波数が違う。恐らく火星型電波体だろう』

『当たり前だ。俺は火星から来た・いや選ばれて来た・・ということころかな』

『さて自己紹介も終わった所で本題です。星河さん』

ウインスが自己紹介という名の空気から本題の空気に塗り替えた。それによりスバルは貴重な情報が得られるかもしれないため緊張を走らせた。背中に一筋の汗が駆け巡る。

『まず貴方はリフェイム・ウィングスを相手に戦ってましたね？そして奴らは世界を戦争のない国するとか言っていましたよね？』

ウインスはまるでこちらで起きた出来事がすべてわかっているように百発百中での確な出来事をすべてそう言った。

『あ、はい。戦闘してる間にそう言っていました』

『それにはもう一つ、深い意味があるんです。人と人が争うことで戦争が起きます。人がいるかぎり戦争は止まりません。そしてたどり着いた答えは地球にいる全人間の抹殺………』

ウインスが一言一言いうたびに物事がどんどん大きな方向へ進行していることが感じ取られる。もしかしてこれは前代未聞の事件に発展するんじゃないかという思考を抱いた世界の英雄。星河スバル。

「何故そんなことを？」

スバルは固唾を飲んで、質問したかったことを一言簡潔にそういつた。

『全てのきっかけは7年前の宇宙で起きたあの事件。人が宇宙人との交流をとろうとしたことです』

「宇宙ステーションの事か……」

『あの時、太陽系惑星付近の惑星とかは見つからないように警戒をしました。殆どの星が電波光学迷彩というのを使い、見つかることを逃れました。そして人間が宇宙人と交流をとろうしたことにより太陽系惑星全てが人間の済んでる地球を警戒しました。そして、一部の刺客を地球に送り込み、地球人のとっている行動を撮影してきただんです。その撮影した所は戦争をしていた地域。その撮影した動画は太陽系全土に知れ渡ってしまいました。それがきっかけで私達宇宙人が存在していることが気付かれました。それなら何をされるかわからない、殺されるかも知れない、私達は最悪の結果を予想しました。けど私達、太陽系に住む電波体はこのまま姿を隠すことにしました。だが二つの惑星、冥王星と海王星に移住する電波体達は人間は戦争を引き起こす生き物、我々、電波体に害を及ぼしてしまう存在とみなしてしまいました。だから7年前から今日まで奴らは人間を滅ぼす準備を少しずつ企ててました。そしてまず奴らの第一の計画がつい最近始まりました。世界の英雄、ロックマンを潰して、地球の戦力を疲弊させることです』

「……………」

スバルは黙ったままだった。数年前から計画始動していたことが父さんが行方不明になってから地球滅亡のカウントダウンが始まっていたんだとスバルは心のそこでそう思っていた。

『そして第二の計画が始まります。宇宙からの特殊電磁波による世界の停電発生。今は電気が無ければ何も出来ない時代。奴らはそこを狙いました。そして第三の計画。宇宙からによる直径60kmの隕石を地球に衝突させること。一億年ぐらい前にこれと同じ衝突事故が起きました。そして地球には極寒の世界が広がり、生物は次々と死んでいきました。奴らはそこを狙ってます。そして私達はその残酷すぎる計画を止めるために選ばれて地球に来ました。地球に来て、リサやレイと出会い、和解することが出来ました。そして、今日やっとこのことを貴方に話すことが出来ました、星河スバルさん。リサやレイがフランスの電波警察に言ってもただの悪戯と思われてしまう、だからこそこの事実を言って信じてもらえるのは貴方しかないと思います。どうですか？私達の話信じますか？』

「色々、話が理解できなかったけど簡単にいえば、地球にいる人間が抹殺されるんでしょう？それを知った貴方達は人間を守ろうとして地球にきてリサさんやレイさんと苦労して和解し、その事実を伝えにきた、という事でしょう？まあ突然こんなことを言われてまだ信じきれない部分はあるけど、それが本当なら僕は信じるさ」

『ありがとうございます』

『俺達の事を信じてくれて感謝する、星河スバル。共に守ろうではないかこの地球を』

「え、ええ、そうですね」

やはりスバルはレイのパートナー、ヘルの外見には似合わない性格に何か狂っていた。

「ではゆっくりと傷を癒してください。私達はこれで失礼します」

そういつてでていった。

「ねえ、ウォーロック」

『ん？どうした？』

「もし本当だったら、地球の人間が全員抹殺されるんだよね」

『そういつてたな』

「もしそうだったらまたつきあってもらうよ、ウォーロック」

『分かったぜ』

色々な事を知らされたスバルだった。そして二つの惑星がついに本格的な活動を始めようとしていた。

スバルが目覚めてから何日かが経過した。スバルと新たな仲間、レイとリサは喫茶店に來たいたのであった。

「スバルさん、退院したらどうなさるつもりですか？」

「とりあえず、スカイウェーブを経由して日本に戻る予定です」

「そうですか……。けど暫くは日本に帰れませんよ。貴方のハンターV Gを修理中ですから」

リサの言葉にスバルは自分の個人情報がたんまり詰まった携帯端末がこの人たちによって流出されたらどうしようと思っているスバル。だが彼らは自分を救ってくれた人。そんなひどいことをする人ではないなと心の中でそうあってほしいと思っている星河スバル。

「何日ぐらいかかるんですか？」

「貴方のハンターV Gの破損状況を見てからとすると後、10日前後ぐらいだと思います」

「そうですか……」

スバルは落ち込んだように言った。な、な、長い。どんだけ自分のハンターV Gの損傷が激しかったんだ？と心の中で問いかける世界の英雄。だが質問しても答えてくれるものはどこにもいなかった。ただ質問が未回答で終わっただけである。



「なあ、ちよつといいか？」

レイがスバルに問いかける。話しかけられたことによりスバルは気難しい顔を無理矢理崩してレイに顔を向けて自分の作った顔で話しかけた。そしたら視界の隅で小さく女性らしい小さな偉い方で吹き出していたのがスバルの視界の隅で映って見えた。よほど自分の顔が変だったのだろう。だが正面にいるレイは気づいていない。

「何でしょう？ レイさん」

スバルはあえて敬語を使う。一応、命の恩人でもあり、九死に一生を得てもらった相手なので年上だろうが年下だろうが相手に感謝の気持ちへとさんづけにしている。

「……………」

レイが突然難しい顔をした。そして沈黙が空間を駆け巡る。

「……………」

なんにもない沈黙が続く。正直言ってスバルはこの沈黙が嫌いだった。もしかして自分が何か他人の爆弾でも踏むような行為をしてしまったのではないか？と思うからであつたりする。

「どうしたんですかレイさん？」

「俺さ、敬語とか苦手なんだ。だから年上だからって気を使わなくていい。普通に喋ってくれないか？」

スバルは驚いた。見た目からして自分より年上なのは一目瞭然。なのに年上に向かって呼び捨て？敬語はなし？どれだけ都合がいい

んだ？もしかしてハンターV Gの情報を晒す引き金をひてしまうかもしれないという意識をもった。

「あ、はい。分かりました」

「あのさ、世界を三度も救った英雄、あのロックマンが俺たちの前にいるんだ」

「ちょっと、世界の英雄って……」

スバルが困ったようにいう。さすがに世界の英雄というのを聞くとスバルは引いてしまう。あれはみんなの協力と声援があったおかげで成し遂げたものだし、何も自分一人で成し遂げたわけじゃない。だから世界の英雄、つまりスバルは一人で世界を救ったと周りからそういう風に思われている。だからスバルは世界の英雄という尾ひれがあまりすぎじゃなかった。

「あら、ご謙遜ですか？さすが世界の英雄ですね」

「いや、あれはみんなの力を借りて頑張れたことであって……」

『フ、照れ隠しか』

「なんだよウォーロックまで……」

スバルを茶化すウォーロックにスバルは思わず不機嫌になってしまふ。

『事実を言ってるだけだろ。お前は世界の英雄だからな』

「なんでそうなるのかなあ……」

スバルはどうも納得できない感じだった。世界の英雄というわけ

ではない。スバル自身は皆が世界の英雄だと思っているのだ。一人一人が力を合わせて強大な敵と立ち向かう。それがみんなとやって皆と成し遂げられたはずなのに自分が手柄を独り占めした話になっている。

「明日、ちょっと手合せできないかな？」

「レイ、まだスバルさんは、動けるとはいえ完全に完治してないんですよ」

「大丈夫ですよ、リサさん」

「本当ですか？」

「と、言っても長時間の戦闘は控えますけどね」

「わかりました。無理とか異常を感じたら、無理なさらないでくださいね」

スバルは思わずリサの優しい気遣いに感謝する。けど一度、この意気揚々とした少年と手合せしてみたい。どれぐらいの腕なのか、どんな戦いがするのか。戦いの熟練者であるスバルは戦う前にいつもそんなことを考えていたりする。

「うん、わかったよ」

そうして、レイ、リサは自分の家へと、スバルは病院へと戻ったのであった。そうして一日後があっという間に来る。青い空、無限に広がる砂原。スバルたちは海岸に来ていた。海風がスバル達に横殴りの風で襲い掛かり、戦いの幕開けをカムフラージュしていく。

「準備はいいか？」

「いつでもいいよー!!」

「「トランスコード!!.....」」

そうして二人は電波変換をした。二人の戦いが舞い上がる砂ほこりと共に幕が切って降ろされた。スバルはレイとヘルの電波変換をした姿を見る。まず目に付くのは切れ味のよさそうな鎌を持っていた。地面にさせば易々と深く刺さるだろう。そういう雰囲気のでていた。次に目がつくのは、体の姿だ。肘には、とがった爪見たいのが両肘についており、背中には黒い翼があった。

————その名はヘル・デス・ブレイザー。

『ありゃあ、すごいな』

「ウォーロックがそんな言葉を上げるなんて驚いたよ」

普段ウォーロックはどんな相手を見ても上から目線のような発言や見下す発言しか見られなかった。だが今回は相手の風格に漠然としたウォーロック。

『まあいいじゃないか!!..』

そして戦闘準備に入る。横殴りの砂風がロックマンの先制攻撃に邪魔する表に砂が降り注ぐ。

「先攻はお前だ」

「わかった」

「行くよ、ウォーロック!! 新しいバトルカード!!..」

『おう.....ってえええ!!..?』

ウォーロックは目を大きく見開いて丸くしている。まるで何かを

大きな目で見つめる少年の目のように。

「なんで驚くのさ？」

『いや新しいバトルカードっていつできたんだ？』

「まあ細かいことは気にしない、気にしない♪」

（めっちゃ気になる……）

「行くよバトルカード、スターソード！Σブレード！」

空から新たな神聖剣、スターソードがロックマンの手元に降臨した。柄の部分は至って短く。刀身の部分は太刀のように鋭い風格を醸し出し、何よりも自ら神々しい光をはなっている。

『これが新しいバトルカード……』

新しいバトルカード スターソード Σブレードは剣自体から赤い光を発していた。まるで空から舞い降りた天使のように剣は美しく、神々しく輝きを放つ。

「行くよ！！！」

「来い！！！」

ロックマンは背中ブースターを使い接近する。

「であああああああ！！！！！」

「はああ！！！」

レイは背中の翼を前にだし、翼でガードした。

「であああああ！！！」

レイは攻撃を防いでからの攻撃の展開が速かった。

鋭い鎌がスバルをとらえる。

間一髪、スバルはかわす。

だが頬から血が滴り落ちた。

「鎌を振った後にできた、鎌鼬か。これは厄介だね。」

「はああああ！！！」

レイは距離をとり、鎌を振り始める。

次々と目に見えない真空の刃がスバルを襲い始める。

「クソッ！！！」

目に見えないため、どうかわけばいいかわからない。

ザシュ！！！！

スバルの右腕を鎌鼬がとらえた。

「これはやばいな。落ち着け、落ち着くんだ。対象法は必ずあるはず・・・」

その直後、スバルの頭に稲妻と同じくらいの速さで閃きが走る。

「そうか、そういうことか!!」

「ロックバスター!!!」

スバルは飛んで、ロックバスターを地面にうち、砂煙をたたせた。

「これでどうだ!!!」

真空の鎌鼬が浮かび上がる。

「一気に接近だ!!」

スバルは接近し、斬りかかる。

「はああああ!!」

「チイツ!!!」

レイはかわそうとする。

完璧とは言わないが、レイの左腕をとらえた。

「ぐうっ!!」

そしてレイは吹っ飛ばされた。

「ぐっ、さすが世界の英雄だね。俺とは戦いのキャリアが違う。戦闘での対応瞬発力が違いすぎるな」

「レイさんこそ、鎌ひとつでそんな戦い方ができるですね!!」

「今度はこちらから行くぞ!!」

レイの姿が消えた。

「はあああああ!!」

後ろに回り込んでスバルを切ろうとした。

「しまった!!」

スバルは不意をとられたが、とっさにスターソードを前に出した。



ガギン！！！！

大きな音があたりに鳴り響く。

「なかなかやるな！！」

「あなたこそ！！」

つばぜり合いになったままでいる。

「どうした！その程度か！！」

「その程度じゃないですよ！！秘密兵器はここで使うもんでしょ！！」

「なっ！！！！」

両手で支えていた、スターソードを離して片手から光が出始めた。

「スターソード！！δブレード！！！！」

右手から青い光を放つ剣が出始めた。

「いけえええええええ！！！！」

スバルのδブレードはレイの右翼を完全にとらえた。

「ぐっ………」

「だがまだだ!!」

レイはそのδブレードが刺さっている右翼の部分に力をいれた。おそらく抜けないようにするためだろう。

「ぐっ!!」

スバルは抜こうとするが、びくともしない。

完全に気を取られていたスバルの横から、鋭い鎌が襲い掛かる。

（しまっ………）

「はい、そこまで——」

鎌がスバルの何？か前で止まった。

しゃべったのは、リサだった。

「なんでなんだよりサーー」

「スバルさんはこうみえてもまだ怪我人なんですよ」

「こうみえてって・・・さりげなくいうねりサさん」

「あら、別にいいじゃないですか」

「俺はまだ戦い足りねえよ!!」

『俺もそうだ。戦い足りない!!』

『どれだけ戦闘好きなんだか・・・』

ヘルが呆れたようにいった。

その言葉を聞いたりサは、

「へえ。私はスバルさんのことをきずかってこういう事を言っているのにあなた方は無視するんですか?」

「いいですよ、リサさん」

「黙っていてください、スバルさん」

スバルはリサのよくわからない雰囲気圧倒された。

（まさかこの人、簡単に言えばスイッチはいちやったー！！）

スバルは少しおびえた。

「私が終わりって言うてるんですよ。その意見に文句でもあるんですか？」

綺麗な顔とは裏腹にすごい雰囲気が出ていた。

「返事は・・・？」

「それともまだ続けるつもりですか？　だったら恐怖を持って理解させてあげましょうか？」

「『いえ、いいです！！！！！！』」

「わかればいいんですよ」

（綺麗な花には棘があるってこのことか）

「あらどうかしましたか？」

「いやなんでもないよ」

スバルはリサの予想外な行動に緊張していた。

「ま、いい運動だったわ、ありがとなスバル」

「こちらこそ、ありがとうございました」

「じゃあ、なんか食べにいきましょうか」

「おっ、それいいな。行こうぜ！」

「うん」

「はい」

そして三人は町へと向かったのであった。

## **T r a i l | 4 3 悪魔再臨（前書き）**

適当に書きました^^

ではスタートです\*^^\*

## Trail 43 悪魔再臨

スバルが大怪我をしてから入院し、目覚めた後、さらに何日かがたった。

そして場所はスバルがいる病室。

スバルはウォーロックとあることを話していたのであった。

「ねえ、ウォーロック」

『なんだ？スバル？』

「あのさ、前に暁さんが言ってたんだけど、ファントム・ブラックが僕の過去の記憶をとったらしいんだけど、ウォーロック、なんかわかる？」

『・・・わからないな。奴が何の目的でスバルの記憶をとっていったのが分からない。これは俺の推測だが・・・』

（ウォーロックが推測っていう言葉使った！！）

スバルはウォーロックの発した言葉におどいていた。

（刑事ドラマの見すぎだよ・・・）

スバルは苦笑いしてウォーロックを見ていた。

『俺の推測では、俺とお前はあの強敵、アンドロメダや、ラ・ムー、そしてクリムゾン・ドラゴンと戦っただろ』

「うん」

『お前は苦しかった戦い、そしてあの敵の強さを覚えているよな？』

「うん。今でも覚えているよ。あいつらはかなり強かった。特にクリムゾン・ドラゴンはね」

『それかもしれない・・・』

「え・・・？」

スバルは理解ができていなかったようだ。

そうあの死闘――

スバルがこの身ひとつで化け物と戦ってきた記憶は今でも鮮明に覚えていてる。

そう、ファントム・ブラックはその死闘の記憶を奪い取ったのかもしれない・・・。

『もしかしたら、あいつ俺らの記憶を再現して、アンドロメダやクリムゾン・ドラゴンを復活させるかもしれない・・・』



「そんなことができるの!？」

『宇宙の電波技術は地球より数倍発展しているんだ。中では医療技術を使い、肉体改造をしてこの宇宙銀河を支配しようとしたものがある。肉体改造ができるぐらいだ。きっと、記憶の再現もできてしまうだろう……。』

「でもさ、あの組織は、ただの戦力疲弊のはったりの組織なんだろう？ だったら、ファントム・ブラックは何のために動いているんだ？ 奴らとは関係があるから、行動しているのではないのかな？」

『そこはわからないな。まずあいつは少々いかれてるからな。台本通りとかなんとかってグダグダ言ってくるからな。奴には到底俺らには理解できない考えを持っているんじゃないの?』

「確かにあの性格は尋常じゃないね。ンフフフフとかなんだろうね、あの笑い方・・・」

『馬鹿みたいな笑い方だよな』

「奴に一番お似合いの言葉じゃないか」

『アハハハハ』

「アハハハハ」

何故か、ファントム・ブラックの悪口？へと走ってしまった二人だった。

噂をすれば影――

まさかスバル達が言っていたことが現実になろうとしていた。

「ンフフフフフ・・・」

「いよいよ、わが計画が始まる。ラ・ムー計画以来ろくなことがなかったからな」

「ここで、世界に革命を起こしてやる！！！！！！」

「いけ！！クリムゾン・ドラゴン！そしてラ・ムーよ！ヨーロッパを壊滅させるのだ！！！！」

「ギャオオオオオオオオ！！！！！！」

化け物の声が鳴り響く。

二つの巨大な化け物がスバルたちのいるヨーロッパへ向かっていた。

一方、フランス。病室では――

ドタドタドタ!!

荒っぽい、足音がスバルの病室へと近づいてきた。

そして戸が開く。

「スバル!!!!」

「レイ!! どうしたの?」

「はあはあはあ……。緊急事態だ!!!!」

レイは息をきらしていた。

「ど、どうしたの?」

「こちらにかなりでかい化け物の電波体がむかっているらしい。ヨーロッパ上空の衛星がそれをとらえて、非常事態宣言をだした。今すぐ非難するんだ!!」

「ウォーロック・・・まさか・・・」

『ああ、そのまさかかもしれない』

「行くよ!!」

『おう!!』

スバルは勢いよく病室をでた。

「つておいお前らどこにいくんだ!!? ったく仕方ねえな・・・」

「私もお供しますよ」

リサが突然、姿を現した。

「リサさんは非難してください」

スバルが引き止める。

「心配してくれるのはうれしいです。けど母国のピンチなんです。私にはやるべきことがあります。だからいいですか?」

「・・・いいですよ・・・」

「よいいくぞ!!」

「おう!!」

「はい!!!!」

三人は外へ向かってのであった。

## Trail | 43 悪魔再臨（後書き）

@書きトーク12回です^^

えーとスバル君たちがFBの事を言いたい放題言いましたねww

そんなもんです。はい。

速攻でPCでカタ×2打ったから誤字、脱字があったらごめんなさいTOT

連続更新久々だなくっと思って思いましたww

**T r a i l | 4 4 激闘再び・・・(前書き)**

深夜更新です^^

## Trail 44 激闘再び・

タッタッタツ・

三人の足音がする。

「ハアハアハア・・・」

「なんだこれは!？」

レイが驚きの声を上げる。

空には一面の暗雲、そして不気味な風が吹いていた。

暗雲の中に二つの巨大な影が現れる。

「まさかあの容姿、そしてあのサイズ・・・まさか・・・」

『そのまさかのような・・・』

「どうやらあれが現実になってしまったみたいだね」



「スバル、お前にはあれがわかるのか？」

レイがスバルが知っている雰囲気だったので聞いてきた。

「ああ、知ってるさ。だってあれは・・・」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

獣の叫び声が鳴り響き、辺りにいたものに緊張を走らせる。

「だってあれは地球を破滅させようとした破壊の電波体・・・」

「クリムゾン・ドラゴンだ・・・」

『だが一度やった相手だろ？ だったら攻撃パターンはわかってんだ。前の経験を生かして、再び倒すぞ』

「うん！！」

「はたしてそううまくいくかな？」

空の暗雲の中から謎の声がした。

「生きていたようだな。星河スバル・・・」

「お前はファントム・ブラック!!」

『またでやがったか台本野郎め・・・』

「クリムゾン・ドラゴンだけがここにいると思わないでほしいな」

『なんだと!?!』

ウォーロックはファントム・ブラックの言葉の意味が理解できていなかったようだ。

「ウォーロック・・・さすがにあればやばいかも・・・」

暗雲の中からもう一つの黒影が現れる。

それはラ・ムーだった。

『まさか?・・・冗談だよな?・・・』

「冗談じゃないさ。現にここにいる・・・」

『こうなったら全員倒すしかないようだな。一度相手した敵だ。囲まれないように動けば、すぐに倒せるだろう』

「うん!!」

「はたしてそううまくいくかな！」

「どういう事だ!!」

「この最強に近い破壊の電波体……。この2体を融合させてみたらどうなると思う？」

「一体、それはどういう意味だ!？」

「私や、貴様、全てを超越する圧倒的な力を持つ存在となる!!」

「クリムゾン・ドラゴンが放つ、特殊周波数と異常なノイズ。そしてラ・ムーが持つ電波体を生成させる能力……。これらの能力で世界を一瞬で破壊させることすら可能だ!!」

「それは絶対にさせない!!!!」

「だったらやってみろ!! いけラ・ムー達よ!! 今こそひとつになり、この世界を終わらせろおー!!」

雷鳴轟く暗雲の中で、一体、何が起こったのか三人には理解できなかった。

「う……。ん……。?」

目の前に大きな電波体が現れた。

二つがひとつになっていた。

容姿はクリムゾンだった。

「何が融合だ!! ただのハツタリじゃないか!!」

「はたしてそういいきれるかな?」

『チツ・・なめやがって。スバル電波変換だ!!』

「わかった!!」

「俺たちも行くぞ!!」

「はい!!」

三人は光に包まれ電波変換した。

スバルがカードを取出した。

「バトルカード!! スターソード! Σブレード!」

「スターソード！ δブレード！」

レイは鎌を構えた。

そして気になったのが、リサの電波変換した容姿。

見た目はかなりキグナス・ウィングに似ている。

だが手には弓が装備してあった。

「それがあなたの電波変換した姿ですか」

「そうです」

「じゃいきましょうか！」

「はい」

「おう！」

『スバル！！』

「何？ウォーロック？」

『容姿は変わってなくとも、俺には大体わかる。全体的な能力の上昇とそしてラ・ムーによる電波体生成能力・・・』

「じゃあ、あのブラキオ・ウェーブやとかの電波体がでてくるかもしれない・・・」

『そういうことだ・・・覚悟しとけよ・・・』

「よくわからないが、危険なんだろう？心に刻んでおくぜ」

「わかりました。警戒しておきますね」

「いくぞ!!」

「はい!!」

三人は散開する。

『スバル、相手は化け物だフェイントとかいければ、相手はそれにつられる、だからキャリアが多いお前がけん制してやれ!!』

「うん!!」

そういつてスバルは両手に持っているスターソードを少し下げた。

スバルの動きを見たクリムゾン・ドラゴンはスバルから攻撃される  
と思ってスバルに向き警戒する。

「であああああ！！！！」

完全に相手からノーマークになったレイがクリムゾン・ドラゴンへ  
と斬りかかる。

狙ったのは首。

だが勢いよく振り下ろされた鎌は無残にもクリムゾン・ドラゴンの  
甲殻の堅さに弾かれただけであつた。

弾かれたせいで、鎌は変な方向に流される。

攻撃されたのかクリムゾンはレイへと意識を向けた。

「まずい！！」

レイが叫んだ。

その直後――

ヒュンヒュンと矢が飛んでクリムゾンに直撃しけん制させる。

「ナイスアシスト！」

「どういたしまして!!」

「今だ!!」

再び、フリーになったレイとスバルが斬りかかる。

狙ったところは二つの頭。

スバルは左の頭を、レイは右の頭を狙った。

「であああああああ!!」

「うおおおおおお!!」

ズバッ、ズバツと刃が通った。

「やりましたね!!」

効果があったのでリサが歓喜の声をあげた。

「けど、なんて堅さなんだ、手が痺れてる・・・」

「けど俺たちは確実にダメージを与えたんだ。これを繰り返していくぞ!!」



「はい！」

「おう！」

その直後、クリムゾン・ドラゴンの攻撃でミサイルが飛んでくる。  
ターゲットはリサ。

ミサイルは2発、彼女に向かって真っすぐ飛んでいく。

「はぁっ!!！」

矢を放ち、ひとつの小さなミサイルを撃墜させる。

だが、もう一つのミサイルは大きい。

確実に距離をつめていった。

スバルはリサの様子に目をやった。

どんどんミサイルが近づいてきてるのに彼女はまったく焦らない。

ただ、弓の弦を引き、狙いを定めていた。

「・・・」

「今だ!!！」

限界まで引き絞った矢が発射され大きなミサイルを確実に打ちぬいた。

「なんて集中力だ・・・」

「スバル、何してる！！早く次の攻撃に展開しろ！！」

「ご、ごめん！！」

スターソードと、鎌で頭を斬る。

「ギャオオオオオオ！！」

クリムゾン・ドラゴンの中枢部のコアが出現する。

「今だ！！GA！インパクトキャノン！！」

スバルは狙いを定め、発射する。

「フェザーアロー!!」

リサが弓と羽を飛ばし、一斉射撃をした。

二人の技がさく裂する。

「はあああああ!!」

レイが力をためながら中枢部のコアに接近して、鎌をおもい切り振り上げ、そして振り下ろした。

「ナイス、レイ!!」

「ああ!!」

「ぎゃおおおおお!!」

クリムゾンが叫んだ直後、三人が吹っ飛ばされた。

「うっ・・・咆哮だけでなんて威力だ・・・」

「奴はまだ本気じゃなかったの・・・?」

「まだだ！戦いは始まったばかり！自分の力をまだ出し切れてない！」

「そうだな！！」

「そうですね！！」

そして三人はクリムゾン・ドラゴンに向かって走り出した。

一方、日本では何をしているのだろうか、一瞬そう思ったスバルだった。

## **T r a i l | 4 4 激闘再び・・・（後書き）**

@書きトーク13回です^^

あいつら再臨しました。

融合姿はともイメージがわからなかったので適当にしましたWW

さて、眠いので@書きトークはここでおしまいにしますWW

更新期間が短くなってきた気がするWW

## **T r a i l | 4 5 怒り (前書き)**

深夜更新です^^

あれ？更新ペースが早くなってきたWW

## Trail 45 怒り

三人はクリムゾン・ドラゴンに接近した。

リサは遠距離なので、そんなには接近しなかった。

スバルが前にでる。

クリムゾン・ドラゴンは攻撃してくると思い、警戒し爪で攻撃してきた。

スバルは軽くジャンプして回避した。

そして回り込んだレイが甲殻が弱そうな部分を狙って斬った。

そう、スバルは囷でレイがその隙を狙っていたのだ。

リサはその二人の息のピッタリ差に関心していた。

「一度、戦った相手ですからかね……。お互いの意思疎通ができているようですね。フフッ」

その後もスバルとレイは巧みなコンビネーションでクリムゾン・ドラゴンを翻弄する。

そして、二人をアシストするリサの援護もありこのままうまく倒せるかと思った次の瞬間――

「ギャオオオオオオオオオオ！！」

クリムゾン・ドラゴンあたり一面にブレスを吐いた。

「チッ！！」

「こんなもの！」

「はあっ！」

三人はなんとかかわす。

だが次の攻撃がすぐに来た。

二つの爪が三人を執拗に狙ってきた。

上から、左から、右からと鋭い爪が近づいてくる。

三人は散開し、当たらないようにする。

クリムゾン・ドラゴンはレイを目的としたようだ。



執拗に、左右から爪の攻撃をしてくる。

「チッ・・俺に狙いを定めたか!!」

レイはなんとか、爪をかわし続けている。

だがいつあたってしまうかはわからない状況だった。

「私に任せてください!!」

「リサさん!？」

リサは突然、前に出てきて、弓の弦を絞った。

狙いは爪。あんなに緩慢に動いている爪を狙い当てるのは至難の技だろう。

だが彼女は当てようとしていた。

なぜなら彼女の集中力をスバルは感じ取ったからだ。

「なんて集中力だ・・。あの人は当てようとしている・・。」

「はぁっ!!」

限界まで絞られた矢が発射された。

綺麗な線を描き、爪のもっともろい部分に直撃し、音をたてて壊れていった。

「さんきゅ、リサ!!」

「どういたしまして!!」

三人の様子を見ていた、ファントム・ブラックが突然、口を開いた。

「はたして、その調子でうまく倒せるかな？」

「なっ!？」

ファントム・ブラックが発した言葉に、全員クリムゾン・ドラゴンに目をやる。

クリムゾン・ドラゴンに変化の兆しがあった。

その直後――

オレンジ色の電波体が出現した。

そしてウィルス、ガーディアンも出現し電波変換をしたのだった。

「ま、まさか!!」

その視線の先にはブラキオ・ウェーブの姿があった。

さらに赤い電波体とガーディアンが出現し、この二体も電波変換をする。

姿はコンドル・ジオグラフだった。

「どうだ!! さらにこいつらはただの電波体ではない!! クリムゾン・ドラゴンの能力によって限界まで強化された電波体だ!!」

『これは厄介だな・・・。3対3か・・・。いや3対50ってところになるかもしれないな・・・』

「確かに・・・あの能力はいくらでも電波体を作れる」

「それがどうした!!」

「でああああああ!!!!」

「だめだ!! そんなにあまくきりこんじゃ!!」

だがスバルの声はレイには届かなかった。

レイはコンドル・ジオグラフに斬りかかった。

だが虚しく弾かれたただけだった。

弾かれたせいで一瞬の隙ができる。

その隙を狙ったコンドル・ジオグラフが攻撃する。

レイに向かって突進し、レイはその攻撃を喰らってしまった。

「うぐ・・・」

「大丈夫!？」

「ああ、なんとかな・・・」

「あんなにあまく斬りこんだらカウンターを喰らってしまうよ。もう少し冷静にいかなきや。無茶して死んだら何の意味もないだろ？」

「すまない・・・」

「二人ともきます!!」

ブラキオ・ウェーブがスバルたちに向かって大波を起こしてきた。

「バトルカード! オーラ!」

「ググッ・・・」

スバルはオーラでブラキオ・ウェーブの波をしのぐ。

だがスバルのオーラが大波に押し負けかける。

「このままでは・・・」

「援護します! スバルさん! バトルカード! ホーリーパネル!」

神聖なパネルの力で攻撃が半減されてきた。

「よし押し返せる!!」

その直後、三人は目配せをした。

スバルが大波を弾き返し、そして三人が前へ突撃した。

「スターソード!! 流星! 銀河! 十文字切り!!」

「ビームサイズ!!」

「バトルカード!! ライメイザン!!」

三人の剣がブラキオ・ウェーブにクリーンヒットする。

「ギャオオオオオオオオ!!」

ブラキオ・ウェーブが消滅した。

「よし!!」

だが完全に意識がブラキオ・ウェーブに向かっていたスバルたちは  
二体の存在を忘れていた。

二体が極太のレーザーで三人を包ませた。

「「「うわあああああ!!」」」

三人がもろにうけてしまった。

「いたた・・・」

スバルは立ち上がれるようだったが、二人は当たり所が悪かったの  
か、スバルより負傷していた。

「え、ごめんなさい・・・足を怪我しました・・・」

「二人はここで休んでいて!!」

「す、すまねえ足を引っ張ってしまって」

「気にしないで!!こんな窮地、幾多も乗り越えてきたから!!」

「ウォーロック!ノイズチェンジとドライブシステムによるオーバードライブを使用して!!」

『だがあれは一回、エラーが起きただろ!?!』

「いいから!!このままだと全員やられる!」

『わ、わかった』

「ノイズチェンジ!コーヴァスノイズ!!」

コンドル・ジオグラフが木属性と対して弱点が火だから、得意属性のコーヴァスノイズを選んできた。

『オーバードライブシステム1V5（ノイズ率600%）作動!!』

スバルの体が青く光り始める。

「エラー発生！エラー発生！」

警告の音が響く。

だがスバルには関係なかった。

スバルはドライブシステムの能力が落ちる前に倒してしまおうと考えていたのだ。

翼を大きく広げ、スバルは空に飛翔する。

今、スバルはオーバードライブの力によって三倍の速さに想定する。

ヒュンヒュンと緩急ある速度でコンドル・ジオグラフを翻弄する。

速さが圧倒的に勝っているスバルはまず左翼に斬りこんだ。

そして右翼、次に本体を狙った。

ヒュンヒュンと音を立てながら、高速移動するスバルにコンドル・ジオグラフはとらえることができなかった。

「スバル・・・あいつやっぱりすごいな」



「さすが世界を救った英雄ですね」

「とどめだ！ 流星！ 銀河！ 十文字切り！！」

コンドル・ジオグラフはスバルの力に打ち勝てず、消滅した。

「次はあいつだ！！」

クリムゾン・ドラゴンに接近する。

だがスバルの目の前にひとつの影が現れる。

気づいたらスバルは地面にたたきつけられていた。

「げほっ！！げほっ！！」

「ンフフフフ・・・」

ファントム・ブラックがスバルを地面にたたきつけたようだ。

『お前、不意打ちとはせこいぞ！！』

「これが私のやり方なのでね!!」

「戦いにせこいものにもあるものか!! 私は世界を破壊するため、そして貴様に復讐するために生きている!! そのためならどんな手だってつかってやるさ!!」

『チツ・・・』

「やれ!!」

「はぁ・・・!!」

スバルはクリムゾン・ドラゴンの攻撃してくる様子に息をのんだ。

爪が完全無防備なスバルに何十回も襲う。

腕に、足に、背中に、横腹に爪が襲い掛かった。

「ぐあああああああ!!!!」

「これでとどめだ!! やれ、クリムゾン・ドラゴン!! 私に昔年の恨みを晴らせろおー!!」

爪が近づく。

その直後、一筋の閃光が爪を破壊した。

「一体なんだ!？」

「てめえ・・・俺の認めたヒーローに何してんだ・・・」

「そ、その声は・・・」

「よう、やっぱり生きていたか」

「暁さん!!」

『つたくなんていいタイミングに登場するんだよ!!』

「なんたって俺はヒーローだからな」

「また自分で言った・・・」

「さて・・・」

「あん時はスバルとミソラにひどい現実を与えてくれたな・・・」

「それがどうした!!」

「俺はお前を許せない!!」

暁は右手に拳に力をいれる。

「それがどうしたあ!!! いけ!!!」

クリムゾン・ドラゴンが暁に向かって攻撃してくる。

「邪魔だ!!! オメガレーザー!!!」

渾身の力を入れた大技は一瞬でクリムゾン・ドラゴンが塵と化した。

「やっと彼女、ミソラは自分の大切な人を、そして自分の居場所を  
みつけられたんだ・・・。だがそれを引き裂いたお前を俺は許せねえ・  
・」

「あんな暁さんみたことない・・・」

『ああ、俺もだ。いつものあいつとは雰囲気が違う』

「覚悟しろ・・・俺がお前に地獄をみせてやつからよ・・・」

「やってみれるものならやってみろ!!」

「あいつらの思い、悔しさは俺が背負う……。だからこそあいつを今ここでつぶすべきだ!!」

## Trail | 45 怒り（後書き）

@書きトーク第14回です^^

えーと今回は最後の方に暁さんが降臨しましたww

暁さんがオメガレーザーでクリムゾン・ドラゴンを倒すシーン・・・

あっけなく死にましたww

そしてロックマン専用？バトルカード

スターソードδ（デルタ）ブレード Σ（シグマ）ブレードによる

組み合わせ必殺技・・・

流星銀河十文字切り・・・

簡単に言えば漢字の十にそって思い切り切るだけですww

暁さんがキレルシーンを描いていました。

どうも変？って漢字がしましたww

さてこっからのこのストーリーに関する問題&質問？

まずこの抱えている問題？

ってかこれ問題っていうのか？（＊´Д´）

流星小説ならスバル君とミソラちゃんによるラブコメが大概あります（＾－＾）／

俺の小説では少ないです。はい。

さらに二人はまだ接吻すらしていませんww

45話ぐらいまで書いて接吻すらしてないこの状況ww

そろそろ二人のラブコメを増やしていこうかな・・

いや増やすべきだな（＾－＾）／

計画ではレイとリサも繋げてしまおうかなって思ったりして（・ω・）／

さて次回は仲間のために怒るいつもの違う暁さんにご期待を○（

^▽^  
o

あんまり期待しないほうがいいかもww

地震びっくりww 5月13日 金曜日 1..22

速攻でやったので本文に誤字があったらゴメンナサイ(<|>)

感想&アドバイス待ってたりします^^



## Trail | 46 世界の奇跡を壊す覇者

「俺はお前が許せない！！」

暁が怒った声でいう。

「なんだそのたわけたことは！！」

「お前には一生わからないだろうな！！大切な人が奪われてしまう悲しみを！！大切な人が消えて行ってしまうくやしさを！！」

暁はロックオンソードで斬りかかる。

暁は思いを込めるようにファントム・ブラックに向かって叫ぶ。

「わかるわけがないだろう！！私はもはや他人がどうなるうか関係ない！！私は復讐のためだけに生きている！！」

ファントム・ブラックはステッキでガードする。

「貴様には心というものがあるのか！！」

暁は防がれたロックオンソードを体重移動をうまく使い、横から斬りかかる。

「あるさ！！黒い闇に染まりきった、復讐と支配の心がなああ！！！」

ファントム・ブラックはウイルスの幻影を召喚し、攻撃させた。

二体のウイルスが暁の向かって一直線に来る。

「何故だ！！」

暁はウイルスの後ろに回りこみ斬り落とす。

「何故、お前は人に向かってこんなことができる！！？答えろおおおおー！！！」

もう一匹のウイルスを斬って、デリートさせて、再びファントム・ブラックに斬りこもうとする。

ガギイン！！

ステッキとソードがぶつかり合う。

「それはな・・・選ばれた人間ではないだからだよ！！！」

ファントム・ブラックはステッキで押し返した。

「それはどういう意味だ!!?」

「君にはわかるまい・・・」

「チッ・・・」

暁はそのあと、ブラスターで攻撃した。

姿が消えたファントム・ブラックは隙をうかがっていた。

姿を見失った暁は神経を尖らせる。

「落ち着け・・・落ち着くんだ・・・シドウ・・・」

暁は自分の名前を言って、冷静になる。

「所詮、たった一つの尊い命の取り合い合戦なんだろう？」

「何がだ!?!」

「何故、お前らは他人のために必死になろうとする？」

「それはその大切な人の笑顔が見たいからだ！！」

「フッ・・・、そうか・・・」

その直後、ファントム・ブラックが後ろから斬りかかる。

だがステッキは暁をとらえなかった。

ファントム・ブラックの視界には狸の姿しか映っていなかったのだ。

「なっ！？一体どこに！？」

そう、暁はヘンゲノジュツを使ったのだ。

それで暁は変わり身状態になりファントム・ブラックの目を欺いたのだ。

「終わりだ！！ノイズドライブシステム、エースPGMとの並行開始！！」

『擬似メテオサーバー1V12にアクセス完了・・・。データダウンロードします』

アシッドが擬似メテオサーバーといった。

「擬似メテオサーバーって？」

スバルがアシッドの言った言葉に疑問を抱いた。

『奴に聞いてみればわかることだ』

「ファイナライズー！」

黒い塊に包まれ、ファイナライズ状態となった暁が現れた。

「暁さん・・・その姿・・・」

「ヨイリー博士の発明ふがうまくいったんだ。これでまたファイナライズができる」

「すごい・・・」

「ぐぐ・・・そんな姿はこけおどしだぁあー!!」

「・・・・・・・・」

暁は一瞬でかわした。

「終わりだ・・」

「はっ・・」

目に見えない速さで暁はロックオンソードV3でファントム・ブラックのど元をとらえた。

「なっ・・早すぎる・・」

「とどめだ!!」

ズバッ!!

ロックオンソードがファントムをとらえた。

そして強制的に電波変換が解除される。

「いいか・・・、命までは奪わない・・・。二度と俺たちの前に姿を現すな・・・」

暁はロックオンソードをファントムにむけた。

「・・・チツ・・・」

「すごいですね、暁さん!!」

「ありゃあすごいな何者だ!？」

レイはおどいたようにいう。

「この人は僕の尊敬できる人だよ」

「ま、なんたって俺はヒーローだからな」

『コイツ、また自分でいいやがった』

ウォーロックは呆れていた。

「へえ」

レイは関心したように言う。

「スバルさんが尊敬するんならかなら凄いでしょね。一度手ほどきを受けたいぐらいです」

リサは暁の事を凄い人というイメージを持っていた。

「お？その美少女さんは俺から手ほどきを受けたいのかな？」

「び、美少女はやめてください・・・」

普段、表情をあまり崩すことのないリサが表情を崩した。

「ま、いい傾向だ。知りたい事があつたら言ってくれよ」

「えっとレイ君？だっけ？」

「ああ、そうだが・・・」

不敵な笑みで、



「彼女いるの？まさかあの美少女か？」

「な、な、何言ってるんだよ!？」

レイは慌てる。

「その調子だといないみたいだな。あのなここだけの話だがスバルに彼女がいるぞ」

「彼女!？」

「彼女ってあの彼女ですか!？」

レイとリサが質問してきた。

「ああ、しかもリサと匹敵するぐらい・・・あるいはリサをも超える美少女だ」

「へえゝスバルに彼女が・・・」

「なんで言うの？暁さん？」

「別にいいじゃねえか」

「……」

「後お前ら二人に要があるから後では話さないか？」

「いいですよ」

レイとリサは暁の要求を受け入れた。

こうして、暁は仲間の思いを背負い、遂にしつこい敵を倒したのであった。

そして第2の計画が動き出し始めたのであった。

## Trail 46 世界の奇跡を壊す覇者（後書き）

@書きトーク15回です^^

今回は本編よりこっちメインです（笑）

つい最近流星3でバグライズデッキを作ってみました。

オールポイズンやポイズンナックル、ポイズンストームなどの毒P  
デッキ作りました。

Wifi対戦でやって見ましたが勝てません（笑）

### 一部紹介

ロックマン HP2550

ステータスガード

CS・HPバグスプレッド

Sガード インビジ

ボディパック

ファーストオーラ

エースPGMは未装備。

デッキ

ヘビーゲ×2

オールポイズン×4

ポイズンナックル×2

デストロイアッパ×2

ダブルストーン×4

一部ですがHPバグを起こらすデッキです（笑）

コーヴァス対策として水、Mカいとます。

ロックオンソードのV3は流して（へーへ）／

コメント@アドバイスお願いしますへへ

## **T r a i l | 4 7 暁の意図（前書き）**

本文です^^

現在2nd Seasonを書こうかと迷っていますWWW

## Trail | 47 暁の意図

ファントム・ブラックを倒してから二日が経過してそして時は12時を刺していた。

場所は病院、そしてスバルの退院する日だった。

「やっと、退院か・・・」

『その前にあいづからハンターV Gを受け取りに行くんだろ？』

「おっと、そうだったね」

そう、スバルの使っているハンターV GはサブのハンターV Gだからだ。

そして退院し、場所はレイ家へ変わる。

「すごい広いな〜」

レイの家はかなりの豪邸だった。

家はかなり広く所要面積はコダマタウンと同じくらいの広さだった。

「さて、来たなお前ら。ここが俺の家だ」

レイはスバルとウォーロックに挨拶した。

「さてこれがあなたのハンターV Gです」

リサがレイの家に来ていたのか、家の中から出てきて、スバルのハンターV Gを差し出した。

「やっと僕のハンターV Gが戻ってきた・・・」

『このサブハンターはいずらいからな。やっとこの俺の家が戻ってきたか』

「家って・・・」

「ハンターV G Ⅱウォーロックの家ですか・・・」

「なんて悲しいんだ・・・」

三人がウォーロックの発した言葉に呆れていた。

「さて本題だ、いいか？お前ら？」

三人の後ろから暁が現れた。

「あれ？ 暁さんいつからいたんですか？」

「さっき来たばかりだ」

といってうまい棒を取出し、かぶりつきだした。

「なんだ？ そのお菓子は？」

レイが聞いてきた。

「これは俺の好物、うまい棒だ。知らないのか？」

知らないのは無理はない。レイは日本に行っていないため日本のお菓子の事がわからなかったのだ。

「それって、その名の通りうまいのか？」

「その名の通りうまいさ」

そういつて暁はうまい棒にむさぼりつく。

「へえ〜機会があったら今度俺も食べてみるかな・・・」



レイは興味を抱いてしまったようだ。

「こんなところで立ち話もなんですし、レイの家の中に入りませんか？」

リサがそう言った。

リサを除いて、男どもは玄関で話をしていたのだ。

無論、うまい棒の事で……

そういつて4人はレイの家へと入っていく。

スタスタスタスタスタ……

家の中の……いや豪邸の広い廊下を歩く音がする。

もはや天井とかはかなり高く、シャンデリアなどが取り付けられていた。

そしてステンドグラスから昼の陽光が廊下の窓付近を優しく照らす。

「うひゃあ・・・これは俺らのWAXAより広いんじゃないか？」

暁が驚きの声をだす。

「少なくとも、半分以上か、同じくらいの所要面積がありそうですね」

スバルが返す。

『所要面積？なんだそれ？食いモンか？』

ウォーロックがそういった。

「無理矢理ボケなくていいからウォーロック・・・」

『いやボケとか狙ってないぞ・・・』

「ふーん・・・勝手に言えば？」

『この野郎・・・』

ウォーロックは真面目？の質問だったようだが、スバルにとっては悪戯のように感じ取ってしまった。

「ここでいいかな」

レイは部屋の入口の戸を開き、その先には会議室っぽい雰囲気醸し出した部屋が見えてきた。

「さてそれぞれ椅子に座ってくれ」

レイがそういうと、4人はそれぞれの椅子に座った。

「さて暁さんでしたよね？貴方の話したいことを話してくださいませんか？」

「ああ、まず一つ・・・というより先に俺から質問させてくれないか？」

暁は自分の言いたいことより、先にレイとリサに聞きたいことがあったようだ。

「なんででしょう？回答可能な質問だったら答えますが・・・」

リサは言葉正しく暁に言葉を返した。

「何故、お前らは電波変換ができる？」

「それは――」

リサとレイは事情を説明した。

そしてもう一つ、7年前に起きた宇宙ステーションでの隠された真実。

今、活動しているリフェイム・ウィングスによる地球の戦力疲弊、そして戦力減少をさせていく。

そして太陽系惑星、冥王星と海王星による電波体と隕石衝突による地球上全ての人類生命剥奪。

彼らは暁に話せることをすべて話した。

彼らが電波体達と遭遇したことも。

そして電波変換できることも。

「そうなのか・・・そういう事だったのか・・・」

暁はリサとレイの相棒、電波体達から詳しい話を聞いた。

『これは事実です。さらにいつ第2の計画が始まってもおかしくないこの状況・・・』

ウインズが説明する。

「第2の計画とは？」

『おっと、これは説明してませんでしたね。第2の計画は宇宙からによる特殊電磁波による世界停電です』

「そんなことが実際にできるのか!？」

『奴らはできます。自分たちの身を守るために、奴らはその兵器を開発したと聞こえてきます』

「チツ・・特殊電磁波による世界停電か・・今は電気がないと何もできないからな・・」

『多分、予備電源とかも全て無駄になるでしょう・・』

「打つ手はないのか・・」

暁は困ったように言う。

『定かではないですが、その兵器が照射される前に破壊するという手立てしかないです』

「それを破壊か・・ということはそのまま冥王星と海王星にいる電波体とやり合うことになるのは確実だな・・」

『はい・・。だから私はこう思っています。人類と電波体はわかり合う必要がある・・。今、人類と電波体は試されているんじゃないか・・と思います。わかり合うことで手を取り合っているのか・・、もしくは破壊で滅んでしまうのか・・。』

「人類と電波体が手を取り合う・・」

スバルは不思議と人類と電波体はできるんじゃないかと思っていた。

「そうする・・・しかないのかもしれない・・・逆にデリートしてしまえば、さらに危険な存在として意識されてしまうかもしれない・・・」

「でも、どうやってお互いがわかり合うんですか？その可能性は0%に低いと思いますが・・・」

リサは現実的な答えを出した。

「僕はできると思う」

その発した少年の声にみんながそちらを向いた。

その声を出したのはスバルだった。

「可能性が0%ではないかぎりお互いがわかり合えると思うんだ。最初、僕とウォロックであった時には中々、分かり合えなかったけど、お互いが、お互いの事を知ることとで和解できた。だからあいつらにも僕たち、人間は悪いところもあるけどいいところだって

あるんだと知ってもらえば、理解してくれるかもしれない・・」

『・・・・・・・・』

ウォーロックは黙り込んでいた。

「そうか・・・・・・・・」

暁は考え込む。

「その作戦は、まだ未定にする。あまりにも危険すぎるその作戦は」

「そうですか・・」

スバルはそういった。

拒否されるのは無理はないだろう。

いくら幾多の境地をくぐり向けてきたスバルでもさすがに危険すぎたからだ。

「とりあえず、こっからの予定は未定とする。次は俺の話だ」



「レイトリサだっけ？」

「はい」

レイトリサは同時に答える。

「レイ・お前はトランスコード012の番号を与える」

「トランスコード？」

「いわゆる、登録番号みたいなものだよ。僕はほら、トランスコード003さ」

「へえ」

「そしてリサ、お前にはトランスコード013の番号を与える」

「招致しましたわ」

「本当は電波変換したとき、自動登録なんだが海外だから・・・」  
暁はうなっていた。

そして二人は暁からトランスコードを受け取ったのだった。

「そしてもう一つ話すことがある」

もう一つ？というのに疑問を抱いたスバルだった。

「スバル」

「なんですか？暁さん」

「お前は日本に戻るな」

「え？・・・」

何故、暁がそういったのかスバルには理解できなかった。

自分が生まれ育った母国に戻れないためだからだ。

それにもほかに沢山ある。

日本では彼の帰りを待っている大切な人もいる。

何故、スバルが日本に戻ってはいけないのか、それは暁にしかわからないことだったからだ。

## Trail | 47 暁の意図（後書き）

@書きトーク16回です^^

今回スバル君に驚き？の事が言われましたww

「日本に戻るなって何言ってるんだ」と思ったでしょうスバル君ww

物語はそろそろ最終章へと進みます。

人類と電波体は分かり合う事が出来るのか・・

その先にあるのは存亡か滅びか・・

てかネタ晴らししちゃったなww

感想まっています^^ー☆

## Trail | 48 知らされたくない事・・・

「どうしてなんなんだ・・・」

一人の少年が考え込む。

スバルが退院してから三日が経過した。

現在はレイの家に居候中である。

突然だが、時は三日前にさかのぼる。

「スバルお前は日本に来るな」

「どうしてなんですか？ 暁さん？」

「それは秘密事項だ。俺には俺なりの考えがある」

そう二日前に暁から聞いた言葉がスバルには明確に頭に残っていたのだ。

「どうしてなんだ・・・、どうしてなんだよ・・・教えてくれよ暁さん・

・・」

スバルは考えれば考えるほどあの人が言った訳が分からなくなってくる。

争いを引き起こす存在だと思わされているからか？

いや暁さんや、ミソラちゃん達はそんな風に思っではないだろう  
と思い込んでいるスバル。

「一体、何のためなんだ？何のために僕はここに残っていないければ  
ならないんだ・・」

『もういつその事、向け出したらどうなんだ？』

「いやあの人の事だからなあ・・。なんか意図があると思うんだよ  
ね・・・」

『ヒーローもどきだからな。もしかしたらお前の事をきずかっ  
てい  
る・・というかもしれないな』

「暁さんが僕の事を心配してる？つまり、たった一人だけ負傷して  
いる僕たちをもうこれ以上傷つけないように思っ  
てやっ  
っているのか

な？」

『そんなことでもしなきゃ、日本に来るなっていわないんじゃないか？』

「確かに一理あるかも・・・」

スバルとウォーロックはそして一つの答えにたどり着いた。

『「もう戦わせたくないのかと・・・」』

「おう、どうしたんだ？二人とも難しい顔して」

レイがスバルの部屋？というより借りている部屋へと両手に持っているジュースとお菓子を持ってきてスバルの部屋？へと入ってきた。

「いやさ、暁さんの言った言葉が意味不明でさ・・・」

「ああ、なんだっけ？日本に戻るなだったか？」

「うん、そうだよ」

「確におかしいよな、戻ってくるなって・・・最初は嫌がらせ？  
って思ったよ」

「僕もだよ。暁さんがそんなことを言う人じゃないし」

二人の意見が一致する。

スバルが暁とかかわってから、暁の喜怒哀楽はだいぶわかっている。他人のために必死になれる人と思っているし、いざとなった時にはとても頼れる男としてスバルは見ている。他にも彼には大切な思いを背負っているといった。

メテオGによる暁とクインティアとジャックによる問題も彼が二人を組織から解放しようと必死に頑張った。

そんなひと思いの彼がそんなことすると思うのかと思っているスバル。

「あのさ、俺思うんだけどさ・・・」

「うん・・・」

スバルはレイの思ったことが気になった。



レイが言った言葉でヒントがつかめる気がしたからだ。

「ただ単に、嫌がらせとかという理由じゃなくて日本で何かあったからお前をこさせないようにしているんじゃないか？」

「それってどういう事？」

「例えばさ、簡単に言えばお前がいなくなったことでお前の思いを背負おうと思い、そして強くなりたいと思わせようとしたんじゃないか？」

「きっとミソラちゃんの事だ・・・」

「でも暁さんがそんなことをするのかな？・・・？」

「暁っていう人に会って話を聞くのが一番早いんじゃないか？」

「それはそうだけどさ・・・」

「なんだ？命令は守るってか？」

スバルは思っていた。

彼が本当にそんなことをする人なのだろうか……。

彼は他人のために思い、そして誰よりも隣人を信頼している彼はミソラにこんなことをさせようとは思わないからだ……。

もし、暁がやったとしても少々荒っぽすぎる。

「まったくわからないや……。考えれば考えるほど複雑になってくる……」

「俺もだ……」

二人は考え込んでいた。

「ま、気晴らしにジュースでも飲むか！」

「そうだね！」

二人はコップにジュースをくんで飲もうとした。

その直後、レイは暁が言っていたことを思い出す。

「そういえばさ、スバルって彼女がいるんだよね？」

「ブーーーーー!!!!」

スバルはジュースを飲んでいる最中だったため彼はジュースを口に含んだまま、驚いてしまい、水鉄砲の如く吹き出してしまった。

「っってお前きたねえ!!」

レイは半ば苦笑いしながら言った。

「ゲホッ、ゲホッ、どうしてそんなことを突然いいだすんだよ？」

「だって暁っていう人がお前に彼女がいるっていったから・・・」

（なんであの人はいろんな人にかなのかな？かなりなえるんだけど・・・）

「どうだ？うまくいってるのか？」

レイはにやけながら言った。

「うん・・・まあね・・・」

「ほかにも聞いたぜ。。。一緒に寝てんだろ？罪だな。。。」

「どこまでしてんの？僕とあの子の事・・・」

「あんなことやこんなことまで」

「もうやめて・・・・・・」

スバルは完全に落ち込んでしまった。

「お前は どうするんだ？ 暁っていう人が言ったことを無視して日本に帰るのか？」

「それとも、ここにどどまるのか？」

「う。。。ん・・・考えとくよ・・・」

「ああ、わかったぜ。もし戻るなら一発睨っていうやつ殴れば？いろいろ知らせれた恨みとしてな」

「それは遠慮しとくよ・・」

スバルは苦笑いしながら言った。

彼は睨の言ったことを無視して日本に戻り彼女を安心させるのか、それともこのまま残り、彼女を強くさせていくのか？

迷っていたスバルだった。

**T r a i l | 4 9 目 標 超 越 ( 前 書 き )**

祝50話 ^ ^

本文スタートw

舞台はフランスから日本へ変わる。

そして場所は日本のスカイウェーブとなる。

「これでいい・・・これでいいんだ・・・」

一人の青年が高速移動しながらささやかに呟く。

その青年の声は電波変換をしている暁であった。

『これでよかったんでしょか？ シドウ？』

「ああ、いいんだ。別に恨まれようが構わない。俺はあいつがただ一人だけ傷ついていく姿を見ていられない・・・。それにあいつはまだ症状は出ていないが、おそらく俺と同じで長時間の電波変換ができない体へと蝕まれている・・・。恐らくその障害になっていることをあいつはまだ気づいていない。あの時、ファントム・ブラックにつぶされた時、オーバードライブ状態のスバルなら反応できたはずだ・・・」

『あの時に私の能力でスバルの身体スキャンをして障害が検知されましたから・・・いずれ症状はでるでしょう・・・』

そうあの時、アシッドの能力を使って戦っていたスバルの体に悪影響がないか調べてのだ。

あんな大怪我をして、何故戦っていたのか？スバルの体に変化があるのではないか？と思いアシッドに身体スキャンをしていたのだ。

そう思っていたことが現実になろうとは・・・

「どうやらあの二人がスバルを救出してくれたみたいだな・・・」

『あの二人には感謝すべきですね』

「そうだな・・・」

そういいながら、暁はスカイウェーブからWAXA本部へと帰島した。

その後、電波変換を解除してWAXAの入口を通り、ブリーフィンルームへと向かった。

暁はブリーフィンルームの自動ドアを通った。



その部屋の中には、いつもの面子・・・といってもWAXAの艦長とスバルの父さん、大吾とヨイリー博士しかいなかった。

「おう、暁。どうだったんだ？フランスで電波体による事件が発生していたようだが、お前が解決させたのか？」

「一応俺が解決させた」

暁はそういいながら、席に向かった。

「一応ってことは他にも関係してるやつがいるんだよね？まさかスバルか？」

大吾が勘を研ぎ澄ませて質問してきた。当たり前だろう。自分の息子が行方不明となっているのだから・・・。

「・・・・・・・・・・」

暁は考え込んだ。

スバルがフランスで生きていたことを、そして戦ったことをー。

「・・・・・・・・暁？」

黙り込んでいる暁に大吾が質問してきた。

「・・・あいつはいなかった・・・」

「そうか・・・一体誰が・・・？」

「俺が出会った二人の若き人だ。その二人は電波変換ができる・・・。そしてさらにあることを聞いた。

これは地球に住む全人類に叩き付けられた問題を聞かされた・・・」

どうやらスバルが生きていることを隠ぺいたようだ。

「一体。何故その二人の少年たちがそんな事を言っていたの？ シド  
ウちゃん？」

ヨイリー博士が興味津々に質問してくる。

「あの二人の相棒・・・電波体は木星型電波体・・・滅多に姿を現さない希少な電波体です。あの電波体達はこう言っていました。あの7年前に起きた宇宙ステーションでの事件。あの事件で太陽系に移住する電波体・・・、その中の冥王星と海王星に住む電波体達が俺たちを危険体とみなして襲撃しようと計画しています」

「なるほど・・・じゃあ今の組織が活動しているのとの関係があるの

かしら？」

ヨイリー博士が勘のいい質問をした。

「ええ、奴らはあの惑星から指名されてこの地球に電波変換できる奴らと戦い戦力を疲弊させることが第1の目的です」

「そして第2の目的は宇宙からの特殊電磁波での世界停電によるライフラインの完全麻痺したところでの隕石衝突です」

「なるほど・・・簡単にいえば、スバルちゃんやシドウちゃんの電波変換できる力を抑えて、抵抗が薄くなったところをさらにライフラインを完全に止めることで混乱を起こし、一気に攻める・・・大胆で繊細な作戦ね・・・」

「そうです・・・。これを止めるには、奴らと分かり合う必要がある。あの木星型電波体はこう言っていました。今、人間と電波体は試されている、滅びか共存か・・・。だからこそ分かり合う必要がある。お互いがお互いの事を知り、手と手を取り合う世界を作っていないか・・・と言っていました。そうこれが人類と電波体との来たるべき対話です・・・」

「人と電波体が手を取り合う・・・来たるべき対話か・・・」

大吾がその言葉をゆっくり発言した。

その時、大吾はこう思っていた。

息子がいてこの事を聞いたら、どう思うだろう。だがその答えは聞けない。今はすぐそばに息子がいないのだからー。

「どうするんだ？これを止めるには最低でも特殊電磁波の作戦は止めなきゃならないぞ・・・」

大吾が困ったようにいう。

「俺が解決させる・・・」

暁が険しい表情で言った。

「暁・・・お前一人でか？」

「ああ、そうだ。これ以上あいつらに迷惑をかけるわけにはいかない。それにあいつらはまだ若い。今回の戦いには危険が多すぎる・・・。10代で死なせるわけにはいかない」

「だから、お前自身で解決するത്？」

「ああ、無茶だと思ってくれて構わない・・・俺もスバルのように何かを一生懸命守りたい気持ちを背負って戦ってみたいんだよ・・・」

「暁・・・」

「シドウちゃん・・・」

「だからさ今回は俺にまかせてくれないか？今から万全に準備して奴らの母星へと向かう」

「そしてどうするんだ？」

「戦いはしない。どんなに攻撃されても反撃しない。ただ奴らと共存していくために、分かり合うために戦うだけだ」

「そうか・・・では・・・私もその作戦に参加していいですか!？」

一人の少女の声がブリーフィングルームに響く。

その少女の声はミソラだった。

「失礼ですが、廊下で全て聞かさせていただきました。スバル君がたとえいなくなったとしても・私はスバル君がこの世界を守ってきたいを継ぎたいんです！！スバル君だってそう望んでいると思います！だから私もその作戦に参加して電波体との来たるべき対話をさせてくれませんか！？」

ミソラは必死に訴えた。

「ミソラ・・・口ではどうだっていえる・・・確かに君の気持ちちは伝わってくる。だがそれでお前がもし死んでしまったらどうするんだ？また悲しむ人が出るんだぞ・・・。スバルだってお前にはまだまだ生きてほしい・・・そう思っているんじゃないのか？」

「けど・・・それでもスバル君は今まで一人で戦い、そしてあきらめずに守ってきました。私も彼のように守りたいんです！！」

（俺と同じ事を・・・彼女の決意は本物のようだ・・・）

暁は考え込んだ。

参加させるのか、させないのか。

「……仕方ない分かった。ミソラ、特別にお前を参加させる。だが戦いで少しでも無理と感じ取れたら無理矢理、地球へと返すかな!!そこんとこ肝に銘じておけ」

「あ、ありがとうございます!!」

ミソラは深々とお辞儀をする。

その直後、大吾が暁の近くに来て小さな声で話した。

「いいのか?彼女を連れて行って?」

「どんなに言っても無駄だっただろうな。だが下手したらあいつがキーマンになるかも知れない。ミソラは純粋で優しい心を持った少女だ。もしかしたら、その優しい思いが来たるべき対話を実現させるかもしれない……」

「そうか……必ず生きて帰ってこいよ……スバルもそう望んでいるはずだから……」

「ああ」

そして何日後に作戦が決行される。

人と電波体は分かり合える日が来るのか。

二人の思いと電波体の思い・・・そしてスバルの思いが交錯する中で  
その先には何がまっているのだろうか・・・。

運命の戦いがそろそろ幕を開けようとしていた。



## Trail 49 目標超越（後書き）

@書きトーク18回ですww

今回の話で暁さんはスバル君の安否を隠ぺいさせちゃいましたww  
よっぽど苦しい思いをさせたくないんですねww

後でひと思いで優しい暁Sにはうまい棒300本プレゼントさせましょうw

日本ではスバル君は行方不明という設定にしていますw

驚いた人もいるでしょう・ω・

さて物語も最後を迎えます。

見つめる先には何が見えるのか・

今2nd season 作成中でございますww

こっから作者がけいおんと出会い、ふりかかった不幸？を話しますw

友達「おい、バンドやろうぜ!!」

突然、ダチがそう言ってきた。

俺「何言ってるの！アンタアアアア！！？」

友達「いや、だってお前けいおんみてるんでしょ？バンドやってみたいって思ってたの？」

俺「あるよ・・・」

友達「だったらやろうぜ！！俺、ギターあるからさ、お前ベースでやってくんない？」

俺「へ？」

友達「いやだって秋山滯って左利きでベースだろ？お前も左利きだからベース@ボーカルねww」

俺「最後、なんていった？」

友達「ボーカル・・・」

俺「なんで？」

啞然としていた俺。何故俺がボーカルという目立つ役をやらねばならないのかと思ったからだ。

友達「お前BUMPの歌をうたうのうまいじゃんwだからお前」

俺「単純な理由だなwってか俺ベースとかやったことないよw」

友達「俺もそうだよ。そんなうまくないし」

友達「お前がもし入ってくれた4にんだからさ、UVERworldとかの曲演奏しようぜ!!!w」

俺「いきなりUVERですかい!!!w」

友達「うん・・・」

以下省略・・・

という出来事がありましたw

でも実質、部活やってるから無理ですww

そして平沢唯の次に中野梓が気にいってしまったorz

お前、腐ってきたぞと部員の友達から言われました・・・ 廃人？

そろそろ友達からも読んでくれる皆様方からも変な奴だと思われかけていると思いますww

本文の感想、もしくは@書きの感想まっています^^

**T r a i l | 5 0 長所と短所（前書き）**

本文です・・・

駄文  
o r  
z

## Trail | 50 長所と短所

舞台は再び変わる。

ガギン!!

何かと何かがぶつかり合う音がした。

それは二つの剣とひとつの鎌だった。

何度も何度もぶつかりあい、辺りに火花を散らしていた。

「まだまだあ!!」

レイが叫ぶ。

「こつちだってええ!!」

スバルはスターソードを両手に持ち、戦っていた。

反面、レイはビームサイズを持ち、剣と鎌の柄をうまく使いながら二刀流に対抗していた。

「であああ!!」

レイはビームサイズで斬りかかる。

「ぐっ!!」

スバルは片手にあるスターソードでビームサイズを止める。

「僕にはまだ片手がある!!」

両手で攻撃しているレイに対してスバルは片手だ。だから反撃の隙を作りやすかった。

スターソードで突きをしようとしたが――

「俺には二度も通用しない!!」

突如、鎌を下に降ろしたスバルは防いだスターソードの位置が突然変わり体もその動きにあわせられもっていかれてしまった。

完全に隙がまるだしのスバルにレイの鎌の洗礼を受けてしまった。

そして、特訓が終わり2時間後・・・

スタスタスタ・・・

広い廊下を歩く音が聞こえる。

その音を出している人はスバルとレイだった。

「なあ？ スバル？」

「なんだい？ レイ？」

「お前・・・バトルスタイルを少し変えてみたらどうだ？」

「え？・・・別に僕は今のほうがいいけど・・・」

「それじゃだめだ・・・今日の俺の一撃みたいにお前が単純な手を使っていれば読まれるし、同じ手とかばっかり使ったら読まれてしまうだろう？」

「確かにそれはそうだけど・・・これが僕の戦い方だし・・・」

「確かにそのお前のスターソードなんとかっていう二刀流という長所やノイズドライブを生かして戦うのはいい。だがどんなものにだって必ず短所と長所があるんだ。わかるか？」

「う、うん・・・」

（よくわかっていないようだな・・・説明しとくか・・・）

レイはスバルの視線をそらす様子を見て悟ったのか説明しだし始め



た。

「そうだな・・例えば俺が近接特化型でお前が遠距離特化型とする。近距離で有利なのはどちらだ？」

「近接特化型のレイでしょ？」

「そうだ。銃とか持っていない遠距離は懐に入れられると完全に不利だ。だが距離があると攻撃される可能性がかなり下がり射撃ができるし、近接特化の俺には接近しなきゃ斬ることも何もできない」

「・・・」

「簡単にいえば、近接は距離を取られてしまえば何もできない・・。これが短所だ。長所は近接では無類の強さを発揮できることだ・・。無論、その長所を生かせることが重要だがな・・」

「短所を長所で補う？」

スバルが質問してくる。

「まあ、一理あるな。お前は二刀流だ。相手の両手を片手で封じてしまえば簡単にカウンターを取ることができる。後は手数で勝負。反面、二刀流では距離をとられてしまわれたら何もできない・・。だからその短所を補えばいい。簡単にいえば、二刀流で衝撃波みたい

なので攻撃することだな。だから俺は鎌で真空の鎌鼬で遠距離攻撃をしかけている」

「確かに剣の長所を生かして補っている・・・」

「どうだ参考になったか？少しはお前のバトルスタイルの変更と立ち回りを教えたが・・・？」

「ありがと！！かなり参考になったよ！！」

「そ、そうか？そんなに素直に言われると思ってなかったぜ・・・」

レイは照れ隠しする。

「ま、まあ確かに立ち回りとかうまくすることで危険性はグッと減るから・・・」

「うん、ありがと！！」

そしてスバルは借りている部屋へと入っていった。

「バトルスタイルの変更か・・・。どんなものにも長所と短所があるか・・・。そんなこと考えたことなかったなあ・・・。曉さんよりい

いこというなあ・・・」

少し舞台は変わる。

「ヘックシュー!!」

暁が突然くしゃみした。

『突然くしゃみなんてどうしたんですか？ シドウ?』

「さあな？もしかしたらスバルが俺たちの事を言ってるんだな」

『確かに言ってますね』

そして再びスバルのいる舞台。

「・・・・・・・・」

スバルは考え事をしていた。戦いで立ち回り。囲まれた時の対応の仕方をイメージトレーニングをしていた。

スバルのイメトレ回想――

敵に完全に囲まれた状況になっていた。

二体が攻撃してくる。

それを一撃で撃墜させる。

囲まれた時、一撃で倒せなかったりすると、次の攻撃がすぐにきたりするからだ。だが一撃で倒すと動いていない敵への意識牽制となるからだ。

そして囲まれているイメージ回想で一人の若き人が現れた。

その人はミソラだった。

「つてええええちよよよとまってえええええ！！！！」

スバルのイメージトレーニングが突然終わる。

スバルは理解できなかった。何故、突然彼のイメージトレーニング中に彼女がでくるのが理解できなかった。

（何故、ミソラちゃんが突然？てか最近ミソラちゃんの事すっかり忘れてたな……。どうしているんだろ？）

スバルは心配していた。

『どうした？突然叫んで？』

「な、なんでもない・・・」

何故突然彼女が出てきたのかは神だけが知っているのであった。

『そうだスバル、言いたいことがあるんだが』

「どうしたの？」

『お前さ最近体の調子や反応速度が遅くなってないか？』

「い、いや。そう感じないけど？」

『だったらいいんだが・・・お前がよけれる攻撃を最近よけきれないから・・・』

「そうなんだ・・・」

『い、いや俺の心配しすぎなのかもしれない。すまなかった』

「いいよ気にしないで。ウォーロックもバトルスタイルの変更を手伝ってよ」

『おう、いいぜ』

こうして二人によるあらたな戦い方の編集が始まった。

## Trail | 50 長所と短所（後書き）

@書きトーク18回？だったかな？

とりまスタートです。

スバル君は新たな戦い方の境地を探しています。

はい。それだけです。

彼はどうなるんでしょうね？

そして作者の悪戯が入ってしまいました＞＜

最近ハマった言葉・・・「いいか！反射と思考の融合だ！！」ww

俺が言い始めたならみんななんか・・・ww

今年の流行語大賞かなww

最近聞ける回数が多い曲 Don't say Lazyで

す  
W

わかっている人は素晴らしいです^^

感想まっています  
W



## Trail | 51 君と私 それぞれの理念

場所は宇宙になる。

二つの惑星から無数の電波体が地球を破壊しようと、出撃していた。

その中にはかなり大きな母艦らしき兵器があった。

それが起きていた事は世界の一部のメンバーとWAXAの構成員だけが知っている。

場所はWAXAに変わる。

施設内では警報が鳴り響き、人が慌ただしく動いている。

「ついに来やがったか・・・」

超光学カメラで映し出された映像をみて暁が困ったようにいう。

「あれが特殊電磁波を降らす機械か……。回りにいる敵は兵器の防衛か・・・」

「とりあえずミソラ達に連絡だ・・」

艦長は連絡を取り合っていた。

地球に絶対防衛線を設置するためである。

ノイズキャンセラーが再構築できたため、それを小型化した兵器を宇宙に設置するための連絡を取り合っていた。

そして2時間後・・

「よし、全員揃ったな」

「」「はい!!」「」「」

スバルを除く4人の若き少年少女が収集された。

「スバル無しで本当に守れるのか？」

ジャックが不安そうに言う。

不安になるのも無理はない。

世界を救ったヒーローがいないのだから。  
今ここにいるのは自称ヒーローもどきしかない。

といっているのも実力はスバルに劣らない程なのだが。

「とりあえず作戦はこうだ」まずウイルスは殲滅させる。電波体はなるべくデリートするな。もっと復讐への意識を高くさせてしまう」

「だったらその対処はどうすればいいんですか？」

ツカサが質問してくる。

「いい質問だな。お前らにこのアビリティを渡すぞ」

そういつて暁は4人にアビリティを渡した。

「これは？」

「これはフリーズパッチといって、電波体の動きを長時間封じるアビリティだ。これなら相手を非殺傷でいける」

「なるほど・・・」

ツカサが納得した。

「それにこれを托すわ、ミソラちゃん」

ヨイリー博士が二つのアビリティを渡した。

「これらは一体なんですか？」

「一つはミソラちゃん専用、エースPGMよ。これを装備すれば擬似メテオサバーにアクセスしてファイナライズが出来るようになるわよ。もう一つは擬似ノイズドライブ。ノイズ吸収率500%でオーバードライブをしようできるからね」

「ありがとうございます！！」

ミソラが深々と礼をする。

「そして最後は俺とミソラで最期の大役をやる……。電波体とわかりあうためだ」

暁とミソラが目配せをしていた。

「いいか、この場にスバルがないからって不安になるな。いつまでも俺達は彼に頼ってはいけない。スバルがない今だからこそ、スバルがこの世界を守ってきた世界を今度は俺達を守る番だ！！！」

暁は全員に葛をいれた。

そして遊撃隊は宇宙へと向かった。

場所は再び宇宙になる。

地球から高度10万メートル。

大気圏を超えたミソラ達は無数の電波体がいる方へむかった。

地球付近にはノイズキャンセラーが設置されている。

これが絶対防衛線なのだろう。

「暁、聞こえるか？」

無線の連絡が入った。

「ああ、聞こえている」

「今、奴らは真っ直ぐそちらにきている。バックアップはこちらでするからな。頼む、世界を・・・」

「それぐらい分かってるさ」

暁は当たり前の言葉を言う。

「よし行くぞ!!」

5人は移動し始めた。

そして――

「なあ、なんだあれは？」

ジャックがかなり先の情景が変になっていることにきずいた。

『あれはウイルスです。シドウ』

「ああ、分かっている。てかなんだあの量は!？」

かなりのウイルスがいた。およそ6万體ぐらいだろう。

そのせいで先が見えなくなっていたのだ。

「あんな量のウイルス見たことないよ!？」

「あわてないで行こう!!」

ツカサが場の空気をただす。

「来るぞ!!」

暁に100体ぐらいのウイルスが襲い掛かる。

宇宙は無重力の為、攻撃は360°方向へとかわせるためよけるのは簡単だった。

ウイルスの突進攻撃をかわした後、反撃を開始した。

「ブラスター!!」

反撃をするが、20体ぐらいしかデリートできなかった。

再び、暁にウイルスの反撃が来る。

「ジェミニサンダー!!」

ツカサが放った極太のレーザーが暁の1m前をよぎる。

ほとんど突進攻撃しかないウイルスは極太のレーザーに自ら突っ込んでしまいデリートされた。

「ナイスアシスト!!」

だが休む暇もなく次のウイルス100体ぐらいが襲い掛かる。

「ショックノート!!」

「ペインヘルフレイム!!」

「オックスファイア!!」

三人の攻撃がウイルスを攻撃するが、半分しかデリートされなかった。

黙々と煙が立ち始める。

その煙の中から、ウイルスが出てきて、攻撃をした三人はもろに攻撃を喰らってしまった。

「くそっ!!」

暁がかわしながら、反撃をする。だがやはり回避行動のほうが多い。

「数が多すぎる!!」

ツカサはジェミニサンダーで多数の敵を撃墜させるが次々とウイルスが接近してくる。



「あきらめるかよ！！！くそつたれがああ！！！！」

ジャックがペインヘルフレ임을連発させる。

「このままじゃここで時間を食うだけだ！暁、ミソラお前らは先にいけ！！！」

「でもジャックこの敵の多さじゃどうするの！？」

正面は敵が多数。正面突破するのは死ににくようなもんだった。

「僕にまかせて！！」

ツカサが前にでる。

「行くよ！！ヒカル！！」

ツカサは何かをしようとしていた。

「おうよ！！！」

「今こそ、僕ら二人がひとつになるときだ！！！」

「二つで完璧じゃなかったら、俺らがひとつになることで!!」

「完璧になれる!!」

ツカサとヒカルが光を放ちながら、融合した。

光の先には、一人になったらツカサとヒカルがいた。

容姿は全身黒になっていた。

「行くぞ!!」

かなり早いスピードで動く。

早い速度で射撃しながら次々とウィルスを殲滅させる。

「これが二人の完璧な力だ!!!!」

「違う! 未来を守る力だ!!」

「今度は俺だ!!」

ジャックが構える。

「行くぜ・・・」

ジャックのバイザーの下からウイルスをロックオンしているのが表示されている。

およそ500体をロックオンした瞬間にジャックの周りから紅蓮の炎が出現した。

「蹴散らせ!! バーストヘルデスフレイム!!」

放たれた炎が次々と標的にしたウイルスにふりそそぐ。

次々とウイルスを殲滅させていく。

「ツインジェミニサンダー!!」

「フルバーストフレイム!!」

かなりの極太レーザーが正面の敵、およそ1000体を殲滅させる。

「暁、ミソラ!!」

「よし、いまだ!!」

今のうちに正面突破をする二人。

他の三人はウイルスと闘っている。

その頃、地球では――

スバルたち三人はレイの家に行った。

『スバルさん』

ウインズが話しかけてきた。

「ん? どうしたの?」

『奴らが来ました。今、仲間からの交信で5人の電波変換できる人間が戦っているようです』

「なんだって!？」

『どうする? 行きますか?』

「・・・」

スバルは迷っていた。

「行くしかないだろ!!」

スバルは外に大急ぎで外に出た。

「ちょっと待てよ、スバル!!」

だがそんなことも聞かずに外に出て行ってしまった。

「待てよ! スバル!!」

「どうしたの?」

「おいてくなんて水臭いぜ。俺たち仲間だろ?」

「けど、君たちにも迷惑が・・・」

「そんなこと気にするな。俺らはお前と同じでこの地球で過ごした  
いいんだよ」

「レイ・・・」

「そうですよ、スバルさん。私もこの地球で過ごしていきたい」

「リサさん・・・」

「そうだよ、そうですよね。行きましょう!!」

「おう!」

「はい!」

ここにも三人が宇宙に向かおうとしていた。

「「電波変換!!」」

そして三人は宇宙を目指した。

一直線に向かう。

「二人とも、そろそろ大気圏だ。バリアを張っというて!!」

「「了解!!」」

三人はバトルカード、バリアを使い大気圏に備えた。

そして場所が変わる。

場所はWAXA指令室であった。

「艦長！！大気圏外に突入する物体が3つも！！？」

「なんだって！？モニターに出してみろ！！！」

モニターに映し出されたのは三人だった。

「これはスバル君じゃないか？」

「なんだって！？！」

大吾が驚きの声をあげる。

「そうか生きていたのか・・・」

「やっぱり生きていたのね・・・あの時のシドウちゃんの言い方に違和感があったから、何か隠しているのかと思ったけど・・・」

「何か思っただんなら俺にも行ってくださいよ・・・」

「すまないわね・・・一応誰にもしやべらなかったのよ・・・」

ヨイリー博士がすまなそうに言う。

「艦長さん、スバル君と連絡できるかしら？あと、データの送信もできますかね？」

「一応できますが・・・」

「すぐに連絡して！」

そしてー

「ザッ、ザッー」

「なんだ？」

スバルが何か聞こえてきて疑問を浮かべた。

「スバ、スバ・・・ル、聞こえるか？」

「その声は父さん！？」

通信で父さんの声がしてきたためおどろいてしまった。

「生きていたのか・・・よかった」



「さっそくだけど、スバルちゃん、擬似ノイズサーバーのデータと完成版擬似ノイズドライブのデータを転送するわ。これで完全なオーバードライブができるわよ」

「ありがと、ヨイリー博士!!」

「世界を頼むわね・・・」

「了解!!」

三人は戦いが起きているほうへと向かった。

「お、お前は・・・」

ウィルスの大群を向けた二人の視線の先に一人の男が佇んでいた。

「久しぶりだな、若き青年。そして若き少女よ・・・」

その相手は過去に戦った、名も明かさない謎の電波変換した男だった。

「私はあの過去でお前らに戦いを挑む!! 行くぞ!!」

謎の男は、剣を持ち突っ込んでくる。

直後、暁はミソラを吹っ飛ばし、剣でガードした。

「暁さん!？」

「大丈夫だ!!」

「お前は先に行け!!」

「で、でも!？」

「お前がやらなかったら誰がやるんだ!! スバルの思いを継ぐんだろ!! 分かったら行くんだ! 人類と電波体が分かり合うために・・・いけー!ー!ー!! ミソラ!ー!!」

「・・・」

無言でミソラはさらに奥へと進む。

「仲間を見捨てていこうとは笑止千万だ!!!!」

「あいつは俺たちの思いも持って行ったんだ!! 仲間を見捨ててなんかいない!!」

「俺もあいつの思いを背負って戦っているんだ!! 俺はもう仲間の命を無駄になんかせはしない!!」

剣と剣がぶつかりあう。

そしてウイルスと闘っているツカサ達では全身傷まみれになった。  
た。

「はあ・・・はあ・・・」

三人は完全に息を上げていた。

三人の後ろからウイルスの突進が来る。

「オックスファイア!!」

「エレキソード!!」

「マルチロックオン……バーストヘルデスフレイム!!」

三人の技がウイルスを蹴散らした。

だがさらにその後ろからも来ていて、完全に前へと意識が行っていた三人は脆に喰らってしまった。

「「ぐああああ!!」」

そしてさらに追撃がくる。

完全にやられると思った瞬間、回りにビームやら矢が降り注ぎあたりのウイルスを殲滅させた。

「あ、あれはスバル!？」

三人は驚きが隠せなかった。

何故突然出てきたのか、どうしてこの場所が分かったのか。

さらに謎の二人の電波変換した人もいる。

「フォーメーション・S・1・2で展開。リサはここでサポートを、僕とレイは剣と鎌による近接戦闘でやるぞ!!」

「了解!!」

三人は展開した。

まずレイが前にでてウイルスに意識牽制させる。

食いついたウイルス達はおよそ500体がレイへと一つの束になって突進する。

「スバル!!」

レイが掛け声を出す。

「スターソード！！ 2nd. Galaxy Blade スター  
イザーソード！！」

「

スバルはスターソードのΣブレードとδブレードを組み合わせた第  
2の必殺技を解禁した。

二つの剣が一つになり、さらにかなり剣が巨大化した。

スバルはスターライザーソードを一系列の束になっているウイルス達  
に向け振り仰ぎ、思い切り叩き斬った。

その後も匠な連携で次々と敵を撃墜させる。

「レイとリサはここでツカサ君達の援護に回ってくれないか？」

「「了解！！」」

そういつてスバルは再び、スターライザーソードを振り上げ、前の  
ウイルスを一層して正面突破した。

「頼む、間に合ってくれ・・・」

スバルはそう思いながら奥へと進んでいった。

## Trail | 52   それが人の成すべき事

「間に合ってくれ・・・」

スバルは半ば自分にいらつきながらも奥へと進んでいる。

そして、あちら側では――

ガギイン！ガギイン！と剣と剣がぶつかり鳴り響く音がする。

「いつまで耐えていられるかな！？」

謎の男は長い太刀を持ち、華麗に剣を振っていた。

暁はロックオンソードで回避しながら防ぐの繰り返しだった。

「俺がよけているだけだと思っているのか！？」

「フッ・・・そうは思っていないさ・・・。その実力の持ち主なら、俺の剣の太刀筋を見て、癖や力の溜め具合、そしてタイミングを見計らったところで反撃するつもりなのだろう？」

「チッ・・・」

謎の男は暁の意図が完全に読んでいた。

「いつまで耐えていられるかな!!」

敵は急接近し太刀で斬りかかる。

暁はロックオンソードで防ぎ、後ろへと後退する。

「遅い・・・」

「なっ!?!」

暁がロックオンソードで防ぎ、距離を取るだろうと完全に予測し後ろにまわりこんで斬りかかった。

「ぐあああああ!!!!」

「この野郎!!」

「そんな安い攻撃!」

敵は易々とかわす。

「チクシヨウが・・・」

暁の苦し紛れの攻撃も完全に読んでいたのだ。



「アシッド、オーバードライブのシステムは!？」

『後、100%で発動できます』

「上等だ!!」

暁は片手に銃を持ち、撃ちながら距離を詰める。

だが、暁の撃った弾は易々と避けられてしまう。

「そろそろとどめだ!!」

謎の男は高速移動した。太刀を構えながら、スピードで暁を翻弄する。

ズバッ!!

暁の右腕を太刀がとらえた。

「ぐうう!!」

次に暁の左腕が斬られる。

そして腰、足も斬られた。

「とどめだ!!」

とどめに入ろうと太刀で突きの構えをする。

そして一気に急接近。

暁は謎の男に向く。

「俺はまだ死ねない!! やるべきことがあるんだ!!」

そして太刀と暁の距離が数センチとなる。

その直後、人の反応速度を超える速度の閃きを起こす。

「くたばれええ!!!!」

「.....」

ヒュン!!

暁は太刀がほんの数センチとなった瞬間、1secオーバードライブを使った。

オーバードライブを使い、素早い動きで太刀を一瞬で回避し謎の男の横を擦り剥けて、後ろに回り込んだ。

「なっ!?!」

「でああああ!!」

片手にある銃で謎の男の背中に銃を押し付け、0距離で銃のトリガーを引く。

バンバンバン！！

銃声が鳴り響き、次々と0距離から放たれた弾が謎の男に命中する。

「ぐあああああ！！」

「これでどうだ！！」

さらに片手にあるロックオンソードでとどめの一撃を叩き込む。

そして、謎の男は倒れたのだった。

「はあ、はあ、はあ・・・ふう・・・」

暁は呼吸を整えた。

「や、やったのか？・・・」

腰に手について休憩している暁であった。

そして、一人の少年がやってくる。

「やっぱり、きやがったか・・・」

暁はそういながら呼吸を安定させる。

「暁さん！！大丈夫ですか！？」

「ああ、なんとかな・・・お前もそうだ。なんで来たんだ！？」

「きまつてるじゃないですか！！この世界を守りたいからですよ！  
！暁さんだって一人で抱え込んでる場合じゃないでしょ！？」

「・・・・・・・・」

暁は少し考えてあのことを言う決心をした。

「スバル・・・俺がお前に日本に来るな、戦うなといった意味が分かるか？」

「まったくわかりませんよ！？貴方は何の意図があって僕にあんなことを言ったのか教えてくれませんか！？」

スバルは半ば前のめりになっという。

どうやら少し熱くなっているみたいだ。そうなるのは無理はない。

自分だけ勝手にこんなことされて、さらに秘密で勝手にこんな危険なミッションに出ていることに・・・。

「スバル・・・お前・・・自分の体の異常に感じたことはないか？」

「それが一体、何の関係があるんですか!？」

『スバル、冷静になれよ・・・。暁、俺もスバルの事についてそう思っていたところだ。こいつの体はまだ初期段階だと思うんだが、衰弱してきていると思うんだが?』

「ああ、ビンゴだ。お前は俺と同じで長時間電波変換できない病気になるっている。まだ初期症状がでていないものの、反応速度や全身の筋肉が落ちてきているはず」

「だったら、なんで僕に言わないんですか!!？」

「それは、お前の体の事を思ってだな・・・。」

その言葉を聞いたスバルはある行動に出た。

バキッ!!!

何かが何かにぶつかる鈍い音がする。

スバルは、右手で思い切り暁を殴った。

暁は吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされて、暁はゆっくりと立ち上がった。

「僕が殴った意味が分かりますか？」

「……」

「僕の体の事をきずかってくれることはうれしく思います。それだからって一人だけ、そんな理由で相手の答えも聞かず、だれにも言わず、ただ抱え込んでいるだけでそれで僕や周りの人が納得すると思うんですか？絶対、僕は納得しません……。一人だけそんな風に扱われるなんて……。そんな扱いされるぐらいならそんな考えをした人を僕はこういいなくなります……」

「どんな風にだ？」

「それぐらい世界を背負うためにはそれぐらいの覚悟はしていると……。たとえば、自らの体が滅びに近づこうとも、僕は戦う。あの人の笑顔が見たいから……。そしてみんなを守りたいから……。あの時の暁さんだってそうだったんじゃないんですか？」

暁はメテオG事件でのWAXAで戦ったクインティアとの戦いでとかでいっていたことだ。

「そういえばそうだったな・・・」

暁は自分の過去を思い出す。

ジャックやクインティアとの過去を思いだす。

「・・・悪かったな。お前の心配ばかりでお前の気持ちを聞かずにこんな過ちを起こしてしまったな。お前はいつだってみんなのために戦う俺の見込んだヒーローだからな。今回だってそうなんだろう？」

「いつだって僕はそうです。みんなと一緒にいたいから・・・、みんなと笑顔で過ごしていきたいから僕は戦いますよ・・・」

「フツ・・・顔つきが大人になってきたな・・・」

「やめてくださいよ、こんなところで冗談を言うのは・・・」

「本当の事を言っただけだぜ。あとスバル」

「なんですか？暁さん？」

「殴った仕返しは後でさせてもらうぜえ〜。覚えとけよ」

「うっ・・・。は、はい・・・」

スバルは暁を殴ったことをすっかり忘れていた。

「そういえば、ミソラちゃんは？ 姿が見当たらないんですが？」

「あいつは俺らの思いを受け継いで先にいった。今頃、きっと奴らと接触している頃だろ。急ぐぞ！！」

「わかりました！！」

そういい、スバルと暁はミソラの後を追ったのであった。

その頃、ミソラ側では――

『大分、奥まで来たわね・・・』

「けど、私なんかにできるかしら？」

『大丈夫よ！！ ヨイリー博士や暁さんからもらったアビリティがあるんだし、きつとうまくいくわよ！！』



「うん……。ってあれは何!？」

『でできたわね……。』

「攻撃はしないでいこう。なるべく意識を変えてしまうだけだからね。さて私専用のエースPGM効果はっと……」

「えーと、心を落ち着けて、神経を集中させて、自分の体、足、手、胴体一つにまとげあげるようにして体全体をとがらせる事で発動できる究極の空間湾曲回避、マジックステルスステップ……。通称、空回身か……。なんかすごそうな大技だね……」

『貴方なら心を落ち着かせることが得意だし、できると思うわよ!』

「こんな大技があるんなら、きっとできる!！」

『まってもう一つあるみたい』

「高濃度ノイズ粒子を全面展開することでできる意識共有空間を作る技か……」

『けどこれは危険性がともなうみたいだね』

「オーケー!! 行くよ!!」

『了解!!』

そしてミソラは存亡をかけた大群の電波体の中へ突っ込んでいった。

一体、誰がこんな事を望んだのだろうか――

本当に対話ができるのかと臨んだ人や電波体はそういないだろう。

それは、人と電波体の間には大きな歪みと、そして技術などの大きな違いがあるからだ。

昔からそうだ。今だ、人は分かり合うことができていない。22X X年になった今でも人は争い、人は兵器を使って争い、自分の都合のいいように人の命を易々と奪っている。

周りから見ればこう思うだろう。

「同じ生きている人なのに、何の罪もないのに何故死ななければならぬのかを・・・」

人を殺す側は何も考えてはいないだろう。それは当たり前だ。

「自分さえよければいい」

と考えていると思う。

だがどんな理由だったとしても人には人それぞれの生きる理由がある。

歌手になりたい人、研究家になりたいもの、自衛隊などで人の命を

守りたいと思う人、それぞれの未来や夢に向かって生き続ける。

それが人の生きる意味なのだろう。

だからって無闇に人の命を奪ってはいけない。

だから分かり合う必要がある。

人と人が手を取り合い、共存していける世界を・・・

そのためには世界を柔和させ、平和への一步を歩む必要がある。

だがその前に一人の少女と、一人の少年、一人の青年が未知なる生命体、電波生命体と分かり合おうとしていた。

そうわかり合い、お互いがお互いの事をよく知り、共存していくために――

場所は地球の隣にある太陽系惑星、火星に移る。

「ハア、ハア、ハア・・・」

一人の少女が息を切らしながら、ある大群の前で止まる。

『なんて大群……。ムー大陸と同じくらいの量じゃない!?』

簡単にいえば、ムー大陸があるとする。

そのムー大陸の大きさが同じになるくらいの電波体の大群がいることになる。その中には母艦らしき物体と電磁波を発する、特殊アンテナみたいな建造物が見えていた。

「ここで逃げたら、何も変わらない、分かり合えない・・・」

『だから分かり合う必要がある・・・』

「『手を取り合うために!!』」

ミソラは前に進んでいった。

場所は変わり舞台はスバル、暁側にうつる。

「まだか・・・」

二人は高速移動しているが、まだつかない。

推力を全部、ブースターにつけているが前方に何の兆しも見えない。

「とりあえず、ひたすらミソラちゃんの生命反応がする方向へ進む事しかできませんよ!」

「わかってるさ!!」

二人は最大加速で進んでいった。

再び、場所は火星と変わる。

そして、電波通信でミソラに通信がかかる。

『・・・貴様は人間か？何しにここへ来た？死にきたのか？』

その通信で入ってきた声は低く冷たい声だった。

「私は響ミソラといいます。今はこの電波体ハープによる力で今は電波変換してられます。失礼ながら貴方がたに私たちからの要望があります」

ミソラは言葉遣いをただしていった。

『なんだ？言ってみろ』

「今ここに私、人間とそして貴方がた、電波体が存在しています」

「今まで私たちは、あまりお互いの事をよく知ることなく生きていました・・・けど、今は違う。今は人間と電波体が手を取り合っていく時代ではないのか？と私はそう思います」

『だが、貴様の母星、地球では人が絶えず争いを繰り返し、同じ人を殺しているではないか？』

「はい。それはわかっています。あの人は相手の事をよく分かっていたなくて、起こってしまった事です。貴方がたにあの7年前の事件で、危険意識を持たせてしまっすいませんでした」

ミソラは深々と頭をさげる。3秒間深く礼をして正しい演技をしていた。

『だから私たちは地球に刺客を送ったのだ。お前ら地球人がどんな悪意があつてどんな行動をしているのかを・・・』

「そして、私たちの危険な行為をしていることに身の危険を感じさせてしまった」

『だから、私たちはお前ら地球人を殲滅させに来た。自らの命と、そして同じ電波体の仲間の命を守るために・・・。一つ質問させてもらう。その電波変換をさせている電波体よ、お前は地球人をみてどう思う？初めて見たとき、初めてその少女に出会った時どう思った？』

『私とミソラが初めて出会って思ったことは、人は一人では何にも

できなかった事です。そしてもう一つはたった一つの出来事で人は容易く変わってしまう事です。あの時、ミソラは一人で暗い出口のない世界を永遠とさまよっていた。それを見ていた私は彼女と契約し、悪魔を売らせてしまった。この時、私とミソラはまったく分かり合えてなかった。ただ一方的にやっていただけ。その時はお互いがお互いの事をよく知らなかったためあそこであくさんの被害者をださせてしまい、さらに彼女につらい思いをさせてしまった。』

「・・・ハープ・・・」

ミソラはハープの言葉をかみしめるように聞いていた。

「けど、歪みきった私達二人の前に、私達とはじめて和解でき、同じ境遇をもった一人の少年と一人の電波体が現れた。その少年のおかげで私たちも和解できて、その上、その少年とミソラは初めてブラザーバンドという目には見えないけどしっかりと結ばれた、人と人との絆が生まれたの。その時、私は分かり合うことで人は共存していける。私は人間ではなく電波体だけど、ミソラの事をよく知ればきっと彼らのように私とミソラの間にはブラザーバンドという目には見えないきつても切れない深い絆が生れる。こうなることで人と人は分かり合える。そして今、電波体と人間が今ここで分かり合えるんじゃないのかと私は思っています』

『そうか。人間側について、お前は自分に後悔をしていないのか？損を感じていないのか？』

『後悔や損は感じていません。むしろ、人間側について沢山学べました。人は何かに目標を持って生き続けようとする。私の最も信頼



出来るパートナー、ミソラだってそう、歌手になりたいという夢を持っていた。人はやりたいことを見つけた時、真っ直ぐに突き進むことを・・・』

ハープは自分の思っていた事を全てぶつけた。

「ハープ・私の事をそう思ってくれてたんだ・・・」

ミソラははー王の発した言葉に思わず涙がでそうになる。

『そうか・・・だがお前が人間の事をおすお思っているとしても私達からしては意識は違う。人間は私たちに害を与える存在だということ。君たちのような優しい人間がいたとしても、裏には泥にまみれた心汚い人間だっている。私たちを悪用するかもしれない奴だっているかもしれない。だから私たちは人間を滅ぼす。電波体が平和にすごしていけるように・・・』

その直後、電波体がミソラに向かってレーザーを放った。

「うわっ!？」

ミソラは間一髪回避する。ほとんど反射で回避したのだろう。無意識に回避したため行動が大袈裟だった。

『悪いが、私たちと人間は分かり合ってはいけない存在……。ここで死んでもらうぞ、若き少女よ・・・』

冥王星の電波体の最高資格者はそういう、ミソラに無数の棘を召喚してを降り注がせた。

黒い棘がミソラの腹をとらえる。

「うぐっ!!」

腹に完全な一撃をとらえたがその直後。

深く腹につきささった棘を何ともないように自分の体からすり抜けさせた。

「失礼ながら、私のエースPGM独自恩恵能力、空回身により私の周りの空間を捻じ曲げ、あらゆる攻撃を無効化にできます。だから争いを起こしたって無駄です。私の頼みを受け入れてもらえませんか？」

『そうって、騙すつもりなのだろう!!』

「騙すつもりはありません!!」

ミソラは正面から降り注ぐ棘やレーザーを空回身で空間を捻じ曲げながら回避する。

（やっぱりそう簡単に話を受け入れてくれないか・・・）

ミソラは冷静になりつつ、回避行動を繰り返していた。

『だったらその力はなんなんだ!?!』

「みんなが分かり合いたい、分かり合わせるために作った能力だ! !決して争いなんかには使いはしません! !」

『だったら何故争う? 人は電波変換という能力を使って今まで争いを起こしてきたではないか!?!』

「それはわからない……。けど人は! わからないからあがくんです! !」

ミソラはどんどん敵の母艦?らしきものへと接近する。

『人間の事なんて信用できるかああ! !』

一体の電波体が片手に剣を持ち、ミソラに斬りかかろうとする。

「やめてええ! !」

ミソラは剣をギターで防いだ。

その直後、ミソラは暁から受け取った、フリーズパッチを起動させて接近した電波体にフリーズ弾を当てた。

当てられた電波体はただ単に動けなくなったただけだ。

『何故だ！？何故殺さない！？』

「あなたたちを殺す気はさらさらない！！殺したって悲しみが増えるだけです！！」

『・・・・・・・・』

動きが制限された電波体はそのミソラの正直な思いに考え込んでいた。

『所詮、その場しのぎ的なことだろう！！！！』

さらに電波体5体が接近してきた。

二体が剣、一人が斧、二人が銃で一斉攻撃を仕掛けたがミソラの空回身であっさりと無効化にされてしまう。

その後も空回身を連発しながら回避しつつける。

無数に飛び散る、輝くレーザー。その幾多の光線を空間を捻じ曲げ易々と回避しているミソラにもこれはいくらでも連発できる技ではない。

どんなものにだって弱点はある。この世に弱点がなく、完璧なものはない。そう、ミソラにもその弱点が迫っていたのだ。

「はあ、はあ、はあ・・・」

ミソラは息が上がっていた。

この技はおそらく相当の体力を使うのだろう。しかも連発して、連続回避していたミソラには休む暇がなかった。

『息があがっているぞ。やはり、その大技は無限に連発できる技ではないらしいな』

『やれ!!!』

三体の電波体が爪で近接戦闘を行う。

だがミソラはそれを普通に回避した。だがその直後、後ろからもきていた。

「仕方ない！」

ミソラは力を振り絞って空回身を使った。

そして空間を使い、回避終了した直後に即、攻撃がきた。

「うわああああ!!!」

回避できなかったため、敵の攻撃をもろに喰らってしまった。

『やれ!!!とどめをさせ!!!』

斧を持った電波体が接近する。その直後――

接近した電波体がフリーズされて動けなくなっていた。

「おっと、ここまでだぜ」

「ここで大切な仲間をやらせはしないよ」

『貴様たちもこの小娘の仲間か!?!』

「ああ、そうだぜ。俺らはヒーローってとこかな」

また暁が自分でヒーローといった。

二人のヒーローがミソラの目に映った。その中で特にミソラの視界に釘を打たれたのがスバルの背中。

彼が生きていたのだ。彼女にとってはこの上嬉しいことはないだろう。

「スバル君、生きていたんだね!!」

「ま、今は地獄から這い上がってきた死神的存在のヒーローかな」  
スバルは少し冗談交じりでいう。

「フフツ。それでこそスバル君だよ!!」

「さ、早く立ち上がって。もう一歩だよ。後少しで僕たちは運命の一歩へと歩み始める・・・」

「う、うん・・・」

「さくして三人そろったか。これで確率は4割と・・・」

暁は変なことを言い始めた。

「確率って変な事言わないでくださいよ。僕たちのこのミッションに確率とか関係ない。いかに思いを伝えれるかだよ!!」

「ま、確かにそうだな」

『さつきから、何いつているんだ!!』

電波体が攻撃してくるが、フリーズパッチの能力で制限させただけだった。

そして三人が前へとでる。

人類の存亡の運命をかけた戦いがさらに激戦化しようとしていた。

三人の見つめる先には何が見えるのか。

その先にあるのは滅びか生存か。すべての運命はこの三人にゆだねられる。

世界・・・いや銀河中の新たな歴史の1ページが刻まれようとしていた。



## Trail | 53 運命を切り裂け（後書き）

あとがきトーク開始です^^

今回は真面目に執筆してみました。

後、何回か推敲をして修正とか繰り返してみたんですがどうでしたか？

文章的にどうだったでしょうか？

作者は文章力に非常にかけているので少々、矛盾をはらんでしまします。

ミソラが12歳であんな難しい言葉遣い？ができていいんでしょうか？

冷静になって考えております。

感想や、ここをこうしたらもっとよくなるのではないか？というアドバイスをくれたらうれしい限りです。

1st Episode 完結まで！！

後、2話！！



## Trail | 54 消えない心の炎

「まさか俺も人類の危機を守るなんてなあ」

暁は目の前に無数の電波体がいるというのに呑気な発言をする。

「まったく、こんな状況なのになんでこんな軽い発言できるんですか？」

「そっちのほうが肩に力が入らなくてすむだろ？」

「それはそうですが・・・」

「ま、リラックス、リラックス。緊張とかしてたり無駄に力が入ってたらできるもんにできなくなっちまう」

「確かに一理ありますね」

ミソラがその意見に納得していた。

「けど、真面目にやってくださいよ！！こんな状況で真剣にやらなかったら斬りますからね」

「おっとお前、俺のあの借りを忘れたか？」

「うっ・・・」

スバルは弱みを完全に握られていた。

「真面目にやるぞ!!これが俺たちに課せられたラストミッションだ!!」

「了解!!」

三人は展開して突撃した。

それに反応して、電波体達もスバル達の動きに対応する。

「やっぱりきたね!!」

ミソラは電波体達の大群に向く。

『この生意気な人間があ!!』

電波体達は銃で射撃したり、口からレーザーを放ったりする。

「バトルカード!!スーパーバリア!!」

ミソラはスーパーバリアを展開し攻撃を防ぐ。

三方向からの遠距離攻撃による間接攻撃。ミソラは両手を前にだしバリアを持たせていた。

(どうする?デリートはできない……どうする?私!?)

ミソラは迷った。どう対応するか、ということに。

「だったらこれしかない!!」

ミソラはスーパーバリアを即解除して、電波体の群れから距離を取る。

「これでいくしかないっ!! ショックノート!!」

ミソラが放ったショックノートの意図。それは周りにある隕石だった。

隕石を破壊させることで煙をたたせて、目くらましをする。

『目くらましか? 小癩な手を!!』

「殺したくないからこうやってるだけなの!! フリーズショット!!」

ミソラはアビリティ、フリーズパッチの力を使い、行動制限させる弾を発射させた。

ミソラの撃った弾は砂煙を引き裂き、見事電波体たちに命中させた。

『なんだこれは? 動けな・・・い』

電波体達は動けなくなってしまった。

一方、暁側では――

「やれやれ・・・俺一人相手にそこまで来ますか・・・」

暁を追いかけている電波体達は100体ぐらい。暁だからなのかは知らないが何故か追いかけてくる数が多かった。

「だが、やるしかないか・・・」

暁はこんな状況なのに楽観的な考えをしていた。余裕がある証拠かもしれない。もしくは緊張している自分をほぐしているのかもしれない。

『人間がいるせいでこの平和が失われた!! 貴様たちがいるからだ  
あああ!!』

「本当にそれだけだと思っているのか!?!」

暁は敵からの攻撃に回避運動をとりながら反撃のチャンスをうかがう。

『だったらなんだ!? 俺たちにお前らに平和を奪ったか!?!』

「それはわからない・・・。だが電波体・・・貴様たちのせいであの7年前の事件でたくさん仲間をお前らは俺たちから奪った。お前たちだって同じじゃないか!?!」

『・・・・・・・・』

「だから俺が・・いや俺たちが証明してやる！！分かり合うにはこ  
うも簡単だと！！フリーズショット！！」

フリーズ弾が綺麗な線を描き、そして電波体達に直撃した。

「だから少しその間、我慢してくれないか？」

そういい残し暁は奥へ向かった。

最後、スバル視点――

「みんなを守る・・。そして電波体達と分かり合う・・。それを  
達成させるんだ！！」

「はたしてそうまくいくかな？」

「この声は一体？」

スバルはこの声を聞いたことがあった。だが思い出せない。自分の  
この少しの間に沢山の事や出会いがあったため、記憶を掘り出せな  
かったのだ。

「だったら俺が姿をさらそう。かつて貴様を戦ったこの俺が・・。」

一本の閃光とともに見覚えのあるシルエットが浮かぶ。

見るからに戦闘特化された黒い体つき。膝や肘についている棘。そして真っ黒な髪の毛。そして腰には切れ味のよさそうな剣を二つ所持していた。

「久しぶりだな我が好敵手・・・ロックマン・・・」

「お、お前は!!」

『お、お前は!!』

スバルとウォーロックは声を合わせた。

「『どちら様でしょうか?・・・』」

この場で予想外の発言。

「なっ・・・」

相手も予想外の発言により少し驚いていた。

「俺の事を忘れたのか!？」

「『そ、そうか・・・だったら力づくで思い出させてやる!!』」

相手は刀を抜刀させて接近した。

「なっ!?!早い!」

スバルは反応が遅れた。だが――



「スターソード!! Σブレード、δブレード!!」

二対の輝く双剣、ロックマン専用バトルカード、スターソードを使いそして敵からの攻撃を防ごうとした。

ガギン!!!!!!

そして二対の双剣と二対の双剣がぶつかりあたりに火花を散らす。

「あまい!!」

相手は、防がれたのをうまく使いスバルの持っていた二対の剣に向かって思い切り横から斬りかかった。

「でああああ!!!!」

束になった剣がスバルの剣へとぶつかる。

「うぐうう!!」

スバルはいち早く反応したが、相手の動きに対応しきれなかった。

スターソードを手離さないようにしっかりと握っていたため軽く吹っ飛ばされて隕石に衝突する。

「ぐああああ!!!! うっ……強い……」

「まだ思い出さないか……。だったら……これでどうだ!!」

相手は剣を投げた。その先はもちろんスバル。

「こんな安い攻撃!!」

スバルはスターソードで投げられた剣を叩き落とす。

「だからお前はあまい!!」

「なっ!?! いつのまに懐に!?!」

スバルは相手が投げられた剣に意識が行ってしまい、相手を見ていなかったのだ。そのため自分の懐への警戒があいまいになってしまった。

「くたばれ!!」

相手は刀をうまく使い全体重を剣に乗せるように斬った。

「うぐうう!!!!」

スバルは苦しまぎれの声をあげる。

「……この相手の先手をつくバトルスタイル。そして繊細で大胆な攻撃。さらに隙がない追い打ち攻撃。まさかお前・ディストか!?!」

スバルは自分の過去の記憶を必死に掘り起し、お目当ての記憶をやっと掘り当てた。

「やっと。思い出しやがったか……。けど今更俺の事を思い出そう

が、時既に遅し。お前は俺に勝てない絶対条件がある」

「なっ！？そんな変な戯け事を言うな！！」

「変なことは言っていない。俺はお前の今の戦い方を見て確信した。お前の思いに迷いが見える。それが動きとなってお前の動きを鈍らせる。貴様は俺たち電波体と分かり合うために来たらしいな。だが貴様の気持ちが高んなんじゃ決して無理だろうな。お前の気持ちはそんななのか？お前の目的はそんなあまい決断だったのか？」

ディストの言葉に比喩的表現を感じるスバル。自分の思いはこんなにもあまいのか。自分ではきずかなくともこんなにも表にでている自分が悔しくなった。殺したくなってきたスバルであった。

「僕の思いはそんなんじゃない！！僕は・僕はそんな曖昧な気持ちなんかじゃない！！」

スバルがスターソードを構え接近する。

「だったらその思い、俺に・いや俺たちに示してみせろおお！！」

ディストは二対の双剣を構え接近する。

そして、二人の距離が近づき、剣が当たる距離になる。

「でああああ！！！！」

スバルがδブレードで突きをする。

デイストはそれをサツとかわす。

「だったらこれでどうだ!!」

スバルは突きをした後、体を回して横払いをした。

デイストはその追い打ちも剣で防いで身を守る。

「まだまだあ!! 手数で勝負だ!!」

スバルは剣を短く持って、手数で勝負した。

剣が少し短いスバルの反面、デイストの剣は少しリーチの長い剣であり、重さもすこしありそうであった。

スバルは横払い、縦切りをした。

ヒュンヒュンと勢いよく振り下ろされる剣が綺麗な弧を描き、デイストへと襲い掛かる。

右横払い、左横払い、上縦切り、全てディストに防がれてしまった。

「くそ!!」

スバルは距離をとる。

「今度はこちらの番だ!!」

ディストは接近する。

「でああああ!!」

大きく振りかぶり剣を振り下ろす。

両手に剣を所持しているのに片手に剣しか振り下ろさなかった。その一瞬を見抜いたスバルは次の行動を予測した。

（きっと、奴はこうではずだ!!）

そして片手の剣が振り下ろさせる。

スバルは片手で防ぐ。そしたらスバルの予想通り、目の前に姿が消えていた。

後ろに回り込んでいたディストは、無防備なスバルの背中を斬りか

かろうとした瞬間・・・。

ディストの振り下ろした剣は無残にも空を斬っただけであった。

「なっ！？一体どこに！？」

「僕はここだ！！」

一筋の流星が接近する。

「スターソード！！ 3rd ギャラクシー！！ スターツインソード！！」

スバルは接近しながら二対の双剣、スターソードの柄と柄の部分を合わせてツインセイバーを作った。

スバルの持っているスターツインソードが白い光を放ちながらディストへと接近する。

「これでどうだああ！！！！」

思い切り斬りかかる。

「くそっ！！」

ディストは回避しようとしたが完全に回避できなく少しかすめてしまった。

「くっ・・・このままじゃ・・・」

「埒があかないな・・・」

二人はそう思いながら次の行動を考える。

「だったら!!」

「さすれば!!」

「「これしかない!!」」

「「ピピッ!!ノイズオーバードライブシステム作動・・・。Lv5起動」」

そして二人の体が青く輝く。

「でああああ!!!!」

「はああああ!!!!」

無数のノイズドライブから放出されるノイズ粒子があたりを染めていった。

ガギン！ガギン！と剣と剣がぶつかる音が鳴り響く。

そしてつばぜり合いになったまま移動していく。

「そこだあ！！！！」

デイストはスバルの柄と柄が合わさっている剣をたたき切った。

合体しているΣブレードが吹っ飛ばされる。

それでもスバルは動揺を見せなかった。

それはあきらめてないからだ。

「もらったああ！！！！」

デイストは両手で斬りかかる。それもスバルはしっかり見ていた。今度は大きな一撃で来ると予測した。

スバルは振り下ろされる剣をわざと喰らった。



「・・・肉を切らせて！骨を断つ！！」

スバルはその剣をわざと喰らった後、即反撃に出た。

「スターソード！！ 流星！銀河！十文字切り！！」

剣がひとつしかないが、うまく使って一つしかない剣をカバーした。

「ぐあああああ！！！！」

完全な一撃を食らわした。

そしてノイズオーバードライブが強制解除される。

「はあ、はあ・・・どうした？とどめをささないのか？」

デイストは完全な一撃を喰らってしまったためすぐには動けなかった。

「殺したくはない・・・いくら敵だからってそこまでほしくない」

「だったら一つ聞かせてくれ。お前は、お前は一体、何のために戦うんだ？」

「仲間の為、そして未来を切り開くために戦うんだ。明日も明後日もいつも通りの日々を過ごしたいから」

「そうか……。お前ならきつと、俺たちと分かり合う事ができるんじゃないか？お前の気持ち……伝わってきたぞ……」

「ディスト……」

「さあ、いきな。お前と仲間でお前らの思いを伝えてやれ……」

「うん!!」

そういい、スバルは奥へと進んでいった。

そして三人が終結する。

正真正銘の最後。時間もそんなに残ってはいない。失敗は許されない。けど、それでも三人は失敗を望んではいないだろう。

分かり合うために―――！。

## Trail | 54 消えない心の炎（後書き）

@書きトークです^^

どうでしたか？

最終的にスバルとデイストは結構分かり合えていました（笑）

さて、他の電波体達と分かり合えるんでしょうかねw

次回はついに最終話！！

今、思うと連載開始したのは1月15日でした。

こっから役11万文字も打ったのかと思うとすごいな〜って思います。ハイw。

とりあえず、最終話はあ〜んなかんじや、こ〜んなかんじになるかもしれません。

そして僕の活動報告に2nd seasonのストーリーをどちらにしようか迷っています。

よかったら覗いて行ってください^^

しつこいですが次回最終話！！

感想待ってます^^

ついに三人が終結した。

「話を聞いてくれませんか!？」

スバルは奥にいる大きな風格をした電波体に通信で話しかける、

『先ほどの話はその小娘から聞いた。お前らもその小娘と同じ  
目的できたのだろうか?』

「はい、そうです。私たちは貴方がた電波体と分かり合う必要がある  
ためにここにいらしました」

一応、大人である暁は言葉遣いを正して言った。

『そうか?だが貴様たちは私達と分かり合った所で何の得になる?  
ただ電波体と人間の違いがでてその間に大きな歪みがでるだけだろ  
う?』

「それはそうですが、けどこのまま分かり合えなかったらまた7年  
前の宇宙ステーションのように悲しい悲劇がでて、また悲しむ人が  
出てしまいます。そう、ここにいる少年、星河スバルも貴方がたの  
宇宙ステーションの電波体襲撃にあった父親の息子です」

そしてスバルが一步前が出る。

「僕は、あの7年前の事件で全ての事がいやになってしまった。そして、他人とかかわることが嫌になり心を閉ざしてしまいました。そして展望台による僕の相棒、ウォーロックとの出会いにより7年前のすべての真実を知った。その時、僕は抑えていたけど、許せなかった。僕の大切な人、大切な家族、父さんを君たち電波体が僕たちから奪っていったことを。僕は復讐したいと思った。君たちを・・・」

『そうか……。我々は関与していなかったが、同じ電波体として一応私達にも責任があるな』

『だがな!!』

突然、相手は声を大きくした。

そして、声を大きくしたことをよりスバル達は構える。

『貴様らはいてはいけない存在だ。貴様達のせいで同士達は!!!!』

そしてステルヴィアから極太のビームがスバル達に降り注ぐ。

「くっ!・・・」

三人は散開して避けきったと思った直後。

突然、ビームが3つに分裂し、さらに三人に向かって、一つずつビームが屈折して追いかけてくる。

「ビームが屈折するのか？」

三人は驚きながらも避け続けた。

「くそっ！！避けきれない！！」

スバルは屈折するビームを避けていたが、最終的には避けきれず右足がビームに巻き込まれてしまった。

「うぐっ・・・なんて威力なんだ・・・」

「スバル君！？大丈夫？」

ミソラがスバルを心配してスバルに近付いてきた。

ミソラの後ろから極太のビームが接近してくる。

「ミソラちゃん危ない！！」

「しまった！！スバル君に気をとられすぎた！」

そしてその間にビームがさらに接近する。



だがその二人とビームの間に一筋の影が現れる。

その姿は暁だった。

「オメガレーザー！！！！」

暁から極太のレーザーが放たれた。

そして二つの光線がぶつかり合い消滅する。

「まとまるな！！危険性が高まるだけだ！！」

「い、ごめんなさい！！」

ミソラは謝りながら、そしてスバルを心配しながら散開した。

『ほう、どうにか対処したか。だったらこれでどうだ！！』

三人の前に黒い影が出現した。

「これは・・・もしかしてドッペルゲンガーか！？」

暁がそう言った。

「ドッペルゲンガーって！？」

その間にドッペルゲンガーの影が三人にますます似てくる。

「簡単にいえば自分に似た影の事だ」

「ということは!？」

「俺達がもう一人現れることだ」

『だがただのドッペルゲンガーじゃない。限りなく本物近い、生命体という所だ』

そしてドッペルゲンガーのロックマンがスバルにロングソードで斬りかかった。

「くっ!? ロングソード!? さらにノイズドライブの粒子まで!？」

スバルは驚きながらかわした。

『だから言った! 本物に近い生命体だと!!』

「ハア、ハア、ハア・・・クツ・・・」

スバルは一回回避行動をしただけで息が上がっていた。

(これだけで息は上がらないはず・・・。なんだか体がついていかない・・・)

(病の進行速度が速い!? WAXAの演算予測では電波変換状態で

病の初期症状はかなり先のはず！？先程の闘いで消耗したのが原因か！？）

暁がそう言った。

「・・・スターソード！ 3rd ギャラクシー！スターツインソード！！」

スバルはスターソードの柄を合わせてツインセイバーを作った。

その行動に合わせて相手もスターソードを召喚し、スバルと同じスターツインソードを作った。

「同じ行動を！？」

スバルは驚きを隠せなかった。

暁側では――

「俺とまったく同じだな・・・」

暁は常に楽観的だ。同じ自分になら興味を持っていた。

「っておっと！！」

暁に似たドッペルゲンガーはロックオンソードで突然きりかかった。

「いや、ロックオンソードまで使えるのか」

『余裕モードですね、シドウ』

「いや、今日の俺は!!」

ロックオンソードでドッペルゲンガーのアシッド・エースにステツ  
プ移動しながらきりかかった。

「本気モードだ!!」

そしてまたロックオンソードで足を斬った。

そしてミソラ視点――

「これは私のコピー体・・・」

『まずは小手調べよ!! ミソラ!』

「うん! ショックノット!!」

ミソラの小手先の技が発動する。

相手はギターで防いだ。

そして相手はギターの弦を飛ばしてきた。

恐らくマシンガンストリングをしてくるだろう。

「これはマシンガンストリング！？だったら！」

ミソラはコピーの自分と対峙しているため、技の特徴がよく分かっていた。

ミソラは前に向かって斜めにジャンプし、弦をかわした。

そして相手には、マシンガンストリングの発射後には隙ができる。

「今だパルスソング！！」

そしてミソラは移動速度を利用して、パルスソングを放った。

スピードがついたパルスソングで攻撃したため少しは威力が乗っているだろう。

だが相手はバックステップでかわした。

「追い撃ち攻撃！！マシンガンストリング！！」

ミソラは追い撃ちをしてマシンガンストリングを放った。

弦は相手を捕らえて確実に相手を削っていく。

「やった!!」

『始まったばかりだから油断しないでミソラ!!』

「うん!」

そして再びスバル視点。

お互いスターツインソード。

そしてノイズドライブのジェネレーターを移動推力に回している。

現在は膠着状態に入っていた。

「.....」

スバルは黙ったままだった。

片手で白く輝くスターツインソードを構えて待機している。

「何故動かない!?それとも試しているのか?」

「だったら!!」

スバルはロックバスターを使った。

放った弾は三発。

桃色の弾は相手に近付くがスターツインソードで消されてしまう。

そのスターツインソードでかき消している間にスバルは敵の懐へと潜り込む。

そしてスターツインソードを敵に向かって振る。

だが相手はそれを防ぐ。

「まだまだあー!!」

スバルはスターツインソードを上手く使って、体を回転させながらきりかかる。

綺麗に舞ながら、次々と相手に襲う剣。

ステップと反転を使いながら、上、右、下、左からと相手を休ませない攻撃が続く。

そしてようやく相手に一撃を与えた。

「ハア・・・ハア・・・どうだ!!」

相手は斬られても何をされても喋らなかった。斬ってもただ普通に立ち上がるだけ。これじゃ本当にダメージを与えているのかが心配になってきた。

そして相手は攻撃するために接近してきた。

スターツインソードではなく相手は普通の二対の双剣にした。

「来るか・・・」

スバルは構える。

相手がΣブレードを振り上げ切り掛かる。

スバルはそれを剣で防ぐ。

さらに相手はδブレードで突きをする。

「チッ!!」

スバルは舌打ちしながらどうにか回避してバックステップで距離をとる。

だが相手の追撃が早い。距離をとるのを読んでいたのか、その距離をとる移動先にアイスグレネードを投げた。

「まさか!?!」

スバルはどうにかシールドで防ぐ。



その直後、相手は後ろに回り込んだ。

シールドには一瞬の硬直がある。そして後ろは全くの無防備。  
相手はフラッシュスピア3を使ってきた。後ろからの容赦ない攻撃。  
さらに氷パネルの上にいるため効果抜群だった。

「うぐっ・・・」

スバルは膝に手をやる。

（こいつ、やるな。体力にも限界が近いかも知れないがそれでもやるしかないか）

「ノイズチェンジ！ウルフノイズ！」

ウルフノイズは近接特化型のノイズチェンジ。

ソード系カードの威力増加や体のスピードが速くなったりする。

一気に勝負をつけてしまおうという作戦なのだろう。

「でああああ！！！！！」

スバルはもうなりふり構わず、突っ込んだ。

そしてスターツインソードを解除し、δブレードを相手に向かって投げる。

相手はそれを叩き落とす。

その間にスバルは懷に潜り込んだ。

「スターソード！流星！銀河！十文字斬り！！」

スバルは思い切り斬った。

一撃でしとめるぐらいの力を出して。

「まだまだあ！！ノイズチェンジ！リブラノイズ！！」

スバルはノイズチェンジをした。

「ノイズフォースビックバン！メテオライトバレッジ！」

スバルはメテオライトバレッジを放ち、相手の回りに複数の爆発が起きた。

もう情けをかけている暇などないのだろう。

そして爆風の煙が散った後には相手は二度と立ち上がることは無かった。

そして再び睨視点――

「ロックオンソード！！」

暁の動きに合わせて、相手もロックオンソードを使った。

「俺の動きに合わせて来るか……。だったら俺の動きにない動きをすればいいだけだ！」

基本、暁はロックオンソードやブラスター、オメガレーザーの独自の技。

それ以外の動きをすれば相手も対処しずらいはずだ。

「ダンシングブレード3!!」

召喚したブレードが綺麗な弧を描きながら襲いかかる。

だが相手はそれを避ける。

「もう一撃!!」

ダンシングブレードがブーメランのように後ろから戻ってきた。

それをもかわした。

「それも回避するか……。だったらアシッド! サーバーからウェポンチェンジデータをダウンロードしてくれ!!」

暁が喋ったウェポンチェンジデータ。

暁がもしもの時に備えて、自分の新たなバトルスタイルを作るためにデータを作成しておいたのだ。

彼が作成したデータは3つ。

長距離射撃を得意とするライフルモード。

近接戦闘を得意とするセイバーモード。

そして防御戦闘を得意としたディフェンスモード。

それぞれをダウンロードし、装備することで特有の武器が装備される。

『了解……。ウェポンチェンジデータ、ライフルモードをダウンロードします』

アシッドがサーバーからチェンジデータをダウンロードした。

その直後、暁は白い光に包まれてライフルモードにチェンジした。

そして、暁が現れた。

足には、2丁のハンドガンをいれる納刀ケース。その中にハンドガンが納められていた。

背中にはスナイパーライフルがついて、腰には用途がわからない小型の物。

暁のバイザーの下にはスナイパーライフルで射撃するために照準がついていた。

そして狙いを定めている間に狙われても体を防げるように両肩に取り付けられたシールドが所持された。

シールドは肩に一つずつつけられ全身を守るようになっていた。

「よし、行くぞ!!」

暁はスナイパーライフルを構え、狙いを定めて射撃する。

発射した弾が相手に向かう。

だが相手には当たらず、逸れてしまった。

「チッ・無重力だから照準がズレてしまう!!アシッド!無重力用に修正頼む!!」

『了解!!』

「今度こそ!!」

暁はスナイパーライフルで狙いを定めて撃った。

今度は当たった。

「よし!!」

相手は怯んでしまった。

ドッペルゲンガーのアシッド・エースがロックオンソードを所持してブラスターを撃ちながら接近してきた。

ライフルモードの暁には近接戦闘は不向きだ。

「接近してきたか。だったらライフルビット!!」

腰から放たれたの6つのビットが相手に向かっていく。

そしてビットが相手を囲んだ。

そして6つのビットからビームが放たれる。

だがビットのビームに当たっても構わず、無理矢理暁に接近してきた。

「無理矢理来るか!! だったら!!」

暁はスナイパーライフルをしまい、足からハンドガンを2丁を取り出した。

そしてハンドガンを連射する。

だがジグザグ移動しながらこちらに接近してくる相手に狙い撃つが当たらない。

「くそっ!! だったら1secオーバードライブでいくしかないのか!?!」

『ですがシドウ、相手は私のコピー体。1secオーバードライブは見破られてしまうんじゃないか?』

「それがない動きをすればいいんだよ!!」

その間にますます接近する。

そして相手がロックオンソードを振り上げた。

「行くぞ!!」

ロックオンソードが音をたてながら暁を捕らえる。

その直後、暁は1secオーバードライブを使い、相手の後ろに回り込んだ。

そして銃を相手の背中に押し付けた瞬間、相手は振り向き様に斬ろうとした。

「やっぱりそう来たか!!」

暁は右横からくるロックオンソードを左に回避して再び回り込んだ。

「これでどうだ!!」

片手の銃を背中に突き付け、銃のトリガーを引いた。

そして背中に膝蹴り。その後、ツインハンドガン、6つのライフルビットを撃ちまくり、そしてとどめのスナイパーライフルを構え照準を定め、頭に撃った。

（最後、えげつないですねシドウ・・・）

アシッドは最後の一撃に啞然していた。

「よっしゃ!! 障害を排除した」

そして最後、ミソラ視点――

「バトルカード! バリア!」

ミソラの回りにバリアが展開された。

「よし、ストリングメテオ!!」



ミソラの大技、ストリングメテオ。

上に弦を放ち、そして周囲に分裂した弦が降り注ぐ。

そして相手に降り注ぐ。

だが相手はそれをかわし続ける。

「バトルカード！！スタンナックル！！」

回避に集中していた相手はミソラの行動に目が行って無かった。

そして麻痺し、ストリングメテオの洗礼をうけた。

「まだまだあ！！ソードファイターX！！」

縦斬り、横斬り、斜め斬りを使った。

全部喰らった相手はもはや立ち上がることは無く消滅した。

そして全ての幻影が消滅した。

『全ての幻影を倒したか。やるな、だがここで貴様らは終わりだ！  
！』

スバル達の回りが明るくなる。

「一体、なんだ!？」

「上だ!！」

いち早く気付いた暁が上に何かがでていると呼ぶ。

『消えろ!！』

そして白いレーザーが降り注いだ。

喰らうと思い、スバルとミソラは目をつぶった。

だがスバルとミソラにはレーザーを喰らっていなかったのだ。

その視線の先には、暁がディフェンスモードで盾と全身を使いながら防いでいた。

「ぐぐっ!！・・・」

「暁さん!！」

「俺の思いをお前らに託すぜ・・・。だから頼む。俺達の思いを奴らに伝えてくれ!！!！」

「暁さー!ーん!！!！」

そして爆発し、煙の先には力無く倒れている暁の姿があった。

「そんな・・・」

『仲間を庇うとか・・・愚かな・・・』

「愚かじゃない！！暁さんは僕達に託したんだ！！」

「何故なの！？どうして貴方は仲間の事を思わないの！？」

『少しは思っているさ、だが戦争をすれば、誰かが命を落とす。争いをすれば人や電波体は死ぬ。それは当然の事だ。そこにいる男もそうだ。電波体と人間の戦いで力尽きてしまった』

「だから争いを無くして、分かり合おうでしょ！？」

スバルが必死に訴えた。

「皆の命が戦争によって消えていく・・・」

「ミソラちゃん！？」

「そんなことはさせるか！！渡し、そして受け取るんだ彼らの思いを！！」

「ノイズドライブシステム、高濃度ノイズ粒子による意識共有空間システム発動！！」

これは自分の思い、相手の思いを皆に伝えるシステムだ。

だがこれは大技であり命の危険性がある。

その覚悟の上でミソラは発動した。

当たり一面に粒子が展開する。

そして皆の思いが共有しはじめた。

「うぐっ・・・」

ミソラは意識共有空間システムの反動が来はじめた。

「ミソラちゃん！大丈夫！？」

スバルが接近する。

「大・・・丈夫だよ・・・」

その直後、スバルは手を繋いだ。

「一人でやるんじゃないく、二人でやるんだ！！皆の思いをあいつらに！！」

「うん!!」

『な、なんだこれは!? 頭に声が響いて!?』

電波体達の頭の中には人々の思いが流れてくる。

戦争を止めたい気持ち、分かり合いたい気持ち、共存したい気持ち。それぞれの思いが積み重なり、そして一つの大きな物が出来上がった。

「ハア、ハア、ハア・・・」

スバルとミソラは息が上がっていた。

「よく・・・やったな二人・・・とも・・・」

暁がよろめきながら立ち上がる。

「大丈夫ですか!？」

「なんとか・・・」

『そこの三人』

ミソラ達は振り向く。

「なんですか？」

スバル達は一応構える。

『済まなかった・・・。そして貴様達の思い、こんなにも大きかったとは思わなかった。人間は一つになることでこんな大きい物が出来上がるんだ・・・』

「はい。けどまだ人類は完全になりきれいてませんが、じっくり時間をかけていけば、人類は一つになれると思います」

『ああ、これからは手を取り合っていこう。人類と電波体が共存していける世界を』

「はい!!」

こうして、ようやく人と電波体が分かり合えた。

これで大きな一歩を踏み出した。

共存した世界の先には何があるのか――。

だがまだこれで完全に終わった訳ではなかった。

『シドウ!?!』

「どうしたアシッド!?」

『あの特殊電磁波を放つ大型母艦が何故か地球に吸い寄せられています! どうやら、地球からあの母艦を引き寄せる特殊重量波を出しているみたいです!』

「だったら破壊するしかないだろ!!」

三人は行こうとしたが、暁、ミソラはかなり消耗しており動けなかった。

「暁さん! ミソラちゃん!」

「少しくラッただけだよ、大丈夫。さ、行こう!!」

暁は無言で立ち上がり、向かった。

移動そして母艦の横に来たスバル達。

「ストリングメテオ!!」

「オメガレーザー!!」

「メテオライトバレッジ!!」

だが全くの手応えがない。

それでも撃ちつづける。

(仕方ない!! 今の僕には危険だけど!!)

スバルはノイズオーバードライブを発動させた。

「スバル！今のお前の状態じゃ危険だ！やめろ！！」

「スバル君！やめてえええ！！」

ミソラは叫んだがスバルはその答えを受け入れなかった。

「スターソード！ 流星！銀河！十文字斬り！！」

ノイズオーバードライブシステムを使用し、流星銀河十文字斬りを使っても反応はない。

「だったらスターソード！ 2ndギャラクシー！スターライザーソード！！」

超極長で超極太の剣が母艦へと襲い掛かるが完全に斬れなかった。

「ぐっ・・・体が・・・けど諦めない！スター・・・ツインソード・・・！！」

スバルは苦しみに耐えながらも剣の柄と柄を合わせてスターツインソードを作った。

「もうこれしかない！メテオライトバレッジ！！」

スバルはある一カ所を集中攻撃した。

「でああああ！！！！」



メテオライトバレッジが終わった後、接近して集中攻撃した部分にスターツインソードを投げる。

集中攻撃していた部分が脆くなっていたため破壊できた。その直後、スバルは破壊して穴があいた部分に飛び込んだ。

どうやらこれは無人艦なのだろう。

何かがいる気配は無かった。

「まさかスバル、内部から破壊するつもりか!？」

「やめて!スバル君!!」

二人の必死の声も受け入れてくれなかったスバル。

内部では――

『本当にやるのかスバル!?!』

「これしかないんだよ!!」

『分かった。だったら地獄まで付き合うぜスバル!!』

「ありがとウォーロック!!」

二人はある区画へと向かった。

それは艦を動かしている動力部。これを破壊すれば全てが終わるだろう。だが艦内にいるスバルは死ぬことになるかも知れない。

「キャノン×3!! ギャラクシアドバンス! インパクトキャノン!!」

スバルは一瞬迷った。

地球にはスバルの帰りを待っている人。そして大切な人が待っていることを。

けどスバルの視線の先には絶望など無かった。先にあるのは生きるという希望だけだった。

「いけえええ!!!」

インパクトキャノンが動力部に命中し、爆発する。

そして艦全てが爆発する。

「スバル——!!!」

外で見ていたミソラは涙を流しながら呼び捨てにして叫んだ。

「あいつ、相当な覚悟がなきゃ出来ないぜ・・・」

そして爆風によって、一筋の影がミソラ達の反対側から現れる。

「スバル君！よかった生きていた」

ドガアーン！！

突如、ミソラの言葉を掻き消し、スバルの近くに爆発が起きる。

どうやらスバルの近くに不発だった動力部があったのだろう。

それが不運にもスバルの側で爆発してしまった。

その煙の先には――

――何も無かった。

残っていたのは、母艦の残留破片だけ。

「そんな、そんな、スバル——！！！！！」

ミソラは大声で叫ぶ。

「スバル君・・・」

「いつまでも泣くな！！」

暁は叱咤する。

「どうして！？スバル君がいなくなったのよ！どうして泣いちゃだめなの！？」

「お前、どうしてあの時、スバルがノイズオーバードライブシステムを使ってまで、そして母艦に乗り込み自分の危険性が伴うのに内部破壊をしたかわかるか？」

「・・・・・・」

ミソラは黙り込んだままだった。

「俺達に生きてほしいから覚悟を決めてやったんだ。大丈夫、スバルはきっと生きている。今までそうだったろう？彼は地獄に行ってもいずれはい上がってくる。そういう男だ」

ミソラはその言葉を聞き涙を拭う。

「うん・・・分かったよ。私、スバル君がもしいなくなったとしても精一杯生き続ける！彼の思いも持って！！」

「そうだ！！さあ地球へ行くぞ！！スバルは生きていると願い続けらればきっと生きて帰ってくる」

「はい！！」

こうして人類と電波体の対話が成功した。

これで新たな一步を踏み出した人類と電波体に何が待っているのだろうか。

そして皆はスバルが生きている事を願いつづける。

青いヒーローはきっと生きていると―――。

そして地球を守ってくれると。

流星のロックマン — dialogue of the Trai  
blazer — 完結

## Trail | 55 Shooting star (後書き)

@書きトークです^^

やっと完結いたしました^^

最終話読みたい人もいるだろうと思い、今回はかなり相当長くして  
(徹夜でPCしてた) おきました。

どうでしたか？

この後は対話後の番外編。

そしてストーリー上での番外編を書いていきます^^

とりあえず、自分にご苦勞様でした!!

皆さんの声援があつたからこそ完成できました!!

ではまたあいましょう!!

さようなら~~~~

感想待ってます^^

**T r a i l | 5 6 笑顔の1ページ(前書き)**

番外編です^^b

「スバル君・・・貴方が消えてから数か月がたちました。今となつてはなんです貴方に手紙というものを送ります」

「貴方の支援のおかげで人間と電波体は分かり合えました。今、わずかですが少しずつ和解できている世界へと進んでいます。それは貴方の犠牲で、そして戦いで真の怖さをたくさんの人々に知らせてしまったから、世界で少しずつだけど、平和への一步を歩み出しています」

「貴方がいなくても貴方の分まで、精一杯生きる。あの日そう決断した。けど、私時々思うんだ。やっぱり私は貴方に会わなければ良かった。私とあなたが会わなければ色々変わるけど、貴方はこんな目に合うことがなかった」

「だから早く戻ってきて・・・こんな言ってることが矛盾をはらんでいる私だけど、貴方がいないと私は一人でさみしいです。あのくらい心を完全に閉ざしてしまった私に光を指してくれたのはスバル君、貴方です」

「――だから戻ってきて・・・。一日でも早く・・・」



そして手紙を読み終わった。

場所はコダマタウン、展望台。

今日も夜の空にひとつの満月が輝き、わずかではあるが辺りをうつすらと薄明るく照らしている。

「はぁ・・・今日も来ないか・・・」

『さすがに二か月近くたつと心配になってくるでしょ?』

「まあね。そろそろ夏休みだし・・・。長期休暇の間には新歓ライブもあるしね・・・」

『もう・・・貴方がそんなじゃスバル君が悲しむでしょ!!』

ハープがスバルがいないせいで半ばマイナスモードに入っているミソラに喝を入れてやった。

「そりゃそうだけどさ、どうもスバル君は死んじゃった・・・っていう感じがしないんだよね・・・」

『どうということ?』

ハープはその言葉の意味に疑問を持った。

「やっぱり深い絆で結ばれているからかな? スバル君から生きてい

るよ……っていう信号？意思疎通？的なのが伝わってくるんだよね。僕は生きているから、その時までまっけていてくれて……」

『ふうん……。あなたとスバル君の絆は斬っても斬れないもんね』

「ま、結ばれた関係ってやつですな」

そういつてミソラは片手に持っていたペットボトルのジュースの蓋を開き、そしてジュースを飲んだ。

「早く戻って来ー！ー！ーい！！！スバル！！！！！！」

ミソラは展望台の手すりにつかまり、そして叫んだ。

『てかミソラいつからスバル君を呼び捨てに？』

「えへへ、べつにいいじゃない。呼び捨てにしたって。こっちのほうはなんか新鮮でいいなあって思ってる」

『そっちのほうで貴方たちにとっていいかもね。そうだ！！この機会に二人とも呼び捨てにして呼んだらどう？』

ハープが二人達にさらなる愉快な？きっかけを期待して呼び捨てにしようという発案をだした。

「お、お互い呼び捨て！？うっ・・・スバル君が私の事を呼び捨てに・・・」

ミソラの愉快的妄想モードが始まる。

ボンー！

ミソラの頭から煙が出始めた。

「い、いろんな意味で・・・刺激的・・・」

『ありゃ・・・そうなるよね。呼び捨てにしてなかったもんね。スバル君がミソラの事を呼び捨て・・・。これはこれでいいかもね・・・』

ハープはいいネタができあがりそうだと悪戯を含んだ笑みをしていた。

その直後、空に一筋の赤い流星が見える。

「あ、赤い流れ星だ」

『ホントだ』

「ねえ、まさかあれスバル君じゃないよね？」

ミソラは質問する。

『まさか!!だって彼は青い流星、ロックマンでしょ!?!だったらあの赤い流星は何!?!』

「さあ?けど、あの流れ星なんだかこちらに向かってきてない?」

『・・・確かに来てるね・・・』

その直後、赤い流星から青い流星に変わった。

そして空からミソラたちへとグングン接近する。

『ミソラ電波変換よ!!』

「うん!!」

そしてハープ・ノートへと電波変換したミソラ。

展望台付近の草野原に謎の流星が墜落する。

そして煙が舞い上がる。

『ミソラ!!もしかしたらウイルスかもしれない!先制攻撃よ!』

「うん!マシンガンストリング!!」

ミソラはギターから弦を放った。

そして煙の中にいる謎の敵？に命中する。

「さあ逃げられないわよ！ウイルスだが電波体だがわからないけどおとなしくしなさい！！」

ミソラは警告する。

「いてててて！！！！」

煙の中から、聞き覚えのある声が聞こえる。

「痛い！痛い！何！？なんなのこの見えないところからのこの拘束攻撃！？」

『とことんついてないな・・・お前・・・』

「この声・・・まさかスバル！？」

「え？誰？誰がいるの？」

スバルは煙の中にいるため先が見えなかった。

「やっぱりスバルだ！！」

ミソラは嬉しくなり跳ね上がる。

「スバル～～～！！てかこの煙邪魔！！パルスソング！！」

ミソラはスバルに近づきながらパルスソングで煙を吹っ飛ばす。

「痛い!! さっきから何!?!」

不運にもスバルはパルスソングに命中してしまった。

「あ、ごめんスバル!! あたしだよ! ミソラだよ!!」

「ミソラちゃん!?!」

スバルはようやく視界が悪い中からの攻撃してきた相手をようやくとらえられた。

そして電波変換を解除するスバル。

「ただいま! ミソラちゃん!!」

「お帰りスバル!!」

ミソラは嬉しくなり電波変換を解除してスバルに勢いよく抱きつく。

「てかなんて呼び捨て!?!」

「いいじゃん別に。この機会だからさ、スバルも私の事を呼び捨てにして呼んでよ」

「ええ!?!? な、な、なんで!?!? てか離れて!!」

「いゝゝゝやゝゝゝだゝゝゝ」

ミソラはスバルの顔をすりすりしながら言う。

スバルはミソラからの予想外の一言に戸惑っていた。

「だってあたしとスバルは恋人同士でしょ？ だったらそれぐらいの呼び方はしなきゃね！」

「こ、こ、恋人！！？ 这么说ばそうだった・・・」

スバルは戦いの事で半分忘れてしまっていた。

彼女がミソラであることを。

「まさか忘れてたの？」

「う・・・うん」

スバルは半ばおびえながら答えた。

そしてミソラがスバルから抱きつくのをやめる。

「そこがスバルらしいわね。けど、私との関係を忘れてた罰として今すぐここで私を呼び捨てにして呼んで！！」

「ええ!!?」

「は・や・く!!」

ミソラはせかすように言葉を区切りながら言う。

「ミ・・ミソラ・・」

スバルは恥ずかしながら小さい声で言った。

「聞～～こ～～え～～な～～い～～～～～～～～」

「ミ、ミソラ!!」

スバルは顔を真っ赤にしながら言った。

『スバル、そのか』

『アンタは黙ってなさい!!!!!!』

ウォーロックが何か言おうとした瞬間、ハープが容赦なくラリアットをウォーロックにぶちかました。

そしてウォーロックは気絶した。

「ふふっ、その言葉聞けてうれしいよスバル。これからよろしく



！スバル！」

「うん！！」

「あ、あとスバル目をつむって」

ミソラは半ば顔を赤らめて言った。

「わからないけど分かったよ」

そしてスバルは目をつむった。

（よくいくよ・・・）

ミソラはスバルの顔に接近した。

そしてミソラの唇がスバルの唇に重なる。

（！！！！）

スバルは目を閉じていたため突然自分の唇に何かがふれてびっくりした。

そして目を開く。

スバルの目に映ったのは0距離に近いミソラの顔。

さらに自分の唇にあの大人気アイドル、響ミソラがキスをしていたのだ。

その直後、スバルはミソラの唇から離れ、そしてさらに距離を取る。

「な、何してるのミソラちゃん!？」

「いいじゃん、別に。もうちょっとあのままでいてもよかったのに・  
・ファーストキスなんだからさ・・。てか呼び捨てにしてよスバル  
!!!」

「もう何がなんだかだよミソラ・・・」

スバルは色々衝撃的なことがあったため混乱している。

「そりゃそうかもね」

ミソラは平然としている。

「さっ、帰ろう。みんなが待ってるよ」

「うん!!」

こうしてスバルはどうにか帰ってきた。

そしていつも通りの平和な日々が始まる。

これが当たり前なのかもしれない。戦争をせず平和にすること。こ

うすることで誰も死なずに済む。

だがその平和な日々がいつまで続くかわからない。その時は青い流星が戦うだろう。

――そう、世界を守るために。

## Trail | 56 笑顔の1ページ（後書き）

@書きトークです^^

まず説明してなかったこと

何故、赤い流星だったのか。

それはスバルが大気圏突入するとき、バリアを使っていたためです。

バリアを使わなきゃ大気圏突入できません。

使わなかったら塵と化します。

そしてどうでしょう？

うまくかけたのでしょうか？

作者はいまいちこう実感がありませんが・・・

感想待ってます^^



ルに話しかけた。

「うん、ちょっとね・・・」

「なんなの？私でよかったら相談にのるよ」

「いや、大したことじゃないんだけどさ」

「いいよ、些細なことでもいいから言ってみて。何か解決策がみつかるかもよ？」

「この2か月の間に僕が不在でミソラにかなり心配や寂しい思いをさせたんじゃないか？っておもってね・・・」

その言葉を聞いたミソラは。

「ずっと私の事を心配してくれてたんだ。さすがスバルだね、他人の事を思い続けている、心配してくれている。私はあなたのようにずっといなくなっていた貴方を思い続けることはできない・・・」

「・・・・・・・・」

「だからありがと……。改めて君と出会えてよかった」

「ミソラ・・・」

そういい、ミソラはスバルに近寄った。

「そういえば一週間後にオクダマスタジオの特設ステージで私の久々の新歓ライブがあるんだよ。みんなの分のチケットあるからさ、みんなを誘ってきてよ!!」

「うん、分かった!」

そして一週間後――

オクダマスタジオの特設ステージエリアで今日限りの新歓ライブをしていた。

特設ステージの上には、衣装に着替えているミソラ。

そして観客の中にはスバルたちがいた。

「久々だねミソラちゃんのライブ!ね、みんな!!」

「はい!」

「そうね!」

「そうだな!」

三者三様の声が返ってくる。

「今日は思いっきりライブを楽しもう!」

「」「うん!!」「」

ルナ達はずっとスバルの事を心配していた。

けどこうやって再び笑顔でいられる。皆は安心していただのだ。一週間前にスバルが無事生還して、皆本当に安堵した。

「皆！！今日は私のライブに来てくれてありがとーーー！！」

衣装姿になって、アンプにつながれているギターを持っているミソラはマイクを持って観客達に挨拶をした。

「ミソラちゃーん！！」

ファンからの歓喜の声が上がる。

「じゃあ、まず最初の曲いくよ！！ハートウェーブ！」

ミソラはギターの弦を引き始めた。

ギターの弦の音色、そしてミソラの歌唱力。

この二つが重なり、そして最高の音楽を醸し出していった。

観客のテンションは最絶頂。ミソラも、スバルも、そしてみんなも最高の時間を過ごしていった。

そしてライブが無事終わり、コダマタウンの帰宅途中ー。

「ミソラ、今日は最高のライブだったよ！！」



ウェーブライナーから降りて皆と別れたスバルはミソラにそういったのだった。

「ありがと、スバル!!」

そういつて、ミソラはスバルの右腕に抱き着く。

「つてここでくっつかないでよ!! 恥ずかしい・・・」

「別にいいじゃん、恋人同士なんだしさ」

周りを気にするスバルと違ってミソラは周りの目を気にしない人であつた。

「ま、いっか」

こうしてスバルはミソラに右腕を抱き着かれながら家に帰って行った。

そして星河家――

リビングでTVを見ているスバルにミソラが突然話しかけてきた。

「ねえねえスバル、今日の私のライブどうだった? かつこよかつた?」

今現在、家には二人しかいない。

ということは両親にからかわれることがない。

ミソラはそのベストタイミングを使ってスバルに聞いたのだ。

「かつこよかったよ。ギターを弾く姿。そして何よりの歌っているミソラが楽しそうに見えたよ」

「ありがとスバルくく」

何故かまた抱き着いてくる。きっとこれがミソラの定石となるだろう。

スバルはいまだ対応できないのか恥ずかしがっていたのだ。

「そうだ！この際、スバルもギターやってみない？一緒にライブやろうよ！！」

その言葉を聞いたスバルは固まった。彼の思考回路では・・・

（え？突然何言ってるんだこの娘は・・・？てかなんで突然？）

「僕がギターやるの・・・」

「うん！！一緒にライブやれたらあたしもっと楽しい！！」

「え・・・」

『スバルにギターな・・・』

『アンタは黙ってろ!!』

ウォーロックが何かいおうとしたがハープがバトルカード、モアイ  
フオール3を使いウォーロックはモアイの下敷きとなり虫の息と化  
した。

「とにかくやってみようよ!! わからないところはあたしが教えるか  
らさ!!」

「えええええ!!!!!!!!!!」

家にスバルの声が響いた。

無理難題を課せられたスバル。けど彼女と一緒にライブできたら楽  
しいと思ったスバルであった。

## Trail | 57 歓喜の1ページ(後書き)

@書きトークです。

今回スバル君に超究極的な無理難題？をおしつけられましたW W

さ、彼はギターを弾けるようになるのでしょうか？

俺、左利きのギターほしいな・・・(嘘)

でも実際左利きだと不便が多すぎるW W

何かとね・・・

次回はギター??の話と非公開話W

感想待ってます^^

**T r a i l | 5 8 挑 戦 の 旅 路 ( 前 書 き )**

更新遅れました。

すいません・・・

ミソラから衝撃的な事を言われてから4日が経過した。

夏休みは折り返し地点を向かえようとしていた。

そして今、スバルは何をしているのか？

彼にこれからどんなきっかけがあるのか？

新たな運命が始まろうとしていた。

そして場所は星河家。

彼の家からは微かだがギターの音が聞こえてくる。

「どう？」

ミソラが演奏を終えた。

ギターがアンプに繋がれていないためライブのような音はだせなかった。

「凄く上手いよ！さすがだね」

スバルが称賛の声をあげる。

「じゃあ、スバル君もやってみてよ！」

「ぼ、僕はいいいよ・・・」

「ダ~~~~メ~~~~!!」

ミソラは即却下した。

「大丈夫！分からない事があったら私が教えるから!!」

ミソラはそういいながら予備のギターを渡した。

「これは？」

「あたしが昔使ってたギターだよ。昨日、弦のメンテナンスや音のチューニングもしてあるから大丈夫なはずだよ」

「う・・・うん・・・」

スバルは渋々ギターを受け取った。

『てかスバルにギター、本当に似合わ・・・』

『いいから黙れ!!!』

ウォーロックは本音を言おうとしたが、またも掻き消されてしまった。

ハープはウォーロックの声を掻き消しバトルカード、モアイフォル3を使いまたもモアイの下敷きにさせた。

『またこれかよ・・・』

半ば虫の息と化している。

チャキン!!

その直後、ウォーロックの近くで剣の音がした。

モアイフォルの下敷きになっているウォーロックに刀を向けているハープの姿があった。

ハープはウォーロックの後頭部に刀を向けてこう言った。

『次、変な事を言ったらこの場で貴様の頭が飛ぶと思え・・・』

ガチモードに入っているハープにはドス黒いオーラが出ていた。

『は、はひい!!!』

ウォーロックはハープの尋常じゃないほどの殺気に襲われた。



「ちよいと怖いよハープ・・・」

パートナーであるミソラは一步退いていた。

「んじゃ、やるよ！まず左手で3弦の2フレットを止めてみて」  
「え」と・・・」

スバルはかなり迷っていた。

「こうだよ」

ミソラはスバルの左手を掴み弦を抑える場所へ導いた。

「スバルの手、暖かい・・・」

「え？・・・」

「ただそれだけだよ。さっ抑えたから右手で弦を弾いてみて」

「うん・・・・・・」

右手で弦を弾く。

そして綺麗な音が鳴り響く。

「それを何回か繰り返してみて!!」

「うん」

スバルはギターの知識と経験に関しては全くゼロなためただ従うしかなかった。

「とりあえず最初はコードの抑え方を覚えるしかないよ」

「最初は練習するしかないよ。私だって最初はよく分からなかったし」

「最初は誰だってそうだよ」

「じゃあ抑え方を教えるよ。Cのコードの抑え方はこうだよ」  
ミソラは弦の抑え方を実際にやってみた。

「中指と薬指をこうやって人差し指と小指をこうするんだよ」

「こうやって・・・こう？」

スバルはミソラのやった通りにやった。

「そんな感じだよ!! 次はDのコードの抑え方ね!」

再びミソラはコードの抑え方をみせる。

そしてスバルはやってみようと指を合わせる。

その直後、スバルに小さな悲劇が起きる。

「後、ちょっと・・・」

グキッ！！！！

「いてててて！！！！！！」

スバルは指をつってしまった。

「あら・・・やっぱりこうなるよね・・・」

ミソラにとっては当然の事。

だがスバルにとっては初めての事。

「ま、最初は指をつったり、ギターの弦で指の皮がむけたりすることがあるけど、重ねていくうちにちゃんと弾けるようになるよ」

「う・・・ん・・・」

スバルは左手を抑えながら言った。

「次はこれをこうでこれをこうするんだよ！！」

再びミソラはやってみた。

こうして少しずつだがミソラによるスバルのギター特訓が始まった。

彼が彼女の横でギターを弾きながら、歌うのはいつになるだろうか。

それは一年後かもしれないし半年後かもしれない。

彼らがステージの上に立って一緒に演奏し、一緒に歌い、背中を預けられるようになるのはもっと先になるだろう。

けど一緒に歌いたい、演奏したいと思っているミソラはそれを実現したいのだ。

それが今の彼女の夢なのだろう。

夢をもった若い人はそれへと真っ直ぐ取り組む。

そうすればきっとそう遠くはない明日、夢を実現できるだろう。

きっと、ステージ上で一緒に歌えることを――。

流星のロックマン 番外編 一完結一

## Trail | 58 挑戦の旅路（後書き）

@書きトーク the Finalです^^  
えっと更新大幅遅れました。

まず二つ修正点があります・・・

まず一つ

番外編でストーリー上での没ネタストーリーを急遽無くします。  
その訳は色々とあります。

まずこの調子だと、2ndが始まらないような雰囲気があります。  
そして二つ

2ndを読みたい人がいるんじゃないかと思えます↑個人的意見&  
amp; 超身勝手な判断ww

2nd Seasonがいよいよ始まります^^

それでは更新待ってます^^b

## Auf t a k t | 01 リア充に嫉妬する少女

Feb／15 (Mon) PM 5:15

平和の日々を取り戻してからさらに五ヶ月。季節は寒冷期、冬を迎えていた。空からはうっすらとだが雪が降っていた。辺りの木々は枯れて寂しくなっており木々は葉をなくし、栄養温存するためだ。そして木々達は冬を乗り越える。そして空からこんこんと降る雪が地面に落ちてあっというまに溶けてしまう。

その雪が降っている様子を見ながらスバルとミソラは玄関に向かっていた。おそらく授業が終わったから下校するのだろう。二人の背中には大きな何かに包まれたケースがあった。これは一体なんなのか。その真相は後ほど明かされる。そして外に出たスバルとミソラは雪を見つめていた。

「うわ~~~~あ、雪が降ってるね。冬が来たって感じだね！」

コート姿のミソラが綺麗な雪を見つめながらそう言った。

「もう冬真っ只中だね。コートとマフラーと手袋が必需品だよ・・・」

コートを着用し、マフラーと手袋、そして背中に大きな物？をせおっているスバルには荷物が重く感じ取れた。完全にフル装備。寒さが大の苦手なスバルにとっては鬼畜だったりした。それに対しミソラは空から降ってくる雪の結晶に目を爛漫と輝かせながら元気よく帰りの先陣を切っていく。

「さっ、帰ろうかスバル。雪が積もる前に」

ミソラは白くなった吐息を吐きながらそう言った。

「そうだね……フウ——」

スバルが白い吐息を手当てながら言った。その仕草を見たミソラは思わず、

「もしかして寒いの!？」

と言ってしまった。スバルはそれを聞いても自分の意見を率直に「そりゃ寒いよ!!ヘックシュ!!」

と言い、スバルはそう言った後くしゃみが出ってしまった。しかも三連続。

「寒がりだね〜。じゃあ急いで帰ろうか」

「うん……」

そして雪の降る白い世界の中、二人は下校した。

「本当に冬だね〜」

ミソラは辺りの風景を見ながらそう言う。場所はコダマタウンの公園付近。

「全くだよ、寒い・・・」

「全くスバルったら寒さや雪の事で言ったんじゃないの!」

「じゃあなんなのさ!？」



「ほら、辺りの草原や木々、花とか植えてある場所あるじゃん」

「うん・・・」

スバルは寒さで震えている。

「木々は枯れて、草原は無くなり、花は無くなって、何日後にはここ一面が雪景色に変わるんだな〜って思えるんだよね〜」

「なるほど・・・てか早く帰ろう・・・」

「そうだね・・・」

雪が降る中、スバルとミソラは帰っていった。

一方その頃学校では――

「スバル君達、私達を置いて帰ったわね〜・・・」

半ば自分自身の限界、つまり覚醒状態？に陥っているルナとそれに一步退いているキザマロ達の姿があった。

「また置いていったら許さないからね!!」

覚醒状態＋ダークネスオーラ（およそ攻撃力500以下無効化＋吹き飛ばし無効）＋嫉妬と置いていかれた悔しさで召喚？したビームサイズを持って振り回した。

だがこれはただの箒だ。

嫉妬が箒に取り巻き、それで鎌になったのだろう。

「また無視したら切り刻んでやる・・・」

（委員長ヤバいな・・・）

（ありゃあ・・・どつかのアニメにある強化人間的なニュータイプもしくはイノベーター的になるかもな・・・）

（あの鎌で切り刻まれたくない・・・）

（なんか楽しそうだなルナちゃん・・・）

一人だけ愉快的な考えをしていたツカサ。

後の3人は対処方法を考えていた。

「アンタ達！！！！」

「「「はい！！！！？」」」

「帰るわよ！！！！」

ルナは若干目の色を変えながら、鎌を突き付けていった。

「は、はい！！！！！」

皆はその後、ルナからの愚痴を散々聞かされた。

そんな事があったの知らないスバルはミソラと共に家でギターの練習をしていた。

最初、スバルは渋々やっていたが前と今は違う。

スバルはギターを楽しそうに練習していた。

つい最近にスバルは自分のギターを買った。

全体的な色は赤。

ミソラはスバルⅡロックマンⅡ青Ⅱ青のギターという思考回路だったがスバルが渋るから仕方なく黒になった。

「じゃあ私の曲、ハートウェーブで合わせてみよっか!!」

「うん!!」

スバルはギターを始めてはや五ヶ月。

たまたまスバルにはギターと相性が良かったのか覚えるのが早かった。

今じゃコードの抑え方、ミュートなどの技術などもしっかりと身に染み込んでいた。

「今日も合わせるの？」

食器洗いを終えて、リビングに向かってきたあかねの姿があった。

「あ、母さん。今日も合わせるよ」

スバルが返答した。

「じゃあ私ここで見てるから」

あかねはスバル達がソファに座っている向かいのソファに座った。

「じゃあ行くよ」

二重のギターの音が絡み合い、綺麗な音を作り出して行った。

この曲はミソラがギターだけで弾いているため合わせるだけであつて簡単な曲だ。

だからスバルにとって簡単だった。

最初から最後まであまりズレたりミスすることなく弾けた。

「どう？」

スバルはミソラに聞いた。

「だんだんとあつてきたね。後は音かな。多少音の高低差があつたりするんだよね。チューニングもしておいたらもっとよくなるかも」

「そういえば最近チューニングしてなかった！！」

スバルはギターの先にあるツマミを回して音の調整をした。

「後はいずれデビューすると前提して、私とスバルでギターが二人いるからどちらかがリードギターしなきゃならないけどスバルはリードギターやる？」

「なんでデビュー前提なの？」

「あたしとスバルで舞台の上で歌うのがあたしの今の夢なの！」

「そうなの!!!!!!?」

スバルは素っ頓狂な声を思わず上げてしまった。

「へえ〜いい夢じゃない」

あかねは感心していた。

「とりあえずリードの方にしとくよ・・・」

「解ったよ。じゃあ新曲作るかな!!」

「まさか僕も歌うの!?!」

「歌いながらギターを弾くのはまだスバルには無理でしょ? だからスバルはボーカルはやらないよ」

「よかった〜あ・・・」

「何言ってるの!?! 新曲出来たら即練習して、デビュー飾るんだからね!!!!」

「はいいいい!!!!?」

スバル再び素っ頓狂な声を上げた。

「スバルはまだまだ未熟だからね。ギター弾きながら歌を歌うなんて到底無理だと思うし」

「そこまでいう？」

「じゃあボーカルやる？」

「遠慮します・・・」

スバルは呆気なく下がった。

「じゃあ今度はスバルがソロで私の曲、シューティング・スターを弾いてみてよ！」

「う・・・うん・・・」

スバルはシューティング・スターを弾きはじめた。

あかねとミソラはスバルのギターの弾く姿を見ていた。

「本当に私より上達が早いよ・・・」

「だったら追い抜かれないように頑張るなさいよー!!」

「うん・・・」

ミソラは同年代だとしてもギターの経験としてはミソラが先輩だ。  
だから追い抜かれないように決意したミソラであった。

そうして冬の一日が過ぎていった。

無論、スバルは明日ルナに怒られたのは言うまでもない。

一方、地球の奥深く内核では――

ドクン、ドクン・・・

何かの鼓動の音が聞こえる。

「そろそろ覚醒が近いようだな・・・」

「ええ、そうですね。破壊の獣、バリアント・ハデス。全てを破壊し世界を突然変異、吸血変異を齎したのち自らをも破壊してしまうまさに死の世紀末世界を迎えさせる死と破壊の存在」

「だが完全な復活にはまだ足りない」

「それは？」



「清らかな優しい心を持つ人が必要だ。そいつの体にバリアント・ハデスの意識データを取り組ませることで完全体となる」

「つまり現在のままでも十分に動けるけど完全体となることで真の力を発揮するという事？」

「そうだ。そしていけにえとなる人は決まっている。3日後にこれを結構する」

「了解!!」

そして運命の戦いが再び始まる。

## Auf t a k t | 02 新たな決意

そして2日が経過した朝。

昨日から雪が降っていたため一面は雪が積もった銀世界だった。

そしてこの二人はいつもの朝を迎える。

勿論、ミソラはスバルのベッドに潜り込んでいた。

「ふぁーあ・・・朝か・・・」

声の主はスバルだった。

朝は寒い。その寒さで6時に目覚めてしまった。

「うう・・・寒い・・・」

といいながらスバルは寒さに耐えながら部屋のカーテンを開けた。

「まだ空が暗い・・・日の出はまだか・・・」

カーテンを開けた先にはある程度積もった雪とまだ明かりがついている街灯の姿があった。

東の空はまだ薄暗い。

夜明けまでまだ先だろう。

「とりあえずリビングに行こう・・・」

そういい、スバルはリビングへと移動する。

リビングでは床暖房とストーブが部屋をあたためていたので極度に寒くなかった。

台所では朝食を作るあかねの姿があった。

「おはよう母さん・・・」

スバルはまだ眠気が吹っ切れてないのか眠そうに言った。

「あら、スバルおはよう。今日は起きるの早いのね」

あかねがそういった。

ちなみに大吾は仕事の都合で早朝出勤のため姿はなかった。

「まあ・・・寒さで目覚めてしまったって所かな・・・」

「まさかミソラの寝相が原因？」

「まあ・・・そんなとこだね・・・」

スバルがそういうとそれを聞いたあかねは苦笑いしていた。

「ご飯は出来てるけど食べる？」

「うん」

そういうスバルはテーブルの椅子に座った。

「いただきます」

朝食はご飯に焼き魚と味噌汁。  
一般的な家庭の朝食だった。

スバルが朝食をしている間、スバルの部屋では――

「あれ？」

寝癖全開のミソラが目覚めた。

「スバル、もう起きたのかな？とりあえずリビングに行くかな・・・」  
「」

そしてミソラが布団から出た。

「うう・・・寒い・・・」

寒さに耐えながらミソラはリビングに向かった。

「お母さん・・・おはよう・・・」

「おはよう。ミソラも起きるの早いわね。てか頭の寝癖凄いわね・・・」

あかねは哑然としていた。

「うん・・・」

「ミソラの朝食の分も用意してあるから食べなさい」

「はい」

そういうミソラはスバルとの向かいの席に座った。

「スバルおはよう」

「おはようミソラ」

二人は挨拶を交わした。

二人が朝食を終え、学校の下準備を終えたのが約35分。

現在7時。

時間にかなり余裕があった。

「スバル……？」

ミソラがスバルを呼ぶ。

「何？ミソラ？」

「時間に余裕あるからさ、早めに学校に行ってギターの練習しない？」

「いいよ、あ、でも委員長達どうしよう・・・」

「メールで先に学校行ってるって連絡すればいいじゃない」

「そうだね。朝練するって言えはきつと納得するよね」

そういうスバルはルナにメールを送った。

「じゃあ、行こうか」

スバルとミソラはいつもの服装の上にコートとマフラーと手袋をし、防寒対策をした。

そして謎の大きな黒いケースと小さなバックを背負った。

「行ってきま〜す」

「行ってらっしゃい」

スバルとミソラは玄関の戸を通り学校に向かった。

戸を開けた瞬間、二人の視界に写るのは真っ白の銀世界。

雪が積もっていた。

空から降り注ぐ朝の優しい太陽が雪に照り付けそして辺り一面に反射する。

「うわ~~~~綺麗」

ミソラは綺麗な雪に魅力されていた。

「うつ・・・眩しい・・・」

スバルは朝の光に弱いのか眩しそうにしていた。

「さっ、早く行こうか」

「うん」

ミソラはスバルを導き、学校へと歩きだした。

登校中、柔らかな雪をスバル達がそれを踏んで歩いていった。  
柔らかな雪を踏むと踏んだ時の雪の独特な音がする。

「この雪を踏んだ時の音いいね」

ミソラがなんだか嬉しそうに言う。

「冬って感じだね」

「いやもう冬だから・・・」

スバルの一言にミソラがツツコミを入れてしまった。

そしてコダマ小学校にたどり着いた。

校門から玄関までタイヤの後や何人かの足跡しかない。

おそらく先生達が早く来ている生徒だろう。

スバル達はとりあえず玄関に向かった。

「人少ないね・・・」

「普段私達が遅く来ているからだよ」

「確かに早く学校来るって事なかったしね」

スバルとミソラはそういいつつ教室に向かった。



「今日は何の練習するの？」

「今日はスバルがリードギターだからそれで弦を弾くタイミングがズレるからその練習」

「分かった」

そして教室に到着し、誰もいない教室で早速ギターの練習を始めた。

「じゃあとりあえず適当に弾いてみて。それを合わせて私が後に弾くから」

「うん」

スバルは左手でギターの弦を止めて、右手で弾く。

二つのギターの音が一つ、一つズレながら聞こえる。

そして――

「まっ、こんな感じかな」

「なるほど・・・」

「実際スバルはただ弾けばいいだけだけどリードギターは少し弦を弾く部分が違う部分があるから気をつけてね」

「分かった」

ミソラは先輩として後輩に指導する。

その直後、クラスメイトが2、3人教室に入ってきた。

「おはよう〜今日は早いんだね。朝からギターの練習かい？」

クラスメイトの男子が話かけてきた。

「今日は朝練かな」

スバルがそう言った。

（とてもミソラの寝相が悪くて早く起きたと言えない・・・）

スバルはそう思っていた。

「まさか廊下まで聞こえてた？」

「うん、まあ若干」

「そうか・・・、マテリアライズ！ステルス防音壁！！」

ミソラは音を遮断する防音壁をだした。

「よしやろうスバル」

「うん!!」

「ねえ、なんか二人で弾いてみてよ!!」

クラスメイトの女子生徒がそう言った。

その間に続々とクラスメイトが教室に入ってくる。

その中にはジャックやツカサの姿もあった。

「あいつら今日は朝練か」

「そうみたいだね」

ジャックとツカサは微かだが二人の様子を見守っていた。

「どうする?」

「じゃあやろっか!!」

ミソラがそう言った。

「じゃあハートウェーブからね。あ、ついでに歌う?」

「」「歌ってください!!!」「」

もはやクラスメイト全員（一部除く）がそう言った。

「じゃあいくよ・・・」

スバルとミソラは何故か教卓の近くに行った。

教卓付近の床は教室の床と比べてある程度高い位置になっている。

おそらくステージにいる気分でやろうとしたのだろう。

「じゃあいくよ・・・」

スバルとミソラは目配せする。

「リードは無しでしょ？」

「当たり前でしょ!!」

スバルはミソラに怒られてしまった。

「3、2、1・・・」

二人は同時にギターを弾いた。

曲のイントロの部分が終わった後ミソラは歌いだした。

防音壁のおかげで音はシャットアウト。

他のクラスに迷惑をかけることなく歌えた。

二人がギターを弾いている間。

ルナ達が教室に入ってきた。

「なんでミソラちゃんが歌ってるんだ!!?」

キザマロがそう言った。

「朝からミソラちゃんの曲が聞けるなんて最高だぜ!!」

何故かルナは沈黙。

そのまま自分の席に向かった。

そして曲が終わった。

「どうだった?」

スバルが質問した。

「スバル君、ギター上手いよ!! もうミソラちゃんとデビューしちゃったら?」

スバルは一番聞きたくないデビューという言葉聞き心が軽くえぐり取られた。

「デビューしようよスバル〜」

ミソラはスバルの右腕を掴んでそう言った。

「まったくスバルったらいつのまにあんなに上手くなったんだ？」

ゴンタが疑問の声を漏らす。

「教える人がいいからよ」

それを答えたのはルナだった。

何故かルナはあさつての方を向いている。

比較的鈍感なゴンタはルナの様子にきづかなかった。

そしてかなりテンションが高かった朝練を終えて一日の学校生活を過ごした。

そして一日が終わり帰り道では――

いつものメンバーで帰っていた。

「今日の朝、小さかったけどミソラと合わせて、ライブみたいな感じのをやって凄く楽しかったよ。音楽って楽しいね、特に演奏を終えた時の皆から拍手喝采を受けた時が一番嬉しかった」

「私もそうだよ。今日、スバルと合わせれて、ライブみたいな感じでできて楽しかった。二人でやるとこんなに楽しいなんて思わなかったよ」

二人の気持ちは同じのようだ。

「もういつその事、デビューしたらどうですか？」

キザマロがそう言ってきた。

「そうだよ!!」

ゴンタもそう言ってきた。

そして最後、

「スバル君!!!!」

「はいっ!!!!?」

何故か大きな声で呼ばれてしまったため返答が疑問形になってしまった。

「デビューするなら、日本一を目指してよね!!」

「に、日本一!!」

スバルはスバルは素っ頓狂な声をあげた。

「皆もそう言ってるし、一ヶ月ぐらいしたらデビューしようよ!!」

ミソラも後押しする。

「まあ音楽は凄く楽しかったし、皆の笑顔と拍手を貰った時は嬉しかった。分かった、やるよ!!」

スバルはついに決意した。

ミソラと組んで歌うことを。

リミットは一ヶ月。

だがその一ヶ月には絶望をも凌駕する出来事が起こる。

彼等にどんなことが起きるのだろうか。



## Auf t a k t | 03 狂い始める日々

「うう・・・」

一人の少女のうめき声上がる。

「ここは一体？」

ミソラは目覚めて辺りを見回す。

「あれ？あたし、スバルと一緒に寝てたはずなのに？」

ミソラはスバルと一緒に寝てた記憶は微かだがあった。

だが起きた自分はスバルのベッドの上にはいない。

ミソラの目に映った世界は辺り一面が薄暗く、何かの空間に閉じこまれているという間隔だった。

「何もない・・・」

『ミソラ？』

ミソラの相棒の声がハンターV Gから聞こえてきた。

「あ・・・ハープ・・・ここ・・・一体どこだろ？」

『私にも分からないわ・・・夢なのかな?』

「夢か・・・」

そういいミソラは頬をつねってみる。

「いてて・・・夢ではないみたいだね・・・」

『けど、なんだろうここは?』

その直後――

「ギャオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

謎の叫び声がした。

「な、何!?!」

辺り一面が薄暗い為、よく見えなかったが声がした先を見ると大きい黒い影があった。

「こ、これは・・・」

『ミソラ、一応電波変換よ!!!』

「分かった! トランスコード! ハープ・ノート!!!」

そして光に包まれたミソラはハープ・ノートに電波変換した。

ミソラは大きな黒い影を見つめた。

体は黒く、凸凹していて、体の形がよく分からない容姿だ。

頭へ近くになるつれ胴体の太さは細くなっていた―

そして長い首。

頭は骸骨の形をしていて。顔の真ん中には冷たく、見た者に体を震え上がらせるような猛々しいを目をしていた。

足はなかった。

どうやらラ・ムーのような設置型生物であろう。

手の姿もなかった。

「どうくるか・・・」

ミソラは構える。

その直後、敵の体の中から奇妙な音を放ちながら二つの黒い手が出てきた。

腕はなく、宙に浮いている。

「来るか!?!」

ミソラは距離をとる。

そして敵は右手でミソラに襲い掛かった。

右手の大きさはミソラの3倍。

かなり大きかった。

距離はあったためミソラは難なく回避できた。

だが左手もミソラに襲い掛かる。

「バトルカード!! バリア!!」

ミソラはバリアを展開し、左手からの攻撃を防ぐ。

左手の威力は大きかった。

ミソラの体はバリア越しだったが軽く吹っ飛ばされた。

「うっ・・・強い・・・」

ミソラはダメージ軽微だったため難なく立ち上がった。

「今度はこちらの番よ!!」

「バトルカード! ブレイクサーベル!!」

ミソラは勢いよく接近した。

顔は高い位置にあったためミソラはジャンプした。

ジャンプしてからの落下速度とブレイクサーベルを振り下ろす速度で申し分のない速度になった。

ブレイクサーベルが敵の顔を深く斬りつける。

手ごたえはあった。

「よし!!」

ミソラは自分の成果を褒める。

だが直後、斬りつけた相手の顔の傷が再生していった。

「え、なんで!?!」

ミソラはちゃんと斬ったはずだ。

だが顔には傷跡すらない。

「だったらこれでどうだ!!」

ミソラは胴体、手を切り付けたが、同じように再生した。

「一体どうすれば?」

その後、敵は目から赤、青、緑と三色三本のレーザーを放った。

ミソラは落ち着いて行動した。

「ノイズドライブ始動！！空回身！！」

ミソラの大技、空回身。これは空間を振曲げる技である。

空間を振曲げることにより自分に攻撃が当たっても、その攻撃の自分の空間を振曲げることにより無傷になる。

他にも空間移動が出来る。

だがこれは体力の消費が激しい。

相手をよく分かってないミソラはあまり体力を使いたくなかった。

そしてミソラは無事やり過ごす。

『ミソラ、もしかしたらだけど目がいけるかも知れない・・・』

ハープは根拠がないことを言った。

「え、わ、分かった！！バトルカード、ヘビーキャノン！！」

ミソラはしっかりと両足を踏ん張り、反動の大きいヘビーキャノンを目に向けて撃った。

弾は目に直撃した。

「ギャオオオオオオオオオオ！！」

敵が悲鳴を上げた。

どうやら効果はあったみたいだ。

「やった！！」

ミソラは効果があり喜んだ。

そしてその一瞬の心の油断が生命に死を招く。

その直後、敵の目が黒く、赤く光出す。

死がゆっくと近付く。

そして目から細い一筋の黒く、赤い閃光が真っ直ぐ進む。

ミソラはこの細い閃光に気がとられた。

その直後、超極太のレーザーがミソラを包む。

「うわあああああ！！」

ミソラは張っていたバリアが一瞬で破壊され、脆にレーザーを喰らった。

「うぐっ・・・この化け物は一体・・・」

ミソラは膝に手を着きながら言った。

「破壊の獣、バリエント・ハデスだ・・・」

直後、謎の黒いマントの少年が現れた。

「お前は・・・誰？」

「私の名は突然変移し、吸血鬼と化した電波体レイン。貴方に用があり私が空間転移で貴方をここへお連れしました」

「その用とは？」

ミソラは疑問を持った。

「貴方をこの破壊の獣、バリエント・ハデスと同化してもらいます。バリエント・ハデスは箱、つまり人という名の体を求めている。その人の体に入らせなければならぬのが清らかな優しい心を持った、響ミソラ、貴方になります」

「私の体の中の箱というのにこの化け物を入れる？」



「そういうことだ」

「それが出来るかな？私はこの化け物の弱点を見つけた。攻撃はほぼ対処できるし、体力はまだまだある。コイツは私がこの場で倒す！！」

ミソラはギターをバリアント・ハデスに向ける。

「だが現実には上手くいかないですよ。響ミソラさん。既に貴方の体は蝕まれている」

「なっ！？どういうこと！？」

ミソラは自分の体を見たが異常は無かった。

「今、わかりますよ」

直後、ミソラの体に激痛が走る。

「うぐっ・・・！！」

「さっきのレーザーを浴びたのが原因です。あのレーザーは浴びた者の体の中の血液を推移させ、じつくりとだが吸血鬼化が始まる。君の体は既に闇と暗黒の力に汚染されている。太陽を好まない、黒い力に君は染まりはじめる。既にあのレーザーを浴びた時点で君はあのバリアントの箱となっていた」

それを聞いたミソラは

「そ、そんな、そんな・・・うぐ・・・うあああああああ！！！！！！」

ミソラは更に体に激痛が走り、気を失った。

彼女が気を失い、どうなったのか、そして今後の運命はどうなるのか。

そして流星はそれをどうするのか。

世界が狂い始めていく。

一人の少女によって――

## Auf t a k t | 04 偶然が起こした奇跡

「痛てて・・・」

一人の少年の声が聞こえる。

『スバル、大丈夫か？』

この世で最も信頼出来る相棒、ウォーロックがスバルの横にいた。

「あれ？ウォーロック？ここはどこ？」

『俺にも分からない。だが間違いなく何かの建物の中って事だろ』

「うーん・・・確か誰かが僕にイタリアに来てといい、見せたいものがあるって言ったはず・・・。あーなんで！！？重要な部分がハッキリしない！！」

スバルはのたうち回った。

『とりあえずここから脱出しようぜ。何かいるかも知れないから電波変換していくぞ』

「うん。トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

そして星河スバルは伝説の青いヒーロー、ロックマンとなり脱出を試みた。

『そういえばスバル、あの病は完治したのか？』

ウォーロックが喋ったあの病とは、長時間の電波変換が出来なくなる病だ。

過去に暁シドウというスバルと同じで電波変換できる男がいた。

その男は暫くの療養で完治した。

スバルも同じだ。

無事帰って来た時、スバルは半ば死に体だった。

帰ってきたスバルは即、WAXAで治療を受けて、いい特効薬を投与してもらい、すぐに完治した。

「それなら大丈夫！」

『そうか、じゃあいくぞ！そうしてるうちに思い出すかも知れないからな』

「分かった！バトルカード！スターソード！Σブレード！δブレー  
ド」

スバルは二対の剣を出し、前に進んだ。

そして前に進んでいき階段があった。

階段は上り。

どうやら地下の可能性が高いだろう。

どうりで光も差し込まないと思ったスバル。

「地下みたいだね」

『ああ・・・』

スバルとウォーロックは警戒を緩めないように進む。

もしかしたら、階段を上りきった先に敵がいるかも知れない。

曲がり角を曲がった敵と会うかも知れない。

そんな状態の中、スバルは剣を構えながら階段を上った。

上った先は、柱が多い部屋。

「敵がいるかも知れないな・・・」

スバルは足音を忍ばせながら進む。

薄暗いため、はっきりと先は見えない。

前、右、左と確認しながら進む。

そして後ろを確認しようと後ろを向きながら後ろ歩きしてると。

トン

とスバルの背中に何かがぶつかった。

スバルは恐る恐る振り向く。

そのぶつかった何かは――

――背中を向けていた敵であった。

敵も背中に何かぶつかった間隔で振り向きかけていた。

「ホントにいた――！！！！！！！！」

スバルはびっくりし、敵に剣を切り付けた。

「うわああああ！！スターソード！流星！銀河！十文字斬り！！！！」

スバルはびっくりして半ば自我を失っている。

「消えてえええ！！スターライザーソード！」

『つておいスバル！？』

「来ないでえええ！！！！スターツインソード！！！！」

『ダメだこりゃ・・・・・・』

スバルは怖いのがダメな為、完全に自我を失い敵一人？にスターソードの全ての必殺技を容赦なく叩きつけた。

もくもくと煙が立ち、スバルが大技三発も繰り出したため部屋の柱は倒れ、床は技を出した影響で深くえぐられていた。

『さすがにこんなに喰らってデリートされて・・・』

煙の中から謎の人が現れた。

『デリートされてなかった——！！！！』

実際、人型ウイルスだとウォーロックは思ったが、本当は電波変換している男だった。

「てんめえ、三発も俺に向けるなんていい度胸じゃあねえか・・・」

その男の声は——

『お、お前は！』

「三日月さん！！！！」

スバルは相手の名前があつてると確信した顔でいった。

「違う！！！！！！」

男は即答した。

『啄木鳥だろ！！』

「それも違う！！！てかお前ら無理矢理ボケてるだろ！俺は暁だ！！」

！」

「『あゝ、暁さんね』」

スバルとウォーロックは思い出した顔で言った。

「お前ら一回死ぬか？」

暁はロックオンソードでスバルの喉元へと突き付ける。

その男の名は暁と言った。

この男はまず背の高さと自信に満ち溢れた瞳が印象的だ。

電波体アシッドと電波変換できる能力を持ち、そしてスバル達を影で支える、いわゆる影の主役的存在である。

自称ヒーローと言う過剰意識があるが彼をヒーローと思っている人は実際の所いない。

他人の事を心配し、他人の事を思いやる優しい心を持ついい男である。

そして彼の電波変換した姿は全身が白く、片手には長い切れ味の良さそうな剣を持っている。

「そんな事より、暁さんがなんでここにいますか？」

スバルは質問する。

「それはこちらの台詞だ。お前こそどうしてここに？」



スバルは事情を説明した。

「なるほど・・・」

「俺は誰かに襲われたという所しか記憶にない・・・」

「そうですか・・・」

「とりあえず脱出しましょう。何かをやっていると思いつくかもしれません」

「俺もそれに賛成だ。まずここはどこなのかはつきりしない。何らかの通信遮断が施されていて位置がはつきりできない」  
そうして二人は脱出を試みた。

二人は再び階段を上る。

再び広い部屋に出た。

「シッ！何かいるぞ！！」

暁が敵の気配にいち早く気付いた為、壁に張り付き気配を消した。

暁達の視界に映ったのは見たことのない人型ウイルス。

全身は黒く、赤く染まっていた。

「アシッド、あれは？」

『データ解析……。解析完了。あのウイルスは全くの新しいウイルスです。ウイルス独特の周波数と遺伝子構造が違います。恐らく突然変異でしょう』

「分かった。スバル、お前はバリアを展開して前衛を頼む」

「分かりました」

「俺は後衛でお前の援護に回る」

暁はそういい、ライフルモードに変身した。

暁のライフルモード。

全身を覆う大きな盾とスナイパーライフルが印象的だ。足にはハンドガンを納めるケースが二丁。

背中には相手に追尾攻撃するビットがついている。まさに援護に最適なフォームだ。

「行きます!!!!」

スバルは壁から飛び出てバリアを展開しスターソードで未知のウイルスへと切り掛かった。

左振り、右振り、突き、切り上げ、振り下ろしをした。

そしてとどめの回転斬り。

スバルはその後、横へと前転した。

スバルが回避したそのウイルスとの一直線上には地面に膝を付き、低姿勢で狙っている暁の姿があった。

「いけええ!!!」

暁は狙いを定めて撃った。

弾丸が2発飛ぶ。

狙いはもちろん頭。

そして2発命中したが、相手は無傷だった。

「なっ!?!」

「あんなに喰らって無傷だと!?!」

スバル達は驚いていた。

「まだまだあ!!!!!!」

スバルは接近する。

人型ウイルスはスバルに向かい迎撃しようとした。

人型ウイルスは尖った爪でスバルを襲う。

だがスバルは回避し後ろに回り込んだ。

「はあああ・・・流星！銀河！十文字斬り！！！」

後ろからスバルが十を描いて思い切り斬る。

「ライフルビット！！」

さらに暁が6つのライフルビットを展開して、人型ウイルスに向けて攻撃させる。

「まだまだあ！！」

二丁のハンドガンで慣性ジャンプをしながら人型ウイルスに乱れ撃つ。

だがそれでも無傷だった。

「あんなに削って無傷！？」

スバルは少し不安になってしまった。

その不安が不幸を呼ぶ。

人型ウイルスが腕を振りかぶり攻撃した。

突如、腕が伸びてきた。

「なっ！？」

スバルは驚いてしまったため反応が遅れた。

人型ウイルスの伸ばした腕がスバルに近付き、そして鋭い爪がスバルの横腹を深くえぐる。

「うわあああああ！！！！」

スバルは全身に激痛が走り地面に膝がついた。

人型ウイルスはスバルを完全にターゲットとして定めていた。

「スバル！！！！」

暁の援護射撃も謎の人型ウイルスには効かない。ただ何事もなかったかのように漠然と歩く。

スバルは大ダメージを負っているため動けなかった。

再び人型ウイルスがスバルを鋭い爪で引っかけさせスバルを吹っ飛ばす。

「うわあああああ！！！！！！」

スバルは吹っ飛ばされ、壁に激突する。

そしてスバルは地面に倒れた。

「スバル！！！！」

暁は必死に気をそらせようとしているが人型ウイルスは見向きもし

なかった。

「どうしたら・・・」

その時、過去の出会いと過去に貰ったカードとデータプログラムアブリティ。

その時空を超えた出会いの偶然と偶然が重なりあい、そして大きな奇跡、もしくは運命がスバルに近付いた。

カタン・・・

一つの小さな音がスバルの耳の近くで鳴った。

スバルは音の音源に目がいく。

「これは！！！！」

目の前に現れたのは一枚のカードと一つのデータ。

スバルはそんな物が今出てきたという思いよりもまず先に体が動いた。

人型ウイルスは倒れているスバルを完全に爪で捕らえてたがスバルは回避した。

「これは・・・ジャンゴ君から貰った・・・」

スバルはジャンゴという名前を発した。

ジャンゴという少年はスバル達の世界にある化け物が逃げ込みスバル達の世界に来了、時空を超えた少年だ。

そしてデパートでジャンゴと言う時空を超えた少年がスバルにある物を渡したのだ。

それがそう――

「バトルカード！！ガン・デル・ソル！！！」

スバルは右手を空に掲げ太陽銃、通称ガン・デル・ソルを出した。

現れたガン・デル・ソル。

見た目は普通の銃に見える。

最大の特徴は銃口の上部分にある大きな黄色いレンズ。

そしてこの銃は他の銃と違い、リロードする必要があることである。

だがこれは太陽の力で動いているため太陽を吸収しなくては意味がない。

スバルは太陽銃、ガン・デル・ソルを構えた。

「これが効くかが分からない。けどこれは僕とジャンゴ君の絆のカード！倒して見せる！！いけえええ！！！！！！」

スバルは太陽銃の銃口から限界まで圧縮された太陽の弾が発射された。

弾は人型ウイルスの胴体を貫通し、塵と化した。

「はぁ、はぁ・・・やったのか・・・？あのウイルスに太陽銃が効いたなんて・・・」

「スバル！？なんだそれは！？」

暁が興味津々な顔をして近付いて来た。

「これは――――」

スバルは説明した。

彼との運命との出会いを。

「なるほど・・・でもこんな土壇場でそれがたまたま出てくるなんて出来すぎだな」

「全くですよ。幸運の神に感謝ですね」

「とりあえずアシッド、あれを見てどう思う？」

『恐らくあのウイルスは突然変異・・・つまり吸血鬼化したウイルスでしょう。何らかの原因で変化したのが原因かと思われます。そしてその太陽銃。きっと吸血鬼は太陽が苦手なはず。だから消滅したのでしょう。今回はそれがキーアイテムとなるでしょう』

「なるほど・・・」



『それにまだ一つ疑問があります』

「なんだ？言ってみろ？」

『あの電波ウイルス。きっとあれは可能性は100%と言えますんがベースが人でしょ』

「人！？」「」

『はい。遺伝子構造を調べた結果、人の遺伝子が検出されました。恐らく、ノイズウェーブに取り込まれ異常電波を浴びすぎて人の細胞が変異したのでしょう。さらにまだ疑問点が一つ』

「「・・・・」」

スバル達は固唾を呑む。

「人が電波体になるのはいくつか報告があります。オクダマスタジオやスバルの父上、大吾さんが電波体になりました。けど今回は電波体になった上での人の変異・・・でしょう」

「ノイズドカード的な感じ？」

『簡単に言えばそうでしょう。さっき貴方がたが対峙した人型吸血鬼ウイルス。あれは電波体になった上、さらに変異した姿でしょう』

「まったくめんどくさい事になったな・・・・」

暁が呆れた顔で言った。

「とりあえず脱出を再開しましょう!!」

「そうだな!! まずはそれが優先だ!!」

そして二人は上を目指した。

地上では何が起きているのだろうか。

## Auf t a k t | 05 蘇る記憶

「「はあ、はあ、はあ」」

二人の男が息を切らしながら走る。

「もう少しで・・・出口だ・・・!!」

息を切らしながら上を目指すスバルと暁。

視線の先に光が差し込んでいるため、もう少しで出口だと二人は理解していた。

彼らは何故か地下にとじこまれていた。

何故閉じこまれたのかは二人はその記憶がはっきり覚えていない。

そして脱出中、スバルに偶然が偶然を呼び、そして一つの奇跡を起きたのだ。

それが太陽銃、ガン・デル・ソルとの再会。

これは過去に太陽少年ジャンゴという少年から友達になった証として、そして絆の証として貰った特別なカードだ。

太陽銃は太陽を吸収し、その吸収した太陽で弾が撃てるため先程出会った人型吸血鬼ウイルスにそれでなんとか倒せたのだ。

そして最大の特徴は太陽銃についているレンズの部分。

これを取り替える事で属性変換できるのだ。

だがスバルはそれに気付いていない。

彼が完全に太陽銃を使いこなせるようになるのは暫く先である。

「よし地上に出れるぞ!!」

暁は階段の前に扉があったが扉をロックオンソードでぶち壊し光の差し込む階段を上った。

「やっと地上にでれた・・・」

スバルは頭から伝って頬にたれる汗を腕で拭う。

スバルと暁は地上になんとか生還できた。

だがその視界に映ったのは。

「な、なんだこれは・・・」  
空は薄暗かった。

夜でもなければ日食が起きている訳でもない。

空には薄黒い雲が張り巡らされて太陽の光が差し込まなかった。

「夜ですかね?・・・」

スバルが疑問を漏らす。

「いや、夜ではないだろう。恐らくこの謎の黒い雲が光を遮断しているだけだろう」

「なるほど……」

そして今度は回りに目がいく。

回りには無残にも破壊された墓がたくさん。

そして地面には辺りに生えきっている雑草が沢山生えていた。雰囲気はかなり前から使われてないという雰囲気が出ていた。

「ここは廃墟となった墓か……」

暁が言葉を漏らす。

「一体、ここだけなんで……」

スバルはこの場所がなんでこうなっているのかと突然の疑問を出す。

何故なら一部の場所が深く地面がえぐられ、そしてひびがはいっている墓の場所だ。

明らかに誰かが技などを発動した跡だろう。地面はクレーターのようになっていた。

「これは……」

暁はその深いクレーター上の地面を見た。

「相当な大技だな。まるで隕石でも落としたような・・・」

スバルは暁の発した「隕石」という言葉に疑問を持った。

（さてよ・・・隕石・・・空からの隕石・・・を放つ技。地球外の隕石はほとんど大気圏で塵と化すはずだよな・・・。だったらまさか・・・）

スバルは考える。

この大きなクレーター上の地面。

そして隕石がその上に落下しクレーター上の形を作ったのか。

最後にその隕石の技を放つ者と言えば・・・。

「いや・・・まさか・・・彼女・・・じゃないよな・・・」

スバルは躊躇する。

彼女はストリングメテオという全方位攻撃と一箇所集中攻撃ができる技を持っている。

そしてスバルは記憶の断片と断片を拾い集め、そして記憶の引き出しを見ることができた。

「そうだ・・・思い出した・・・、彼女だ・・・僕達を攻撃して地下に封印したのも・・・」

スバルは遂に答えを見つけた。

「スバル、思い出したのか？」

「はい。僕達を襲い、地下に閉じこめたのも、そう彼女、響ミソラです」

スバルは自分の彼女に攻撃されたというのに冷静だった。

「ミソラが？・・・」

「はい・・・完璧に思い出しました。あの時、何があったのかを」

「そうか、言ってみろ」

暁は聞けば自分も思い出すかも知れないと思いスバルに語らせた。

「それは――」

時は一日前に遡る。

場所はここと同じになる。

空は明るく、光が地を明るく照らしていた。

「一体、ミソラはなんでここに？」

スバルと暁は現在と同じ場所にいる。

そしてこんな廃墟にミソラはスバル達を呼びだしたのか疑問だった。

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ

一つの足音がスバル達に近付いてくる。

「誰か来るぞ!!」

スバルと暁は構えた。

現れた者は電波変換したミソラであった。

「ミソラ?なんでここに呼び出したの?てかなんで電波変換してるの」

スバルは現れたミソラに質問した。

「.....」

ミソラはスバルの質問に応答しない。ただその場にただずんでいた。

ミソラは少しだけ右手を上げる。

「まさか!!!?」

暁はいち早く危険を察知した。

そしてミソラはギターを弾き、超音波をスバルへと向けた。

「スバル!!!!!!」

「暁さん!?!」



暁は言葉で言うより体が先に動いた。隣にいたスバルを吹っ飛ばし、自分も回避した。

そして何も無い場所に超音波は飛んでいき、墓に当たって粉々にくだけた。

「ミソラどうしたの？君がそんなことをするなんて？」

スバルはこんなことをしたミソラに質問した。

「ごめんスバル、暁さん……ここで消えてもらおうよ……」

ミソラは再びギターで超音波を飛ばす。

スバルは回避する。

「ミソラ！どうしたんだよ！！君がそんなことをするなんて！？」

「現実を受け入れなよスバル……貴方の目に映っているのは間違はなく本物、響ミソラよ……」

「だから！？なんで君がそんな事を！！？」

「私は貴方達を殺す……。今はその為だけにここに来た」

ミソラはパルスソングで攻撃する。

「スバル！！」

電波変換した暁がミソラとスバルの間に割って入り、攻撃を防いだ。

「暁さん!？」

「スバル、現実を受け入れろ!! あれは間違いなく響ミソラだ!! 周波数も計測してみたが全くの同じだ!!」

「けど・・・だからってミソラを・・・」

「・・・・・・・・」

「倒す事は出来ない・・・彼女を切ることも・・・これは夢だよきつと・・・・・・・・」

スバルは電波変換が出来なかった。

彼は優しい心を持っている。

だから同じ仲間を、そして家族を危めることは出来なかったのだ。

「この野郎!!!」

暁は右ストレートでスバルの左頬を思い切り殴った。

スバルは大人の力に耐え切れず吹っ飛ばされる。

「何が戦えないだ!？何が倒すことが出来ないだ!!! 今、起きていることは現実だ!!! 家族だから戦えない? ミソラが俺達を攻撃している? 殺しにくる? 本当に彼女がそんな事をするとお前は思っているのか!？ふざけるな!!! お前らの絆はそんな安いもんなのか!？こういうのがあったら現実から目を背けるんじゃない、現実に向き合え!!! そして彼女の目を覚まさせろ!!! お前が! お前自身

が！お前の手で！！」

暁は大声で叫びスバルを叱咤した。

「暁さん・・・分かった、僕やるよ・・・現実から僕は目を背けてしまっていた。ミソラがそんな事をするはずないと・・・。けどこれは現実。だから僕はミソラの大切な人の一人として戦う！目を目覚めさせるために！！」

そういうスバルは口から垂れる赤い血を拭い立ち上がった。

「トランスコード！！シューティング・スター・ロックマン！！」

スバルは青い光に包まれ、そして世界を守った英雄、ロックマンが現れた。

そしてスバルはミソラに向く。

「ミソラ・・・こんなことはやめよう・・・。そしてまた一緒にギターを弾こうよ・・・」

「私は過去を忘れた・・・。ただ今は・・・貴方達を殺す為、そして箱になるために存在している・・・」

「箱？」

暁は疑問に思った。

「だったら僕が過去を思い出させてやる！！スターソード！！Σブレード！δブレード！」

スバルは毎度お馴染み、スターソードを召喚した。

「貴方が私を斬れるかしら？」  
ミソラは構える。

「僕は君を救う・・・君の側にいたいんだ！！君とまたギターを弾きたいんだ！！」

「だったらその思い見せてみなさい！！」

「はあぁっ！！！！」

スバルは急接近する。

右手のスターソードでミソラを斬る。

だがミソラはギターで防ぐ。

「まだまだぁ！！」

スバルには左手があった。

右手で防がれても左手で攻撃できる。

「あまい！！！！」

ミソラは足を使い、スバルの腹を蹴った。

「うわああああ！！！！！！」

スバルは吹っ飛ばされる。

「スバル！！」

暁は心配して駆け寄る。

「くっ、まだまだあ！！！！」

ミソラに接近する。剣の届く範囲に到達した直後。

「流星！銀河！十文字切り！！」

スバルは剣で十の文字を描くように切った。

「そこ！」

ミソラはスバルの必殺の癖を知っていたためその隙を突き、攻撃しようとして接近した。

「狙い通り！！」

スバルはフェイントしたのだ。

スバルから見ればミソラは曖昧に突っ込んでいる。

スバルはチャンスを生かした。

「スターライザーソード！！！！」

スバルの二対のスターソードを合わせて超極太の超長剣を作り、ミソラに切りかかった。

「うわああああ!!!」

ミソラにクリーンヒットする。

そしてミソラはスターライザーソードを喰らった為、膝を地面につく。

「ミソラ・・・こんなことをしても無駄だよ・・・さあ、帰ろう・・・」

「・・・・・・」

ミソラは黙った。

「・・・リミッタ解除・・・」

ミソラは小さい声で呟いた。

「ミソラ？」

彼女が顔を上げる。

彼女の目にはエメラルドグリーンの色をした澄んだ色じゃなく赤く染まった目をしていた。

「抹殺開始・・・」

ミソラは音速の速度でスバルの後ろに回り込む。

「なっ!?!」

「死ね! スバル! !」

彼女の声じゃなかった。

もはや誰の声が分からなかった。

「マシンガンストリング! ! !」

「ぐああああ! ! ! !」

弦がスバルを捕らえ攻撃する。

「スバル! ! !」

暁はロックオンソードでミソラに切り掛かる。

だがそこにミソラの姿はなかった。

あまりの速さで残像が出たのだろう。

「なっ!?!」

「貴方達はここで死になさい! ! ! 我が作りしストリングメテオでな  
! ! !」

ミソラは高くジャンプしてスバル達にストリングメテオを容赦なく  
たたき付けた。

「「うわああああああ! ! ! ! ! ! !」」

ストリングメテオがスバル達の近くで爆発し、炸裂した。

そして煙の先にはクレーター上に深くえぐられた地面の上にいるスバルと暁。

彼らはもう虫の息状態だった。

「・・・・・・・・」

ミソラは倒れてるスバルと暁に近づく。

「ミソラ・・・なんでこんなことを・・・」

「!？」

ミソラは一瞬戸惑う。

（私は・・・・・・・・）

ミソラはそして彼らを地下に封印した。

（やっぱり・・・殺せない・・・・・・・・）

「スバル・・・暁さん・・・」

ミソラは姿を闇にくらしました。



そして今――

「・・・・・・・・だったはず・・・・・・・・」

「まさかミソラが・・・」

「当に現実には起きたんだ。とりあえず日本に戻ってみるぞ」

「はい!!」

こうしてスバル達は日本に戻っていった。

## Auf t a k t | 06 永遠のライバル

スバルと暁が地下から脱出して三日が経過した。

スバルたちは日本へ無事帰還。どうにか母国へ帰ることができたのだ。

その三日間の間には何があったのか――

今から時は三日前に遡る。

場所はスカイウェーブ日本海上空。

スバルと暁は電波変換した状態で移動していた。

「ここは謎の黒い雲に汚染されてないみたいですね」

スバルがそういった。

「ああ、そうだな。下手したらまだここだけでいずれここにも浸食されるかもしれない」

そう、スバルたちがいる現在地、日本海上空。

ここはまだ海上に光がさしていた。

空を見れば、地を明るく照らす太陽が見えたのだ。

スバルたちがいた欧州、何故かイタリアでは空は黒い雲に汚染されて地に光をともしなかった。

もしかしたらあそこが最初に闇に汚染されているだけで後から世界全体が汚染されるかもしれないのだ。

「スピードあげるぞ!!」

「了解!!」

スバルと暁は高速で移動していった。

そして場所はお馴染み、WAXAとなる。

部屋はもちろん対策会議をする部屋、ブリーフィングルームだった。

「・・・・・・」

「・・・・・・なわけで・・」

暁とスバルが現地で起きた状況を教えている。

「・・・・・・というわけなんです」

「そうか・・あのミソラ君が・・」

WAXAのリーダー、長官が困った声をあげる。

「それで暁君、君たちがいない間で世界にいる人類に変革が訪れたというのはご存知かな？」

「はい。人がノイズウェーブらしきものに巻き込まれ、そして電波体になり、さらに謎の影響で肉体が変化し吸血鬼化してしまうことですよね？」

「全くを持ってその通りだ。実際、その発見が最初に見られたのが欧州のほうだ」

「それは僕たちが戦いました。最初は何の攻撃も効かず、対処法がなくて困りましたが、この太陽銃のおかげで吸血鬼ウイルスを倒すことができました」

「その太陽銃とは？」

「これは……」

スバルは説明した。

「なるほど……。つまりそれは太陽を吸収することで太陽の弾が放てると？」

「はい。そして、それが吸血鬼ウイルスを倒す唯一の方法」

「その太陽銃は我々にとっては大きいな……。やはり今回も君に頼むしかないのか……」

長官は自らの無力さを悔やむ。

「・・・」

「俺もやる・・・いつもスバルだけに任せる訳にいかないからな」

「暁さん・・・」

「ツカサ君たちは？」

スバルが大切な親友たちの安否が急に心配になって尋ねる。

「今は政府たちがこの世界の非常事態を出して非常事態宣言を発令して、なるべく外出禁止としている。

今は彼らは家にいると思う」

「そうですか」

「ちよっというですか？」

突然、暁がいう。そしてみんなの視線を浴びる暁。

「俺がミソラと戦っていて疑問に思ったことが2つ・・・いや3つある・・・」

「「「「・・・」」」」

ブリーフィングルームにいるWAXA関係者が全員黙り込む。

「まず一つ、スバルとミソラが戦っているときに発した言葉。私は箱になるためだけに存在している・・・といった。これはなんなのか？と俺は疑問に思う。箱とは何なのか？ミソラとその箱が何の関係があるのか？と思った」

「確かにミソラはそう言っていましたね・・・」

「しかし、その箱になるためって・・・あいつはいれものか？」  
大吾が疑問を漏らす。

「わからない・・・だが何か大きな影がミソラに関係しているのは間違いないだろう」

「そして二つ目、何故スバルは太陽銃を使っていないのに吸血鬼化していたミソラに通常攻撃が効いたのか・・・これが最大の疑問点だ・・・」

「まだ完全な吸血鬼化となっていなかったのでは？」

「その可能性は十分にありうる。それが大きな問題だ。彼女がすでに吸血鬼となってしまうとする。問題はここからだ。どうやって彼女を救出し、どうやって人間に戻すか？だ・・・」

「・・・」

「手段が無かったら殺す・・・ことしかない・・・ということですか？」

「それが最悪の事態を考えての手段だ。お前はミソラを刺せるか？ スバル……」

「わからない……けど……彼女が吸血鬼になってもミソラはミソラだ!!」

「フッ……お前ならやっぱりそういうか……」

暁は涼しい顔していった。

「そして3つ目……彼女は今、どこで、何をしているのかだ。見ての通り俺達にはミソラに対する情報が少なすぎる」

「確かに……あっち側にはミソラがいるためこちらは情報が筒抜けと言ってもいいかも知れないですね」

「どこから探っていけば……」

大吾が困ったように言う。

「あの……確信ではないんですが、欧州付近から探っていくのはどうですか？ 実際に世界で汚染されてるのは欧州の一部の国だけ。きっとそこに何かの手がかりがあると思います……」

「俺もスバルなその意見に賛成だ。何もしないよりはましだろう。下手したら今後に役立つ痕跡やデータが散らばっているかもしれない……」

「確かにそうだな」

「俺は言いたいのはそれだけだ。そして長官」

「なんだ暁？」

「世界が闇に汚染されるリミットを計って下さい。後、彼らのコンタクトをお願いします」

「分かった」

「彼ら？」

スバルが疑問に思った。

「彼らとは一体何ですか暁さん？」

「後で分かるさ」

「はい・・・」

スバルは暁からちゃんとした答えが聞けなかった為、彼らというのが一体誰なのか気になった。

「よし、これにて解散だ。各自、何があってもいいように臨戦態勢はとっておけ」

暁がシメの言葉をいい、会議を解散した。



「父さん、帰ろうか」

「ああ・・・」

そういう星河親子はWAXAを出て、ウェーブライナーに乗車し、自分達の住む町、コダマタウンに来た。

そしてコダマタウン。

ウェーブライナから下車した二人はいつもの町の様子を見る。いつもとは違う町の雰囲気。

ウェーブライナ付近にある綺麗な澄んだ川の水。

その川には普段小さな子供たちが水遊びをしているのが見受けられたり、今の季節は冬。公園で雪遊びをしている姿も必ずって言う程見受けられるが、政府が非常事態宣言を発令している為、遊んでいる子供たちの姿はなかった。

歩道を歩く一般人や道路を走る車は慌ただしく早足で歩いたり、走ったりしていた。

きつと家に籠っている人達は何もないように祈っているだろう。

きつと皆そう思っているはずだ。

学校も臨時休校になり、全ての子供たちは家にいた。

「急ごう、父さん」

「ああ、そうだな」

二人は家で一人にさせている大切な家族の事が心配になり早足で歩いた。

「「ただいま〜」」

「お帰り、皆。あれ？ミソラは？」

あかねはスバル達の帰りを待ち望んでいたかのように早く来た。

きつと一人で不安になっていたのだろう。

あかねはミソラがいない事に疑問に思った。

そして――

「ミソラは――」

スバルは全て説明した。

彼女とのつらい別れを、そして世界滅亡の危機の事を・・・。

「てな訳なんだ・・・」

「・・・そ・・・うなんだ・・・」

「ミソラが敵に・・・。けど私思った事がある。なんでミソラはス

バルと暁さんを殺す気でいたのに殺さなかったのかしら・・・」

「・・・・・・・・」

スバルは黙ったままだった。

「彼女はまだ完璧に過去を忘れた・・・ということにはならないわね・  
・・」

「そうだよね・・・」

「だったらチャンスは一度よ！！ミソラをもう一度、正しい方向へと導きなさい！！」

スバルはあかねに激励の言葉を受けてしまった。

「分かった・・・・・・・・難しいかもしれないけど・・・・友達として、同じ家族として彼女を救ってみせる！！」

そういうスバルは例え彼女がどんな状態であろうとも救う気でいたのだった。

それが三日前に起きた出来事である。

そして現在・・・

場所はWAXA付近の山岳地帯。

ここに三人のあの人がいた。

ザッザッザッザッ・

足音がする。

WAXAの入口前ではスバルと暁が待機していた。

「暁さん、一体誰が来るんですか？」

「まあ、いいか待ってろ。お！？来たな？」

「一体誰が・・・ってあゝゝゝ！！！！」

スバルが指を指す先に二人の影があった。

一人は長身の男。

金色の髪をしていて、隣には死神らしき電波体。

どうやらその電波体が彼の相棒だろう。

その電波体は片手には鎌を持っていた。

彼の最大の特徴は電波変換した時の接近戦での無類の強さである。

鎌を持ち、接近して戦えば彼の右に出るものは少ない。いわば近接のエキスパートである。

「レ、レ、レイ！？」

スバルは声を半ば裏返しながら言った。

「よう、久しぶりだなスバル。少しは身長伸びたみたいだな」  
「そういいレイとスバルは背比べをした。」

「私もいますわよ」

もう一人の人は長く黒い長髪をした女性がいた。癖のない真つすぐな髪にその自身に満ち溢れている瞳。

何よりも彼女は清楚可憐な為、周囲からは一目置かれていた。そして彼女の相棒の電波体。

風貌は天使のような風貌をしていた。

電波変換することで弓攻撃を主体する、遠距離戦闘を主体とする。場の状況判断が早くたまに指揮官的存在になることもある。

「リサさんまで！？ 暁さん、レイとリサさんと呼ぶのが目的だったんですか！？」

「そうだ。だがまだ一人いる」

「え？・・・」

「俺だ・・・」

直後、スバルの目の前に永遠のライバル、ムーの生き残りの狂戦士ソロが現れた。

ソロと呼ばれた男。

白い髪と顔に描かれた謎の紋章。そして古代のスターキャリアーを使う事により独自電波変換が可能である。

かつてスバルに何度も戦いを挑んだ男である。

過去に絆を完全に拒絶することで新たな力を手に入れれる孤高のかげらというのを使い、無類の強さを手に入れた。

だがそれはスバルの絆とオーパーツの力により負けてしまっている。そのムー大陸事件以降、彼は一人で絆というのを拒否しながら生き

てきた。

彼には謎の相棒、ラプラスという未知の生命体がいる  
そして彼が今、スバルの目の前に突然現れた。

「一体、何なんだ！ソロ！？」

「お前ら・俺の力を借りたいんだってな・・・」

「ああ、そうだ」

暁はそういった。

「だったら俺に勝ってみろ。スバルが俺に勝てば力を貸してやる。  
勝てなかったらそこまでだ」

「ちょっと待って？」

スバルが突然口を開いた。

「なんで僕なの？」

「悪いスバル！！！！ここはお前に任せるわ！」

暁が申し訳なさそうにいう。

「ええええええええ！！！！？・・・まあいいけどさ・・・」

「済まないスバル・・・」

「いいですよ・・・久々ソロの腕の上達が見れるか楽しみですから・

・・」

「・・・」

暁は黙ったままだった。

そしてスバルはソロに向き、

「トランスコード！！シューティング・スター・ロックマン！！」

「勝負だ！！ソロ！！」

「いい覚悟だ・・・」

そういうソロは電波変換をした。

永遠のライバルの戦いが再び始まろうとしていた。

## Auf t a k t | 07 ロックマンVSブライ

ここに戦場で戦う男が二人。

今から男と男の真剣勝負が始まろうとしていた。

「いざ尋常に!!」

「勝負!!」

「スターソード!! Σブレード!! δブレード!!」

スバルは二対の双剣を召喚した。

「行くぞ!!」

「さあ、来い・・・」

ソロはラプラスソードを展開せずに待機していた。

「遠慮なく行くぞ!!!!!!」

二人の距離が近付く。

「であああああ!!!!」

スバルが左手に持っているスターソードを振り上げた。

そして思い切りソロに向かって振り下ろす。



「・・・・・・・・」

だがソロは無言で安々と後ろに回避する。

「追い撃ち！ロックバスター！！」

剣を捨て、ロックバスターで攻撃した。

弾丸は3発、ソロに向かって一直線に向かう。

「ハアッ！！！」

ソロは電波障壁を使い弾丸を弾き落とす。

ソロが使う電波障壁。過去にエンプティイと言う男から、絆を拒絶することで自分に近付くあらゆる物を弾き返す電波障壁という無敵の力を手に入れた。

だがその絆を拒絶する無敵の力はスバルの信頼する絆とオーパーツの力により破られてしまった。

それ以降、電波障壁は不完全となり、常に自分に近付くあらゆる物を弾き返したり、無効化できなくなった。常に自分の身にまといなくなったためである。

「電波障壁復活までに時間がかかるはずだ！！！」

スバルは一気に接近した。

「でああああ!!!」

接近したスバルは再びスターソードを振り上げる。

ソロは回避しようとしなない。その場から動こうともしない。

スターソードがソロに近付く。

完全にソロにヒットする瞬間――

ピッ!!

上からスバルによって振り下ろされるスターソードをソロは右手の人差し指と中指で白羽どりした。

「なっ!?!」

「この程度か・・・、ブライナックル!!!!」

ソロはスバルのスターソードを指二本で折り、そして一気に接近し、ブライナックルでスバルに襲い掛かる。右手、左手、右足、左足と四連発の打撃技をスバルに繰り出した。

「ぐっ!?!」

右手、左手と二方向から襲い掛かる攻撃は手でどうにか止められた。

「ぐあああああ!!!!」

だが左足、右足の攻撃は止められなかった。

下から上へと繰り出されるアッパー攻撃の左足右足攻撃でスバルは

上へと吹っ飛ばされる。

「はああああ、ブライバースト!!!」

上へと吹っ飛ばされた無防備なスバルを追い撃ちするソロはスバルが吹っ飛ばされる高さで描く線を予想し、ジャンプして先回りして、全身に力を溜めて力の衝撃波をスバルに向けて地面へと叩きこんだ。

深くえぐられた地面の上に叩きつけられたスバル。

「貴様はこの程度か!? だったら貴様の息の根を止めてやる! ブライソード!!!」

ソロはソードを召喚し、ジャンプして高く舞い上がった後、落下速度とソードを上から下へと振り下ろす速度を使いスバルへと申し分のない剣の威力となりスバルへと襲い掛かる。

「うう・・・」

全身が傷まみれのスバル。

『スバル! 来るぞ!!!』

「わ、分かって・・・」

スバルは完全に言葉をいいきる前に回避に徹していた。

横に大きく飛んだスバル。そして大きくバックステップをして距離をとる。

ソロのブライソードが空を切り、大きく振り下ろされ、地面とぶつかった場所は大きく凹んでいた。

「貴様はその程度か!？」

「チツ……」

スバルは舌打ちしながら、再び距離をとる。

「ノイズチェンジ!リブラノイズ!！」

スバルはリブラノイズに変身した。

リブラノイズはトリッキーなバトルスタイルを展開するノイズチェンジだ。

カード強化や、カードリカバリーなど全体的な能力を強化する能力もあった。

「再びいかせてもらう!! エアスプレッドX!!」

スバルはソロの近くにいた地面に向かって3発撃つ。

地面に当たって誘発し、ソロの電波障壁を打ち消し、そしてダメージを与える。

だがエアスプレッドは比較はかなりダメージの低いカードだ。ソロにとってはハエが止まったように感じるだろう。

「まだまだあ!!!! NFB!

メテオライトバレッジ!!」

スバルの左腕から放たれた無数の大型エネルギー弾がソロへと降り懸かる。

エネルギー弾が閃光し、炸裂していった。

煙の中からはやはり何事もなかったかのようにたたずんでいる。

「なっ!?!」

スバルはNFBを叩きこんだのに何事もなかったかのようにたたずんでいたソロを見て驚いてしまった。

「貴様はその程度か?あの時、俺に見せた電波障壁を凌駕した強さを・・・そして全てを捨てて力だけを求めた俺を超えた力を俺に再び示して見せろ!!少なくとも今の貴様には動きに迷いが見える。だったら俺が貴様を窮地に追い込み、貴様を本気にさせてやる!!」

ソロは相棒、ラプラスを召喚し、剣へと変化させた。

ラプラスソード、これは剣筋が太く、そして綺麗な曲線を描く太刀。

普段ならそのまま扱うソロだが今のソロは違った。

「ラプラスブレード!!」

ソロはラプラスブレードと叫び、剣の幅が太い剣を細くして重さが軽くなり、長さが増した太刀に変えた。

簡単に表現すれば少し長くなった日本刀だろう。

剣が太陽の光を反射し、見るからに剣の切れ味のよさの印象を持たせる。

「新技か!？」

スバルは見たこともない行動をするソロを見てスバルはもつと全身に緊張を走らせる。

「行くぞ!!七閃!!」

ソロは七閃と叫んだ。

直後、ソロは剣を動かしていないのに音速の速さの衝撃波がスバルへと襲い掛かる。

地面を深くえぐりながら衝撃波がスバルに襲い掛かる。

「ぐああああ!!!!うぐっ、一体、剣を動かしていないのに……なんで!？」

「実際は剣を動かしている。貴様は剣の早さに目がついていけないだろう」

ソロは剣を動かしていると言った。

だがスバルの目には何事もなかったかのように映っていたのだ。

「なるほど……剣を音速を超える速度で振り回すことで、起こる

衝撃波か・・・」

二人の戦いをみている暁がそういう。

「人の反応速度を超えなきゃ回避できませんね。それにしても剣の動きが見えない。お前はどうか対応する？ スバル」

レイはそういうスバルを見た。

「くっ・・・実際には見えない速度で剣を振っている。それを回避するのは・・・」

「七閃！！！」

再びソロがラプラスブレードの柄の部分の短くもって全く見えない剣捌きを繰り出した。

「バトルカード！ オーラ！！」

スバルは防御に徹した。

「無駄だ！！」

ラプラスブレードから放たれた衝撃波はオーラ越しにスバルにダメージを与えた。

衝撃波がオーラを越し、スバルの肩に直撃し、スバルの皮膚の切れた肩から血が出血する。

「ぐっ！」

スバルはオーラを身に纏い、吹っ飛ばされないように構えた。

「まだ本気を出さないか・・・」

（今の奴の剣の持ち方・・・柄を短く持っていた。まさか・・・衝撃波を放つ際に柄を短く持つのか！？今の所、打開策はない・・・だったらこれにかけるしか・・・）

スバルはオーラを構えながら一瞬の隙を捉えに感覚を限界まで研ぎ澄ませる。

「バトルカード！！ウォリアーフラッド！！」

ウォリアーフラッドは肉体強化などの反面、体が蝕れる両刃のカードだ。

サアアアとスバルの心は静かになり、感覚が研ぎ澄まされる。

「消えろ！！七閃！！」

ソロは剣の柄を短く持った瞬間。

「今だ！！」

スバルは地面を強く蹴ってかなり早い速度で接近した。

その直後、ソロのラプラスブレードから放たれた衝撃波がスバルに襲い掛かる。

「はあっ！！」

スバルは綺麗な弧を描くようにジャンプして回避した。そしてスバルはスターソードで切り込もうとする。



「なっ!?!」

「行くぞ!! 流星! 銀河! 十文字斬り!!!!」

スバルは空中で技を放った。

「ぐあああああ!!!!」

ソロは十文字斬りをまともに喰らう。

「どうだ!!」

「ほう。あの短時間で対処法を見つけるとは」

「素晴らしい判断センスと洞察力……。そして野生の感? というのですかね?」

二人の戦いを見ていた三人がそう思っていた。

「ハッハッハッハッハッハ!!!! さすがだな!! 星河スバル!! これで遠慮はしない。貴様に俺の全てを叩き込ませてやる!!!!」

「来いソロ!! 今度こそ決着を!! そして僕も自分の持つ全てをお前に叩きつけてやる!!!!」

そういい一人はスターソードを、一人はラプラスブレードを構えて地面を強く蹴って最高のライバル、そして永遠のライバルに接近し

た。

自分自身の限界を己を超えて、決着をつけるために――

## Auf t a k t | 08 限界突破!

「はああああ!!!」

「であああああ!!!」

一人は絆を大切にし、誰かの思いを、思いやる心を持った男ともう一人は絆や仲間を拒絶する、他人と関わらない、戦うただけに生きている男が永遠のライバルと決着をつけるために戦っていた。

ガギインガギインと剣と剣がぶつかり辺りに甲高い音と火花を散らす。

「そこだ!!!」

スバルが右手のスターソードで突きをする。

「フン!!!」

ソロはラプラスブレードでガードする。

「まだまだあ!!!」

スバルは右手が弾かれても左手でカバーした。

「そこだあ!!!」

スバルは左手のスターソードで振り下ろしをする。

「あまい!!」

ソロはラプラスブレードを上手く使った。

ソロは現在、ラプラスブレードでスバルの右手のスターソードを防いでいる。

上からくるスターソードを下へと逸らすようにラプラスブレードを急に下げた。

すると右手にも力が入っていたスターソードがソロのラプラスブレードに引き込まれた。

「おわっ!?!」

スバルは右手に入っていたスターソードが何もない方向へ力が走ってしまい態勢が不安定になった。

「そこだ!! グラウンドブレイクソード!!」

ソロはラプラスソードに変化させてラプラスソードを地面にたたき付けた。

無数の衝撃波と完璧、隙丸出しのスバルへと地面を隆起させながら襲い掛かる。

「バトルカード!! インビジブル!!」

態勢を崩しながらもスバルはインビジブル状態になりソロの放ったグラウンドブレイクソードの衝撃波は何もない空間へと進行し、そして壁に激突し、破壊した。

「何て威力だ・・・」

スバルはソロのグラウンドブレイクソードの威力を見て、思わず固唾を飲む。

そして辺りは隆起した地面。

この地形を生かした戦いが今後、勝敗に左右するだろう。

「ロックバスター！！」

インビジブル状態のスバルは突如、ロックバスターを隆起した地面に撃って、地面を平坦にした。

平坦とした同時に砂煙が舞い上がり、辺りの視界を悪くする。

「何のつもりだ！？」

「このつもりだ！！」

インビジブル状態のスバルはライメイザンを構えて、ソロへと切り掛かった。

「ぐああああああ！！」

「まだまだあ！！！！」

スバルは舞い上がった砂煙の中にいるソロに集中攻撃をする。  
何故、視界が悪い状況なのに彼、スバルは居所が掴めるのか。

それはソロの所持する大きなラプラスソードが砂煙の中で影が出来てそれがスバルには見えるのだ。

それを頼りにしたスバルはライメイザンを構えて、ステップ、体重移動を使い高速移動しながら斬る。

そしてスバルはインビジブル状態のため影は浮かび上がらない。

そのためソロは反撃できなかった。

だが現実には上手くない。

スバルは高速移動しているせいで空気を裂く音が聞こえる。

（右、正面、真後ろ・・・）

ソロはスバルが斬りこんでくる方向を身を削って予想していた。右、正面、真後ろときたら、次は・・・

「左だ！！！」

高速移動をしているスバルが出す空気を切り裂く音を頼りにラプラスソードを左へ振り回した。

「ふっ！！！」

スバルは無防備な腹に、ソロのラプラスソードが叩き込まれスバル

は高く宙に吹っ飛ばされた。

「な、なんだと!?!」

スバルは宙に吹っ飛ばされている時、何が起きたか分からなかった。

「今度はこちらだ、ラプラスブレード!!!三閃!!!」

ソロは空中で無防備でいるスバルに接近した。

「でああっ!!!」

ソロはアッパー攻撃をして真上にスバルを打ち上げる。

「うぐっ!?!? 一体、何のつもりだ!?!」

スバルは上に吹っ飛ばされたせいで体が空中回転し、体をコントロール出来ないでいた。

「であああっ!!!」

ソロは空中でまずスバルを右から切り込んだ。

スバルは切り込まれたせいで回転が増す。

次の瞬間、ソロは反転して左下から切り込む。その後も右上、左、右下、左下とスバルを地面に落とさず空中で連続攻撃した。そして留めの上からの攻撃でスバルを地面へと叩き込んだ。

「ぐあああああ!!!」

スバルは8撃ぐらい空中で叩き込まれ傷だらけだった。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

スバルはどうか立ち上がったが地面に膝を着く。

「どうした？もうおしまいかな？」

ソロはラプラスブレードを降ろした。

（ここで諦めたら、前に進めない……。世界にも向き合えない・・・。ミソラにも向き合えない……。そして頼れるライバルを仲間にするために……。僕はまだやる！自分の全てを出し尽くしてない！この身を燃やし尽くしてない！！限界を超えるんだ！！）  
そしてスバルはどうか立ち上がる。

「フッ・・・限界を超えるか・・・」

ソロは涼しい笑みをこぼしてラプラスブレードを再び構えた。

「まだだ！僕にはまだやれることがまだまだある！！」

スバルはどうかして立っている状態だ。もはや一発喰らったら、一撃でノックアウトだろう。

だがスバルの目にはまだ光があった。

一番の親友を救うために。

最高、永遠のライバルにベストパフォーマンスを出し尽くすこと。



そして限界を超えるために。

そのためにスバルはふらついても根性で立ち上がる。

「さすがだな。奴はまだこれっぽっちも諦めてない。ただ自分の成すべき事を成すという事しかないだろう」

「レベルが違うな……。俺とあいつの背負っているのは恐らく、一段……。いや五段ぐらい違うかもな……」

暁とレイが極限状態に近いスバルに咄然とする。

「はあ、はあ、はあ……。ノイズドライブ！！オーバードライブシステム起動！！！」

スバルは半ば死体の状態だがオーバードライブをした。

高濃度に圧縮されたノイズがスバルに力を与える。

そしてスバルは体が薄く青く光り始める。

「まだだ……。並行使用……。擬似メテオサーバー、エースPGM、Lv10ダウンロード……。ファイナライズ！！！」

スバルはノイズに包まれた。現れた姿はブラックエース状態のスバルだった。

オーバードライブとファイナライズ状態のスバルだが、肉体がそれにずっと耐えられる訳ではないだろう。

「ブラックエンドソード!!!!」

スバルはふらつきながらブラックエンドギャラクシー使用時に召喚するブラックエンドソードを召喚した。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

限界が近いのかかなり呼吸がゆっくりで深い。

「ブラック・・・エンド・・・ギャラクシー・・・」

そういい、スバルは走った。

ソロは構える。

走るスバル、その直後――

スバルの姿がソロの視界から突如消えた。

「なっ!？」

直後、何かがソロの横を通りすぎる。

その後、ソロに爆発が起きる。

わずか一瞬でブラックエンドギャラクシーで切り込んだのだ。  
闇に包めなかったが、ブラックエンドソードの一撃はソロに確実に  
大ダメージを与えただろう。

「ぐあああああ!!!!!!」

「うぐっ!!」

ソロはブラックエンドギャラクシーを喰らい、膝を地面に着く。

スバルは反動でオーバードライブとファイナライズが強制解除される。

「勝負あったか!？」

暁がそういう。

「いや、まだです!!」

リサが制した。

二人は体をかなり震えさせながら立ち上がる。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

二人はどうか立ち上がり、それぞれの目標対象に向く。

「何て奴らだ。一体、体のどこにそんな立ち上がる体力が・・・」

「彼らはもう限界です!!」

リサはそういう。

「いや、まだだ。彼らは戦うという運命に結ばれた関係。きっとあいつらは俺らがやめろと言っても無視するだろう。お互いが背負っているものが違くとも、唯一一つだけ二人が背負っている同じのがある」

「それは？・・・」

「決着だ・・・。彼らは今まで何度も戦った。けど完璧という決着がなかった。だからこの場で決めるつもりなのだろう・・・」

「・・・・・・」

レイとリサは無言だった。

「決着を・・・。そして限界を超えるんだ・・・」

「奴との決着を・・・。そして奴を倒し、ムーメタルを奪還し、俺が最強を、極みを目指す！！」

彼らがそういう運命になったのも、全てはコダマタウンのファーストコンタクトがきっかけだ。

それ以来も、ロップンドーヒルズ、バミューダラビリンス、コダマ小学校でスバルに相手した。

そして、今。

幾度もライバルと戦い、そして今度こそ限界という境地の中で正真正銘の決着がつかうとしていた。

「スターソード！！Σブレード！！」

スバルは片方しか召喚できなかった。

「ラプラスソード！！」

ソロはラプラスソードに変化する。

そして二人は最後の一撃を叩き込ませるために集中する。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人の極度の集中で石が震える。

覇気がでているせいだろう。

「この剣に特別強い思いを乗せる！！全てを切り裂き、俺に勝利を掴ませろ！！」

そしてソロは剣に思いを乗せる。

「僕は負けない！！変わるために、勝つために！！そして僕はミソラを救うために！！」

スバルも剣に思いを乗せた。

「うおおおおおおお！！！！」

「はああああああ！！！！一閃！！」

思いを乗せた一撃を目標を倒す為に接近する。

そして、スターソードとラプラスブレードがぶつかる。

大きな音ともに火花が散る。

鏝ぜり合いの間々、移動する二人。

再びスバルはスターソードを、ソロはラプラスソードを振る。  
だが攻撃すれば防御された。

それがお互いに続いた。

「そこだああああ！！！！」

ソロはラプラスソードでスバルのスターソードを吹き飛ばす。

「とどめだああああ！！！！」

ソロは思い切りラプラスソードを振り上げスバルに切り掛かる。

「まだまだあ！！！！」

スバルはラプラスソードを白羽どりした。

「なんだと！！！！？」

その後、スバルは掴んだラプラスソードを吹っ飛ばし、ソロの手元から離させた。

「これが僕の戦いだ!!!!!!」

スバルは思いを込めた右手でソロを思い切り殴った。

そしてスバルの目に映ったのは倒れているソロの姿。

それ以降、スバルは何かあったのか覚えてなかった。

## Auf t a k t | 08 限界突破! (後書き)

説明不十分の為、追加です。

ソロの新技、一閃、三閃、七閃

一閃…ラプラスソード時に使用可能。高速の斬撃を繰り出します。

三閃…ラプラスブレード時に使用可能。足で空中に吹っ飛ばし、四方八方からの斬撃攻撃を繰り出す。特徴は地面に落とさず8連打すること。

七閃…ラプラスブレード時使用可能。かなり早い剣の速度で、衝撃波を起こす。

まあこんなもんです。

どうでしたか!?

感想待ってます。



## Auf t a k t | 09 部隊結成!

「う・・・・・・・・」

一人の少年が目覚めた。

「ここは・・・・？」

少年はベットから起き上がって、辺りを見回す。周りは至って普通の部屋。ただスバルの枕元付近には、医療器具とかが置かれていた。

「ここは、WAXAの部屋だぜ」

一人の青年が部屋に入ってきた。

「暁さん？」

「よう、泥のように寝たな。あれから二日間ぶっ続けで寝てたんだぞ」

「二日間も!？」

「とりあえず起きれるか? ソロはお前の一日前に目覚めた。お前が今、起きたことで全員そろった。今すぐ会議室にきてくれないか？」

「あ、は、はい!！」

そういい、スバルはいつも着ている私服に着替えた。

そしてスバルは着替えた後、部屋の戸をくぐり、会議室へと向かった。

「ウォーロック、この二日間に何か進展あった？」

『いや何も進展はない。今は沈黙が続いてるだけだ』

「そうか……」

そう、スバルは頼れる相棒と話をしながら、歩いていた。

そして会議室に到着する。

「よし、スバルが来たな」

部屋の中には、暁、レイ、リサ、そしてソロがいた。

「あれ？ソロ、なんでいるの？」

スバルは疑問に思った。

「お前、俺の話聞いてなかったのか？」

暁が少々、しかめっ面で言う。

「お前は俺との勝負に勝った。だから今回だけ特別に力を貸してやる。だが覚えとけ。いつ俺がお前らに牙をむくわからないということ……」

ソロはそう言った。

「心得た。それは承知しておこう」

暁はそう言った。

「さて、メンバーもそろったことだし、はじめませんか？ 暁さん」  
リサが場の空気を統一させようとする。

「そうだな。とりあえず諸君。君たちがここに呼ばれたわけがわかっているな？」

「ミソラ救出の遊撃隊結成ですよね？」

スバルはわかりきった回答を言う。

「ああ、そうだ。今回はSSクラスの危険が伴うだろう。だから地球全体で電波変換ができる者で十分に戦えるものをここに5人厳選した」

暁は5人といった。

「え？ ツカサ君や、ジャックは、ゴンタは遊撃隊に加えないんですか？」

スバルは親友たち、電波変換できる仲間を何故加えないのかを疑問に思い、質問した。

「今回も十分に危険すぎる。特に突然変異という異常現象が起きて

いるからな。もしかしたら、人型吸血鬼ウイルスに攻撃されて、感染するかもしれない。その危険性を減らすためだ」

「つまり、彼らは足手まとい・・・ということですか？・・・」

「そうとは言っていない。彼らは彼らたちにしっかりと役割を与えるさ。日本を守るという使命をな・・・」

「そうですか・・・」

スバルは残念そうに言う。当たり前だろう。何度も境地を潜り抜けた、背中を預けた仲間だ。今回は彼らと一緒に戦えないかと思うと残念に思ったスバルであった。

「とりあえず、ここにWAXA新遊撃隊を結成する。役割はここで決めてある。もしかしたら相手は化け物かもしれないからな。その時の前衛と後衛の役割を決めてある」

「まずレイとソロで前衛だ。お前らには前線に出て隙を作ってもらおう。行けると思ったら攻撃しろ。だが今回は感染という大きな問題がある。確実に行けると思ったら攻撃だ。そして深追いはするな。一撃離脱をメインにしろ。いいな？」

「了解・・・」

「・・・」

「スバル、お前は中盤で牽制と前線の支援。そして前線と同じように一撃離脱攻撃を多くしろ。そしてお前の持つ、ガン・デル・ソル

が主体となる。攻撃が通用しない場合は吸血鬼ウイルスだ。だからその時はお前が切り札だ。いいな？」

「わかりました」

「そして最後、俺とリサが後衛だ。主に俺らで支援攻撃をする。そしてリサ、お前がチームの司令塔だ」

「わ、私ですか!？」

リサは普段おしとやかな性格なため、喋り方とかが礼儀正しかったが暁から予想外の一言を言われて声を上げてしまった。

「俺がやりたいからじゃない。お前の戦い方がある程度は見せてもらっていた。相手の動きとかを見て、次の攻撃を予測、判断、指示。どれに対しても俺よりうえだ。だからお前に司令塔を任す。それ以上の理由がいるか？」

「い、いりません。精一杯頑張ります!!」

「よし! いい返事だ!!」

全員の役割が決まった。

改めてもう一度説明しよう。

前衛…レイ、ソロ

一撃離脱を中心とした攻撃スタイルを展開。

中盤…スバル

前線への牽制、援護、そして隙があったら一撃離脱攻撃。

攻撃が無効の場合、ガン・デル・ソルでの射撃攻撃となる。

後衛・暁、リサ

主に前線の支援攻撃。暁はライフルモードにチェンジして支援をする。

リサは遊撃隊の司令塔。素早く判断して仲間に指示を出して、命の危険性を減らす。

「ですが暁さん。情報もないのにどうしますか？」

「今から欧州、イタリアに向かう。俺らが閉じ込められてた場所、付近、地下牢獄に何かヒントが掴めるかもしれない・・・」

「わかりました」

「んで？もし無かったらどうする？そこで全てが手がかりが無くなるぞ」

レイが質問する。

「その場合は世界全体を探し回るしかない。探し回ってヒントを掴めるものを手に入れる。どんなに小さいものでもいいから入手しろ」

暁がそういう。

だが実際、軽く世界全体と言っているが世界はかなり広い。6つの

大きな大陸にそして果てなき大きな青い海。190ヶ国もある国、もしくは海上でたった一つの小さな異常を見つけるのは至難の技だろう。

「あの・・・」

一人の少女が声を出す。

「汚染現象と突然変異による吸血鬼化は欧州から始まったんですね？」リサが質問した。

「ああ、そうだ。だがそれが欧州のどこで、どうやって変異化が始まったのかははっきりしていない。だが欧州のどこかで変異の兆しが見られる」

「だったら敵はディーラー達のアジトのようにノイズウェーブ先にアジトがあるかもしれない」

スバルがそう言った。

「そのノイズウェーブが関係して、突然変移化が始まったかもしれません・・・」

「なるほど・・・」

「だったら、そこを重点的に調査だな」

「俺もそれに賛成だ」

その後も、次々と意見に賛成した。

ソロはただ無言でいた。

「そういえばリサさんとレイはフランスなのになんで無事なんだ？」  
スバルは突然質問する。

「俺はうまい棒目的で日本に来た。ほらこれ」

レイは荷物からうまい棒のチーズ味を出し、かぶりつく。

（暁さんと同じになってきてる・・・）

スバルは啞然としている。

「さすがだな同士よ！！うまい棒の魅力が分かるとは！！」

暁はそういい、ポケットからうまい棒を取り出しかぶりつく。

「アンタのおかげだぜ！！こんなうまい菓子を食べれるんだからな  
！！！！」

暁とレイは肩を組み笑う。

「意気投合してるわね・・・」  
リサは啞然としている。

「でリサさんは？」

意気投合する二人をほっといてスバルはリサに質問する。



「私は日本の観光です。たまたま、京都で観光していたら、私の母国の大陸であんな悲惨な事が起きてしまって悲しくなりました・・・」

リサは若干落ち込みぎみで言った。

「そして、日本で待機していたんです」

「ふうん」

今のスバルの思考回路。

（レイは食べ物目的か・・・。それと違ってリサさんは日本の観光。京都ってことは歴史関係だよな・・・。同じ年でこんなに違うなんて・・・）

とスバルは思っていたのだ。

「とりあえず、明日の夜には欧州に出発する。時差を考えておかないかならないからな・・・」

「「了解！！！」」

「・・・」

三人は返事をして、一人はうなづいた。

明日から本格的な探索が始まるのであった。

## Auf t a k t | 10 楽しい食卓

「・・・だからって・・・はあ・・・」

スバルが萎えている。

「まあまあ、いいじゃないか」

「すみませんね、スバルさん。レイが我が儘いつて」

「別にいいだろスバル。たまには大人数で食事して楽しいだろ」

「そうだけどさ・・・」

「やっぱり皆で食事すると楽しいよな」

暁はそういいながら、箸で食べ物をつまむ。

そういい、今日の星川家の食卓はいつもの倍、にぎやかだ。

一体、何があったのか。

場所はWAXAとなり時間は6時間前に遡る。

「んじゃ解散な。各自、通信とれるようにしておけ。いつ何が起きるか分からないからな」

「「「分かりました」」」

「・・・」

三人は返事をして、一人はうなづいた。

「なあなあスバル？」

レイがスバルに言った。

「何？」

「今日、お前の家に泊まっていいか？」

「え！！？」

「泊まっていぞ」

突然大吾が現れてそういった。「って、父さんいつからそこに！？」

会議室に大吾の姿は無かった。  
けど今は大吾の姿がある。

「さっき来た。でちょうどよく泊まらせろって話が耳に入ってきたから」

「だから、簡単に泊まらせる！？」

スバルは大声をあげる。

「いいだろ、別に」

「そうだぞスバル。何か見られたくないものでもあるのか？」  
大吾とレイがそういう。

「いや何もないけど・・・」

スバルは静かになった。

「リサもどうだ？」

「悪いですよ、そんな・・・」

相変わらずリサは謙虚だ。

「遠慮はするな。俺の母さんも人が一人でも多く来れば喜ぶと思うし」

「では、お言葉にあまえて・・・」

リサはそういうがやはりまだ控えているようだ。

「皆が行くなら俺も行くか!!」

暁がそういった。

「お! いいぞ! お前も来い!」  
大吾が上機嫌でそう言った。

恐らく酒の飲み仲間が来るからだろう。

「ソロはどうだ？」

大吾が言う。

「俺は遠慮しとく。人とあまり馴れ馴れしたくないからな」

「そうか・・・」

「んじゃ行くか!!!」

「「おう!!!」」

大吾とレイと暁はテンションが上がっていた。

レイと暁は恐らく、星河家の家の中が見れるからだろう。

（あいつの部屋に何があるか楽しみだぜ!!!）

レイはそう言った。

そうして5人はウェーブライナーに乗り、星河家のあるコダマタウンへ向かった。

「でさ、コダマタウンはどんな町なんだ？」

レイはコダマタウンに言ったことがないため、まるで子供のように目を輝かせながら興味津々でスバルに質問してくる。

「至って、普通の町かな。ま、平和でいいんだけど・・・。今は非常事態宣言発令されてるから、人が少なくてゴーストタウンみたいになってるけどね」

「そうか・・・」

そしてコダマタウン到着。

「ついたぞ〜」

大吾達一行がウェーブライナーから下車した。

スバルたちが住む、コダマタウン。今の季節は冬なので回り一面雪で白く染まっていた。

「やっとついたか〜」

レイは腕を空に伸ばした。

、

「少ししか乗ってないじゃん・・・」

スバルはレイの落ち着きのなさ？を見て苦笑いする。

「あゝ見えてレイは落ち着きがないんですよ、スバルさん」

「うん。リサさんの言うとおりだよ。見た目とは裏腹に全く落ち着きがなく緩慢としてるね」

「おーいスバル!!」

「何？」

スバルはレイの声がしたため後ろを向く。

グシャー!!

スバルの横頬に白い雪玉が命中する。

「あははは、当たったぜ!! 楽しいな雪を投げるのは!!」

「・・・・・・・・」

スバルは沈黙したままだった。

(あれ? まさかこれ怒らせた?)

レイは軽く冷や汗を流し始める。

「スバル?」

レイはスバルの様子が気になり接近する。

「射程距離範囲に入った・・・これより掃討作戦開始・・・ウ  
イザードON!! ウォーロック!!」

ウォーロックが出てきた。

「行くよ! ウォーロック!!」

『おう!!』

「ってちょっと待ってスバル!!?」

レイはスバルとの距離を取ろうとしたが時すでに遅し。

「『だりやああああああ！！！』」

スバルとウォーロックの雪玉が飛んでくる。

「うわああああ！！」

レイはスバルと5m以内にいたため最初はもろに二人の雪玉を喰らってしまった。

そして――

「はぁーすつきりした」

『いい肩のトレーニングだったぜ！！』

スバルとウォーロックはすがすがしい顔で額から垂れる汗を拭いながらいった。

そばには滅多打ちにされたレイの姿。

「自業自得ですわね」

リサはレイの姿を見て笑いをこぼす。

「うるさい！！！！」

レイは体についた雪を払い落とした。



「さっ、そろそろいいだろ？行くぞ」

そう大吾はそういい、再び歩き始めた。

そして星河家到着。

「ただいま〜」

「お帰り〜ってお客さん？」

あかねは大吾とスバルのほかに暁やレイ、そしてリサがいたためきつと客を連れてきたのだろうと思ったのだ」

「ああ、突然ですまないなあかねさん」

暁はそういう。

「いえいえ、大丈夫ですよ。ささ、上がってください。何もなしですけどゆっくりしてくださいな」

あかねはそういい、暁たちに履かせるスリッパを出した。

「ではお言葉にあまえて・・・」

「「おじゃまして〜す」」

そういい。三人は星河家にあがった。

「へえ、ここがスバルの家か」「至って普通ですね。日本の家の建築には特徴があるって聞きましたが中はふつうなんですね」

リサはなんにでも興味を示していた。

きっと知識をもっと増やしたいためであろう。

「お前ら、スバルの部屋にでもいったらどうだ？俺らで晩飯の準備とか手伝うからさ」

「なら私も手伝いましょうか？料理は腕に自信はないですが、ある程度はできますよ」

「そうなの！？その年齢で料理ができるなんて凄いわね。貴方はここに來て私の料理の手伝いしてくれないかな？今日は滅多にない大人数だし、腕をかけて沢山料理を作りたいから。ほら、エプロンつけて」

「わかりました」

リサはそういい、エプロンをつけて手を洗いあかねの料理を手伝いはじめた。

「スバルさんたちは部屋に行ってて休憩しててください」

「わかった」

「すみませんね、レイ、じゃあいこうか」

「おう」

そういい、スバルとレイはスバルの部屋に向かった。階段をあがり、部屋の戸をあけてくぐる。

その部屋に入ってまず目につくのが大きな望遠鏡。そして大量の本。

「すごいな!! お前天体観測してるのか？」

「うん・・・まあね・・・」

「へえ～～」

そういいレイは本をとり、中を見してみる。

「うっ・・・字だらけだ・・・写真もいたって少ない・・・」

レイは無理だったのか開いて30秒もたたずに本を閉じて本棚にしまったのであった。

そして今度は使用されていない布団に目が行った。ここからレイの思考が稼働する。

（この使われてない布団・・・まさか・・・）

レイは不審な笑みを広げる。

「まさかこれ・・・ミソラの布団か?・・・」

「え・・・うん・・・」

スバルはなぜ、その布団がレイとわかったのか疑問に思った。

「うーんこれは使われた雰囲気はないな・・・おいスバル？」

「ん？」

「お前の寝床あれだよな？」

レイは高台にある布団に指差す。

「ああ・・・そうだよ・・・」

「お前、この布団が使用された形跡がないってことは本当に一緒に寝てんだな」

「ギクッ!!!!!!!!!!!!!!」

スバルは突然まっすぐ立つ。

「どうやら凶星のようだな。全く、罪な男だな」

「なんで？」

スバルは基本、鈍感なため理解できなかった。

「あ、理解してないんならええわ」

レイはあっさりと引き下がった。

「なんなの？教えてよ・・・」

「断る・・・」

そして一時間後・・・

スバルとレイは晩御飯ができたと聞いたためリビングに来た。

リビングの戸を開けたらテーブルにはたくさんの料理が並べられていた。

「へえ〜これ、全部二人で作ったの!？」

スバルが作った二人、あかねとリサに聞いた。

「まあね。リサちゃんのおかげでだいぶ料理の進行がスムーズに言  
ったわ」

「いやいや、当然のことをしたまでですよ・・・」

（できた子だな・・・）

あかねはリサの礼儀正しさと料理が上手なことに感心していた。

ちなみに男どもは皿の準備だったりする。

「んじゃ座るか・・・」

そういい、予備のテーブルを持ってきいたため全員がすわれた。

「「「「「いただきまーす!!」「」「」「」」

「召し上がれ」

6人は食事の挨拶をした。

「じゃあこれから!!」

「んじゃ俺も!!」

暁とレイは箸で唐あけをつかみ、そして口へと運ぶ。口に運んで噛んだとき、あふれでる肉汁。そしてジューシーなお肉。

「「うまい!!」」

暁とレイは声をそろえていった。

「ちなみにそれはリサちゃんが作ったのよ」

あかねはさういう。

「へえ〜」

スバルはさういい、どれぐらいおいしいのか期待しながらから揚げを箸でとり、口へ運ぶ。

「おいしい・・・」

「そういつてもらえるとうれしいです・・・」

リサは赤面化していた。

やはり自分の作った料理がおいしいといってもらえると当たり前的事だが嬉しいに決まっているだろう。

その後も、いつもとは違う星河家の楽しい食事の時間はあっという間に過ぎて行った。

そして・・・

「ふうふう食った、食った。もう思い残すことはねえ・・・」

「いや早すぎでしょ!!」

スバルはレイの言ったことにつっこみをいれてしまった。

「ではおかたづけしますか」

「あ、僕も手伝いますよ、リサさん」

「ありがとうございます、助かりますわ」

そういい、スバルとリサ、あかねは食事の片づけをした。

ちなみに大吾と暁は酒を片手に持って昔話で盛り上がっていた。

「全く・・・スバルを除く男どもは・・・」

あかねは苦笑いをしていた。

「でもいいですね、皆と食事をするって」

「そうね。久々だもの・・・。ミソラがいればもっとね・・・」

あかねの言葉の裏腹には暗いものがあつた。

「母さん・・・」

「んじゃここで俺はおいとまするわ・・・」

暁はそういい、帰ろうとした。

「大丈夫か？酒飲んでるだろ？」

「ああ、マテリアライズで全自動のオートで運転する車をだすわ」

「そうか、じゃあな気をつけろよ」

「おう・・・」

そういい、暁は家を出て行った。

「レイ君とリサさんは泊まっていたら？」

「いいんですか？ありがとうございます」



リサはあかねの優しさに恐縮しながら深くお辞儀をする。

ちなみにレイは眠りの世界だったりする。

そして就寝時・・

リサは女性の為、別の部屋で就寝。

スバルとレイはスバルの部屋で寝たのであった。

明日から、本格的な活動開始。

その前日にいいリフレッシュになったなと思ったスバルたちであった。

## Auf t a k t | 11 探索

「またきましたね・・・」

「そうだな・・・」

スバルと暁がウェーブロードの上にながらそういう。

現在の場所はイタリアのウェーブロード上だ。

だがノイズが激しいのが空が闇に汚染されている影響なのかウェーブロードは不安定で途中、途中道が途切れていた。

「私達の大陸が・・・」

「大丈夫だリサ・・・俺達の故郷はきつと元に戻るはずさ・・・」

レイはリサを励ます。

「・・・」

ソロは黙ったままだった。

だが彼は口に出さずとも彼は彼なりに頭の中で考えているだろう。

全員は警戒を解かなかった。

「とりあえず地上に行くぞ！！各自バリアは常時展開しておけ！！」

いつ、どこで、襲われるか分からないからな」

「「了解!!」」」

素晴らしいソロを除く4人はバリアを展開した。ソロは電波障壁という優れたものの能力があるためバリアの展開は不要だった。

5人は戦闘態勢に入りながら、地上に到達した。

それぞれ武器、弓や鎌やスターソード、ラプラスソード、ロックオンソード。

自分達が使用する武器を展開し、臨戦態勢に突入する。

「やはり光が差してきませんね・・・」

スバルが空を見上げながらさういう。

「時差のことを考えて来たんだが実際は今、昼時だ。これほど暗いとはな・・・」

暁はスバルの質問に返答した。

暗いといってもそんなに暗いというほどではなかった。

簡単に表せば日の入りの時間帯と同じくらいの暗さだろう。

前をしっかり見れば何があるか分かるが、適当に見るとぼやけてハッキリ見えなかった。

「やはりこの薄暗さが厄介だな。どこから襲われるか分からないな。下手したらスバルの後ろにでっかい化け物がいたりしてな!!」

レイが悪戯笑みを含んだように言う。

「全くやめてよ・・・そういうと後ろにいるかもしれないじゃん・・・」

そういうスバルは恐る恐る後ろを見る。

スバルの視線の先は、何にもなかった。

「よかった・・・」

スバルは安堵した。

「何にもなかったよ・・・」

「そうか・・・」

レイもしかしていたら洒落になんないと思い軽く冷や汗を流していた。

「とりあえず、僕たちが閉じ込められた地下牢獄を探索してみますか？」

「まずはそれが得策だろう。今は全くの手がかりゼロ。だったら俺たちが閉じ込められていた地下牢獄に行ってみるのが一番だろう」

「わ、分かりました・・・」

スバルは全身に緊張を走らせる。

何故なら、あそこはとても暗いし、何よりあの吸血鬼型ウイルスと初めて出会い、対峙した場所でもある。

「んじゃ行くか・・・」

暁たち遊撃隊は、自分たちが閉じ込められていた地下牢獄がある廃れた墓地へと向かった。

5分後――

「ここか・・・」

暁はウェーブロードの上から見る。

「ええ、ここですね。戦闘の形跡もはつきり残っている。では行きましょうか」

スバルはみんなを制し、突入を開始した。

「・・・だからって・・・なんで僕が前衛なの！？僕は中盤でしょ！？」

「だってお前、吸血鬼ウイルスと対峙したんだろ？　だったらその戦闘経験を生かして前に出るべきじゃないのか？」

「そうだぞ！！スバル！！」

最後列には何故かあの時、一緒に対峙した暁の姿が一番後ろにあった。

「なんで、暁さんが最後列なんですか！？」

「だって後ろから来るかもしれないだろ？」

「うっ……」

正当な答えを言われてスバルは黙った。

「いいから、早く進め……」

ソロは静かな声で言った。

「ソロまで……うう。わ、分かった……」

「頼りにしてるぜ！！太陽銃使い！！」

暁はスバルを励ます。

（実際、結構怖くて一番前なんかやってられるか！！！！）

暁は言葉に出さず心でそう思っていた。

「は．．い．．．．」

そういい、一番前から、スバル、次にソロ、次にレイ、次にリサ、そして最後に暁だった。

スバルたちは足音を忍ばせて進軍する。

階段を下り、どんどん最下層へと進んでいく。

「何もないですね．．」

「ああ．．．せめて手がかりでもあるといいんだが．．．」

スバルと暁は小さな声で言いながら警戒を解かずに進軍する。

「しっ！！！！」

突然、リサが弐さな声を上げる。

「どうした？」

「敵がいます。きっと吸血鬼型ウイルスでしょう……。おそらく数は三体……」

リサが指差した先には敵が三体いた。容姿からして突然変異と吸血変異を起こした人型吸血鬼ウイルスだろう。

敵がいることにいち早く気づいたりサ。やはり司令塔役としてチームの中心的存在とさせてよかったと思う暁だった。

「スバルさん、太陽銃の準備を。私と暁さんでスバルさんの支援。レイとソロさんは敵に対する威嚇……つまり牽制をしてください……。くれぐれも牽制という意識を忘れないでくださいね」

リサは司令塔らしく、仲間に指示する。

「わかりました。太陽銃！ガン・デル・ソル！！」

スバルは太陽銃を召喚した。

レンズはソル。この部分が弾の属性を決める。ソルは太陽、つまり光だ。このレンズで太陽の光を吸収し、バッテリーにエネルギーを保存する。



フレームはドラグーン。太陽ショット、太陽スプレッド、太陽を圧縮したチャージショットも撃てるフレームだ。太陽スプレッドとは簡単にいえば照射だ。目の前に水のシャワーをまくという感じのスプレッドだ。

バッテリーはクォード。太陽の力を蓄えるところだ。いわゆる太陽弾をうつための重要な部分だといえるだろう。

グレネードはライジングサン。一時的に小型の太陽を作り出すグレネードだ。

まだスバルはカスタマイズしてなかったため基準の銃のままだった。

「支援は任せた!!」

「おう! 背中には任せろ!!」

暁はそういった。リサは無言でうなづく。

暁とリサを除く三人は接近する。

「牽制お願い!!」

「わかった!! ビームサイズ!!」

レイは鎌を振り回し一匹の敵に斬りかかろうとしたが途中で止めた。その一匹の敵はレイの行動を見て自分の命に危険を及ぼす存在と見

たのか、レイに意識がいていた。

一方ソロ側では・・・

「ラプラスブレード!!!七閃!!!」

ソロは七閃で吸血鬼ウィルスに衝撃波をぶつける。

「グガアアア!!!」

「やっぱり無傷か……。ならば!!!一閃!!!」

ソロは一刀両断する一閃をくりだした。

確実に腹をラプラスブレードの刃が完全に通りウィルスを真っ二つにした。

だがその切れた部分から再生して、そして復活した。

「なっ!!!?」

「なるほど・・・部分が残っていれば再生か・・・ならば跡形もなく消し去ってみれば!」

とソロは完全に自分の役割をなげて吸血鬼ウィルスとやり合っていた。

そして再びレイ視点――

「よっしゃ食いついてきた!!」

レイは敵が自分にくいついてきたことに賞賛をあげ、そして回避行動に移る。

吸血鬼ウィルスが腕を伸ばして攻撃する。

「おっと!! そんな容易い攻撃あたらないぜ!! だりゃああああ!!」

レイは鎌で相手の足を狙い転ばせた。

「今だスバル!!」

「うん!!」

後ろで太陽チャージショットのチャージをしていたスバルは狙いを定め、足をしっかりと踏ん張りそして撃った。

太陽銃の銃口から放たれたチャージショットは容易く吸血鬼ウィルスの腹を貫通しそして溶けていった。

「よっしゃ次！！ってソロ！！？」

スバルはソロの様子を見た。

完全に役割を忘れているソロ。ラプラスブレードを構えて斬っていた。

「こいつは俺の獲物だ！！手を出すな！！」

「スバル！こっちだ！！」

暁が声を上げる。

スバルの視線の先には、もう一体の吸血鬼ウィルスの姿があった。

「手を出すな！！！！太陽ショット！！」

スバルは太陽銃で太陽ショットを三発、頭、腰、胴へ狙い撃った。

そして二体が消滅。後、一体はソロが対峙している一匹。

「はぁっ！！」

ソロはかなり早き反応速度で0距離に近いのにしっかりと反応して敵の攻撃をかわす。

「相当身体能力高いですね・・・」

「ああ・・・」

ソロはかわし、攻撃する。彼の動きに違和感を感じたスバル。

「なんか違う・・・？」

「え？・・・」

暁はスバルの言葉に疑問を持つ。

「まさか・・・ソロは何か打開策をもってあんな動きをしているんじゃない・・・」

彼の動きは確かに違った。确实の攻撃をしていけるのになぜか攻撃しない。

どちらかといえば回避行動が多かった。

相手の攻撃にあわせて回避する。

「そろそろだな・・・」

吸血鬼ウィルスが攻撃する。

「今だ！！」

ソロは一瞬で敵の後ろを取った。

「はあああ！ブライブレイク！！！」

ソロはジャンプして渾身の力をウイルスへと叩き付けた。

完全に消滅したウイルスの姿。

他の4人は目を丸くしていた。

「一体、なんで！？」

「・・・どうやら、再生能力があるらしいな。きっとその為だろ攻撃がきかないのは。攻撃してもすぐ再生してしまう。俺がさっき奴を真っ二つにしたときにすぐ再生するのを見てそう思った。一撃で倒せばいいんだとな・・・だがその太陽銃というのは例外のようだな」

「へえ〜。いい情報感謝するよ・・・」

「だったら作戦変更です。ソロさんとスバルさんと暁さんで前衛です。レイは牽制。私が支援でいきます！」

「了解！！」

新しい情報が手に入ったため大技を持つ暁にも前線をやってもらうことにした。

「俺、また牽制かよ・・・」

「我慢してください・・・」

「へーい・・・」

そういい、遊撃隊は最下層を再びめざし、そして手がかりを求めにいったのであった。

## Auf t a k t | 12 手がかかり

タッタッタツ・・・

5人の足音が激しく聞こえる。

どうやら遊撃隊は走って最下層を目指しているようだ。

何故最初とは違って勢いよく大胆に進軍しているのか。

それは――

「ブライブレイク!!」

「オメガレーザー!!」

ソロと暁が自分達の1、2を争う最強技をその標的、人型吸血鬼ウィルスに向けて放つ。

「グギャアアアア!!」

人型吸血鬼ウィルスは即再生能力も使えず一瞬で塵と化した。

この為である。

吸血鬼ウィルスを一撃で倒せば相手に再生能力を使わずに倒せるのだ。

だがその代わり、力の消費は激しい。力をフルで使うためである。



そして最下層付近――

「大分奥までできましたね・・・」

「ああ・・・」

かなり進んだが相変わらず手がかりなし。

ただ身体に疲労が溜まったただけだ。

何の手がかりも無しにこのまま日本へ帰るといったら正直の所、滅入るだろう。

ただ一撃討伐という力を大量消費すれば吸血鬼ウィルスを倒せると  
いう情報が手に入っただけだ。

だがそれだけでは今後の進展無し。

ここを完全に探索し終えれば、足が止まってしまう。だから何と  
しても手がかりが欲しいと思っていたスバル。

そう思いながらスバル達は最下層に到達した。

「ここは僕が目覚めた場所だ・・・」

そういうスバルは太陽銃を構えながら足音を忍ばせてすすむ。

天井にある結露した水滴が集まり、そして地面に落ち水が弾ける音  
が聞こえる。

「・・・」

スバル達は額から流れる汗を拭うのを我慢していた。

チャキツ！！

太陽銃のトリガーを人差し指で構えながら遂に最下層の奥の部屋、つまりスバルが目覚めた場所に到達。

そして辺りを見回し、誰もいないと確信したら銃を下ろした。

「何もないな・・・」

暁は辺りを探索してそういう。  
リサは相変わらず警戒深かった。

スバル達が探している間に後ろから敵が来るかと思い、弓を構え、弦を引きいつでも矢が放てるようにしていた。

「何もないな・・・」

「ええ・・・そうですね・・・正直言ってかなり滅入りますね・・・ここまで来て手がかりゼロなんて・・・」

スバルは落ち込む。

だがここから、一本の通達が5人を新たな境地へと導かせる先達からの一本の連絡がスバルに届く。

ザッ・ザッザ——

ノイズ混じりだがスバルのハンターV.Gに通信が入ってきた。

「星・・河ス・・バ・・ル聞こえ・・るか・・こ?」

ノイズ混じりに入ってきた突然の通信の声。

スバルとウォーロックはノイズ混じりでの声だったが確実に聞いた声のある者だった。

「その声!？」

『まさか!？』

「『ケフェウスか!?!?』」

スバルとウォーロックはケフェウスと言った。

ケフェウスとはかつて1年前、FM星から地球への侵略作戦に関わった人物である。

アンドロメダという破壊の電波体を使い地球を滅ぼそうとしたがスバル達によって侵略危機はどうにか免れた。

今は電波体と人間が共存しているため、平和な世界を、友好的な関係を築いていた。

そして今、そのケフェウスがスバルのハンターVGに通信してきたのだ。

「聞こえてます!!! 僕です!!! 星河スバルです!!!」

『星・・河・・か? お・・達に伝・・い・・る・・』

「ノイズが激しくて聞こえない！！聞こえますか！？僕達は今から通信電波のいい所に行きますので！！」

『そ・・・か・・・分・・・た』

スバルはケフェウスにそう言い通信を終了した。

「スバル、一体誰からの通信だ？」

暁が問い掛ける。

「FM星の中心人物ケフェウスという男からきました。ノイズが混じっていてよく分かりませんでしたが多分ケフェウスだと思います」

「ケフェウス王から？一体、何のためにスバルに通信を？・・・」

「それは分かりません。けど、もしかしたら確信ではないですが何かの情報が手に入るかもしれません・・・」

「ああ・・・この様子だと完全に手がかりゼロ。だったらそのケフェウスとやらにその通信してきた内容を聞いてみるのがベストだろう・・・」

そういう暁達は脱出を試みた。

再び陣形を前衛、後衛と立て直し脱出する。

途中、途中、吸血鬼ウィルスがいたが前衛の冷静な対応により無傷

に進む事が出来た。

「はぁ、はぁ、もう少しだ!!」

息を上げながら上を目指した5人。

もう少しで地上に出て通信再開となれるが現実はそうは上手くいかなかった。

そして5人は光の差さない、空が闇の雲に満ちた暗黒の世界の空の下に来了。

「よし、通信再開だ!!」

スバルが通信を再開しようとした途端。

バゴオオオオオオン!!!!

スバル達に大きな謎の物体が飛んできた。

「うわっと!!!!?」

スバル達はなんとか回避した。

「な、なんだありゃあ!？」

レイが指差した先には、大きな黒く、赤く染まったウイルスがいた。

その姿ははっきりと見えなかった。

そのよく見えない敵からの攻撃が来る。

「はあっ！」

5人は散開した。

そして攻撃に対応しやすいように各個展開する。

「まさか・・・あれはノイズドウィザード!!?」

スバルはそういう。

ウィザードとは、人々が科学の技術を搾って作った電波人工体、それがウィザード。だが、異常な高ノイズを浴びすぎるとウィザードは異常を起こし暴走してしまう。その場合になってしまったのがノイズドウィザード。

そのノイズドウィザードがノイズを浴びすぎて変化し、その上での吸血変異化したのだろう。

見た目は赤く、黒い。図体はかなり大きくなっている。おそらく4、5倍の大きさだろう。目は真っ赤に充血し、右手にはかなり鋭くとがった爪。背中からは謎の濡れた触手が10本ぐらいでて、うねうねと動いていた。

「うっ・・・」

「あれは気持ち悪い・・・」

基本、涼しい顔をしているリサが顔に嫌悪感をもらした。

スバルは気持ち悪そうな顔をしている。

「あんなデカブツ、俺が全部たたき切ってやる!!」

ソロはラプラスブレードに変換させて構える。

「その通りだ!俺たちはやらなきゃならない!ライフルモード!!」

暁は長距離射撃モードに変身した。そしてスナイパーライフルを構える。

「うっしあ!!全部ぶった切るぜ!!」

そしてレイはあまり満足に行動できなかったためやる気満々だった。何故なら、地下牢獄潜入から現在まで牽制という地味な役を任せられてたからだ。ここでストレス発散しようというつもりなのだろう。

「やるしかないですよ!前衛はソロさんとレイをお願いします。スバルさんは前半は前衛と後衛の支援、最初は情報がすくなくいですから様子見です。行けると思ったら斬りこんでください。深追いは禁物です。ほかの方々も肝に銘じてください。バリアは常時展開、近接は一撃離脱を目安に、そして私と暁さんで前衛の支援と、あの触手の破壊を試みます。後半に勝負です。スバルさんの太陽銃で一気に攻めましょう!!」

相変わらず、彼女の指示は的確でいい。最初は緊張していたものの、すぐに馴染んでしまい今は遊撃隊の必要人物となっている。彼女に

指示でこちら側の生命の危機が少なくなる。これは指揮官が優秀な証だ。

「早く倒して、ケフェウスから聞いてもらおうぞ！！スターソード！Σブレード！δブレード！！」

スバルは毎度おなじみ、スターソードを召喚して構えた。

（改めてこれが吸血変異型ウイルス・・・気持ち悪いな・・・。だが何故、どうやって感染したんだ？そして誰が一体どうやってこの世界を・・・？いや今は、目の前の敵に集中だ！！！！）

スバルは自分の余計な考えを切り捨てて、自分の倒せねばならない敵、役割を務めようとした。

そして5人は展開する。前衛に2人、中盤に1人、後衛に2人。

生きるために、そして突然の来訪者ケフェウスと通信するために戦いが始まったのであった。



## Auf t a k t | 13 連携の力!

「であああっ!!」

一人の絆を拒絶している若き青年がラプラスソードを振りながら叫ぶ。

「はあっ!!」

あるいは遠い地からやってきた若き少年がビームサイズを振り回す。

ラプラスソードとビームサイズが襲いかかった標的は――

―ノイズを浴びすぎて変異と吸血変異をしてしまったノイズウィザードを超えた吸血鬼型ノイズウィザードだ。

図体は4、5倍だろう。

一発、一発の攻撃が大きいため回避しなければ大怪我を負ってしまう。  
う。

だから前衛のソロとレイは一撃離脱攻撃をした。

一撃離脱攻撃を狙ったのは足。

足を中心的に攻撃し、態勢を崩そうという作戦だった。

あんな大きな身体を支えて立っているのは足だ。

だから司令塔であるリサはそこを重点的に叩き、態勢を崩したところでスバルの太陽銃、ドラグリーンによるチャージショットを繰り返すという作戦だ。

右足に鎌が、剣が襲い掛かる。  
傷口から緑の液体が吹き出し  
辺りを緑に染めた。

だがその二つの鋭利な武器によって傷口を作ったが少しずつ再生していく。

「再生速度が遅いか・・・」

「ならば!!」

再びソロとレイは傷口を作った場所に接近する。

だがノイズドウィザードもそのまま黙っている訳がない。

彼らの動きに対応しようと、彼らの同じ大きさほどの拳を両手で二人を潰そうとした。

だが、そこに割り込んできたのが――

「はああああ!!」

「いけっ!!」

後衛で待機していたリサと弓で、暁がスナイパーライフルで牽制する。

狙ったのは大きな触手。ヒットしたら触手が吹き飛んだが再生していった。

（なるほど・・・再生速度が遅い……。なら休まない連打攻撃で確実に傷口を展開、その傷口が広がってきたら一気に大技で攻めるか・・・）

リサは次に指示する作戦を考えていた。

そしてリサと暁による支援攻撃でノイズドウィザードはリサたちに意識がいき、攻撃しようとそちらに向く。

だが中盤で待機していたスバルがスターソードで顔に斬りつけた。

「ウガアアアアア！！」

ノイズドウィザードは完全に不意をつかれた攻撃で声を上げた。

そして、一瞬だがノイズドウィザードが怯む。

再び隙ができたノイズドウィザードにソロとレイはその絶好のチャンス逃さなかった。

傷がふさがる前に再び右足の傷口に、斬りこむ。

「はあああ！！ラプラスブレード！！一閃！！」

暁が一閃で閃光の速さの一撃を繰り出し、一気に斬りこみ横に横転する。

そして、レイがその開いた空間に距離を詰め鎌で斬りこむ。

「であああああ!!!!」

鋭い鎌が、上から右から左からへと三方向へと斬りこんだ。

どんどん傷口が広がる。

「グガアアアア!!!!」

ノイズドウィザードが苦し紛れに右足を上げ地面に叩き付けた。

「うおっ!?!」

「うぐっ!?!」

衝撃波で右足付近にいたソロとレイは吹っ飛ばされる。

二人は吹っ飛ばされた衝撃に逆らわないように体をコントロールし吹っ飛ばされた勢いを有効活用して距離をとった。

恐らく吹っ飛ばされた衝撃を逆らっていればダメージはもっとあっただろう。

「大丈夫!!?!」

心配したスバルが近寄ってくる。

「ああ、なんとかな。だが動くのには支障がない」

「わかった、とりあえず散開だ!!」

「おう!!」

レイとスバルは再び散開した。

ソロは吹っ飛ばされたあと、すぐに立ち上がった。

「くっ・・・下手に接近すれば右足で吹っ飛ばされる・・・。かといって近づかなければ何も始まらない・・・」

レイはそう言っていた。

「だったらこれだ!! スターソード!! スターライザーソード!!」

スターライザーソード、これは二つの剣を融合させて一つの剣にすることで超極太の大剣を作り出す荒技だ。だがあまりにも大きすぎるためかなりの力が必要だ。

「はああああ!!!!」

スターライザーソードを両手で構えて横から振った。

スターライザーソードが右足をとらえる。

ジリジリと熱を持った赤く輝くスターライザーソードが右足をえぐりはじめた。

「グガアアアアア！！！！」

ノイズドウィザードが叫んだ。苦し紛れに口から汚いヘドロか何かの液体をスバルへ向けて飛ばしてきた。

「はあぁっ！！！」

レイが高速に鎌を振り回し鎌鼬を発生させて、ヘドロを切り刻みスビードを落とさせて落下させた。

スバルはその動きを見てニッと笑みを漏らした。

「いけええええ！！！！！」

スターライザーソードが完全に右足を貫通し、その熱で切断された右足が焦げている。

そして足を失ったノイズドウィザードはバランスを崩してその場に倒れる。

ズズウンと多いな音を立てて倒れたノイズドウィザードは起き上がろうとするが右足がないため起き上がれなかった。

「今だ！！！」

完全に隙が丸出しになったノイズドウィザードに全員はこの隙を逃さなかった。

狙ったのは胴体。

「ラプラスブレード！！ブライブレイク！！！」

ノイズドウィザードの無防備な腹にソロのブライブレイクが叩き付けられる。

叩き付けられた後にはえぐられている腹の姿。

「オメガレーザー！！」

暁のオメガレーザーがソロの狙った腹に直撃し、再びえぐり始めた。

まだまだ続く。レイとリサがジャンプし、レイは鎌を高速に振り真空の鎌鼬を浴びせようとした。リサは弓で狙いを定め矢を発射しようとして二人が構えた瞬間――

横からノイズドウィザードの触手が二人を吹っ飛ばす。

いくらバリアを張っているからっていくくかのダメージはきつとあるだろう。

さらにバリア常時展開しているため力はほんの少しずつ消費する。

吹っ飛ばされた二人は立てないわけではなかったが、ある程度は消耗しているように見えた。

二人が吹っ飛ばれてもほかの三人は動揺しなかった。

今度はスバルが対応してスターソードで腹を攻撃する。

「スターツインソード！！であああ！！！！」

スバルが剣の柄と柄を組みあわせて柄に対になって反対方向を向いている剣を作り、ノイズドウィザードの腹に向かって思いきり投げた。

まっすぐに線を描いていくスターツインソードは腹に完全に突き刺さった。

苦しみ、もがくノイズドウィザード。

この吸血鬼ウイルス、ノイズドウィザードは回復速度が何故か遅かった。

「スバルさん！！今です！！」

「うん！！太陽銃！！ガン・デル・ソル！！」

スバルは太陽銃を召喚した。

そして太陽銃を両手で構えてノイズドウィザードの腹に刺さったスターツインソードへと狙いを定める。

スバルは神経を尖らせて狙いをじっくり定める。

太陽の力を凝縮させ力をためる。



そして撃つ瞬間スバルは両足を踏ん張り太陽銃の発射時の反動に負けないようにした。

太陽銃のフレイム、ドラグーンから放たれた大きな太陽凝縮弾が確実にノイズドウィザードの腹を貫通した。さらにスターツインソードもその太陽凝縮弾に巻き込まれたため大きな爆発が起こり敵を爆発へと巻き込んだ。

そして煙の中から現れたのは瀕死の状態のノイズドウィザード。

もはや腹は一部しか残っていないく、左足、右腕はスターツインソードの爆発の影響で消えていた。

切断された右足、一部消えている腕、原型の形がない腹、砂まみれの頭と触手。

かなり苦しいのだろうか、もがき苦しみの声をあげていた。

「そろそろ終わらせるぞ!!」

「「おう!!」」

「オメガレーザー!!」

「ギャラクシーアドバンス! キャノン三枚使用! インパクトキャノン!」

「グラウンドブレイクソード!!!!」

三人のすべてを込めた大技は閃光し、炸裂し、爆発していった。

そして残ったのは何故か触手一本だけだった。

「最後は俺だああ!!」

見るからに最後のいいところというやつをまっていたように、レイは高くジャンプして鎌を小さな触手へと振り下ろした。

だが――

「ロックバスター!!」

スバルは悪戯笑みをこぼしたような笑みでロックバスターを小さな触手へと撃ち消滅させた。

ロックバスターがいち早く触手を消滅させてレイの鎌が届く前に消した。

「お前、最後のいいところを!？」

「これはお返し。だって僕にいろいろを悪戯借りがあるだろ？」

「うっ・・・」

レイはスバルに雪玉投げた借り、ビビらせた借りがあったためまさかここで返されるとは思っていなかったレイだった。

結局、最後まで満足できずにいたレイなのであった。

「よし、障害は排除したし、今から日本に戻ってそのケフェウスとやらの情報を聞いてみるか・・・」

「ええ、何故突然来たのか気になりますしね。ここで通信したらどうぞ殺してくださいといっているようなもんですよね・・・」

「確かに言ってるな・・・」

暁はスバルの言った言葉に苦笑いをこぼした。

そして再び日本へ戻っていった。

## Auf t a k t | 14 知らされる真実

「よし、いいぞ通信を再開してくれ」

場所は再び日本、WAXAの会議室だ。

少し前にFM星からの来訪者、ケフェウスからの通信があったからだ。

「一体、何なんだろう？」

「聞いてみれば分かることだ」  
そして通信回線を開く。

ザッザッ———

『星河スバルか？久しぶりだな』

「ケフェウス王、お久しぶりです」

『そちらに起きた出来事は大体は映像で見た。私はそこでその地球に起きた吸血鬼化について少し調べてみたんだが・・・』

「それは・・・？」

ケフェウス王の次の言葉に遊撃隊5人と大吾は固唾をのむ。

『それはかつてムーの文明が栄えていたところ・・・』

「なんだと!?!」

ソロが珍しく声を上げた。それは当たり前だろう、彼はムーの唯一の生き残りだから。

『その彼はムーの生き残りだな?』

「ああ、そうだが。だが一体、ムーと吸血鬼問題に一体何の関係がある?」

『それは今から話そう。それは昔、ムーの文明が古代に栄えていたころ別な地方でもある4つの文明が栄えていた。』

『その注目すべき文明がメソポダミア文明だ・』

「「メソポダミア文明?」」

スバルとレイが声を揃えて言った。

「きいたことあります。彼らは太陰太陽暦を使い1週間を7日に定めたり、噂ですがある化け物を作ってしまった、その化け物を封印した封印禁書のハンムラビ法典があると」

リサがそう言った。歴史などに興味津々なリサが太陰太陽暦とか封印禁書ハンムラビ法典とかリサ以外の人は理解ができなかった。「そのハンムラビ法典って?」

スバルは興味津々にといってくる。

「それは・・・」

『それは私が話そう。まずはここからだ。かつてメソポダミア文明はムーの文明の技術に負けないくらい技術発展をとげていた。だが、その発展さが命取りになってしまった』

「なんで？」

『メソポダミア文明とムー文明はその時同時に栄えていた。技術が栄えていた彼らにとってきつと害を及ぼす存在とお互いが意識してしまうようになった。だからその対策用に作られたのが・・・』

「ムー文明が作り出したラ・ムーだな？」

『その通りだ。ラ・ムーは無限に電波体を作り出すことができる。そしてラ・ムーを作り出したムー文明はもっとも危険とする存在、メソポダミア文明に襲撃した。ここ第一次電波文明戦争が始まった』

「俺でも知らないぞ、そのことは・・・」

ソロはそういう。

『そしてムー文明が作り出した化け物に対抗しようとしたのが・・・メソポダミア文明が作り出したバリアント・ハデスという破壊と汚染の化け物だ。ラ・ムーは無限の増殖。ならばそれを破壊、もしくは闇に汚染させ味方にさせようとしたのがバリアント・ハデス・・・』

「バリアント・ハデス・・・」

スバルはその言葉をかみしめるように言う。

『ラ・ムーは電波体を増殖させて攻撃した。だがバリアント・ハデスの圧倒的な破壊力により相手の電波体は一掃させていたんだ。そして突如バリアント・ハデスがおかしくなったんだ』

「なんで？」

『突如変異し付近に存在するものを全て破壊させてしまったという。それを遠くで見えていたメソポダミア文明達はきつと危険だと思いつさに封印禁書ハンムラビ法典を作りその法典の中に封印した。その一瞬で消し去った電波体達を見ていたラ・ムー文明達は一目散に退散したという。その後、ムー文面側はあの3つのオーパーツ、ベルセルク、シノビ、ダイナソーの3つを使いラ・ムーを封印した。そして最終的にはどちらも理由が謎のまま滅んだと・・・』

「だがケフェウス王、それと一体、何の関係が？」

『今、この世界にバリアント・ハデスが解放されているんだ。5か月前、封印禁書ハンムラビ法典の封印が解かれて変異したバリアント・ハデスが復活してしまった。かつて5ヶ月前、君達が電波体との戦闘終了後、あの大きな電磁波照射母艦が地球からの謎の電波か分からないが突如引き寄せられただろ？』

「うん。それで僕が内部破壊したからよかったけど・・・」

『その特色電磁波らしきものがバリアント・ハデスが復活した証なんだ。きつとそれでその電磁波照射母艦が引き寄せられたのだろう』

「ということは、5ヶ月前から始まってたと!?!」

『そういう事になるな。バリアント・ハデスは相当な年月があったからきつと活動養分とする綺麗な心を持ったいけにえを求めているだろう』

「「なんだって!?!」」

スバルと暁は声を揃えて言った。

「これ・・・ミソラが関係してるんじゃないか?」

「最悪の場合な・・・。ミソラは私は箱になるために存在していると言った。下手したらバリアント・ハデスのいけにえになるという意味じゃないか?」

「そうになると話が成り立ちますね」

スバルがそういう。

「そうだな。だがバリアント・ハデスを復活させた者がいるということは大きな影が潜んでいるというのが大きく関係してくるな」

暁がそういう。

『だが問題はまだあるぞ。バリアント・ハデスのいけにえとつまり箱となってしまったミソラ君は養分を少しずつ完全に吸い取られて最終的には死という事になるぞ・・・』

「まさかミソラの体か精神の中にバリアント・ハデスが!?!そして



最終的にミソラが養分を全て吸い取られて死ぬ・・・ということに・  
」

スバルが最初、大声でいう。

「ミソラと戦った時、奴は見た目は変わっていなかったが最後、奴の動きがかなり変わった・・・。その時、きっとバリエント・ハデスの力を使った可能性があるかもな・・・」

「まさかそれが原因で吸血変異が起きている!？」

『そのまさかだ。そいつが原因で世界は闇に包まれている』

「チツ・・・」

暁は舌打ちする。

『そして、私はさらに調べてあることが分かった。君たちは今、情報がなく足止めを喰らっているだろう?』

「ああ、そうだが・・・」

『これは確実ではないが、その繁栄したメソポダミア文明の繁栄した場所へ行ってみるのが一番じゃないか?』

「確かの手がかりがない今、そこに行くしかないか・・・」

「それでケフェウス王はどうやってこの情報を?」

『それは私のFM星にはあらゆる電波体の歴史や黒に塗られしクラスからSSSクラス情報を保管しているのがあるからな。中には人や電波体が知ってはいけない、知らされてはいけない、やってはいけない禁忌まである。それはバリアント・ハデス以上・いや全てを凌駕するSSSクラスの禁忌だからな。そしてその中から情報を割り出し、君達に知らせた。そして友の母星が生命の危機にあつてると聞き私は過去に犯してしまったせめての罪滅ぼしにホントに小さなことだが役に立てればいいと・・・』

「いや、充分にいい情報だよ!!」

スバルは大きな声である。

『そしてメソポタミア文明が封印した封印禁書ハンムラビ法典の他にもう一つある。ムー文明のようにベルセルク、シノビ、ダイナソウのように3つのオーパーツみたいにメソポタミア文明は過去に闇と暗黒の力を身に纏いし暗黒剣ヴァナルガンドを片手に持ち戦う男がいた。その男は闇に満ちた大きな剣を死に際にあるところに隠したという説まである。だがそれを手にとるには相当な覚悟がいるぞ』

「何で覚悟が必要なんだ？」

レイが問う。

『あれは闇と暗黒に染まった剣だ。体に闇と暗黒の力を宿してない限り、触れた瞬間、身は闇に染まり、自我が破壊されるぞ……。だが吸血鬼化していれば普通に手にとり戦う事が出来る。切れ味はあの妖刀、ムラマサを超える切れ味だ。あの古代に栄えた世界でどうやって凄い切れ味を出したのが気になる……。』

さすが電波に関係したあらゆる情報を管理しているFM星の王だとスバルはそう思っていた。

「よし、まずはメソポタミア文明が栄えた場所……。えっと……」

「場所はイラク付近ですね。付近にティグリス川があります。それを頼りにすればきっと何かあるのでは」

やはりリサは歴史に詳しい。若いのに色んな事に興味を示すなんて凄いなと思ったスバル。

「よっしゃ！！後日、イラク付近に行くぞ！！」

暁が素晴らしい、遊撃隊な意気揚々としていた。

特にソロ。ムー文明と関係していると聞いてかなり気になっていたようだ。

## Auf t a k t | 15 真実と偽と己の意志

想定外の事実を知らされて二日が経過。

スバル達はイラク付近ティグリス川のほとりに来ていた。

空には照り付ける灼熱の太陽。

「ここが太古に滅んだメソポダミア文明が・・・」

「けどムー文明と同じくらい栄えたってケフェウス王は言っていたがそれらしいのはないですね・・・」

「ああ、だが探していけば手がかりはあるだろう」

「そうですね」

「では行きましょう!!」

リサがきびすを返して言った。

「二つに分かれて探索な。一応のため電波変換は解除するな。手がかりになるような建物があったらすぐに連絡しろ」

そしてスバルは暁と、レイはリサとソロに分かれ、イラクを探索した。手がかりになるものを、そして今後の進展となるものを――。

ウェーブロードを使い、移動する。ウェーブロードから見た街の雰囲気は穏やかだった。テロとかデモが多い国だと聞いていたがそうでもないようだ。

スバルと暁はウェーブロードで南東地域を探した。そこは何もなかった。無惨に割れた建物の窓。きっとデモかなんかで破壊されたのだろう。ゴーストタウンという雰囲気が出ていた。

「何も、誰もいないですね・・・」

「ああ・・・」

そういうスバルと暁は探索を再開した。

ウェーブロードを移動していると突然、およそ75体のメットリオが現れた。

「道封じか？」

「あの雰囲気だとそうみたいです」

「んじゃ肩慣らしに準備運動するか！」

「そうですね！」

「ロックオンソード！」

「スターソード！Σブレード！δブレード！！」

それぞれの自分主体の武器を召喚した。

二人はウェーブロードを思い切り強く蹴り約75体の電波ウイルスに攻撃した。

スバルが二対のスターソードでウイルスを斬る。ヒュンヒュンと剣が綺麗な剣筋を描きながら空気を切り裂き、敵に当たり消滅させた。

その直後、後ろに回り込んだメットリオがスバルをツルハシで突こうとした。

だが後ろにいた暁がスバルの後ろにいるメットリオをロックオンソードで切り刻んだ。

再び、暁とスバルがメットリオに接近してひたすら斬る。

だがデリートしたのはおよそ25体。無防備に正面に突っ込んだせいか、残り50体ぐらいの電波ウイルスに囲まれた。

「背中任せたぞ!!」

「メットリオ相手に本気になりすぎですよ!!」

とスバルは若干ツツコミを入れながらスバルと暁はお互いの背中を預けた。

メットリオ一匹が曖昧にジャンプしてツルハシでスバルに攻撃する。

「であっ!!」

スバルは右手のスターソードで思い切り横振りをし、メットリオをデリートした。

「スバル!!」

「暁さん!?!」

スバルは暁の声がしたため暁を向いた。

その時、暁はただうなづいた。

スバルもうなづいた。きっと目を合わせただけで意志疎通ささったのだろう。

直後、暁が真上にジャンプする。

「バトルカード! ヒートグレネード!!」

真上にいる暁が、スバルもろともメットリオ達に向けて投げた。

「バトルカード! インビジブル!!」

スバルは透明状態になった。

直後、ヒートグレネードがウェーブロード上に着弾し、辺り一面が誘爆しメットリオを一掃させた。

「ふう」

暁が額の汗を拭う。

「いい準備運動になりましたね」

「そうだな・・・」

スバルと暁は再び探索を開始した。

一方、レイ達三人側では――

「では私達は北東付近を探していきましようか」

「分かった」

「・・・」

リサの言った言葉にレイは返答し、ソロは無言でうなづいた。

レイ達側も万が一の事を考えて地上で探索するのではなくウェーブロード上から探索することにした。

探索していると北東側は至って平和だった。綺麗な公園に、綺麗な建物。そして大きな神聖的な雰囲気醸し出している大聖堂と博物館もあった。

「こちらの地域は平和のようですね・・・」

「ああ、そうだな。だが手がかりになるようなのはないな・・・」  
リサとレイがウェーブロード上から見える地上の建物や道を見てい



る。

「なあ？あれ、ウイルスじゃないか？」

レイが指差した先には100体ぐらいのメットリオがいた。

「よっしゃ！準備運動にやる・・・」

「ラプラスブレード！！七閃！！」

ソロはレイの言葉を掻き消した。

ラプラスブレードから放たれた神速の真空波はウイルス100体を一瞬で消した。

「なっ・・・」

レイは啞然。リサは苦笑いしていた。

「早く、探索再開するぞ・・・」

「お、おう」

再び三人は探索開始する。

「やはり手がかりとなるのが見当たりませんね・・・」

「俺が気になっているだがあの大聖堂と博物館が怪しいんじゃないか？」

ソロが珍しく喋った。

「私もその意見に賛成です。恐らく下手したらここはメソポダミア文明が過去に栄えた土地。ならばその現地であるここ。そして博物館や大聖堂に行けばきっと何かしらの情報が得られると思います」

「よし、じゃあスバル達を呼ぶか!!」

そういい、レイはスバルと連絡をとった。

20分後――

「これがレイ達が見つけた大聖堂か」

『確かに手がかりの臭いがプンプンするぜ!!』

久々、ウォーロックが喋った。

「アシッド、あれを見てどう思う？」

『大聖堂は恐らく無人の施設でしょう。きっとフリー解放っていうものでしょう。博物館は人がいるというのが検知されました』

「なるほど・・・ならまず大聖堂から行くか？無人なら人の目も気にせず動けるだろう」

そうここは遠く離れた場所である。

日本人は一般的に回りから子供と見られているので下手したら危険が伴うだろう。

だから無人の施設である大聖堂を優先した、

5人はウェーブロードから降りて電波変換を解除し、大聖堂の中へと入って行った。

コツコツコツと足音がする。床が模様のある綺麗な石で埋め付けられていた。

天井は高く、シャンデリアや騎士の鎧まで取り付けられていた。

中央の大きな通りを5人は足音をたてながら歩く。

そして奥についた。

色の付いた高い位置にあるステンドグラスから太陽の光が差し込み、辺りを赤や青に染める。

その高い位置についているステンドグラスの下に一つの巨大な絵があった。

恐らく古代に描かれたのだろう。

絵が見てかなり老朽化していると感じとられる。

「これは・・・」

5人が見た大きな壁画。

それは二つの文明が争っている壁画だった。

「これはメソポダミア文明とムー文明による電波戦争ですかね？」

「確かだな。右側にはムー文明だ。俺のいたムー大陸の守護神、ガーディアン達がいる。そして右奥にいるのがラ・ムーだな」

ソロはそう言った。

「左側がメソポダミア文明。左奥がバリアント・ハデスカ・・・。そしてこれがメソポダミア文明の兵士か？」

メソポダミア文明の兵士は電波で構成された騎士団だった。

片手に盾と槍、鎧を装備しムー文明と戦っている壁画だった。

「左下に説明が書いてありますね」

壁画の左下にきつと後の世代の人達に伝える為に残したであろう文字が書かれていた。

「皆、読める？」

全員同じく読めないという解答だった。

「だったらケフェウスに聞いてみるか・・・」

スバルはケフェウスと通信をとった。

『どうした？ 星河スバルよ・・・』

「メソポダミア文明の古代文字って読める？」

『ああ、読めるとも。まさか手がかりがあつたのか？』

「いや、そうでもないかもしれないが意味翻訳頼みます」

『分かった』

ケフェウスは通信画面越しにメソポダミア文明の古代文字を見る。

『これは私達メソポダミア文明が滅んだ後の君達以降の世代に伝える必須事項である。この大聖堂地下深くに変異したバリアント・ハデスが封印されている封印禁書のハンムラビ法典を地下深くに封印した。バリアント・ハデスは悪い心を持った人が封印解放しない限り、永遠と眠るだろう。だがもしもの事を考えて君達にバリアント・ハデスの事を伝えておこう。まずその圧倒的破壊力が特徴だ。そしてバリアント・ハデスを作った科学者はバリアント・ハデスが窮地に追い込まれると地の恩恵を吸い取り、極太のレーザーを放つ能力を持っている。変異してしまったバリアント・ハデスは全てを吸血変異という突然変異という奇妙な現象を起こしてしまう』

「やはり吸血変異はコイツが原因か・・・」

暁はそう言った。

『調べた結果は弱点は目だ。そしてかなりの年月が経って封印解放された場合、バリアント・ハデスは養分を吸い取るいけにえを必要とするだろう。私達はずっと願っている、こんな汚い化け物を封印解放する輩が現れないことを。そして争いをしていた私達とは違う、人が希望を捨てず当たり前の毎日を過ごす事を。そして私達、メソポダミア文明にいた一人の男が持った暗黒剣、ヴァナルガンドは南の最果ての地で封印されし……。この地下には来た者を導く……がある……。』

ケフェウスは翻訳し終えた。

「なるほど……」

スバルはケフェウスの翻訳を聞き、頭の整頓をし始めた。

「最後、翻訳できなかったんですか？」

『済まない、そこだけがわからなかった』

「どうします？ 曉さん？」

「とりあえずその導く何かが気になるな……。きっとメソポダミア文明が過去に封印した封印禁書ハンムラビ法典は負の遺産だ。きつと守るために罠とかあるだろう……」

「それを知ってていくのか？」

「そうでもしなきゃ前に進めない。多少、危険は伴うさ」

「では、どうやって地下に行きます？」

リサがそう言った。

「「確かに・・・」」

スバルと暁とレイが声を揃えて言った。

「・・・では探索しましょうか・・・」

リサは苦笑いしながら言った。

まずは地下の行き方から始まったのであった。

## Auf t a k t | 1 6 4つの謎

「さて、地下の行き方を探すか・・・」

「また地下ですかい・・・」

レイがそういった。

そして探索が開始された。

ちなみに5人の現在地は大聖堂の大広間にいた。

大聖堂の回りを見ると左側に二つの通路が、そして右側を見ると二つの通路があった。

「通路が4つか・・・4つに分断させて行動するか・・・」

「私もそれに賛成です。そこに行けば何かあるかも知れません」

「じゃあとりあえず、どう分ける？」

「俺がここで待機する。何かあるかもしれないからな」

レイがそう言った。

「分かった。なら左側の二つの通路、手前はスバル、奥はリサ。右側は手前は俺、奥がソロで行こう」

「分かりました」



「了解」

「・・・」

三者三様の返事をした。

「よし、各自散開！その後はここに集合な！」

4人はばらばらになった。

（待ってるのも暇だし、寝るか・・・）

レイは大聖堂の大通りにある長椅子に座って眠りの世界へと誘われた。

リサが向かった左奥の通路の向こうに広がる空間にはたくさん綺麗に並べられた長椅子とその部屋の横にはステンドグラスがありそのガラス越しに太陽の光が降り注ぎ光を複雑に屈折させていた。

「何もないですね・・・」

リサの言った言葉が大聖堂の高い天井まで届き声が跳ね返って聞こえてきた。

そしてリサは大部屋の中央を歩きはじめた。中央を歩くと、両サイドには長い長椅子が並んでいる。さらに高い位置にあるステンドグラスが辺りを明るくする。

「ここに階段が？」

リサは部屋の端に階段を発見した。

「この先に何があるんだろ？」

リサはその先に何があるのか興味津々になり階段を上って行った。

2階は至って何もない空間だった。天井は普通の家と同じくらいの高さ。

窓は標準的位置に設置されてあった。

部屋には大聖堂を支える為の柱がついていた。

部屋の奥にはきつと過去に使ったであろう燭台がついていた。

燭台には無数の蝋燭がついており蝋燭には針の先端が黒いすすで覆われていた。蝋燭の根本には溶けて固まったろうの跡。

「何にもないですね……。あるといたらこの年期のある燭台だけ」

リサはそういいながら燭台に近付いた。

「これは？」

燭台の横には妙は丸いくぼみがあった。くぼみの回りには魔法陣らしき模様が彫られていた。

「何かの壁画的感じ？」

リサはそういい、さらに横にあった壁に貼られている紙を見る。

「あ、これ……」

壁に貼られた紙を見る。

何故かは分からないが現代語訳されていた。

「我を導く複数の光、その光が重なり束となった場所に新たな一歩へと導く紅玉があるだろう。そして紅玉を魔法陣へと導け」

リサは紙に書いてある文字を読んだ。

「どういうことかしら？」

リサは考えながら一度、大聖堂に集合しに行った。

次はスバル視点。

『なあ、スバル？』

「なんだい？ウォーロック？」

スバルは移動しながらハンターV Gの中で待機しているウォーロックに話し返した。

『ミソラとハープは今頃、何をしているんだろうな』

「それは僕も気になるさ。ミソラは一体何処で何をしてるのか・・・」

二人はそう会話しつつ細い通路の先には広いかなりの書物が棚に綺麗に並べられていた部屋に来了。

「うわっ・・・凄い本の量・・・」

『見てると目が痛くなる・・・』

スバルとウォーロックは本が並べられている棚に近付いた。  
近付くと一冊、一冊の本の圧力が凄かった。

「これ、何だろ？」

スバルは一冊の本を取り出した

「何々？災いと破壊の元凶？」

本のタイトルはスバルにとっては理解できなかった。

『意味分かんねえな・・・』

「全くだ・・・」

スバルは分厚い本を元の場所に戻した。

そして部屋を歩く。

するとスバルの映った視界にまた一つの通路が映る。

「まだ通路が・・・」

スバルは興味という感覚に襲われた。

また一つの別の通路にスバルは向かって行った。

通路は右に曲がり、かなり進んだ先にはさらに右にへと曲がり角があった。

スバルは奥に進む。

進んだ先は、リサと同じ部屋で柱があり、部屋の奥には燭台、やはり使われた形跡があった。魔法陣らしき彫りとくぼみがあった。

そして横にはやはり壁に貼り付けられた現代語訳されている紙があった。

『スバル、これは？』

「まって・・・」

スバルは紙を一通り見てみる。

「小さな紙の集まり一つの細い縦長の紙の山、そのそれぞれの束の頭の文字をほ、き、う、さの四つの頭文字がある紙の束の書物を押せ。さすれば黄玉が己の前に現れ、きっと主を導くであろう」

『どういうことだ？』

「さあ？僕にもさっぱり理解できない・・・」

スバルとウォーロックはうなっていた。

「とりあえず、みんなと合流しよう・・・」

スバルとウォーロックは大聖堂中央広間へ向かった。

右側、暁では――

「全く、なんか今回は地下探索が多いな～～」

『これも何かの縁ですよシドウ』

「確かにそうだな・・・」

暁は苦笑いしながら通路を移動する。

そして光が差し込む通路の向こう側では、来たものを威圧させる、待ち構えている雰囲気をもしだしている獣の像が4体いた。

「うひゃ～～これは結構威圧感あるな・・・」

暁は4つの獣の石像に圧倒される。

『これは雰囲気的に古代に彫刻された像ですね。何のために彫刻したかはわかりませんが・・・』

「ああ、確かにそうだが……。だが本当に古代に彫刻された作品なのか？とてもそうには見えないが……」

そういうながら、左に2体の石像、右に2体の石造の間を通る暁たちの視界の向こうにきになるのが暁の目に映った。

「アシッド、あれは？」

『燭台とこれはなんかのをはめるやつですかね？』

暁とアシッドが話してたのは、もちろんスバルやリサの探索している部分にもあったように燭台と謎のくぼみ、そして壁に貼られた謎の紙があった。

『シドウ、これを見てください』

「なんだこれは？」

『恐らく、過去に描かれた文字でしょう。でもなぜか現代語訳されています……』

「本当だ……なにに？」

「待ち構える4つの獣。その4つの獣の命が破壊されるとき、蒼玉が己の姿の前にあらわすだろう」

「どういう意味だ？」

『私はよく分かりませんが、きっとあの石像が関係してるのでは？』

「なるほど・・・なら一回、帰還して情報収集するぞ」

暁とアシッドは中央広間へと向かっていった。

最後、右の通路に行ったソロ。

「一体、俺の知らないところで、ムーの関係した歴史があったとは・  
」

ソロはうなっていた。当たり前だろう。彼は唯一のムーの生き残り。  
きつとムーに関係した些細なことでも気になるはずだ。

「どうやら通路をぬけたみたいだな」

ソロは一人で言う。

やはりここもみんなと同じ、燭台、くぼみ、壁に貼られた紙があっ  
た。ここはいたってなんもなかった。

あるのは柱と部屋を明るくする窓からさしこむ太陽の光だけ。

「なんだこれは・・・それにこの文章は？・・・」

「己の意志を貫き通せ。意志と自我をコントロールしろ。さすれば  
主を導く碧玉が現れるだろう」

「つまり、自分を見失いようにしろってことか？」



「まあ、いい。一度奴らと合流するか・・」

そういい、ソロは中央広間へと向かっていった。

そして再び5人が終結。

中央広間に4人が来た瞬間。

「「「・・・・・」」」

ソロを除く3人が絶句していた。

それは当たり前だろう。長椅子には寝ているレイの姿があったからだ。

「レ~~~~イ~~~~」

スバルが若干怒り気味でいう。

「ん? どうした?」

レイが目覚めた。その直後、自分の行動を見て一気に目が覚めた。

「ちょっと、痛いけど我慢しろよ〜」

暁が悪戯笑みを浮かべながら片手にあるものを持ち、そういった。

「え?」

レイはポカーンとして口を開けた。

「おりゃあ!!」

暁は腰のポーチから取り出したうまい棒のかなり辛い激辛のうまい棒・・・というより辛い棒をレイの口に無理矢理押し込んだ。

無論、レイの口の中が炎上したというのはいうまでもない。

「さて、さぼり処理も終わりましたし、どうします?」

「じゃあ、皆が手に入れた情報を言ってみてくれ」

ここから4人の手に入れた情報の発表が始まり、そして地下へ行く手がかりを少しずつ見つけようとしていた。

## Auf t a k t | 17 解明

「よし、各個発見した情報を報告してくれ」

暁が発表の指揮をとった。

「では私から」

リサは右手を少し上げて、発表した。

「まず、私が向かった左側の通路の向こうには長椅子とステンドグラスがあり、いかにも教会や結婚式の式場っていう雰囲気でした。そして階段があり上った先には一つの燭台と一つのくぼみ、最後に謎の紙」

「それ、僕の向かった所にもあったよ・・・」

「俺もだ」

「・・・」

三者三様の返事をする。

リサの言った言葉にスバルと暁はうなづき、ソロは無言でうなづいた。

「そして紙には、我を導く複数の光、その光が重なり束となった場

所に新たな一步へと導く紅玉があるだろう。そして紅玉を魔法陣へと導け・・・と描いてありました」

「我を導く複数の光・・・、紅玉・・・、そして魔法陣か・・・」  
暁は手を顎にあてて考える。

「光が重なり束になったときが気になりますね・・・」

「ああ、だが複数の光は一体何なんだろうな・・・」

「とりあえず、そこに行ってみませんか？」

リサがそう提案する。

「だな。現地に行けば何か分かるかも知れない」

そして全員がリサの向かった部屋へと向かった。

通路の先は広がる空間には長椅子とステンドグラス越しに差し込む太陽の光。

それを見たスバルに一瞬の閃きが頭をよぎる。

「ねえ、思ったんだけどさ複数の光ってあのステンドグラス越しに差し込む太陽の事、じゃないのかな？」

「確かに光って太陽の光だな。そしてステンドグラス越しに差し込

む複数の光。これである程度で話が成り立つな」

「けど光は束になってないぞ・・・」

暁の発した言葉にレイが問題点を加える。

「だが光の差し込む先を見てみる。何か集まって来てないか？」

全員は光の差し込む先を見る。

「本当だ」

「私はあのステンドグラスが光を屈折させていると思います。今は時間はそろそろ正午になります。太陽が真上に来る時間帯。太陽が真上から降り注ぎ、そして真上から降り注ぐことでステンドグラスが起こす屈折できっと分かると思います」

「なるほど・・・ステンドグラスが光を屈折することで束になる。その光の束の付近に紅玉があるんだな・・・」

時は正午前、ステンドグラス越しに屈折する光は束になり紅玉がある場所へと指差そうとしていた。

「ほら、見てみる。光の指す先が・・・」

光の指す先は部屋の真ん中だった。

「あそこに紅玉があるんだな・・・」

5人が光差すところに向かった。

「何かあるぞ？」

光差す足元の床に何かあった。

「これは？」

暁は手で床に触れてみる。

次の瞬間、床が自動で開いて、紅玉が姿を現した。

「これが紅玉か・・・」

暁が手にもってそういう。紅玉は赤く透き通っていてかなり透明度が高くつやつやしていた。

「これをあの階段を上った先にあるくぼみに紅玉ぶち込めばいいんだな」

「んじゃレイ、汚名返上にお前行って来い」

「ういゝす」

レイはめんどくさそうに紅玉を受け取り、階段を上って行った。

「これか・・・」

階段を上った先の部屋の奥にあったくぼみに紅玉をはめた。

その後、少しだけ地鳴りがした。

「何なんだこの地鳴りは？」

レイは疑問を持ちながら階段を降りて行った。

「何か変化あったか？」

暁がレイが階段を降りて来る姿を見て何か変化があったか問いてみる。

「いや、地鳴りがただけで何も変化が無かった」

「4つの玉をはめなきゃ意味がないんじゃないか？」

暁がそう行った。

そういい、5人は大聖堂大広間へ向かう。

5人の視線がある場所に向かった。

「これは・・・？」

床に謎の模様が見える。

「まだ分からないが、とりあえず残りの3つをはめてみれば分かるだろう」

レイはそう言った。

「次はスバル、お前が報告しろ」

暁がそう言う。

「あ、はい。僕が向かった通路の先は大きな書物が並べられている図書館みたいなどこでした。そして皆と同じ通り燭台とくぼみがあり、そして紙にはこう書いてありました。小さな紙の集まり一つの細い縦長の紙の山、そのそれぞれの束の頭の文字をほ、き、う、さの四つの頭文字がある紙の束の書物を押せ。さすれば黄玉が己の前に現れ、きつと主を導くであろう……。と書いてありました」

「やはり、謎解きをして玉を見つけるパターンか・・・」

「これは・・・きつとその図書館らしき場所にあるその大きな本を押せって示してますわね」

リサは勘が鋭い。すぐに解明していた。

「きつと、小さな紙の集まり・・・これは分厚い本の事を示してますわね。そしてそれぞれの束の頭の頭文字、それはきつと本のタイトルの最初の一文字目ですわね」

「なるほど・・・つまりその図書館の場所にある本の最初の一文字目がほ、き、う、さの4つの本を押せばいいんだな」

「でもなんで押すんだ？」



レイが問いてみた。

「きっと本の奥にスイッチでもあるんじゃないか？紙に書いてみる通りにやってみるのが一番いいさ」

そういうながら5人はスバルが向かった本がたくさんある場所へと向かう。

そして5人は到着した。

「うわっ・・・すごい書物の量・・・」

レイは啞然していた。

「では探していきましようか・・・」

リサは何ともないように本を取り、さらに中身を見て読んでいた。

20分後――

「これはどうなんだ？崩壊と滅びの前兆っていう本だが・・・」

「きっとこれじゃないか？ほら、本を取った奥になんか出っ張ったのがあるぞ？」

「じゃあこれだな、本を元の場所に戻して押すんだ」

レイと暁がやりとりをする。

ソロは相変わらず無口で探していた。

「……禁忌か……」

ソロが一冊を取った本は頭文字が「き」だった。

ソロは本を元の場所に戻し、本を押した。

「なかなかみつからないな……」

スバルは大きな本を一冊ずつ取りながらほんのタイトルを見て探し続ける。

「これも違う……。あゝこれも違う。なんかほとんど出てこない・」

スバルは累計20冊弱手にとって探していたが今だ一冊も当たってなかった。

それは当たり前だろう。こんなにたくさん本があるのにそう簡単に残りの二冊を簡単に見つけられるはずがない。

「あ、あった」

リサは一冊の本を手にとった。

「なんで、そう簡単に見つかるんですか!？」

スバルが他の3人の探し物をあっさりと見つけていた。

なんで自分だけが見つからないと思っていた次の瞬間、暁が、

「あ、あったぞ。最後の旅路っていう本だ」

「ええ〜〜〜〜!!!!」

そして暁は本を元の場所へと戻し、本を押した。スバル以外の4人は速攻見つけてしまった。一番探していたスバルだけ空回りしていた。

スバルは床に手を付き、「なんて運がないんだ・・・」と悶絶しながら落ち込んでいた。

4つの本の奥にあるスイッチを押した。

直後、部屋の真ん中に床が開いて、黄玉が出てきた。

「これが、黄玉・・・」

スバルはここぞとばかりに何故か早く黄玉が出てきた場所へいち早く向かい、黄玉を手にとった。

透き通るような黄色い透けた玉。見てるだけで魅了された。

「これ、僕が持っていけます」

「おう、任せたぞ」

スバルはそういい、奥の通路へと進み黄玉をはめにいく。

通路の先にはさつきみた同じ部屋。スバルは一直線にくぼみにむかい黄玉をはめた。

はめた瞬間、再び地鳴りがなり、そしておさまった。

「なんだったんだ？ またあそこに壁画みたいな模様が現れてたりして・・・」

スバルはそういい、通路を再び歩き4人と合流して大聖堂大広間へと向かった。

「うわ・・・これはすごいな・・・」

大広間に現れた模様。それは広大な大地と空が描かれていた。

最初はなんの模様わからなかった。だが2つも玉が揃えば大胆理解出来た。

だがどういう仕組みでこういう風に絵が浮かび上がるのかが分からなかった。

「後二つか・・・」

「ええ、そうですね・・・」

「このまま4つ全部解読して何事もなく進めばいいんですが大概是、邪魔が入るんですよね・・・」リサは苦笑いしながらそう言った。

運命はスバル達に味方するのか敵になるのか・・・全ては偶然の神に

委ねられたのであった。

## Auf t a k t | 18 絆の戦士と孤高の戦士

「うし、次は右の部屋だな」

前回、スバル達は左の四つの謎解きのうち、二つの謎を解読して、そして現在は後二つの謎を解読する所であった。

解読した二つの謎、一つは光の屈折し束となった場所に紅玉をあり、それをくぼみに埋め込め解読終了。

もう一つは図書館の謎を解読し、黄玉を手に入れて、再びくぼみに埋め込め解読終了。

そして今、解読する謎。

それはソロが発見した謎はこれだった。

己の意志を貫き通せ。意志と自我をコントロールしろ。さすれば主を導く碧玉が現れるだろう。

「この意味は一体、何なんだろうな・・・」

「さあ・・・」

「己の意志を見せつけろ？ってことじゃないでしょうか？」  
「でもどうやって？」

「「「・・・」」」

ソロを除く4人が黙り込んでしまった。

『これは私の推測ですが・・・』

突然、アシッドが口を開いた。

「なんだ？言ってみろ」

暁は自分の相棒の考えが気になり聞いてみた。

『私達が探索した部屋、あの部屋に神聖な雰囲気を出している獣の石像がありました。あれはきつと相当な価値のある石像。神聖な石像を壊す覚悟を見せろ、という意味ではないでしょうか？』

「なるほど・・・意志と自我をコントロールが気になるが・・・」

『そこは私もはっきりとした確信はありませんが私達が調べた部屋に貼られていた紙には、待ち構える4つの獣。その4つの獣の命が破壊されるとき、蒼玉が己の姿の前にあらわすだろうと・・・』

「なるほど・・・とりあえずぶっ壊してみれば全てが分かるはずだ・・・」

そういい5人は石像のある場所に向かった。

「これが獣の石像・・・」

スバルは4つの石像を見た。

危ない雰囲気はかなり出ていた。野生の狼みたいな風貌をしており、不用意に近付いてきた者を鋭い歯で食いちぎってしまう歯と鋭い爪を持っていた石像だった。

「よし、スバル。あえてここはお前が電波変換して石像をぶっ壊せ」

「あえて！？まあいいですが・・・責任は貴方が持つてくださいよ、暁さん」

「分かった」

「トランスコード！シューティング・スター・ロックマン！！」

スバルは青い光に包まれて、その中から世界の英雄、ロックマンが現れた。

現れたロックマン（スバル）はロックバスターを撃つ構えをした。

狙いを定め、まず一つの石像に三つの弾丸を発射する。

三つの弾丸が一直線に獣の石像に向かう。

そして着弾する瞬間――

「ギャオオオオオオ！！」



突然、獣の石像が動き出し覇気でロックバスターを弾き飛ばした。

その後、三体の獣の石像も動き出す。

『やはり、私の予想通りでしたか・・・』

「何で今頃言うの！？最初に言ってよ！！心の準備が出来てないじゃない！！！」

とスバルがアシッドにそう言ったら獣が鋭い前足の爪で攻撃してきた。

「ってうわっ！」

スバルはバックジャンプして回避した。

バックジャンプした先に獣がいた。

「しまった！！！」

空中ではそのジャンプした方向に運動が働いているため方向転換は中々出来ない。

頭の危険信号が鳴り響く。

まずい、くらくとスバルはそう思いながら身を固くして攻撃に備えた。

そして獣が右足を振り上げてこちらに向かって来るスバルを刻もうとした瞬間、スバルと獣の間に一筋の影が割り込んだ。

一筋の影の姿は電波変換したソロだった。

そして獣の右足の攻撃をソロはラプラスソードで止める。

「なっ！？ソロ！？」

「勘違いするな！！俺は知らなかったムーとメソポタミアの関係について知りたいだけだ！！早く剣を持て！ロクマン！！」

「ソロ・・・、分かった！」

スバルはうなづき、そして――

「スターソード！Σブレード！δブレード！」

自分が使う二対の剣を召喚した。

「よし、であっ！！」

ソロはスバルが剣を持ったのを確認して、獣の右足を吹き飛ばし、その後ラプラスソードで吹っ飛ばした。

そしてスバルの近くに後退するソロ。

「俺の足を引っ張るなよ！！世界を救った英雄さんよ！！」

「それはこっちの台詞だ!! 君こそ足を引っ張るなよ!!」

「フン! お互い様だ!!」

「絆の戦士と孤高の戦士・・・中々いい組み合わせだな。な、アシツド」

『貴方はただの菓子戦士じゃありませんか・・・』

「うっ・・・菓子の戦士・・・か・・・」

暁はさらっと言ったアシツドの言葉に心が折れてしまった。

そして床に挫折し悶絶する。

「案外脆いんだな・・・」

「人は見かけによらないんですね・・・」

レイとリサがそれぞれの感想を漏らす。

「であっ!!」

「はあっ!!」

スバルがスターソードを、ソロがラプラスソードを標的に向かって

振り回す。

2対4の戦いに対して囲まれたら不利だと感じていた戦闘の熟練者達、ソロとスバルはそう感じていた。

なるべく囲まれないよう周りを見て攻撃を加える部分は加えていた。

「そこだ!!」

スバルは周り込んで一体の獣の左後ろ足を三回切り付けた。

スバルの後ろから獣の狼が味方を助けようと右前足を振り上げ切り刻もうとする。

「させるかっ!!」

ソロはスバルのフォローをしてグラウンドブレイクソードで獣を吹き飛ばした。

そして再びスバルはフリーになり余裕があったためスターソードを使いさつき切り付けた獣の左後ろ足をなるべく深く切り付けた。

直後、スバルは危険から逃れる為、距離をとる。

ソロのグラウンドブレイクソードで大きく傷ついた獣と左後ろ足を重点的に攻撃されて、不安定となっている獣。

この二匹は今、半ば死に体だろう。

動きに焦りと苦しさが出ていた。

「さすがにコンビネーションがいいな」

レイが評価の声を上げる。

「彼らは何度も戦い、何度も剣を交え、拳を交えた永遠のライバルだ。きつとお互いの行動が理解できるのだろう。結ばれない関係だとしても、気付いてないだけでも知れないが、二人は別の意味での絆というのに結ばれている存在だ。意志疎通が簡単に出来てしまうんだろうな」

「ふうん・・・」

レイはそう頷き、ちらっとリサの横顔を見る。

「どうしたのレイ？私の顔に何か付いているんですか？」

「いや・・・何にも・・・」

「だったら何なの？」

「いや、なんでもない・・・」

リサはレイの挙動不審さに頭にはてなが出ていた。

それを見ていた暁は一瞬で理解した。恋愛という恋の意識ではない。スバルとソロのような意志疎通が出来る関係についてだ。

「フツ・・・」

暁は少しだけ笑顔を漏らす。

再び視線はスバル達へ――

スバルが攻撃したらソロがその援護、フォローに回り、逆にソロが攻撃したらスバルが援護、フォローをしての繰り返しだった。

「スターソード！！流星！銀河！！十文字切り！！」

スバルはスターソードの必殺技を使い、スバルが左後ろ足を重点的に切り付けた獣を狙った。

十の文字を描くように斬る必殺技。

それが流星銀河十文字切り。

華麗な一撃は確実に獣を仕留めた。

「よし！後三体！！」

「油断するな！！来てるぞ！！」

ソロが注意の声を出す。

「え？　ってうわっ！！」

スバルは敵を一体倒した為、心の隙と油断が出来てしまった。その為、敵が接近しているのに気付いていなかったのだ。

だがスバルはとっさに体を動かし回避・・・というより反射が働き体が無意識に動いた。そして距離をとり、安全圏へと退避する。

「ふう・・・ビックリしたあ・・・」

スバルは冷や汗をかきながらそう言った。

「もう一度行くぞ！！」

「ミスしないでよ！！」

ソロとスバルはそういういながら、三体の獣に接近する。

「太陽銃、ガン・デル・ソル！！」

スバルは接近しながら太陽銃、ガン・デル・ソルを召喚した。ソロは後ろを向かずただ前を向いて獣との距離を埋めていった。

「皆！　目を庇って！！」

スバルがそういう暁達は目を右手で守るように構えた。

「ガン・デル・ソル！グレネード！フラッシュユ！」

スバルはフラッシュ弾を使い、辺りを白い閃光と強烈な光に包ませた。

強烈な光は獣の三体の目を焼いた。

光で目が焼かれてしまった獣達は一時的だが目が見えない。

獣達はのたうち回っていた。

「今だ！！！」

「はああああ！！ブライブレイク！！！」

ソロはジャンプして渾身の一撃を放ち、2体の獣を消した。

「スターツインソード！！いけええええ！！！」

スバルは剣の柄と柄を合わせて剣を作った。

舞うように敵を切り付けて、とどめに敵をアップー攻撃で打ち上げた。

宙を舞っている敵に更に一撃の洗礼が加わる。

「であっ！！！」



なぜかソロが出てきて、宙を舞っている獣を上から足でおもいきり踏み、床へと吹っ飛ばした

そして床へとたたき付けられた獣は起き上がる事なく消滅した。

直後、獣が座っていた台座の上から二つの玉が出てきた。

「やはり碧玉と蒼玉が出てきたか」

暁が声を上げる。

「でも意志・・・って？」

「細かい事はどうでもいいだろ。今は潜入だ」

暁がそう言ったがスバルはかなり気になっていた。

「私は碧玉をはめに行ってきますね」

リサはそういい、碧玉を持ち、移動していった。

「じゃあ僕が蒼玉をはめに行ってきます」

「分かった」

4つの玉を埋め込んだその先に何があるのか・・・。

そしてまだまだ先だがスバルは全てを凌駕する運命に立たされようとしていた。

## Auf t a k t | 19 潜入

遂に5人は玉をくぼみにはめた。

玉をはめた時に地鳴りがなり、そして大聖堂大広間には遂に入口が出現していた。

入口付近にある絵。

描かれているのは広大な大地、無限に広がる空と海、そして陸で生活する古代の人の絵だった。

現代のような上手い絵ではないが、昔の人の生活の様子が現れていた。

大聖堂大広間にいる5人はこの絵を見て――

「玉をはめると絵が浮かび上がり、そして階段出現した。太古の時代に作られたというのに何と言う凄い技術だな・・・」

「ええ・・・全くだすよ・・・」

スバルと暁がさういう。

そして5人は暁を先頭に地下へと続く階段を降りる。

光が地に届く地上から、光が差さない地下の世界へスバルたちは潜

入した。

階段を下りて地下に入った瞬間、スバルたちの顔に冷たい空気の風が当たる。

スバルたちは動いた後なので、きっと体も少し火照っているだろう。火照った頬に冷たい風が当たって気持ちいいとスバルはそう感じていた。

「風か・・・ならどこかに地上らしき入口があるはずだよな？」

暁がどういいながら階段を下りていく。

「え？なんですか？暁さん・・・」

「ほら、地下って気流とか何も風を起こすのがないだろ？だが今の場合、風が地下から地上に向かって吹いている。ということはどこかの場所に地上とつながる場所があり、そこを伝って風がふいているというわけだ」

「なるほど・・・。つまり簡単に表現すれば通気口みたいなのがこの地下のどこかにあるということですね？」

「ああ、簡単にあらわせばそうだな」

スバルと暁がそう話しながら、冷たい地下の空気の風を浴びながらようやく階段を下りきった。

ピチヨン、ピチヨンと天井から滴り落ちる水滴の音が聞こえた。

地下にたどり着くとかなり昔の雰囲気が出ていた。床は石畳で覆われていて壁も石だった。だが、かなりの年月がたっていたのだろう。壁には苔や雑草が生えていた。壁に取り付けられている小型の燭台のろうそくは使われてた形跡があった。

「よし、いか・・・」

暁の発した言葉が綺麗にこだまする。

5人がひとつの通路を進む。

横にとりつけられている燭台を見た瞬間、ボツ！と燭台にとりつけられている蠟燭が火をあげて、辺りを明るく点らせた。

「なんもしてないのにろうそくに火が・・・」

「とりあえず、この奥にやはり何かあるんだな・・・」

そういいつつ、スバルたちは緊張の糸を切らさないように進軍する。

コツコツコツと床の石の歩く音が響き、辺りに音を反射させる。

ただの一本道がずっと続いた。天井の隅には蜘蛛の巣が、横には不自然に火がついた蝋燭が、そしてスバルたちと向かい風に吹く謎の冷たい風。

同じ風景が続いた。

「まだかよ・・・」

レイが声を上げた。

「お、よかったなレイ。別の風景が見れるぞ」

「マジか!!」

レイはそういい、先頭に出る。

それは、まるで王を守るような雰囲気をかもしだした西洋風の騎士の姿があった。それが何人も道の横に並べられていた。片手には槍、片手には盾を持っていた。

「これは・・・」

「ムー文明とメソポダミア文明が争った時にあった騎士の様子だな」

「ええ、そうですね・・・」

暁とリサが興味津々な顔で見る。ちなみにソロも騎士の姿を見ていた。

レイは「こんなものどーでもいい」とか言ったりしていた。

それを見ていたスバルは苦笑い。

そしてスバルはどうでもよくなっているレイをほっという騎士の姿を見に行った。

「へえーこれがメソポダミア文明の騎士の姿かぁ・・・カッコいいな・・・」

スバルは騎士の姿に視線が釘付けだった。

「んなもんどこがいいんだよ・・・」

「こんなもん、ぶっ壊したいくらいだわ・・・」

レイがとんでもないセリフを吐く。

「何言ってるのレイ！！こんなメソポダミア文明の古代の人々が残した遺産に壊したいとかってなんなんですか！？さわらぬ神にたりなしくて言葉してます！？」

リサがレイに叱咤した。

「知ってるよ。冗談で言ったんだよ、冗談」

「ならいいですけど・・・。少しは時と場に応じた行動をしてください」

「ういゝゝす」

（人は見た目によらないもんだな・・・）

暁が本気ではないだろうが怒ったリサの姿を見て一步下がっていた。あれこそさわらぬ神にたたりなしだろうと暁は仲間でありながら失礼なことを思っていた。

「じゃ、気を取り直してまたいくか・・・」

「「はい!!」」

「おう!!」

「・・・」

三者三様の返事をして騎士の姿を後にし、進軍を再開する。

そして騎士の亡骸を後にした瞬間――

突如、騎士が動き出した。

「なっ!？」

いち早くその様子に気づいたソロが声を上げ、電波変換した。

「どうしたのソロ!？」

そうスバルがいい、他の皆も後ろを向いて騎士の様子に目を丸くする。

「とりあえず・・・」

「「「トランスコード!!!!」」」

ソロを除く4人は電波変換した。

「なんで動き始めたんだ？」

「きっとケフェウスが言っていたことだ。この奥には封印禁書ハンムラビ法典があると・・・。きっとそれを守るための防衛ラインだろう。これぐらいの事があると招致はしていたさ」

暁がそう言う。

騎士は10体、スバルたちは5人。数は不利だった。

だがそれを埋めるのが遊撃隊の司令塔、リサの出番だった。

瞬間的な閃きを持つ彼女はすぐに作戦を考えた。

「レイとソロさんとスバルさんと暁さんで前衛をお願いします。敵は10体、盾を持っていますので防がれるのを覚悟してください! 防御されたら前衛の誰かがフォローして回り込んで斬りこんでくだ



さい！まわりこさせるために私が牽制させますので！かこまれないように戦ってください！」

「了解！！」

「了解と・・・」

「・・・」

スバルはスターソードを、ソロはラプラスソードを、暁はロックオンソードを、レイはビームサイズを召喚して前衛にたった。といってもスバルはもちろんの事、中盤役にちかいのだが。

「よいいくぞ！！」

暁がまず最初に攻撃した。

床を強く蹴って正面から突っ込む。

騎士たちは暁の様子をみて盾を構える。

「あまいんだよ！！」

暁が声を上げた。

騎士たちは突っ込んでくる暁に視線が行っていたため左右に回り込んでいたレイとソロに気づいてなかった。

左右からソロとレイの剣と鎌の洗礼が加わる。

「でああああ！！」

「うおおおお！！」

ビームサイズが騎士一体を捉えて消滅。ラプラスソードが騎士一体を捉えて一体を消滅させた。

そして仲間二体が消されたことにより注意が二人に行く。

暁への注意が曖昧になった。

「いまだ！！」

暁は正面にいた騎士をロックオンソードで斬りつけて消滅させる。

残り7体。ここまでは上々だった。

5人は散開している。騎士を取り囲むように位置どりをしていた。

「はあっ！！」

リサが限界まで絞った弓の弦を引き、三本の矢を放った。

三本同時に放つ高度の技術も彼女は何ともないようにしていた。

綺麗な線を描く矢は騎士達へと一直線へと向かう。

矢は確実に騎士を捉えたが盾で防がれてしまった。

だが防がれてもそれをカバーしてくれる仲間がいる。

盾は防いだ位置しか防いでくれない。つまり横はがら空きという訳だ。

防がれたその直後、真上、左、右とそれぞれ散開していたスバルとソロと暁が出てくる。

「でああああっ!!」

「うおおおおっ!!」

「はああああっ!!」

三人がそれぞれの武器で横、真上ががら空きの敵を切り付けた。

また三体消滅。

この調子で上手く全部倒せると思っていた遊撃隊であった。

だが現実はどうあまくはなかった。

メソポタミア文明が残した騎士の亡骸に覚醒の兆しが訪れようとしていた。

状況は優勢だった。スバル達は冷静に確実に騎士達を一体ずつチームのコンビネーションバトルで仕留めていき、10体いた騎士も現在は4体へと数を減らしていた。

スバル達のコンビネーションバトルによる連携で5人の電波変換状態での身体の疲労はまだごく薄い。まだまだ戦えるはずだった。きつとすぐに倒せるはずだった。だが現実はそうはあまくなかった。

「よし残りは4体だ!! 気を引き締めてけよ!!」

と暁が仲間に注意の声を出す。大概、人というのは余裕が出てくると油断という言葉が出てくる。それは当たり前だろう。最初は10体いた騎士をあつという間に4体に削らせた。きつと一人ぐらいは緊張の糸が切れかけてるだろう。あえて暁は皆に油断させないように集中の言葉を加えた。

「「了解!!!」」

ソロを除くスバル、レイ、リサが返事の声を出した。相変わらずソロは無言で頷くだけ。

5人の戦術は一人が囨になり、仲間の注意が曖昧になった所で仲間が切り込みに行く戦術である。そして切り込んだ時の退避時に時間を稼ぐためのリサの弓による意識牽制をして仲間の危険性を減らすパターンであった。

5人が再度散開して纏まらないようにする。そうすることで仲間の危険性がグッと減るのである。

「行くぞ!!」

ソロがラプラスソードから細い太刀をしたラプラスブレードに変換させた。そして一気に騎士一体へと間合いを詰める。

リサはソロの行動を読んでいたのかりサは他の騎士三体に弓の牽制攻撃をして注意をこちらへ向けさせた。

騎士達はリサを現在、最も危険な存在と思い、意識がリサへと向いた。そうすることでソロを騎士へとの一对一の状況へと持ちこませた。

「よし食いついた!!レイ! 暁さん! 支援お願いします!!」

「分かった!!」

「おう!!」

レイと暁がリサの支援に回る。

リサは遠距離武器を所持しているため至近距離に潜られたら何も出来ない。リサはだから近接武器を持っているレイと暁を呼んだ。

ソロはリサの支援にフツと小さな涼しい顔を漏らし、目の前への敵へと集中する。

距離を詰めていくソロ。一步、また一步、そしてまた一步とどんど

ん距離を詰めて、そして剣が届く距離に達した瞬間、ソロは剣の柄を強く握った。

そして剣を振れば確実に敵を斬ることが出来る位置である。

だが剣の扱いと戦闘の熟練者は距離を詰めたからって、ただ普通には切り込まない。あの手この手加えていくのが、熟練者のやり方であった。

距離が剣の届く位置に達した瞬間、ソロは剣を振り上げた。

騎士はソロの動きに対応し盾を前に出した。

「あまいんだよ!!」

ソロはステップを使い、切り込むふりをして敵の後ろに華麗に回り込む。後ろはがら空きであった。

「はああああ!!!」

ソロがラプラスブレードを振り上げる。体重移動を使い、威力と速度をラプラスブレードの切っ先へと乗せる。ラプラスブレードは空気を切り裂く音を立てながら騎士へと申し分のないスピードで襲い掛かる。

だが騎士はソロの動きに反応した。盾を捨てて、槍でラプラスブレードを防ぐ。槍と相当な剣のスピードのラプラスブレードがぶつかり合い、辺りに火花と大きな音をばらまかす。

「なっ!?!」

ソロは驚いてしまった。確実にフェイントに食いつき、完璧に後ろ

をとり、すぐに攻撃に展開した。だがその動きに対応した騎士。敵ながら中々やるとソロはそう思っていた。

「だが、まだだああ!!」

ソロはすぐに体重移動を再び使い、低姿勢になりラプラスブレードで切り込んだ。狙ったのは足であった。足を狙って負傷させようとソロは考えていたのだ。

だがそれも簡単に防がれてしまう。その直後、騎士はすぐに反撃に展開した。槍でソロに向かって突きを繰り出した。

「チッ!!」

ソロは持ち前の反射神経を使い槍の攻撃を回避した。そしてバックジャンプをして距離をとる。

「さすがはムー文明と対立したメソポタミア文明の古代の遺産・・・  
そう簡単にはいかないか・・・」

ソロは冷静に考えていた。

「もう一度!!」

ソロは騎士へと接近し距離を埋めていく。そして剣の届く範囲ではないがソロにはそれに対応した技がある。

「ラプラスブレード!七閃!!」

ソロは剣を音速で振り、衝撃波を騎士へと襲い掛からせる。

だが騎士はそれをジャンプして回避した。

「予想通り!!」

ソロは地面を強く蹴って騎士に向かってジャンプした。

ジャンプして距離を詰めながらソロはラプラスブレードの柄を強く握り振る準備をする。

「はああああ!!」

剣が当たる位置に達した瞬間、ソロはラプラスブレードを横振りした。

だがこれも防がれてしまう。

その直後、騎士は反撃に展開し始めた。足で攻撃しようとする。ソロの頭の危険信号が鳴り響く。回避はできなかった。せめてダメージを少しでも軽減させようと身を固める。

「危ない!!」

スバルへの注意がかなり曖昧になっていたスバルは横から割り込んだ。

「シンクロフック!! でああああっ!!」

スバルはシンクロフックで騎士の横腹を捉えてそして騎士を吹っ飛ばした。



「チッ、余計なマネを・・・」

「危なかったからいいだろ？ フォローしたんだから」

「誰もフォローしてくれとは言っていない」

「はいはい・・・」

スバルとソロはそう言い合いをしていた。そして騎士へと再び向き合う。

一人はスターソードを、一人はラプラスブレードを構えて、二人は左右に展開して挟撃を行った。

騎士はどちらかを反撃の対表にするか一瞬迷う。その間にもスバル達は左右からどんどん距離を埋めていく。

迷った結果、一撃を加えられたスバルに反撃を定めたようだ。

「やはり僕に食いついたか！！ならば！ ロックバスター！！！」

スバルは三発の弾丸を発射する。

三発の弾丸が一直線に向かい、騎士に三発命中する。だが比較的なりの威力が低いロックバスターはあまり効果がなかった。

だがスバルのロックバスターの目的は反撃するためだけじゃない。反対側から回り込む仲間への注意をもつとあまくするためだった。

「はああああ！ ラプラスブレード！！ 七閃！！！」

ソロは完全に騎士から無警戒になったため力を溜めて、ラプラスブレード、七閃による衝撃波を放った。

真空の衝撃波が騎士に襲い掛かる。

衝撃波が当たり、騎士が着ている鎧に傷が出来ていた。

「ウガガアア!!」

ソロのラプラスブレードによる七閃を喰らった事により小さな唸り声を上げた。

唸り声を上げたと同時に敵の目が赤く、黒く光始めた。

「目が赤くなった・・・？」

スバルは気を抜かないように集中する。ソロも敵の変化に警戒して距離をとって集中する。

突如、さっきとは大違いに段違いの尋常じゃない速度でソロに接近して槍を振り下ろし攻撃をしようとした。

「なっ!？」

ソロは先程の騎士の動きとは大違いの速度で来たため驚いてしまい一瞬、反応が遅れた。

「クソッ!!」

ソロは持ち前の反射神経を使い、身体を捻ってどうにか回避し再び敵との距離をおく。

そして騎士が振り下ろした槍は石畳の床に直撃し、床をかなり深くえぐる。床がえぐられ、かなりの威力だろうと物語っている。

それを見たスバルとソロは生唾をゴクリと飲んで、喉を小さく鳴らす。

こんなのに脆に喰らったら骨の一本や二本持って行かれるかもしれない。だが、そんな威力を見せ付けられても戦闘の熟練者達は怯まない。当たらなければ何とないからだ。強い攻撃を見せ付けられた、ならばそれを回避すればいいだけだ。

二人は怯むんじゃない。更に集中した。強い敵ほど燃えるからだ。自分の力がどこまで通用するか、自分の技が通用するか、相手を倒せるかに。自分の力が通用しなかったらそこが自分の限界。限界の中での通用する技を見つけることで自分のステップアップとなる。戦闘を重ねに重ねて、スバルとソロはかなりの強さまでたどり着いた。新たな敵、新たな能力と対峙しているスバルとソロはこれを吸収し、再び新たな境地へと進もうとしていた。

「マッドバルカン!!」

スバルはある程度、距離をとりながら十二連射のマッドバルカンの弾丸を放った。

綺麗に一直線に向かう十二発の弾丸。

だが騎士は回避行動をする。

回避行動をしていたがマッドバルカンの弾丸は十二発のうち三発命中した。

だがマッドバルカンは比較的威力の低いバトルカードだ。複数当てることで威力の高いバトルカードと相対する威力になる。

三発しか当てられてない上に、騎士の銀色の鎧により、簡単に弾かれてしまう。

「ウガガアア！！」

「食いついてくれた！！」

騎士が槍を片手に急接近してきた。

スバルは対応しやすいように二対のスターソードを召喚し構えた。

騎士が槍の届く範囲になった瞬間、槍を振り上げる。

そして振り下ろし攻撃をする。

スバルはスターソードでそれを真っ正面から防ぎ、鏝ぜり合いになる。

二対のスターソードで防いだ瞬間、全身にかなりの反動が来た。スターソードから体に、体から足に、足から床へと衝撃が突き抜けた。

床が少し凹んでいた。

よほど威力が大きいのだろう。スバルは両腕が痺れそうになった。

「ソロ!!」

「気安く呼ぶな!! ラプラスブレード! 一閃!!」

神速の一撃を食らわした。

相当な剣の速さで斬る、それがラプラスブレード、一閃。いわば一刀両断だ。

後ろからラプラスブレードで切り込んでようやく消滅した。

「ふう・・・ようやく終わった・・・」

スバルは額から流れる汗を拭い、緊張の糸を切らした。

「どうやらあっちでも同じ事があったみたいだな・・・」

「そうみたいだね・・・」

あちら側の三人もこちらと同じで騎士に変化があったようだ。だがそちらには司令塔がいたため対応できたのだろう。

かすり傷程度はあったが動くに支障はないと見えた。

スバルは変わった騎士の姿を見て、疑問に思っていた。何故、突如戦闘能力が上がったのかを。

本格的に情報が状態が明らかになってこようとしていた。

前回、スバル達は十体の騎士を遊撃隊のコンビネーションで撃破した。前半は華麗なコンビネーションで瞬く間に六体を撃破した。後半での突如、騎士の戦闘能力大幅上昇。スバルはこれを見て何かひっかかると心の中で留めていた。現在、再び最深部を目指し歩いている。

「ねえ、暁さん・・・」

「何だスバル？」

スバルは突然、暁に声をかけてきた。

「あの騎士が後半、段違いに戦闘能力が上がったの覚えてますよね？」

「ああ。まるで人が変わったような動きだった・・・」

「僕はどうもあの能力をミソラも使っていたんじゃないかって気になります・・・」

そう。かつてミソラがスバルと暁の前で反逆した時もそうだった。彼女の戦闘能力はそこまでは強くない。まして二対一という不利な

状況でだ。ミソラを追い詰めた時、彼女は恐ろしいほど戦闘能力が変わっていたのだ。

「確かにな・・・どうやらあの能力はメソポタミア文明の文明一族の能力か技術によって生み出された能力かもしれないな・・・。今までの話によるとバリアント・ハデスもメソポタミア文明により生み出された破壊の獣。ミソラの体の中にバリアント・ハデスが宿っているとしたらその飛躍的に強くする能力を使ってもおかしくないな・・・」

「やはり、信じたくないけど本当にミソラの体の中にバリアント・ハデスが・・・」

「信じたくないが、そうだな・・・」

そう言い合いながらスバル達は広い大部屋に出た。

「部屋か・・・」

暁は辺りを見回した。部屋の奥にまた通路があるのが暁の目に映った。

「あれは・・・？」

暁は部屋に誘い込まれるように歩いていく。そしてそれについていく遊撃隊の他のメンバー。  
誘い込まれた部屋の先。

長い通路に再び突入した。コツコツと石畳を足で歩いた時の音が通路の壁、床、天井、あらゆる方向に反射して、そして音が消えていく。

長い通路を抜けた先、それは綺麗な水晶に囲まれた部屋だった。天井、床、壁と全てが水晶でできている。何故だろうか、水晶の部屋はうつすらと光が出ていて、微かだが辺りを薄明るくしていた。

「これは水晶・・・？」

暁は壁の水晶に触れてみた。水晶の冷たい冷えた硬い感触が手に伝わってきて気持ちいいとそう感じていた暁。

水晶はかなりの透明度だった。反射して自分の顔が写る。その時、リサは髪を気にしていた。

やはり女性だから髪を気にするのは当たり前だろう。女性にとって髪は命の次に大切なのだ。だからリサは髪に気を使い、乱れている髪を鏡代わりに調整していた。

「髪が気になるんですか？」

スバルがリサの横に来てそう言った。

「ええ。私はかなり髪が長いですからね。動いたりすると若干乱れたりすることがあるんですよ。しかもここは乾燥している地域なので髪が少し乱れていて・・・。女性にとって髪はかけがえのない物ですから」

リサはスバルにそういい再び髪をセットする。



「そういえばミソラも髪のことを気にしていたな……。自分に一番いい髪型を研究してたり、寝癖を完璧に治そうとしていたり……」

スバルがその事を懐かしい思い出というような表情で語った。

「ミソラさんも女の子ですからね。髪を気にするのは当たり前です」

「雑談はそこまでだ。いいかお前ら？」

「あっ、すみません」

「いいですよ」

軽い話をしていたリサとスバルがスイッチを切り替え集中する。

「さて、これが封印されていた法典か……」

「封印禁書ハンムラビ法典ですね……」

壊されて原形を留めていない木箱の中に傷がついている一冊の書物があつた。

やはり古代に栄えたメソポタミア文明が封印した負の遺産。嚴重に封印されていた。外見はただの木箱だ。だが所々に恐らくメソポタミア文明が簡単に解除できないように鍵や封印が施されていた。

だが先に来た先達がきつと封印を無理矢理壊したのだろう。木箱が荒く壊されているのを見てそう解釈できた。

「無理矢理壊したんだ・・・」

「ええ・・・見てそう思いますね・・・」

スバルと暁とリサとソロが興味津々に木箱の中にある法典を暁が手にとって、パンパンと手で埃を叩きおとす。

やはり相当な年月が経過していたため埃っぽかった。

暁の回りにそれぞれのメンバーが集まる。そして目配せをして固唾を飲みながら、埃のついている紙をめくった。

最初、見たときはメソポタミア文明の古代文字だったため読み取る事が不可能だった。

『私が解読してみせましょう』

暁の相棒、アシッドがウィザードオンしてきてそう言った。

「出来るのか？」

『はい。ケフェウス王と通信した時にもしもの時を考えて、一応解読方法を聞いておきました』

「流石。予備がいいな」

『解読開始します・・・』

そうアシッドが言い、解読を開始した。

『解読完了・・・。確かに木箱の封印とこの法典の封印が解かれて

ますね。因みに解読中に並行作業でスキャンしてみました但バリエント・ハデスの生体反応はスキャンされませんでした。そして分かった事があります。所々、文字が掠れていて読み取れない部分がありました』

「それでもいい、言ってみてくれ」

『了解。ここに異常を起こした私達メソポタミア文明が生み出したムー文明に対抗するための獣、バリエント・ハデスが封印されし。もし封印を解除するふとどき者がいてそれを封印解除してしまった場合、世界が終ると考えてもおかしくはない。元々はムー文明からによる侵攻を守るために作られた化け物。敵とみなした場合、破壊の限りを尽くすだろう。だが我々はその封印を解いても唯一の対処方法を知っている。・・・の最果ての地へバリエント・ハデスは誘われていく傾向が分かった。だがそれは何故か私たちの技術を持っていても解明できなかった。そこが私たちにとって屈辱だった。そして唯一の対処方法、それはバリエント・ハデスの中枢部分、コアを壊すこと。そうすれば再生能力は封じることができて倒すことができるだろう』

「なるほど・・・。最果ての地の前の部分が読み取れなかったのか？」

『はい。何故かそこだけ文字が掠れてて、解読不可能でした』

「そうか・・・。けど、一体だれがバリエント・ハデスの封印を？世界が終わるというのに・・・」

「それは私ですよ・・・みなさん・・・」

突如、ひとつの低い声が上から聞こえてきた。

「誰だ!？」

薄暗くてはつきりと姿は見えない。だが宙に浮いている時点で、只者ではないと五人はそう雰囲気を感じ取って臨戦態勢に入る。

「私の名は・・・いや、まだ明かすのは君たちには早いですね。その背の大きい方。そうですよ、私がバリアント・ハデスの封印を解きました」

相手はそういう。暁は相手の並々ならぬ覇気に一步後ずさりした。

「くっ・・・、一体何の目的のために？」

「クッククッ、バリアント・ハデスの力を使い、世界を壊すんですよ・・・。世界を壊してまたやり直す。そうリメイクさせるんですよ」

「リメイクだと!？」

「ええ、そうです。そしてあなた方は私をただの電波体と違ってくれたら大間違いですよ・・・」

「なんだと!?!まさか!?!」

スバルが大声を上げる。その言葉を聞いた五人は思考回路ではこう

なった。

「貴様、まさか吸血鬼化した電波体か!？」

「ビンゴですよ……。私もそのことを知らずに封印を解除して吸血鬼に変異させられたときは焦りました……。だが、私は選ばれたもの。更なる強さを得て、自我をコントロールできるようにした」

「チツ……。ミソラはどうした!？」

暁は大切な仲間、ミソラの生存について聞いてみた。

「ああ……。彼女なら今頃、バリアント・ハデスのいけにえとなっている存在ですよ。彼女も既に吸血鬼と化している。バリアント・ハデスと融合したことにより、もはや彼女は君たちの事は頭にないだろう。今は私たちの忠実なしもべといけにえさ……」

「うう……。あああああああああ!!!!!!」

スバルが突如、電波変換しスターソードを両手に持って、謎の吸血鬼型電波体に突っ込んだ。

スターソードで思い切り謎の電波体へと振りかぶり、そして思い切り渾身の力を込めて振り下ろす。

「フッ、正面から突っ込むとはあまい……」

謎の吸血鬼型電波体は片腕で防いだ。

「ミソラを返せええ！！！！」

スバルは防がれても距離を取って再び接近する。

そして空中で勢いをつけるように回転しながら斬りこむ。だがそれも防がれてしまう。

「何故、抗う？もはや彼女を救うのは無駄だというのに・・・」

「うるさい・・・うるさああああい！！！！」

スバルは怒り狂っていた。いつもの冷静なスバルがここまで熱くなっている。よほどの男が許せないのだろう。いつもは使い慣れているスターソードをうまく扱えてなかった。

「スバル！少しは冷静になって距離をとれ！」

暁がそう言うが、スバルは完全に熱くなっている。彼の耳には虚しくも届いてなかったのだ。

「流星！！銀河ああ！！十文字！！斬りいい！！」

スバルは全身に力を込めて相手に叩き込んだ。

だがこれもあっさりと防がれてしまい、つばぜり合いとなってしまう。

「ぐううう・・・」

防がれても無理矢理力で押し込むスバル。だが力で押し込んでもびくともしなかった。相手はずっと涼しい顔をしているだけ。

「今の君は私には到底勝てない・・・。戦いとは己の精神状態で勝利を左右する。怒り狂っている君なんて今、私が本気を出せば君を一瞬で殺すことができる・・・」

「そんなことおおおおお!!!」

スバルは再び接近して距離を埋めてスターソードで斬りこむがあっさりとかわされる。

「だがここで君を殺したら面白くないな・・・。君にはメソポダミア文明がこの封印禁書ハンムラビ法典を守るためにいる番人に相手してもらおう。こいつは私がコントロールしている。存分に相手をしていな。もし倒せたら、君たちが生き残っていたらナンスカに来い・・・。それなりの対応をさせておげよう・・・」

と謎の男は姿を消して謎の鳥の獣の置き土産を残し、メソポダミア文明が封印禁書ハンムラビ法典を守るために設置した番人が五人の前に姿を現してきた。

そして謎の化け物との戦闘が始まろうとしていた。



## Auf t a k t | 22 諦めない心

「待てえええ!!! 逃げるなああああ!!!」

一人の少年の怒りの叫び声が水晶部屋に轟いた。

辺りに声が乱反射して、そして小さくなっていく。

「少しは冷静になれ! スバル!」

暁が注意の声を上げた。

「けど・あいつが、あいつらがミソラを!!!」

「だからって怒るのか? 怒ったからって何か解決するのか? 仲間の事を思って怒るのはいい。だがな、怒ったからって未来が変わる訳じゃないんだ。分かるか?」

「.....」

「だから少しは冷静になれ。お前がミソラの事を家族として、大切な一人として思う気持ちは俺にも充分に伝わって来る。だから落ち着け」

「はい.....」

「知ってるかこんな話・・・? かつて仲間を失った三人の旅人がその一人を殺した相手に敵討ちをする話を・・・。その時、彼らの三人の

うちの一人はその一人を非常に信頼していた。その一人の男は仇をうつだけを考えていて非常に熱くなってしまうって周りの声も聞こえてなかった。当然、声も聞こえなくれば？」

「周りからの状況を把握しにくくなる・・・」

スバルが静かに口を開いた。

「そうだ。その一人は曖昧に深く踏み込んでしまい、敵からにしては殺す事のできる格好の的だ。そして一人を非常に信頼して一人は相手に殺されて死んでしまった」

「・・・でも一体どういう目的で話したんですか？」

「仲間の為に戦う人は素晴らしい事だ。だがな、死んでしまったら何も意味がない。自分が死んでしまったら何の意味がない。その時の精神状態は怒り狂っていて自我をコントロール出来なく死んでしまった。分かるか？自分が死んだら、意味がない。また悲しむ人が増えるだけだ・・・」

暁がそう言った。

「すいませんでした・・・。確かに自分がその人のように熱く怒り狂っていて自我をコントロール出来なくて、曖昧に突っ込んで死んでしまったら何の意味もない。悲しむ人が増えるだけ・・・」

「そうだ。だからこそ仲間という大切な存在に頼る時・・・だろ？」

「はい・・・」

「よし！次はあいっだな！！」

暁が指差した先にはメソポタミア文明一族が封印した、封印禁書ハ  
ンムラビ法典を守る空を司る獣がいた。

空をつかさどる大きな獣、大きな胴体に見たものを魅了する大きな  
翼、そして容易く触れたものを刻んでしまうような爪、最後に見た  
ものを怯えさせる冷たい目をしていた。何故だか、獣の周りには陽  
炎ができていた。

翼を持った獣は大きく羽を広げた。

その直後、スバルの頭の中で小さく危険信号が鳴った。何故だろう、  
自分が身の危険に晒されている危険を感じていた。

獣は狭い水晶部屋でスバル達に翼を大きく靡かせて急接近してきた。

「やっぱり！！」

それを見たスバルは声を上げて遊撃隊は通路へ向かって走り出した。

「ここじゃ狭い！！一つ前の部屋に行くぞ！！」

と暁が声を上げた。

通路へ逃げ込んだが、獣の大きな翼が硬質なのだろうか、通路を破  
壊しながら向かってきた。

「嘘だろ！？」

レイはそう声を上げて、電波変換しながら逃げた。

他の一同も電波変換して逃げた。

体がいう事を聞かない。これまでの戦闘が原因だろう。喉がへばりついて水分を要求する。それでも足を止めるわけにはいかなかった。足を止めれば後ろの獣の突進を喰らって立てなくなってしまうだろう。スバルたちは震える足に叱咤しながら走り続けた。

そして大きな天井の高い部屋に再びたどり着いた。

「「「はあ、はあ、はあ・・・」」」

スバルたちは大きな部屋にたどり着いたら、いつも通り散開して身の危険性を減らして、その後、呼吸を整える。

直後、狭い通路を壊しながら出てきた相当でかい空を司る大きな獣。部屋が狭くて見えなかったがかなりの大きさだった。

「ギャオオオオオオオ！！！！」

獣の叫び声が大部屋に轟く。その大きなバインドボイスはスバル達に警告しているようだった。大きな叫び声に耐え切れずスバル達は耳を押さえ萎縮した。まるで自分が大きな存在、特別な存在だと獣はそう小さいスバル達に見せつけていた。

大きさは予想ではコンドル・ジオグラフ級だ。

「怯むな！いつも通りに動けばいい！」

暁はリーダーとしての言葉を言った。その言葉に全員が動きが稼働し始めた。

全員がそれぞれの得物を召喚した。そして空へと滞空している獣と向き合う。

「いくぞ!!!」

先陣を切ったのはスバルであった。スターソードと呼ばれる光り輝く神聖な剣を両手に持って地面を強く蹴ってジャンプして獣へと向かい距離を埋めていく。

獣は自分に近づいていくスバルを攻撃対象へと狙いを定めた。スバルの動きに対応して蹴りを加えようとした。

だが戦闘の熟練者であるスバルもそういう動きをしてくるぐらいは先に予想している。スバルは敵に届くまでのジャンプ力を出していなかった。途中で地球の重力に捉えられ地面へと引っ張られる。

その直後、スバルの左右からソロとレイが出てきた。

そうスバルは囷だったのだ。完全にスバルに気がとられていた獣は二人の動きに完全に対応できなかった。左右から己の得物を持って斬りこもうとする二人。左右から襲い掛かる挟撃作戦。

「であああああ!!!」

「うおおおおおお!!!」

二人の声が部屋に交錯して轟いた。ソロのラプラスソードが敵の右

翼を、レイがビームサイズで敵の左翼を刻んだ。

刻まれたことにより羽が何本か飛び散った。

「うぐっ！」

「なんだ・・これ・・」

斬りこんだ二人は見えない何かに襲われた。それがなんなのかと気にしながらも二人は敵と0距離に近いたため退避するため距離を取る。だが距離を取ってる間、隙が生れる。けどその隙を埋めてくれる大切な仲間がいた。

「はあっ！」

一人の若き少女の声が響いた。それはリサだった。彼女の得物は弓だ。弓を片手に、弦を片手で引いて矢を装填する。そしてギリギリまで絞った弦を反発させて矢を放った。

綺麗に空気を切り裂き一直線に向かう矢は獣の胴体へと刺さったが距離があったため、少し威力が落ちているだろう。弾かれてしまった。

それでも獣はリサの支援牽制攻撃に喰い付いてくれた。

そう、これが暁が率いるWAXA遊撃隊の最も基本的な攻撃戦法だった。一人が囷として接近し、直後、警戒が曖昧となった二人が左右から展開して挟み込むように挟撃する。

そして空中から地上に着地するソロとレイ。額には一筋の汗が見え

た。

「どうしたんだ？」

暁が心配して駆け寄る。

「なんか近づいた途端、なんか見えないものに襲われた気がして・・・」

「俺もだ・・・」

ソロとレイが報告した。

「そうか・・・。俺らはいいつに対する情報が少ない。少し時間をかからせてじっくり攻めていくか・・・」

「ああ、それも俺もそれに同感だが、全員の体力が持つかだな・・・」  
そう、ギリギリの中で戦って最後に物をいうのが体力だった。ある程度消耗していた五人には長期戦は難しいだろう。

だから迅速に情報を集め、危険性を減らし、確実に仕留めていきかけた。

「仕方ない、少しは無茶も必要だ。だが死を招くような無茶だけはするなよ!!」

「「了解!!!!!!」」

「・・・」

再び五人は散開した。

「ロックバスター!!!」

「ブラスター!!!」

「ブライバースト!!!」

スバルがロックバスターで三発の弾丸を、暁がブラスターで八発を、ソロが衝撃波を放った。

やはり、情報が少なすぎるスバル達にとってここは身の安全性を考えて飛び道具でいった。

三つの攻撃が当たるが虚しくも消えていった。

「攻撃戦法を特化型に変えます! 四人の方々は前衛へ! 私が支援します!!!!」

「「了解!!!!」」

後衛である暁が前衛へ、中盤役であるスバルもが前衛へと出る。

それぞれ、タイミングをずらして四方向から近接攻撃を行った。

「その嘴をへし折ってやる!!!!」

さっそく、レイが攻撃した。その動きに合わせてスバルがレイより



素早く攻撃しようとした。狙ったのは足に綺麗に長く生えている鋭い爪。これを切断しようとスバルはスターソードで切り刻もうとした。

「うおおおおおおお！！！！！！」

一人の少年の声が雄たけびを上げるとともにスターソードを振り降ろす。

爪にスターソードが直撃して火花を散らす。

「ぐうう！！」

見えないものに襲われて体力が削られていく上に、スターソードは弾かれてしまった。

だが、それだけでは攻撃は終わらなかった。

終わらない連続攻撃がほかの仲間から続いていく。

スバルとレイが攻撃した部分は堅くて弾かれてしまったが、暁とソロが狙った翼は刃が通り羽を何本か散らさせてダメージを与えた。

やはり他の三人も見えない『何か』によって削られていた。

だがスバルは諦める訳にはいかなかった。足を止めてしまえば、そこで終わってしまう。投げ出したい、横になってゆっくりした、寝たいという欲求を振り払いながらスバルは戦い続けてきた。

「うおおおおお！！！！！！流星銀河十文字切りいい！！！！！！」

スバルは一度着地をして翼を切り刻まれた曉たちに気がいたため、スバルは警戒することなく、足に生えている爪へと渾身の力を叩き付けた。

スバルが繰り出した流星銀河十文字切りによって獣の足の爪へと直撃する。

勢いを増しているスターソードは爪に亀裂を音を立てさせながらそして碎けていった。

「ギャオオオオオオオオ！！」

苦しみに獣は叫び声をあげた。

「よし！」

スバルは自分の成果に賞賛しながら距離を取って呼吸を整える。部位破壊をしたことにより無残に切断された爪。もはやこれで足の攻撃はできないだろう。

「ギャオオオオオオ！！」

獣は叫び声と共に辺りに槍と化した羽を乱発させた。

全方向に飛んでいく鋭い羽。それがスバル達に襲い掛かった。

「ぐあっ！！」

「きゃっ!!」

不運にもレイとリサに直撃してしまった。

「大丈夫!!?」

スバルが心配して駆け寄ってきた。

「ああ、なんとかな・・・」

レイはふらつきながら立ち上がった。

「私も、なんとかいけます・・・」

リサは弓を杖代わりにして立ち上がった。

「そうですか・・・。けど無理だったら退避しててくださいよ!!」

スバルはそう言った。

「くっ、あんな化け物どうすればいいんだ・・・」

スバルは空っぽの頭から対策法を探し出す。あの陽炎はなんなのか・  
・、そして確実に倒せる対処法を探していた。

その間、仲間たちが獣の気をそらしながら戦ってくれている。

上から吹く、謎の気流がスバルの頬にあたる。天井には一つの大きな穴があった。どうやらここから風が来ているのだろう。

「気流がここからでているのか・・・いや今はこんなことじゃない！  
」

スバルは敵と向き合った。一筋の汗が頬から顎へと伝ってそして地面に落ち、そして弾けて消えていく。

「太陽銃！ガン・デル・ソル！！」

スバルは唯一、吸血鬼型電液体を殺すことができる太陽銃を召喚した。召喚したとき、またポロっと一つの何かが落ちて、また一つの奇跡が起きた。

「これは・・・」

手に取ったのは太陽銃のレンズと似たようなレンズ。そのレンズの部分は青く、冷たい感じを醸し出していた。

「まさか・・・」

スバルの頭の中で一つの閃きが起こす。ここからスバル達の反撃が始まった。

「これをこうやって、これを取りつけて・・・」

太陽銃の部分をソルからフロストに変えた。

太陽銃のレンズ、フロスト属性。氷のような冷たい玉を発射させるようにするレンズだった。

「物は試し！いくぞ！！」

スバルは両足を自分の肩幅ぐらいに広げた。そしてゆっくりと太陽銃を獣へと向ける。

その動きを見ていた暁とソロは一瞬で予想した、そして再び攻撃に集中する。

ゆっくりと太陽銃のエネルギーが銃口へと集まり、うつすらと太陽銃の銃口が光始めた。

「いけえええええ！！！！」

限界まで凝縮した冷たい氷の圧縮弾は綺麗に獣へと向かう。

その直後、発射されたと同時にソロが――

「ラプラスブレード！一閃！！」

ソロはラプラスブレードで神速の剣で切り刻んで傷口をようやくつくらせた。さすがは戦闘の手慣れた男。太陽銃から放たれた弾が向かった先はソロが作らせた傷口。

そこに弾が直撃し、閃光し炸裂して、獣に相当のダメージを与えさせた。

「よし、今のは大きいぞ!!!!」

五人はスバルの相当な大きな一撃に心の油断ができた。

「ギャオオオオオ!!!!!!」

獣は突然、体を震わせた。体から何か赤い粉塵が出てきて、そして天井からの気流により粉塵が舞い上がる。これがまさか五人に獣の自らの大きさを見せつけられることになる。

「なんだこれは・・・？」

レイが粉塵を見て声を上げた。その他の皆もだった。獣の体から落ちていく粉塵、そして気流により舞い上がっていく粉塵、天井まではいかないが粉塵が辺り一面を支配した。

その直後、スバルはある記憶が蘇る。そう、粉塵爆発というのが。辺り一面が爆発に包まれ一時的に酸素も急激的に失われてしまうというのをTVで放送されてたのを頭がよぎる。

「まさか!!!!!!？」

直後、スバルの頭の中の信号が鳴り響いた。天井の気流、舞い上がる粉塵、そしてへし折れている足の爪を見てまずい、危険だというのがスバルの身に全身がよぎり鳥肌を立たせた。スバルは守るためにバリアを展開した。直後、獣は足の爪だけを粉塵の中に入れさせた。

「まずい！みんなー！」

ガギインと獣は火花を散らさせた。直後、粉塵による大爆発がスバルの声をかき消して、辺りを爆発を巻き込ませた。

「皆ああああー！ー！！！」

一人の少年の叫び声が轟いた。そして急激的に酸素が奪われる。

煙の中からは倒れているレイ、リサ、暁の姿があった。その姿を見て無残に倒れているみんなをみてスバルは思考が止まった。だが死んでいたわけではない。かすかだが呼吸はしていたようだ。

しかも酸素が少ないため、呼吸が苦しそうだった。

「早く剣を持て！早く倒すぞ・・・」

ソロはどうやら電波障壁で守ったのだろう。その後、ソロがそう言った。空気が少ないため、余分な体内酸素を使うわけにはいかなかった。

「うう・・・うおおおおお！！！！！」

仲間が倒された悲しみにスバルは怒った。仇を討つため、そして仲間を救うためにー！。

「擬似メテオサーバー作動！ファイナライズ！Lv12のデータをダウンロード！」

スバルはファイナライズを行った。どうやら酸素も少なく、状況的に不利なため一気にケリをつけようとしているのだ。

そして黒いノイズに包まれたスバルはブラックエースと姿を変えてあらわした。

酸素不足で意識が朦朧とする。目もよく見えなくなっていた。先が霞んで見えてこのままでは時間の問題だった。動けば酸素を消費し、動かなくばやられてしまう。そんな状況に陥っていた。

「一気にケリをつける！ソードファイターX！」

スバルはソードファイターを構えて、駆け出した。ブラックエースの光輝く赤い光翼により素早さはかなり上がっていた。光の速さで懷に潜り込んだスバル。その動きに合わせてラプラスブレードを構えて斬りこむソロ。

前にいると思ったら後ろ、後ろを見たら横にと、獣は相手の動きに對して対応ができなかった。

最終的にあまりの二人の速さに獣は反応ができなかった。一瞬のうちにスバルは全身へと数十箇所部分を斬りこませた。ソロは五箇所だ。これが二人の真の本気。あっという間に獣をおいつめていった。

スバルとソロは激しく動くが、酸素不足により目眩と呼吸困難になりかけている。それでも攻撃の手を休めなかった。休んだからそこで終わりだからだ。投げ出したい、休みたいという欲求に打ち勝ちながら。

獣はもはやボロボロとなっていた。二人の連携の力と実力に抵抗が全くなかった。



「とどめだ！！ラプラスブレード！！一閃！！！！」

ソロは獣の真下に潜り込んだ。そして深く腰を下げて思いっきりジャンプする。ジャンプした勢いを使いアップラスブレードで獣へと突き刺し、天へと向かい始めた。

天井が近づく。それでも勢いは下がらずに獣は天井に直撃し、そして地上へとソロと獣は出る。天井に直撃しても勢いは衰えなかった。はるか空高くまでソロはラプラスブレードで吹っ飛ばした。

瓦礫が降ってくるがスバルはすべてロックバスターで吹き飛ばした

「今だ！ ロックマン！！！！」

ソロは離れて地上へと着地し、地下で待機していたロックマンに合図を出す。地下で待機していたスバルはノイズチェンジでオックスノイズにノイズチェンジした。

「はああああ・・・」

スバルは集中する。天井に穴が開いたため酸素が補給されて息は安定している。

スバルの腕がゆっくりと光り始める。戦いの執着がつかうとしていく。そして直後――

「NFB! アトミック!!! ブレイザアアアーーーーー!!!!」

全身の力を腕にため、そして渾身の力をこめたスバルの極太のレーザーは腕から空へと発射された。

空へと発射されたレーザーはその真上にいた獣を巻き込んだ。

「ギャオオオオオオオ！！！」

そして雄たけびとともに獣は消滅していった。

その最後をスバルは見届けることができなかった。ゆっくり体がいふ事を聞かなくなり、足に力が抜けて、目を閉じて、そしてその場に倒れてしまい、意識を失ったのであった。

諦めなかったから倒せた奇跡。スバルはまた一つ成長したのであった。

## Auf t a k t | 23 疲労と試し

かつて太古に繁栄したメソポタミア文明が封印し、封印禁書ハンムラビ法典の守護神をギリギリの限界境地の中で対峙したスバル達。

限界の中で戦ったスバル達は疲労困憊、水分不足になっていた。

大聖堂から謎を解明し、そして地下へと潜入、あらゆる防衛をなんてかくぐり抜けてきた。

そして今は、戦った部屋が荒らされ、天井まで破壊されているありさまだ。

天井・・つまり地上はティグリス川付近へと繋がっていた。

ザッザッザッ――

一つの足音が聞こえて来る。その足音はソロが壊した穴に近付いて来る。

「あれがムー文明の生き残り・・・か」

謎の人は地下の床の上で疲労困憊で倒れているソロを見て、不敵な笑みを残し、その場を立ち去った。

そこからまる一日が経過する。

穴に向かってサンサンと倒れているスバル達を容赦なく照り付ける

太陽。

その昼の暑い日差しで一人の少女が目覚める。

「うつ・・・ここは・・・」

目覚めたのはリサだった。丸一日、倒れていた為、視界が若干ぼやけてみえる。リサは目を擦って、目の焦点を合わせた。

視界に写ったのは仲間が全員倒れている姿。そして綺麗に穴が空いた天井。

「そうか・・・スバルさんが・・・。私、足を引っ張っちゃったな・・・」

リサは若干、ふらつきながら立ち上がる。満足には歩けなかった。身体にはまだ疲労が残っており、リサの身体を阻害した。

「レイ、暁さん。起きてください・・・」

まずは自分が目覚めた時に最も距離が近かったレイと暁に近寄った。意識を失い、精神シンクロ率がないため電波変換は解除されていた。

「暁さん、起きてください・・・」

リサは倒れている暁を揺する。

「うつ・・・リサか・・・。敵はどうした・・・?」

暁は敵の粉塵爆発に巻き込まれて、そこからの記憶は途切れている。

「多分、スバルさんとソロさんが倒したんだと・・・」

「そうか・・・やっぱりあいつらは凄いわ・・・」

暁は目覚めてゆっくりと立ち上がった。やはりこの男も全身に疲労が溜まっているのだろう。足をふらつかせながら立ち上がった。立ち上がった暁はあの強敵をスバルとソロが倒した事に感嘆していた。

「さて次はレイですね・・・」

リサは横になっているレイに近付き、優しく揺する。

「もう、食べねえ・・・」

レイは何の夢を見ているのか、寝言を言っていて、呑気だった。

「起きてください、疲れてるのは分かるけど」

リサが揺することによりレイは目覚めの覚醒を向かえていた。

「うっっん、もう少し・・・」

そういい、レイは覚醒が遠のき、再び睡眠の海へと深く潜水していく。

「・・・仕方ないですね・・・」

リサは右手を真っ直ぐにした。

そして無防備に寝ているレイの腹に手を添えた。

リサの行動に暁の頭には？が浮かんでいた。

無防備に寝ているレイは睡眠という眠りの海へとどんどん潜水していく。

リサは集中して右手を振り上げた。

「まさかっ!!?」

暁は頭の危険信号が鳴り響く。

(うん……。まてよ……。この感じ……)

レイは完全に眠りの世界には誘われてなかった。意識は微かにあった。かすれている意識の中で身の危険を感じていたレイ。だが時は既に遅し。

振り上げた右手は勢いよく振り下ろされ見事に無防備なレイの腹の溝に直撃した。

「うぐう!!!!」

レイは腹の激痛で一気に目覚めてそして、釣られた魚のように動きながら悶絶していた。

「えげつないな……」

暁は苦笑いしながらリサの行動に唾然していた。美しい反面、裏腹に大胆な事をする少女だと暁は改めてそう感じた。

リサは清楚可憐な反面、裏には棘があった。遊撃隊での唯一の紅一点。

「自業自得ですわよ」

リサは長い黒髪を靡かせながら涼しい顔でそう言った。

「うぐぐう・・・」

リサは悶絶しているレイをほっといてスバルとソロを起こそうとした。

「さっ、二人共起きてください、立てますか？」

リサは優しく揺すって起こす。

直後、スバルとソロが静かに目を開いた。

「うう・・・」

「うつ・・・」

二人は目を開いたがやはりぼやけて見える。焦点を合わせる為に目を擦った。直後、空で世界を照り付ける太陽が一気に目覚めさせた。

「そうか・・・僕らがとどめを刺したんだよな・・・？」

「正確にはお前がとどめを刺したんだけどな・・・」

スバルの発した言葉にソロが訂正した。

二人はふらつきながら立ち上がる。

「さて、こっからどうする？」

「とりあえずは日本に帰還して一時待機と休息を与えるか・・・」

人間、誰だって休息という休みは必要不可欠だ。一度も休まず、ずっと走ったりするなどの行動を続けることは出来ない。

だから休息という時間が必要だった。

「だがどうする？全体的にメンバーの体力は消費して疲弊している。この状態で襲われたらヤバイぞ」

動けば身の危険性が上がる。かといって動かなければ、何も変わらない。ただ同じ時間を過ごすだけだ。

「仕方ない・・・もう少ししたらスカイウェーブ経由で日本に一時帰還するしかないな・・・」

「僕もその意見に賛成ですね・・・」

そして5時間後、スバル達はユーラシア大陸、中央アジア付近スカイウェーブ上空にいた。

全員が電波変換している状態。ソロは疲れもそんなにないのだろうが、涼しい顔をしていた。だが他の四人は疲れが相当溜まっていたため、息が若干上がっていた。



動く、全身の中での一番使っていた腕の筋肉が悲鳴を上げていた。

一方、スカイウェーブのとある場所――

「あれが世界を救った星河スバルとそしてあれが唯一のムー文明の生き残りの狂戦士、ソロか……。面白い、お手並み拝見と行こうか！」

ある男の笑い声が空に響いた。

そしてスバル達ももう少しで日本に到着するスカイウェーブ日本海上空でこの一時的な何もない均衡が破られる。

「やっと、もう少しだ……」

スバルは疲れとため息を吐きながらもどうにか体を動かし移動している。

「お手並み拝見だ……。いけっ！」

ある電波変換している男がスバル達の真上から三つの槍が降り注いだ。その直後、男は姿を見られないように姿を隠した。

『スバル！真上を見ろ！』

ウォーロックは上から来る「何か」に気づきスバルに注意の声を上げた。

「え？、え？」

スバルは突然のウォーロックの発言に対して反応が若干遅れながらも上を向いた。

「って槍いい！！！？こっちに降って来てるよおお！！」

「なんだって！？」

スバルは疲れていておかしくなっているのか反応がお笑い芸人みたいな反応だった。スバル達の動きに合わせて上から降ってくる槍は地球の重力に引っ張られて落ちてくる。そしてそれに対して冷静に反応する暁。

全員が上を見る。上から降ってくる突然の槍に全員が目丸くする。

「クッ、ロックバスター！」

スバルは構えてロックバスターを発射した。発射した瞬間、軽い衝撃が腕にのしかかる。それだけで腕に筋肉の悲鳴が上がった。

疲れているせいで集中もろくに狙いも定められない。弾丸はすべてあさっての方向へ飛んで行った。

外したせいでさらに距離がどんどん詰まる。

「ちよっ、スバル！外すな！」

「疲れていてちよっと・・・」

「あまったれるな！」

「だったら暁さんがあれを処理してくださいよ！」

「ここで俺か!？」

こんな状況なのに暁はなんでか他人任せだった。疲れているせいでもんどくさかったのだろう。

「仕方ない! オメガレーザー！」

大技が放たれて落ちてくる槍を二本消滅させた。後一本、残っていたがソロがブライソードで真つ二つに斬っていた。他のメンバーは処理するだけで手一杯だったのにソロはあっさりと処理してしまった。ここがキャリアの差かもしれない。

「でも一体、だれが・・・」

「私達への警告・・・とみてもらったのがいいのでは？」

「その可能性は十分にあるな・・・」

とソロ以外の四人が話している。

（今の攻撃・・・きっと誰だかは知らないが、俺達を試したのか・・・？フツ、ならば試す必要もないと今度、貴様が姿を見せたら証明してやる・・・）

とソロは謎の男からの攻撃に気づいていた。実力を試されているというのを。

ソロはさらなる強さをもった敵と戦えることに意識していたのである。

つ  
た。

## Auf t a k t | 24 戦友の宣告

スバル達が帰還してから丸二日が経過した。無事帰ってからスバルは家で、暁はWAXAの庁舎で寝続けたという。ちなみにレイとリサはまたスバルの家にまた来て泊まらせてもらった。二日間に何があったか、時は二日前、暁たち、遊撃隊が帰還した直後に時は遡る。

「はぁ・・・やっとなつた・・・」

一人の少年が安堵の声を出す。その声を出したのスバルだった。

ソロを除く全員が疲労困憊してて、WAXAの認識ゲートを通り、WAXAの入口に辿り着いた途端に、膝から一気に力が抜けてしまった。

「皆、ご苦労だったな」

全員が無事帰ってきたのを見て、星河スバルの父親、星河大吾が五人の前に姿を現した。

「父さん・・・僕、もう疲れた・・・」

「大吾、俺もだ・・・」

暁とスバルは大吾にそういった。

「ああ・・・お前らの様子と表情をみてよく分かる。疲れているところすまないがちょっと来てくれないか？ハートレスさんが話したいことがあるって・・・」

大吾は気難しそうな顔でそういった。何故気難しい顔で言ったかは直後わかる。

「マジかよ!!！？疲れているから後にしてくれないか!？」

「父さん・・・、僕たち、みんな疲れているのに今から会議みたいな集中するようなことは無理だよ・・・。ハートレスさんが来てるからって・・・いくらなんでも・・・」

「じゃあ仕方ないわね、ここで話すわよ、皆？」

直後、ハートレスが姿を現した。ハートレスと呼ばれた綺麗な女性。長い桜色の前髪に綺麗にそろえた後ろ髪。首にはペンダントらしき物を取りつけていた。かつてメテオG事件時、ディーラーの手下として潜り込みジャックやクインティアを救おうとしていた。現在はWAXAの仕事に定着している。

「綺麗な方・・・」

同じ女性としてリサは見とれていた。おっとりとした顔立ち。綺麗な瞳。見ていたら吸い込まれていきそうな感覚だった。

「えっと、こちらの方々は初めましてですね。私、WAXAの情報収集担当しておりますハートレスと申します。以後よろしくですわ」

ハートレスのただならぬ雰囲気にはリサとレイは反応が遅れた。

そしてそれぞれの挨拶をして会釈した。

「さて自己紹介も終わったことだし、その雰囲気だと皆、疲れているようね。手短かに話すわね」

ハートレスの言葉に全員が固唾を飲み、小さく喉を鳴らす。その次の言葉はなんなのか？ ソロでさえも気になっていた。

「まずはそうね・・・大吾さんから聞いた通り、貴方たちはメソポダミア文明の封印禁書ハンムラビ法典を探しに行ったのよね？」

「あ、はいそうです。けど封印解除されていて、さらにその封印解除した敵とファーストコンタクトしました。自分は特別な存在だと、そしてミソラがバリアント・ハデスのいけにえとなっている事が確定しました・・・」

「やはり、そうなのね・・・」

ハートレスは顎に手を当てて考え始めた。

「そういえば、ハートレスさんって今まで何してたの？」

ハートレスは電波体とのメテオG事件以来から生命対立関係問題以来、WAXAに姿を現さなかった。そのことが気になりスバルは質問してみた。

「ああ、ちよつとした一人旅ね……。世界を放浪してただけよ・・」

「ふう〜ん」

「でもね、ただ適当に一人旅をしていたわけじゃないの・・」

「「え？」」

暁とスバルの声が重なる。

「まあ、貴方たちの知ってるとおり、バリアント・ハデスの事よ・・。大きいこと言っちょつとしたことしか知らないんだけどね。今、少しずつ世界が闇に包まれてるのは知ってるよね？」

「あ、ハイ。一部の地域はもう汚染されているとか」

スバルがそれに応答した。

「そうなの。バリアント・ハデスがその汚染の闇を発生、ばらまかせた・・・。ということはつまり・・」

「ミソラが町を汚染、破壊させたということ!!?」

ハートレスの口から信じがたい真実が伝えられる。

「私もね、たまたま最初の闇による汚染が始まった国にいたの・・」

「イタリアか・・」



暁がかみしめたように言う。

「その時は飛行機で日本に帰国する日だったからなんとか助かったんだけど・・・」

「飛行機で日本に向かってフライトする直前、イタリアのローマからその闇の黒煙が上がったの・・・。けど、その時はただの爆発か、なんかの小さい暴動かで気にしなかったの。そしてそれが気になっていた私はハンターV Gでイタリアの放送局の電波を受信し、TVを見ていたらそのイタリア、ローマでの様子が放送されてたの・・・」

「・・・・・・・・」

全員、黙ったままで聞く。

「TVに映ったのはミソラちゃんが町を破壊して、市民を汚染させていたわ・・・」

「・・・・・・・・」

「ミソラが・・・」

「けど、あの動きはミソラちゃんじゃなかったわね・・・。電波変換しているミソラちゃんの姿だったけど、いつものギターは何故か持っていなかったし、まず異常なほどの動きをしていたし・・・」

「やっぱり・・・。僕たちもミソラと接触したときに異常なほどの動きをしていたんですよね・・・」

スバルの発したその言葉に暁もうなずいていた。

ハートレスの口から次々と受け入れがたい真実にスバルは心に見えない何かで刺されたような感覚がしてつらくなっていた。

「それぐらい・・・かな・・・」

「そうですか・・・」

「そして貴方達は次の行き場所は決めてあるの・・・？」

「ああ、ナンスカだ・・・」

暁はもういい加減に終わってくれ、俺は疲れているんだ、という心境と共に、溜息交じりで喋った。

「そう、気をつけなさいよ・・・。あ、あと貴方達の事を思っ言ってるんだから、いい加減に終わってくれって顔をしないでちょうだい、暁さん・・・？」

「うっ!？」

暁は自分の心が読まれてしまい、心に槍を刺されてしまった後、一撃を加えれば倒れるという現状だ。それを見ていたスバル達は読心術上手い・・・などの心境をしていた。

「あ、暁さん・・・？」

リサが心配そうに話しかけた。

「あ、ああ・・・大丈夫だ。読心術を使ってきて俺の心境を読んでき

たから・・・」

「次の作戦決行はどうします？」

「そうだな・・・。とりあえず十分に休息を取った4日後に作戦を再決行するから、それまで各自休ませとけ・・・。それじゃ解散な・・・。」

暁は腕を天へと伸ばしてWAXAの奥のほうへと姿を消していった。

「なんかいい加減なリーダーね・・・」

ハートレスが暁の姿が見えなくなった直後に自分の思っていたことをあらわにした。

それを聞いたソロを除くほかの皆は苦笑いする。

「まあ、暁さんは適当なところもありますが、あれはあれでいい所もありますよ」

スバルがフォローの言葉を入れた。

「フフツ・・・スバル君も変わったわね・・・」

「え・・・？」

「いやこっちの話よ・・・」

とハートレスはそういい、スバルにばれないように大吾と目配せをした。

「よし、帰るかスバル、皆!」

大吾が皆疲れているだろうと思い、氣遣って言った。

「皆?」

その言葉にスバルが氣になった。

「リサさんとレイだよ。少しの間だが、俺らの家にいさせることにした。お前には言ってなかったがいいだろスバル? 少しぐらい人数増えたって。そっちのほう楽しいだろ?」

「え・・・うん、まあ・・・」

「迷惑だと思いますが今後よろしくです、スバルさん」

「今後、お前の家に居候させてもらうな!」

やはりリサは迷惑をかけることを悪いように言った。それを見ていた大吾は若いのに出来た子だ、と思っていた。

少しの間だが星河家はかなり賑やかになりそうだ。こうして五人は星河家に向かったのであった。

## Auf t a k t | 25 小さい平穩

スバル達が無事生還してから二日が経過。四日が経過した次の日にはまたスバル達は求める「答え」を探しに仲間たちと旅立ってしまう。その残りの二日間は体を休めるための休息の時間だった。

そんな短い休暇にスバル達はちよつとしたいつもの平和が訪れていた。

「なあゝスバル？」

時は午後、そして現在、星河家にちよつとした事情で居候してもらっているレイとリサ。昨日の晩御飯の食卓もレイと大吾、そしてウォーロックのせいで大いに盛り上がった。たくさん並べられた料理にレイと大吾はかなり食べていた。負けず嫌いの二人はきつと大食い勝負に何故か入ったのだろう。その様子を見ていたスバルとリサとあかねはこちらも満腹になったような思いになってしまった。

「なんだい？レイ？」

スバルの部屋には本を読んでいるスバルとレイの姿があった。ちなみにリサは星河家のお手伝い中だ。

「居候させてもらうのですから少しはお手伝いしますので」とかい、あかねのお手伝いをしていたのであった。それに比べてレイは気楽にスバルの部屋で遊んでいた。

スバルは今日はいつもの服ではなく適当な軽い服装だった。ちなみにレイやリサは暁から当初、長期の戦いになるだろうといっておい

ていたため着替えなどの荷物を持ってきていた。レイも家の中からできる軽い服装だった。

「これ、お前のギターだよな？」

レイが指差したその先、それはスバルの使ってる愛用のギターの姿があった。その隣にはアンプの姿もあった。スバルの使っているギターは全体的に黒く、所々に赤い細いラインが入っているギターだった。

「あ、ああ……。これは僕の使っているギターだよ……」

スバルはなんか余計な過去を頭の中をよぎり、苦笑いをしながらそうレイの質問に対応した。

「なんのきっかけで始めたんだ？ お前にはギターは似合わないと思うが……」

（おいおい……。バツサリいったなこいつ……。）

スバルのハンターV Gで待機しているウォーロックがレイのストリートさにそう思っていた。このところ、ウォーロックもレイと同じ心境を抱いていたのだ。

「まあ、僕も最初はあるまりやりたくなかったんだよね……。でもねある人からの上目遣いお願いされて断れなかったんだよ……」

スバルは不敵な暗い苦笑いと共に、思い出したくない過去を思い

出してしまったかのような顔をしていた。

と、同時にミソラの事も思い出す。彼女は今、どうしているのか。今、一体、どこで、何をしているのかが気になってきたスバルであった。

（もしかしてミソラっていう人か・・・？しまったな・・・あいつのとっても大切な人って聞いているからな・・・。今の質問はしくつたな・・・）

レイはスバルにもしかしたら現在起きているミソラの事について語らせてもらった事についてまずい顔をしている。その顔を見たスバルは。

「もしかしてミソラの事についてまずいと思った？」

スバルがレイの心境を読み取り、スバルがレイの心境を読み取ったことについて質問してきた。

「あ、ああ・・・」

レイは表情を曇らせて萎縮していた。もしかして自分の軽率な質問がとんでもないことをしてしまったことについて。

「別にいいさ、過去を振り返ったってなにも変わらない。変わるのはいだけさ。だから僕は未来を変えるために前しか向かないさ」

「フッ、何気にかっこいい台詞言うじゃねえか。そうだ、お前がギターをやっているっていうことが知れたんだから一回弾いてみてくれないか？どれくらい上手いか見てみたいからさ」

レイはかっこいい台詞を言ったスバルを茶化す。

「え・・・でもしばらくひいてないから多分へたくそになってるよ・・・」

「それでもいいさ。俺にとってはギターの知識は全く知らないから気にすんな」

レイはギターの事を知らないといい、スバルに安心感を持たせるようにした。

「わ、分かった・・・」

スバルがギターのコードをアンプと呼ばれる音源につなぎ、そして音量のつまみを回し調整する。

「これぐらいでいいかな・・・」

念入りにアンプにつながれたギターを弾き、その上、弦の調整を始めた。

「よし、こんな感じかな・・・」

ギターのストラップを体に取り付けて落ちないようにする。そしてネックの部分に手を当てて弾くした準備をした。レイはギターを持っているスバルの姿を見て、様になってみえていた。

「いくよ・・・」

スバルは弾く合図を言った。レイはスバルがどんな演奏するのか



が楽しみだった。自分の友達にこんな予想外の一面があったからだ。スバルは小さな深呼吸と共に弾いていた。

こうしてスバルが自分の呼吸に合わせるように弾き始めた。少し低い重低音がアンプから聞こえてきて綺麗な音の旋律を作っていく。そして出来上がった曲の音楽の演奏が、ミソラが作った曲「ハートウェーブ」であった。彼女が作った曲、彼にとっては心の支えにもなっていた曲であった。彼女の出会いがあったからこそ、聞いた曲。そして今、ここで彼女が作った曲を弾けている自分の姿がある。弾いているスバルは少しだが隣に彼女、自分の愛用のギターのストラップを肩に回して弾いている響ミソラの面影が見えたような気がしていたスバルであった。

そしてスバルがミソラの曲、ハートウェーブの演奏が終わる。レイはミソラの曲が聞くのが初めてなため、レイにとっては全てが初めてな為、新鮮な感覚があった。

「・・・すごいな・・・。ギターの知識が全くない俺がいうのもなんだが・・・」

スバルの演奏を聞いていたレイがその感想を素直に言った。

「ありがと・・・。久々、ギターを弾いたから指が少し動かなくなっていたよ。少し練習するかな・・・」

そう、スバルはブランクがあったためギターを弾く際に、少し指が自分の意識したことという事を聞かなかったのだ。やらなければ鈍る、そう、それは何かをやっている人、全てに与えられる問題だ。運動しなければ体が訛る。感覚が鈍ってしまうなど、自分の中のスキルが低下してしまう。スバルは自分のギターのスキルが低下して

ると悟り、練習を始めた。

ギターの事について全く知らないレイはもうスバルが練習しているだけでも興味津々だった。スバルはギターの練習に集中し、レイはそれをずっと見ていた。そんな感じの会話があまりなかった時間はあっという間に過ぎていった。

気が付けば季節はまだ寒冷期、冬の真ただ中。スバルの部屋から見えた大きな窓から見える空の風景は厚い雲と空から静かに舞い落ちていく雪の小さな結晶。空は少しずつ暗くなっていた。そして少しずつだが町の街灯に明かりがつく。時計を見れば時計の長針と短針は4時をちょうどを差していた。

「雪が降ってきたね・・・」

「ああ・・・。俺らは世界を転々としているからいろんな季節を味わっているからおかしくなりそうだな」

レイは空から舞い落ちる雪を見ながらそう言った。

「そうだね」

レイの言った言葉にスバルが小さく笑う。

イタリアには日本と同じく、気候は地域によって違うものの、気温と季節はある程度一緒だった。だがこれからもスバル達は世界を転々とするだろう。そうした場合、温度と気候も変わるためスバル達はその話をしながら固唾を少し飲んでしまった。

「スバルーお客さんよーー！！」

突如、一階からスバルの部屋のドア越しに母親、あかねの声が聞こえた。

「なんだって？」

「お客さんだって」

「突然だな。いきなりのお客さんなんてな・・・」

「全くだよ。階段下りるのめんどくさいな」

とスバルがため息交じりにいった言葉にレイは小さく吹き出していた。

「ま、いってらっしゃいだな」

「うん」

スバルはそういい、自分の部屋の戸を開いて階段を下りて一階に到達しリビングを経由して、玄関に向かっていった。

突然の自宅への訪問者、それは一体誰なのか。スバルは気になりながら自宅の玄関の戸を開いたのであった。

## Auf t a k t | 26 仲間の再会と面影

突然の星河家への訪問者、それは一体誰なのか？ 気になりながらスバルは自分の部屋からでて玄関へを向かう。

「一体誰なんだろう？」

僕あてに訪問者とは一体、という疑問を持ちながら玄関の戸を静かに開いた。その開いた戸に映ったのは、コダマ小学校のブラザーバンドで結ばれた信頼できる大切な仲間、二つの後ろに長いまかれた金髪のツインテールが特徴の白金ルナ。大きい体にながさつで乱暴な性格がある牛井大好きな牛島ゴン太、そして背が小さく、眼鏡を取り付けている最少院キザマロ、そしてかつて過去にロックマンと戦った二つの人格を持つ男、双葉ツカサの姿があった。

「み、みんなあ！？」

スバルは狭い玄関で素っ頓狂な声を上げてしまった。

「一体、ど、どうしたの？ 皆揃ってきて・・・」

「何も、どうしたじゃないわよ！！ どうして、何も言わずに行っちゃうのよ！ 心配したのよ！」

とルナが大きな声を上げながら言った。大きな声の裏にはうつすらだが目に小さな涙が浮かんでいた。よっぽどスバルの事が心配だったのだろう。それはそうだ。今まで自分の無力のふがいなさに悔やみ、いつもスバルだけに地球の危機を背負わせてしまい、そして

また今回もスバルだけに地球の危機を背負わせてしまい、心配で心配で仕方がなかったのだ。

「ご、ごめん・・・」

『あゝあ、スバル、地球では女を泣かしたら罪に値するらしいな。どうすんだよ』

ウォーロックは小さな声で言った。一体、こんなことをどこで知ったのだろう。それが気になったパートナー、星河スバル。

「なんで余計なことは頭に入っているのあんたは！」

などと、スバルは余計な知識しか入っていないウォーロックに怒った。

「お前がいない間、クラスの皆が心配してたんだぞ。少しはみんなに挨拶の一つぐらいしていったやれよな」

ゴン太がゴン太らしくない発言をする。

「ホントにごめんっ！！」

スバルが深々と謝罪のお辞儀をした。スバルは謝ったが、相手はあの委員長、白金ルナがいるのだ。きっと大きい一撃でも来るだろうと覚悟していたスバル。

「どうしたの？」

家の中から、星河スバルの母親、星河あかねが姿を現した。

「あら〜皆揃ってどうしたの？さ、玄関じゃ寒いから、中に入りなさい」

「あ、ではお邪魔しま〜す」

母が来たことにより心の中で大きい一撃を喰らわずに安堵したスバル。ルナ達が玄関で靴を脱ぎ、そしてスリッパを履いてリビングに向かう。その複数の足音に中であかねのお手伝いをしていたリサが気づく。そこから彼女なりの対応を始めた。

「あ、スバルさんのお友達ですか？初めまして、私はスバルさんと同じ暁さん率いる遊撃隊に所属しているリサと申しますわ。今は星川家に居候させてもらってます。以後よろしくお願いします」

とりサは礼儀正しく、上品に自己紹介とお辞儀をした。お辞儀すること で なびく綺麗な黒髪。その上品な態度と、綺麗な顔立ちにゴン太達は気がとられてしまった。

「ちょっとスバル君・・・」

突如、ツカサがスバルに小さな声で話しかけてきた。

「なんだい？ツカサ君・・・？」

「まさかとは思っていたが君もここまでおちぶれるとは思っていなかったよ……。まさか二股ですか？何様ですか？」

ツカサはおそらく、ミソラが星川家に同居していることを知った。その上、彼女を家に居候させた親密な関係になっているということ

も。そして今回、新たな少女、リサが星川家にいたことにより、ツカサの思考回路ではまさかもしかしたらもう一人の「彼女」ができたという変な意識を持ってしまった。

「そ、そ、そんなわ、わけないよ!!ば、僕は二股じゃな、ないって!!」

スバルは大切な仲間からによる予想外の一言をもらい、自分でも変だと思うほど思いっきり動揺していた。その上、何回も噛んでしまった。

「そうだよね・・・。スバル君に限って二股はないよね。ごめん、今の言葉取り消して」

「う、うん・・・」

スバルはその言葉にまだ心臓が早鐘を打ち、顔を真っ赤に染めて緊張していた。それに対しツカサは苦笑いをしていた。

(あやしいな・・・)

などとツカサは表に出さず自分の心境を心の中で喋る。だが実際のところ、リサとスバルの関係は「背中を預けれる仲間」という関係なのだ。だから何の関係もない。

リサとあかねを除く五人がリビングにいる。リサは気を使い、五人に会話させるためにその場を外れた。その直後、沈黙がリビング内に走る。あかねは五人の会話が気になり、家事作業をしながら耳の聴覚感覚を研ぎ澄ませている。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ねえ？ちよっと？」

沈黙の均衡を破ったのがルナだった。喋ったルナにスバル達の視線が集まる。

「いろいろ話したいことが山ほどあるんだけど、まず最初に思ったこと、ミソラちゃんの姿が見えないんだけど・・・」

とルナが言った言葉にスバルにとっては胸に槍でさされたような感覚が走る。その後、スバルはミソラの現在の状況に話すことに躊躇する。今の彼女の現状、そして彼女が世界を壊す引き金的存在となっていることに。口を開き話すことに何回も迷った。この話を言えばどんなことになるか。

「ミソラは・・・・・・・・」

「どうしたの？なんか話したくないの？私達、仲間でしょ？」

スバルはずっと一人で迷っていた。心の中でミソラの話聞くのに受け入れられず、当時はミソラを救うことに決意したが、真実が明らかになっていくたびにどんどん彼女を救出する気持ちが低下していていたのだ。そんなことをずっと抱えていたのだ。思いを。出口のない迷宮を永遠とさまよい、ただ受け入れにくい真実をスバルの耳から脳へ伝わり、そして記憶させてしまう。だがスバルはルナからの「仲間」という言葉に出口のない迷宮からの出口がすぐに見



つかった。そして気持ちが若干晴れる。話せば、もしかしたらスッキリするかもしれない、と思いスバルは話す決意をする。そして小さな深呼吸と共に口を静かに開き話す決意をする。口を開くルナ達は固唾をのみ、小さく喉を鳴らす。

「実はミソラが僕たちを裏切り、世界を崩壊させている。今回の事件の主犯格的存在なんだ……。けど、どうやら彼女の意志ではないみたいなんだ。何かに操られてるような感じがして……。その裏には何か大きな者がいるような気がするんだ」

と、スバルは話した。さすがに彼女の中に宿る、バリアント・ハデスの破壊の悪魔の獣がいるという話はふせておいた。もしかしたらこれを話すことにより、スバルがこの化け物を対峙するという意識を持ってしまうかもしれないのだ。持ってしまうことにより、失いたくない電波変換ができる大切な仲間、ゴン太やツカサが少しでもスバル君の力になりたい。といいだすかもしれないからなるべく話すべきではない話はなるべく伏せた。今はスバルが認める実力ある仲間が四人もいる。この仲間たちだったらきっと無事やりとげるだろうと思っていたからだ。

「そう、よく私達に話してくれたね……。それで、話の内容的に察するとどうやら裏切りをしたミソラちゃんに会ったみたいね」

ルナは勘が鋭かった。スバルが言ったミソラが主犯格的存在なんだといい、恐らくルナはきっと出会ったのだだろうと悟ったのだ。

「うん。僕と暁さんがミソラと接触してどうにか引き戻そうとしたけど無理だったんだ……。圧倒的なミソラの力になす術もなく僕たちは負けていったんだ……」

「それでノコノコ帰ってきたの？」

突然、静かな沈黙が走る部屋でルナがそういった。

「うん・・・」

「貴方とミソラちゃんの絆ってそんなものなの！？なす術がなかったから戻ってきた？貴方がミソラちゃんに対する思いはそんなに脆いものなの？ムー大陸事件の裏切ったミソラちゃんは一人で抱えていた。きつと今回もスバル君の為に一人で抱え込んでるはずじゃないの！？貴方とミソラちゃんは最初は後ろ向きで暗い過去を抱えている人だった。でもお互いがお互いを信じ合い、そしてブラザーバンドという絆の証を結んだじゃないの！？」

ルナが大きな声でそういった。一つの大きな声がリビングにこだまする。

「うん・・・分かった」

スバルがそう言ったが返事には力がなかった。

「皆、晩御飯ができたから食べていけない？」

あかねがそう言った。おそらく五人の会話を聞いていて、気を楽しみにしてあげようと思ったのだろう。さすがは母親。子達の気遣いが上手かった。

「いえ、悪いですよ。こんな大人数で」

ツカサが恐縮している。こんな大人数で食事なんかしたら大変だ

ろうと思っていたからだ。

「いいのよ、うちは賑やかなほうがいいし、いつもは人数が少なくてさみしいから」

「ではお言葉にあまえさせていただきます」

と、ツカサの言葉と共にツカサ達はお辞儀をした。けどツカサとルナはそもひかえていたようだ。

今夜も前みたいに星川家の食卓は賑やかになりそうだ。少しでもスバルの気が楽なればと思い、皆と食事させる母の優しい思いやり。楽しい夜の食事の時間が過ぎて行つた。空腹に耐えきれなかったレイはリビングに来て「晩御飯なんですか!？」と空気を変えた言葉が走り、その直後、リサから「静かにしなさい!」とレイの頭に洗礼がかまれたのはいうまでもない。

久々見れたみんなの顔。そして新たな仲間の顔。そこにはなかったミソラの存在。隣には笑顔で箸を右手で持ち、食べているミソラの面影がスバルにははっきり見えた。どうしても救いたいという気持ち。仲間から励まされた気持ちと共にスバルは頑張ろうとした。

近日、また出発。少年たちは覚悟を決めて戦おうとしていた。

## Auf t a k t | 27 戦士としての誇り

スバル達が帰還してから三日が経過。スバル達が休息を取っていたところ、ある男はこんなことをしていた。

「はあっ！！！」

静寂のとある廃れた採掘現場。ここに一人の少年の叫び声が轟く。直後、何かと何かが激突する音がして地響きと何かが崩れる音がした。それはソロが電波変換して右手には得物のラプラスソードの柄を手に持ち、岩にぶつけていた姿があった。

「くそっ、このままじゃ奴に勝てない……。ロックマンにも勝てない……」

ソロは考え事と共にラプラスソードを振るう。再び、岩が弾け砕けていく音がする。

「はあ、はあ、はあ……」

ソロが呼吸を荒くする。普段、彼が滅多に呼吸を荒くすることはなかった。気が付けば辺りは真っ暗になり、夜空には一つの満月と無数の星が浮かび、採掘現場を月の光で薄く明るくしていた。

「まだまだああああ！！！！！」

ソロは呼吸が荒れても自分を鼓舞して、一心不乱にラプラスソードを振るう。ラプラスソードが岩に直撃し、音と共に粉々に砕けていった。

「もっと力がほしい……。力をつけてもっと強くなり、ロックマンを倒し、奴を倒し、俺が最強を示す!!!」

誰かが強くなって相手を凌駕すれば、それは自分が強くなったという証拠だ。かつてソロは過去に自らの持つ忌わしい能力に束になってかかってきた人間にやられたことがある。ソロは強くなりたいという思いと共に力を付けて復讐をしていった。強くなったのも、努力をした証拠だ。そして今もソロは力と技に磨きをかけて強くなってスバルに挑んだ。だが彼も強くなっている。彼自身も努力をして強くなっていたのだ。

どうしても強くなりたい、という思いにソロはラプラスソードで斬りつけていた。その直後、ソロに来訪者との接触が訪れた。

「まだまだだな……。ムー大陸の唯一の生き残り、ソロよ……」

採掘現場の一番の高台に見たことのあるシルエットがあった。どこかで見たことのある体つき、そして声。その正体は。

「貴様はエンプティーか!?!?」

「久しぶりだな、孤高の戦士、ソロよ……」

エンプティーと呼ばれた男。かつてムー大陸事件以来、行方不明となっていたが今、ここに姿を現した。エンプティーの羽織っているマントは一種のウタガイエリアであり、外部から空中線電力でエ

エネルギーを供給される事でマテリアライズ（実体化）し、無限のエネルギーを持つ電波変換体となっている。落雷や電撃での攻撃の他、魔方陣を作成して電波ウィルスを召喚して攻撃する特殊技をもっている。

数か月の時を経て、そしてまたソロの前に姿を現した。

「生きていたのか・・・何しにきた!？」

「ソロよ・・・。力がほしいなら己の心を変革させる覚悟はあるか・・・？」

「何を言っている!？」

エンプティーの発した突然の言葉にソロは疑問の声を出した。

「力がほしいのだろうか？ 貴様の顔を見ていると分かりやすい。自分の弱さが憎い。もっと強くなりたいとでている」

「悪いが、俺はそんな容易い力なんか受け入れるのは持ってた他だ。俺は俺自身で力を付けて強くなって見せる。簡単に手に入れる力なんて圧倒的に脆いからな・・・」

ソロが涼しい顔でそういった。そして喋り終わった後、ラプラスソードをエンプティーへと向ける。

「フッ、貴様も変わったな・・・」

エンプティーが小さな吹き出しと共に喋った。

「あの時の勝負、ここでつけるか？」

「いいだろう。その挑発的な態度を叩き潰してやる！」

ムー大陸でのエンプティーとソロが戦ったが決着がつかず、曖昧になっていた。そして今、ここで真の決着がつかうとしていた。

山奥の採掘現場に氷のような静寂が走る。ソロはラプラスソードを構えている。エンプティーはソロと同じように臨戦態勢に入り、彼の両手からは音と共に電気が走っていた。

「うおおおおお！！！」

沈黙の均衡を破ったのがソロだった。叫び声と共にエンプティーへとラプラスソードを地面と水平状にして接近する。

エンプティーは一步退いた。ソロの気迫に気圧された訳ではない。自らの意図があつてとった行動だ。

その間にも、ソロはどんどん接近する。直後、ソロの右手を振り上げて、ラプラスソードがうなりを上げて申し分のないスピードでエンプティーへと振り下ろされる。

「あまい！！！」

エンプティーは簡単に処理した。バックステップしてラプラスソードの攻撃を容易く回避する。

直後、エンプティーにソロのラプラスソードが降られた影響で起きた風がくる。

「まだまだあああ！！！！」

回避されてもすかさず体重移動し、自分の背丈と若干小さいくらいの威力の乗ったラプラスソードを殺さないように、左から右へと回転切りへと持ち込ませた。

「あまい！！」

エンプティーは赤い光を放っている魔方阵を自分の前に展開して、魔方阵を盾代わりにソロのラプラスソードからの攻撃を防御する。

「なっ！！？」

エンプティーがこの技の応用をしてきたことに一瞬驚いた。

「強くなっているのは貴様だけだと思うな！！喰らえ！マジックサンダー！！」

「くっ！！」

エンプティーが両手を上に掲げた後、暗雲が立ち込めた。直後、上から雷がソロに向かって降り注ぐ。

ソロは小さな声と共に真横に回避する。雷がズドンズドンと地面に直撃して地面を破壊する。深くえぐられた地面。威力の大きさを物語っている。それをみたソロはエンプティーは一段と強くなっていると認識を改めて固唾を飲み、精神を集中させる。

「まだまだ！マジックサンダー！！」



エンプティーの掲げた両手から電撃が放たれる。

「あまい!!」

ソロは一度見た攻撃は二度もそう簡単に当たらなかった。容易く回避してエンプティーの懷に潜り込む。そしてラプラスソードを使うのではなく、体術を使った。剣を捨てて、両手での殴るからの足の蹴りを加えていった。連続攻撃を加えられたエンプティーは吹っ飛ばされた衝撃で宙を舞った。

「うおおおお!!!!」

もちろん、ソロはその隙を見逃さない。剣を素早く広い、ジャンプしてエンプティーに接近する。そして空中でラプラスソードをエンプティーへと斬りつけようとする。

「あまい!!」

エンプティーは直後、姿を消した。姿を消したと同時にソロの後ろに回り込んでいた。対外、人の絶対的な死角は後ろであった。どんなに達人な人でも後ろから攻撃されたら対処はそう簡単にはできない。エンプティーはサンダーバズーカの構えをしていた。

両手から電撃がソロへと一直線に放たれる。

「くそっ!!」

ソロはラプラスソードの剣の腹でガードする。ガードした瞬間、エンプティーの放ったサンダーバズーカの威力が剣から腕へとのかかり、衝撃が腕全体に走った。

「あまい！ いけっ！ ウイルスたちよ！！」

エンプティーが展開していた魔方陣から突如ウイルス達が召喚された。召喚されたウイルス達からはエンドラ、ベルジャツジ、モノソードが召喚されてきた。召喚直後に、素早くソロに攻撃する。

「しまっ！」

言葉をいいおえる直前にソロはエンプティーの魔方陣から召喚した電波ウイルス達の攻撃の洗礼をまともに喰らう。運悪く、ソロの溝に一撃が入ってしまう。

「ぐはっ！！・・・」

小さな苦しい呻き声と共にソロは口から血反吐を吐いた。血反吐が地面を赤く染める。

「うっ・・・、中々やるな・・・」

「貴様はその程度なのか・・・？」

その言葉にソロは気になった。己の限界はここなのかということに。直後、ソロは立ち上がり、口の中にある血をつばと共にペツと吐き出した。その後、口から垂れる血を右腕で拭う。

「俺はこんなものじゃない・・・。貴様との決着は絶対に付ける！！」

ソロはラプラスソードをラプラスブレードに変換して右手に持ち、大きく佇む。そして小さな深呼吸と共にエンプティーとウイルス達

に向かっていった。

ソロとエンプティーが二度目の対決に突入していた。何故、彼が生きていたのか。彼の「主人」は一体何をしているのか気になったソロ。

自分の力が、己の弱さが憎たらしい、とソロは右手に握っているラプラスブレードに怒りをぶつけるように柄を思い切り握る。

ソロは握っている右手が血が吹き出しそうなくらいに握っていた。柄が圧迫される。

「いくぞ！！ラプラスブレード！一閃！」

ソロは自分の足を動かしてエンプティーへと接近し、勢いと共にラプラスブレードで使用できる閃光の一斬りを放った。ソロの高速移動と達人の剣捌き。彼が使える直伝の技だった。

ラプラスブレードがかなりの大きなうなりを上げてエンプティーに襲い掛かる。エンプティーは自分の身を守るために再び両手が不思議な動きと共に魔方陣の盾を展開させた。

直後、エンプティーの魔方陣とソロのラプラスブレードが激突する。激突した直後、音があたりに攪乱し、空気が揺れた。そしてエンプティーの足元には亀裂が走っている。恐らくエンプティーの魔方陣から地面までソロのラプラスブレード、一閃の威力が伝わったのだらう。威力の大きさを物語っている。だがソロは歯に力を入れて無理矢理、魔方陣ごとエンプティーを吹っ飛ばそうとする。

「いまだ！ウイルス達よ！」

ソロはラプラスブレードの攻撃がエンプティーに弾かれてしまった。エンプティーの左右からベルジャツジ達が展開し、己の得物を手に持って躊躇なくソロに襲い掛かる。

「フン！」

ソロは小さな叫び声と共にその場から姿を音なくして消した。その後、エンプティーが展開している魔方陣の正面には無人の空間となる。そこから左右から襲い掛かってくるウイルス達はそれぞれの持った得物が反対側のウイルス達に直撃してしまい、不運にも一撃で消滅してしまった。

「中々やるな・・・」

「貴様もな・・・自ら囷となって、左右から召喚したウイルス達に挟撃を行わさせるとはな・・・」

ソロは生唾を飲み込んだ。これはまだまだ長くなるだろうと思い、距離を取った。額からは一筋の汗が頬を伝って垂れる。ソロはそれを右腕で拭い集中する。ここには己の技術と力しか頼れない。だからどうにかするしかない。この状況を打開できる策を。

「ラプラスブレード！七閃！！」

ソロは小さな深呼吸と共にラプラスブレードの柄に力を入れて思い切り振る。ラプラスブレードから放たれた高速の衝撃波がエンプティーへと襲い掛かる。だがエンプティーは魔方陣を展開してどう

にか防ぐ。

「ぐっ……」

エンプティーはソロの一閃と七閃を正面から防いでいる。エンプティーが展開する魔方阵は展開した部分した所しか防げない。ということはつまり回り込めば防御できないということだ。

その事を悟ったソロはいち早くエンプティーの背後に回り込みラプラスブレードを振り上げて斬りつけようとした。ソロのラプラスブレードが空を向く。月の薄暗い光にラプラスブレードの剣の部分が光を反射させる。

「うおおおおお!!!」

「しまっ!!?」

ソロは叫び声と共にラプラスソードを振り下ろした。勢いで振り下ろされる剣。神速の速さで振り降ろされた剣はエンプティーが言葉と回避をする直前にエンプティーの体を確実に切り刻んだ。切り刻まれた衝撃によりエンプティーは吹っ飛ばされる。

「俺は強くなる……。幾ら俺が弱者だろうと、勝てなくても……、だったら俺は地獄の底から再び自分の力で這い上がってやる!!!」

ソロはラプラスブレードをエンプティーに向けながらそう言った。

「貴様は本当に変わったな……。前の貴様なら力を手に入れるならどんな事だって簡単に手に入れてたはずだ。やはり、星河スバルの影響か……?彼は人の心をも動かしていくのか……。彼には

何が見えるんだ・・・？」

「奴は・・・過去には俺と違って仲間を信じ、自分の力を付けていった。それに対し、俺はただ単に簡単に手に入れられる力を己の意志で受け入れていただけ。俺は奴の力に嫉妬していた。俺がいくら強くなっても、奴はさらにその先をいつている。自分の力で・・・。だったら俺は自分で自分を強化し新たな極みを目指していく・・・。それが俺のあの日の決意だった・・・」

ソロのあの日の決意とはいったいなんなのか・・・。それが気になったエンプティー。

「だからさ・・・」

ソロは小さな深呼吸と共にラプラスブレードを地面と水平面上にしてエンプティーに向かって走りこむ。と共にエンプティーの反対側に回り込み斬りこむ。

だが同じ手は食わないエンプティー。迅速に対応し後ろにサンダーバズーカをソロに向けて発動した。

サンダーバズーカがバチバチという電撃が音を立てながらソロに向かう。ソロは持ち前の反射神経を使いスライディングをするようにしてかわした。サンダーバズーカには大きい威力と範囲がある反面、地面に近い回避できる空間があった。ソロはそのことを察知した。

「いくぞおおお！！！！！！」

スライディングをしてエンプティーのサンダーバズーカを回避し

たソロは一気に懷まで潜り込む。エンプティーは近接技がなく近接対応の防御技しかないとためソロの動きに対応できなかった。そしてエンプティーはソロのラプラスブレードによる大きな一撃の洗礼を喰らってしまった。

「うっ・・・」

ソロの大きな一撃の洗礼を喰らったエンプティーは立ち上がることが出来なかった。倒れているエンプティーにソロは小さな足音と共に近づいた。

「一つ問わせてもらいたい。あの時、お前が俺にいった己の心を変革してみるきはないか・・・というのにな・・・」

ソロはエンプティーの言った「己の心を変革」という言葉が気になっていた。自分を何を変革させるのか、ソロはそれを気にしていたのだ。

「星河スバル・・・彼は絆、仲間、それらを背負って強くなっている・・・私は彼から教えさせてもらった。あの真っすぐな瞳。絶望的な状況でも諦めない心。私は彼に動かされた・・・」

「・・・」

「だからさ・・・ソロ、貴様も「絆」というのを一度信用してみてはどうだ・・・」

「絆・・・」

ソロが最も嫌いだった絆。当時、スバルの仲間の絆の關係を見て



いて非常に怒りが立ち込めていた。過去にも非常につらい過去があり一人で生きていく、絆はただの傷のなめ合いにしか受け止めてなかったのだ。だがエンプティーの一言により自分の心が揺らぐ。

「それはまっぴらだな・・・」

ソロはそういい、その場を後にしようとラプラスブレードを消滅させてその場を後にしていった。

エンプティーはソロの様子を見て、ここは変わってないかという心境を抱いていたのであった。

曉達率いる遊撃隊は今度は求める「答え」を求めに一度、過去に  
来たナンスカに向けていつも利用しているスカイウェーブという地  
球の遥か上空の電波の道で移動している。スカイウェーブは全世界  
に共有されており知識無き者が入りこんだら迷いそうな道だ。

スバル達は現在、電波変換して移動中である。思えば、懐かしい  
という記憶が心の底から走馬灯のように込み上げてくる。過去にム  
ー大陸の事件時に大切な仲間がここに飛ばされて、記憶を失ってし  
まったという今になっては笑ってしまうような思い出だ。

そんな事をちらっと思いながらスバルは移動を仲間と共に続ける。

「懐かしいな……。前に来たな……。あれからどうなっているん  
だろ……。」

とスバルは小さな独り言をいう。過去に来たナンスカ村。ここは  
かつて人の都市移動と技術発展により人が減少し、過疎化していた。  
勢力拡大したいということに悩んでいたナンスカ村の村長は来訪者、  
ハイドにより、力を受け取り、悪魔に魂を売ってしまう。そして新  
たな電波体、コンドル・ジオグラフをなった村長は自分の偉大な力  
を世界に見せつけようとした。

だが電波変換した世界の英雄、星河スバルが村長を止めて、止め  
られたことによりナンスカ村は滅ぶという最終的な結論を出す、  
村の住民、そしてゴン太の励ましにより村を存続、活性化しようと  
立ち上がる。更にゴン太のここの肉はおいしいという提案を出して、

それを名物にしようと取り上げた。それに賛成した一同はこれをメインにして観光名所として立ち上げた。そしたら観光人の心をつかめたのかかなりの来客があったらしい。今は雑誌やガイドブックに載るほどの人気な村だ。

あれから数か月の時を経て、村や村長、住民たちはどうなったか気になったスバルだった。

「私も雑誌で一度、ナンスカ村の様子を見たことはあります。なんでもここは素晴らしい古代の遺跡と料理が特徴だとか。一度、ここに来たいと思っていますよ」

などトリサはスバルに丁寧な言葉で笑顔と共に返答する。そんなうまい言葉遣いが常時出来るなんて凄いとスバルは感心していた。そんな軽い談笑をしていたスバルとトリサだったが話は途切れてしまう。何故ならもう到着したからだ。そこから上空、地上へと離陸するスバル達。そこには前見た風景、もしくは写真で見た風景とは全くの違う世界がスバル達の目に映し出された。

「すごい・・・僕たちが前きたよりかなり発展している・・・」

そこに映し出されたのは、まず目に付いたのが人の多さ。街並みは人で溢れかえっている。そして建造物も床が石畳でテントをかけただけの古臭い建造も、今となっては木材としたがっちりとしている建造物家へと発展していた。街並みの人の顔も笑顔で溢れていた。店で接待する住民の笑顔、村の人の顔、そして観光客が美味そうに料理を食べている笑顔。確実にここは観光名所として村が活性化していると思っていたスバルであった。

「凄いですね・・・。写真で見たよりは全く違う」

スバルとリサは感嘆の言葉を漏らした。暁もレイもこの若干砂漠になりかけているのにこの活性化した町を見て感心する。ソロは相変わらずの無表情だ。だが何かを考えてる顔をしている。

そして姿がばれないように陰で電波変換解除して表も町通りに出る。直後、町の人たちに話しかけられた。恐らく、自分たちの服装が、ナンスカ村の住民とは全く違うため観光人とみられていた。町の人は雑誌で見た名物を前に出して笑顔でスバルに売りつけようとしていた。だが、そんな地元の優しい接待もスバル達は笑顔で断ったが、なんか断りにくいざこざがあった。

「ふう。買ってしまったよ」

スバルが安堵の言葉を出す。ここで買ってしまえば大きな出費だ。

「危なかったな。相当、活性化しているな。住民たちの顔に疲弊が見えないぜ……」

「さすがだね……。まだ一年しかたっていないのにここまで進化するなんてね……」

などとスバルはこの村の発展、進歩したことにより感心する。これが一致団結した人の力だとスバルはそう意識した。

その後、人の流れに沿って、スバル達は移動する。移動すること三十分。前に来た中央広場に五人は流れ着いた。ここには恐らく四階ぐらいの不思議な建造物が四個ぐらいあった。その中の一つの建造物にはゴン太いわく、ゴンターガの石造がまつえられている。下にはお供え物が沢山、綺麗に供えられている。

西のはずれにはカードトレーダーまであつたりする。

「これは!？」

「ゴン太の石造だな・・・」

暁はあっさりと即答した。ゴン太のナンスカ風の独特の衣装。それを見た暁は哑然とする。他の皆はあまりゴン太のことを知らないため、これも町の観光名所だと思い、興味津々にゴン太の石造を見ていた。

「懐かしいようで、懐かしくない・・・。なんでだろ？」

スバルはそう思っていた。

「おっ？ スバル君ではありませんか？」

そこにナンスカ村の村長、ナンスカ・オサ・アガメの姿がスバル達の前に現れた。昨年見たときと全く変わっていなかった。長く伸びた無精髭に右手にもっている杖。相当の年を老いている老人だろうが、その年を取ったという雰囲気はなく元気だった。そしてスバルは再会の証にがっちりと握手する。

「村長、お久しぶりです。元気でしたか？」

スバルは言葉遣いを正しくする。言葉遣いの丁寧さはリサほどではなかった。

「ああ。あれ以来、ここの肉とこの古代の遺跡を観光名物として取

り上げたら見事にうなぎのぼりじゃよ。前とは違い、ここに来てくれる近辺の住民もここに来てくれるようになった。ここまで活性化できたのもおぬしのおかげじゃ。本当に感謝している」

などと村長は感謝の言葉を述べ、同時に頭をスバルへと深々と下げた。

「い、いや僕は何もしてないですよ。活性化の提案をしたのはゴン太ですし・・・」

「何も謙遜する必要はない。お主には本当に感謝している。せっかく来てくれたんだ。もう一度見ていってもいいぞ」

「ありがとうございます。ではお言葉にあまえて」

スバルはそういい、五人は小さな挨拶と共に村長と別れて、小さなアーチ状の石をくぐり、遺跡へ向かった。

「並々ならむ雰囲気でしたね、あの村長」

リサは村長を初めて見た感想をスバルに喋った。

「あの人は村と住民の事を一番大切に思っている人だからね。きっとまだまだあの人なら活性化させてくれるはずだよ」

と、スバルは小さな言葉を言う。五人は移動しながらようやく遺跡前の古代に描かれた地上絵の場所に到着する。ここはムーに關係

した古代の地上絵。今でも明確になっている。地上絵の凄さに狩られたリサとレイと暁は興味津々に観光をしていく。

鳥の地上絵や、三つのベルセルク、シノビ、ダイナソーの三つの壁画。このすべてに興味津々だった。説明の区分も小さな感嘆の言葉を漏らしながら見ていく。隣には観光客を案内、説明するマテリアライズ式のウィザードが展開されており、地上絵の付近に来た観光客に説明している。

スバルは一度、観光に来たためほとんど覚えていてあまり面白く感じなかった。といってもあまりここに来る機会は滅多に無い為、一応古代の壁画と地上絵を自分の頭の中に叩き付けた。

「久々、見たなこの地上絵……。確かこの奥の遺跡にはたくさん歴史があったんだっけ？」

などとスバルは小さな独り言を言いながら観光していく。ソロは楽しんでいる四人から一人、別行動へと脱線した。広場にあるムーが関わっている地上絵、壁画にも目をくれず遺跡のほうへと進んでいった。どうも彼の様子からして心に何かが練り混ざって考え事をしている状態だ。

「・・・何を恐れているんだ俺は・・・」

ソロは小さな独り言を言いながら、自由開放の遺跡へと進んでいく。ここにはかつて電波変換したスバルと、電波変換したナンスカ村の村長が戦った場所だ。ここは戦いの衝撃で荒れていたが今はナンスカ村の地元の復旧作業により綺麗になっていた。

「フッ、懐かしいな……。あの時、決意したのもここだったか・・・」

┐

ソロは懐かしい記憶を思い出すような顔で青い空を見つめた。



そうそれはおよそ一年前の月日が遡ったあの日。一人の少年はナンスカ村の奥の最深部の遺跡でただずんでいた。少年は空を見上げて歯をギチギチと音を立てて噛み締めていた。青い空、風の流れにそって流れていく雲を見ていた。その少年はソロだった。

これはスバルがオーパーツの力、ベルセルク、シノビ、ダイナソ―の三つのオーパーツの力を使いムー大陸を支配したオリヒメが操っていたラ・ムーを撃墜し、その後に起きた反転世界での来訪者、アポロンを倒した後であった。

ソロがエンプティ―から受け取った孤高のカケラが持つ隠された力を一滴残らずソロは搾りだし、その反逆の力をソロの手となり足とした。完璧なる存在と化したソロだったが最も相手が嫌いだった存在、スバルに再挑戦するがスバルはオーパーツの秘められし力。そう、三つのオーパーツが揃った時、そのオーパーツの大いなる力のコントロールしている宿主に偉大な力、トライブキングという力をスバルに与えた。トライブキング状態となった世界の英雄、星河スバルは限界まで強くなったソロを倒した。倒された時ソロは思った。何故、彼に勝てないのか……。自分と彼を比べて何が足りないのかということに。

そう、遺跡の最深部で彼と戦った時、前半はかなりの優勢だった。悪魔に魂を売った能力を最大限までに使い、己の力をスバルに見せつけて圧倒させた。だが世界の英雄、電波変換した星河スバルもそう簡単にくたばる存在ではないと承知していたソロ。その前にはソロが承知していた光景、傷だらけになってもスバルの目には希望の

光が消え失せずにただ勝とうという光がでていた。そして自分に取  
りついたオーパーツの力を全面開放し、王の力をソロに叩き付け辛  
くも勝った。

彼と自分の違い。そして小さな僅かな実力差。それがソロには理  
解できなかった。スバルは仲間に頼りきっている。そう感じとって  
いたソロ。彼からの視点では仲間と傷の舐めあいをしている事で弱  
くなると思っていた。だが彼からにしては仲間の助けがあることで  
進んでいけると思っている。

「俺には・・・俺には何が足りないんだああ！！！！！！！！」

ソロは空に向かって絶叫した。自分の弱さに無慈悲と劣等感を感じ  
ているソロ。本気で強くなりたい、という彼の気持ちは本物だ。  
だが彼に力で勝っても最終的には勝てなかった。どうしても彼を超  
えたい、他の奴らをも超えて頂点に君臨したいとソロは思っていた。

「奴は絆という、傷の舐め合いをしているだけで強くなっていく・  
・。だったら俺は・・・」

ソロは右手を音がたつくらいに強く圧迫する。圧迫される奇妙な  
音がソロの耳に届き、指の肌の色が赤から紫へと変わった。

「俺は俺自身で強くなる！他人が誰がよってこようが関係ねえ！簡  
単に力が手に入れられるのはまっぴらごめんだ！」

ソロは大きな声で叫んだ。そして今の現在に至るまで、ソロは少  
しずつだが強くなっていった。新たな相棒を自分の僕にして、新た  
な戦法を編み出して、新たな技をソロは編み出した。彼が強くなっ  
ていった。無限と続く己の進化の階段。時たまスバルは階段を数段

素っ飛ばして一気に駆け上り強くなった。だがソロは彼とは違い、一段ずつ早く上っていくしかなかった。そしてスバルとソロは肩を並べるぐらいまで強くなった。後、何が足りないのか。ソロは思いか、その答えはなんなのかという意識に囚われている。

そう、一年たった今でも。

「そういえば、ここだったな・・・」

あれから一年の月日が経過し、自分が少しずつだが強くなっている自分の姿がある。ソロは遺跡の中を移動していた。そして休憩を取ろうとしたのか自分の膝ぐらいの高さがある石垣に自分の腰を下ろし、一息仰ぐ。

「・・・俺は・・・本当に強くなれたのか・・・」

ソロは劣等感に襲われる。そこに自分と似た状況の来訪者がソロの前へと姿を現す。その来訪者は挨拶代わりに槍を三本ソロの頭上から勢いよく向かってくる。だがそれを察知した。電波変換してラプラスソードは展開せずに大きな板状の鋭い大剣、ブライソードを召喚した。

「さっきも俺に攻撃したな！？ 貴様は何者だ！？」

相手は自分だと悟られていることに少々驚いた。そして自分と同じ境遇を持った生存者が自分の前に現れる。そこに映ったのは。ソロと同じくらしいの身長。そして宗教風の服装をした若き少年の姿。髪は薄い青色で、目は透き通った黒い目をしていた。

「フッ、やはり気づいていたか・・・。さすがはムー文明の唯一の生

き残りの生存者、ソロよ・・・」

自分の名前が相手に筒抜けだということにソロは齒を食いしぼる。それに対して自分は相手に対する情報は全くない。

「貴様！一体何者だ！？」

「君の一族が争った文明の反対勢力の生存者の唯一の生き残りの君と同じ境遇を持った人間だ・・・」

ソロは頭を整理した。明かされなかったムー文明とメソポダミア文明の隠された隠蔽対立。ムーの文明の唯一の生き残り、それがソロ。そしてメソポダミア文明の唯一の生き残りの生存者がソロの前に突如姿を現した。だが何故、自分の姿の前に現したのかが理解できなかった。

「貴様がメソポダミア文明の生き残り・・・。スカイウェーブで俺を試したのはお前か・・・」

「そうですよ・・・。俺の名前はフリードとなのっておくべきだな・・・」

ソロは気がかりなことがあった。彼は電波変換をしていなかった。なのに人間では攻撃不可能な攻撃をしてきていたのだ。

「貴様、電波変換していないのになぜ、不可能な攻撃ができる！？」

「俺は・・・思ったことを現実になせる人間として異常な能力をもっている。その能力が原因で君と同じで過去に同じ境遇を持っている

る」

ソロとフリードの同じ過去の境遇。それは人間の差別だった。ソロは自分の呪われた力に自分だけ差別されてしまった。人間の差別するときの目は非常に残酷なほど冷たい冷酷な目になってしまう。そしてソロとフリードはこう思った。強くなつて奴らを潰すと。ソロは自分で強くなり一人となった人を叩き潰した。それに対しフリードは己の悪魔に抜擢する呪術的能力を自分で受け入れることで自分を差別した人間をソロと同じように潰してきた。

「同じ・・・境遇・・・」

自分の目の前に同じ境遇を持った人間が現れるなんて思ってもいなかった。

「この悪魔みたいな能力を俺は受け入れて自分の力にした・・・。俺は君以上に辛い経験をしている。君は仲間を同じ血をもつている一族を失うっていう悲しみはわかるかい？」

「・・・俺は俺自身ずっと一人だからそういうあまい人の悲しみの感情がわからない・・・」

「俺は、そう、つい最近までは俺の家族は何事もなく平和に過ごしていたんだ。けど俺の、俺たちの平和の日常は崩されてしまったんだ。自分達がメソポダミア文明の生き残りというのを隠して生きてきたんだ・・・。けど、俺らの前に一人の大きな男が現れたんだ。メソポダミア文明が封印していた化け物を解放したんだ・・・。そこから家族が引き裂かれてしまったんだ！」

フリードは右手に思い切り力を入れて叫ぶ。

「そこから地獄のような日々が始まった。俺たちがメソポダミア文明の生存者であるということが発覚されて、殺されてしまうことになったんだ。毎日、毎日、銃を持った無数の人に追われて襲われて、俺の家族は何もしていないのに射殺され死んでいった……。家族を射殺して喜んでいる人を見て俺はその射殺した人を殺したくなっていた……。けど生きる為に我慢していたんだ……。だが弟も姉も母も父も死んでいった……。何故、罪のない人間が殺され死んでいかなければならない！！？俺の家族が一体何をしたっていうんだ……。！？だから俺は思ったんだ。過去に戦ったムー文明との電波全面戦争。あの戦いがなければ、ムー文明さえ存在していなければこんなことにはならなかつたんだと俺はそう思っている！なら復讐しようとしたんだ。仲間を消し飛ばしたメソポダミア文明の仲間を、そして俺の大切な家族を奪った奴らを復讐しようとする誓ったんだ！」

フリードはソロに向かって自分以上の苦痛を味わってきた悲しみをソロにぶつける。ソロは元から家族という団体がなく、ずっと一人で、ずっと孤独で生き抜いてきた。だからソロには家族というのがあまり理解できなかったが彼の話を聞いていたら同じ境遇を持っていたためある程度は理解できた。

「だからさ……。ソロよ！貴様に今ここで復讐をする！仲間の命が散っていった悲しみ！俺がメソポダミア文明の思いを背負って今、ここで貴様を倒す！」

フリードは思ったことを現実に行ける呪術的能力がある。上から槍を五本ソロに向かって落とさせた。

鋭い槍がソロに勢いよく襲ってくるがソロは容易く回避する。

「・・・仲間の為に復讐か・・・。フッ、いいだろう。ならばかかってこい！貴様の思い、俺に見せてみる！！」

ソロはラプラスブレードにして地面を思い切りけって距離を詰めて行った。

## Auf t a k t | 31 禁忌と破滅

「はああああ!!」

フリードが両手を地面と水平面上に広げた。と同時にフリードの周りに赤の紋章が浮かび上がる。そして、フリードは電波変換した。

フリードが電波変換した瞬間、激しい光が辺りに放出される。その激しい光に目を焼かれないようにソロは両目を庇う。

電波体無しで独自電波変換したフリードの姿。その姿は背中に四本の高速移動するためであろうスラスターらしき物と身体を覆うマント。宗教風の電波変換した姿だった。そして右手には短い綺麗な小刀。

「それが貴様の電波変換した姿か……。俺と同じで独自の電波変換するのか……」

「君のような古代のスターキャリアーと同じようにしてもらっては困るな……」

フリードが呆れたように言う。

「俺らメソポタミア一族は身体の中にはそれぞれの電波変換できる能力が宿っている。君達のような劣等種ではないのだよ……」

「ぐっ……言わせておけば……」



ソロは一步、後ずさりする。同時にさらに距離をとって後退する。

「こちらからいかせてもらおうぞ！銃を片手に！弾丸は魔弾！」

フリードは思ったことを現実にする呪術的能力がある。いわゆる彼の能力は有言実行だ。思えばこれは恐ろしい能力だ。言ったことが現実になる。ソロはその事が現実だとフリードの右手に出現した銃を見て汗を流す。

「射出開始！！」

フリードが構えている銃のトリガーを引いて、弾丸がフリードの銃の銃口から火薬の爆発と共にソロに向かって勢いよく発射される。だがソロはフリードの動きを見ていたため、発射されると同時に横に動いて回避した。弾丸は空気を切り裂く音を立てながら勢いよくソロが回避した無人の空間に突っ込んで壁に激突した。弾丸と石の壁が激突して大きな穴が開く。それを見たソロは固唾を飲む。しかも相手は銃を使っている。緩慢に接近すれば格好の的と化してしまう。だから簡単に近づけなかった。

「だったらラプラスブレード！七閃！！」

ソロはラプラスブレードの応用技。七閃を放った。七閃は空気の真空衝撃波。その無数の衝撃波がソロに向かって一直線に襲い掛かる。だがフリードはそれを冷静に対処する。

「わが身の安全を！身に絶対的防御の全方向を防御する壁を！」

フリードの全方向に壁が出現した。ソロの放った七閃が壁に激突し、轟音と共に空気を振動させる。

ソロは防御されても怯まなかった。すぐに状況に対応して次の攻撃へと展開する。フリードが召喚した絶対的防御の壁を召喚していたが真上ががら空きという弱点を見つけた。そこを突いて攻撃に展開した。

「いくぞっ!!」

ソロは既にジャンプして、上からフリードに接近していく。

「剣を宙に! その剣を目標へと射出せよ!!」

フリードは上から近づいていくソロに剣を飛ばした。ソロはそれくらいの覚悟と予想はしていた。瞬時に分厚いラプラスソードに変えて、その分厚い板状の大剣でフリードが召喚した剣を防ぐ。防いだ瞬間、防御したときの重みがソロの腕にのしかかる。

「なっ!?!」

フリードはソロの反射神経と対応能力に驚愕した。ソロは空中にいてその地上に引っ張られる落下速度を有効利用してラプラスソードを叩き付けて発動するブライブレイクをフリードに叩き付けた。ソロとフリードはフリードが作った囲まれた壁の中にいる。そしてソロが放ったブライブレイクは衝撃をあらゆる方向にぶつける荒技だ。ということはソロが放ったブライブレイクは、フリードを巻き込んであらゆる方向に衝撃波が襲う。だが囲まれた壁の中だったため壁がブライブレイクの衝撃波を反射させて壁の中で衝撃波の反射攻撃が繰り返された。勿論、ソロも巻き込まれた。だがこうなるのは彼も知っていてやったことだ。

「ううっ!!」

「うあっ!!」

ソロとフリードは吹っ飛ばされる。と同時にフリードが作り出した絶対的防御の幻想の壁が消滅した。

「なかなかやるな……。さすがムー文明の唯一の生き残りの狂戦士ソロ……。その対応能力と反射神経。敵ながら魅力されてしまう素晴らしさだ……。けどな!!」

フリードが普通に話していたが突然、声を張り上げたことによりソロはさらに集中する。

「鉄骨をソロの頭上から降り注がせ!そして棘を地面から奴を串刺しにしろ!!」

フリードは上空と地下からの同時攻撃を開始し始める。ソロは上を見た。上には四十本ぐらいの太い鉄骨が自分に向かって落ちてくる。さらに自分の立っている足が振動していた。だがこれはソロの足が振動していたわけではない。地下から何かがえぐりながらソロに向かってきていたのだ。

「まさか!?!」

ソロの頭の危険信号が鳴り響く。頭上と足元。その二つの対処はできなかった。突如、ソロの足元から極太の棘が地面を突き破ってでてきた。ソロはそれを間一髪回避する。だがその後、ソロの頭上には自分に向かって降り注ぐ。

「くそが!!!!!!」

ソロはラプラスソードにしてその板状の分厚い大剣を前に出して剣の腹で防ぐ。自分に向かって鋼鉄の細長い塊がソロが防いでいる大剣へと思い切り激突する。さらにソロの周りに次々と鉄骨が容赦なく降り注いで地面へと深く突き刺さる。激突したその時、ソロの腕に痺れが走った。重い鋼鉄の物を剣一本で防ぐ。だがその反面、大きな代償があった。それは自分の得物が危機的状況に追いやられることだった。

突然、奇妙な何らかの音がソロの下から聞こえた。ソロはその音の音源が気になり目をそれへと向けてみる。ソロの視界に映った物は、ソロのラプラスソードからだった。小さな音が出ていた。さらによくみたらラプラスソードの刀に亀裂が走っていて綺麗なラプラスソードが無残な姿と化していた。

「なっ!？」

ソロは自分の得物がこんな姿になっているのを見て驚愕する。ラプラスソードの亀裂の走っている部分に手を当てる。

「無理をさせすぎたか……」

ソロはラプラスソードをしまつて、自分の最も得意とする戦闘スタイル、肉弾戦へと変更した。

「ふっ、剣にそんな大きな負担をさせたら亀裂が走ってもおかしくはないな。だがよく生きていたな。上空、地中からの同時攻撃を・・」

「あまくみるなよ・・。大体にして貴様、その思ったことを現実

できるなら俺に死ねと自分が思えばいいんじゃないのか？そうすれば戦う必要はないが・・・」

そう、そのフリードが持っている呪術。言ったことを現実にする非現実的な論理上ありえない能力。ソロはフリードの力を見て相手に向かって死ねと思えば速攻で終わらせることが出来るんじゃないかと。それが可能ではないのかと思い、気になりソロはフリードに聞いた。

「それは出来ないな・・・己、相手の体に直接的な能力攻撃は出来ない・・・さすがに相手の体に向かって能力をぶち込めたらもはや俺らは殺人鬼だ。だからきつと神がそうしないように制限したんだろ・・・」

フリードはその能力が相手、もしくは自分の体に向かって能力を発動できないと言っていた。だがフリードが言った事に何かがひっかかるソロ。何故、相手の体に向かって能力をぶちこめれないのか。彼は神が制限させたと言っているがそんな都合のいい幻想はないだろう。まだ更なる裏があると確信していたソロ。大概、便利な能力には裏がある。その能力にも裏があると思い、ソロはそう考えていた。

「フッ、神がその忌わしい能力を相手に殺めないように神が細工を施した？そんな都合のいい能力があるのか？だったらその幻想的能力を俺の体にぶつけてみるよ？恐れてるのか？自分に禁忌がくるのが怖いのか？」

ソロは大きな言葉を言っていたがその裏には不安もあった。挑発的な態度でフリードに言う。もしかしたら本当に己の体に能力を飛ばしてくるかもしれない。下手したら、体全身が綺麗にバラバラに

吹き飛ぶ。もしくは体の血の血流が逆に流れてしまふ、脳が吹き飛ぶ、体が切断される。最悪、即死ということになるかもしれない。

そんな事を覚悟していたソロ。一筋の奇妙な汗が頬を伝って地面に落ちる。

「・・・俺らメソポダミア文明の錬金術は自分の能力で直接、人を殺めるなという禁忌がある。だから人をその能力で相手の体に直接飛ばしてはいけない。お前知っているか？魔術と錬金術の関係を・・・」

「魔術と錬金術の関係？」

フリードの言った錬金術という言葉にソロは首をかしげる。フリードが言っていた魔術と錬金術という言葉に気になる。どうやらあの術的能力の呼び名は錬金術と呼ぶみたいだ。

「俺らメソポダミア文明に伝わる古の言葉だ。魔術、それは未来と創生を作り出す物。簡単に表現すれば今のその携帯端末、ハンターVGやマテリアライズなど。太古の時代からの視点ではもはやこれは魔術に見える。そして錬金術、これは破壊と終末を導く物、と言われている。二十世紀には戦争で人の命がたくさん殺められた。そう、原子爆弾や、核兵器など。これが破壊へと導く錬金術。だからこの錬金術は使い方を誤れば破壊と終末を導く能力として見られている・・・。だから俺はメソポダミア文明が残した錬金術を直接、人の体へと殺めさせないと。この禁忌を破った場合、自分襲いくる裁きと待遇するといわれている。だから俺はその禁忌だけは守るんだ・・・」

フリードがそう言った。確かにメソポダミア文明が提示した古の言葉は現在へと比較してもあっていた。魔術、現代からしては今の科学だろう。マテリアライズなどの物体を召喚できる。ハンターV Gでメールが出来たり電話ができる。もはやこれは魔術に見えてしまう。そして錬金術、これは破壊と終末を導く者と言われていた。過去にあった世界戦争で使われた原子爆弾と呼ばれる悪魔の兵器。これが破壊して終末へと導いた。これも錬金術なのだろう。だが不確定要素が多かった。

「フフツ、アツハツハツハツハ！！」

「何がおかしいんだ！！！！？」

フリードはソロの突拍子で屈託のない笑いに驚愕して話しかけた。

「所詮、貴様は腰抜けでしかない存在だ！何が禁忌だ！？そんな軽い約束事を恐れて人を直接、その錬金術とやらで殺めない？そんなあまい思いじゃ、この俺は倒せねえぞ！！そんな軽い思いでよく俺の前にノコノコ出てきたな！！！！」

「ちっ・・・」

「貴様は器の小さい男だな。俺は過去に全てを拒絶する能力を自ら受け入れた。仲間も、居場所も、全て捨てて自分の意志だけで俺は野望を求め始めた。貴様は俺とあいつと比べたら小さい過ぎるんだよ！！！」

ソロは一気に近づいて、お得意の肉弾戦に入る。ブライバーストを使って拳の衝撃波をフリードに向かって飛ばす。フリードは錬金

術で空間移動をしてソロのブライバーストを回避する。

「俺が、その腐りきった根性叩きなおしてやるよ。ほら、禁忌という約束事を破って見せろよ!!!」

ソロは大声を張り上げて一気に高速移動してフリードに接近していった。



## Auf t a k t | 32 ブライVSスピア・クラフト

「いくぞっ!!!」

一人の少年、ソロが電波変換状態のフリード、スピア・クラフトに向かって攻撃する。彼はフリードにラプラスソードを折られてしまったため、自分が最も得意とする肉弾戦へと入っていた。

「くっ・・・」

フリードはソロの気迫に一步退く。だがすぐに気を取り戻し集中する。

「はあああああ!!!」

ソロは右手でまずは叩き潰そうとした。だがフリードはソロの気迫に一瞬気圧されたが直ぐにたち直った。立ち直ったフリードは呪われし能力、そして殺めてはいけない能力、錬金術を使う。彼は頭の中で空間転移という意識をして空間移動した。ソロの後ろに回り込んで、後ろから左手で攻撃しようとする。

「あまいつ!!」

ソロは読んでいた。姿を消した瞬間冷静に対処してターンステップを使って肘打ちをする。ターンで肘打ちをした右肘にターンの勢いを乗せるようにする。ターンと肉弾戦が得意な彼が繰り出す肘打ち。それが華麗にフリードの溝に直撃する。

「がはっ！！！！」

ソロの勢いの乗った肘打ちが突然フリードの溝に不意に直撃することです。フリードは口から血を吐いた。真っ赤な真紅の赤い血が地面を赤く染めて広がっていく。むせると共に何回も血反吐を吐く。そして黒く、固まっていた。これは血の中に含まれる血小板という働きだ。

「フッ、やっぱりな・・・」

「何がだ！？」

ソロの分かりきっている顔にフリードは気になった。ソロはその不完全なフリードに笑ってしまう。

「貴様はその呪術的な錬金術というのに頼りすぎなんだよ！そんな貴様が肉弾戦の戦い方ってしてるわけないよな！全て間接的に攻撃し、全て自分の力じゃない能力で綺麗に完璧に防ぐ。そんな能力に頼り切っているお前が俺に近接戦で勝てると思っているのか？」

「うっ・・・」

フリードは完全にソロのペースに巻き込まれていた。片手で口から吹き出す血を唾液と共に吐き出した。

「そんなお前が喧嘩の戦い方と立ち回りがわかるわけないよな！！貴様の思いは認めてやる。だが貴様は所詮、決意なんて俺や、あいつに比べたらあまりにも小さすぎる。笑わせてくれるなよ！少しは俺に見せつけて見せろ！！メソポダミア文明の生存者よ！！」

ソロは声を大きく張り上げて、体を大きく捻って力を溜める。大きく溜めた後、思いっきり右手を前に出して拳の衝撃波、ブライバーストを連続でフリードに叩き付ける。フリードは再び空間転移して回避して距離を確保する。だが攻撃の手を休めないソロ。距離がとられてもソロはそのとられた距離をすぐに埋めていく。

「くたばれ!!」

ソロの左手のアップーがフリードの顔にしたから上へと突き抜ける。アップー攻撃を喰らったフリードは後ろにもつれこむような態勢になるが足を踏ん張らせて倒れないようにする。そして足を踏ん張らせたことで後ろへと倒れる運動エネルギーを無理矢理止めて、足に再び力を込めて、そして右手にも力を込めて思い切りソロに向かって右手で殴った。頬を殴る音が高く響く。

「うっ!!!」

「まだまだあ!!!!」

ソロは不意の攻撃により、後ろに倒れこむが力の運動を流して、横に回り込み右手で思い切りフリードの左頬を殴った。さすがに二連続、フリードは足が踏ん張れなかった。

そして吹っ飛ばされた衝撃で後ろに倒れこむ。そこを追撃しようとソロは追撃をする。

「いつまでもお前のペースだと思ふな!!」

倒れた状態にいるフリードは地面に倒れている状態から、真横に大きく転がってソロの攻撃を回避する。その後、鍊金術で攻撃しよ

うとする。

「諸刃の剣を手に！斬りつける度、身を破壊し、それを剣の糧にする自我破壊剣強化の剣を！」

フリードは奇妙な雰囲気醸し出している右手に召喚された諸刃の剣を手にした。その剣は自分の腰まぐらいまでの長さで、剣の部分に太陽光が照射されて、剣がその太陽光を反射する。ソロはその様子を見て警戒する。切れ味と威力が大きいことを。諸刃の剣は、相手に打撃を与えるが、自分もそれと同等の打撃を受けるというデメリットがあった。バトルカード、ムラマサブレードと仕様が似ているが、その諸刃の剣は斬るだけで身を破壊し、威力を向上させていく。まさに命がけでいっているようなものだった。

「フッ、ようやくそこまでできたか・・・」

ソロは小さな微笑と共に構える。集中してフリードの攻撃に素早く対応できるように腰を低くする。

「いくぞっ！！！」

フリードは大きな叫び声と共に地面を強く蹴って、素早い動きでソロとの距離を一気に埋めていく。

右手にある諸刃の剣を地面と水平面上にする。ソロの近くに接近したフリードは勢いを殺さず、その勢いを剣に乗せるようにして剣を上から振り下ろす。うなりをあげてフリードの両手から振り下ろされる剣。確実に捉えたがソロは大きな板状のブライソードを召喚して盾にして防ぐ。剣と剣がぶつかり合い、轟音と共に火花が散り、空気を揺らした。

「うっ!!!」

大きな衝撃がソロの両腕に容赦なく押し掛かる。さらに大きな衝撃でソロは後ろへと足が引きずられる。大きな衝撃は両手へと伝わり、一気に痺れてしまった。この状態では力が込めることは不可能だ。

自分だけがこのような状況に陥ってなかった。フリードも削られていた。

息を荒くして、ふらついている。フリードは諸刃の剣の代償の裁きを受けた。斬った瞬間、自分の体に何かで斬られたような感覚が走って、斬られた感覚がした場所は血が出血していた。それでもフリードは怯まず、恐れず攻撃する。彼の動きからして覚悟を決めたのだろう。ソロの一言で彼の目が変わった。己の決意を示すならば、その覚悟の大きさを見せつける必要があると。ならば彼は自分の身を犠牲にしても、身が減じようとも、あの日決意した事を成し遂げようとしていた。

「いくぞおおおお!!!」

フリードはソロに向かって再び接近する。奇妙なオーラを先ほどとは違い、大きく放出している。恐らく、彼の身を削ってそれを糧にしたのだろう。ソロは両手がまだ痺れていて剣もろくに持てない状態だ。だが彼もそう簡単にやられる存在ではなかった。気合と意志で痺れが走っている両手に力を込める。

直後、剣と剣が再びぶつかり、火花が散り、轟音が辺りに響き、空気が揺れた。剣と剣がぶつかり、鏖迫り合いになったことにより、お互いの剣が奇妙な嫌な音を立て始める。もはや意志と意志のぶつかり合いだった。再び、ソロの両腕には痺れと激痛が、フリードの

全身には痛みが走って切り傷が出来ていてそこから出血し、その傷を糧にして剣はまた威力を増幅させていく。

「うおおおおお！！！！」

「はあああああ！！！！」

己の意志と己の意志がぶつかり合う。ソロの意志、それは最も嫌いとする奴を倒すこと。それが彼の今の意志だ。フリードの意志、それは最も憎む相手に復讐し、仇を討つことだ。

フリードが攻撃すれば身が削られる反面、威力が増幅していく。それをソロはどうか防いでいる。だが完全に防げるっていうわけではなかった。攻撃する、防御する、攻撃する、防御するという二人の攻防戦が続いていった。

「はあ、はあ、はあ・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

フリードは呼吸を短くして、ソロは呼吸を深くする。攻防一体の戦いがずっと続いた。そのせいでフリードは腕や足が切り傷まみれで血が沢山、体の表面を伝って血が垂れていた。周りの地面を見ればフリードの血とソロの血で地面が奇妙に赤く染まっていた。ソロももはや両腕は限界に近い状態だ。あんな重い一撃を何度も防いで、そのたび両腕に痺れと激痛が走る。その激痛は骨にまで伝わっていた。その上、痺れている手で剣を使いフリードに何回か斬りつけた。彼にもフリードが使っている剣で斬りつけられた切り傷と血が体に付着していた。

もはや彼らに剣をもてる力は残っていない。もはやここは自分の両腕、両足が頼りだった。

「うおおおおお!!!」

「はあああああ!!!」

もはや限界境地に達している二人は、剣を持つ力が残っていないかった。綺麗にぶらさがる両腕。不思議と力が入らなかった。その為、ソロとフリードは怪しい笑みを広げて、剣を捨てて、一気に近づいていく。二人が思い切りスピードを上げて近づいていくことにより、傷口から出血している血が辺りに飛び散る。このままでは出血多量になるかもしれない。だがそんなことなりふり構っている暇はなかった。ただ目の前にいる敵を見ていた文明の一族達。

お互いが右の拳に力を込めて大きく振りかぶって殴ろうと力を込める。渾身の力を込めお互いの右拳がまるですれ違うようにお互いの顔に直撃して、威力が相手に伝わる。そして威力が伝わったことにより、後ろに追いやられるがどうにか踏ん張って耐えて、二人は再び殴りかかる。

「うおおおおお!!!」

フリードが大きく声を上げて、右手で思い切り殴りかかる。ソロは回避して後ろに回り込むようにスライドする。

「まだまだああ!!!」

フリードは体重移動をうまく使って後ろに回り込んだソロに向かって再び殴る。

「はあっ！！！」

ソロはフリードの右手の攻撃を片手で止めてそれを上へとフリードの右腕ごと吹っ飛ばす。空中では無防備になることが多々ある。そんな無防備な状況に陥ったフリード。

「しまっ！！」

無防備に宙にいるフリード。ソロは一気に右手に力を込めた。

（歯を食いしばれよ、文明の生存者！俺の思いの一撃はかなり大きいぞ！！）

ソロは心の中でそう思いながら自分の思いを右拳にのせるようにしてフリードの顔に完璧な一撃を叩き込ませた。その衝撃が顔に一気に伝わり大きく吹っ飛ばされるフリード。彼が立ち上がることはなかった。

「ううう・・・」

小さな呻き声をあげるフリード。

「貴様の決意、見せてもらったぞ・・・」

「フッ、だがソロ、貴様に言われた通り、俺はあの決意はただの幻想にしかなかった。そして今、俺はお前に負けてしまった。俺を殺すなり、焼くなりすきにすることがいい・・・」



フリードはそういい、彼は死の覚悟をする。

「だったら、俺の前から今すぐ消えろ。俺は軽いお前を見ていると嫌気がさしてくる。今すぐ俺の視界から消えろ！」

「・・・・・・・・ソロ・・・・・・・・」

ソロは大きな声で言った。その言葉の裏には彼の小さな優しさがあった。フリードはそう感じ取ってはいなかったが、何も考えずにその場から姿を消していった。

「人の決意で、あんなに人の動きが変わるなんてな……。俺が人を変えた……。フツ……。笑える話だ……」

ソロはフリードを変えたきっかけを与えたことにより、それをしたのが自分が起点だということにソロは小さな吹き出しと共に微笑を浮かべた。

「ソロ！ここにいたのか！！」

ソロは電波変換を解除し、一息ついて怪我の治療でもしようと思った瞬間、スバル達がソロに向かってきた。おそらくソロを探してここに来たのだろう。ソロの近くに來たスバル達はその戦った場所の有り様を見て思わず息をのんでしまった。

無残に破壊された地面に飛び散っている血。明らかに激しい戦いだったという雰囲気を出している。

「ソロ、誰かと戦ったのか？」

スバルがこの状況が気になり、質問してくる。

「フン。貴様には関係ないことだ・・・」

ソロはそう言った。戦った相手は誰か明かさなかった。ソロのこの反抗的態度にスバル達は苦笑いした。

一人の男を変えたソロ。自分がこんなことをするなんて驚いていたソロであった。

数分前、ソロと相対したメソポダミア文明の唯一の生き残り、フリードが右腕を抑えながら血を全身から垂らしてなんとか歩いている。今後、どうしようか、傷の手当はどうするかと考えている。先ほど、ソロとフリードはウェーブバトルをしていた。そして彼、ソロから教えてもらった言葉を考えながら同時になんとか歩き続ける。

そんな意識が朦朧としながらフリードは小さな足音と共に血を垂らしながら静寂の砂漠の荒野を一人で歩く。歩く度に傷が悲鳴を上げて激痛が走る。

「はあ、はあ・・・傷の手当は錬金術で医療道具を召喚すればいいが・・・今の俺の体力じゃ・・・」

フリードは医療道具を錬金術で召喚して治療しようと思っていたが自分の体力が極限状態に達している為、難しかった。

「フッ・・・無様な姿だね・・・」

突如、傷だらけのフリードの前に全身にフードをまとっている一人の人が現れた。

「誰だ！？ 貴様！？」

フリードは突然現れたフードを纏った人に警戒した。直後、謎の人はフードから右手を出す。

「う、うわああああ!!!!!!」

フリードの叫び声が、静寂の砂漠の荒野に大きく、そして短く何かが飛び散る奇妙な音と共に響いた。

そして少年は無残に散り、そして辺りは静かな砂漠と化していく。

ムー文明の生き残り、ソロ。そしてメソポダミア文明の生き残りの少年、フリード。彼らがナンスカ村の奥の遺跡で戦闘してから数分が経過して周囲の空気が平穏を取り戻した。

辺りは、戦いの傷跡であろう血痕と剣や自分が地面に叩き付けられたであろう痕跡が戦いの激しさを物語る。ソロは体中傷だらけにしながらも、血を出血しながらもどうにか生きていた。そのボロボロで大量出血しているソロの姿を見たスバル達はナンスカ村の病院に向かい治療してもらっていた。

「まったく・・・余計な真似を・・・」

ソロはそんな愚問の言葉を言いつつも、体の傷の手当てをしてもらっているソロ。最初はソロは治療を拒んでいたがスバル達の説得により渋々治療をすることになった。偶然なのか、ナンスカ村の村長が恩返しにと治療代を無料にしてくれた。

「お前の事を思ってるんだぞ・・・」

スバルは苦笑いしながらそう言った。

「こんなものすぐに治るんだがな・・・」

と言いつつもソロは仲間の優しさに若干ありがたみを感じていた。そのソロの対した大きい変化は無かったがスバルの相棒、ウォーロックはソロの少しの変化に気付いていた。そしてスバルに話しかける。

『なあ、スバル？』

突然、ウォーロックがハンターVGからソロに聞こえないような小さい声で話しかけてきた。

「なんだい？ウォーロック？」

『ソロの雰囲気なんだが変わって来てないか？前はもっと違う雰囲気だったけど今と昔じゃ違うぞ・・・』

「そうかな・・・？」

『はぁ・・・』

「なんで溜息つくのさ!？」

『もういい・・・』

などとウォーロックはスバルとの小さな会話を済ませてとつとウィザードオフして自分のハンターVGの中に引っ込んだ。スバルに尋ねた自分が馬鹿みたいだと思うウォーロック。

「とりあえずソロ。何があったんだ？俺らに言ってくれないか？」

暁がソロにそういう。さすがにスバル達がソロの場所に駆けつけてきてあんな悲惨な状況になっていれば正体不明の敵と戦闘したと受け止めてしまうだろう。暁は一応、この遊撃隊の責任者である為、情報を集めるためにソロに駄目元で聞いた。

「・・・ムー文明と対立したもう一つの文明、メソポダミア文明の唯一の生き残りの俺と同じくらいの男が俺に戦いを挑んできた・・・」

「ソロと同じ文明の生き残り・・・」

暁はもう一つの生き残りがいたのかという思いを抱きながら考え始める。

「さらにその男は俺と同じ過去に似た境遇をもった人間だ。復讐精神までもっていやがる。俺に復讐目的で現れたらしい・・・」

「一体、何の復讐の為にですか？」

リサが聞いてみた。

「メソポダミア文明の仲間の敵討ちだと。かつて過去には二つの文明戦争があり、メソポダミア文明はたくさんの人が死に、それを知っていたあいつは散っていった仲間の為に俺に復讐しにきた。でもあいつは覚悟が薄くて小さかった。メソポダミア文明の禁忌を恐れ、いて俺を倒せていなかった。星河スバルの背負っている覚悟と比べたらあいつはちっぽけすぎた・・・」

ソロは何かを考えている顔でそう言った。それを聞いた暁は頭の整理を始めている。

「他には？その相手の能力とか・・・」

暁はいい所に質問した。相手の戦闘スタイルの情報を集めておきたかった。暁がソロの戦闘した場所を見たとき、相手の姿が見えなかった。恐らくは逃げたか見逃したのどちらかだった。もしかしたらもう一度、相対するかもしれない為、一応質問したのだった。

「奴は、独自の電波変換が可能だ。そしてあいつの能力は思ったことを現実にする、ありえない能力だ・・・」

「「思ったことを現実に！！？」」

スバルとレイの声が綺麗に重なる。その大きな声を出してしまつた為、リサが注意する。ここは病院の為、マナー上静かにしなければならぬ所だ。

「その能力は本物なのか・・・？」

「ああ、剣を召喚したり、槍や鉄骨を召喚してきた。あれを見たとき俺は最初驚愕した。けどあいつはその能力を恐れていた・・・」

「「恐れていた・・・？」」

今度は暁とリサの言葉が綺麗に重なる。先ほどの二人とは違い声を大きく張り上げなかった。

「よく考えてみる。そんな能力を遣えたら、直接相手に向かって死ねと思えば一瞬で解決するはずだ。だがあいつはそれに恐れてやらなかった。メソポダミア文明が提示した禁忌というのに反するから

だど・・・」

「つまり、その能力を使って直接、人を殺めるなということか？」

暁が勘を鋭くさせて言った。

「ああ。奴はその禁忌というのに恐れて俺に死ねと思わなかった。そしてあいつが言っていたメソポダミア文明の言葉・・・」

突然ソロが自分たちが要求もしていないのにこんなことを言い始めようとしていた。その言葉にはかの皆は固唾を飲んで小さく喉を鳴らす。そして一瞬の沈黙が走ってソロの口が小さく動き始めていく。

「魔術・・・これは俺が簡単に説明すれば現在の科学を意味しているだろう。今のこの携帯端末や俺はよく知らないがウィザードという人工電波生命体を作り出す技術を持っている。そして魔術はつまり科学は未来と創生を作り出す物といわれていると聞いた。そして禁忌と呼ばれる錬金術という最近で表現すれば兵器の事を指すらしい。かつて原子爆弾や核兵器などの悪魔の武器。これを使って人の命を殺めてしまう。これが錬金術と現代からしてはそう呼ばれるらしい。そして錬金術は破壊と終末へと導く者といわれている・・・」

「

「未来と創生を作り出す・・・。それが魔術・・・」

「破壊と終末を導く・・・。それが錬金術・・・」

スバルと暁はそう感じていた。この言葉の意味に深い意味が込められているような気がした。未来と創生。これは人が作り上げてき



た技術で未来は成り立っていく。

破壊と終末。かつておよそ二百年以上前、日本の広島と呼ばれるところに破壊へと導いた原子爆弾という破壊の兵器が投下されて罪なき人が死んでいった。これと世界の戦争により破壊と世界の終末が進んでいった。そう、フリードが宿している錬金術。これは使い方一つで世界を終わらせることだって可能だ。

そう、使い方を誤ると破壊へと導いてしまうのであった。

メソポダミア文明はこんな過去の世界で繁栄したのに、こんな思わず納得してしまう言葉を残してしまうなんて凄いと実感していたスバル。そしてこの世界では憑りつかれたミソラが破壊と終末を導いていく存在だった。その言葉を聞いたスバルは破壊はミソラという意識をもってしまった。もしかしたらあの二百年前の戦争のように罪なき人が死んでいった、再びは破壊と終末を迎えてしまうかもしれないと感じたスバル。

「よし・・・こんなもんか・・・」

ソロは話し終わり、そして治療してもらった。腕や足は治療してもらい所々に包帯を付けて巻いていた。そして服を着て包帯でまかれていた部分を服で隠す。

「大丈夫なのか？」

「フツ・・・他人の心配をするんじゃない、自分の心配をするんだな・・・」

スバルの言葉にソロは冷静に返した。確かにそうだ。ソロはいつ

スバル達に牙をむけるか分からないからだ。そしてもう一つ、ここにはあの男がいるからだ。メソポダミア文明の遺産を探しに行ったときに出会ったミソラをさらった謎の男。その男はここに来いていた。それを思い出したスバル達は体に緊張を走らせた。もしかしたら一分後に襲いに来るかもしれないと思ったからだ。

その事がスバル達の頭をよぎり、ハッと冷静になり固唾を飲み小さく喉を鳴らす。

「そういえば、あいつはまだ来てないな・・・」

スバルがそう言い、病院での五人がいる部屋に沈黙の静寂が走る。もしかしたらくるかもしれない、このナンスカ村を破壊するかもしれないという冷や汗をそれぞれがかいていた。初めてあの男と遭遇する時、あの男から尋常じゃない並々ならぬ殺気を張っていた。その時、暁やレイ達は足が震えて動かなかった。

「いつくるか分からないんだよな・・・」

暁がそう言う。五人に緊張が走っている。心臓が少しだけ早くなり血の血流が早くなっている。そんな五人は膠着状態に走っていた。

フリードが謎の来訪者に襲われたから数時間が経過。静寂の砂漠に真ん中で彼に何があったのか何も、だれもわかっていない。分かるのはその場所に多く飛散している赤く染まりそして固まった血液。ここで彼が何がされたのかが想定が付く。だがそこに彼の姿はなかったのだ。空には静かに一つの満月が夜空を明るく照らして、地上も明るく照らす。

砂漠は日夜の気温差が激しい。昼間は極度の高温の灼熱の砂漠の世界と化す。昼頃になると陽炎が見えていたりする。夜間は太陽が消えて一気に地上が冷たくなり始める。そして極寒の零度の世界と化す。こんな状況で生きているはずがなかった。

彼の生存は理論的厳しいだろう。

そんな彼が生きているかという小さな心配を抱きながら宿舎に宿泊しているソロ達。ここにもまた村長が恩返しにと無償にしてくれた。さらに個人部屋というおまけつきで。ソロは人とのなれ合いが嫌いな為、宿舎の屋根の屋上で座って夜空を見つめている。

ナンスカ村の夜空は綺麗だった。町は至って暗い為、夜の空がはっきりと見える。この技術で発展した電気がともされている明るい街中では夜空を見ても、電灯のせいで空がはっきりと分からなかった。けど今の空には無数の星と惑星が見える。それを見ていたソロはなんだか心が落ち着く。

「・・・・」

ソロは屋根の上で足を組んで寝て、真上に浮かぶ星を見つめる。時々、夜空に一筋の流れ星が見える。それを見たソロはそれを目で追いかける。夜で太陽が空に無い為、気温はちょうどよく過ごしやすい環境だった。

「俺は・・・俺はいつのまにか奴らと受け入れている自分の姿がある・・・」

ソロがそんなことを言った。確かに彼には少しずつだが彼らと一緒ににいたことにより少しだが変化があった。いつもなら涼しいこと言って抵抗していたが今日みたいに仲間の対応に受け入れている自分の姿がはつきりと自分の脳裏に映る。そう最近まで孤独でいるというのが恐れているかもしれないと思ったからだ。

「俺が・・・孤独になることを恐れているのか・・・？あいつの事を心配しているのか・・・？」

ソロには自分の頭では理解できないことで沢山だった。受け入れている自分の姿がある。フリードと戦った時に見逃した自分。あれはきつと無意識のうちに彼の中にあるわずかな可能性を信じて見逃したのであろうか。自分でも見逃した理由が理解できなかった。そんな自分の躊躇した思いに自分の体に虫唾が走る。はつきりとさせたかった。

「ああ！！なんだこれは！！」

とソロは自分の中が若干破壊されながらも心を落ち着かせる。深呼吸を深く二、三回をして自分を冷静にさせる。そして空を自分の二つの目で見つめる。

「おう、ここにいたのか・・・」

屋上の屋根の上にいるソロの近くに暁の姿が突然現れた。そして屋根の上へを歩きソロの近くに来る。

そして腰を下ろして暁もソロと同じように星がキラキラと輝いている夜空を見つめる。そして腰に携えているポーチからうまい棒を取り出して食べている。

「お前は・・・、確か暁シドウといったな・・・？」

ソロがそう言う。ソロは人の名前をあんまり覚えていないので正当の確信がなかったから疑問形で聞いた。

「おう。お前は星河スバル以外ほとんど名前は覚えていないだろ？」

「まあな。俺はおまえらにとってどうでもいい存在なんだがな・・・。

何故かお前の名前は俺の頭に入っている・・・」

「そうか・・・。本来なら全員の名前を憶えてほしんだがな・・・」

ソロが星河スバルと暁シドウの名前を憶えていてそれ以外は憶えていなかった。遊撃隊全員の名前を憶えるように暁は制してみたが彼の様子を見ていて憶える気全くなしだと悟ってしまった暁。ソロの様子に思わず苦笑いしてしまう。

「・・・お前は星河スバルの事をどう思っている・・・？」

ソロが突然、暁に質問してきた。突然の星河スバルについての質問。暁はその突然の質問に興味を抱く。

「あいつか……。あいつは……」

暁の脳裏に彼の面影が浮かぶ。メテオG事件時に彼との出会いが自分を変えてくれた。その事が頭に浮かぶ。この二人はお互いがお互いを切磋琢磨してきた。自分がくじけそうになったとき、それぞれが相手に向けて言った心を動かす原動力となった言葉がある。初めて出会った時、力に飲まれそうになったとき、

「あいつには……WAXAでディーラーに対抗する遊撃隊を結成したとき、彼に戦闘の定石や大切なことを色々教えた。気が付けば、俺とあいつはまるで師弟関係見たいな関係になっていた……。一緒にいる今もな……」

暁はそう夜空を見上げながら言った。確かに師弟関係みたいな関係になっているだろう。二人はお互いは何をするのか目を合わせただけで意思疎通し体がスバルの、暁の動きに対応して動く。二人の連携は折り紙つきだった。

「……………」

ソロは黙りながら聞いていた。

「けどな……。教えながら教えられることが多い。我ながら感嘆するばかりさ……。あの真っすぐな瞳、人の心を動かす言葉。俺が生死の境をさ迷った時、彼が俺を生の道へと導いてくれた。何故、星河スバルはあんなに人の心を動かせるのが俺は気になったんだがな……」

「さあな……。俺も何故、思いだけで立ち上がれるのは気になるが

な……。絆……。というものを失いたくないという思いで立ち上がるのか……。？」

「そうかもしれないな……。ちなみに響ミソラはお前やスバルの過去の不慮の事故に似た境遇がある。スバルは今、例外だがミソラは親がない……。頼る親戚もない。つまり孤独というわけだ。彼女も過去は人と関わることを恐れていた。けどそこにも彼女が彼女を動かしたんだ……。いいよな……。若いつているのは……」

暁が夜空を見つめながらそう言った。自分と似た境遇を持った人間が他にも身近にいたとは思わなかった。

「俺さ……。この世界が大っ嫌いなんだよな……」

「え……。？　どういう事だ……。？」

暁が発した意味不明な言葉にソロが疑問を抱く。彼が突然発した世界が嫌いという言葉。

「俺もお前らと似た境遇だ。物心がついたら一人だった。俺を産んでくれた両親や、親戚、兄弟、全て分からないんだ。ずっと一人、俺も孤独だった……。親が分からなく、自分で調べてみたが全くの進展なし。気が付いたらヨイリー博士に引き取られていた。その後、俺はずっと博士の元で育って行ってそしてWAXAの担当についた……。」

「お前……」

「なんで一部の人間だけがこんな不幸な運命と相對しなければなら  
ないんだろうな……。俺はずっと嫌いだった。何故、自分がこ

んな不幸にならなければならない。神が作った悪戯しかけの世界は嫌だった。だから俺は可能性はないに等しいがもし出会えたら、俺は一発殴ってやりたいんだ・・・」

「そうか・・・」

ここにも自分と同じ過去に孤独を味わった青年がここにもいたとわ思わなかった。確かにソロも物心がついたら一人で、自分の能力に恐れられ襲撃されてきた。そんな似た境遇を持っている暁やミソラを思いソロは感嘆してしまう。

「そして今回の事件もそうだ。彼女にはまた不幸な出来事に相対させられた。彼女には新しい家族が出来て、祝福が訪れて彼女には二度と家族を失うような、自分だけ苦痛にあうようなことにはなてほしくなかった。けど今回もこの世界の神がミソラに向けて作った悪戯仕掛けだったら俺は本当にこの世界が憎くなる・・・」

暁がそう言った。ソロは暁の自分の抱えていた過去の話を聞いてソロは下を向いていた。

「おっと・・・悪かったな。こんな辛気臭い話をして・・・気を悪くしたら許してくれ・・・」

「いや別に構わない・・・。ただ何故孤独を味わったお前ら三人は絆というのに信じ、そして一緒にいるんだ？」

ソロが暁の辛気臭い話を聞いて一つの質問を導き出して、そして暁に質問した。

「それはその人の笑顔が見たいと、大切な場所を失いたくないから



かな。きっと他の皆もそういうと思うぜ。皆がいて、仲間がいて、そして自分がいる。この場所を俺は失いたくないんだ。ただそれだけさ」

「そうか……。俺には大切な場所というのはないからな……」

「それでもいいんじゃないか？」

「え？……」

暁が言った言葉にソロが疑問を抱く。

「お前の人生はお前のものだ。好き勝手、自分の思った通りに動けばいい。他人に自分の人生に阻害される権利はないからな。お前が最も憎んでいる絆を信じるのもいいし、信じないのもいい。それだけだ」

「そうか……」

ソロは下を向いて暁の言った言葉を忘れないようにした。

「じゃあな。お前も早く休めよ」

暁はそう言葉を残して屋根から降りて、屋上の階段を下りて言った。ソロはその暁の後ろ姿を見てずっと考えていた。彼の言葉と、今後の自分について。

あれから二日が経過。ナンスカ村の異変の兆しは全く見られない。そこから全くの進展なしだった。交代制で村の見回りにいったりしたが何の変化もない。その調子が三日目の今日も続いていた。

「なあ・・・本当にあの強い奴は来るのか・・・？」

宿舎の一階のロビーにいるレイがそう言った。周りにいるソロを除く他の三人はレイの言葉に頷いた。ちなみにソロは単独行動をしていた。

「分からないさ・・・でもあいつがここに来いと言っていたんだ。それまで待つしかないさ。この村が襲撃される危険性だってないとはいえないからね」

「だよな・・・」

とレイが言った質問にスバルは返す。その解答を聞いたレイは思わず大きなため息を漏らしてしまう。その大きな溜息を漏らしたレイの姿をみて思わず苦笑いするリサ。暁は頭の中で考えていた。

『シドウ、何かひっかかることでも？』

暁の相棒、アシッドが暁のちよつと違う雰囲気気付きアシッドが訪ねてみた。

「いや、特になんにも。ただ・・・」

「「ただ・・・？」」

スバル、リサ、レイの言葉が綺麗に重なる。

「俺達の今の實力じゃ通用するか・・・って思ったんだ。一回、奴がスバルと少し戦ったがスバルの全力の攻撃を涼しい顔で防いでいた。あの様子だと、俺の予測では役二割しか出してないだろう。ここにきたら多分、半分の力は出してくるはずだ・・・」

「僕があいつに向かって行ったとき、尋常じゃない雰囲気を感じ取れました。奴はただものではないですね・・・」

あの謎の敵は恐らく自分たちが束でかかっても適わない強さをもっているだろう。下手したら自分の三倍以上の強さに匹敵する能力を宿してるかもしれない。そんな沈黙の空気に四人は包まれた。

『ああ！！もう辛気臭いな！！そんな奴、俺らが強くなって倒せばいいだけだろ！？』

ウォーロックが四人の間に走る沈黙の空気が嫌いだったため無理矢理スバルのハンターVGからウィザードオンして話の内容を聞いていた自分の思いを言った。

「ウォーロック・・・」

『それが世界を救った英雄のする顔か・・・？お前は少なくとも自分の力に過信してないようだな。お前は誰もが認める強さをもっている。倒れるたびに強くなる。立ち上がるたびに思いは強くなる。そ

うだろ？』

「・・・分かった・・・」

『ようやく分かったか・・・全くいつまでも世話のかかる奴だぜ・・・』

ウォーロックがそう言ってウィザードオフスバルのハンターV  
Gに戻っていく。

「そうだな。後ろも向いていても変わらないな」

「そうですね!!」

などとウォーロックが四人に飛ばした檄の言葉で四人は意気揚々とし始めてきた。そんな様子をみたウォーロックは涼しい笑顔を漏らす。そんな様子を見ていたスバルは相棒でよかったと感謝する。

その頃、一人で単独行動をしているソロはナンスカ村を歩いていた。いつもの変わった特徴的な服装で歩いていた。一人で村を歩いていると懐かしい感覚がする。まるで自分の故郷という感覚が。ここにムーの地上絵があるからだろうか。けど、そんな懐かしい感覚はあつという間に塵と化して消えてしまった。

「何の変化もないな・・・。奴は本当に来るのか・・・」

などとソロは小さな独り言をいいながら村で出店している店を横

目で見る。すれ違う人の顔、店から聞こえてくる店員の声など様々な声が耳の中へ入っていく。

「面白くねえ・・・」

ソロは服のポケットに手をつ突っ込んでムーの地上絵も中央広場に辿り着く。ソロはその地上絵を見る。独特な地上絵。これを見るとやはり懐かしい感覚がする。そんな感情に浸っていたソロの頭上に空間に歪みが出てくる。

「なっ!?! なんだこれは!?!」

ソロは自分の頭上の空間の歪みに嫌な汗を流す。そしてどんどん歪んでいく空間を自分の両目で見守りながら固唾を飲んで喉を小さく鳴らす。そして空間が割れて特殊な空間がさらに出現する。簡単に言えばノイズウェーブみたいなのだろう。割れた空間に手を伸ばせば入れそう、吸い込まれていきそうな感覚がした。

「ようやくおでましか・・・」

ソロは小さな笑みを広げて右手にラプラスブレードを召喚する。そしてそれを構えて汗を拭い、集中する。割れた空間付近には電撃が走り、音と共に不穏な空気を辺りに発していく。

「よくいりましたね・・・。その様子からすると貴方がたは無事生き残ってきたようですね・・・」

割れた空間の中から、過去に出会った正体不明の吸血鬼型電波体と出会った。ソロはやはり来たかという確信と共に集中する。彼の殺気は尋常じゃなかった。ソロでさえ体がこわばっていた。謎の男

の右手にはパラソルが一丁。

「フッ、俺らがあの程度でくたばるタマだと思っているのか？」

「思ってはいませんよ。少なくとも今もね……。さ、私がここに来た目的はお分かり……。ですよね？」

「俺らを倒すんだろ？そして世界を破壊する」

謎の男の質問にソロは率直に言った。

「フッ、推理力はまだまだのようですね。今はまだ機じゃない。機が熟したら貴方達を倒しますがね……」

「じゃあ、一体何のために!？」

謎の男が発した意味不明な質問にソロは罵声をあげながら言った。

「こういうことですよ!!」

謎の男はソロに急接近した。ソロは一瞬反応が遅れたが、大きく後ろにジャンプして距離を取って同時に電波変換をする。白い光の先には電波変換したソロの姿があった。片手にはラプラスブレードがある。

「いい度胸だな!!俺に向かって先制攻撃させるとは!!!」

「君を試しているのだよ!!さあ、君の実力を見せつけてみなさい!!」

「なめるなああ!!!!!!」

ソロが接近してラプラスブレードを振り上げる。そして力を思いきり柄にやり、申し分のない速度でラプラスブレードが空気を切り裂くうなりを上げて謎の男に振り下ろされる。男は上から振り下ろされるラプラスブレードを軽々と防ぐ。直後、勢いよく振り下ろされたラプラスブレードとパラソルがぶつかり、空気に振動が起こって、と同時に衝撃波があたりにまき散らされて小石が吹っ飛んでいく。そして鏢迫り合いとなる。奇妙な音を立ててソロは力でねじ込もうとするが全く動かない。

「あ、そういえば名乗ってませんでしたね。私はレインという」

「貴様・・俺をなめてるのか!!」

「なめてはませんよ・・少なくともね・・」

レインの発した言葉にソロにスイッチが入った。ソロは鏢迫り合いになっている状態から素早く低姿勢になって上手に体重移動して足に斬りつけようとする。

「遅いですね・・・」

レインは余裕の表情で低姿勢で攻撃しようとするソロに指一本で頭にでこピンをした。直後、ソロは大きく遺跡に向かって吹き飛ばされる。ソロの体が勢いよく吹っ飛ばされて遺跡の壁に大きな轟音と地響きをたてて激突し、貫通して、再び激突し、ようやく止まった。

「ガハッ!!」

吹っ飛ばされた衝撃と激突でソロは地面に血反吐を吐く。さらに傷は完全に完治していないため動きもある程度は傷に阻害されてしまう。そしてソロが岩壁に激突した轟音と地響きは村まで伝わった。

ズウウンという重い音がスバル達がいる宿舎にまで鳴り響いた。宿舎にいる市民に動揺が走るがスバル達の顔には集中と覚悟が出ていた。ようやくきたかという雰囲気が出ている。そして重い腰を上げてスバル達は音がした場所へと向かおうとする。

「くそがあああ!!!」

ソロの叫び声がナンスカ村の遺跡に大きく長く鳴り響く。ソロは口から血を垂らしながらラプラスブレードを使い空気の衝撃波、七閃を発動する。ソロのラプラスブレードから放たれた衝撃波がレインへと勢いよく向かう。だがレインは姿を消す。

「なっ!？」

ソロは姿を消したレインを見て辺りを見回したが彼の姿はなかった。

「遅い!!」

レインはソロの目の前に現れる。自分の目の前に大きくただずむレイン。ソロは不意をとられてしまった。重圧に押しつぶされて、無造作に自分の体が動き、ラプラスブレードを横に振り上げて、右



から斬りつけようとした。だがレインは無造作に動くソロの姿を見て、見えない速さでソロの溝に自分の拳を思い切り叩き付ける。

「うっ・・・ガハッ!!!」

ソロの小さな体が大きく吹っ飛ばされる。血を口から散らしながら無残に体がまるでボールのように転がる。

「その程度か？」

レインはパラソルを柄でぐるぐると振り回す。

「うっ・・・強すぎる・・・。けど俺は・・・」

ソロはラプラスブレードを杖代わりにしてどうにか立ち上がる。そこに四人の来訪者が来る。

「ソロ!!!」

「貴様ら・・・。これは俺とあいつの戦いだ。水をさすんじゃないぞ!!!」

「わかってる!!!けど無茶はするなよ!!!」

ソロの言った言葉にスバルが大声で返した。

「貴様らに心配される筋合いはない!!!」

その言葉を聞いたスバル達は小さく微笑した。

「では君の底力見せてくださいよ!!!」

レインがパラソルで魔方陣を描き始める。そして魔方陣から炎が浮かび上がり、燃え上がる音が聞こえ始めていく。

「俺は・・・俺は・・・」

一人の少年に新たな変化の兆しが訪れようとしていた。

## Auf t a k t | 36 煌剣エクスカリバー

「ぐあっ!!!」

地獄の戦場と化したナンスカの遺跡に一人の少年の苦痛の叫び声と共に何かに激突する轟音が走る。それはレインが魔方陣で描き召喚した紅蓮の炎の塊がソロに激突した音だった。

「その程度か!? ムーの末裔よ! 私にもっと力を見せつけてみろ!」

レインはソロに向かって急接近する。ソロはレインの動きが見えていたが体がいう事を聞かず、自分の目がぼやけて見えていて視界がはつきりしていなかった。

「くっ!!! ちくしょおおおお!!!」

ソロはぼやけた視界のなかでこちらに向かってくる影をレインだととらえてラプラスブレードを振る。

横から降られるラプラスブレードは空を切ってレインに接近していく。

「そんな安い攻撃あまいですよ!!!」

レインは横からソロがタイミングを合わせて振ってきたラプラスブレードが自分に向かって刃を向けて襲い掛かってくるが、レインからしては非常に対応しやすかった。ソロのラプラスブレードを片手で軽々と止める。そして素早くターンしてソロの目の前にステップ移動する。そして思い切り溝打ちをして、ソロに大きい打撃を与

えた後、蹴りで吹き飛ばす。

「ガハッ!!」

ソロの小さい体は大きく吹っ飛ばされて壁に激突し、息が詰まって呼吸できなくなった。そして喉に手をあてて呼吸を安定させる。ラプラスブレードを持てる気力はなかった。全身は傷まみれになっていて、そして圧倒的な実力と大きな存在の差。ここまでだと思わなかったソロは屈辱の気分を味わっていた。その屈辱の思いがソロの下唇を自分の歯で強く噛み締める。

「はいはい、どうした!!」

レインはソロに急接近して、態勢を整えるソロを掴んで空へと打ち上げた。空中にいるソロは相手からして非常に無防備だ。自分の体の回転に抵抗する気力がなかった。そして同時に傘の先端から炎の光線を放った。炎の光線が、光を放出しながら自分に接近してくる。

ああ、もうだめだ。俺はここで力尽くんだという死と絶望の感情を抱きながらソロは小さな笑みを漏らしながらそう思っていた。死ぬかもしれないというのにこの安心感。そしてソロは紅蓮の業火の炎をまともに喰らった。そして同時に大きな爆発が起きて、辺りに衝撃波をばらまく。空中で大きな爆発に包まれたソロは爆発と共に舞い上がった煙の中から無残に落ちて地面に叩き付けられる。

「ソロ!!!!!!」

ソロの様子を見守っているスバルが大きな声で叫ぶ。圧倒的な実力の差に暁達は言葉が出なかった。レイと暁はレインの実力に啞然

としていてリサはソロの無残な様子に顔に手をあてて視線をそらしている。無残に叩き付けられた少年、ソロは立ち上がらなかった。いや、立ち上がれなかった。受け身もとれずに。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ここ・・は・・」

ソロはあたりを見回し起き上がる。周りは白くて何もない真っ白な世界。自分はずいに死んだかという感覚に包まれる。ここは天国が地獄の世界、もしくはただの夢でできた幻想の世界かとソロはそう思っていた。

「ソロよ・・・聞こえるか・・・？」

「誰だ!!!？」

ソロは突然聞こえてきたまるで無法者の声がして警戒状態に入る。

「私達は、貴様と同じ一族の亡き者の面影・・・。私たちは貴様がずっと一人で生きてきたのを見ていた。ソロよ・・・貴様はここにくたばるのか・・・？ムーの唯一の末裔として、お前にはやることがたくさんあるんだろ？成し遂げたいことがあるんだろ？ここで終わっているのか？終わっていないわけないだろ。お前の人生はまだ咲き誇っていないだろ？花を綺麗に咲き誇らせろ。それがお前に課せられた宿命だ。俺達の方まで精一杯戦い続けるんだ」

何もないのにまるで天の声が聞こえてくる。ソロはその声の主が

気になったが同じムーの一族というのに勇気がわいた。

「俺は・・・」

ソロはふと思い出す。スバルと初めて出会い、屈辱を味合わされたあの日の事を。あの日がすべての始まりだった。強くなろうと努力し、力をつけて彼を倒そうとした。その野望がまだ達成できていない。俺はまだここで倒れるのはまだ早い、まだもがきたりない、もがいてもがいてもがき続けて、強くなる。まだ自分の限界に達していなかった。たとえ出口のない迷宮をさまよっても壊して答えを見つけるために。まだ諦められない、諦める訳にはいかないと思い、ソロは夢か天国か地獄の幻想の世界で決意する。

「俺にはまだ成し遂げていない野望がある！！それを成し遂げるまではくたばるわけにはいかないんだ！！それまで俺は・・・俺は死ぬわけにはいかないんだ！！」

「フッ、その覚悟だ・・・。その決意の大きさ、見せてもらった。お前にムーに伝わりし具現の技を託そう・・・」

「具現の技・・・？」

ソロは具現の技というのに疑問を抱いた。

「ムーに伝わりし古代の力で成し遂げるがいい！！私たちはずっとお前を見守っているぞ！！」

「こ、これは・・・俺の体に流れるムーの一族の血が強く反応している！！？」

「受け取るがいい！！ムー文明に伝わりし、具現の炎の力とエクスカリバーを！！」

そしてソロは静かに立ち上がり、上を見つめ始めた。彼の表情には曇りがなくなった。彼の中の何かが変わった。そして静かに胸に手を当てて気持ちを落ち着かせて目をつぶる。

「これでおしまいだああ！！！！」

レインは意識を失い、倒れているソロにパラソルの先端をあてて紅蓮の業火の炎で攻撃しようとした。直後、ソロの体から紫色の業火の炎がソロを包んだ。レインの放った炎はソロの体から放たれている紫色の炎によりかき消された。そしてソロが意識を取り戻して静かにゆっくりと立ち上がる。彼の雰囲気は異常なほど変わっていた。体には紫の炎に包まれて、目は透き通る紫色の目をしていた。その様子を見たレインは思わず笑みをこぼし、スバル達はソロの姿に目を丸くしている。

「俺は俺の信念を通す！！いくぞ！！」

「いい覚悟だ！！その力、私にみせつけてみせろ！！」

ソロの大きな声にレインはそれを短い声で返す。そして遺跡に小さな沈黙が走る。ソロはラプラスブレードを、レインはパラソルを構えて魔方阵を作っている。そして傷だらけの体に口から垂れる血と体を包んでいる炎を纏っているソロを見守る四人。

「バフォメット・ファイア！！」

レインが作った魔方阵から地獄の業火の炎がソロに真っすぐ向か

う。真っ赤に熱く燃える炎。初めて見た人なら腰を抜かしてしまうだろう。そして距離があるのにスバル達まで熱風が届いてきた。ソロに向かう炎。ソロは目を閉じて両手を前に出して、右手を剣の柄に、左手を剣の先端に手を当てていた。

「熱っ!!」

暁が苦しみの言葉を言った。だがソロは向かってくる炎に全く動じない。目を瞑って気持ちを落ち着かせて瞑想状態にして神経と自分の持つもの全てを表に出す。自分の中が変わった。そんな感覚があっても驚きを隠せない。

(いける・・・俺の中でいけるという確信が!!)

ソロは極度の集中に入っていた。そして彼はあらたな悟りと境地、そして新たなステージへとたどり着こうとする。

「・・・俺を・・・勝利へと導いてくれ!!!」

「どうした!?! 怖くて目をつぶっている事しかできないか!?!」

「ここだああ!!!」

ソロはラプラスブレードを炎に向かって思い切り振った。炎はソロのラプラスブレードにより一瞬でかき消された。そしてソロは静かに目をつぶる。ラプラスブレードを消して、両手を前に出す。体には具現化した紅蓮の紫の炎が彼を包んでいる。そして、彼の腰の位置に鞘に納められた刀らしきものが現れる。そしてソロはそれを静かに手に取る。そう、それがムーの仲間の信念がソロに贈った一つの究極の思念の塊の剣。それがエクスカリバー。



「それが貴様の真の力か!!?」

「違うな!この力はムーの亡き者達が俺に向けて渡した力だ!!!」

レインの言葉にソロが大きな声で返し、そして刀の柄に手を当てた。そして鞘から形見をだして静かに出した。エクスカリバーはソロと同じ紫の炎で包まれている。ソロの姿は猛々しい姿だった。自分の体、形見も紫の炎で包まれていた。まるで魂に燃える男。レインにはソロが戦士に見えていた。

「いくぞ!!!」

ソロは大きく地面をけって接近する。レインとソロの距離がどんどん埋まる。距離はある程度に達した時、ソロはエクスカリバーが届く範囲ではないのにエクスカリバーを振った。エクスカリバーにまとっている炎が突然、レインに襲い掛かる。レインは不意を突かれて一瞬反応が遅れる。それをレインはぎりぎりに回避した。その炎はまっすぐに進み、無人の空間に突っ込んで岩壁を綺麗に破壊した。

「遅い!!」

ソロはレインの回避移動先の背後に回り込んだ。そして炎を纏っている業火のエクスカリバーをレインに振り下ろし、もろにレインに直撃して大きく吹っ飛ばす。そして追撃にソロはエクスカリバーを振ってレインにソロが纏っている炎の洗礼を浴びせさせる。

「すごい・・・」

「さっきまで圧倒されていたのにそれを覆すさらなるソロの力……」

『どうやらあいつも進化したみたいだな……』

「その通りだね……」

とソロも最大のライバル、スバルとウォーロックは固唾をのんで見守る。そして空間転移ゲートが入っている付近に一つのシルエットがスバルの視界に移った。スバルはそれを見て目を丸くし息をのんでしまう。それはピンクの体に背中にはギター。どうみても彼女しかない。スバルはそう思った。

「ロック!! 電波変換だ!」

『なっ!? なんでだ!?』

「いいから早く!!」

『わ、分かった!!』

珍しくスバルが声を上げた。そしてスバルは電波変換し、ロックマンと姿を変えて空間にひびが入っている付近にウェーブロードに乗って接近する。

「スバル!? どうした!?」

暁が大きな声を出しているが彼女がまさかいるかもしれないという期待と焦りに暁の声はスバルの耳に届かなかった。そのスバルの姿を見て暁は走って行った。まさかと思い、暁も大体の予想は把握する。

「ぐう・まさか新たな力がここまでやるとはな・・・」

レインは左腕を抱えて苦し紛れに言う。だが彼の表情にはまだ余裕が見られた。

「貴様をここで倒す・・・なめてかかってきたことを後悔するがい！！！」

「フッ、あいにくだがそれは無理な話だ。私にはやるべきことが沢山あるからな！！！」

レインがそう自分のやり残していることをいい、そしてレインは逃げる為に閃光弾を放ち、あたりにいるもののすべての目を焼いた。ソロも、ソロの戦闘を見守っているレイヤリサも目を焼かれて目が開けなかった。その間にレインは空間転移してきた場所へと戻り始めた。

ソロは必死に目をあげようとしたが目を開けようすると目の奥で釘を打たれたような感覚が走り開けることができなかった。そして二分ぐらい経過したらようやく目を開けることができた。そこにはレインの姿がなかった。そしてソロはまさかと思い、空間転移ゲートの場所へと速攻で向かい始める。

「ミソラ!!」

空間転移ゲート付近に懐かしの一人の少女の姿があった。スバルは待ち望んでいたかのように大きな声で相手の名前を呼んだ。

「まだ覚えてくれてたんだ・・・スバル。私の事は忘れてよかったのに・・・」

「忘れるわけないだろ!? 君は僕の大切な親友だ!!」

スバルの発した言葉にミソラの心が大きく揺らいだ。スバルとミソラ。この二人はそう、コダマタウンの展望台での出会いがすべてのきっかけだった。お互いがお互いを刺激しあい、ゆっくりとだが変化させていった。そして少しずつ彼らの表情に笑みがこぼれはじめ、前向きな性格へと変わっていった。そして今、彼が誤った道と進んでいる彼女を救うべく彼女の前に姿を現した彼、星川スバル。

「うるさい!! 黙れ!! 私、私はもう悪魔に魂を売った人間を捨てた吸血鬼なんだ!!」

ミソラは大きな悲鳴とともにスバルにショックウェーブを放ち、空間転移ゲートに姿を消した。ミソラの放ったショックノートはあさっての方向に行ってしまう。それを見たスバルは彼女は完全な悪魔じゃないと確信する。

「待て! ミソラ!!」

スバルは愛する人が目の前に居るため、元の居場所へ意地でも返してやるために無謀にも空間転移ゲートに突っ込んだ。もしかしたらここで捕まえなければ二度と会えないのかもしれない。そんな感

情を抱きながらスバルはただ前だけを見て穴の中へ入ってミソラを追いかけていく。この行動が後に自分を後悔させることとなる。

「スバル！」

一歩遅れてきた暁が空間転移ゲートの前につく。空間転移ゲートからはスバルの声が聞こえてきていた。そして直後、あの主犯格だと思われる男、レインが穴に勢いよく入っていった。その後ろにはソロの姿があった。逃げるレインを必死で追いかけるソロ。そして空間転移ゲートが少しずつしまっていく、元の空間に戻り始めていった。

「させるか！！いけええ！！」

ソロは身にまとっている炎で空間転移ゲートに攻撃する。だが変化は全くなかった。少しずつ入口は閉じていって、小さくなっていき、そして最終的に空間が元通りになってしまった。その光景を漠然と見ていた暁はガクンと膝から力が抜けるように地面に膝をついた。そしてスバルがあゝの空間に入ってしまった現実を受け入れられなかった。ソロは自分の力が底をついてソロを包んでいる炎が消え、と同時に刀も消えてその場に倒れこんでしまった。

静寂の遺跡。現実には躊躇している青年と新たな力を手に入れた少年。そして姿をくらました少年。引き裂かれた一人と四人。今後、彼らはどんな運命が待っているのか。

## Auf t a k t | 37 人生の謳歌

スバルが空間転移ゲートに潜り込んだ。だが後先考えずに彼がとった行動は非常に命取りだった。今後、自分の生命危機と細胞変化による禁忌の箱に触れてしまう。

現在、スバルはミソラとレインが潜り込んだ場所、空間転移ゲートの中にいる。ここはどこなのかは全く分からない。多少の異常ノイズが発生していてウェーブロードが不安定になっているぐらいだ。多少の不安定要素は有るものの、改良型エースPGMがあったためノイズ率が高くてもそんなに身体に影響はなかった。ちなみにここはノイズウェーブと非常に似ている。擬似ノイズウェーブと呼んだほうがいいのかもしれない。空を見れば太陽はない、雲はない。かといって夜でもない。ただ上は真っ暗なだけだった。

「おやおや、何故この空間にロックマンが・・・？まあいい、見学させてもらおうじゃないか！！」

レインの叫び声が暗い光の刺さない空間に響いた。そんな出口が封印された逃げも隠れもできない密閉の空間でスバルはミソラとようやく出会うことが出来た。その必死の思いでミソラの姿を見失いようにしていたスバル。目でしっかりと追う。

「はあ、はあ、待てよミソラ！！？」

ミソラはスバルから避けるように背中を向けて逃げてスバルは逃げるミソラを追いかけてきた。スバルは必死な思いで追いかける。ウォーロックはこの状況に関して若干スバルが変態なストーリーカーと

感じ取られてしまった。確かに周りからすればアイドルを追いかける変な少年。そして逃げるアイドル。これはどうみてもおかしく感じ取ってしまう。スバルはそんなことは全く思わずにいた。

「待てったら!! 止まらないなら!!」

スバルは腕を構えてロックバスターの態勢に突入する。スバルのバイザーの下に出る照準をミソラの足元に狙う。さすがにいくら彼女が悪魔に憑りつかれた人だからって彼女の背中にロックバスターを撃ちこむのはさすがに抵抗があった。何回も躊躇し、照準を合わせては狙い撃てずにいた。

「撃てよ・・・僕・・・。決意したからここにいるんだろ? 何を迷っているんだ・・・撃たなくちゃならないんだ・・・。平和な日常仲間を戻さなくちゃならないんだ!!」

スバルは再び逃げるミソラに合わせて照準を再修正する。そしてロックバスターの銃口にエネルギーを溜めていく。ロックバスターの銃口から小さな光が発光していく。そして最後に修正した瞬間彼の目の色が変わった。

「うおおおおお!!! ロックバスター! チャージショット!!!」

一筋の閃光と共にスバルの銃口からロックバスターが一つの塊となって空気を切り裂く轟音を立てながら発射された。向かった先はミソラの少し前。渾身の狙いを限界まで絞ったロックバスターの溜め撃ちが電波変換状態のミソラの前のウェーブロードに着弾して大きな爆発が起きてミソラを軽く吹っ飛ばす。

「ぎゃっ!!!」

ミソラは小さく声を上げて吹っ飛ばされた。その間にスバルはほとんどミソラとの距離感覚を埋めていく。

「さあ、覚悟するんだ！！僕は君を無理矢理でも、気絶させてでも、骨の一本折ってでも君を連れて帰るからな！！」

「ハッ！それが今の貴方に出来るかしら！？私の中には究極の悪魔の化身が宿っているのよ！！その偉大な悪魔の力を身に付けた私にはむかおうなんていい度胸じゃない。貴方を死なせてあげないように私は逃げてたのに、自ら死を望むなんていい覚悟じゃない！！」

ミソラは声を荒くして言った。スバルはそれを漠然と聞いている。だがその言葉を聞いてスバルは呆氣がとられてしまわずがなかった。むしろ、強制的にでも連れ戻したいという気持ちが跳ね上がってくる。

「それでもいいんだ・・・君がこんな悪い醜態さえしなければ僕はそれでいい。けど！！」

スバルは突然、地面を強く蹴ってスターソードという剣を召喚した。これは自分が自分の力と技術と応用で編み出した努力の結晶の力の得物、それがスターソード。青と赤に示された二対の剣。この剣が、スターソードがスバルと共に幾多の境地を潜り抜けてきたまさに相棒に匹敵する綺麗な美しき剣だ。そしてスターソードを両手に持ってスバルは躊躇なくミソラに斬りようとする。

「だからって、仲間にそんなこという事ないだろ！！？君は人を大切にしている・・・その思いを忘れたのか！！」



「そんな気持ち、当の過去に忘れたああ！！！！」

スバルのスターソードがミソラに向かって勢いよく振り下ろされ、反面、ミソラは悪魔の力を使って真っ黒な二対の剣を召喚し、スバルのスターソードの攻撃を防いだ。その瞬間、空気が揺れ、音が攪乱し、周囲のノイズ率がどんどん上昇していく。そして鏢迫り合いとなったスバルとミソラは力でねじ伏せようとする。

「僕はなんとしても君を救う。たとえ悪魔に身が支配されてでも！！！！」

「そんな言葉だけの幻想！！本当に死にたいのスバル！！？」

生者の剣と悪魔の剣がぶつかり合う。その瞬間辺りに火花が舞う。ガギンガギンと奇妙な音を放ちながらミソラとスバルはそんな鏢迫り合いの膠着状態の状況に陥る。

「僕はその覚悟の上で君の前にいるんだ！！どうして、どうして僕の気持ちが分からないんだ！！？」

「そんな気持ちは忘れたわ！！」

『ハープ、お前までどうしちまったんだ！！？』

心配になってきたのかスバルの大事な相棒、ウォーロックもミソラの相棒に話しかけてきた。一応これでも同じFM星人。同じ惑星で育ったわけではないが、同じ星人として心配になってきたのだ。案外、彼も心配性だったりする。

『ごめんなさいね……。私達には私と仲間だけの大事なあなたには話せない大事な都合があるの。だからとっとと消えてくれないかしら。このままだと貴方達、本当に死んじゃうよ』

『へッ、俺たちにそんな脅し通用すると思ってるのか！？』

ウォーロックは強がる。だが沈着冷静な彼女が同じFM星人として死ぬという発言は今までしたことがなかった。

『少なくとも思っていないわね……。でも貴方達が前にたちはだからうと女の決意というのは強くて、堅くて、崩れないものよ。それでも貴方達は私たちの前にたちはだかるつもり？』

「この……この……」

「スバル……なんていつてるか聞こえない！？だったら君の遺言を聞いてあげようじゃない。ほら最後に言いたい事があったらいいなさい！！」

ミソラはそういう。それを聞いたスバルは右拳にますます力が入る。ギチギチという奇妙な音を巻き散らして、歯を食いしばって大きく息を吸い込んだ。

「この……大馬鹿野郎ーーーー！！」

スバルの目の色が変わっていく。そして地面を強く蹴ってスターソードで斬りつけようとする。青と赤の二対の剣が振り下ろされる度に剣が発光する光の軌道を描きながらミソラに躊躇なく襲い掛かる。

「なっ!!!?」

ミソラは一瞬、反応が遅れてたじろいてしまう。スバルはもう本気だ。スターソードによる追撃もしてきた。

「そんな事をして、天国の母さんが喜ぶと思っているのか!!!?その能力で人を傷つけて、悲しませて、苦しませて、それで天国にいる母さんは君の事を嫌いだと思っているぞ!!君はそんなにいいのか!？」

その能力は誰かを守るためにあるんじゃないのか!!!?」

「うるさい!!!分かったためごを聞くな!!!」

直後、ミソラはギターでショックノートをスバルへと迷いなく攻撃した。スバルはミソラのショックノートによる音符攻撃を受け止めた。逃げも隠れもしない英雄。

「分かっているから、君を助けようとするんだ!!!本当は自分が人間じゃない、人間から人並み外れた悪魔になってしまった自分に僕たちは自分の事を見て嫌ってしまうのではないかと思っていたんだろ?」

「.....」

ミソラとスバルの間に静寂の沈黙が走る。

「私は・・・君たちを倒す為だけに今ここにいる!!!それ以外の理由などない!!!」

そしてミソラはスバルへと一気に急接近していった。

## Auf t a k t | 38 君は私の憧れ

「君たちを倒す！覚悟しなさい！！」

ミソラはスバルに急接近していく。スバルは急接近してくるミソラの様子を見て聖なる剣、スターソードを構えた。ここまでは順調だった。

「こい！僕も君を倒して無理矢理連れ戻す！！」

二人の思いが交錯する。そんな戦場はノイズ率が800%近くまで上昇していてウェーブロードは酷く歪み、非情の戦場と化していた。

ザッ、ザッとラジオで周波数設定時にするノイズ音が聞こえて来る。

「行くぞ！！」

スバルもミソラも本気だった。二人はそれぞれの得物を両手に所持し、目的にまっすぐに接近する。

「はあああああ！！！！」

スバルが叫び声と共にスターソードの柄の部分を強く握り、そしてミソラへと右手にあるスターソードを上から下へと振り下ろす。現在と過去では全く違う親友の面影。外見から中身まで完全に変化したミソラ。そんな変化したミソラに躊躇なく攻撃する。

「あまいわね!!」

ミソラは今まで愛用していた得物のギターを使用し、攻撃するのではなく、自分の身に宿りし絶対強者の悪魔の力を活用し、スバルと似た二対の剣を召喚し、上から振り下ろされるスバルのスターソードを剣で防ぐ。

その後、ミソラは迅速に防御から攻撃に展開した。スターソードを弾かせスバルの懐に潜り込み、思いきり剣で突きを放った。

ミソラの放った剣の突きがスバルに容赦なく襲いかかる。剣の先端は非常に鋭い。なおかつ貫通に秀でている。スバルはそれを無理矢理、身体を捻り回避させる。

だが身体を捻っても自分の右脇腹をミソラの漆黒の剣が浅く捉えた。切り傷程度だが痛みが走る。

「ぐっ!!」

スバルが苦し紛れの声を上げて、バックジャンプで距離を確保した。切り傷からは血が垂れている。

『スバル!!』

「ああ、分かってるさ。地獄に堕ちても地の果てまでついて来てくれんだろ!？」

『元からそのつもりだ!俺は別にどうなってもいいからな!』

「それでこそ相棒だ!」

『それはこっちのセリフだ!!』

などとスバルとウォロックは短い会話を交わしながらすぐに気を取り直す。今だ距離はある。まずどうにかするか考える。その間にミソラはスバルとの距離を埋めに自分に向かって接近してくる。そしてその様子を自分の目で捉えて若干焦りが走る。これでまた距離を失った。だがまだ距離はある。また一度、自分の冷静さを取り戻して向き直る。

「これしかないさ!! 任せたよウォロック!!」

『おうよ!!』

短い掛け声とともにスバルはミソラをギリギリまでひきつける。体がこわばるがそれを無理矢理押しつぶして冷静さを取り戻す。そして月光の光のような淡い優しい光を放出しているスターソードを手からはなした。剣と地面がぶつかる音をする。

（何のつもり!! だが好機!）

ミソラはスバルの意味不可解な行動に一瞬躊躇する。無防備と化したスバルにミソラの渾身の一撃が剣によって振り下ろされる。

（今だ!!）

（おうよ!!）

「はああああ!!」

ミソラが叫びと共に振りかぶる。そして自分へと襲いかかる剣に

スバルは一筋の汗をかくが集中力はみださない。自分のななめぐらいに剣が来た瞬間、運動神経と補足が鋭い者が扱える秘技をスバルは繰り出した。

「今だ!!」

スバルは剣が目の前に来た瞬間、白羽どりを繰り出し勢いよく振り下ろされているミソラの剣を綺麗に完膚なきまでに止めた。だが手のひらには血が出血していた。そんな事は承知の上であるスバル。痛みは歯で食いしばって我慢して相棒に指示を出す。

「ウォーロック今だ!」

『おう! 待ちわびたぜ!!』

ウォーロックは突然ウィザードオンしてミソラの剣をビーストスイングで吹き飛ばした。宙に舞ったミソラの漆黒の剣が音を立てながら空中で弾ける。ミソラの得物を消し飛ばすことで戦力低下を期待できる。そして小さな笑みと共にスバルはたじろいているミソラを見て一気に攻撃に展開する。

「なっ!!?」

「君は剣の扱い方が分からない。だから君はただ剣を僕に向かって振るだけ。だったらスターソードの剣を使っている剣士の僕からはしてはあまりにも動きが緩慢だ。そして痛みをこらえろ!これが僕の最大の一撃だ!!」

スバルは一步踏み出した。あまりの大きな圧力にミソラは一步、また一步と下がっていく。自分が悪魔に強制的にこの身に宿されて、



全てを捨てて、いけにえとなり、身に最強の力を宿したはずなのに、何故この男には勝てないのか。その時、ミソラの目には自分には到底かなわない大きな圧力を持った人に見えたらしい。ミソラが一步下がってもスバルは距離を埋める。そして大切な人が歩み外した道を踏み戻させるために、スバルは右拳を圧迫させる。そして思い切り振りかぶり、その少女の腹を叩いて思い切りフツ飛ばさせた。その間、ノイズ率はどんどん上昇。エースPGMを見たらノイズ率は2000%に達していた。

吹っ飛ばされたミソラは口から奇妙な液体を吐きながら顔色を変え、目の色を変えて大きく吹っ飛ばされ倒れこむ。これが私と彼の實力差。悔しかった。あの日、自分が決めた決意、自分が強くなつてスバルより強くなつて人を守ると。今の現状じゃ全くの逆だ。力を付けた、いやつけられたのだが、力を付けてもこれじゃ人を全く守ってない。逆に傷つけているだけだ。そんな自分の状況を見て思わず笑みを漏らしてしまう。上を見たら乱れ荒れくう空間。自分がこんなにもちっぽけな存在なんだなと漠然とするミソラ。目の前には世界の英雄、そして自分はその世界に名を残す英雄の彼女。自分はなんて堕ちたんだ。生きている価値ないなという優越感に襲われた。そう思っている間にもヨイリー博士が作ってくれたWAXAの技術が詰まったアビリティが表示していたエースPGMはたった短い時間なのに5000%に到達してきた。

5000%は人体に影響を及ぼす世界だ。頭が重い、体がだるいとスバルに影響が出てきた。もし8000%に到達したら生きては帰れないだろう。出口の無い混沌の世界で脱出できるのか。

「うつ……そんな……」

ミソラが唇から垂れる一筋の深紅の血を片手で拭う。どうすればいいと頭で必死に策を練る。

『ミソラ！やるしか……ないんじゃない……』

「でもあれは危険過ぎる……。私達の身にかかる反動が身体を破壊してしまうかもしれない……」

『今の貴方の身体の状態と人では無くなった貴方を受け入れてくれる人なんているの？』

ハープは非情の言葉を放った。その言葉を聞いたミソラは心が大きく揺らぐ。そう、自分は人間じゃないんだ。今は吸血鬼と化した悪魔なんだとミソラは自分の胸に手を当てて、自分の中に宿りし悪魔と対話するようにした。

「フッフッフ……素晴らしいな。恋人関係に、人と人を捨てた人。まるで合わせ鏡のようだ。素晴らしい！！この私を興奮させるとは！胸と心が高鳴るじゃないか！！」

スバルとミソラの戦いを観戦しているレインは自分の心境をあらわにした。そして片手にパラソルを振り回しながら不敵な笑いを広げて観戦する。

「仕方ない……」

『リミットはわずから5分よ。きっと彼もファイナライズ的な変身をしてくるわ……。身が死ぬかもしれないけどそれを覚悟の上でいくわよ……』

「わかった……」

そしてミソラは息を整え、静かに深く深呼吸する。自分の心臓がわずかだが早く鼓動する。そしてミソラは技を発動する奇妙な動きをし、その奇妙な動きが綺麗な曲線を描く。

『スバル！来るぞ！』

「うん！でもあれは……？」

ミソラの深呼吸と共に地鳴りが響き地面が揺れる。それを見たスバルとウォーロックは額から奇妙な冷たい汗をかく。

『いよいよ本気みたいだな……』

「ああ……」

## Auf t a k t | 39 覚醒《リミッター解除》

「はあああああ！！！」

ミソラがどんだん身体に力を溜める。と同時に地面が振動し、地鳴りの音が聞こえる。どんだんミソラの周波数が異常な域に達していくのをスバルとウォーロックは肌で察知する。

スバルとウォーロックは固唾を飲んで神聖剣スターソードを両手に構える。

「行くぞ！！スバル！！」

ミソラはゆっくりとふらつきながら立ち上がる。目の色は赤く、黒く染まり光っていた。その様子をみたスバルとウォーロックは当初、ミソラが反逆したと同じように途端に戦闘能力が飛躍的に上昇した事だ。それが二人の頭を過ぎり、緊張が身体に走る。辺りの雑音がスバルとウォーロックの集中を乱す。

そんなのに気はとられている暇などない。僕は救う、という気持ちで集中する。

「行くぞ！」

ミソラの叫び声と共にミソラの姿がスバルの視界から一瞬にして消えた。直後、自分の身体に死ぬぐらいの激痛が走る。全身がミソラの漆黒の剣で背後に回り込まれて斬られたようだ。

「うっ、ぐああああああ！！！」

激痛により悲鳴の声を上げて苦痛から逃れるように叫んだ。そして右膝を地面について左膝に手を着く。そして汗を垂らしながら呼吸する。息をすると喉から肺へと繋がる呼吸器官が息をする度に音を立てる。

「やはりこれは……一時的な飛躍的に戦闘能力を向上させる能力……」

『ビンゴらしいな。だがあの強すぎる能力には絶対裏があるからな……。俺は少なくともそう感じる……』

「そうか……なら時間を稼いでみるか」

『それしかないさ!』

などとスバルとウォロックは短い会話と共にスターソードを構える。なるべく膝を曲げて低姿勢になり対応しやすいようにする。

「はあああああ!!!!」

ミソラの叫び声と共に目が光っていた。その赤い目の光が綺麗なミソラの動きについてくるように綺麗な線を描きながら相当な速さでこっちに向かってくる。スバルはミソラの動きが速すぎて追いつけない。

「くそっ!どこにっ!!?」

スバルは疾風のように移動するミソラの姿が見えなくなった。そして辺りを見回しても彼女の姿は見当たらない。

『スバル！後ろだ！』

相棒がミソラ独特の周波数を察知してフォローしてくれた。相棒のフォローにより背後の死角に回り込んでいるミソラをスバルは振り向き様に剣を振る。ちょうど、タイミングが良かったのかスターソードを振り回した瞬間、偶然にも背後で攻撃直前でいたミソラに直撃して、不意の一撃を喰らったミソラは大きく吹っ飛ばされる。

「きゃっ！！」

ミソラは吹っ飛ばされて短く悲鳴を上げて地面に叩き付けられる。だがミソラはまるでロボットのよう何事もなかったかのように漆黒の剣を両手に持ち、立ち上がり再び向かってきた。その様子を見たスバルは再び向き直り態勢を修正する。

だがミソラは直後、大量の血反吐を吐いた。真紅の血がウェーブロードを染めていく。どうやらリミッター解除の負担の初期症状が早速出たのだろう。そしてその場に両膝をついて片手を口にあてふさぎ、片手は地面にあてて自分の体の支え柱にした。そしてまた血を吐き、咳と共にさらに染めていく。

「ミソラ！！」

スバルは敵であるミソラだが心配になり警戒心を切らさずに接近する。

「な、なによ……笑いたきゃ笑えばいいじゃない……」

「僕は決して君を笑わないさ。たとえ君がどんな姿になってもね……」

その言葉を聞いたミソラは目を大きくして丸くした。自分がこんなにも人間の理から離れた人なのに、自分を受け入れてくれる人がいると。

「ミソラ……」

「スバル……」

「ねえ……覚えてる？僕たちが初めて出会ったコダマタウンの展望台での君と僕とのファーストコンタクト」

「うん……」

その言葉を聞いたミソラはコダマタウンで初めてであったスバルを思い出す。そう話したスバルも記憶の引き出しから大切な記憶を思い出す。そして次の言葉を発しようと静かにスバルは口を開く。

「あの時、君は展望台で僕と出会った……。ここから僕の人生と目に映る世界が変わったんだ」

「私は、自分と同じ境遇を持った人間がいるんだと……」

そう二人はノイズが荒れ狂うひどい空間で大切な、大切な懐かしい、自分を変革させてくれた感謝の記憶を頭がよぎる。ミソラはNAXA研究所で誤った道を進んでしまった自分を地獄の底から手を伸ばして救ってくれた大切に大好きで、彼女の目にはとても大きな少年に見える男、それがスバルだった。

スバルは自分にも似た現実、そして自分よりひどい現実を味わってきたミソラの過去の面影が頭をよぎった。母親は早くしてこの世

を去ってしまい、父親は消息不明、頼る親戚もなく、自分はただ一人で、必死に笑顔を作って、裏には涙を流し、出口のない苦しみの迷宮に彷徨って苦しんでいたミソラの面影があった。スバルは父親が戻ってきて、その時には泣きじゃくったが、ミソラは親がもうこの世にはいないのだ。その時の苦しみを分かち合えたのが自分だけということ。

そして、お互いの悲しい現実の壮絶な過去を知ったお互いは理解しあった。自分だけではないんだと、あの時言った少女の言葉。世界には不幸になりたくないのに不幸になって私達みたいに親を失ってしまった……それは世界には無数にいる。私はその人を元気にしたいと。そしてスバルとミソラはお互いがお互いの励ましの形として、信頼できる者同士が繋ぐ心と心の見えない糸、それがブラザーバンドだった。

ここからが二人の生きる世界が変わった。そして幾多の試練を乗り越えて今、自分たちが大切な「絆」で結ばれた相手がいる、たとえ相手が変わり果てても、朽ち果ててもお互いがお互いに対する愛の気持ちは変わらなかった。

「スバル……私………」

「いいんだ……。僕は君が戻って来てくれればそれで十分……。充分なんだ。僕は君がいなければ今だ黒くて苦痛に囚われる世界をさ迷っていた。それを突き崩してくれたのがミソラ……。君なんだよ……。だからもうやめよう。皆、皆、君を待っているんだよ………」

スバルの優しい言葉にミソラの目には一つの大きな涙が頬を伝って流れおち、そして顔を紅潮させる。  
そしてミソラの思いが急速に変わっていく。



「うん……。ごめんねスバル……。あんなひどいこと言って……」

「気にしてないさ。僕は君が帰ってくるって信じてたから！」

「スバル……」

彼の一言一言が自分の心に深くしみた。ミソラは涙をボロボロボロボと止めどなく流す。女を泣かせたら罪と聞いてスバルはそれが頭をよぎったが今は全く関係なかった。そして二人が近づき、抱き合おうとした瞬間、この空間のもう一人の変出者がスバルとミソラの間に現れた。

「フッ……さすがですね、星河スバル……。だが現実はどううまくいきませんよ」

「なっ！！？ お前、今すぐミソラから離れろ！！」

スバルは一気に警戒心を高めてスターソードを構える。ミソラはレインの背中を見ているだけだった。

「こういう事ですよ……」

レインは指と指でぱちんと音を鳴らし、即座に姿を消した。直後、ミソラに変化が起きた。

「ミソラ……？」

「スバル君……。離れて……私の中のバリエーション・ハデスが突然暴れだして……。このままじゃ力に飲まれちゃう……」

「なんだって!!? ミソラ!!」

その間にも前傾姿勢でおなかを抑えているミソラの背中から黒い瘴気が吹き出して、その上ノイズ率をどんどん上昇させていく。

「う、ううわああああああ!!!!!!!!」

ミソラの苦痛の叫び声が戦場の大きく轟いた。そして黒い瘴気とオーラを放出しながらミソラはスバルに接近し、勢いよく殴った。スバルは完全に不意を突かれて受け身もとれなかった。そしてゆっくりと立ち上がり変化したミソラの姿を見て目を丸くした。

「ミソラ!!?」

『やべえぞ! あいつの周波数はまるっきり変わった。まるで何かのスイッチでも入ったような……』

「なんだって!!? ミソラ……」

彼女の変わり果てた姿に少年は立ち尽くすしかなかったのだった。

## Auf t a k t | 40 太陽銃VS強制解放

ねえ、スバル君。私、貴方と友達になれて本当に嬉しかった。貴方がいたから、この広大な世界でたった一人しかない貴方と出会えた偶然の奇跡。

スバル君。私は忘れないよ。私は貴方がいなくなっても貴方の一言一言が私の心の励ましだった。ブラザーバンドを結ぼうって言うてくれたのもスバル君だったね。私の一人目の大切な絆と絆で結ばれた切っても切れないブラザーバンド。改めて言わせてもらうよ、スバル君、ありがとう。これからずっと一緒大切な時間を築いていこうね。

それがミソラが過去に提唱した言葉だ。そんな優しい純粋な心を持った少女の面影は何処にもない。今は変わり果てた自分と大切な人、星河スバルだった。今のミソラはただ力へと飲まれていくだけだった。

「うわあああああ！！！！」

少女、響ミソラが苦痛の叫び声を雑音乱れる擬似空間で頭を抱えて大きく叫ぶ。上には雷が轟き、奇妙な雰囲気醸し出していく。その様子を見ていたスバルは呆然としていた。ウォーロックはまずっと頭の危険信号を激しく鳴らす。

『スバル！スバル！！』

相棒が必死に叫んでスバルを呼び戻した。そして目の色が変わる。

「……はっ！？ご、ごめん……気を取られていた」

『お前が気を取られていたのは分かる。今は集中しろ！あいつが絶対原因だ。俺の推測では、きっとあいつがミソラの中に封印されているバリアント・ハデスの能力を解放させたのかもしれない。今度こそ本気だ。お前には辛いと思うが少しだけでいい。あまさを捨てて冷徹になれ！！』

「わ、分かった！！」

『ミソラを……倒せ……。それがあいつの最前の療法だ……それしかないんだ』

ウォーロックは最後、力無くしてそう言った。スバルは覚悟してスターソードを構える。

「ウガアアアアア！！」

ミソラの澄んでいて綺麗な声が先程とは全く違い、何の声か分からなかった。もしかしたらあの声がバリアント・ハデスの声なのかもしれない。そう悟ったスバル。ミソラの背中には黒いオーラを放出していた。直後、スバルは一つの記憶が頭を過ぎった。彼からもらった異種の武器。

それは吸血鬼を倒す、もしくは浄化作用がある時空を超えた来訪者から絆と思ひ出の証にと貰った一つのちいさなハンドガンより少々、大きいサイズの銃。それが太陽仔だけが使える銃、太陽銃ガン・

デル・ソル。

スバルは稲妻のような閃きでこの状況を打開する策を見つけ出した。上手くいけば吸血鬼化したミソラを浄化させれるかもしれない。そう思いつつバトルカードを手にとった。

そしてスバルはガン・デル・ソルを召喚した。フレーム、レンズ、バッテリー、グレネードを4つのパーツが組み合わされている。フレームは実際のハンドガンに搭載されているサイレンサーなどの攻撃手段を返れる事が出来る。レンズは攻撃属性。炎や氷、光や闇などの属性を変更する。バッテリーはそのままであり、太陽光を吸収してエネルギーに変換保存する。そしてグレネード。ここは閃光弾や、手榴弾、擬似太陽一時召喚などの戦闘の応用性を広げるサポート武器だ。

『そうきたかスバル!!!』

相変わらず、戦闘時に対する閃きは凄いと関心してしまうウォーロック。

スバルは迅速に対応して、フレームはフェンサーというフレームの銃口から光の剣の形を作成するガン・デル・ソルにする。手慣れた手つき、いづどこでそんなに対応できるようになったんだと興味を持つスバル。スターソードとは違う銃のフェンサーが作り出す太陽剣。闇に染まったミソラには相性が非常にいいはずだ。スターソードとは違い、ガン・デル・ソルが作り出した太陽剣はまるで太陽のような神々しい光を放っている。

それを片手にスバルは暴れ狂っているミソラに接近する。ガン・デル・ソルが作り出した太陽剣が輝き、スバルの動きに合わせて発

光し、太陽の綺麗な軌道を描き、暗黒の閉ざされた空間を照らす。

「ミソラアアアア！」

スバルが叫び声と共に体重移動をうまく使って太陽剣を振った。勢いがのる剣がミソラに容赦なく襲い掛かる。だがミソラは一瞬で姿を消した。そしてそこは無人の空間と化し、スバルは太陽剣が完全に勢いに乗っていたためもつれるようになったが足を踏ん張って倒れないようにした。

「なっ！どこに！」

首を回すが辺りには彼女の姿は見当たらない。そして一つの静かな音がした後、突如、体に激痛が走る。体には何かの鋭利物で切り刻まれたような傷が浮かび上がっていた。太陽銃を手から離し、地面に膝について斬られた部分を抑えこむ。

「うっ……」

太陽剣を持って闇の力を身に宿しているミソラに攻撃し、浄化させようと思ったが自分の体と目と反射神経が自分よりミソラのほうが上であるため太陽剣を持つたとしても自分の目でミソラを捉えて、動きを見て太陽剣で斬ることが出来なかった。どんなにいい武器を持ってもうまく扱えなかったり、敵を倒せなかったりしたらそれはもはやただの宝の持ち腐れだ。

「目がついていかない……これが闇と吸血鬼の力……」

『スバル……』

自分がようやく救える一筋の希望の光を見つけたというのにミソラを斬りつけれる自身がなくなっていた。ウォーロックはその様子を見て、相棒として何とかしてやらねばと思った。

「うあああああ!!!」

戦場に目が血走って黒い瘴気を噴出しているミソラがスバルに容赦なく攻撃してくる。悪魔の力に完全に憑りつかれて力に己が食われてしまっているミソラ。容姿はもう悪魔そのものだ。爪も鋭く尖っている。ミソラはその爪でスバルに刻もうとする。力なく地面に挫折している傷だらけのスバルはこちらに接近しているミソラに気が付いていたが今の彼女じゃ僕の力では救えない……。何かが僕を強くしてくれる「力」がほしくなっていたスバル。僕にも……。あの闇の力があればミソラを救えるかもしれないというミソラの力に欲してしまう自分の姿があった。

ミソラの叫び声と共に爪が空気を切り裂く音がスバルの耳まで聞こえてくる。ここで自分は終わりか、という意識を抱き始めたスバル。結局自分は何にもできずにここで死ぬのかと思った。ウォーロックと、ミソラと、ソロと、暁さんや、学校の皆、数えきれないほどの人と出会えて自分は変わってこれた。けどその自分を変えて今は前向きに生きている輝かしい人生もここで終わる。僕はここで家族とさよならなんだという遺言らしき考えを抱いた。

『まだここで終わるわけにはいかないだろ!!!』

突如、ウォーロックがウィザードオンしてミソラとスバルの間に割り込み、ミソラの爪の攻撃を止めた。その様子を漠然と見るスバル。

「ウォーロック!!」

『何弱気になってんだ……。お前はメテオGでの俺らが見た夢で言っていたあの時の暁の言葉を忘れたか!!? そしてお前はなんていった!!? 答えろ!!』

ウォーロックがミソラの攻撃に必死に耐えながらスバルを必死に励ます。

「まだ…諦める訳にはいかない……。この命…燃やし尽くしてない!!」

スバルがウェーブロードに落ちている太陽銃を拾い、立ち上がった。

『立ち上がれ! スバル! 俺は長くもたない! お前の一撃で終わらせるんだ!!』

「ああ!!!!」

その間もウォーロックは必死にミソラの猛攻に耐える。自分の腕の筋肉が悲鳴を上げている。そろそろ自分も限界かもしれない。後は自分の相棒に全てをかけるしかなかった。スバルは静かに立ち上がって太陽銃から剣を召喚した。だが前回と違い、大きな光を放っていた。

「ミソラアアア!!!!」

スバルが大きい叫び声と共に太陽銃を真上へと上げた。ウォーロックはようやく本来のお前が戻ってきたかという笑みを広げた。そ



して彼らの絶妙なコンビネーションが繰り出される。

『うおおおお！ビーストスイング！！』

ミソラとウォーロックは鏝迫り合いになっていたがウォーロックがうまくビーストスイングを使い、拭き飛ばさせた。そして無防備となるミソラ。相棒の華麗な援護にスバルは涼しい笑みを広げた、そして太陽剣を右手に構える。ウェーブロードと水平面上にして思い切り振りかかった。太陽銃がミソラに完璧に直撃し、ジュウジュウという焼ける音が聞こえてミソラから蒸気が放出されていた。

そしてミソラは静かにノイズ乱れる空間で倒れたのであった。それを見たスバルは何を感じたのか……。

## Auf t a k t | 4 1 死の谷底

「うわああああ!!!!」

ウェーブロードの上で、少女の悲鳴の叫び声が悲しげに響いた。それはロックマンがハープ・ノートに太陽銃が作り出した太陽剣で斬ったことだ。太陽銃はある来訪者からの一説によると太陽銃、ガン・デル・ソルは人が吸血鬼化した際に攻撃すると浄化するという一種の能力がある。その説を信じ、ロックマンはバリアント・ハデスの闇の力に飲み込まれているハープ・ノートに斬りこんだ。

ハープ・ノートからまるで水が蒸発するような弾ける音と共に蒸気が吹き上がる。そして彼女は悲鳴の叫び声を長く響かせてその場に倒れこんだのであった。そしてロックマンはその倒れこんだハープ・ノートを見て呼吸を安定させていた。

「ミソラ……ミソラ……?」

『暴走が止まった……?』

心配したロックマンが警戒心を緩めずに太陽剣を前に構えて接近する。そして苦しそうな顔を広げて倒れているハープ・ノートに膝をまげてそっと近づいた。先程までレインによる仕掛けを施されたハープ・ノートだったが今じゃ全くの大違いだ。もしかしてこれも太陽銃の能力なのかとロックマンはそう思った。彼女の意識を失っているのに表情は堅苦しかった。その顔を見たロックマンは心配になる。そしてロックマンはそっとハープ・ノートの首に手を当てて

みた。脈がかすかに動いていた。それを感じ取ったロックマンは一安心し、緊張の糸を切らした。

「どうにか生きているみたいだったね……。暴走も収まったみたいだし……。なんとかこれで一安心かな……」

『ああ……。このまま終わればいいんだけどな……。今までみたいに必ず直前で何かあるからな……』

ロックマンも、ウォーロックも肉体的にも、精神的にも疲れ切っていたようだ。勢いよく腰を下ろして太陽剣を近くに置き、ハープ・ノートの上に寄り添った。そしてハープ・ノートを見たとき、ロックマンは悲しい気持ちに包まれる。

「ミソラ……。一人でずっと耐えてきたんだね……」

『こいつに何があったんだ？ いつの間にか俺らの前から姿を消したよな……』

「確かにそうだね。僕たちも気が付けばあの地下牢獄にいた……」

短い会話と共に二人は考え始めた。逆に考えたらますます難しくなりそうと思い、これ以上考えるのはやめたロックマンとウォーロック。

「うっ……」

一人の少女が苦痛の表情をうかべて起きた。その声を聞いた、この世で最も愛している彼は彼女が目覚めたことにより一気に心配になりそちらに視線をやる。

「ス……バル……?」

ハープ・ノートは目覚めて視界がぼやけていたが、ハープ・ノートの目に映った青い人影は間違いなく電波変換しロックマンとなっている星河スバルだった。そしてハッと息をのんでしまい、ハープ・ノートは一気に萎縮する。それを見たロックマンは涼しい笑顔を顔いっぱいに広げた。

「何も気にしないでいいんだ……。今は心を落ち着かせて……」

『やっぱりスバル君にはかなわないわね』

スバルの優しさにハープ・ノートは心が落ち着いた。今の彼は誰にも壁のない存在。そんな彼を見たハープ・ノートは彼の屈託のない笑顔と優しさに心が落ち着いた。本当に彼は私にとってかけがえのたった一人の存在と改めて見直した。ハープのスバルの優しさに感服している。

「うん……ありがとう……スバル……」

ハープ・ノートは途中、途中、言葉を区切らせていった。やはりバリアント・ハデスのリミッター解除の影響なのだろう。裏には苦しそうな表情が出ていた。だがハープ・ノートはロックマンに余計な心配をさせたくないため必死に我慢した。そう、彼女はこれ以上ロックマンに迷惑をかけたくないと思った為である。

「ねえ、何があったの……? よかったら話してくれないかな?」

ロックマンが優しく話す。それを聞いたハープ・ノートは自分の

闇に払拭された自分の不快な黒歴史をロックマンに吹聴するのか迷った。自分はスバルに助けってもらった。ならばその自分の過去を話そうと思った。

「それはね……私が……」

ハープ・ノートと言った言葉にロックマンとウォーロックは固唾を飲んで喉を小さく鳴らして次の言葉に興味を抱く。その瞬間、ハープ・ノートの心臓に強い鼓動と、全身にまるで体が憑依されて乗っ取られたような感覚が突き抜けた。その瞬間、ハープ・ノートの変異にロックマンが心配する。

「ミソラ!？」

スバルが心配して駆け寄った。その時のスバルは完全に警戒心を緩めていた。付近にあった太陽銃も拾わずに、ただ大切な人が突然の発作で無意識にハープ・ノートに近寄ったのだ。そして声をかけてハープ・ノートの安否を確認していた。

「ミソラ! 大丈夫!？」

彼が必死の声援をハープ・ノートにむけて必死に送った。だが彼女の耳には届いてなかった。その時の彼女は再び、自我をコントロールできていなかったからだ。バリアント・ハデスの力に再び飲まれたハープ・ノートはロックマンにそっと振り返った。先程とは違い、黒い瘴気も放出せずにいる。その様子を見たロックマンは無事なんだと安堵してしまった。それがスバルを死の道へと導いてしまう架け橋となる。

「よかった……突然、苦しむから心配しちゃったよ……」

そんなロックマンがバリアント・ハデスの力と自我が飲み込まれたハープ・ノートの前に呆然とたたずむ。

「ミソラ？」

もはやミソラの意志のないハープ・ノートは自分に近づいているロックマンに自分の鋭利な漆黒の尖爪せんそうで切り裂こうとした。漆黒の尖爪が黒い瘴気を纏ってロックマンにうなりを上げて襲い掛かる。それを見たロックマンは突拍子な攻撃によりかなり反応が遅れた、とっさに体を左にへと捻る。だが右腕がハープ・ノートの黒い瘴気を纏った尖爪がロックマンの右腕を深く切り裂いた。

「うっ、うわあああああ！！！！！」

黒い瘴気を纏ったハープ・ノートの尖爪がロックマンの右腕を切り裂き、辺りにロックマンの真紅の血液が飛び散り、ウェーブロードに落ちて小さく弾ける。そしてハープ・ノートのは自我がコントロールできなくなってしまいどこかに姿を消してしまった。

『スバル！大丈夫か！？』

「うう……右腕の感覚がない……体もなんかおかしく……」

ロックマンの深く切り裂かれた黒く染まった右腕の傷口から滝のように血が出血している。このままでは出血多量で死ぬかもしれない。そんな状況に陥ったロックマン。

「フッフッフ、貴方はその攻撃を喰らってしまいましたか……」

突如、右腕から血を流しているロックマンの目の前にレインの姿が現れた。その姿を見たロックマンは太陽銃を右手に構えようとしたが激痛により持てなかった。その間にも血は流れおちていく。

「何が目的でいいたいんだ!!?」

「ハープ・ノートの黒い瘴気を纏った攻撃を喰らってしまった。ということは君がどうなるかわかるかな……?」

『こいつ、何がいいたいんだ!?!』

「フッフッフ、それは貴方が絶望の淵にへとたどり着いてからのお楽しみですよ」

レインのはっきりとした明確じゃない言い方にウォーロックは腹を立てる。だがそんな調子づいたレインに気は取られている暇はなかった。ウォーロックの相棒、ロックマンは右腕から血を大量に流していたからだ。気が付いたらウェーブロードの周りはスバルの血で染まっていた。

「うう……なんだか周りが暗くなって……」

『スバル!?! どうしたスバル!?! 気をしっかり持てスバル!!』

ウォーロックが必死に叫び、ロックマンを呼び戻そうとしたがロックマンは出血多量で倒れこんでしまった。そう、彼が覚えていたのは自分が血をたくさん流してウェーブロード上で倒れこんだところまでであった。

## Auf t a k t | 42 悪魔の落胤

雑音<sup>ノイズ</sup>乱れる闇の空間のウェブロード上で、ここに一人の瀕死状態に陥っている右腕からハープ・ノートによる漆黒の尖爪の洗礼を喰らって、血を流しその場に倒れこんでいる少年の姿があった。その少年は星河スバル。今はウォーロックの力を借りて電波変換をし、ロックマンとなっていた。

「うう……い、意識が……」

ロックマンの目には辺りが歪んで見える。もう自分の体がおかしくなっていることが薄々分かっていた。なんだか自分の体が自分のものでないような感覚がする。腕を動かそうと自分の左腕の筋肉に信号を送っても全く微動だにしなかった。そして意識が掠れていく。

『スバル！スバル！くっそ、こいつの生命が消えかかっている……。しかし、レインの言ったあの言葉の意味は一体……。俺の体もなんか違和感を感じるし……。一体これは……』

ウォーロックはそう察していた。レインが去り際に言った絶望の淵に辿り着いてからどうなるかウォーロックは気になった。その絶望の淵の辿り着いてから自分たちは死という生命を奪われるのか、それとも生きるという生命が残り続けるのか。そしてウォーロック自身も自分の身体異常に気付いた。

そんな二人は体温が低下し、意識が異世界へと飛ばされる。

「うう……」

少年、星河スバルが目覚めた。目覚めの覚醒をした直後に自分の



右腕に目をやった。だが爪で切り裂かれた傷の痕跡は全くない。綺麗な右腕でしっかりと自分の右肩にくっついていた。

『スバル、大丈夫か？』

すると、相棒のウォーロックが隣でスバルのハンターV Gからウイザードオンしてきた。そしてスバルを心配するように話しかけてくる。

「うん、何故か怪我した所が痕跡無しに消えているんだよね」

スバルは自分の右腕を摩りながら言う。その後、二人は最も重要な事に目を当てた。

それはここが何処だということ。過去にも自分がそんな感覚に襲われた事があった。そう、あれはムー大陸の独裁事件以来。ウォーロックが誤ってオーパーツというムー文明の古代の遺産を飲み込んでしまい、自我がオーパーツの巨大な無限の力に飲み込まれそうになった時である。直後、自分の身体に闇の黒煙がとりついた。

「うあああああ！！」

ロックマンは悲鳴を上げた。まるで意志のある黒煙が自分の身体の内部に侵入し、テレパシーか何かで自分の頭の中に直接声が聞こえてきた。

全身の身体が震える。自分の意志で震えている訳ではない。先程の黒煙のせいか、自分の身体が喰われていく感覚がした。意志も身体も信念も。全てが闇に喰われたロックマンとウォーロック。レインが去り際に言った意味はこういう意味だったのだろう。そして意志のある黒煙は体内に侵入し、侵食したスバルにこう言った。

『ヤミノ……チカラウケトルガイイ……』

闇の黒煙はまるで悪魔の声だった。人じゃない声でスバルの頭に強く響いてきた。

闇に取り憑かれたロックマンはもはや世界を三度も救った奇跡の青い流星という面影は何処にもなかった。

そう、闇と吸血鬼の力によって取り憑かれたロックマンは全身が黒く染まり、僅かだが青の色は残っていた。それでも全身は獣と吸血鬼のような風貌だった。

歯が尖り、両手、両足の爪には尖った爪が生えていた。肩にも爪のような鋭利物がついた。全身にはまるで自分を取り巻くような細い赤色の線が自分の身体に取り憑いている。周囲から見れば、地獄で現世から来た人を迎え入れる獣の番人だった。

「グウウウウ………」

遂に闇と吸血鬼の力に自我が完全に飲み込まれ、身体と意志が支配下に終われたロックマンとウォーロック。青い世界の英雄が黒い世界の破壊者となる誕生の瞬間だった。

悪魔へと変貌したロックマンとウォーロックを見て、今だその場で待機していたレインは地獄に堕ちた悪魔の英雄の誕生として拍手喝采を送っていた。

「ハッハトハ、ついにロックマンも闇に染まったか」

などとレインは拍手をしながら不適な笑みを顔一杯に広げる。そして少しずつ闇に堕ちたロックマンに接近する。

「オオオオオオオ！！」

自我を失ったロックマンは近付いてきたレインに無意識に爪を大きくたてて斬りこんだ。だがレインはそんなことは承知済みというような動きであっさりと回避した。そして自我を失ったロックマンは無人の空間に思い切りたてた爪でウェーブロードを破壊した。そしてその部分がノイズの影響なのだろうか。崩壊していた。

「フッフッフ……素晴らしいな、さてこのロックマンをどうする？」

レインはそれを隣にいる謎の少年に話しかけた。それを聞いた謎の少年はレインが自分がここにいたのかという事に気づき、目を思わず丸くした。そうこの謎の少年もスバルと同じで時間帯で擬似空間に乗り込んでいた。

「うーん……。とりあえず町に開放して暴れさせましょうか？」

「そうだな……。こんな狭いような檻の空間じゃ闇に落ちたロックマンの完全な能力が分からないからな。そういえばそうと、あの末裔は排除してきたか？」

レインがああのメソポダミア文明の末裔の抹殺処理を頼んだことが自分の頭をよぎり、仲間がそれを達成していたか気になり、仲間質問した。それを聞いた彼はこう返事をする。

「あ、はい。微かに息は残っていましたが、あの様子だともうそろそろ死ぬなと思い、ほっといいききました」

仲間がそう言ったのを聞き、小さく舌打ちをする。何故、息がな

くなるまで殺さない。何故、ほおっておいた、と思ったレイン。だが仲間の闇の攻撃を喰らったらあの末裔も闇に心と体が汚染されるからいいだろうと思い、気を取り直して闇に落ちたロックマンに向き合った。

ロックマンの行動はもはや意味不明だ。何をしたいのかが分からない。彼の目に映っている世界はなんなのか、何がたくて攻撃しているのか、まるで檻から出たくて暴れている獣のような感じだった。今、彼の意志と彼の意志はどうなったのか。闇に堕ちたロックマンは今後、どうしていくのか。そんな闇の擬似空間の中でロックマンの悪魔の声が無情にも響き冴えわたる。

「とりあえず開放しますか？この擬似空間から……………」

「そうするか。さて闇に堕ちた悪魔と化した世界の英雄。ブラッドクロスロックマンの誕生だ！さあ、世界を破滅か創生へと導くショータイムが今、始まるぞ！！英雄が闇を手にしたその瞬間をご覧になるがいい！！」

レインがそういつつ、それを聞いた仲間は苦笑い。レインは大きな掛け声と共にこの擬似空間に大きな穴をあけて、世界の理へとつながるゲートを開いた。入ったときと同じでゲートの周りに罅割れが入っていた。ゲートの先は暗かった。恐らく、吸血鬼の力は昼間では大きく弱まるため、夜の所を選んだのだろう。そしてゲートの出口を見たブラッドクロスロックマンは獣のような叫び声をあげて音速の速さで音速の速さでゲートの外へと出た。

そのゲートの先に広がっていたのは、深夜の時間帯となっているニホンだった。深夜は最も夜が深く吸血鬼の力が最も強まる時間。

ここは吸血鬼化したブラッドクロスロックマンにとっては最高の破壊場所だった。そして、日本の○○地方の海岸付近にいたブラッドクロスロックマンは世界の英雄から世界の破壊者の落胤となる瞬間だった。

## Auf t a k t | 43 英雄から破壊者へ

闇に堕ちたロックマンことブラッドクロスロックマン。彼の青い流星の姿はない。爪、牙は鋭く尖り、目は黒く漆黒の冷たい目をしていて。優しかった彼の面影は此処にはない。ただ目につくもの全てを破壊する化身となっていた。今が彼が、闇に満ちた力をニホンに知らしめる時が来始めたのだ。それが起きることをニホンの国民はまだ誰も知らない。ただ当たり前の毎日を過ごしているだけ。それがこの悪魔堕ちしたロックマンの手によって未来が絶望と変わるか、もしくは生という希望に変わるかの分岐点にいた。

「ウオオオオオオ!!」

悪魔堕ちした青い流星、シューティング・スター・ロックマン。現在、悪魔と化したロックマンはレインと謎の少年の気まぐれにより擬似空間から解放されてニホンの海岸付近にたどり着いた。そう、破壊者としてのやるべき事はたった一つ。それはそう、怒りによる破壊だ。破壊は悲しみを、憎しみを呼び、その道の跡は何も残らない。残るのは負の感情だけだ。

ニホンは現在深夜二時。大体の人が寝静まっているだろう。いくら都会でも夜中の二時であれば大半は睡眠という眠りの世界に誘われているに違いない。せいぜい起きてるといったら夜中の出勤のサラリーマンとか、残業をした社員ぐらいだろう。そんな人々が寝静まっている漆黒の世界での絶好の好機を見逃さないレインと謎の少年。夜の時間が一番深い時間帯に設定したのがたまたまニホンだった。

そしてレインが名づけたブラッドクロスロックマンが猛々しい雰

困気を醸し出しつつ動き出す。目はまるで見たものを震え上がらせる、拒絶させるような冷たい眼をしていた。希望に満ちた瞳ではない。絶望に満ちた黒い瞳だった。コンビナートがある海岸付近に維持空間から現実世界に引きずり出されたロックマンは怒り、苦しみ、憎しみ、もがき、謎の囚われし物に憑りつかれていたようだった。手首についているウォーロックが発散する独特の周波数も察知できない。こんなロックマンがいたということを一体、誰が予想するだろうか。破壊が、運命が刻一刻と近づいてくる。

そしてブラッドクロスロックマンが自分の長く、鋭く伸びた鋭利な腕についている爪を夜空に上げた。夜空に浮かぶ一つの黄色い月がブラッドクロスロックマンの尖爪せんそうの綺麗で鋭い爪に光が反射させ鋭さを物語る。月の光は薄暗いのにブラッドクロスロックマンの爪の月光を反射した。右腕に尖った爪を上げて向いた先は。

———海だった。

ブラッドクロスロックマンが右腕を上げてから異常なほど時間が長く感じられた。そう1秒が10秒ぐらいの長さに感じられた。だが実際はブラッドクロスロックマンの猛々しさに己が飲まれてたからそう感じるのだおる。夜空の月の月光が爪に当たり乱反射する。そして静かに強く、全てを薙ぎ払うような感じで海に向かって振り下ろされた。ブラッドクロスロックマンの爪から振り下ろされた無差別な一撃。それは一瞬で海を切り裂き、真っ二つにした。

ザザア———。

ダッパ———ン。

波が綺麗に海の果ての先まで綺麗に真っ二つに割れてその空間が見えた。そしてその開いた空間を埋めようと海がその無人の空間を

埋めていく。そして海が割れたことにより大きな津波が起きた。津波はあらゆる方向へ無理矢理力でねじ込みの飲みこんでいく。その影響で大きな鉄筋棒や重機が置いてあるコンビナートはブラッドクロスロックマンが引き起こした津波により一瞬で飲み込まれた。相当な大波。

ブラッドクロスロックマンが引き起こした津波の影響でコンビナートは一瞬で破壊し流された。勿論その場にいたブラッドクロスロックマンも影響の可能性もあると考えられるがブラッドクロスロックマンは津波に飲み込まれたのに何事もなかったかのようにただずんでいた。そう彼は津波が来ても、その悪魔から受け取った強靱な力で津波から足を踏ん張って流されないようにしていたのだ。そしてコンビナートに異常があると察知したのか、警報機が鳴っていた。赤いランプを光らせながら音を甲高く発生、と同時に通報が送られた。

その破壊の一撃ののろしを上げたロックマンは一瞬で姿を消して中枢都市のほうへと向かっていった。それはそう、自分たちの故郷への方向だった。ブラッドクロスロックマンが自分の手によって町を破壊する。

「ウウウウウ………」

舞台は都心と移り変わる。

神速の速さで都心の高層ビルの屋上に辿り着いたブラッドクロスロックマンが低くて悪魔の小さいうなり声を長く、そして辺りにいるものを拒絶する感じで泣いた。そしてここもまた神速の速さで高速移動し、地上へと到達する。驚くほどの速さだ。恐らく今の彼には過去の自分を凌駕する速さをもっているだろう。

彼は今、市街地のウェーブロード上にいる、場所的にはロップン



ドーヒルズの付近だろう。沢山の発展した高層ビルや道路、次世代の車が深夜二時を経過しても道路が若干混雑していた。そしてブラッドクロスロックマンがそのロップンドーヒルズ付近にある市街地のウェーブロード上から降りて、再び自分の拳で地面に向けて静かにゆっくりと破壊の洗礼を繰り返した。

ブラッドクロスロックマンが繰り返す破壊の一撃、コンクリートで綺麗に埋め立てられた道路はブラッドクロスロックマンの無限で強大の悪魔の力によって地響きをたてながら辺りに轟音と地鳴りをまき散らした。そして町が一部破壊されていく。そして町がブラッドクロスロックマンの手によって破壊され、崩壊していくことに人々は目覚めてあわてて家を飛び出し退避する姿が見受けられた。悲鳴を上げ、もしくは崩れる家の生き埋めになる市民。無残で無慈悲な攻撃が繰り返された。ロックマン、星河スバルの意志じゃない。そう、悪魔の意志によって――――。

「フッフッフ……素晴らしいな。あのロックマンの速さを見たか？ デッド……。彼のスピードは断然に上昇した。恐らくは3倍の速さだろう。敵ながらほればれする身体能力だ。だがその速さに体が持つのが気になるが……。お前は思う？」

レインがかなり高い位置からウェーブロードに乗って謎の少年と暴れるブラッドクロスロックマンを見ている。どうやら彼らの目的はブラッドクロスロックマンの実力試しらしい。

デッドと呼ばれたレインと同じ吸血鬼型電波体になっているこの少年。本名はデッド・ステリアスという名前らしい。見た目はやはり吸血鬼の同じ構成員として爪や歯が尖がっている風貌は似ていた。

けど彼の特徴はその部分だった。小柄な体系な反面、凄腕の力をしている男だった。爪は真っ黒に、全てを切り裂くような尖爪をしていた。振れただけで皮膚や肉が切れそうな感じを醸し出しているデッドの爪。

まさに危ない、触れてはいけない男のようだった。彼らはずっとロックマンを見つめていた。冷たい黒い目で。

――――さらに同時刻、WAXAに一つの緊急信号が届く。それは無論、ブラッドクロックマンが破壊した子自発的に津波を発生させてコンビナートを破壊し、それが引き金となり警報が鳴ったと同時に通報し、サテラポリスを伝って、WAXAにまで信号が届いた。WAXAニホン支部に緊急信号が届くとは相当の事態を示していることになる。そう、信号と同時に一つの写真も送られてきた。それにはブラッドクロックマンの写真が袋に包装されて、添付されている。

時刻は深夜二時を回ったところ。WAXAには残業をしているメンバーしかいない。だから暁など、主力メンバーは寝ていた。だが緊急信号が届いたことにより、待機している暁達にも強制的な仕事が入る。当たり前前に寝ているメンバーにとっては睡眠中に突然の起床なんてもつてのほかだ。だがニホンの危機となれば仕方がないことだった。

ビー！ビー！ビー！

WAXA内部に取り付けられている警報がなった。それと同時に宿舎に待機しているメンバーが強制的に起こされて、と同時に警報

が耳に届き、急に緊張が全身を駆け巡り、一気に目を覚まさせた。暁も眠たそうな顔をしていたが警報の音を聞いて緊急事態だと心を落ち着かせながらWAXAの指令室へと向かっていた。そう、変わり果てたヒーローをこの目で見てしまう暁だった――――。

## Auf t a k t | 4 4 茜色に染まる一日

ビー——！！ビー——！！ビー——！！

WAXAニホン支部に緊急事態を示す信号と警報が鳴り響く。それと同時に慌ただしく動くWAXAニホン支部の構成員。緊急事態と知らされて急な出動の為であろうか、社員達の表情には睡魔の表情が浮かんでいた。だが構成員の人たちは睡眠の欲求に打ち勝つように自分の頬にパチンと手で音が立つくらいあてて自分の目を目覚めさせて、指令室のモニターの画面に目をあててキーボードなどの出力装置機械に手を当てて情報処理をしていく。

その構成員の中にももちろんWAXAの主力的構成、暁シドウの姿もあった。彼もやはり緊急事態の夜中の臨時対応により眠たいのだろう。服装には若干乱れがあり、片手にはなぜかうまい棒があった。何故うまい棒が暁の手にあるのか。それは暁がうまい棒をこよなく愛する人である。数日前に彼ら暁率いる遊撃隊メンバーはロッキマンが無意識に擬似空間に飛び込んだ後、暁達は足取り重く、ナスカからWAXAニホン支部へと戻っていた。そう、ロッキマンを失ったことにより負のオーラ全開に発散させて戻ってきた。そして英雄が消えたことにより士気も下がっていたのだ。そしてその士気下がった状況でさらに陥る状況に立たされる。

「一体どうした!？」

慌ただしく出てきたWAXAの長官が出てきた。そしてWAXA

独特の服装を若干乱しながら慌ててモニターに映し出された映像を見た。それを見た瞬間、長官や暁達は凍りついた。それは、そう。変わり果てたロックマンの姿が映っていたからだ。それを見た一同は固唾を飲んで喉を鳴らし、一度、目をつむってみたが映像に映っている光景は変わらなかった。

「あれは……スバル……ロックマンなのか……？」

暁が映像に映し出された状況は信じきれないのか疑いを続ける。それを思っているのは全員だ。あの英雄がこんな残酷な行為をするはずがないと誰もが思っている。まして地球を救ったあの英雄が破壊活動するなんて一体だれが考えるだろう。

「ロックマンかも……知れないな……。でもなんなんだ？あの悪魔みたいな変貌した姿は？ロックマンの中に宿った新たな力なのか……？」

長官が映像を見ながらそう言う。それを聞いた暁も納得できたが、映像からしてロックマンは力をコントロールできてないように見えた。彼の明るい希望の瞳もないし、彼独特のバトルスタイルもなかった。暁は確信できた。悪魔にとりつかれてしまったと。

「スバル……」

暁は目の前の光景に無慈悲な気持ちでいた。あの時、自分がもっと早く気づいてメンバーにも気を遣ってやればスバルにあんな目にあわせなかったと自分を責める暁。ロックマンが苦しんでいるのに自分は何にもできない。ただ見ているだけ。過去にもこんなことがあった。そんな自分が嫌なんだと、あの日に決意したことを俺は忘れたのか……。結局、メテオG事件にも最終的に自分の事ばかり

でロックマンにきついことを押し付けてしまった。そんな自分が嫌で嫌で仕方なくて強くなろうと思った自分。そんなことを忘れていた過去の気持ちに囚われた暁。

「検査完了しました！周波数は全く違いますが、わずかにロックマンが放出する彼独特の周波数を察知した結果、トランスコード003、間違いなくロックマンです！！」

と、モニターで情報処理をしていた構成員がそう言った。それを聞いた一同の間に動揺が付きぬける。やはりロックマンかという声が多数聞こえてきた。予想の中した暁は顔一杯に曇りの表情を広げさせる。

「チツ……やはりスバルか……出来ればスバルであってほしくなかったんだが……」

暁は無慈悲な気持ちでそう言う。やはり自分の事が悔しいのだろうと思う暁。そして暁は一人で行動に出始めた。

「長官……。今回は俺一人で任せてほしいんだ」

「何を言っているんだ！？少しでも仲間が増やしていったほうが！？」

長官は暁の無茶な発言に手間取った。あの暴虐な悪魔になったロックマンに一人でどう立ち向かえと思った長官。この状況でたった一人で暁を平和から混沌と化した戦場へ送り込めば間違いなく骨の一本は折れて帰ってくるだろう。だからこそ、この集めた仲間でロックマンを救うのが本来の得策だ。だがあまりにも危険性が高すぎると察知した暁はこれ以上迷惑をかけれないと思ったのである。

「いや、あまりにもあいづらには危険性が高すぎる。これ以上、仲間を消したくないんだ……」

「…お前が消えれば、あのロックマンと同じような気持ちに陥る人だっているんだぞ。それでもいいのか？」

長官が暁の覚悟の大きさを悟ったのか小さな声で話した。

「ええ。俺はもともと一人だったし消えても誰も悲しむ人はいません。血のつながった人もいないですし……」

「でも…ここはお前の家で家族なんだ……お前がどう思っている。必ず生きて帰ってきてな」

「ああ……」

そう言い、長官は決意をした暁の大きな背中を見つめてWAXAの出口へと向かっていくのをただ見ていたのであった。長官は必ず生きて帰って欲しいと神に祈りをささげた。そして暁はWAXAの正門ゲートを潜り抜けた。その先には――――。

「よし！早くいこうぜ！」

そこにはレイの姿。というより星河スバルを除く、全員の姿がWAXA入り口前にいた。若干だが睡魔の表情が浮かんで見えた。

「お前ら……一体どうしたんだ？」

暁が抜けた表情で三人を見つめている。現在深夜2時40分を針

が過ぎた深夜まっただ中なのに。この深夜の時間で恐らくかなり眠いはずなのにニホンの危機と仲間の危機にここまで駆けつけた。

「暁さん、一人でスバルさんを助けにいくなんて水くさいですわよ。私たちは仲間じゃないですか。なんでも一人で解決してはいけませんよ。時には頼るのも必要です。それが隊長の特権じゃないんですか？ 暁さん……」

リサがそう言った。それを聞いた暁は小さな笑みを漏らして下を向いた。それを見た三人も涼しい笑みを広げる。

「頼む……。ロックマンを……。俺の……。いや、俺たちの大切な仲間な星河スバルを助けるのを手伝ってくれないか？」

「もちろんだぜ！」

「もちろんです！」

「フッ……」

WAXA遊撃隊としての隊長である暁がリサから聞いた一言により、自分は仲間に頼ることを忘れていた。だから隊長として、WAXA遊撃隊の一員として、英雄を地獄の淵から救おうという思いを声に乗せて暁は仲間に頼んだ。それを聞いたWAXA遊撃隊の一員はもちろん、三者三様の即答だった。どうやら皆、救いたいという気持ちは同じなのだろう。その即答を聞いた暁は何故だか心が落ち着いた。

そして三人は漆黒の深夜の世界でトランスコード（電波変換）をした。そして報告があったロップンドーヒルズ付近の住宅街へと4つの希望の光を放ちながら目的の場所へと思いを馳せて向かってい



った。勿論、その帰りを待っている家族、仲間、友達もだ。一人一人が『彼（星河スバル）』の帰りを待っているのだから。

———そして彼らは辿り着く。ロップンドーヒルズ付近はずれにある住宅街。そこには、変わり果てた瓦礫の山と化した中枢都市と、奇妙な瘴気が放出されている空と、慌ただしく悲鳴を上げて逃げる市民と、黒いロックマンが王の風格をかもしれないがたずんでいた。その時、彼らに映っていたロックマンは災いを誘い込む『悪魔』に見えたらしい。それが災いの未来へとつながる架け橋となった。

## Auf t a k t | 45 墮落

アシッド・エース率いるWAXA遊撃隊は決死の覚悟の基の元、ようやく漆黒の雲と黄土色の満月が輝く夜空の下、ロップンドーヒルズ付近の住宅街に辿り着いた。それぞれが電波変換し、戦いに備えるように待機していた。コスモウェーブを経由して迅速に移動し到着した瞬間、そこには無慈悲で非情の町の姿へと変えていた。

そこにあつた町の姿はこんなだった。

——綺麗に埋め立てられた道路が決壊。

——道路沿いに並んでいる民家が崩壊。

——逃げ惑う市民と、人の体に流れる鮮血を放出し倒れこみ、それでも逃げようと、生きようとする人々の姿。

——そして破壊された住宅街の土煙立ち込める中に月の淡い月光を浴びながら佇む一つの影。

こんな最悪の光景を見てしまったら忘れようとしても忘れることが出来ないだろう。それほど頭の中枢部に叩き込められる酷い光景だった。平和だった面影はどこにもない。まるで戦時中のような光景だった。そしていよいよ悪魔堕ちしたブラッドクロスロックマンとWAXA遊撃隊のファーストコンタクトが交差する。

「ウウウウウウ………」

ブラッドクロスロックマンは低い唸り声を長く上げた。その声が戦いの幕をあける狼煙だった。ついにWAXA遊撃隊たちはロックマンじゃない独特の謎の周波数を察知した。尋常じゃない。殺気の

ベクトルがおかしい。今までで相対したことのない能力のオーラだった。そして戦闘豊富な剣の熟練者、片手に煌剣きらけんエクスカリバーを構えている若き末裔、ブラッドクロスロックマンに最大限の注意を向けているブライが先陣を切っていた。右手に持っている鞘に納められたエクスカリバー。どんな仕組みなのかは謎だが、炎をコントロールできる仕組みがあるようだ。

「あれが……悪魔と吸血鬼へと変貌したロックマンか……」

ブライはエクスカリバーを納めている剣の柄に手を当てて、腰を低くし警戒心と感覚を研ぎ澄ませ唐突のある攻撃に対応しやすいようにした。勿論、ほかの面子も。そしてWAXA遊撃隊セオリの定石、各自散開して巻き添えという最悪のパターンを消した。

「ロックマン……」

「あれが……」

「スバルさん……」

ブライを除く、アシッド・エースたちは変貌したブラッドクロスロックマンに呆然としているのか、もしくは恐怖で足が地面と接着剤で固定されているみたいに動けなかったのかのどちらかだった。それぞれが所持する得物も構えているのも忘れてしまっていた。そんなブラッドクロスロックマンを見ていた三人は三者三様の声でスバル、もしくはロックマンの名を力なく呼んだ。けど。何の変化もない。当然の事だ。

そして遂にブラッドクロスロックマンが煙の中から全身を現した。そしてWAXA遊撃隊と悪魔のロックマンの出会いが運命を変える――。

「ウオオオオオオ!!!」

アシッド・エースやブライ達の姿を見たブラッドクロスロックマンは手に生えている長い5本の指の先端から伸びている爪を手いっぱいに広げた。広げたと同時に月の月光が反射する。切れ味がいいという証拠を醸し出すと共に斬られたら命はないという恐怖感も醸し出す。ブラッドクロスロックマンの猛々しい雰囲気と爪による牽制攻撃が二重になって重圧がブライを除くアシッド・エース達にのしかかってきた。こんな状況なのにブライはより手強い強敵が来たという歓喜の笑みを広げながらエクスカリバーの鞘を抜き、刀身を空気に触れさせた。その瞬間、空気に触れた刀身はまるで空気に含まれている酸素を元に剣は炎を纏い、威力を向上させていく。

そしてブラッドクロスロックマンは大きくこちらに自らが漆黒の槍となって空気を切り裂くような神速の速さでこちら側に急接近してきた。神速の速さにブライは以外を除くアシッド・エースたちはおもわず呆気を取られてしまい、反応が大幅に遅れた。回避しようとしたときは自分の体は宙を舞っていた感覚だった。全身いは鋭利物で体が刻まれたような痛い感覚が全身を突き抜ける。ブライを除く、アシッド・エースたちは肩から地面に叩き付けられ肺にたまっていた空気が無理矢理押し出されるような感覚がして呼吸がしづらなくなった。ちなみにブライは垂直跳びをして無防備、大胆に接近してきたブラッドクロスロックマンに対して簡単に対応できたのであった。

倒れた三人の中からアシッド・エースがどうか自分の得物のロックオンソードを杖代わりにしてどうか立ち上がる。ふらふらと全身には鋭利物でひっかかれた傷が浮かんでいた。どうやらアシッド・エースはあたりどこが運よく軽傷の部分だったらしい。それでも一撃でも喰らえば立てなくなる状態だった

。立ち上がったアシッド・エースはブラッドクロスロックマンの未知なる強さに思わず固唾を飲んでしまう。全身にはいつ死ぬかという緊張感が駆け巡っている。勿論、ブライにも。

「来るぞ!!」

破壊の英雄、ブラッドクロスロックマンが一気に接近した。目標は一撃を与えたアシッド・エース。自分に向かって勢いよく向かってきた。アシッド・エースは全身に駆け巡る切り傷の痛みに耐えながらブラッドクロスロックマンの動きに対応する。ロックオンソーダを自分の前に構えて対応しやすいようにする。ブライはエクスカリバーを破壊し、凹凸の激しい地面と水平面上にする。

アシッド・エースは背中を駆け巡る悪寒に耐えながらブラッドクロスロックマンに動きに対応する。まず右から左へと美しい曲線を描きながら夜空に浮かぶ満月を背にアシッド・エースに向かって爪を大きく振り上げた。そして空気を切り裂く轟音と共に自分にへと襲い掛かる。だがアシッド・エースはそのわかりきった行動に冷静に対処した。緊張と悪寒で足が地面とくっついたよううまく動けなかったが、ただ横に動いただけで簡単に対処できた。

アシッド・エースが回避したことにより、そこに無人の空間が生れて、ブラッドクロスロックマンの鋭い爪の洗礼が無人の空間と化した地面にへと浴びせられる。地面と爪が激突した瞬間、大地はブラッドクロスロックマンの爪によって引き裂かれた。大きくえぐれた地面。威力と鋭さの強さ、大きさを物語る。それを見て思わず死を感じるアシッド・エース。

『シドウ、大丈夫ですか？脈拍、心拍数と共に安定してませんが…』

……』

「大丈夫だ。極度の緊張のせいだ………」

普段、冷静なアシッド・エースがここまで心臓の鼓動に早鐘をうたせてしまっているのだ。しかも余計な緊張は体力をいつもより余計に奪ってしまう。このままではまずかった。

「うおおおおお!!!」

ブラッドクロックマンがアシッド・エースに向けて攻撃した渾身の爪の一撃をかわされたことにより力の制御が<sup>コントロール</sup>できずにもつれこんでいた。やはり、悪魔にでも制御できない区分もあるのだろう。隙が出来たブラッドクロックマンにブライは紅蓮の紫の炎のエクスカリバーを振り上げた。そして小さな吐息と共に叫んで力いっぱい振り下ろされる。

容赦なくブライの腕から振り下ろされたエクスカリバーは隙だらけのブラッドクロックマンの背中に完璧な一撃を食らわした。その瞬間――。

「うわああああ!!! た、助け――――」

紛れもなくその一瞬の叫び声は星河スバルの声だった。それを聞いたアシッド・エースとブライは思わず足を止めた。彼はまだ完全に飲まれたわけじゃない。まだ彼の意識が残っているならその絶望の淵から救える、まだ手遅れではないと思った二人。ここから身をかけたスバルの防衛戦が始まる――。

## Auf t a k t | 46 人間だけがもつ可能性の神

時は深夜四時。夜が少しずつ明るくなっていく時間帯。ここロッド・ポンドーヒルズは静寂の町へと変貌していた。いつもは点灯している町の街灯も無残に破壊されている。それは、悪魔に支配された世界の英雄、ブラッドクロスロックマンのせいだ。悪魔に支配されたブラッドクロスロックマンは自分の意志というものを失い、力に翻弄されている。そしてそれを止めようとして駆けつけたのがWAX A遊撃隊である。星河スバルという遊撃隊の中心的メンバーがいないこの遊撃隊。何の意図があって現れたか不明のロックマンをここで捕まえようとしている。

だがブラッドクロスロックマンの力は遥かに前の能力をすべて凌駕していた。速さ、力、潜在能力、そして自然治癒能力。全てが明らかに上がっていた。ロッド・ポンドーヒルズに駆けつけたアシッド・エースとブライはなす術もないまま防御態勢に入りかけていた。だが一矢報いたらブラッドクロスロックマンの中に秘めたる星河スバルの意志が出てきた。その声を聞いたアシッド・エースとブライは確信した。彼の中にまだ彼の『心』がまだ残っていると。まだ存在していると。

「ロックマンはまだ生きているみたいだな………」

「ああ……だがどうする？ どうやって救い出す？」

アシッド・エースとブライを漆黒の瘴気を放出してこちらを鋭く冷たい眼で見つめているブラッドクロスロックマン。どうやらあの不意の一撃が頭に來たのだろう。その殺気が満ち溢れたロックマンを見つめただけで背中に悪寒が走ったアシッド・エース。震える手

を押さえつけてロックオンソードを根性で持つ。ブライは喉を鳴らしてエクスカリバーを構えている。そしてエクスカリバーを収めている鞘からエクスカリバーの刀身を出す、剣が酸素に振れたことにより発火反応を起こして炎を身にまとう。

「とりあえず朝まで耐える……。持久戦だ。奴を抑え込んで朝になるまで待つ。悪魔は太陽を最も嫌っていると聞いたことがある。ならその一説を信用して、朝になるまで耐久だ。厳しいだろうな……」

「中々無茶な要求だな。数時間もあいつと戦えと。フッ、面白い……。日の出の時間はいつだ？」

「日の出は五時四八分だ。だから今の時間と計算するとおよそ一時間半……。時間的にはかなり厳しいぞ。それでもやるのか？」

「ああ、やるさ。奴との決着はまだついていないからな」

アシッド・エースはその無茶な作戦を提案したがブライはその無茶な作戦に対して受け入れているようだった。ブライはよっぽどの強くなったブラッドクロックマンと自分の力がどこまで通用するか試してみたいのだろう。自分の最高の得物、エクスカリバーを柄を強く握っていたブライをアシッド・エースはそれを見て思わずこんな状況なのに笑ってしまった。やはり強い敵を相手にすると燃えてしまう。そんな男なのだ、ソロというムーの末裔の少年は。

そして彼の心を救いだし、その悪魔みたいな体をした闇の力に太陽の力で浄化すれば彼の身が元の星河スバル、そして青い流星に戻るかもしれない。だがもしかしたら彼の身にダメージがあるかもしれないがなりふり構っている暇はなかった。どっちにしろやらなくてはやられてしまう。それが戦場での戦いの掟。隣には死があり、隣には生がある。生きる為にアシッド・エースはその道を選んだ。



だがブライには話していない吸血鬼に対しての知識はまだある。  
だがそれはゲームやTV番組のような特集のものの簡単な知識だ。  
それは、

——吸血鬼は十字架や太陽の光に対して弱い。

——吸血鬼は胸に杭を打たれると死ぬ。

——吸血鬼は死ぬと『灰』になる。

——吸血鬼は人間を噛むとその噛まれた人間は吸血鬼化する。

そして吸血鬼は異常なほどの回復力。

これぐらいしかアシッド・エースは知らなかった。ありきたりな知識とはいえ、相手が吸血鬼化しているロックマンに対してどんな些細な知識でも気にかけていた。最も気になったのが吸血鬼は死ぬと灰になるということだ。もしかしたらロックマンも……、そんな事を気にしながらロックオンソードを構えるアシッド・エース。

「いくぞ！」

「おう！」

少年は決意を決め、敵ではあるロックマンを救おうとブライはエクスカリバーを構え右にへと動きだし、青年は仲間を思いを背にロックオンソードを構えて左にへと動き出した。左右挟撃。二つの光が綺麗な曲線を描く。前の空間ががら空きとなりブラッドクロスロックマンは左右から来る敵に対して一瞬迷う。だがブラッドクロスロックマンはアシッド・エースとブライをギリギリまで引き寄せて自分の最短距離にまで近づいた。

「うおおおおお！！！！」

「はああああああ！！！！」

アシッド・エースとブライは自分の剣が届く範囲に近づいたら反対側にいる味方にぶつからないように気をはらいながら剣をブラッドクロスロックマンに向けて思い切り振った。剣が轟音を立てて接近してくる。だがブラッドクロスロックマンは野生の本能なのか、アシッド・エースの剣をすり抜ける回避し回り込んだ。だがアシッド・エースもそれぐらいは察知していたのだろう。人間の読心術の本能が現れた。後ろを取られてもむしろスピードを上げて反対側にいるブライに向かった。そして反対側にいるブライはアシッド・エースとすれ違うようにしてアシッド・エースの後ろにいて攻撃態勢にいたブラッドクロスロックマンに炎獄の炎を剣に纏っているエクスカリバーを洗礼をあげさせようとする。

「はあああああ!!」

剣が酸素を消費し、ゴウゴウと音をたてて燃える炎剣を思いきり振ったブライ。ブラッドクロスロックマンはアシッド・エースを対象として定めていたためブライの行動には注意が緩慢になっていたため藩王が遅れた。完全には斬りつけはできなかったがエクスカリバーの炎がブラッドクロスロックマンの右腕を捉えて、右腕を短時間燃やした。それでもブラッドクロスロックマンのは反応がなかった。

「チッ…………。手ごたえなしか…………」

などとブライはブラッドクロスロックマンの無反応さに頭にきながらエクスカリバーでもう一太刀あげせようとした。だがここでよくばってしまえば逆に反撃が来る。そう悟ったブライは落ちついて距離をとろうとした。

「早く下がれ！」

アシッド・エースは後退するブライを支援してブラスターをブラッドクロスロックマンに向けて放っている。だが相手にとっては蠅が止まった程度にしか感じないだろう。それでも時間稼ぎにでもなればそれはそれでよかった。時間を稼げば宇宙がもたらした悪魔にとって最強、最悪の灼熱の球体が姿を現すのだから。そんなことを思いながら刻一刻と時間が経過する一秒一秒が速く経過しろと思う。

「俺に命令するな!!」

アシッド・エースの声にブライは自分でもこれぐらいは対応すると分かっていた。仲間の声に抵抗しながらも動き距離を確保するブライ。

「ウオオオオオオ!!」

ブラッドクロスロックマンは距離を確保するブライの隙を見逃さない。まるで獲物を捕らえるような眼で、ブライを追いかけた。ブライとブラッドクロスロックマンのスピードの速さは大差がある。ブラッドクロスブラッドクロスロックマンは爪を立てて逃げるブライを追いかける。

「させるか!!」

アシッド・エースは退避態勢になっているブライにカバーをした。己のロックオンソードでブライとの距離を埋めていく。そしてすれ違うようにしてブライを後ろにしてブラッドクロスロックマンに向かう。そしてアシッド・エースはスライディングをして低姿勢になりながらロックオンソードで斬りつけた。手姿勢になっているアシッド・エースは対して彼は対応が出来なかった。

そしてロックオンソードの洗礼を喰らう。右肩に斬りつけたあと彼は叫んだ。

「オオオオオオオ！！」

ロックオンソードを喰らったブラッドクロスロックマンはまたもや攻撃を喰らったためたたらをふんだ。そして苦し紛れの攻撃に不意を突かれたのか尖爪の攻撃を思い切り喰らってしまうアシッド・エース。攻撃を喰らって思い切り建物の壁にまで吹き飛ばされた。激突する大きな音がし、むせてしまう。そして力なく地面に倒れこむアシッド・エース。

「うっ……強すぎる。これが吸血鬼の力………。狙いを定めて攻撃してないとはいえ異常だ……」

アシッド・エースは吸血鬼の異常な攻撃力になす術がなかった。自分のロックオンソード。そしてブライのエクスカリバーを使っても何の変化も見られなかった。もしかしたら一瞬で回復しているのかもしれないと思ったアシッド・エース。

「それでもあきらめるわけにはいかないんだよ！！俺はあいつを救うんだ！今度こそ俺が真のヒーローになるんだ！！言葉だけじゃ何も変わらない、行動、意志、思い、それらを信じるんだ自分の成すべきと思ったことを示すんだ！」

アシッド・エースは自分を鼓舞させて膝に手を当てながら立ち上がる。ロックオンソードを構える。眼にはまだ希望という名の光が尽きていなかった。自分の中に宿る人間だけがもつ可能性の神。秘めたる力を。それを信じてアシッド・エースは地面を強く蹴って地獄の底でさ迷っているブラッドクロスロックマンを救うために、未

来を切り開くために彼は剣を振るう――。

## Auf t a k t | 47 浄化の鉄槌

アシッド・エースはロックオンソードを構え、よろめきながら立ち上がり傷だらけの体に喝を入れて背水の陣でブラッドクロスロックマンに接近した。もはや前のようなスピードはない。だが人間の中に宿る可能性の『神』、そして秘めたる『力』という見えない力を信じ彼は目の前に変わり果てた敵と戦う。

「うおおおおお!!!」

アシッド・エースが自分のロックオンソードを地面と水平面上にしてブラッドクロスロックマンに向かっていく。光が描く軌道。アシッド・エースはまるでジグザグに軌道をえがきながら接近してくる。

「オオオオオオ!!!」

無論、ブラッドクロスロックマンも何回も攻撃を浴びせられた相手に対して黙っているはずがない。弱っているアシッド・エースに対して全力でつぶしにかかってくる。彼が動いたことにより悪魔もそれなりの動きをした。獣のような動き、彼はアシッド・エースに対して真つすぐに接近してきた。それを見たアシッド・エースは素早くとび道具のマッドバルカン3に変えた。右腕がガトリングのような形状に変化し、その3つの銃口から左回転しながら次々と銃弾を打ち出していく。火薬の力で発射し、その弾丸がブラッドクロスロックマンに命中する。だが彼は顔色一つも変えずにこちらに向かってくる。

それぐらい常識の事。マッドバルカンは半数以上の弾丸を当てて

こそ威力を最大限に発揮するカードだ。一発一発の威力が小さくとも何発もあてれば山となる。だが悪魔の力に支配されたロックマンはそんなものには通用していなかった。

「チッ……やはりこんな容易い攻撃じゃとめれないか……」

アシッド・エースはマッドバルカンを半数以上の弾丸を当てても無反応さに顔をしかめる。そしてブラッドクロスロックマンがこちらに近づき攻撃してきたがアシッド・エースも簡単に処理し沈着体制に入る。

――堅い体。

――一撃で動けなくする攻撃。

――神速の移動。

――辺りを凍りつかせる凍てつく殺気。

全ての面に対して比の打ち所がない今のロックマン。自分はそれでも諦めない、諦めたくないという意志が彼の腕を、足を無意識に動かす。

「うおおおおお!!」

アシッド・エースが叫んだ。真っ暗闇の世界で一つの声が短く大きく響いて空気を切り裂く音が聞こえる。彼は勢いよく踏み込んでロックオンソードをロックマンに向けて思い切り振った。だが相手もそれに対して動く。だが相手は化け物。野生の本能で動く獣だ。真っ向勝負してくるアシッド・エースにブラッドクロスロックマンは野生の本能で力に対抗しようとアシッド・エースに向けてつつこんだ。

アシッド・エースは自分の策に乗ったと小さな笑みを漏らしながらロックオンソードを振る。それに対してブラッドクロスロックマンも力で対抗しようと爪をたててねじふせようとする。ロックオンソードと爪がぶつかる瞬間、アシッドエースは人としての戦略を相手にぶつける。相手は化け物で、自分は人間。人には優れた『思考』という能力が備わっている。アシッド・エースが使った思考の策とは、

ブラッドクロスロックマンの鋭い爪がアシッド・エースに直撃した瞬間、アシッド・エースは煙となって空気の塵となり、姿を消した。突拍子ない目の前の現実。ブラッドクロスロックマンは動揺して周囲を見ていたが彼の姿はどこにもなかった。

煙となって突然消えた彼。そう、姿を消すんじゃない、ブラッドクロスロックマンに向けての意識牽制と――

「うおおおおおお!!!!」

アシッド・エースはヘンゲノジュツを使い後ろに煙から電波体へと変化し、右手にロックオンソードを構えて思い切り斬りこんだ。そう、これがアシッド・エースの考えた策。姿を消すことで敵に動揺を走らせて集中が切れたところに背後を突く。完璧に決まった作戦だった。一撃加えてもアシッド・エースの猛攻は止まらない。右から斬りこんだら素早く体重移動して上から下へと思い切りロックオンソードを振り下ろす。ブラッドクロスロックマンはアシッド・エースの二回の攻撃に耐え切れず吹っ飛ばされた。

「はぁ、はぁ、はぁ……………」



アシッド・エースはひとまず距離を置いて呼吸を整える。斬っている間は息を止めないと全身に力が入らない。その為、攻撃中は無呼吸状態に陥るのだ。

「来るぞ！」

後ろで待機していたブライがエクスカリバーを構えながらこちらに近づいてくる怒り狂ったブラッドクロスロックマンに注意をはらった。その声を聴いたアシッド・エースはもう少し呼吸を整えたいところではあったが我慢するしかなかった。ブラッドクロスロックマンが勢いよく接近してくるのに対し二人は左右に展開した。彼らの背中の空は若干明るくなってきた。日の出はもうすぐだ。

その場を強く蹴り、二人はお互い反対方向へいった。そして無人の空間に突っ込んだブラッドクロスロックマンが左右に展開し、その二人を敵として捕らえた相手がアシッド・エース。

「やはり俺か！」

アシッド・エースは言葉からして自分に来るとそう感じていたのだろう。ロックオンソードをあんなに自分に斬られたらさすがに頭に来るだろう。そう悟った男。彼の目的はただ一つ。高い位置にあるウェーブロードだ。そこに急接近するアシッド・エース。それを追うロックマン。そして高地にあるウェーブロードの上に立った二人。

暁シドウは東から上ってくる太陽を背にふとこんなことを思い出す。それはディーラーアジトでの出来事。あの時、自分の自我が喰われて無差別的に攻撃をしていたが、迷宮から救ってくれたのが青

い流星、ロックマンだった。あの時の借り、今ここで返す!! と思  
っているアシッド・エース。

徐々に東の空が明るくなっていく。空が闇から光へと変わってい  
く。そしてアシッド・エースはゆっくりと、動き出した。日の出が  
近いせいなのか、ブラッドクロスロックマンは何かに対して苦しん  
でいるかのような感じで動いていなかった。

アシッド・エースは躊躇なく突っ込んだ。この世界に吸血鬼を作  
り出した神の奇跡システムという幻想が現実にならないように祈りながらア  
シッド・エースはロックマンに近づきながらバリアを展開する。

ロックマンは爪でアシッド・エースが作り出したバリアに容赦な  
く攻撃した。バリアに重い一撃と斬撃の衝撃波がバリアを伝わって  
アシッド・エースにのしかかる。斬撃の衝撃波が彼の全身を刻んだ。  
斬撃の衝撃波が彼の皮膚を容易く切り裂き、血反吐を吐かせる。鮮  
血が宙を舞い、地面に弾け、そして固まっていく。

「うぐっ……………」

アシッド・エースの体が刻まれていくごとに鮮血が宙を舞う回数  
と量が増えていく。それでも武器を持たずに接近していく。

（これしか……………方法はないんだ!!）

「うおおおおおおお!!!!」

アシッド・エースがバリア越したが血まみれになりながらもブラ  
ッドクロスロックマンに真っすぐに向かっていく。そして猛攻を歯  
を食いしばって奥歯で血の味と共に噛み締めながらアシッド・エー

スが思い切りブラッドクロスロックマンを自分の両手で抑え込んだ。

アシッド・エースはこれしかなかった。徐々に東から上ってくる太陽の朝日に全てを。ブラッドクロスロックマンは無論、アシッド・エースの両腕の束縛から逃れようと暴れている。アシッド・エースの体に拳を叩き付けたり、思い切り鋭い牙でかみついたりなど。

アシッド・エースはこれらを死ぬ気で耐えた。自分の身は今は捨てている。彼を救うために。その瞬間、待望の朝日が世界を光に染め上げる。その直後、ブラッドクロスロックマンは鉄板で肉が焼かれているような音を立てていた。闇は光を嫌う。闇に染まったロックマンは身がまるで業火の炎の上で焼かれている感覚なのだ。全身が焼かれる痛みから逃れるようにブラッドクロスロックマンはさらに激しくのた打ち回る煙と灰がブラッドクロスロックマンから立ち込めてきた。死か、生の審判が下される。だがアシッド・エースは少しでも生に近づくようにあることをする。

「ウガアアアアアア！……！！！」

「グッ……思い出せ！ロックマン！あの記憶を、共に過ごした日々を、自分の成すべきことを！ここでまだ終わるんじゃないんだろ！何もなしとけていないだろ！？蘇れよ……お前はここにくたばるわけじゃないんだろ！お前は俺が救ってやる！………だか……ら闇に負けるな、戻って……こい！俺の見込んだ世界のヒーローさんよ！おおお！！！！！」

アシッド・エースは全身がボロボロになっても束縛し、ブラッドクロスロックマンに呼びかけた。ブラッドクロスロックマンは太陽の光で業火の炎のみたいに焼かれるのが嫌なのだろう。暴れていた。だがアシッド・エースはそれを離さない。ブラッドクロスロックマンの体から灰の粉塵が舞う。死が近づいている証だ。

「ロ  
ツ  
ク  
マ  
ン！」

「ロックマン！」

アシッド・エースとブライが必死に灰と共にあがり、身が焼けていくブラッドクロスロッキーマンに声を送った。生きてほしいという願いを乗せて。

（……………皆……………の聲が……………聞こえる……………）

(ロツ…………ク…………マン…………!)

なんで……僕がアシッド・エースの前に！？と驚く精神の中の星河スバル。これは自分の意志じゃない。だが何故だ？自分は理由も不明な感覚にとらわれる。勝手に足と手が動く。そしてなんで僕はここにいるんだ？いや、何故アシッド・エースが僕を攻撃している？いや僕もアシッド・エースに向けて攻撃している。何故だ？

(これは………僕なのか………)

精神の中でやっと目覚めた星河スバルは自分の姿を見る。そして無造作に仲間をきずつけていく自分の姿。これを見たスバルは一つ  
の大きな思いが揺らいだ。それは、

(やめろ……………。 暁さんを傷つけるな……………。 やめろおおおおお！！！！！！！)

スバルは精神の中で叫んで無造作に動いている無意志の自分を完全に取り戻した。仲間を思う思いが勝りようやく自分を取り戻した。そして少年は悪魔の姿から普通のロックマンにへと身を焼かしなが

ら無意識に動いていた自分の姿と意思を取り戻し、英雄と盟友は無残にも地面に倒れたのであった。皮膚や全身はボロボロにして。

――そして太陽が辺りをさらに明るくし、流星の復活を祝うように光が二人を包み込んだ。

ブラッドクロスロックマンがロツポンドーヒルズのはずれの町で倒れてから二日が経過。破壊された町は今の最先端の技術で完全に再修復されていた。瓦礫の山と化していた町も今は綺麗になっている。あの活気がある街並みも、綺麗に並んだ道路に沿って生えている街路樹も、店も。

前のように非情な戦場だったとは全くとは思えない違い。できなかったあんな苦痛な過去は繰り返してほしくない。と誰もが願っているだろう。

そしてブラッドクロスロックマンが倒れてWAXAの医療室に緊急搬送された星河スバルと暁シドウは――――。

――ピコーン。

――ピコーン。

部屋の中に沢山ある中に一つの機械がある。その機械が人の脈の速さと同じくらいの音が部屋の中を反響する。場所はWAXA医療

室であった。この所、WAXAにある医療技術や科学技術は世界の最先端をとっている。だから専門の病院ではないのだ。その上、ここには電波関係に詳しい科学者がズラリという。電波体となって戦闘している暁達にとって少しでも怪我というなの紐を解きやすくなるだろう。

「うぐっ……………うワあああ！！！！！」

WAXA医療室で一人の声が頭を抱え苦しく、もがくような声がつらそうに響いた。それは悪魔となった星河スバルだった。何故、人間に戻った彼が悲鳴を上げて暴れているのか。それは全くの謎の状態だった。彼はあの時、ちゃんと『人』として戻ったはずだ。神の奇跡という幻想を壊して非現実にし、ちゃんとスバルを人間にしたはずだ。なのに彼は何故か見えない何かに取りつかれているように苦しんでいた。

「分かりませんね……………何故、星河君が苦しんでいるのが全くの不明ですね……………」

「そうか……………」

医療科学のプロフェッショナルである医者から聞いた星河スバルの父親、星河大吾は残念そうにいった。息子が見えない何かに取りつかれて苦しんでいるのに自分は見ているだけだった。ただ息子の無事を祈ることしかできなかったのである。

「けど一つ気になる点が……………星河君の血の検出、そして精密検査などの体内検査などをしたところ、星河君の細胞構築に一つ人間にはない欠陥と異常がでているんです……………。まるで新種の細胞構成

……彼は自分が特別的存在となっています……」

「スバルの細胞構成が違う？　どういうことだ？」

医者ではなくただの科学者だった大吾にとっては全くの理解不能だった。専門用語みたいな言葉が沢山出てきて頭が混乱してきた大吾。だからこそ聞いてみたのだ。

「簡単に言えば突然変異<sup>とつぜんへんい</sup>ってところですかね……。彼の細胞に全くの科学では発見できていない細胞が出ている……。それはまるで悪魔の出現の象徴を醸し出すみたいに……」

全くの新種の細胞。何故、それが息子の体に？　と気になった大吾。だがある一つの事が頭をよぎった。

それはスバルがロックマンに電波変換し、悪魔堕ちしたときの事。それが原因でスバルの体内に異常を引き起こす細胞が誕生したのではないか？　という回答に辿り着いた。けど暁の話からすると彼はちゃんと人間に戻ったという確実な報告が寄せられている。

「そうか……」

大吾はスバルを心配そうに見つめる。そして大吾は苦しそうな表情で医務室を出て行った。医務室を出た瞬間、医療部屋独特の薬のにおいが消えてWAXAの機械によって空気調和された綺麗な空気が大吾を覆った。そして腹の底から見えない何かが込み上げてくる。――それは怒りだ。

「くそっ！！！！！！――俺は本当に父親失格だ……。何故、息子を見ている事しかできないんだよ……」



大吾は思い切り壁を拳で殴った。殴った瞬間、ドン！という大きな音が空間を駆け巡る。壁をたたいた痛みが拳に突き抜けたが、悔しきで一瞬で塵にへと消えて行った。大吾の現在の心境、

——息子の一人も守れない。

——所詮、俺はただの人。

——何が英雄の父親だ。

——何が生きて帰ってこいよ……だ。所詮口だけじゃんか……。

そんな自分が嫌いになった自分。スバルみたいに自分も電波変換できて息子を守れば……という考えに辿り着いた。だがそれは幻想であって無理なことなのだ。ただでさえアシッドのような人工的につくられた人工電波生命体との電波変換は体におおきな負担がかかる。まだ歳ではないが、大吾にとっては厳しいだろう。その上、人工電波体の作成には相当な時間がかかるはずだ。

——そこに一人の老人の科学者が現れる。その現れた科学者は世界で指折りの有数の科学者。最先端の技術と知識を持つ人。大吾でさえも頭が下がる偉大な人。それがヨイリー博士だった。

「あらあら、どうしたの大吾ちゃん。なんか不機嫌そうで。何か機嫌悪いことでもあった？」

ヨイリー博士は笑顔で自分の無力さに怒っている大吾に話しかけた。きつとヨイリー博士は分かっているだろう。スバルがあの状態になっていることに。あえてヨイリー博士はそれを知って話しかけたのだ。そんな優しい気遣いに大吾は怒るわけにはいかない無理矢理抑えた。

「いや……。特になんでも……。ただ何故スバルだけ、あんな目にあうのか……。ってね……。……」

「そう……まあ確かにスバルちゃんだけ悲惨な目にあっているわね……。スバルちゃんの体内になんでも新種の突然変異した細胞が見つかったんでしょ？」

ヨイリー博士は当然、このことを知っていた。やはり自分の為に氣遣って……と大吾は小さく萎縮する。

「ええ……」

「私ね……ちよつとそのことで新しいPGMプログラムを作ろうかと思っているの」

ヨイリー博士がそう言った。それを聞いた大吾は突然、何故そんなことを疑問を持つ。スバルがこんな状態に陥っているのに新しいプログラム？それで試したい事があるっていったら俺は貴方のその考えを否定する。という思いを抱いた大吾。

「スバル君の体内に起きた細胞異常。それと悪魔の力を糧とした闇を支配下に置く全くの新しいプログラム……それがブラッドPGMという新種のプログラムよ」

「ブラッドPGM？」

ヨイリー博士はブラッドPGMと言った。当然、大吾の頭にはてなが無数に浮かんでいる。闇の力を支配下に置くプログラム？細胞異常とそれが一体何の関係が？疑問しか浮かばなかった。どんなに考えても科学者ではない大吾は科学者みたいな革命を起こす閃きの電撃が全身を駆け巡らなかった。

「ブラッドPGMはね……簡単に言うとな闇の力を身に宿すプログラムよ。闇を使って戦う新たなロックマン。それがブラッドクロスロックマンね。今までの究極変身とは違いエースPGMやジョーカー

PGMのようにノイズ率では変身しない。ブラッドPGMによる闇イズフュージョン融合変身での変身条件は……」

「……………」

大吾は思わず固唾を飲んだ。全くの新しい力。スバルの体を蝕んでいる闇の力。細胞異常。それを糧にして新たなバトルスタイルを得る。ヨイリー博士が次に口を開く言葉が気になっていた大吾。

「……………」それは自らを死の境地にへと導く事よ……………」

ヨイリー博士が行った死の境地へ導く。それは死を意味する言葉だった。それを聞いた大吾はどう受け取ったのか。

「なんだって……。死の境地に導くだって……。ヨイリー博士、それ正気で言っているのか……？」

大吾はヨイリー博士が言った。自らを死に近づけるという意味。それは命を捨ててうという意味に近かった。

「そうよ。スバル君に生命の危機のあわせて負の感情を高めて発動させる。負の感情を糧に心の中から沸き上がる憎悪をコントロールする……。それを支配下におく。それがブラッドP G M……。どう？この力は？」

ヨイリー博士はブラッドP G Mの性能を全部は言っていないだろうがその能力をおしみにくいった。それを聞いた大吾は考え込んだ。

「……新たな力になるかもしれない、ヨイリー博士がスバルの為に作ってくれる抑制効果のあるP G M。それがブラッドP G M。ライズフュージョンさらに闇融合変身によるスバルの体を蝕んでいる闇という吸血鬼の力を自分の物にできる優れもののプログラムだ。けど大吾は父親として、一児の親として、自分はこの言葉をかける。

「ヨイリー博士……。貴方は素晴らしい科学者だと俺はそう思っています……。貴方が苦しんでいるスバルの為に作ってくれる新たなP G Mを提案してくれることは感謝してます。ですが……。俺

はスバルを傷つけ負の感情を高めていく……。その上それを支配下に置く……。俺はそこに貴方の考えを否定します」

ヨイリー博士の提案に大吾は父親としての拳を強く握り、表情を険しくして言葉を言った。息子の為に言った言葉。傷つけてまでロクマンを強くさせたくない。大吾はそう思っていたのだ。息子にそんなことをさせるわけにはいかないと。

「……………」

それを聞いたヨイリー博士は黙ったままだった。小さい体で腕を組んだまま黙り込む。そして大吾の眼を見つめてヨイリー博士は思わず小さく吹き出した。そして小さい顔に浮かんでいるしわと共に老人は笑顔を作り、年長者としての言葉を送る。

「フフフツ、真剣な目ね……。ちゃんとスバルちゃんを守るという親の責任が現れているじゃない。さすが大吾ちゃんね。それでいいのよ、何も自分を責める必要はないのだから……」

「よ、ヨイリー博士？」

ヨイリー博士の突然、会話から脱線する話に大吾は表情を崩した。そして思わず前傾姿勢になり、何故そんな事を言ったのが気になってきた大吾。

「ごめんね、貴方をちょっと試してみたの。貴方が部屋から出てきたとき、壁を叩いてどうしたのかと物陰から貴方の様子を観察させてもらったの。したら自分を責めてる様子だったから、ちょっと試してみよっかなってね……。まあ荒療治的な方法だったけど、貴方がなんだかんだ言ってもちゃんと息子を守ろうっていう意識が

出てるじゃない」

「あ……………」

大吾はヨイリー博士の行動っぷりに小さく萎縮してしまった。これが自分より生きている年長者の気遣い方なのだろうか。改めてすごい科学者だと実感する大吾。

「フツ、さて本題ね。実は負の感情を高めて、自らを傷つけて死の境地に達した所へ闇融合変身ライズフュージョンっていうのは真っ赤なウソ」

「やはりそうでしたか」

ヨイリー博士がブラッドPGMでも闇融合変身の条件としての話で自らを傷つけて、負の感情を高めたところで変身不可能を可能にする。だが大吾はこのことが本当じゃないと悟っていたみたいだ。さすがスバルちゃんの父親ね、勘が鋭いと心の中でそう考えていた最高の科学者。きつと変身条件も分かっているんだろう？と思っっているヨイリー博士。

「あら、分かったたのね。さすがだわ大吾ちゃん。そうねブラッドPGMはスバルちゃんの中で蝕んでいる細胞異常を抑制するっていうのは本当よ。私も調べたんだけど『人』としての構成はなりたっているんだけど、『吸血鬼』という『人』の存在から脱線してしまったせいで何かが欠けてしまった。そのせいで細胞異常が起き、スバルちゃんの体を苦しめる、と私は思ったの」

「……………」

大吾は黙ったまま聞いた。ブラッドPGMがスバルを救うかもし

れない。目の前には自分を救ってくれた協力者の一人でもある偉大な人。そんな人が自分と同じ血で繋がっている人を地獄の底から救おうとしているのだ。そしてヨイリー博士の次の言葉に大吾は思わず小さな期待を胸に抱き、固唾を飲んで喉を鳴らす。

「でね……、あくまでも抑制。いわゆる延命と調和っていうもの。完全に治るわけじゃないわ。そう留めておいてね。さてここから最大の特徴ね。ブラッドPGMによる闇融合変身条件は。———闇に負けない頑強で、屈強で、折れない心と、信じる『心』ね。いわゆる闇とのシンクロ率かな。闇に近づこうとすれば己が喰われる。だがそれに負けない強い心を持つことでそれらを跳ね返し、闇を支配することで新たな力を手に入れる。いわば諸刃の剣ね。けどスバルちゃんなら諸刃の剣じゃないと私は思う」

「……………一体何故ですか？」

大吾は理解できなかったようだ。父親と息子。一番距離が最も近い二人の関係。だがそれは中から視点であって外からの視点ではだいたい違う。中にいる父親、星河大吾はスバルの内なる『何か』が分からなかったのだ。だが外からの視点であるヨイリー博士からしてはその見えなくて内なる『何か』が理解していたのである。それは、父親からでは分らない、いや父親であるからこそ分らない『ものの』

———それは『親友』<sup>とも</sup>を守ろうとする意志。

———親の前では心配させたくないという意思。

その二つが両親の前では見せなかった。そうウォーロックとスバルが出会ってからだ。星河大吾が宇宙で放浪していた最初の事件、宇宙ステーションでの事件時。なんだかんだいってスバルは親に心配させたくないと思い、電波変換ができるということを言わなかったのだ。

「それはね、貴方に見せない裏のスバルちゃんよ。貴方の前には出さずとも、彼は裏では彼なりに頑張っているの。それは何故だと思う？」

「いや……俺には分からない……」

大吾は考えたが分からなかった。家族全員で行った思い出の旅。家族で過ごした食卓。家族で遊んだ思い出。スバルの笑顔、怒り、憎しみ、等々、頭の中でいろいろと浮かんできたが従来のスバルである姿しか浮かばなかった。

「それはね……最初の宇宙ステーションの事件時。スバルちゃんとロックちゃんがファーストコンタクトし、世界に青い流星、シューティング。スター・ロックマンが舞い降りたからなの。自分が戦っている。とすれば当然の事、親でいる貴方の母親、あかねさんは当然の事、戦っているスバルちゃんのことを心配するはずよ。けど、スバルちゃんはあえてこのことを言わなかった。自分の姿がばれるまでは。そう、心配させたくなかったからなのよ……」

「……………」

そうだったのか…十分に成長したのかと思っていたんだが、ウォーロックと出会った時からスバルは大きく成長していたのかと大吾はそう思っていた。見えない所で人は変わっていく。大吾は思わず涼しい笑みを漏らした。そう、息子の偉大さに。

———その瞬間。

———ドォー———ン！！

大きな轟音が鳴り響いた。と同時にWAXAニホン支部が大きく



揺れる。そして警報が鳴り、緊急放送がかけられた。

『緊急警報！緊急警報！外部からの襲撃あり！襲撃あり！サテラポリスは各自持ち場に！』

「敵さんのお出ましか！ヨイリー博士、そのブラッドPGMは出来ているのか？」

「もう少しかかるわね……」

「迅速にお願いします！俺は指令室に向かいます！——気を付けて」

「大吾ちゃんもね！」

こうして科学者と親は、向かうべき場所へ向かっていった。

——英雄が地に舞い降りる奇跡の再復活を願って。

——ドゴ——ン!!

何かの攻撃が何かに大きく激突する轟音がある場所を大きく空気を揺らして駆け抜けていく。それは正体不明の敵が飛び道具で攻撃した。そして着弾点はWAXAニホン支部である。

突然の不意打ち攻撃にWAXAニホン支部は手間取ったが指揮官の指示により迅速に対応できた。すぐにマテリアライズ式の防壁をWAXA全体を覆うように展開して守備を固める。それでも完全に防ぎきれぬわけじゃなかった。防壁越しにじわじわとWAXAニホン支部にダメージが積み重なる。

振動が大きい。その為WAXAニホン支部内にいる人は全員バランスが保てなかった。床の力の運動に引っ張られてしまう。ここにいた現在負傷中の暁シドウと待機していたソロもこの騒ぎに只者じゃない殺気と異変を察知してWAXA内部の指令室を目指していた。勿論、星河大吾もこの騒ぎに駆けつけて指令室を目指す。

「ったく……敵さんはここを不意打ち攻撃ですか？なんてこったあ……」

暁は指令室めざしながらサクサクサクサクとテンポいい音を立てながらうまい棒のコーンポタージュ味を食べていく。一本、また一本、そしてまた一本と腰に吊り下げているポーチからまるで魔法の

ポケットみたいに次々と鉛筆サイズの包装されたうまい棒が出てきては暁の腹の中に運ばれる。彼は所々に包帯や絆創膏ばんそうこうを貼っていた。どうやら彼の傷はまだ完全に癒えていないようだ。

それでも彼は涼しい表情で指令室を目指す。うまい棒片手に。

「お前……そんなテンポよく食ってたら舌嚙むぞ……」

ソロが涼しい顔でテンポよくサクサクサクと食べている暁に言った。その次の瞬間、

「ガリ!!!。……うおおおお!!!痛えええ!!!  
!!!噛んでしまったああ!!!」

ソロの言った事が現実になってしまった。暁はソロの言った事を見事に、そして無様に有言実行してしまった。暁は思い切り噛んだことにより口の中に血の味が充満する。暁はその痛みに耐えながらそれでも血の味を奥歯で噛み締めてうまい棒をまたサクサクサクサクとテンポよく食べ始める。眼にはうっすらと涙が。よっぽど痛かったのだろう。ソロは思わず苦笑い。

「ほらな……」

「なんで俺はソロの言った事を有言実行してしまうんだよ……ただのバカじゃなか……」

暁は軽口のとおりだった。所詮舌噛んだのも偶然だと思っているヒーローになんてたくてもなれない青年。その台詞を聞いたソロは。

「ようやく自分がバカって気づいたか、隊長さんよ」

「え、お前、俺をそんな目で見てたの!?!」

暁はソロからの予想外の一言に思わず目を丸くして片手に持っているうまい棒を思わず落とした。そして地面に落ちたうまい棒を綺麗にWAXAの堅い床によって碎けた。俺がバカとして見られてい

た!?! 尊敬とかじゃなくて、あのバカ!?! カバじゃなくてバカなの俺!?!

と暁は一人で誰にも理解できない思考回路全く不明で、踏み出したら八つ裂きにされそうな考えに達していた。

「茶番はここまでだ。急ぐぞ!!」

「ちょ、待てよ!! 俺がバカってどういうことだ!!」

「そのまんまの意味だ!!」

暁とソロはそんな軽い言葉の言い回しをしながら揺れる床の上、体が振動に持ってかれないようにして指令室へ向かっていった。向かっている途中、ヨイリー博士の背中が自分の頭の中に映った。大丈夫であろうか。いやあの人はきつと無事でブラッドPGMを持ってきた星河スバルを救ってくれるはずだ。あの人は科学者として俺以上の地獄を見てきている。あの人ならこの絶対的な死の境地を乗り越えて来てくれるだろうと暁はそう思いつつ、勢いよくWAXAニホン支部の指令室にソロと共に息を上がらせて入ってくる。

ドタドタドタ! という甲高い足音を立てて入ってきた暁とソロ。呼吸を安定させながら肩で呼吸を繰り返し、無意識に皆の視線が釘付けになっていたWAXAニホン支部の指令室のモニターを見る。

無意識に見た二人の眼に映っていた世界は吸血鬼型の電波体がマテリアライズ式の防御壁に攻撃している映像だった。

ドンドン! と神速の速さで分からないが飛び道具を使って攻撃しているだろう。

「艦長、ソロと共に行かしてもらいます……………出撃許可もらえますか……………」

暁は真剣な眼差しで艦長に出撃許可を申請した。彼の真剣な目。

何かを守ろうとする意思表示。この沈黙が周りの人間には長いように感じ取れた。指令室のモニターのサウンドから爆発音が指令室に無情に響き振動を誘発する。

この場の空気の緊迫感。そして彼がこの集中力さが表に出ているのが原因なのか彼の気迫が大地を揺るがしているようだった。そう何かを守りたい表れでもある。

「……………分かった。君とソロ君に出撃許可を下ろす……………」

艦長は何度も迷ったのだろう。人と人の間にかなり長い沈黙と爆発音と振動が指令室を何度も駆け巡った。その間、艦長は何度も迷った。だけど、引き下がるわけにはいかない。彼の真剣な眼差しにかけてみるしかない。艦長はそう判断した。

「僕も……連れて……もらえ……ませんか………」

——その声が聞き覚えがあった。

——かつて三度も救った奇跡の英雄。

——未来を作り出す青い流星。

——自分を救ってくれた恩師でもあり、最大のライバル。

——今は弱弱しくなっており頼もしさを感じさせない儚さ。

その声は星河スバルの声だった。その声がした先に一同は無意識にスバルの聲がした方向へと視線を向けた。そこには息を上がらせてたっているだけでつらそうにしているスバルの姿があった。スバ

ルは息をするだけで何故か軽い目眩<sup>めまい</sup>が駆け巡る。他にも手足がうまく動かせない。などの障害が諸々あった。

「スバル！お前立って大丈夫なのか！？体は大丈夫なのか！？蝕まれているはずじゃ……………」

「チッ、死に体のキサマが戦場に出ては足手まといが増えるだけだ。お前はおとなしくさがってろ」

「そんな君の理屈、この状況じゃどうでも……いい。今は目の前の敵とこの拠点を守ることに集中……したいんだ……」

彼の眼にも、自分はもはや仮死状態になりかけているのに倒れたという体に鞭打って、苦しいという信号に抵抗してスバルは守りたいという思いだけでここに來たのだ。虫の息状態なのなんて根性なんだ。その根性と意志に深さに艦長は思わず感服してしまう。

「スバル君……………君は本当に素晴らしい……………若いのよく他人の為に戦おうとする素晴らしい少年だ。だからこそ君に頼む。決して無理はするな。今に君を救ってくれるヨイリー博士のPGM<sup>プログラム</sup>が急ピッチで作業してくれている。そしてこの拠点を守ってくれ！」

「は、はい！！！」

「よしいくぞ！この拠点を守るんだ！！」

そういい、スバル、暁、ソロはその場で電波変換してWAXA内に駆け巡っているウェーブロードを経由して戦場に出て行った。

そう、これはまさに防衛線。死に体のスバルと、WAXAニホン支部の防衛と生存をかけた戦いと殺戮が幕を上げる。

## Auf t a k t | 50 儂い流星（後書き）

どうもこんにちは。

久々のあとがきを書きます。

ようやくAuf t a k t編の50話突破と折り返し地点に到達いたしました。

応援があったからこそここまでできました。ですが近日発生した家庭の事情により大幅に更新が遅れます。何卒ご了承ください。

後半はもっと激戦化していきます。

感想、評価など待っています。

今後ともこの小説をよろしく願います。

この小説が貴方達のお気に入りいつまでも残っていると願いつつ、ここで少しの間お別れです。

ええ、僕はなるべく早く戻ってくるように頑張ります。

では、また僕と貴方。再び小説の中で会う事を。

## Auf t a k t | 51 死の槍

敵からの奇襲攻撃に応戦しようと暁、ソロ、スバルはWAXAニホン支部艦長からの電波変換による出撃命令の許可をもらってWAXA内部からそれぞれ電波変換した状態で出撃した。

WAXAニホン支部はまだマテリアライズの防御壁がなんとか保っていたためギリギリだった。だが敵からの攻撃により辺りは土の粉塵と、謎の黒い瘴気で視界が悪かった。そして三人はWAXAニホン支部の正面ゲートの前にたどりつく。そして目の前の吸血鬼みたいな敵を見て警戒態勢に入った。

見た目は土の粉塵に包まれていたため分からなかったが粉塵の中に浮かび上がるシルエットはやはり吸血鬼の同じ構成員のようだ。爪や歯が尖がっている風貌があった。だがその謎の人の特徴はその部分だった。小柄な体系な反面、凄腕の力をしている感じの男だった。爪は真っ黒に、全てを切り裂くような尖爪をしていた。振れただけで皮膚や肉が切れそうな感じを醸し出している爪。

———その男の名はデッド・ステリアス。

「やはり吸血鬼型電波体か!？」

「そうみたいだな!!!!!!」

「はあ……はあ……そう……みたいだね……」

電波変換した暁、白い体が特徴のアシッド・エース。電波変換し



たソロ。紫色のバイザーと片手に持つムーの遺産、エクスカリバーを片手に持って、胸にはムーの紋章が特徴のブライ。最後は電波変換した世界の英雄、スバル。青い体に胸には流星型のペンダント。だが今の彼にはいつもの彼らしい元気印の明るい表情が全く見えない。

アシッド・エース、ブライは舞い上がる土の粉塵の中にいるデッド・ステリアスという吸血鬼型電波体の容姿と場所を完全に察知していた。

だがロックマンには二人の映っている世界が全く違って見えた。それはまるで灼熱の世界にこのような視界だったのだ。この環境は至って良好。温度が異常なほど高いわけでもなければよほど低温な場所なわけでもない。なのにロックマンの視界には何故か空気が高温になることで発生する灼熱の世界だけで見ることが出来る蜃気楼がロックマンの眼にはうずまき、空間を歪ませて見えた。蜃気楼が起きて見えることにより目の前の視界が歪、そしてゆがめる。

距離感覚や平衡感覚もおかしい。これは自分の体なのかという錯覚に襲われる。何よりも自分の目に起こっている蜃気楼のせいで敵がああ土の粉塵の中にいるって分かってても容姿が完全に分からない。ただ『人』としてのシルエットしかロックマンの目には映っていないかった。

「大丈夫かロックマン？ さっきから息が荒いが……」

「大：丈：夫別にたて：ないわ：けじゃ：：：ない：から安心して：：」

ロックマンはそうアシッド・エースに余計な心配をかけたが無為に自分の苦しめる激痛に耐えて、勝手に荒くなる呼吸を無理矢理殺して、ロックマンは少しでも大きいで言った。だが彼の声に力、元気、思いは感じられなかった。自分の中で自分を蝕んでいる『悪

魔の力』に耐えているのだろう。ロックマンの返答を聞いてそう悟ったアシッド・エース。

ブライは陰で小さく舌打ちし、「足手まといは邪魔なんだがな……」と弱弱しくなっているロックマンに向けて小声で言った。戦場に傷ついているものは来るな、とブライはそう思っているのだろう。

その直後、戦闘への幕の引き下ろしの引き金が一気にひかれる。

「うおおおおおおお!!!!!!」

突如、土の粉塵の中にいるデッド・ステリアス、吸血鬼型電波体が自分の覇気と共に放出する闇の瘴気で自分の周りにある粉塵を一気に吹き飛ばした。そして三人の前に露わになる。やはり全身が鋭利物で覆われた危険な体つきをしていた。

そして辺りにまき散らす異様な殺気。ロックマンたちはその殺気を浴びて足が接着剤でくっつけられたように足が動かなくなり、背筋には一筋の大きな汗を悪寒がロックマン達三人に駆け巡っていた。

「うっ……凄いの殺気だ。たっているだけで精一杯だぜ……ったくあんなものとかえってか……」

アシッド・エースは小さい独り言を言いながら腕を前に出して殺気からそむけるようにする。

「いくぞ!!!!地球の電波星人ども!!!!!!」

デッド・ステリアスはさらに殺気と殺戮のオーラを上げて、アシッド・エースたちに向けて、地面が凹むまで自分の足に宿っているバネを最大限に使い、そしてギリギリまで絞ったバネを一気に伸縮させ、思い切り神速の速さでこちらに爪をたてて向かってきた。

三人はデッド・ステリアスの殺気に一瞬体がこわばったがその殺気に飲み込まれないように三人は足が接着剤でくっつけられているような足から無理矢理引きはがして横っ跳びをした。

「うおっ!？」

アシッド・エース、ブライ、ロックマンは危機一髪だった。悪魔の電波体、デッド・ステリアスは最大限に尖らせた爪の切っ先に最大限の威力と、速さを乗せてこちらに向かってまるで槍のように向かってきた。まるで空から降ってくる『血の雨槍』ブラッドスピアだ。

アシッド・エース三人が回避し、デッド・ステリアスが無人の空間に思い切り突っ込んだ。そして土の粉塵があたりに舞い上がり、視界を悪くする。

デッド・ステリアスが攻撃した部分は深くえぐられていた。そしてまさに空から降り注ぐ槍、『血の雨槍』ブラッドスピアはその風格を露わにする。それを見た一同は思わず固唾を飲む。そしてまた足に接着剤で塗りつけられたような奇妙な感覚が足に突き抜ける。

黒い漆黒のオーラをまき散らしながら悪魔はこちらに近づく。一息仰ぐ暇もない。味方の位置も確認しなければならない。集中力を切らしてはならない。あの対策情報も、あの悪魔の攻撃情報もない。ただ手元にあるのは、確実な相手の容姿だけ。情報はそれだけだった。

だがそれだけじゃ確実に絶対的に足りない。中心的な情報を増やし、その得た情報の中で自分を有利にするのを取捨選択して最も相手に対して最適で最悪な戦法を編み出していく。まず相手の事をよく知ること。戦闘の半分は勝利に揺り動かされる。そしてそれを実行するのが組み立てた自分と仲間。

だが今彼らの手元には何もない。あるのはそれぞれの得物と体と反射だけ。

しかし彼らには人工的に作り出した素晴らしい電波生命体。これが最先端電波科学の努力による無限に輝く光の結晶。汗と疲労と夢と希望と信頼が詰まった未来へとつながる明日の架け橋的存在、――それが暁シドウが最も信頼する相棒、アシッドだ。

彼は情報解析力、電波周波数解析力、独断力、など様々な特殊的な能力を兼ね備えたWAXAニホン支部にとっては絶対的な必要不可欠な存在であり、何よりも通信としての役割も果たしている。

「アシッド………奴の解析……いけるか……」

『時間がかかりますね……まずこの状況、ロックマンの身体状況、そして相手の恐るべき身体能力。ほぼ勝ち目がありませんね……シドウ、まずは時間を稼いでください。私とWAXAニホン支部で通信し、あの敵のスキャンと開始します。情報が圧倒的に少ないのであるべく回避に専念し、私のスキャンに集中させるようにしてください』

「了解した!!」

相棒が素晴らしいデッド・ステリアスのスキャンを開始し、アシッド・エースは時間稼ぎをしようと悪魔の電波体から距離を取る。エクスカリバーを構えているブライもどうやら二人のやり取りを聞いていたのか距離を置き、ロックマンは自分の目に映る世界が蜃気楼状態になっていてよく見えていないようだ。だがある程度の距離はとっている。しかも三人の一番距離を確保している。

「はあ………はあ………はあ………」

ヨイリー博士、この俺が見込んだヒーローに早く救いの手を……！と心に一秒でも早くという念をこめてアシッド・エースは心でそう

願  
っ  
て  
い  
た  
。

一方、その頃WAXAニホン支部の研究開発室では一人の指折りの老人が一人の苦しむ少年を救うために自分がこの右手左手で最高のPGMプログラムを作りだすために老人は必死の思いで作っていた。

「これをこうして……抑制装置はこうしつてと……。スバルちゃん  
の為にも一秒でも早く完成させなくては……」

その指折りの科学者、ヨイリー博士は何かに繋がれた端末。恐らくデータ端末だろう。そのデータ端末と本体の莫大なデータサーバーとリンクしている巨大な演算処理装置に繋がれているケーブルを伝ってヨイリー博士は未来のバトンプログラムを作っていた。

——それはブラッドPGM。

世界の英雄、星河スバル。その自分の中で宿っている秘められし鎖に繋がれた開放してはいけない絶対的な破壊と虐殺、殺戮をもたらず力。それは人を喰らい、世界の理ことわり、世界の奇跡システムを穿つ黒に塗られし力。それが悪魔が持つ『闇』。それが真の闇。

少年は闇に塗られた。最も世界で好きだったブラザーバンドを初めて結んだ相手によって。

少年は変わってしまった。闇に堕ちたことで。

少年は世界を壊そうとした。闇に飲まれたことで自我を繋ぎとめることが不可になった。

少年は救われた。先輩でもあり、恩師でもある大きな背中の青年の手によって。

吸血鬼は死ぬと灰になるという神様の奇跡、神によって作られた構造、システムを壊した人間に戻りし星河スバル。だが奇跡を壊したという反面、その裏には闇の依存という後遺症らしき障害がスバルの体に憑りついた。

だがそれでも、闇に汚染されようとも彼は生き続けようとしている。あがき足りない。まだあがき足りない。あがいてあがいてあがく。自分の手元から離れてしまっていた恋する若き少女を取り戻すためには自分はまだ死ねない。死んでたまるか。ここであきらめるなら死んだほうがまだましだ。

スバルはそうずっと思っていたのだ。

それが今、目の前の現実がどんなであっても少年はあがく。たとえ仲間に邪魔者扱いされようとも、信頼できる恩師から心配されようとも、少年は、スバルはどうしても、少女を、ミソラを救いたかった。

ただそれだけ、それだけであった。そうたった一つの信念。

それがあの日の決意からこの日まで、いや少女を救うまで彼は地獄の底だろうが、右腕一本持っていかれようが彼は立ち上がる。そう、目の前のかつて自分が悪魔だったと同じような敵がただずんでいて、自分は仮死状態。もはや虫の息。目に映る世界は歪んで見える。――場所はWAXAニホン支部正面ゲート前。

「はあああああ！！！！」

ムーの末裔、孤高の剣士、孤独の心を持つ電波変換をしている少年、ブライは片手にエクスカリバーと呼ばれるムーの使者たちが託した綺麗な刀を構えながら果敢に声を上げてデッド・ステリアスに接近する。右手でエクスカリバーを収めている剣を引き抜く。刀身が空気の中に含まれている発火作用をもたらす能力がある物質、酸

素と化合しエクスカリバーは轟！という炎が巻き上がる音を巻きたてながらエクスカリバーの刀身に炎が纏われる。

鞘から放たれたエクスカリバーはまるで日本刀のように細く、長く、若干しなりがある刀身。

剣の扱いに突発的に優れているブライにとっては相性が最もベストな武器だった。実際の所、ブライもエクスカリバーを結構信頼していたりする。

そしてデッド・ステリアスとの距離をどんどん埋めていくブライ。運動の速度をエクスカリバーに乗せるように剣を地面と水平面上にしている。そして距離がゼロになった瞬間、末裔は思い切りエクスカリバーを悪魔に向けて振りかざした。体重、運動の力、信念を全て持つものをエクスカリバーの切っ先に乗せて渾身の一撃を叩き付ける。

だがこの時、デッド・ステリアスは動いてなかった。いや動かなかったのだ。顔には余裕の表情をニンマリとまるで大海賊が世界の果てにある財宝をようやく見つけたかのような顔つきをしていたデッド・ステリアス。

そしてエクスカリバーがデッド・ステリアスと激突する瞬間、デッド・ステリアスは爪を立てて前から自分に向かって容赦なく、殺気に満ちた剣を自分の両手に長く、鋭く、容易く切り裂きそうな両手にある10本の鋭利な爪でブライが放ったエクスカリバーを火花をまき散らしながら易々と止めた。

その瞬間、急にとめられた事によりブライの手にはまるで岩に向かって剣を思い切りたたきつけたような痺れの感覚が指から手、手から腕へと突き抜けた。

渾身の力を込めて自分の両腕の筋肉を限界まで凝縮させ、そして解放したエクスカリバーの一撃は無残にも空気を揺らし、石ころを軽く50センチ分吹っ飛ばしたただけ。あれだけの威力を止められた



ら正直言って、滅入る。

「所詮、そんなもんかァ！？ツたク……お前がムーの末裔だっテいうから貴様の渾身の一撃がどンくらいかつテ試したのによウ！！もつとこの俺に見せつけろよ！！この三下<sup>さんした</sup>末裔さんよ！！」

デッド・ステリアスの声はまるで人じゃないけたたましい悪魔の笑い声だった。その悪魔の声がWAXAニホン支部ゲートの前で辺りに自分の猛々しさを醸し出すように彼の笑い声が無情に響く。そして完璧に止められたブライのエクスカリバーを弾きとばし、クルリと体重移動をして足を思い切り上げてブライに向けて蹴飛ばし吹っ飛ばした。

「うぐあああああ！！！！！」

ブライの悲鳴を上げる声が大きく響き、そしてWAXAニホン支部の隣は大きな急斜面の山だ。そこに思い切り受け身をとらずに激突したソロは思わず体の中にある空気が体外に強制的に放出されてむせてしまう。その直後、無意識に呼吸して酸素を補給する。

「何が三下だ……この俺を試すとはいいい度胸じゃねーか……。いだろう……貴様に屈辱という言葉を与えてやる！！」

ブライのはデッド・ステリアスに言われた相手を見下す『三下』と「試された」というのが自分のプライドとして許せなかった。ブライの体の全身を駆け巡る血があの見下している吸血鬼に対して自分の体に流れている血が沸騰するほど怒りが全身から腹へ、腹から喉へ、そして頭へと登っていく。

こんな屈辱は初めてだ。こみあげているのは怒り、悔しさ、復讐心、全てにおいて相手を妬むことしかできない負のオーラだった。

殺したい。殺したい！殺したい！！殺したい！！！！あの試した相手に対して全身の体の肉、内臓、血管の器官を潰して奴の体の肉をバラバラに引き裂いて肉塊を転ばせてやりたいと思っているほどブライの怒りは地を揺るがすほどのものだった。だが地は実際には揺れてはいない。これは怒りの表れ。

自分をあまくみられてるのが非常に悔しすぎる。

「フフ……ハハハハハハハハ！！！！いいッねエ！その負の感情！アンタ面白いワ。やっぱアイツから聞いていた通りだったワ。もっと見せつけてみるヨ！この三下！！」

「貴様ア——！！！！！！」

ブライは強く下唇を噛んだ。強すぎて血が出血し、口の中に鉄臭いブライの血液の味が口の中で充満する。それを奥歯で噛み締め、怒り、憎しみ、恨み、殺意の感情に飲み込まれないようにブライはエクスカリバーを構えてデッド・ステリアスにむけて大きく肉薄する。エクスカリバーは轟！という炎が酸素を燃焼させて攻撃を増幅させている。

刹那、だがデッド・ステリアスはブライのエクスカリバーの洗礼を軽々と回避している。

「チッ……ブライ……奴の挑発の誘いに乗りやがって……アシッド！解析率は！？」

『現在79%です！！』

アシッド・エースはこの残りの21%が非常に長く感じられた。しかしそれはこの状況だからこそあって実際は長くはない。アシッド・エースからしては1秒が5秒に、1分が5分ぐらいの五倍の長さを感じ取れた。目の前に状況を見ていれば誰だってそうはなる。

焦りが自分を見失い、時には死さえ最悪の方向へと導いてしまう状況もある。  
シチュエーション

それを後ろで待機している英雄、ロックマンはそれを身に染みるほどよく知っている。

「俺が支援にいく!! アシッド、解析……頼んだぞ!!」

『了解……』

アシッド・エースの指示に相棒が返事のきびすを返そうとした瞬間、

「――――お前らは手を出すな!! コイツは俺がぶっ潰す!!!!」

ブライの言葉にはかなりの思いが乗っていた。これほどにない自分のプライドという誇りに泥を自由に塗られたブライ。ブライは誇り高きムーの末裔の戦士。その誇り高き戦士のプライドを無差別に汚したデッド・ステリアスがどうしても許せない。ブライが許せる手段はただ一つ。

――それはデッド・ステリアスを倒すこと。

それしか自分の怒りを完全に抑えるのはそれしかできない。今まで自分は話し合いとかせずに自分の力で解決してきた。

彼の殺気はとんでもなく凄かった。後ろにいる瀕死状態のロックマンはかつて何度も相対したのにあれほどの怒り、悔しさ、殺意の感情に満ち溢れたブライは見たことなかった。今は一時的に『味方』ではあるがこれが『敵』となったらとんでもない相手と相対していたと背中に奇妙な汗を嫌悪感がロックマンの背中を駆け巡る。

殺気が満ち溢れているブライは神々しく燃える紫色のエクスカリバーを相手、デッド・ステリアスに向ける。エクスカリバーがブライの信念に答えるように大きく業火の炎を酸素を燃焼する音と共に荒々しく燃える。

「貴様だけはこの身が滅びようともぶっ潰す!!!!」

「ハッハッハッハハハッハ!!!!!!いいネエ!!!その信念!少しはこのオレを楽しませてくれヨ。最近つまんなくてサ、飽き飽きしてきたンだよネ。だからさ」

そしてデッド・ステリアスが一区切りの言葉を言い終えた瞬間、

「この無敵で絶対強者の俺を楽しませて愉快に花と血を散らせテこの場で死に悶えやがレ!!!この末裔サンよ!!!」

デッド・ステリアスの言葉は一言一言、短気であるブライにとって頭に怒りのボルテージが上がっていく怒りを誘発する笑いのこもった声だ。デッド・ステリアスは自分は無敵と言っているだろう。口調や態度からしてそうだ。自分は吸血鬼になって『最強』という強い存在を超えて『無敵』になった。

そう吸血鬼は無限の回復力。無限の身体能力。無限の活動生命という世界の論理を凌駕した能力が今ここにある。その吸血鬼となっているデッド・ステリアスはこの上位の能力があることで無敵と化する。

だがその前のなんでもなかった存在。その時の彼は、なんだったのか。『無敵』の前は『最強』と言われている。その次が『普通』とか『平凡』などの中位ランク。そして『最弱』が下位ランク。この4つの強さのランクがある。

『無敵』の前は『最強』。

『最強』とはかなり強い存在。相手から挑まれても普通に勝ててしまう存在。『最強』は勝利、敗北、とあるが半数以上は勝利に傾く。だが最強は絶対的な存在ではない。『無敵』という全ての物を凌駕しない限り勝利という絶対勝利はない。これが『最強』。

ならば『無敵』とは一体？

『無敵』とは『最強』を超えた絶対無比で絶対強者な存在。相手が幾ら抗おうとも相手は虫のように挑んだ無敵に一方的にやられて抵抗できずにただ朽ち果てていく存在<sup>モノ</sup>。そう、無敵とは敗北という文字はなく勝利という文字しかない一方通行なのだ。それが『無敵』。

『最強』の末裔、心の孤高の力を宿いしブライ。

『無敵』の吸血鬼、世界の論理を超えた全てを凌駕する戦いにおいて勝利という二文字しか残っていない戦士デッド・ステリアス。

『最強』と『無敵』、だったらその間には何がある？

その間にあるのは？

それは紛れもない、一欠けらで一握りのほんの僅かな小さくて大きな勝利。

だがデッド・ステリアスは自分で無敵と言っている。もし『無敵』じゃなく『無敵』に近い存在だったら？

ならブライにも勝つ可能性は僅かだが若干増加する。だがそれは相手が『無敵』という存在に確かめてから。なら『無敵』と慕っている相手に試す価値は十分にある――！。

「その言葉、そっくり貴様に返してやる！！」

『最強』の末裔、ブライ。頭に血が上っているせいなのかブライは馬鹿正直に正面から突っ込んだ。エクスカリバー構えて腕の筋肉に力を最大限に込める。筋肉を凝縮と同時にどんどんデッド・ステリアスとの距離を正面から肉薄していく。

相手からしては行動丸わかりだ。

正面から馬鹿正直につっこまれると対処方法が浮かびやすい。

『無敵』と慕っているデッド・ステリアスは余裕の表情。正面から来てはあまりにもあますぎる。だが彼は動かない。

そして1メートル半もあるエクスカリバーの切っ先がデッド・ス

テリアスの頭に届きそうになった瞬間、ブライは限界にギリギリまで自分の凝縮した両腕の筋肉を全面開放した。ブライの再び渾身の一撃をこめたエクスカリバーの一撃は申し分ない速度で空気を切り裂く音、酸素を使い紫色の炎が音を立てて燃える音をたてながらデッド・ステリアスに襲い掛かる。

だがデッド・ステリアスは前回と同じように鋭い漆黒の爪でブライの全身全霊のエクスカリバーの渾身の一撃をまた容易く止め空気を揺らしながら轟音をたてる。

これだけの一撃。容易く止められたら誰だって顔をしかめてしまう。しかも相手は絶対無比の『無敵』、これはとめられて当然のはず。だが防がれたことにより突き抜ける痺れをこらえながらブライは両腕に突き抜けた痺れを払うように両腕で防いでいるデッド・ステリアスの横の懐に入り込んだ。そして右手で下から上へとデッド・ステリアスの顎を狙って渾身のアップercutを繰り出して大きく吹っ飛ばした。

両腕で防ぐ。必然、ということは両脇の防御が薄くなる。

両腕で防ぐ。必然、ということは懐の防御が薄くなる。

『最強』はここを狙った。『無敵』であつたとしても絶対に一つぐらいにつけている隙を見つけたブライ。隙を見つけた、一撃を加えた、ということはデッド・ステリアスは絶対無比の『無敵』という存在ではないとこの場で確定した。顎から脳へ突き抜けていく痛みがひしひしと感じられる。

そしてブライの怒りのアップercutをまともに喰らい、デッド・ステリアスは綺麗に弧を描きながら宙を舞う。だが宙を舞ったのはほんの一瞬。足と地面は数センチ浮いただけ。それでも滞空時間は長く感じられた。してブライは追撃をする。

アップercutを繰り出しデッド・ステリアスに当てた瞬間、相手は一瞬だけ無防備になる。頭が遠心力でも働いているのか分からないがグワングワンと大きく揺れる。その無造作に揺れる頭、その後頭部にブライは狙いを定めていた。

「うおおおおお！！！！！！」

ブライは剣を捨て、果敢に突っ込んだ。宙を舞っている僅かな時間を無駄にしないように5メートルの距離を、彼は全身の筋肉の躍動を使い、常人離れた身体能力を生かして僅か1歩でつめた。一瞬でデッド・ステリアスの後頭部付近に回り込む。

そして思いきり拳に力を溜めて、怒り、悔しさ、侮辱されてきたこの思いを乗せて自分の拳の腕の筋肉を限界まで凝縮させた渾身の一撃禁断の後頭部攻撃——ッ！！！！

どん、という鈍い音と、何かが地面にぶつかる音、バキン！と何かが碎ける音がこの空間を突き抜けた。

ブライの放った後頭部攻撃。

これはボクシングなどの競技は反則技だ。何故なら後頭部を攻撃すると一瞬で死に至るといふ。脳に直接ダメージが届くためである。身体に障害が起きたりするから禁断の技なのである。これは外からではなく直接中へ攻撃する技。

後頭部攻撃は人にやったら間違はなく頭蓋骨にひびは入るだろう。だから彼はここを狙った。これはボクシングの競技ではない。この戦いは命を懸けたなんでもありの非道の戦い。戦いに反則などない。戦いとは己の持てる技を相手に向けてすべて出し切り、限界まで戦う。それが相手にとっての最大の礼儀。それが彼らの戦い。

後頭部攻撃をまともに喰らったデッド・ステリアス。だが吸血鬼である。吸血気には無限で速攻の回復力がある。

たとえば、体の9割が消されたとしても一部が残っている限り、傷跡もなく綺麗に復活する。そう吸血鬼を倒す方法は吸血鬼が嫌がる、水、太陽、十字架、にんにく、などの一般的な方法で倒したり、もしくは圧倒的な破壊力で吸血鬼の微塵も残さずに消し去ること。この二つだけである。

だから吸血鬼は肉体骨格内臓血管の全てを潰したとしても、吸血

鬼の細胞というのが残っている限り不死身なのだ。

「フッフ……ハッハッハッ！！いいネェ！！貴様の攻撃は愉快に素敵に最高に完璧に決まったネェ！！ったク…なんか頭蓋骨がいったみたいだケドすぐ回復するだろ。この俺に一撃喰らわすなんて、お前凄いなァ！！」

やはり吸血鬼は立ち上がった。ブライの禁断の後頭部攻撃。だが吸血鬼のデッド・ステリアスにとっては後頭部の骨に罅をいれたとしても無意味だったようだ。だが彼は『無敵』ではない。

禁断の技をぶち込んでも意味がなかった。

外ではなく中に直接攻撃しても無意味。

なら他に手があるのか？

吸血鬼は速攻で回復する。

吸血鬼にダメージを与えても大半は無効化。

吸血鬼は世界の理を超えた存在。

なら何がある？

選択1——やはり跡形もなく潰すか、

選択2——あの老人が俺の最も嫌いなロックマンに託すために作っているブラッドPGMと呼ばれるプログラムが来るのを待つまで俺は耐えるか。

選択2は極力御免だな。俺は自分の道を信じ、自分だけを信じて戦う。なら残っているのは選択1だけだ。

彼は、自分の信念を貫き通す少年であった。それはここにいるロックマンがよく知っている。振り返っていればブライとの関わりが深いのがロックマンなのかもしれない。彼はずっと怒りで満ち溢れているブライをただずっと呼吸を荒くしながら見つめている。そう、何も抗う事の出来ない、ちっぽけな蟻みたいな存在で。

——だが彼、ロックマンはきつと僕の為に戦ってくれているん



だ、とそう思っていた。

——実際はロックマンを復活させるために戦っているというのを本人も気付いていなかった。

彼、ムーの末裔、漆黒の戦士ブライは選択1、デッド・ステリアスを吸血鬼の無限の回復力の能力を使わずに跡形も微塵もなく消し去るという選択を選んだ。だがそれは絶対的に無理で乗り越える事の出来ない選択だった。

何故なら相手は吸血鬼であり『無敵』ではないが、『無敵』に等しい存在。

『最強』と『無敵』、僅かなこの差に勝利はある。だがその僅かな差に勝利を、敗北から逃れられる戦法を見つけ出せてなかった。

全身が酸素不足で意識朦朧となっている中、見つけ出せたのが跡形もなく潰すという単純明快な解決方法だった。だが彼自身はそう思っている、後ろで待機しているロックマンは、アシッド・エースは、彼が直接口を出さずとも、『仲間の為』に戦ってくれているとそう感じていた。

『……スキャン完了いたしました。彼は、絶対的な強者ではない。もし星河スバルがこの場で復活し、新たな力をその身に宿したら勝てる確率は五分五分になります』

「そうか、ご苦労だった。後はあいつとあいつ次第だな……………」

スキャンを終えたアシッド・エースは静かにその希望に満ち溢れた瞳の瞼を閉じ、そしてまた静かに開いた。見つめた先は孤高の末裔、ブライ。そして世界の英雄、ロックマン。

彼らがこの境地をどうにかしてくれる。全く、俺のいい出番はないのか、という表情でデッド・ステリアスとブライを見ていた。

しかしブライはなんていう荒技を知っているんだ。後頭部攻撃は危険な技。そんな反則、一発レッドカードで退場的な即アウトの技をぶちかます。とんだ危ないじゃじゃ馬だ。しかも迷いも全く見せない。殺意という信念が大きく出ている。

（一撃で奴を倒す……：ならまず最初に最も必要な事は……：）

一撃で吸血鬼、デッド・ステリアスを塵へと葬りさる。その選択を選んだブライは地面で刀身が轟轟をいう音を立てながら発火している獄炎の太刀の柄を右手でそっと拾い、愉快で獲物を冷たい眼で見つめているデッド・ステリア스에ブライは向き直り、そしてエクスカリバーを構える。

ブライの信念に答えるようにエクスカリバーは轟！という音をたてて神々しく燃える。

その剣の炎は深い紫。

エクスカリバーは鉄をも溶かす灼熱。

灼熱は災厄をもたらす。

災厄は生物に『死』と『恐怖』を与える。

なら、エクスカリバーが纏っている炎で奴を紅蓮で灼熱で業火で高熱の炎を奴に浴びせたらどうなる？

人が炎を被ると一瞬で全身に燃え移る。まず速攻に燃えるのが人の第二の命と呼ばれる区分、それが髪の毛。

髪の毛の主成分は大半が『タンパク質』。タンパク質は非常に熱に弱く、あっという間に燃えて塵となってしまう。ドライヤーの熱風でも髪の毛の中にあるタンパク質の構築が崩壊してしまう。

そして全身に燃え移っていく。

もしデッド・ステリアスの全身が燃えたとしたら？ 奴の体は焦げる？ 焼ける？ 灰になる？ それとも死ぬ？

分からないことばかりだった。けど方法はそれだけ。他にも大技があるが、あまりにも大振りで隙がおおすぎる技な為、相手は吸

血鬼で無限も化け物。隙をなくしての完璧な一撃を叩き込めたかった。

だからこそ、エクスカリバーによる焼殺方法にブライは一步進んでたのである。

（このエクスカリバーで奴を焼殺する！！！！その前に！！）

ブライは突如、地面に向かって炎を纏っているエクスカリバーを薙ぎ払うように振り払った。エクスカリバーの切っ先が炎で光を放出しながら綺麗な弧を描く。と同時に残像も浮かび上がる。

地面が浅くエクスカリバーの切っ先によってえぐられる。えぐられた土や小石、砂はエクスカリバーの衝撃によりデッド・ステリアスに向かって勢いよく吹っ飛ばされた。小石や砂、土が音速の速さでデッド・ステリアスに向かっていく。小さくて運動エネルギーが多い浮遊物は吸血鬼の体に容赦なくぶつかる。いくら小石とはいえ音速の速さで至近距離でぶち込まれたら相当な威力だろう。これはもはや散弾銃ショットガンと呼ぶに相応しい物だった。

（地道に奴の精神力を削いでいく！！！！）

さすが戦闘経験豊富な男。

いくら相手が吸血鬼とはいえ精神面に負担がかかる攻撃は人と同じであろうと考えたのだ。

どんなに無敵であったとしても、どんなに身体能力が優れていても、その優れた人物の精神面が強靱ではなく、脆かったら何も意味がない。

強い自分をコントロール出来るのは自分の意志。精神面で勝利が左右したりすることも多々ある。

ならばその精神面を自分の手によって鈍らせれば？

それによって相手に精神面に歪、そして隙が生れたら？

そしたらエクスカリバーの灼熱の洗礼を浴びすことが出来る。

ならば地道な戦法で不安定にさせるのが一番。大きな一撃をかませば相手の精神面に『これは危険だ』という死の意識を抱く。だが、その反面それには絶対的な裏がある。それは、死から逃れようと『抗おうとする意志』がでることだ。

例えば自分が絶対強者の『最強』だとする。そして相手が何にもない『最弱』。その状況下でこの二人は戦うとする。

この戦い勿論、これは『最強』の力により一方的になる。『最弱』は『最強』にどうやっても勝てない。知能、肉体、反射神経、能力、全てに対して『最強』と『最弱』は天地があるほど違う。

だからこそこの『最強』から逃れようと、生きようという抵抗意志が出てくるのだ。人間は土壇場に見せる神に与えられし獣の力が覚醒する事がある。いわゆる火事場の馬鹿力だ。そんな事が彼、星河スバルに何回もあった。瀕死でデリートされかけているときも、自分の中に宿る火事場の獣の神が降臨し、窮地を潜り抜けたことがある。

———だから末裔はそれを気にしつつ散弾銃のように飛んでくる小石の洗礼をデッド・ステリアスに向けて放つ。

だが鉛の代わりとなっている小石の散弾銃の威力は吸血鬼の前ではそんなに効果がなかったようだ。散弾銃は至近距離で発砲することで最大限に威力を生かせる短距離専用の銃。散弾銃は空気抵抗が非常に大きく100メートル先だともはや弾は飛んでこないらしい。

だがブライとデッド・ステリアスの距離はおよそ10メートル。最大に威力を発揮できる絶好の場所。

けど彼の表情は変わらない。散弾銃の弾丸と化した小石がデッド・ステリアスの体に直撃しても、ぶつかる音が響くだけでその当たった者の呻き声は聞こえてこなかった。むしろつまらなさそうに首を

横に振って骨を鳴らす音が聞こえてくる。

「―――――何地味な方法でやってんの？この三下ア？俺がそんな攻撃でくたばると思ってるのかア？ああ！？雑魚は雑魚らしく、存分に盛大に華麗に吠えていやがレ！！！！」

「貴様のほうこそ、完璧な『無敵』となつてはないようだな！！現に貴様は俺の攻撃を二発も喰らってたんだからよ！！この性悪吸血鬼さんよ！！」

ブライは言葉で言われ続けるのが悔しかったため、『無敵』と言っていたのに二発の攻撃を喰らわした事を口実に抵抗した。デッド・ステリアスは反論されたのか、貴様、よくも侮辱してくれたな！という表情と冷たく漆黒の目でブライを蛇の形相の如く睨む。

「「テメエだけはこの俺がぶっ潰す！！！！」」

漆黒の戦場に、少し声が低い若い男の声と人ではない、理を離れた声が大きく同時に響きそして空氣の塵となって音は消えていく。そして人は、吸血鬼は、

――潰す相手へと突っ込んでいく。

二人はまず腰を低くし、足に力を込めた。筋肉を躍動させそして大きく真つすぐに跳躍する。その足元の砂が一瞬だけ舞い上がる。

ブライはエクスカリバーを構えて肉薄。デッド・ステリアスも鋭い鋭利な爪を使って肉薄。お互いが絵自分の得物を使い、相手を切り刻もうとする。紫の残像と漆黒の残像が綺麗な直線を描く。

そしてエクスカリバーが、鋭い爪が、両者の渾身の一撃を込め同時にぶつかった尋常じゃない空氣の衝撃波と音と振動が辺りにまき散らされ、小石が吹っ飛ばされ、砂や粉塵が舞い上がり、地面に亀裂が走る。きつと激突した付近にいたら衝撃波で体は吹き飛ばされ、轟音で耳はやられていただろう。

怒りの声がのしかかる二人の攻撃と同時に上がる罵声。

二人は性格に若干問題がある為、短気だった。挑発されることを言われた。ならばそれを痛みで返してやろうという卑劣な行為。やったらやり返す。汚されたら汚し返す。殺されるなら殺される前に殺す。

「いい加減、早くつぶれるヨ！！この雑魚が！！」

「それはこちらの台詞だ！！悪魔はとっと尻尾丸めて暗いどん底で身を潜めていやがれ！！」

ブライはエクスカリバーを構え、デッド・ステリアスは漆黒の爪を鋭くたてて、再び彼らは潰す相手へと一直線に向かう。足の裏にまるで圧縮され、反発で伸縮するスプリングが搭載されたかのように素早く動いた。足元の砂が一瞬だけ舞い上がる。

そして同時にそれぞれの得物をぶつける。

また空気が揺れ、鋭利物と鋭利物が激突する鈍い音をまき散らし、地面の亀裂を辺りに巻きちらす。

フライは止められてもすぐに再展開した。激突した瞬間、低姿勢になり回転斬りをした。空気を切り裂く音が甲高く響きデッド・ステリアスに近づいてくる。

だがデッド・ステリアスはバックステップで余裕に回避する。バックステップをした場合、一瞬だけ宙に浮き、一瞬の隙が生れる。宙にいと地面に着地するまで何もできない。空中は無防備な為、抵抗も反撃もできない。ブライはその一瞬の隙を見逃さなかった。デッド・ステリアスのバックステップにより生れた距離をブライは速攻で埋めていく。エクスカリバーを水平面上に構えて急接近。

そして、切っ先に全身の力が乗るようにブライは片手でエクスカリバーを持ち左足で一步踏み出し右手で突きをし、デッド・ステリアスの右横腹をエクスカリバーが容易く貫通させた。そして紅蓮の炎で貫通した右横腹を焼いていき、ダメージを増加させる。

「ぐはっ！！！！！」

——そしてブライは勢いよく血と紅蓮の炎を纏っているエクスカリバーを引き抜いた。抜いた瞬間、血が飛び交う。

同時にデッド・ステリアスの右横腹に突き刺さっているエクスカリバーが傷の塞がりとなっていたのか引き抜かれた瞬間、まるで沸いた天然温泉のように鮮血が滝のように吹き出し、地面を真っ赤に染め、鮮血は戦いによって起きた地面の亀裂の間に吸い込まれるように流れていき、そして血液の中に流れている血小板という細胞が血液硬化という現象を起こした。

これが戦場の掟。

戦えば血が流れる。

そしてデッド・ステリアスは大量出血により目が眩んでいた。そして全身の血が足りなくなってきたせいか、もしくは回復が間に合わないのか、デッド・ステリアスは地面に倒れかける。

刹那、デッド・ステリアスは屈指の根性で倒れかける体と震える足に叱咤して倒れることを耐えた。逆に無駄な力が全身に入ってしまったせいか傷口の鮮血が余計に吹き出し、さらに真っ赤にそめていく。

「俺は……ここで……死ねないんだよ……世紀末世界を迎えるまでな……」

デッド・ステリアスの目が真っ赤に染まり、変貌していた。

彼の言った『世紀末世界』。

その世紀末世界とは一体なんなのか。

気になる末裔、ブライだった。



デッドステリアスの言った世紀末世界。

一体それはなんなのか？

滅びの世界？それとも平和の世界？それとも人のいないゴーストタウンの町と化した世界？

もしくは、『闇』によって変革した、人という理を離れた無法者共が移住する奇妙な世界か。

全てどれにしてもきつと『食べ物』というのはないだろう。世界の構築が崩れ、世界のバランスが崩れたらどうなる？

もし、地球の自転が止まったとする。それだけで地球は滅亡し、地球は生命のいない廃れた惑星となる。生きる者は死に、氷河期時代という極寒の世界を迎えることになる。

もし地球の自転角度が一度でも変わったら？

地球の角度は23度26分。その公転の角度が一度でも変わっただけで地球の環境は大きく変動する。

自転角度が変わったら、寒くなるかもしれない、熱くなるかもしれない。

色々と地球にはデリケートな部分が沢山あるのだ。

その紙の奇跡で作られたデリケートで触ってしまえばガラスのはじけるような音と共に崩れてしまいそうな脆いものだ。

だからこそ、世紀末世界という、滅びの世界、平和の世界、もしくは新たなリメイクワールドとなるかもしれない。

――それが世紀末世界。

「貴様……………世紀末世界とはなんだ！！？」

ブライはエクスカリバーの切っ先を右横腹にエクスカリバーが貫通し、激しく鮮血を放出している

デッド・ステリアスの眉間に向ける。綺麗な刃と、神々しく燃える紫色の紅蓮の炎がデッド・ステリアスを飲む込むような風貌が出ている。それがエクスカリバー。

切っ先が光を反射し、切れ味のよさを醸し出す。

それでもデッド・ステリアスは表情を変えない。血を放出しようとも常人離れの回復力であつという間に傷跡もなしに完治してしまう恐ろしい能力。

「フッ……それ……が貴様に一体、何の関係が……あるッていうんだ……?!」

「いいから教えろ!!」

ブライは珍しく罵声を上げて、デッド・ステッド・ステリアスの会話を打ち消すように大きく喋った。よほど彼の言った「世紀末世界」が気になるのだろう。

それは当たり前だろう。彼にとって聞いたことのない話だったからだ。数か月前、ムー大陸事件を解決した何日後、とある世界から――パラレルワールドからの来訪者、アポロン・フレイムがロックマンに戦いを申し込んできた。しかし、その彼のいる世界は反転世界という現実世界と全くの違う世界だった。

現実世界は、ムー大陸の独裁危機の侵略を打破し、平和を奪還した緑と笑顔が絶えない世界。

だが反転世界はムー大陸の独裁危機の侵略に飲み込まれた世界だ。つまり、反転世界はロックマンが世界から消え、誰も、何もない沈黙の世界と化したのだ。

――――永遠に人が来ることのないバスを待つ、電腦世界のバス停の中にいる電波体達。

――――永遠に人が見ることのない看板の広告コマーシャル。

——永遠に人が足を運ぶことのない観光スポット。

そう、その世界こそ、まるで世紀末世界という名の『終わりを迎えた世界』と呼ぶにふさわしき世界だった。

「……世紀末世界とは新たな世界、リメイクワールド新世界だ……」

リメイクワールド  
「新世界？」

彼の言った世紀末世界のリメイクワールド新世界。一体、それはなんなのか。そしてその世界に生き物はいるのか。

世界が変わること、人、生物、大陸、政治、全ての均衡が敗れる。例えば政治。世界が変革することによって統率者が変わり、新たな政治の法則が誕生するかもしれない。もしくは人。人の新たな新人類的な意志を持つ生き物が新たな力を携えてこの世に繁栄するかもしれない。

そんな破滅と誕生と創生が入り組んだ変革を遂げた世界には今の地球で暮らしている人にとっては今の最高科学と最高技術を使っても見破れない、難攻不落の『謎』が渦を巻いているのだから。

「あいつは世界を壊したがっている。理由は分からないが……。だが間違いなくこの世界を破壊か、変革することは間違いないだろう。アイツは俺らに自分の思考を話してくれない吸血鬼としての最高の存在だから……」

「そうか……ならおしゃべりはここまでだ!!」

「奇遇だな……俺も貴様との雑談に飽き飽きしてきタところだったんだ……」

その会話終了直後、謎が謎を呼ぶ世紀末世界の語りは終了し、再び戦闘の幕がきって降ろされる。二人は再び足の筋肉を限界まで凝縮、反発させて相手に神速の速さで向かった。足元の地面には大きな負荷がかかったため足元の砂が塵の如く一瞬だけ舞い上がる。

剣が空気を切り裂く音。爪が空気を八つ裂きにする音。二重の音が重なったとき、音と音は激突し空気を揺らし、音は一つになり、火花と共に消えていく。

両者の腕には大きな痺れが突き抜ける。だがそんなもの関係ない。相手をただ己の得物で潰すだけ。

それだけだった。

だが吸血鬼、デッド・ステリアスはその先を行っている。潰すのではない。殺すのだ。己の身に宿る力を使って。

「フッ……貴様ほどの有数な実力者がいて楽しめたな……。ここで終わりにしてやるヨ!!」

デッド・ステリアスとブライが同時に距離を取った瞬間、デッド・ステリアスは全身に力を溜めこんだ。そして禍禍しい邪気がブライに叩き付けられる。どんどん大きくなっていく邪気に対し、ブライの背中に奇妙な悪寒と冷や汗が背中を突き抜ける。そして思わず固唾を飲む末裔。

そして一瞬の刹那。彼、デッド・ステリアスはブライの視界から空気の塵となって消えた。

砂の粉塵だけが彼のいた場所で舞い上がっている。視界から消えた吸血鬼を探す為、ブライは左右上下目を回してみたが彼の姿はどこにも見当たらない。

そこにあるのは亀裂の入った脆そうな地面と自分と仲間と得物。倒そうとする敵の姿は自分の視界に全く映っていなかった。

「なっ!?!」

ブライは思わず声を上げてしまう。彼、デッド・ステリアスが自分の視界から完全に見失い、その上居場所までもが特定できなくなった。あまりの速さに彼の姿が空気にも化したように風景に溶け

ていってしまうように彼は姿を消した。

だが彼は姿を消したのではない。人の目に映らない場所へと移動していたのだ。

それは意外な場所でもあり、最も危険な場所で、最も隙の大きい場所。

それは自分の目が全く届かない『背後』。

直後、ブライの背中に異常なほどの殺意溢れる殺気が自分の背中に叩き付けられたのを察知して思わず反射が働き、無意識に後ろを向いた。背中には悪寒が背中を駆け巡る。

——そこに映っていたのは完全に攻撃態勢に入っているデッド・ステリアス。

ブライは反射的に後ろを無造作に向いた。

ブライが振り向き様にあわせるようにデッド・ステリアスは足に力を込めて左足を軸にするように、右足に力を込めて素早く体重移動。そして体重と力が乗った渾身の右足での回し蹴りをした。

「喰らえ!!!」

「しまっ————!!!!!!」

ブライの言葉を言い終える前に何かと何かがぶつかる鈍い音が戦場を駆け抜けた。ごん!という音がして人がふっ飛ばされ地面の上に引きずられる音が人の悲鳴と共に聞こえてくる。渾身の回し蹴り、それはブライの横腹にクリーンヒット。

人が吹っ飛ばされた衝撃により砂煙が舞い上がる。

そしてデッド・ステリアスは追撃をする。ブライは回し蹴りを喰らったことにより悶えていた。苦痛が腹を突き抜ける。横腹を思い切りやられた。下手したら肋骨の一本ぐらいはもっていかれてるかもしれない。だがその苦痛を耐えつつブライはデッド・ステリアスの追撃に奥歯で血の味と共に食いしばって向き直る。

体を立ちあがらせるがわき腹が痛む。

意識朦朧とするが倒れる訳にはいかない。

奥歯で苦痛に耐えて、身が滅びようとも戦う。

デッド・ステリアスは鋭利な爪で攻撃をする。漆黒のオーラを身に纏って攻撃するその姿はまさに吸血鬼としかいようがない。ブライはどうか向き直り、体をふらつかせながらも根性でどうにか回避するが、もはやさっきの一撃が致命的だったのだろう。最高の得物、エクスカリバーを杖代わりにして、呼吸を荒くしていた。

「はあ………はあ………ちきしょう……。奴にやられるわけにはいかない………んだよ………」

「ンッハッハッハッハッ！もうボロボロじゃねエか！！いい加減死ぬ前にとっとと降参したらどうだ！？この雑魚よオ！！まあテメエが降参しようがしないがどっちにしろテメエらには死という道しか残っていねえんだからな！！」

———どうしても

———きつと

———今の俺じゃ奴には勝てない。まず身体的から奴と俺は差がある。奴に勝てるのは、

———必然的にロックマンしかないことになる。

だが英雄は前と違った最高の英雄ではない。堕ちた瀕死の英雄なのだ。そんな彼に何ができる？ただ瀕死でボクシング選手の渾身の右ストレートを喰らえば死んでしまいそうな脆さだ。その彼を戦場へ出せば無駄死にする犠牲者を増やしてしまうだけだ。

だが打開策はある。

とある科学者が作っているPGM。

それは未来と人を救い、切り開くPGM。

それが世界を守り抜く箱。プログラム

だからこそ、それしかない。自分にできることは時間を稼ぐことだけ。だからこそ、悔しいが、自分の信念に貫き通せないのが非常

に悔しいが、それが自分の今の限界。

悔しい。

自分は自分だけの力でこの場を打開していくと決めたのに。

俺はそんな決意をも貫き通せないのか。

けど、こんな状況じゃ必然的だ。

だからこそ、だからこそ俺の最も嫌いなロックマンに託すんだ。

これからは敵ではない。ライバルとして。一人の好敵手<sup>ライバル</sup>として、俺は彼に全てを託す。

なら俺にできる事。それは

————自分だけ犠牲になってもいい。あの科学者がこの場を打開できるP G Mを作って彼にこの場を打破出来るようにすることだ。

だから、末裔は再び不死鳥の如くエクスカリバーを構えて眼で全てを薙ぎ払うような感情の眼でデッド・ステリアスをにらむ。

一瞬の刹那、空気が凍りつく。

「こいよ、俺はこの場の犠牲となってもいい。奴がこの場を打開できるならばな」

「それだけの為に貴様が犠牲になると？」

「そうだ……………」

一人の犠牲によってこの場を打破できる。戦いに犠牲と勝利は絶対的に付き物。戦いに死なない人、勝利無き戦いというのは絶対ない。戦えば人が消え、それを踏み台にしたうえでの勝利があるのだ。だからこそ、この戦いでブライはみんなの為に戦う。

——たった一つのちっぽけなプログラムの為だけに。

Feb／28 (Sun) PM 3∴30

その15分後に彼はいなくなる————。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1844q/>

---

流星のロックマン スペースメモリーズ

2011年12月1日19時49分発行